岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113

宮地遺跡
大木遺跡
大木古墳群
粧田山城跡
大村遺跡ほか

中国横断自動車道
建設に伴う発掘調査

3

1996

岡山県文化財保護協会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113

宮地遺跡
大木遺跡
大木古墳群
粧田山城跡
大村遺跡ほか

中国横断自動車道
建設に伴う発掘調査

3

1996

日本道路公団広島建設局高梁工事事務所
岡山県教育委員会

１．大木遺跡　竪穴住居４（南から）

２．大木古墳群１・２号墳（南東から）

1．大村遺跡　全景（南から）

2．2～3区　全景（南から）

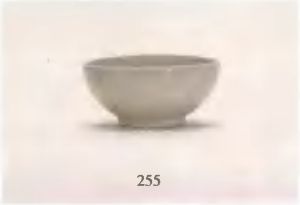
1．五輪塔

2．磬

3．宝篋印塔・五輪塔

231

254


255

258

260

261

262

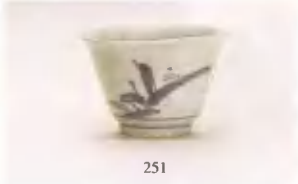
263

264

265

268

269


251

249

281

256

250

280

252

陶器・磁器

序

中国横断自動車道岡山～北房間につきましては、昭和63年５月より鋭意建設を進めてまいりました。その過程で路線敷地内にある遺跡について岡山県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は高梁工事事務所担当区域である高梁市、岡山県上房郡賀陽町、有漢町、北房町における大村中世墓群などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の文化、生活を現在に蘇らせ、また現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は岡山県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成８年３月

日本道路公団広島建設局高梁工事事務所

所　長　　岡　村　秀　樹

序

中国横断自動車道は、中国地方を南北に結ぶ交通の大動脈であり、この道路が及ぼす文化的・経済的波及効果は計り知れないほど大きなものがあります。

岡山県教育委員会では、この中国横断自動車道の建設に先立ち、その予定地内に所在する埋蔵文化財の保護・保存について関係各機関と繰り返し協議・調整を図ってまいりました。しかしながら、やむなく記録保存の措置を講じなければならない遺跡については、昭和62年から発掘調査を実施してまいりました。

当報告書は、中国横断自動車道建設に伴う発掘調査としては3冊目に当たります。今回は、平成4年度から6年度にかけて調査を実施しました上房郡北房町、有漢町、賀陽町、高梁市に所在する遺跡について収載しています。調査成果のうち、北房町の大木遺跡・大木古墳群では、県北における弥生時代から古墳時代にかけての集落および古墳の在り方の一端を明らかにすることができました。また、賀陽町の大村遺跡は、中世から近世にかけての数少ない一大墓地群であることが判明し、火葬や土葬など当時の葬送の実態を、系統的に捉えることができました。このような調査例は県下では珍しいものであり、注目されます。

この報告書が今後の地域の歴史を解明する資料として、また、文化財保護の一助として活用されれば幸いに存じます。

なお、今回の発掘調査の実施および報告書作成に当たっては、中国横断自動車道（北房～高梁間）建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から種々の御教示と御指導を得、また、日本道路公団広島建設局高梁工事事務所をはじめ地元関係各位から多大なご協力・ご援助を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩　之　助

例　言

1．本書は、中国横断自動車道建設に伴い、日本道路公団より委託を受けて、岡山県教育委員会が、平成４年11月～平成６年６月まで発掘調査を実施した高梁工事事務所関係の高梁市・賀陽町・有漢町・北房町内６か所の報告書第３分冊である。なお、第１分冊は岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91、第２分冊は岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93として、刊行している。

2．収載した遺跡は、岨谷遺跡・大村遺跡・大鳴古墳群・畦地遺跡・大木遺跡・大木古墳群・宮地遺跡である。なお、宮地遺跡は、当初、散布地として調査を実施したが、遺構所在の確認がなされたため宮地遺跡とした。また、大木遺跡・大木古墳群は、片山城跡関連および大木古墳群として調査にあたったが、城関連の遺構・遺物が確認されなかったため、片山城跡を除いた。さらに、大村遺跡は大村中世墓・大村中近世建物群として調査を実施したが、検出遺構の性格などから大村遺跡とした。

3．発掘調査および報告書作成にあたっては、中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益な指導と助言をいただいた。記して感謝の意を表す。

稲田　孝司（岡山大学文学部教授）　　舩津　昭雄（元久米町立中正小学校長）
白石　　純（岡山理科大学自然科学研究所）　間壁　忠彦（倉敷考古館長）
土居　　徹（元津山市立北小学校長）　　松木　武彦（岡山大学文学部助教授）
中田　啓司（元県立矢掛高校教諭）　　水内　昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

4．各専門分野における鑑定、分析等については、下記の方々から有益な教示を得、一部の成果については報告文をいただいた。記して感謝の意を表す。

陶磁器鑑定　　大橋　康二（九州陶磁文化館）
石材同定　　妹尾　　護（吉備国際大学）
人骨鑑定　　浜田　　穣（現　京都大学霊長類研究所）
樹種鑑定　　能城　修一（森林総合研究所）

5．本報告書の作成は、江見正己・石田容一が担当して行い、遺物の実測・トレース・写真撮影などについては文中に明記した方々の協力を得た。

6．本文の執筆は、調査を担当した井上　弘・江見正己・石田容一・大橋雅也・柴田英樹が分担し、文責は各項目あるいは遺構ごとの文末に示した。なお、Ⅱ－１－第１章地理的・歴史的環境では尾上元規、第五章大木古墳群では葛原克人、Ⅱ－２－第１章地理的・歴史的環境および第２章粧田山城跡では岡本寛久の３氏から、執筆に当たって多大なる援助を受けた。

7．本書の編集は、江見正己が担当した。

8．出土遺物ならびに図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　例

1．本報告書にもちいた高度は海抜高であり、方位については特に示さない限り磁北であるが、各遺跡位置図および全体図は国土座標系の座標北を示す。

2．本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺については明記しているが、おもなものには一部例外があるものの下記の通りに統一している。

遺構　竪穴住居1/80　　土壙・集石墓1/30　　土壙墓1/40

遺物　土器1/4　　石器・石製品1/2　　金属器1/2　　玉類2/3

3．遺構番号・遺物番号は、各遺跡の中で連番号で、大木古墳群は各古墳ごとの番号である。

4．遺物番号は材質を示すため土器以外のものについては下記の略号を番号の前に付した。

石器・石製品S　　金属器M　　銭貨C　　ガラス製品G

5．土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径復元に不確実性があるものを示す。

6．Ⅱ－2第3章大村遺跡では調査区の北東隅の杭を基本とし地区名を付している。

7．報告書中にもちいた時代区分は執筆者の意向に添って統一しておらず、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、世紀などを併用している。

8．本報告書に掲載した地図のうち、Ⅰ－3第4・8図、Ⅱ－1－1第1図、2－1第1図は国土地理院発行の1/50000「皆部」・「高梁」を複製し、加筆したものである。

目　次

序
例言
Ⅰ　調査の経緯と第１次調査の概要
１．　発掘調査の経緯……3
２．　調査および報告書作成の体制……6
３．　第１次調査の概要……8

Ⅱ　発掘調査報告
１．宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群……11
第１章　地理的・歴史的環境……13
第２章　調査の経過……15
第３章　宮地遺跡……17
第１節　調査の概要……17
第２節　まとめ……26
第４章　大木遺跡……27
第１節　弥生時代の遺構と遺物……28
第２節　古代以降の遺構と遺物……40
第３節　まとめ……41
第５章　大木古墳群……42
第１節　大木１号墳……43
第２節　大木２号墳……47
第３節　大木３号墳……50
第４節　まとめ……52

２．粧田山城跡・大村遺跡……55
第１章　地理的・歴史的環境……57
第２章　粧田山城跡……60
第１節　調査の経過……60
第２節　調査の概要……61
第３節　まとめ……62
第３章　大村遺跡……63
第１節　調査の経過……63
第２節　１～３区の概要……64
（１）中世集石墓……71
（２）遺構に伴わない遺物……112

（3）中世石塔群…… 116
（4）中・近世墓…… 129
（5）近世墓…… 170
（6）遺構に伴わない遺物…… 215
第3節　4区の概要…… 217
（1）造成面…… 219
（2）建物…… 219
（3）中・近世墓…… 221
（4）近世墓石群…… 224
第4節　5区の概要…… 228
第5節　6区の概要…… 229
第6節　まとめ…… 230
（1）集石墓について…… 230
（2）土壙墓について…… 235
付載1．大木遺跡竪穴住居4から出土した炭化材の樹種…… 263
付載2．大村遺跡の出土人骨…… 267

図　目　次

Ⅰ　調査および報告書作成の経緯
第1図　遺跡位置図……3
第2図　調査遺跡位置図（1/250000）……4
第3図　畦地遺跡トレンチ位置図（1/3000）……8
第4図　1次調査遺跡位置図（1/50000）……8
第5図　畦地遺跡トレンチ（西から）（東から）……9
第6図　大鳴古墳群トレンチ位置図（1/3000）……9
第7図　大鳴古墳群トレンチ（東から）（北から）……9
第8図　岨谷遺跡位置図（1/50000）……10
第9図　岨谷遺跡近景およびトレンチ……10
第10図　岨谷遺跡トレンチ位置図（1/3000）……10

Ⅱ　発掘調査報告
1．宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群
第1章　地理的・歴史的環境
第1図　周辺の遺跡分布図（1/50000）……14
第2章　調査の経過
第1図　調査後の遺跡とその周辺……15
第2図　大木遺跡発掘調査風景……16
第3章　宮地遺跡
第1図　遺跡位置図（1/3000）……17
第2図　遺構全体図（1/500）……18
第3図　溝1－a期（1/1000）……18
第4図　溝1－b期（1/1000）……19
第5図　溝1中央部（1/60）……19
第6図　溝1断面A～C（1/30）……20
第7図　溝1断面D～G（1/30）……21
第8図　溝1－c期（1/1000）……22
第9図　溝1－c期（1/60）……22
第10図　溝1－d期（1/1000）……23
第11図　溝1－d期（1/60）……23
第12図　溝1出土遺物①（1/4）……24
第13図　溝1出土遺物②（1/2）……25
第14図　溝2（1/30）……25
第15図　谷（1/60）……25
第16図　包含層遺物（1/4）……25
第17図　溝1実測作業……26
第4章　大木遺跡
第1図　遺跡位置図（1/3000）……27
第2図　遺構全体図（1/500）……28
第3図　竪穴住居1（1/80）・出土遺物（1/4）……29
第4図　竪穴住居2（1/80）・出土遺物（1/4）……30
第5図　竪穴住居3（1/80）・出土遺物（1/4・2/3・1/3）……31
第6図　竪穴住居4（1/80）……32
第7図　竪穴住居4A（1/100）・出土遺物（1/4・2/3・1/3）……33
第8図　竪穴住居4B～D（1/100）……34
第9図　竪穴住居5（1/50）・出土遺物①（1/3・1/2）…35
第10図　竪穴住居5出土遺物②（1/4）……36
第11図　竪穴住居6（1/80）・出土遺物（1/4）……37
第12図　竪穴住居7（1/80）・出土遺物（1/4）……38
第13図　竪穴住居8（1/80）……38
第14図　土壙1（1/30）・出土遺物（1/4）……39
第15図　土壙2（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）……39
第16図　土壙3（1/30）・出土遺物（1/4）……40
第17図　土壙4（左）（1/30）・土壙5（右）（1/30）……40
第18図　遺構に伴わない遺物（1/4）……41
第5章　大木古墳群
第1図　地形測量図（1/500）……42

第２図　大木１号墳　(1/150) ……44
第３図　埋葬施設 (1/40) ……45
第４図　埋葬施設出土太刀 (1/4) ……46
第５図　周堀および墳裾出土遺物 (1/4・1/3) ……46
第６図　大木２号墳 (1/150) ……48
第７図　埋葬施設 (1/40) ……48
第８図　周堀および周辺出土遺物 (1/4) ……49
第９図　大木３号墳 (1/150) および出土遺物 (1/2) ……51
第10図　埋葬施設 (1/40) ……52
２．粧田山城跡・大村遺跡
第１章　地理的・歴史的環境
第１図　粧田山城跡・大村遺跡周辺遺跡分布図 (1/100000) ……58
第２図　粧田山城跡周辺地形図 (1/20000) ……59
第２章　粧田山城跡
第１図　遺跡位置図 (1/3000) ……60
第２図　調査前地形図 (1/500) ……60
第３図　調査区全体図 (1/500) ……61
第４図　出土遺物 (1/4・1/2) ……62
第３章　大村遺跡
第１図　遺跡位置図 (1/2000) ……63
第２図　４区中近世石塔群 ……64
第３図　表採遺物 (1/4) ……64
第４図　２～４区 遺構全体図 (1/400) ……65
第５図　２・３区 中近世墓群 上層検出状況 (1/300) …66
第６図　２・３区 中近世墓群 下層検出状況 (1/300) …67
第７図　３区 集石墓全体図 (1/150) …… 69・70
第８図　集石墓１～６ (1/30・1/60) ……71
第９図　集石墓２出土遺物 (1/4) ……72
第10図　集石墓３出土遺物 (1/4・1/2) ……73
第11図　集石墓７ (1/60・1/30) ……73
第12図　集石墓７出土遺物 (1/4・1/2) ……74
第13図　集石墓８～10 (1/60) ……75
第14図　集石墓14～16 (1/60) ……76
第15図　集石墓17・18 (1/60・1/30)・出土遺物① (1/2) ……76
第16図　集石墓18出土遺物② (1/4) ……77
第17図　集石墓19～22 (1/30・1/60) ……78
第18図　集石墓19 (左)・21 (右) 出土遺物 (1/4) ……79
第19図　集石墓24～39 (1/60) …… 80・81
第20図　集石墓24出土遺物 (1/4) ……82
第21図　集石墓25 (左上)・26 (左下)・27 (右) 出土遺物 (1/2・1/4) ……82
第22図　集石墓28Ａ (左上)・28Ｂ (右上) (1/30)・出土遺物 (1/4) ……83
第23図　集石墓29出土遺物 (1/4) ……84
第24図　集石墓30 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……84
第25図　集石墓31 (左)・32 (右) (1/30) ……85
第26図　集石墓31出土遺物① (1/2) ……85
第27図　集石墓31 (上) 出土遺物②・32 (下) 出土遺物 (1/4) ……86
第28図　集石墓33 (上)・34 (下) 出土遺物 (1/4) ……87
第29図　集石墓35 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……88
第30図　集石墓35出土遺物② (1/4・1/2) ……89
第31図　集石墓36 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……89
第32図　集石墓36出土遺物② (1/4) ……90
第33図　集石墓37出土遺物 (1/4) ……91
第34図　集石墓39 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……91
第35図　集石墓41 (1/60・1/30)・出土遺物① (1/4・1/2) ……92
第36図　集石墓41出土遺物② (1/4) ……93
第37図　集石墓42～44 (1/60・1/30) ……94
第38図　集石墓43 (77～82)・44 (83～90) 出土遺物 (1/4) ……95
第39図　集石墓45 (1/60)・出土遺物 (1/30) ……96
第40図　集石墓46 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4) ……97
第41図　集石墓47・48 (1/60・1/30) ……97
第42図　集石墓47出土遺物 (1/2・1/4) ……98
第43図　集石墓49 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……99
第44図　集石墓50～64 (1/60) …… 100
第45図　集石墓50 (上)・51 (右) 出土遺物 (1/4) … 101
第46図　集石墓52～56出土遺物 (1/4) …… 102
第47図　集石墓57 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 103
第48図　集石墓61 (1/30)・出土遺物 (1/4) …… 104
第49図　集石墓62・63 (1/30)・62出土遺物 (1/4) … 104
第50図　集石墓63出土遺物 (1/4) …… 105
第51図　集石墓64出土遺物 (1/4) …… 105
第52図　集石墓65～68 (1/60)・65出土遺物 (1/4) … 105
第53図　集石墓66出土遺物 (1/4) …… 106
第54図　集石墓69 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4) … 107
第55図　遺構に伴わない遺物① (1/4) …… 108
第56図　遺構に伴わない遺物② (1/4) …… 109
第57図　遺構に伴わない遺物③ (1/4) …… 110
第58図　遺構に伴わない遺物④ (1/4) …… 111
第59図　遺構に伴わない遺物⑤ (1/4) …… 112
第60図　遺構に伴わない遺物⑥ (1/4) …… 113
第61図　遺構に伴わない遺物⑦ (1/4) …… 114
第62図　中世石塔群出土分布 (1/200) …… 115
第63図　宝篋印塔出土分布 (1/250) …… 116
第64図　宝篋印塔① (相輪・笠) (1/8) …… 117
第65図　宝篋印塔② (塔身・基礎・基壇) (1/8) …… 118
第66図　五輪塔法量表凡例 …… 119
第67図　五輪塔 (梵字入り) (1/8) …… 119
第68図　空風輪出土分布 (1/250) …… 120
第69図　火輪出土分布 (1/250) …… 120
第70図　水輪出土分布 (1/250) …… 121
第71図　地輪出土分布 (1/250) …… 121
第72図　空風輪 (1/8) …… 122
第73図　火輪① (1/8) …… 123
第74図　火輪②・水輪① (1/8) …… 124
第75図　水輪②・地輪① (1/8) …… 125
第76図　地輪② (1/8) …… 126
第77図　２～３区土壙墓全体図 (1/150) …… 127・128
第78図　土壙墓１ (1/40) …… 129
第79図　土壙墓２ (1/40)・出土遺物① (1/4) …… 129
第80図　土壙墓２出土遺物② (1/2) …… 130
第81図　土壙墓３ (1/40)・出土遺物 (1/4) …… 131
第82図　土壙墓４ (1/40)・出土遺物 (1/4) …… 131
第83図　土壙墓５ (1/40) …… 131
第84図　土壙墓５出土遺物 (1/4・1/2) …… 132
第85図　土壙墓６ (1/40)・出土遺物 (1/4・1/2) …… 133
第86図　土壙墓７ (1/40) …… 133
第87図　土壙墓７出土遺物 (1/2) …… 134
第88図　土壙墓８～10 (1/40)・土壙墓10出土遺物 (1/4) …… 135
第89図　土壙墓11 (1/40) …… 136

第90図　土壙墓12（左）・13（右）（1/40）・出土遺物（1/2）…… 136
第91図　土壙墓14～19（1/40）・出土遺物（1/4）…… 137
第92図　土壙墓20～22（1/40）・出土遺物（1/4）…… 138
第93図　土壙墓23～26（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）139
第94図　土壙墓27・28（1/40）・27出土遺物（1/4・1/2）… 140
第95図　土壙墓29（1/40）・出土遺物（1/4）…… 141
第96図　土壙墓30（1/40）・出土遺物（1/4）…… 141
第97図　土壙墓31（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）…… 141
第98図　土壙墓32・33（1/40）・32出土遺物（1/4）… 142
第99図　土壙墓34～36（1/40）…… 142
第100図　土壙墓36（1/40）…… 142
第101図　土壙墓36出土遺物（1/4・1/2）…… 143
第102図　土壙墓37～39（1/40）…… 143
第103図　土壙墓39出土遺物（1/4・1/2）…… 144
第104図　土壙墓40・41（1/40）・41出土遺物（1/4）… 144
第105図　土壙墓42（1/40）・出土遺物（1/4）…… 144
第106図　土壙墓43（1/40）・出土遺物（1/4）…… 145
第107図　土壙墓44（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）… 145
第108図　土壙墓45～49（1/40）・47出土遺物（1/2）… 146
第109図　土壙墓50～55（1/40）・52出土遺物（1/2）… 147
第110図　土壙墓56（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）… 148
第111図　土壙墓57（1/40）・出土遺物（1/4）…… 148
第112図　土壙墓58（右）・59（左）（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）…… 149
第113図　土壙墓60（左）・61（右）・61出土遺物（1/2）… 149
第114図　土壙墓62～66（1/40）・63出土遺物（1/4）… 150
第115図　土壙墓67（1/40）・出土遺物（1/2）…… 151
第116図　土壙墓68（1/40）・出土遺物（1/4）…… 151
第117図　土壙墓69（1/40）・出土遺物（1/2）…… 152
第118図　土壙墓70（1/40）・出土遺物（1/2）…… 152
第119図　土壙墓71（左）・72（右）（1/40）・72出土遺物（1/4）……153
第120図　土壙墓73（左）・74（右）（1/40）・73出土遺物（1/4・1/2）……154
第121図　土壙墓75（左）・76（中）・77（右）（1/40）・77出土遺物（1/2）……155
第122図　土壙墓78～83（1/40）・出土遺物（1/2・1/4）156
第123図　土壙墓84（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 157
第124図　土壙墓85（1/40）・出土遺物（1/2）…… 158
第125図　土壙墓86（左）・87（右）（1/40）…… 158
第126図　土壙墓88（1/40）・出土遺物（1/2・1/4）… 159
第127図　土壙墓89（1/40）・出土遺物（1/2）…… 159
第128図　土壙墓90（1/40）…… 159
第129図　土壙墓91（1/40）・出土遺物（1/4）…… 160
第130図　土壙墓92（右）・93（左）（1/40）・92出土遺物（1/2・1/3・1/4）……160
第131図　土壙墓94（左）・95（中）・96（右）（1/40）… 161
第132図　土壙墓97（左）・98（右）（1/40）・出土遺物（1/4）……162
第133図　土壙墓99（1/40）・出土遺物（2/3・1/2）… 162
第134図　土壙墓100（左）・101（右）（1/40）…… 163
第135図　土壙墓102（1/40）・出土遺物（1/4）…… 163
第136図　土壙墓103（1/40）…… 164
第137図　土壙墓104（1/40）・出土遺物（1/2・1/4）… 164
第138図　土壙墓105～108（1/40）・出土遺物（1/2・1/4）…… 165
第139図　土壙墓109（1/40）・出土遺物（1/2）…… 165
第140図　土壙墓110～113（1/40）・110出土遺物（1/4）166
第141図　土壙墓114（1/40）・出土遺物（1/2）…… 167
第142図　土壙墓115（左）・116（中）・117（右）（1/40）…… 167
第143図　土壙墓118～122（1/40）・118出土遺物（1/4）168
第144図　土壙墓123（1/40）・出土遺物（1/3）…… 168
第145図　土壙墓124・125（1/40）…… 169
第146図　土壙墓126（1/40）・出土遺物（1/2）…… 170
第147図　土壙墓127（1/40）・出土遺物（1/2）…… 171
第148図　土壙墓128（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 172
第149図　土壙墓129（1/40）…… 172
第150図　土壙墓130（1/40）・出土遺物（1/2）…… 173
第151図　土壙墓131（1/40）…… 173
第152図　土壙墓132（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 173
第153図　土壙墓133（1/40）…… 174
第154図　土壙墓134（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 174
第155図　土壙墓135（左）・136（右）（1/40）・135出土遺物（1/3・1/2）……175
第156図　土壙墓137（1/40）・出土遺物（1/2）…… 175
第157図　土壙墓138（左）・139（中）・140（右）（1/40）…… 176
第158図　土壙墓141（1/40）・出土遺物（1/2・2/3）… 176
第159図　土壙墓142（左）・143（右）（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）……177
第160図　土壙墓144（1/40）・出土遺物（1/2）…… 178
第161図　土壙墓145（1/40）・出土遺物（1/2）…… 179
第162図　土壙墓146（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 179
第163図　土壙墓147（1/40）・出土遺物（1/2）…… 180
第164図　土壙墓148（1/40）・出土遺物（1/2）…… 181
第165図　土壙墓149（1/40）・出土遺物（1/2）…… 181
第166図　土壙墓150（1/40）…… 181
第167図　土壙墓151（1/40）・出土遺物（1/2）…… 182
第168図　土壙墓152（左）・153（右）（1/40）・152出土遺物（1/2）……182
第169図　土壙墓153出土遺物（1/2）…… 183
第170図　土壙墓154（1/40）・出土遺物（1/2）…… 183
第171図　土壙墓155（1/40）…… 183
第172図　土壙墓156（1/40）・出土遺物（1/2）…… 184
第173図　土壙墓157（1/40）・出土遺物（1/2）…… 185
第174図　土壙墓158（左）・159（右）（1/40）・159出土遺物（1/2）……186
第175図　土壙墓160（左）・161（右）（1/40）・161出土遺物（1/3）……186
第176図　土壙墓162（1/40）・出土遺物（1/2）…… 187
第177図　土壙墓163（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 188
第178図　土壙墓164（1/40）・出土遺物（1/2）…… 188
第179図　土壙墓165（1/40）…… 189
第180図　土壙墓166（1/40）・出土遺物（1/2）…… 189
第181図　土壙墓167（1/40）・出土遺物（1/2）…… 189
第182図　土壙墓168（1/40）・出土遺物（1/2）…… 190
第183図　土壙墓169（1/40）・出土遺物（1/2）…… 190
第184図　土壙墓170（左）・171（右）（1/40）・出土遺物（1/2）……191
第185図　土壙墓172（1/40）・出土遺物（1/2）…… 192
第186図　土壙墓173（1/40）・出土遺物（1/2）…… 192
第187図　土壙墓174（1/40）…… 193
第188図　土壙墓175（左）・176（中）・177（右）（1/40）…… 193

第189図　土壙墓175出土遺物（1/2）…… 194
第190図　土壙墓176出土遺物（1/2）…… 194
第191図　土壙墓177出土遺物（1/2・1/3）…… 195
第192図　土壙墓178（1/40）・出土遺物（1/2）…… 196
第193図　土壙墓179（1/40）・出土遺物（1/2）…… 197
第194図　土壙墓180（1/40）・出土遺物（1/2）…… 197
第195図　土壙墓181（1/40）…… 197
第196図　土壙墓182（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 198
第197図　土壙墓183（左）・184（右）（1/40）・184出土遺物（1/2）……198
第198図　土壙墓185（1/40・1/8）・出土遺物①（1/3・1/2）……200
第199図　土壙墓185出土遺物②（1/2）…… 201
第200図　土壙墓186（1/40）・出土遺物（1/2）…… 201
第201図　土壙墓187（1/40）・出土遺物（1/2）…… 202
第202図　土壙墓188（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 202
第203図　土壙墓189（1/40）・出土遺物（1/2）…… 203
第204図　土壙墓190（1/40）・出土遺物①（1/2）…… 203
第205図　土壙墓190出土遺物②（1/2）…… 204
第206図　土壙墓191（1/40）・出土遺物（1/2）…… 205
第207図　土壙墓192（1/40）・出土遺物（1/2）…… 205
第208図　土壙墓193（1/40）・出土遺物（1/2）…… 206
第209図　土壙墓194（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 206
第210図　土壙墓195（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 207
第211図　土壙墓196（1/40）・出土遺物（1/2）…… 207
第212図　土壙墓197（1/40）・出土遺物（1/2）…… 208
第213図　土壙墓198（1/40）・出土遺物（1/2）…… 208
第214図　土壙墓199（1/40）・出土遺物（1/2・1/3）… 210
第215図　土壙墓200（1/40）・出土遺物（1/2）…… 210
第216図　土壙墓201（1/40）・出土遺物（1/2）…… 211
第217図　土壙墓202（左）・203（右）（1/40）・202出土遺物（1/2）……211
第218図　土壙墓203出土遺物（1/4・1/4）…… 212
第219図　土壙墓204～207（1/40）…… 213
第220図　土壙墓204出土遺物（1/2）…… 213
第221図　土壙墓205出土遺物（1/3・1/2）…… 214
第222図　土壙墓207出土遺物（1/3・1/2）…… 214
第223図　土壙墓208（1/40）・出土遺物（1/2）…… 215
第224図　遺構に伴わない遺物①（1/2）…… 215
第225図　遺構に伴わない遺物②（1/2）…… 216
第226図　4区遺構全体図（1/100）…… 217・218
第227図　造成土中出土遺物（1/2・1/3・1/4）…… 220
第228図　建物1（1/60）…… 221
第229図　土壙墓1（1/40）…… 222
第230図　土壙墓2（1/40）・出土遺物（1/2）…… 222
第231図　土壙墓3（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）… 223
第232図　竿墓1（1/40）・出土遺物（1/3）…… 224
第233図　竿墓1（1/8）…… 225
第234図　竿墓群①（1/8）…… 226
第235図　竿墓群②（1/8）…… 227
第236図　5区遺構全体図（1/100）…… 228
第237図　6区遺構全体図（1/400）…… 229
第238図　集石墓変遷図 …… 234
第239図　土壙墓変遷概念図 …… 236
第240図　近世土壙墓変遷図 …… 237
第241図　糸切り小皿・皿の寸法分布 …… 238
第242図　出土六道銭のセリエーション …… 239

表　目　次

表1　大村遺跡編年表…… 232
表2　渡来銭銭別比率…… 238
表3　枚数別六道銭出土土壙墓…… 238
表4　集石墓・土壙墓一覧…… 240
表5　五輪塔空風輪法量…… 247
表6　五輪塔火輪法量…… 251
表7　五輪塔水輪法量…… 255
表8　五輪塔地輪法量…… 259
表9　渡来銭一覧…… 260

巻　頭　図　版　目　次

巻頭図版1－1．大木遺跡 竪穴住居4（南から）
　　2．大木古墳群 1・2号墳（南東から）
巻頭図版2－1．大村遺跡 全景（南から）
　　2．2～3区 全景（南から）
巻頭図版3－1．五輪塔
　　2．磬
　　3．宝篋印塔・五輪塔
巻頭図版4　陶器・磁器

図 版 目 次

宮地遺跡
図版１－１．遺跡全景（南から）
２．溝１中央部（南から）
３．溝１中央部（西から）
図版２－１．溝１断面Ｃ（西から）
２．溝１－ｃ（南から）
３．溝１－ｄ（南から）
図版３－１．溝１断面Ｇ（南から）
２．出土遺物
大木遺跡
図版４－１．遺跡遠景（北西から）
２．遺跡近景（北西から）
３．竪穴住居１（東から）
図版５－１．竪穴住居２（南西から）
２．竪穴住居３（南から）
３．竪穴住居４上層（南東から）
図版６－１．竪穴住居４（北東から）
２．竪穴住居５（南西から）
３．竪穴住居６（東から）
図版７－１．竪穴住居７（南西から）
２．土壙１（東から）
３．土壙２（南東から）
図版８－１．土壙３（南から）
２．土壙４（北から）
３．土壙５（西から）
図版９　出土遺物
大木古墳群
図版10－１．１号墳調査前（南から）
２．１号墳全景（南から）
３．主体部掘り方検出状況（南から）
図版11－１．主体部堆積状況（南西から）
２．主体部堆積状況（南から）
３．主体部検出状況（南から）
図版12－１．主体部遺物出土状況（南から）
２．墳裾出土鉄鉾（西から）
３．周堀出土遺物（西から）
図版13－１．２号墳調査前（南東から）
２．２号墳全景（南から）
３．主体部掘り方検出状況（北東から）
図版14－１．主体部検出状況（北東から）
２．南部周堀堆積状況（西から）
３．周堀出土遺物（北から）
図版15－１．３号墳調査前（西から）
２．３号墳全景（西から）
３．主体部検出状況（南から）
図版16　出土遺物
粧田山城跡
図版17－１．遠景（東から）
２．近景（南東から）
３．トレンチ掘り下げ（東から）
図版18－１．東部全景（西から）
２．西部全景（東から）
３．出土遺物
大村遺跡
図版19－１．遺跡遠景（南から）
２．遺跡全景（南から）
３．遺跡全景（南から）
図版20－１．中世集石墓群（南から）
２．近世土壙墓群（南から）
図版21－１．３区中世集石墓群（北西部）
２．３区中世集石墓群（南西部）
図版22－１．３区中世集石墓群（北東部）
２．３区中世集石墓群（南東部）
図版23－１．集石墓２（南東から）
２．集石墓７（南東から）
３．集石墓７（東から）
図版24－１．集石墓14～16（南東から）
２．集石墓17・18（南東から）
図版25－１．集石墓18遺物出土状況①（南から）
２．集石墓18遺物出土状況②（南から）
３．集石墓19（東から）
図版26－１．集石墓20～22（南東から）
２．集石墓21遺物出土状況（南から）
３．集石墓24遺物出土状況（南から）
図版27－１．集石墓27遺物出土状況（東から）
２．集石墓28遺物出土状況Ａ（南東から）
３．集石墓28遺物出土状況Ｂ（南東から）
図版28－１．集石墓30（南東から）
２．集石墓30遺物出土状況（南東から）
３．集石墓30下層遺物出土状況（南から）
図版29－１．集石墓31磬出土状況（東から）
２．集石墓32遺物出土状況（東から）
３．集石墓35遺物出土状況①（東から）
図版30－１．集石墓35遺物出土状況②（南東から）
２．集石墓36遺物出土状況①（南東から）
３．集石墓36遺物出土状況②（南東から）
図版31－１．集石墓37遺物出土状況（東から）
２．集石墓39遺物出土状況（東から）
３．集石墓41遺物出土状況①（東から）
図版32－１．集石墓41遺物出土状況②（南東から）
２．集石墓43遺物出土状況（南東から）
３．集石墓44遺物出土状況（東から）
図版33－１．集石墓45遺物出土状況（東から）
２．集石墓47遺物出土状況（南から）
３．集石墓49遺物出土状況（南東から）
図版34－１．集石墓51遺物出土状況（南から）
２．集石墓53（南東から）
３．集石墓55・56（南から）
図版35－１．集石墓55遺物出土状況（南東から）
２．集石墓56遺物出土状況（南東から）
３．集石墓57遺物出土状況（東から）
図版36－１．集石墓58（東から）
２．集石墓59（南から）
３．集石墓61（東から）
図版37－１．集石墓62・63（南東から）
２．集石墓62遺物出土状況（北西から）
３．集石墓65（北西から）
図版38－１．集石墓66遺物出土状況（南東から）
２．集石墓66（南東から）
３．集石墓67（南東から）
図版39－１．集石墓68（南東から）
２．集石墓69（南西から）

3．集石墓70（南東から）
図版40－1．2～3区中・近世墓群（北西部）
2．3区中・近世墓群（南東部）
図版41－1．土壙墓4（南から）
2．土壙墓5（南から）
3．土壙墓6（西から）
図版42－1．土壙墓7（南東から）
2．土壙墓8（東から
3．土壙墓11（西から）
図版43－1．土壙墓14（南東から）
2．土壙墓24（西から）
3．土壙墓27（南から）
図版44－1．土壙墓29（南西から）
2．土壙墓31（南から）
3．土壙墓38･39（南から）
図版45－1．土壙墓39下層（南から）
2．土壙墓40（南西から）
3．土壙墓41（南から）
図版46－1．土壙墓43（南から）
2．土壙墓49（南から）
3．土壙墓56（南から）
図版47－1．土壙墓59（南から）
2．土壙墓63（西から）
3．土壙墓67（東から）
図版48－1．土壙墓69上層（南西から）
2．土壙墓69下層（南西から）
3．土壙墓70（南から）
図版49－1．土壙墓72（南から）
2．土壙墓73・74（南から）
3．土壙墓78（南から）
図版50－1．土壙墓80（南東から）
2．土壙墓84上層（南から）
3．土壙墓84下層（南から）
図版51－1．土壙墓85上層（南から）
2．土壙墓85断面（南から）
3．土壙墓98（南東から）
図版52－1．土壙墓102（北西から）
2．土壙墓105断面（南東から）
3．土壙墓109（北から）
図版53－1．土壙墓113（南東から）
2．土壙墓114（北東から）
3．土壙墓116（南東から）
図版54－1．土壙墓117（北から）
2．土壙墓123上層（東から）
3．土壙墓123下層（東から）
図版55－1．2区近世墓群（南西から）
2．2区近世墓群（南から）
図版56－1．2区近世墓群（西部）
2．2区近世墓群（東部）
図版57－1．土壙墓126（南から）
2．土壙墓127（南から）
3．土壙墓128（南から）
図版58－1．土壙墓131（南から）
2．土壙墓132（南から）
3．土壙墓139（南から）
4．土壙墓140（南から）
図版59－1．土壙墓142（南から）
2．土壙墓144（南から）
3．土壙墓146（南から）
図版60－1．土壙墓147（南から）
2．土壙墓153（南から）
3．土壙墓156（南から）
図版61－1．土壙墓157（南から）
2．土壙墓158（南から）
3．土壙墓160（南から）
図版62－1．土壙墓162（南から）
2．土壙墓166（南から）
3．土壙墓168（南から）
図版63－1．土壙墓169（南から）
2．土壙墓171（南から）
3．土壙墓173（南から）
図版64－1．土壙墓176（南から）
2．土壙墓182（南から）
3．土壙墓185（南から）
図版65－1．土壙墓188（南から）
2．土壙墓189（南から）
3．土壙墓190（南から）
4．土壙墓191（南から）
図版66－1．土壙墓195（南から）
2．土壙墓199（南から）
3．土壙墓201（南から）
図版67－1．土壙墓202（南から）
2．土壙墓203（南から）
3．土壙墓207（南から）
図版68－1．4区全景（南西から）
2．4区全景（西から）
3．石垣東面（南から）
図版69－1．石垣北面東部（北西から）
2．石垣北面西部（東から）
3．石垣西～北面（南から）
図版70－1．建物1（東から）
2．土壙墓2上層（北から）
3．土壙墓2下層（北から）
図版71－1．土壙墓3（南東から）
2．土壙墓3人骨出土状況（南東から）
3．土壙墓3下層遺物出土状況（南東から）
図版72－1．竿墓1下層（東から）
2．5区全景（南東から）
3．6A区全景（西から）
図版73－1．建物1（南から）
2．井戸1（南東から）
3．6B区全景（西から）
図版74　亀山焼
図版75　備前焼①
図版76　備前焼②
図版77　備前焼③
図版78　備前焼④
図版79－1．備前焼⑤
2．瀬戸・美濃
3．土師質土器①
図版80　土師質土器②・土製品
図版81－1．釘
2．棺金具
図版82　鉇・剃刀・小刀・火打金・銅環
図版83　鋏・毛抜
図版84　煙管

図版85－1．土壙墓5出土銭貨
2．土壙墓7出土銭貨
図版86－1．土壙墓132出土銭貨
2．土壙墓143出土銭貨
3．土壙墓147出土銭貨
4．土壙墓152出土銭貨
5．土壙墓157出土銭貨
図版87－1．土壙墓185出土銭貨
2．土壙墓190出土銭貨
図版88　宝篋印塔（相輪・笠・塔身）
図版89－1．宝篋印塔（基礎・基壇）
2．五輪塔（梵字入り）
3．五輪塔（空風輪）
図版90　五輪塔（火輪・水輪）
図版91－1．仏を刻む水輪
2．五輪塔（地輪）
3．出土石塔群
図版92－1．調査後の大村遺跡（北から）
2．移築石塔群（大村寺境内）

Ⅰ　調査の経緯と第１次調査の概要

Ⅰ　調査の経緯と第１次調査の概要

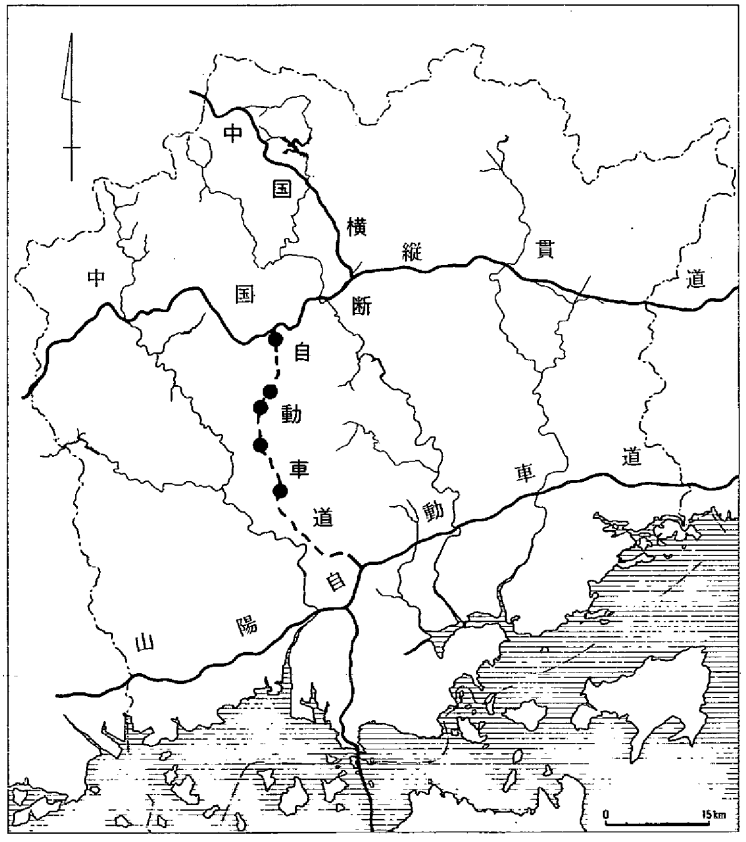
１．発掘調査の経緯

中国横断自動車道建設に伴う発掘調査は、昭和62年の真庭郡川上村内の遺跡確認調査に始まり、以来、平成３年度までに、県北西端の川上村から湯原町・久世町を抜け落合町の中国縦貫道とのジャンクションまでの間、所在した約20か所の遺跡を終了し、その成果は既に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』91・93として報告している。

一方、日本道路公団は県北の中国縦貫道から県南の山陽自動車道に繋げる区間についても引き続き発掘調査の実施を望んでいたが、協議の結果、年度当初からの開始には至らなかった。しかしながら、岡山県教育委員会は平成３～４年度に上房郡北房町から賀陽町にかけての用地内に再度詳細な分布調査を実施するとともに、日本道路公団と度重なる協議の結果、平成４年11月には賀陽町に所在する大村遺跡の発掘調査を調査員６名で実施するに至った。

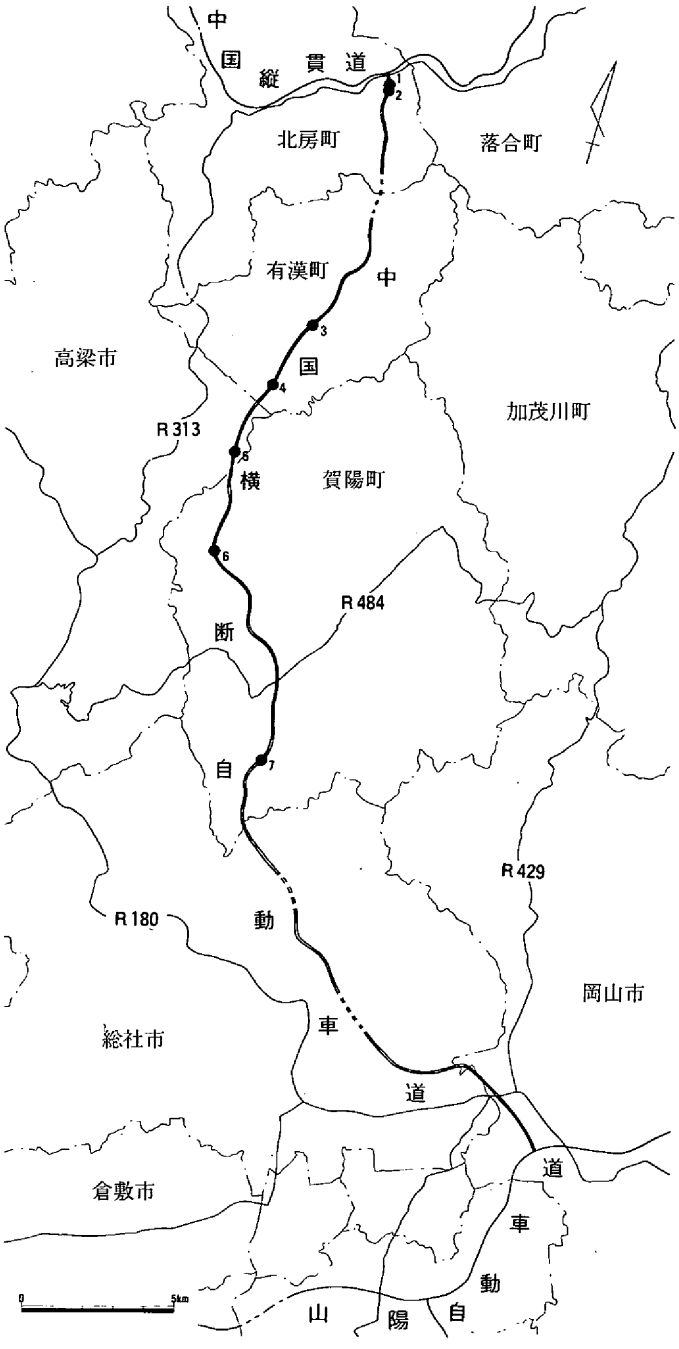
当遺跡は200基余りの土葬墓と70基余りの集石墓を主体とする墓地群で、墓石あるいは墓域を構成する基礎部分としての人頭大を中心とした礫群の検出には多くの時間を要したため、調査の迅速化を増すべく航空測量を実施したが、年度内の終了は難しく、次年度も引き続き同様規模の人員で調査を行い、期間10か月、平成５年８月末をもってようやく終了するに至った。

また、遺跡内には当初から近世の竿墓ならびに五輪塔を寄せられたか所があり、発掘により出土した宝篋印塔や五輪塔を合わせれば宝篋印塔20数基、五輪塔300余基、個数にして約1200個が確認され、これら石塔群の保護保存については苦慮するところが多く見られた。中でもその最も大きな問題点として、これら石塔群は埋蔵文化財か、信仰の対象物なのかであった。戦後の開墾に伴って集められたこれら石塔群は、旧地権者によってこれまでに定期的に供養がなされていたと聞いており、また、地元町民の一部にも同様に信仰



第１図　遺跡位置図

の対象として残して欲しいとの要望もあったため、岡山県教育委員会は文化庁と連絡を取りつつ、日本道路公団・賀陽町教育委員会・地元の大村寺などと協議を重ね、大村寺境内にこれら石塔群を移築保存することとし、その管理にあたっては町教育委員会が当たることとした。平成５年度に入ると、大村遺跡の調査と併行して、各地に１次調査のトレンチを入れた。上房郡北房町宮地に所在する宮地遺跡をはじめ、同郡有漢町畦地遺跡・同町大鳴古墳群、賀陽町岨谷遺跡の４遺跡である。その結果、宮地遺跡は集落の所在することが明らかになったものの、他の遺跡については十分な資料は得られず、１次調査のみで終了しており、これらについては項を改め略記する。



第２図　調査遺跡位置図（１/250000）

なお、大村遺跡調査終了後の２か月間は１名の整理担当を残すのみとなった。

11月には調査員３名で上房郡北房町に入った。大木古墳群および隣接する宮地遺跡の調査である。当初、大木古墳群は３基の古墳と片山城跡関連の遺跡として調査を実施したが、城関連の遺構の存在は明瞭には確認されなかったものの、古墳周辺からは弥生時代後期を中心とした集落跡の所在が明らかとなった。また、宮地遺跡は約20年前の圃場整備によって地形が大きく改変されており、遺跡の所在が危ぶまれていたが、度重なる遺跡の範囲確認作業をもとに調査を実施し、年度内に両遺跡の調査を終了した。

平成６年度には調査員２名により、報告書作成のための整理に入ったが、途中、５月中旬から約１月間、粧田山城跡の調査を実施し、これをもって日本道路公団高梁工事事務所関係の発掘調査は終了することとなった。

日誌抄

平成４年

11月１日　大村遺跡１区調査開始
11月17日　大村遺跡２区調査開始
11月25日　大村遺跡１区調査終了

平成５年

３月31日　大村遺跡２区調査終了
４月５日　大村遺跡３・６区調査開始
４月８日　宮地遺跡１次調査開始
４月12日　畦地遺跡１次調査開始
４月14日　畦地遺跡１次調査終了
４月19日　大村遺跡４区調査開始
４月21日　宮地遺跡１次調査終了
４月21日　岨谷遺跡１次調査
４月26日　大鳴古墳群１次調査開始
４月27日　大鳴古墳群１次調査終了
６月24日　埋蔵文化財保護対策委員会開催
７月15日　大村遺跡５区調査開始
７月19日　大村遺跡３・６区調査終了
７月26日　大村遺跡５区調査終了
７月29日　大村遺跡４区調査終了
８月２日　大村遺跡石塔群調査開始
８月30日　大村遺跡調査終了
11月１日　大木古墳群調査開始
12月13日　宮地遺跡全面調査開始

平成６年

２月７日　埋蔵文化財保護対策委員会開催
２月18日　大木古墳群　水田小学校児童に現地説明会
３月31日　大木古墳群・宮地遺跡調査終了
５月10日　粧田山城跡調査開始
６月17日　粧田山城跡調査終了

番号	遺跡名	担当者	期間	面積
1	宮地遺跡	江見・三上・石田・大柳	1993. 4. 8～ 4.21	1918
			1993.12.13～1994. 3.31	
2	大木遺跡 大木古墳群	江見・石田・大柳	1993.11. 1～1994. 3.31	1300
3	畦地遺跡	浅倉・三上・小林	1993. 4.12～ 4.14	100
4	大鳴古墳群	浅倉・三上・小林	1993. 4.26～ 4.27	150
5	粧田山城跡	江見・石田	1994. 5.10～ 6.17	850
6	大村遺跡 １・２区	井上・野上・石田・田原 東呂木・大橋	1992.11. 1～1993. 3.31	2168
	３～６区	江見・石田・田原 東呂木・大柳・柴田	1993. 4. 5～ 8.30	1665
7	岨谷遺跡	浅倉・三上・小林	1993. 4.21	4
			計	8155㎡

2．調査および報告書作成の体制

発掘調査・整理・報告書作成については、日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会文化課が契約を結び、発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

稲田　孝司	岡山大学文学部教授
白石　　純	岡山理科大学自然科学研究所
土居　　徹	元津山市立北小学校長
中田　啓司	元県立矢掛高校教諭
舩津　昭雄	元久米町立中正小学校長
間壁　忠彦	倉敷考古館長
松木　武彦	岡山大学文学部助教授
水内　昌康	岡山県文化財保護審議会委員

発掘調査

1992（平成4）年度

岡山県教育委員会

教育長	竹内　康夫
教育次長	森崎岩之助

文化課

課　　長	渡邊　淳平
課長代理	松井　新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	柳瀬　昭彦
主　　査	時長　　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	横山　常實
次　　長	河本　　清

（総務課）

課　　長	北原　　求
課長補佐（総務係長）	小西　親男
主　　査	石井　　茂
主　　任	石井　善晴
主　　任	三宅　秀吉

（調査第三課）

課　　長	伊藤　　晃
課長補佐（第一係長）	井上　　弘
文化財保護主査	野上　和信
文化財保護主任	石田　容一
文化財保護主事	田原　　順
第二係長	福田　正継
文化財保護主事	東呂木　博
文化財保護主事	大橋　雅也

1993（平成5）年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	岸本　憲二

文化課

課　　長	渡邊　淳平
課長代理	松井　新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑　知功
主　　査	時長　　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	横山　常實
次　長	葛原　克人
（総務課）	
課　長	北原　求
課長補佐（総務係長）	小西　親男
主　査	石井　茂
主　査	石井　善晴
主　任	三宅　秀吉
（調査第二課）	
第二係長	浅倉　秀昭
文化財保護主査	三上　修二
文化財保護主任	小林　閲士
（調査第三課）	
課　長	柳瀬　昭彦
第一係長	福田　正継
文化財保護主査	江見　正己
文化財保護主任	石田　容一
文化財保護主事	田原　順
文化財保護主事	東呂木　博
文化財保護主事	大柳　浩
文化財保護主事	柴田　英樹

発掘調査・報告書

1994（平成６）年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	岸本　憲二
文化課	
課　長	大場　淳
課長代理	松井　新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑　知功
主　任	若林　一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	河本　清
次　長	葛原　克人
（総務課）	
課　長	丸尾　洋幸
課長補佐（総務係長）	杉田　卓美
主　査	石井　善晴
主　任	三宅　秀吉
（調査第三課）	
課　長	柳瀬　昭彦
第二係長	江見　正己
文化財保護主任	石田　容一

報告書作成協力者

阿部典子　井上弘子　遠藤七都子　川口和美　田中淑子　峠田秀子　三垣佐知子
江尻泰章　米戸典子

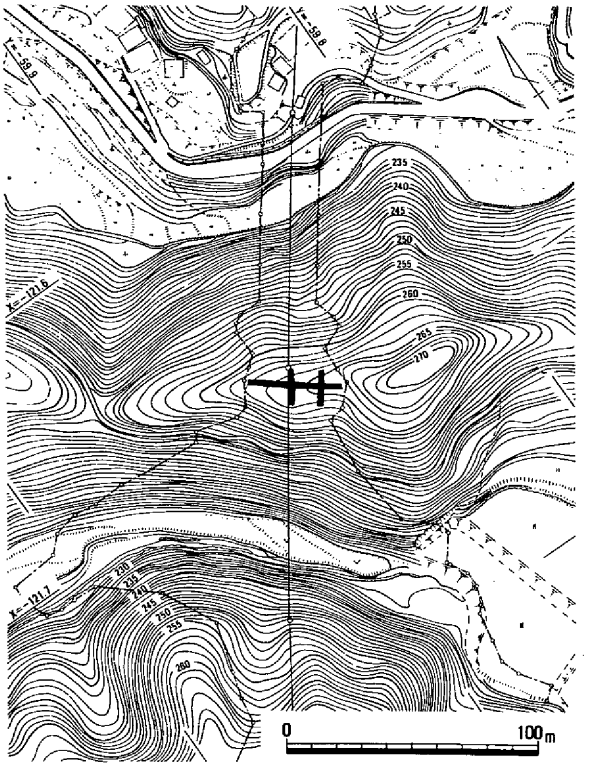
３．第１次調査の概要

１．畦地遺跡

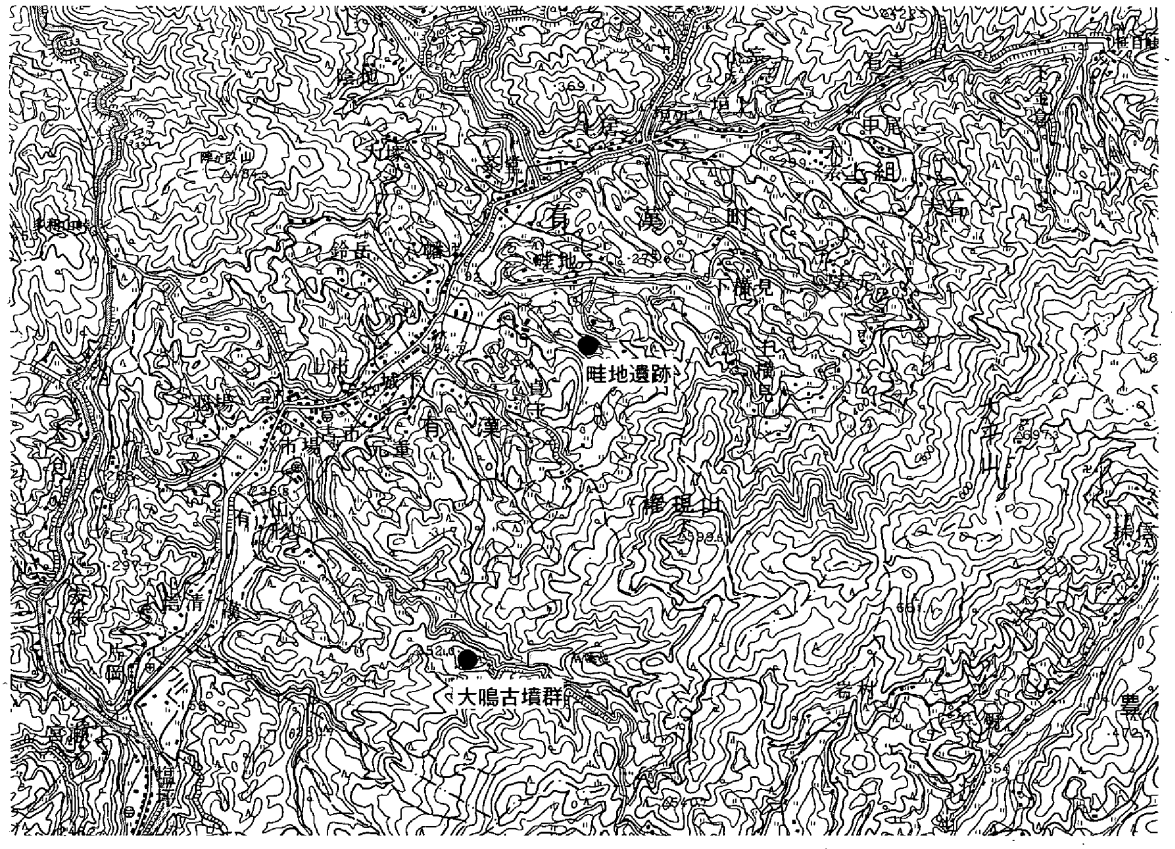
有漢町有漢に所在するこの遺跡は、遺跡地図によれば丘陵上の平坦面に山城関係の何らかの建物が想定されている。中国横断自動車道の路線が想定される遺跡範囲の西端部の裾に一部かかるため、１次調査の対象になった。調査は丘陵頂部の平坦部から西に派生する尾根上の用地内を対象にして、幅２ｍのトレンチを尾根主軸方向とそれの直交方向に「キ」の字状に設定して、深さ約30cmを人力で掘り下げる方法をとった。

調査の結果、トレンチ内には遺構らしきものは確認されず、遺跡に接する尾根の東端部についても、遺跡から辛うじて外れていることが判明した。

調査は平成５年４月12日から同14日までの３日間を要した。



第３図　畦地遺跡トレンチ位置図（１/3000）



第４図　１次調査遺跡位置図（１/50000）

第５図　畦地遺跡トレンチ（西から）

同　　左　（東から）

２．大鳴古墳群

大鳴古墳群は有漢町有漢に所在し、２基の横穴式石室を持つ円墳で構成される。１号墳は有漢町指定重要文化財になり、現状では南に開口する横穴式石室と墳丘が畑脇に残存し、標柱も立てられている。

岡山県教育委員会発行の岡山県遺跡地図の基礎ともなる調査カードを検討してみると、他にも古墳所在の可能性が指摘されており、用地内から新たに古墳あるいは遺跡の所在する可能性もあるため１次調査を実施した。

調査は平成４年４月26･27日の２日間で、重機を使用して発掘した。幅の広い国土座標三角点が存在する尾根上に「十」の字状に、そして南傾斜に２本のトレンチを設定し、平均50cmの深さまで掘り下げたが、遺構・遺物は皆無であった。

第６図　大鳴古墳群トレンチ位置図（１/3000）

第７図　大鳴古墳群トレンチ（東から）

同　　左　（北から）

3．岨谷遺跡

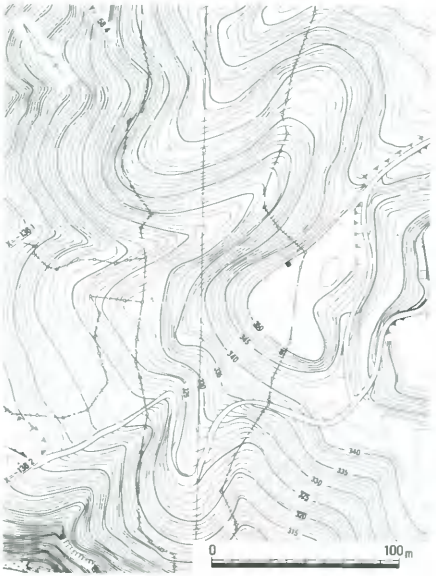
賀陽町岨谷に所在する。吉備高原南端の弥生後期の遺跡である。前述の遺跡地図・調査カードによると牧畜用のサイロ建設に伴って業者が土木工事を行っていたところ土器が出土し、県文化課職員が緊急に立会い調査を実施し、竪穴住居の断面を確認していた。

今回遺跡範囲の西端を中国横断道が掠めるため、平成５年４月21日に調査したものである。当該地はすでに牧草畑によって大きく地下げされていたが、わずかに旧地表の残存している部分２か所を精査した。この結果、いずれも表土直下で地山に達し、遺構・遺物は皆無であった。このことから、遺跡は当該地まで延びず、東方にある荒神社の周辺中心に所在すると判断された。

（浅倉）

第８図　岨谷遺跡位置図（１/50000）

第９図　岨谷遺跡近景およびトレンチ



第10図　岨谷遺跡トレンチ位置図（１/3000）

Ⅱ　発掘調査報告

1．宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群

第1章　地理的・歴史的環境

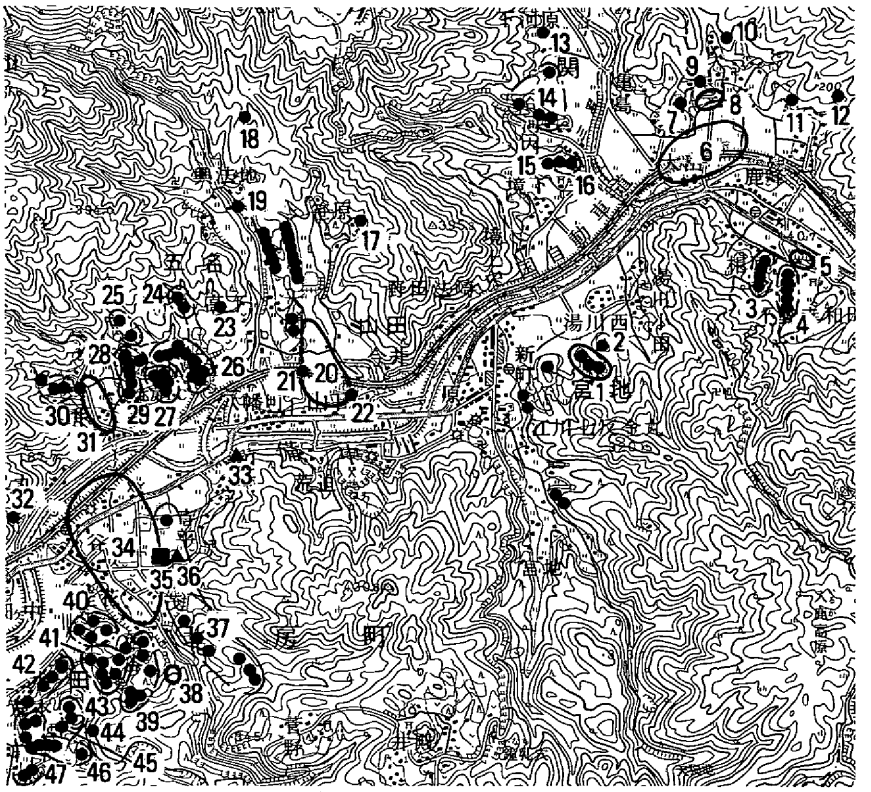
旭川の一支流である備中川は、北房町のほぼ中央部でさらに中津井川と分岐し、これら2本の河川は町内を三叉状に貫いて流れている。それぞれの流域には、上水田、呰部、中津井という細長い3つの盆地が形成されており、北房町地域はこれらの盆地を経済基盤として発展を遂げてきた。中でも上水田地域は最も広い盆地となっており、備中川と中津井川の分岐点周辺から、備中川沿いに北房町の東端部近くまでのびている。上水田地域には遺跡の数も非常に多い。今回調査を行なった宮地遺跡、大木遺跡、大木古墳群は、北房町東端部の備中川南岸の段丘上に位置し、上水田の盆地の東端にあたるが、地形的には落合町につながる盆地に面しているといえる。この付近は北房の盆地と落合の盆地とを河川に沿ってつなぐ狭い谷状の地形となっているが、この備中川沿いのルートは、古くからの重要な交通路であったようである。

この付近で人々の生活の痕跡を示す最も古いものとしては、縄文時代の遺跡が知られており、北房町の備中平遺跡[1]、谷尻遺跡[2]、落合町の宮の前遺跡[3]などにおいて、縄文時代早期の押型文土器やそれに伴う遺構も確認されている。そのほか北房町内の遺跡で、縄文時代後・晩期の遺跡も認められ、縄文時代から人々の生活の拠点とされていたことがうかがえる。また通常の集落とは別に、洞穴も縄文時代に利用されている。北房町は石灰岩遅滞であるため、各所に洞穴がみられるが、上水田地区の地蔵ヶ淵洞穴[4]では縄文中期から晩期に及ぶ土器が発見されている。

弥生時代になると遺跡はかなり増加する。上述した谷尻遺跡をはじめ、多くの遺跡で住居址などの遺構が確認されている。ただし前期、中期についてはあまり多くなく、後期にはいって増加するようである。集落址以外では、谷尻遺跡において発見された土壙墓群があり、中期末から後期初め頃のものと考えられている。一方、弥生時代の首長墓と考えられる遺跡は北房町内では確認されていないが、落合町の中山遺跡[5]では、尾根上に立地し方形区画を伴う集団墓地から特殊器台形土器、特殊壺形土器が出土しており、一般の集団墓とは格差が認められる。また北房町内においても、谷尻遺跡において、巴形銅器を出土した、周溝を伴う大形竪穴住居が発見されており、やはり一般の住居とは格差が大きい。

古墳時代に入ると、明確な首長墳が認められるようになる。全長45mの前方後方墳である荒木山東塚古墳[6]を最も古い首長墳として、それにつづく荒木山西塚古墳[7]、山之城古墳群中に所在するそふづぶう古墳[8]と、前方後円（方）墳の系譜がつながっている。古墳時代中期のものと考えられる立1号墳も前方後円墳の可能性が高いが、これも大規模な古墳である。これらの大規模首長墳以外にも、小規模な円墳を中心とする古墳が多数築かれており、いずれも河川に沿って形成された平地を見下ろす丘陵部に立地している。古墳時代後期の横穴式石室を埋葬主体とする古墳も多い。北房町は古墳時代終末期において、列石をめぐらせた畿内系の方墳が多数築造されていることが知られているが、それらは中津井地区に集中しており、その他の地区には確認されていない。今回の調査地点から近い落合町の西端部には、瓦当文をもつ陶棺が出土したことで有名な下一色古墳[9]がある。

古代の遺跡では、英賀郡衙と推定される小殿遺跡や英賀廃寺[10]があり、古代における英賀郡の中心が北房町の上水田地域にあったことがうかがえる。そのほか、集落址や火葬墓などの遺跡も調査されて



第１図　周辺の遺跡分布図（１/50000）

1	宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群	2	向山古墳	3	相原古墳群		
4	坂本古墳群	5	和田八幡遺跡	6	宮の前古墳	7	八幡古墳群
8	角瀬遺跡	9	上一色古墳	10	一色古墳	11	永明寺古墳
12	下一色古墳	13	影古墳	14	谷河内古墳群	15	国司塚１号墳
16	地蔵鼻古墳群	17	笹原古墳	18	火塚古墳	19	興法池古墳
20	備中平遺跡	21	八幡山古墳	22	山田古墳	23	大塚古墳
24	広高下古墳群	25	長そね古墳群	26	山之城古墳群・山之城遺跡		
27	観音寺山古墳群	28	赤羽根古墳群	29	東観音寺古墳群	30	塚の峠古墳群
31	井尾遺跡	32	又丸古墳	33	地蔵ヶ淵洞穴	34	谷尻遺跡
35	英賀廃寺	36	瓦窯跡	37	赤茂古墳群	38	坂谷池遺跡
39	坂谷池古墳群	40	畦の山古墳群	41	常の池古墳群	42	荒木山古墳群
43	宮迫古墳群	44	郷平古墳	45	御崎東古墳	46	宮の前古墳群
47	小松東古墳群						

（●は古墳）

いる。中世の集落遺跡も知られており、また北房町には中世の城砦の跡が非常に多い。

以上のように北房町一帯は、上水田地域を中心として縄文時代から弥生時代、古墳時代、古代、中世と、古くから継続して人々の生活が営まれてきた。その中で、大規模な古墳や築造や、古代における官衙施設、寺院の存在などは、この地域の経済基盤の安定性、また、交通の要衝としての重要な役割を示しているものと思われる。　（江見）

註

（１）「備中平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』12　岡山県教育委員会　1976年
（２）「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』11　岡山県教育委員会　1976年
（３）「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』12　岡山県教育委員会　1976年
（４）坂本彰『岡山県上房郡北房町地蔵ヶ淵洞穴』1983年
（５）『中山遺跡』落合町教育委員会　1978年
（６）平井勝「荒木山東塚古墳」『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社　1991年
（７）平井勝「荒木山西塚古墳」『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社　1991年
（８）平井勝「そふづぶう古墳」『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社　1991年
（９）今井堯・河本清「岡山県落合町下一色二号墳出土の瓦当文陶棺」『考古学研究』18-1　1971年
（10）「小殿遺跡・英賀廃寺」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』３　北房町教育委員会　1980年

その他の参考・引用文献

『北房町史』通史編・上　北房町教育委員会　1992年
『落合町遺跡地図』落合町教育委員会　1978年

第2章　調査の経過

上房郡北房町内における調査対象遺跡は、現水田下に所在する宮地散布地ならびにその南の丘陵上に位置する片山城跡・大木古墳群の3遺跡2か所であった。

調査は宮地散布地の第1次調査から開始した。当散布地は昭和50年代前半の構造改善事業、圃場整備が実施された際に土器片が確認されたことでその存在が周知されていたものであるが、遺跡の範囲が今ひとつ不明確なうえ、上記事業によって既に相当の削平も予想されていた。このため路線内約32000㎡を対象にして17か所にトレンチを設定し、調査を実施した。期間は4月8日から21日までの約2週間を要した。その結果、路線内ではT2の水田から南部分の約3600㎡が遺跡の範囲と推定され、調査の対象となったものである。(宮地遺跡第1図参照)

一方、北房町内での本格調査は4月当初の計画では、8月末で終了する予定の大村遺跡調査後の9月から、引き続き実施する予定であった。しかしながら、用地買収ならび事前の立木処理などが捗らず、8月以降、調査第二課に合流していた調査員2名および一部整理に入っていた調査員の計3名による調査は11月まで待たなければならなかった。

11月に入り、調査員3名は大木古墳群の調査地内に残る雑木の処理から開始した。しかしながら、予想外に作業員は集まらず、散乱する雑木の処理には約半月を要した。また、当古墳群が占地する丘陵は、西の丘陵上に所在する戦国時代の片山城の関連施設が推定されていたか所でもあることから、調査区の雑木除去および清掃後の11月後半には1/100による地形測量を行うとともに、古墳部分を除く丘陵一帯の13か所にトレンチを設定し遺構の確認作業を実施した(大木遺跡第1図参照)。その結果、12月上旬には城関連の施設と考えられる遺構の確認はされなかったものの、丘陵上からは弥生時代後期の竪穴住居数軒が確認されるとともに、中世の土壙3基が検出され、当丘陵部の調査は古墳部分のみならず、当初予定と同様に丘陵全体が対象となった。

第1図　調査後の遺跡とその周辺

その後、大木古墳群および大木遺跡の調査と併行して、12月13日からはさらに宮地散布地の調査を再開した。調査対象範囲3600㎡の田面に対し、まず重機による表土掘削範囲を再確認するために南北方向のトレンチを設定し、旧地形の状況把握に努めた。その結果、いずれのトレンチも黄褐色

第２図　大木遺跡発掘調査風景

の粘質土を基盤とし、上部には火山灰層と考えられる黒褐色土層が薄く堆積しており、旧地形は南端から北に向け徐々に下がる状況が確認された。そして、当初調査予定の北側水田部に至ると基盤層が急激に下がるとともに、その上層は軟質の粘質土および微砂層が厚く堆積するなど、備中川の段丘下に堆積した自然堆積層と判断され、これによって調査範囲はさらに狭められ、全面調査面積は1600㎡余りにとどまることとなった。その後12月後半には重機による表土掘削を終了させ、１月からの本格調査に備える一方、主に大木古墳群の調査を継続した。

１月以降、３遺跡を併行して調査を行う中で、１月下旬頃には大木古墳群の状況が把握され、大木遺跡は比較的まとまった弥生時代後期を中心とした集落であることが明らかになりつつあった。また、宮地散布地においても弥生時代遺物とともに東西に延びる溝が検出される（遺構の確認がなされたため、以後「遺跡」と改める。）など、いずれの遺跡においても大勢が判明しつつあった。

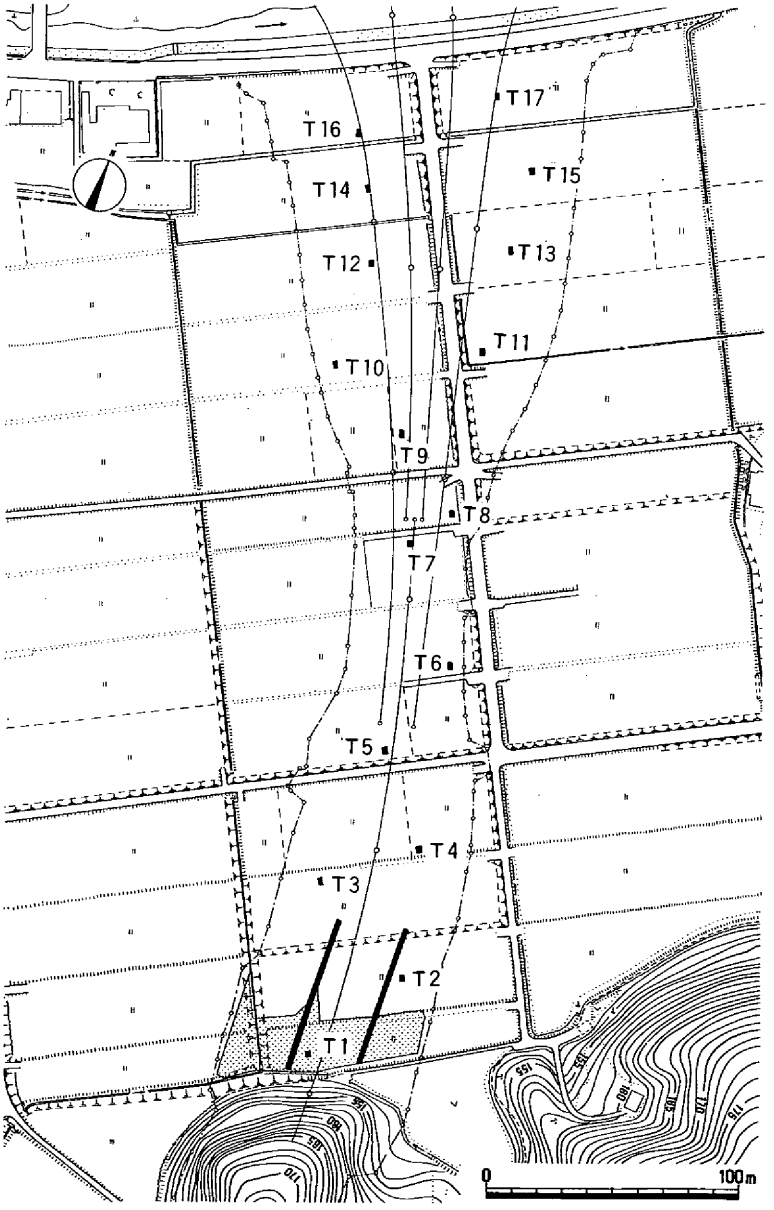
このため、２月７日には埋蔵文化財保護対策委員会を開催し、各委員からは遺跡および遺構・遺物について種々教示を得た。また、２月18日には北房町の企画課が主催する現地説明会が実施され、日本道路公団とともに、地元水田小学校の児童を対象に、遺跡と自動車道建設についての説明を行った。

その後、上記３遺跡の調査は３月末に終了した。　（江見）

第３章　宮地遺跡

第１節　調査の概要

宮地遺跡は上房郡北房町宮地791他に所在する弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である。遺跡は前述のように、南から延びる大木丘陵の下端縁辺に貼り付くように堆積する黄褐色粘質土の基盤層上に展開している。路線内においての南北方向の拡がりは、南端に所在する現水田下からは遺構が



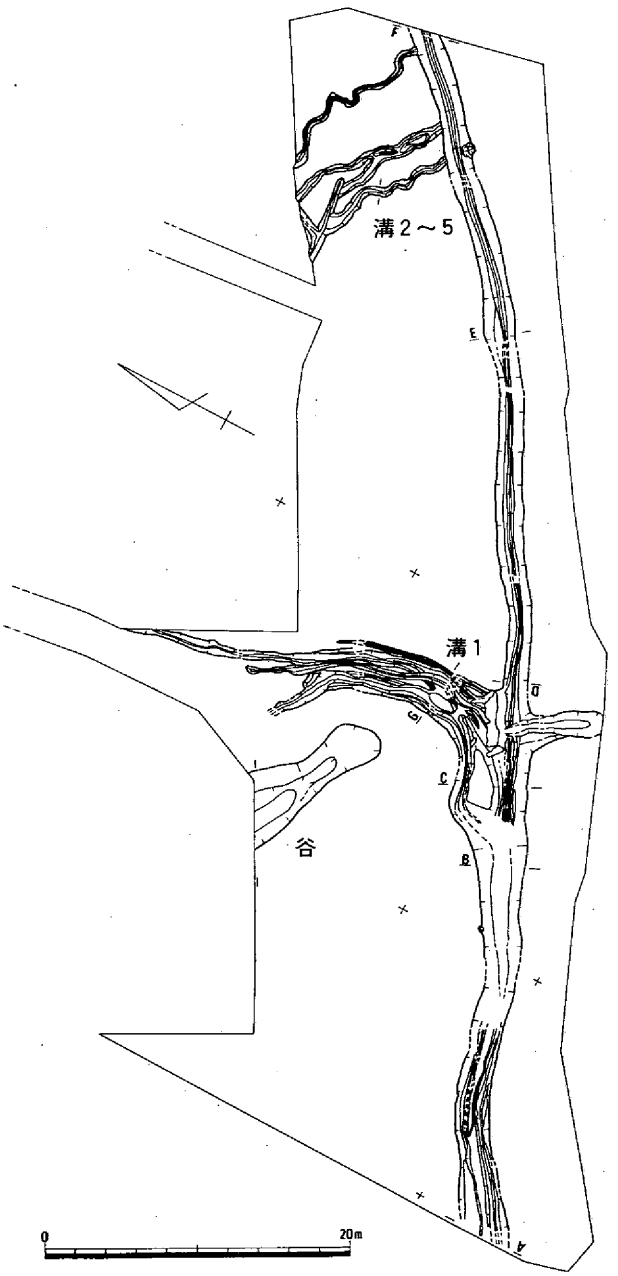
第１図　遺跡位置図（１/3000）

検出されたが、その北側の水田では基盤が下がり、北方向へと湿地化ならびに氾濫源の様相を呈していくことから、丘陵下端から北へは約20ｍ程の距離しか測らないものの、東西方向には後述する溝の在り方から、丘陵下端に沿うように長く路線外に延びていくものと推定される。

今回調査で検出した遺構は溝数条のみで、他に自然の谷地形と思われる部分１か所であった。以下、略記する。

溝１（第２～13図、図版１～３）

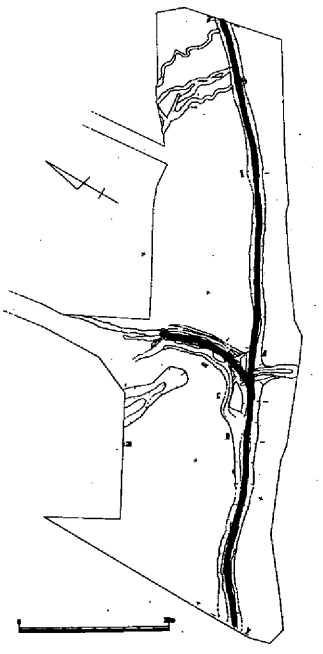
調査区を東西に貫通し、調査区中央付近において北へ分流する溝で、最低４度は掘り返し、改修された幹線水路である。なお、堆積土は握り拳大の砂礫を主体とし、砂質土や粘質土が混じるもので、平面的には十分に捉えることが出来なかったものではあるが、平断面の検討の結果、以下、掘削順にａからｄ期の４期に大別し、Ａ～Ｌの各断面を中心に説明を加える。



第２図　遺構全体図（１/500）

溝１－ａ期（第３・６・７図）

断面Ａの第10～18層、断面Ｃの第７～11層、断面Ｆの第９～11層などがこれにあたると考えられる。この期の溝は断面Ａで明瞭なように一条の溝ではなく、断面形態が「Ｖ」字状ないしはそれに近い形態を呈す溝が何度か掘り返されている。また、溝は調査区中央で、北に緩く弧を描きながら分流しており、平面の流路形状から断面Ｇの第８・９層がこれにあたると考えられる。溝底の高低差はＡＦ間の約100ｍでＡ断面



第３図　溝１－ａ期（１/1000）

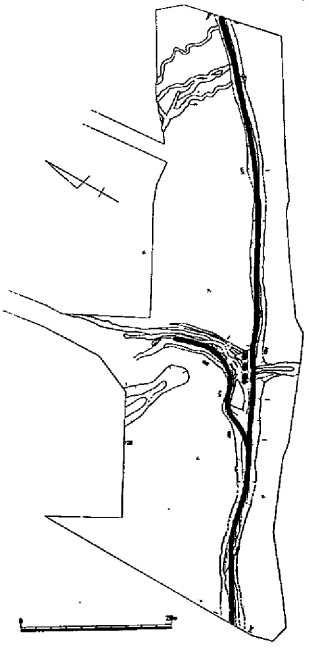
部よりＦ部分が約70cm低く、また、ＡＧ間の約40ｍでも同様にＧ部分が約65cm低かった。このことから溝は西から東に、また、調査区中央から北に向け流走していたものと考えられる。

溝１－ｂ期（第４～７図、図版１）

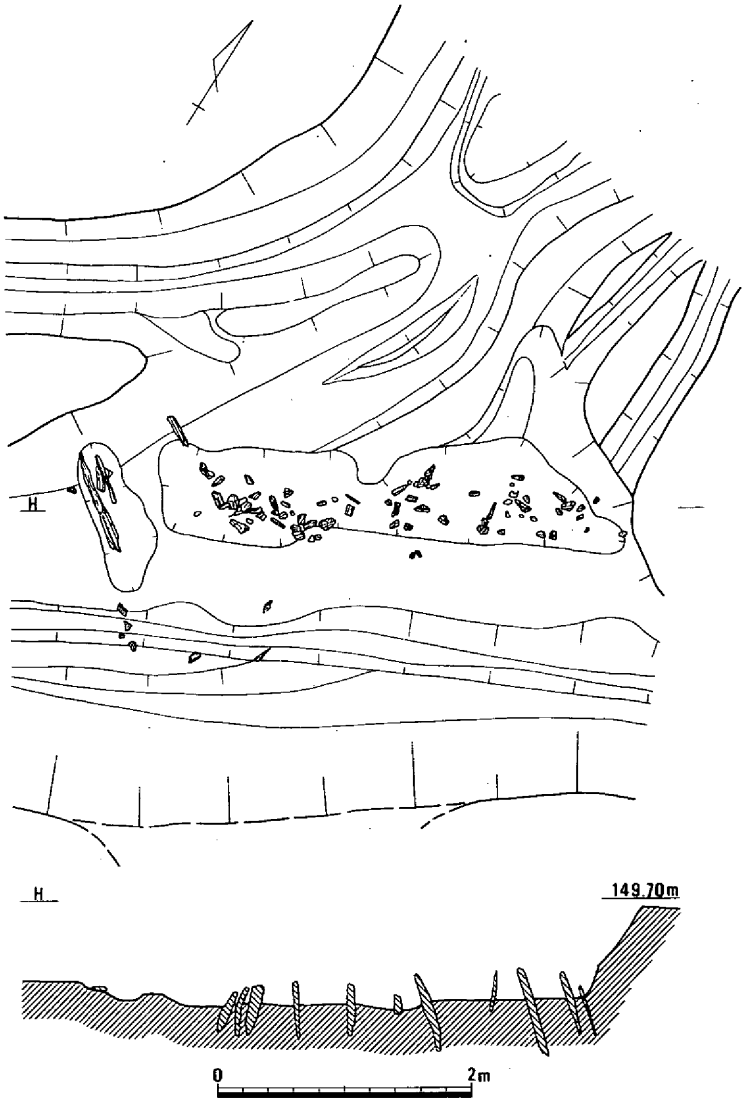
断面Ａの第８層、断面Ｃの第４～６層、断面Ｆの第５～８層などがこれにあたり、ａ期溝と同様に西から東に流走しており、溝底はａ期のそれと比べ20～40cm余り高くなっている。溝の断面形態は西端から調査区中央付近までは緩やかな皿状を呈し、それより東部分は「Ｖ」字状を呈す。また、ａ期に溝中央付近から北へ弧状を描きながら分流させていた部分は、この期には杭によって寸断され、その上流約８ｍから分岐させたと推定される。

杭は溝１の分岐部分の位置に東西溝の中央から、その溝の北辺に沿うようにして検出されたもので、特に、北東部にあたる幅約60cm、長さ約４ｍの範囲からは残存径５～12cm、長さ25～80cmを測る杭が、２列ないし３列に打ち込まれていた。調査時に杭列群を把握する横断面を設置することが出来なかったが、このように平面に現れた杭列による分岐溝の切断の在り方は、杭列上部に土手設置がなされていたと想定される。

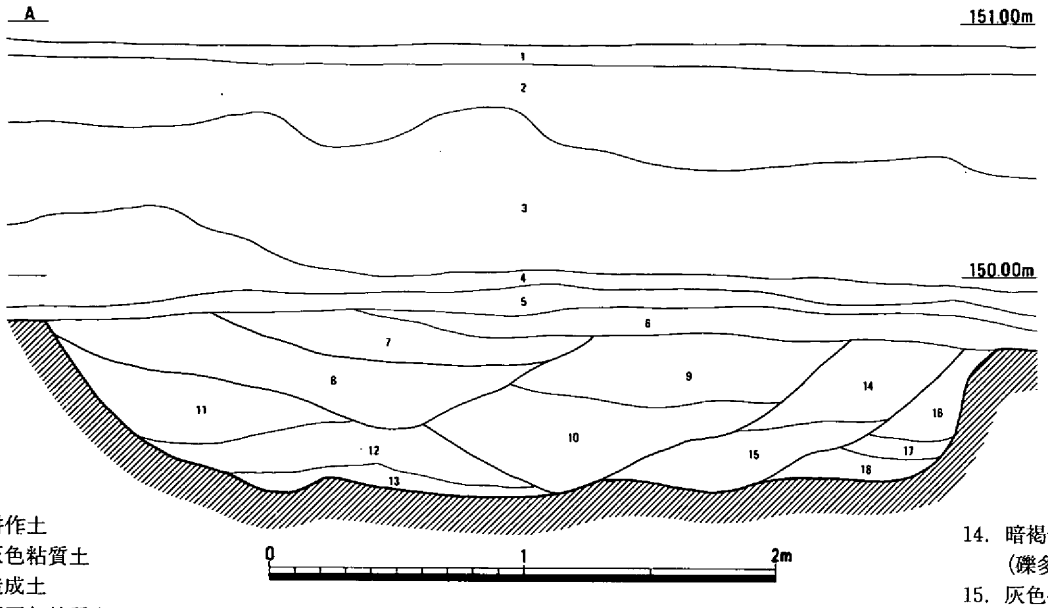
一方、北へ分流する溝は断面Ｃの第12～17層、断面Ｇの第10～12層がこれにあたり、分岐点付近にあたる断面Ｂから断面Ｇとの溝底は北に約85cm余り下がっており、西端および東端の溝底の高低差は約40cmを測る。



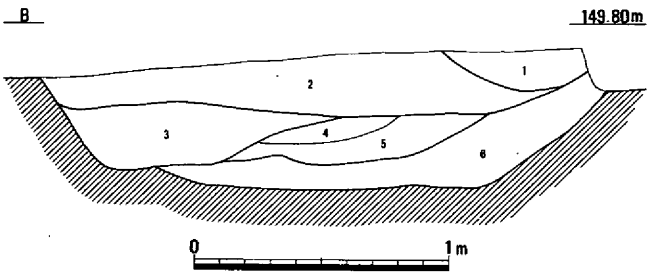
第４図　溝１－ｂ期（１/1000）



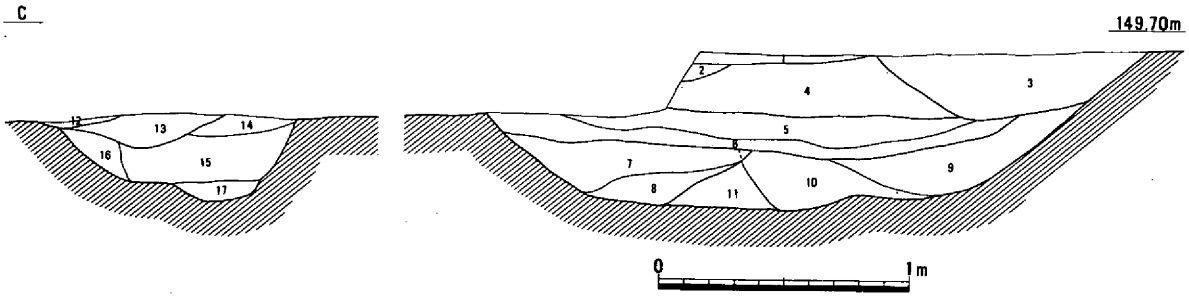
第５図　溝１中央部（１/60）



1．耕作土
2．灰色粘質土
3．造成土
4．明灰色粘質土
5．暗灰色粘質土
6．青灰色粘質土
（黄色小礫含む）
7．暗褐色砂質土
（細砂・小礫含む）
8．暗灰褐色砂質土
（粗砂・小礫含む）
9．暗褐色土
（小礫多含）
10．黄色灰色砂質土
（小礫含む）
11　暗灰色砂礫
12．淡褐灰色砂礫
13．灰色砂質土
（礫含む）
14．暗褐色土
（礫多含）
15．灰色砂礫
16．暗褐色土
17．灰暗褐色土
（小礫多含）
18．灰色砂礫

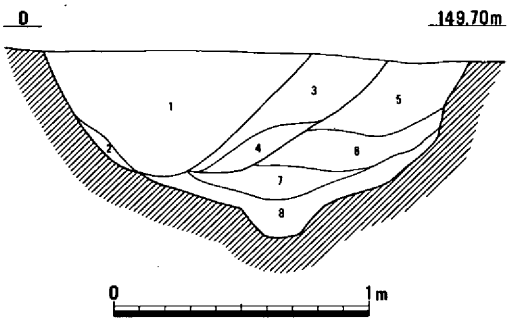


1．黄茶褐色砂礫
2．明灰茶褐色土
（黄色小礫多含）
3．黄灰色砂質土
（粗砂・黄色小礫多含）
4．黄灰色砂質土
（黄色小礫多含）
5．灰色砂質土
（黄色小礫多含）
6．灰黄色砂質土
（小礫多含）

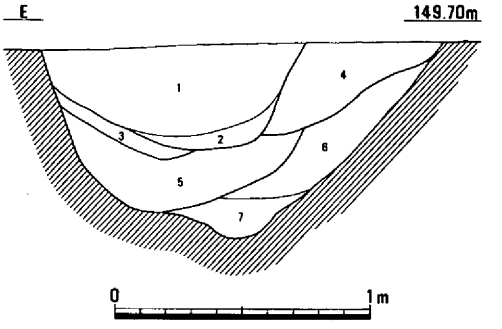


1．灰褐色土
（小礫含）
2．黄褐色土
（黄色小礫多含）
3．黄茶褐色土
（砂礫・細砂混入）
4．明灰茶褐色土
（黄色小礫含む）
5．明灰茶褐色土
（黄色小礫含む）
6．灰色粘質土
7．淡灰色土
（細砂・小礫含）
8．灰黄色土
（砂礫混入、細粒の
灰色砂質土含む）
9．黄灰色土
（砂礫混入、細粒の
灰色砂質土多含）
10．灰黄色土
（砂礫混入、細粒の
灰色砂質土含む）
11　青灰色粘質土
（細砂混入）
12．灰褐色土
13．淡褐灰色土
（黄色小礫含む）
14．明灰茶褐色土
（黄色小礫含む）
15．黄灰色土
16．灰黄褐色土
（黄色小礫含む）
17．灰黄色土

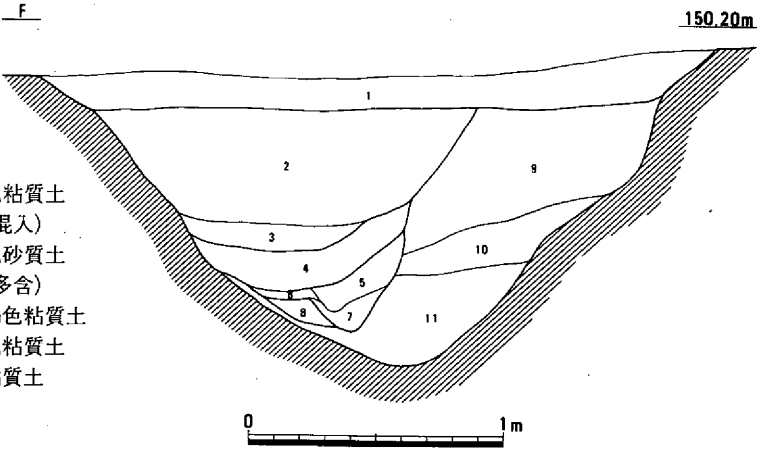
第６図　溝１断面Ａ～Ｃ（１/30）



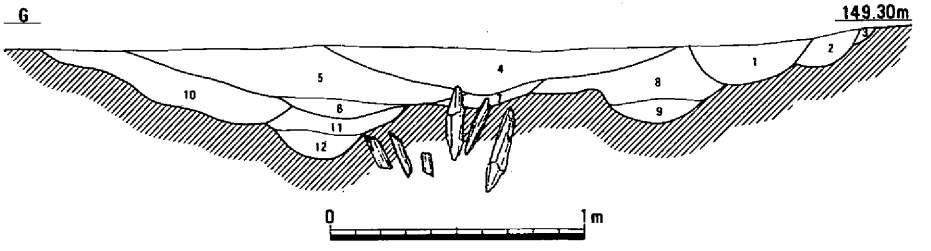
1．黄茶褐色砂礫
2．明灰色粘質土
3．褐灰色粘質土
（黄色小礫多含）
4．褐灰色土
5．淡灰褐色土
6．褐灰色粘質土
7．灰色粘質土
（礫・炭混入）
8．灰色粘質土
（砂礫・炭混入）



1．黄茶褐色砂礫
2．灰色粘質土
（細砂混入）
3．灰色砂質土
（小礫混入）
4．灰褐色土
5．灰色粘質土
（炭混入）
6．淡灰色粘質土
7．濃灰色粘質土



1．暗灰色粘質土
（水田造成土）
2．灰褐色粘質土
3．黄灰褐色砂礫
4．褐灰色砂礫土
5．淡灰色粘質微砂
6．淡灰褐色粘質土
7．淡灰色粘質土
（細砂混入）
8．灰黄色砂質土
（小礫多含）
9．灰淡褐色粘質土
10．灰黄色粘質土
11　灰色粘質土



1．灰褐色土
（黄色小礫含む）
2．黄灰褐色土
（黄色小礫多含）
3．暗灰褐色土
4．灰色粘質土
（炭混入）
5．灰色粘質土
6．灰色粘質微砂
7．灰色土
（青色礫含）
8．灰黄色土
（黄色小礫多含）
9．灰色粘質土
（小礫含）
10．黄灰褐色土
（細砂・小礫多含）
11　淡灰色粘質土
（細砂混入）
12．青灰色砂質土
（礫混入）

第７図　溝１断面Ｄ～Ｇ（１/30）

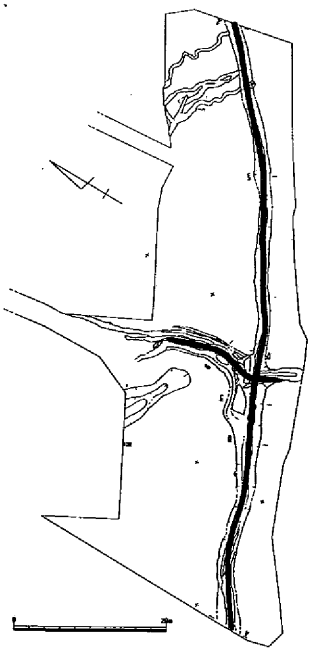
溝１－ｃ期（第８・９図、図版２）

調査区中央の分流埋没後のｃ期に至ると、溝は以前からの主たる東西方向溝に加え、新たに丘陵下北端を水源とし北へ延びる溝が、東西溝にほぼ直交するように掘削される。断面の形態は「Ｕ」～「Ｖ」字状を呈し、溝内には黄褐色の砂礫が大半を占める状況であった。また、北に延びる溝の両肩部からは数本の杭が出土しており、堰が設けられていた可能性が示唆される。さらに、水源部からは溝底からやや浮いた状態で板材が出土しており、この板材は後述するｄ期溝と同様に、水源部の何らかな施設に伴うものと推定される。

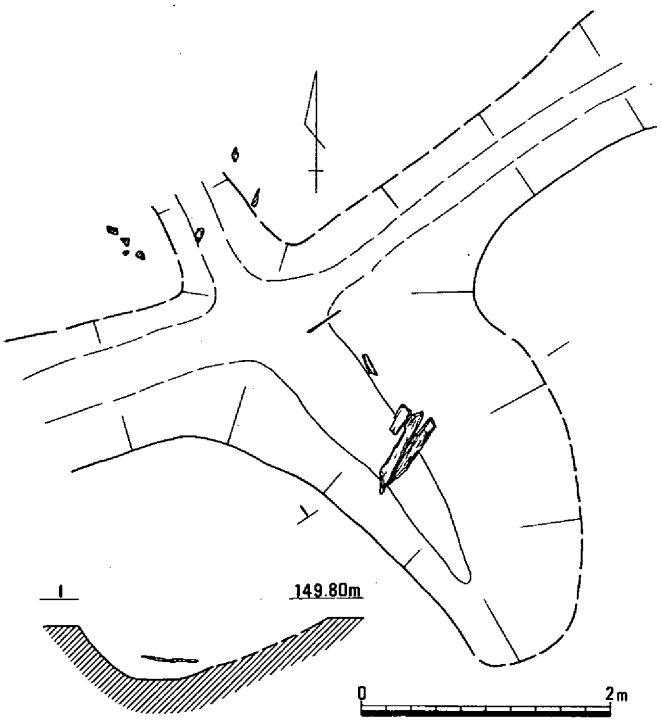
一方、北西へ延びた溝はやや西に振りながらも北方向に向きを変え、断面が緩やかな皿状を呈す幅広の溝となり、調査区北端では消滅するようである。なお、断面ＡＦ間の溝底の高低差は約50㎝、水源から断面Ｇの間は約25㎝を測る。

溝１－ｄ期（第10・11図、図版２）

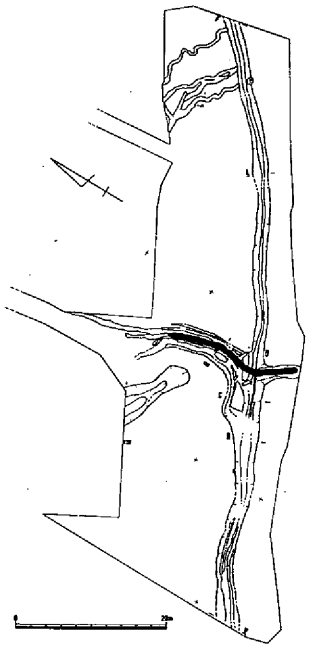
最終段階のこの期には、これまでの東西方向の溝は埋没し、ｃ期溝の東側に新たに北へ延びる溝１条へと移行する。第11図および断面Ｇの第４層がこれにあたる。断面からも明らかなように水源部周辺では「Ｕ」字状を呈すものの断面Ｇでは浅い皿状へと広がっており、ｃ期溝と同様に調査区北端では消滅している。また、水源には溝底からやや浮いた状態ではあるが、長さ約130㎝前後、幅約15㎝、厚さ約２㎝の板材２枚が一部重なりながらも並行に出土しており、さらに、その南からは水源からの流路を遮るように長さ約90㎝、幅約10㎝、厚さ約２㎝の板材が埋められており、水源の水を一部溜める施設ではないかと推定される。遺物は溝底から扁平な礫および後述する**18～20**の土師器が出土している。なお、断面Ｇ付近においてｃ・ｄ期溝の下部から杭が検出されたが、どの溝に伴うものかは判断出来なかった。



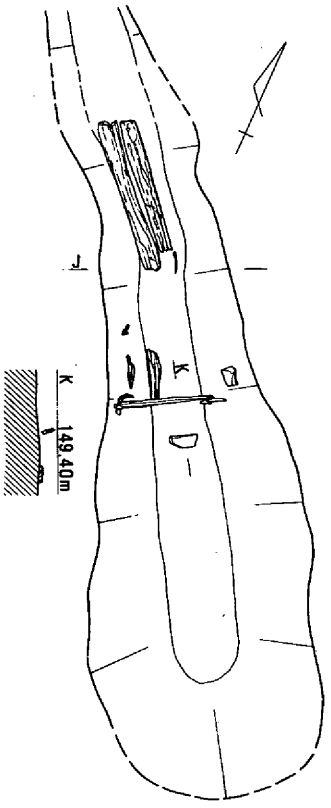
第８図　溝１－ｃ期（１/1000）

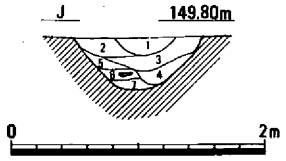


第９図　溝１－ｃ期（１/60）



第10図　溝１－ｄ期（１/1000）





1．暗灰褐色粘質土（淡黄色砂礫粒含む）
2．淡灰茶褐色土（淡黄色砂礫粒含む）
3．灰褐色粘質土（淡黄色砂礫粒塊混入）
4．灰褐色粘質土（砂礫混入）
5．淡灰茶褐色土（淡黄色砂礫粒多含）
6．明灰褐色粘質土（加工木混入）
7．淡灰褐色粘質土（砂礫混入）

第11図　溝１－ｄ期（１/60）

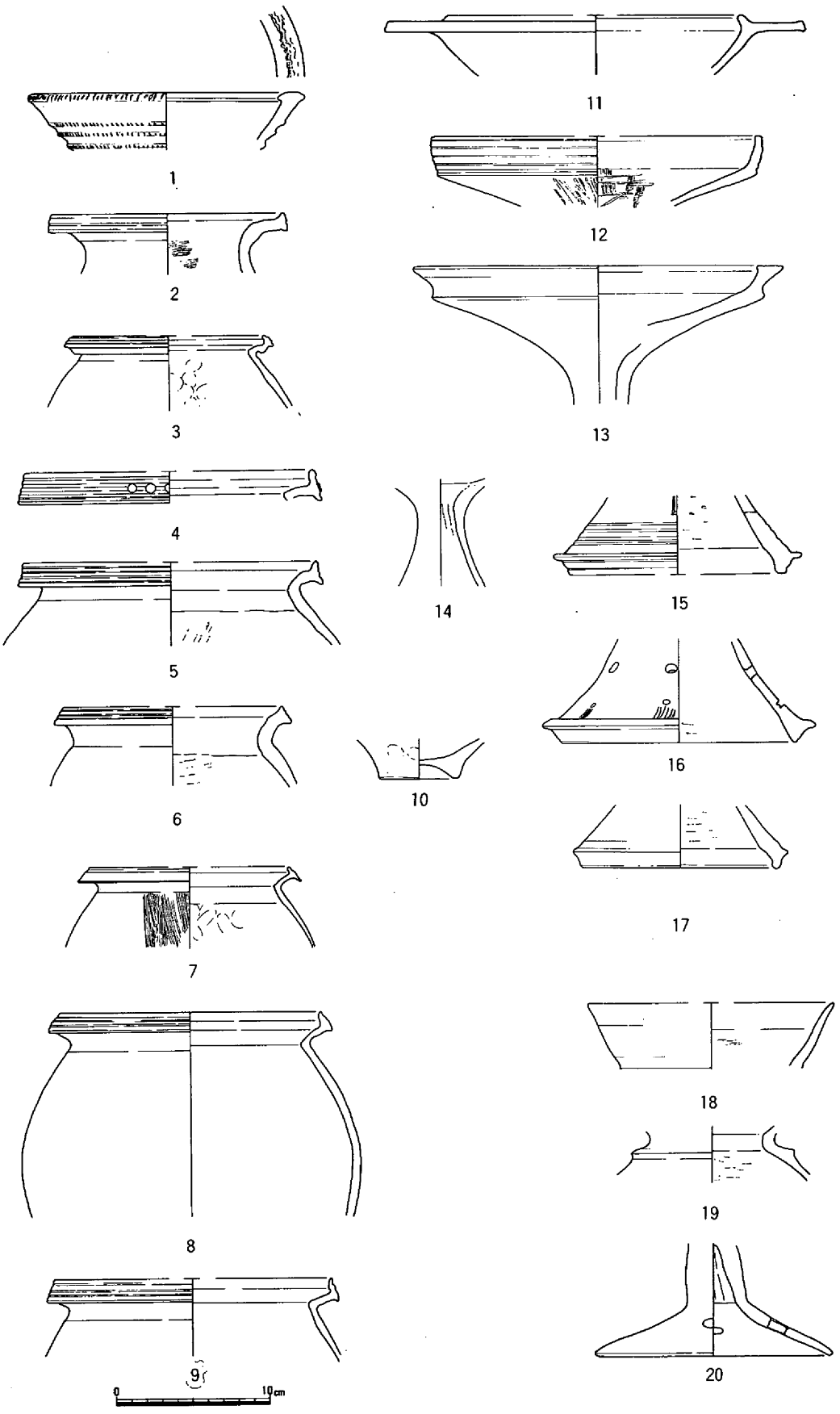
溝１出土遺物（第11・12図、図版３）

上記した溝１からの出土遺物は整理箱４箱余りで、そのうち土器類および石器は２箱であった。また、重複の著しい溝群のため新旧関係は十分にはつかめず、調査時点でそれを判別することが出来たのはｄ期の溝のみであった。このため一括して簡単にその様相を記述する。

出土した土器はその特徴から弥生時代中期の壺（**１・２・４**）、甕（**３・７～９**）、高杯（**11・12・14・15・17**）など、同後期の甕（**５・６・10**）、高杯（**13・16**）など、古墳時代土師器の鼓形器台？（**18・19**）、高杯（**20**）などである。いずれの土器も破片で、磨滅している。**１**は口縁部に刻みを施し、口縁端部上面に雑な波状文が巡らされている。**４**の口縁拡張部には円形浮文が貼り付けられており、**７**の口縁は端部を上下に拡張しており、**８・９**は上方に折り曲げ拡張している。**11**は水平なつばをもつもので、**12**の口縁外面には４条の凹線が巡らされている。**13**の口縁端部は肥厚し上部に面をもつ。**15**の脚部裾には数条の凹線が巡らされ、長方形の穿孔がなされ、**16**のそれには櫛状工具による施文がなされ、竹管による円孔が穿たれている。**20**は長脚で、４か所に円孔が穿たれている。

また、石器はサヌカイト製の石包丁（Ｓ１）、粘板岩製の砥石状の石製品（Ｓ２）がある。

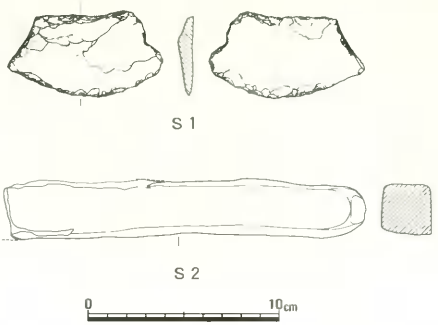
以上、出土した土器は弥生時代中期中葉から同後期前半、および古墳時代初頭の特徴を示すものと考えられる。



第12図　溝１出土遺物①（１/４）

溝２～５（第２・14図）

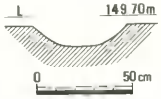
調査区の北東部から検出された。いずれも南東から北西方向に蛇行しながら流走する小規模な溝で、幅約50㎝、深さ10～20㎝を測り、断面逆台形状を呈す。壙内には灰黄色の粘質土が堆積しており、遺物は土器細片が僅かながら出土しているが、時期決定は困難である。なお、前述の溝１との切り合いからすれば当溝群は溝１よりは古い可能性がある。



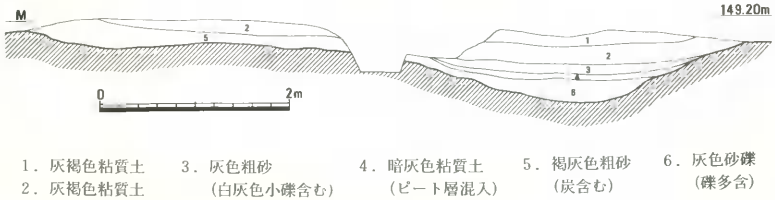
第13図　溝１出土遺物②（１/２）

谷（第２・15図）

調査区中央西寄りから検出された自然の谷状を呈す部分である。南東から北西にかけて徐々に下がっており、上部に粘質土、その下には流木・木の葉などと思われる植物遺体を含む層が堆積しており、最下層は拳大を中心とした礫層であった。なお、遺物は皆無であった。



第14図　溝２（１/30）

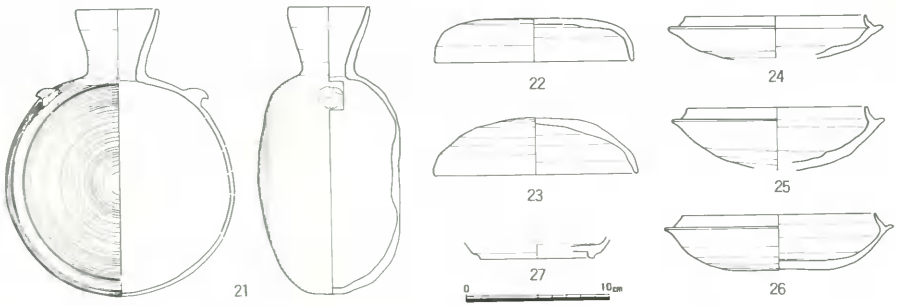


1．灰褐色粘質土　3．灰色粗砂（白灰色小礫含む）　4．暗灰色粘質土（ピート層混入）　5．褐灰色粗砂（炭含む）　6．灰色砂礫（礫多含）

第15図　谷（１/60）

包含層遺物（第16図、図版３）

調査区南端から北方向に僅かながら傾斜を示す当遺跡はその斜面に堆積する厚さ約10㎝の灰色粗砂



第16図　包含層遺物（１/４）

層に遺物が包含されていた。特に、調査区中央の溝１の北東部から多く出土した。遺物は古墳時代後半の提瓶（21）をはじめ、杯蓋（22・23）、杯身（24～26）、古代の杯身（27）などが出土している。

第２節　まとめ

宮地遺跡は今回の調査により、初めて遺跡の一部が明らかになった。調査の経過でも記したように、調査前においては遺跡の実態は全く判っておらず、周知するきっかけとなった水田の構造改善事業によって、遺跡の大半は既に消滅しているものとの予測もされていたものであった。　しかしながら、遺跡は丘陵下端の一部が削平を受けていると考えられるものの残存度は比較的よく、南北方向は約20ｍを測り、東西方向については明瞭ではないが、路線幅を越えて丘陵下端を巡っていくものと推定された。

第17図　溝１実測作業

今回の調査では溝数条と自然の谷が一部検出されたに過ぎない。しかしながら溝１は、弥生時代中期から古墳時代初頭までの数百年間にわたり、幾度も改修され利用されてきたものであり、溝の形態・規模などから、農業用水としての機能を果たしたものと推定される。そして、溝は東西溝を幹線水路とし、時代とともに北方向へと導入水路が掘り返されていったことを明らかにすることが出来た。

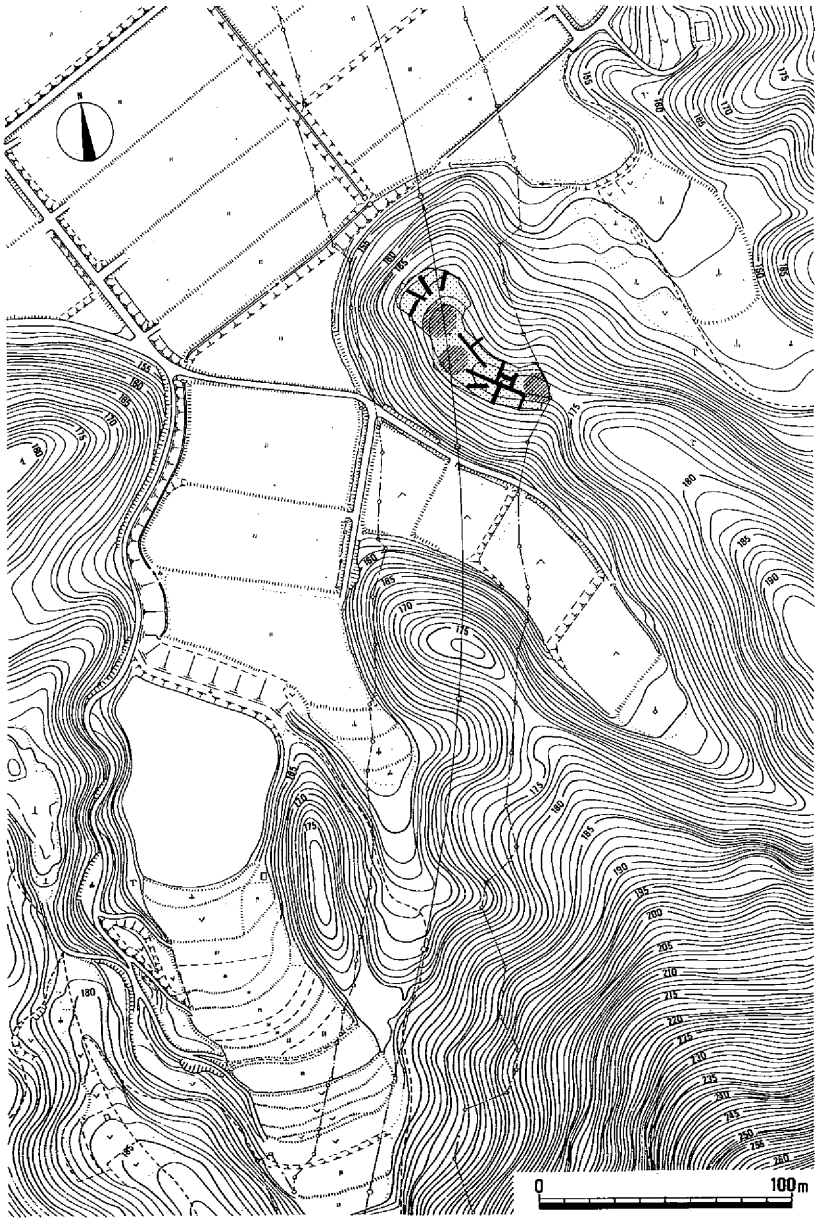
また、出土遺物からは弥生時代中期中葉～同後期前半、古墳時代初頭～同後半、古代に営みのあったことが判明した。

一方、上記した溝改修の必然性を説く鍵である水田遺構の検出はなされなかった。さらに、調査区外の北部においては前述のごとく地形が徐々に下っており、堆積層からは旧水田層を確認することができなかった。このため、今回調査の範囲に水田を推定するならば、構造改善事業によって既に削平されていた可能性が高い。

また、遺物の出土を見た古墳時代以降の遺構の所在が明らかでなく問題も残したが、今回の調査で得られた資料は、今後当地域における歴史復元の一助となろう。　（江見）

第４章　大木遺跡

大木遺跡は上房郡北房町宮地861他に所在する弥生時代から中世に至る複合遺跡である。遺跡は北へ派生する標高約170ｍの大木丘陵上に位置する。南東から北西へ延びる当丘陵は標高180ｍあたりまでは急峻で、丘陵尾根は馬の背状を呈すが、遺跡の所在する標高175ｍ付近になり、ようやく頂部に僅かながらの平坦面が形成されるようになる。南北に「く」の字状に緩く延びる平坦面は南北約70ｍ、東西約20ｍの約1300㎡を測り、前章の宮地遺跡との比高差は約25ｍである。検出された遺構は弥生時代の竪穴住居・土壙および中世の土壙で、遺物は上記時代の遺物に加え、古代の土器片も僅かながら出土している。なお、当丘陵からは古墳３基も所在しているが、これについては章を改めて記す。



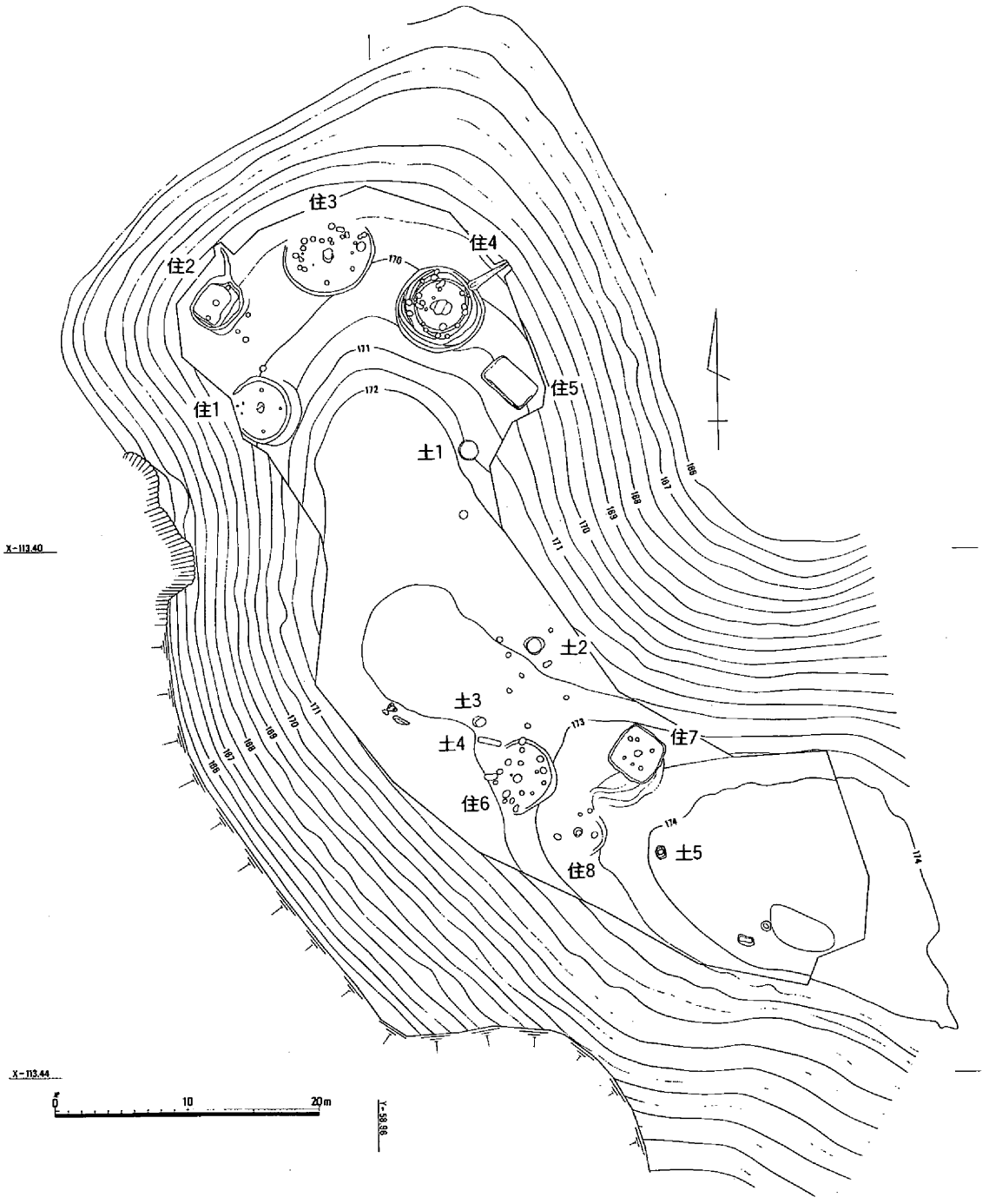
第１図　遺跡位置図（１/3000）

第１節　弥生時代の遺構と遺物

竪穴住居

竪穴住居１（第３図、図版４）

北調査区の南西、丘陵の西に面して検出された住居である。床面の平面形態は不整円形を呈し、住居の南東にあたる丘陵側の壁上部は角度を変え、掘り削っていることが確認された。床面積は径５×



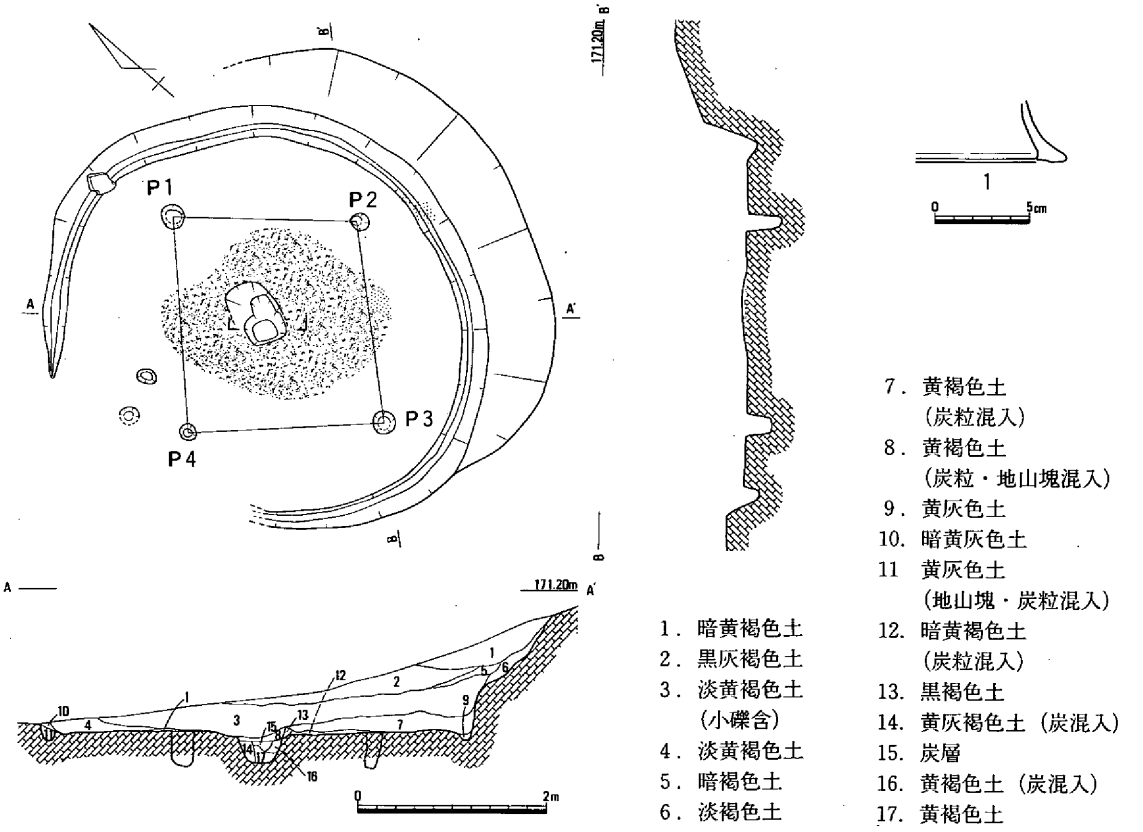
第２図　遺構全体図（１/500）

4.4ｍの約14.58㎡を測る。覆土は上層に有機質の混入する土に、下層は細かな粒子の堆積土に覆われており、廃絶後、自然堆積したものと判断された。

主柱は４本で各柱穴間の距離は2.1ｍ前後を測る。一方、主軸をもつ南北間が3.2ｍを測るのに対し、東西間のそれは2.8ｍと約40㎝短い。柱穴はいずれも径20㎝前後と小規模で、特にＰ４の径は18㎝と小さく、柱穴と柱の径は、その差がほとんど無かったものと想像される。

床面中央には径70×50㎝、深さ約30㎝の中央穴が穿たれ、その周辺2.4×1.8ｍの範囲には薄く炭層が堆積していた。また、床面南東部には２か所に焼土面が認められた。

遺物は住居北端の床面から、調理台として利用されたと考えられる上面の平滑な礫が残されていたのみで、他に覆土から僅かながら土器細片が出土した。図示し得た１は脚裾部と判断した小破片で、橙色を呈す。器表面は剝離しており、僅かに端部にヨコナデ痕跡が確認されたもので、口縁部の可能性もある。



第３図　竪穴住居１（１/80）・出土遺物（１/４）

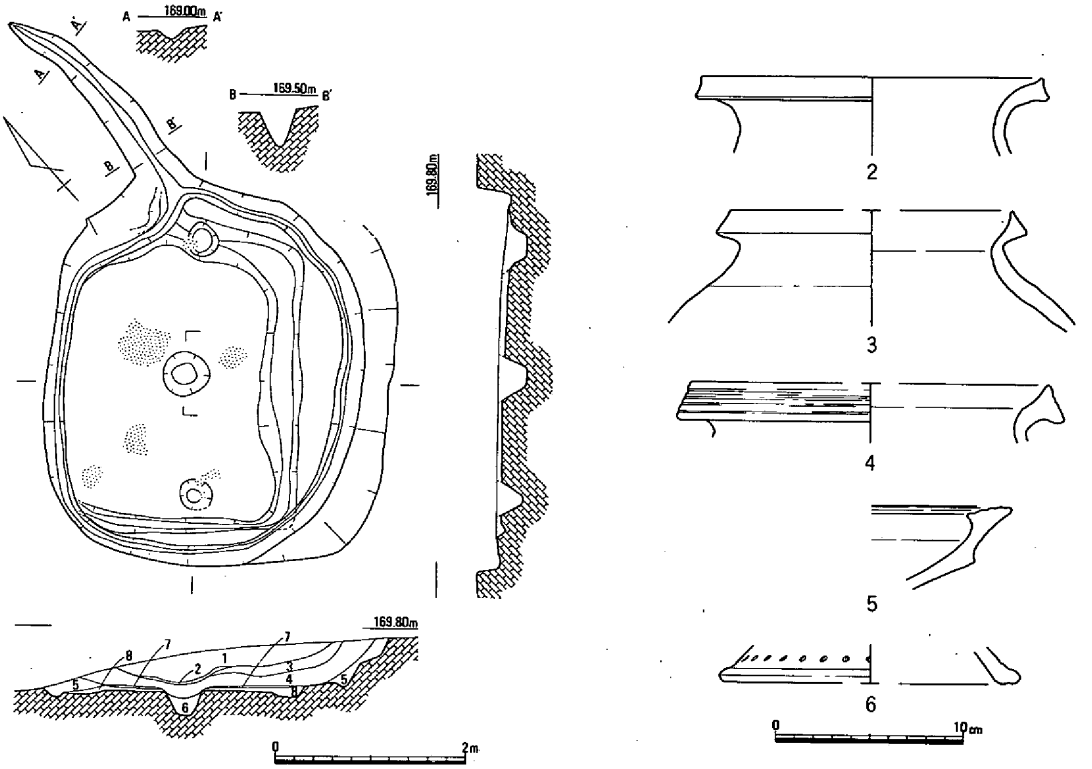
竪穴住居２（第４図、図版５）

北調査区の北西に位置し、前述竪穴住居１の北から検出された、平面形態は不整楕円形を呈す竪穴住居で、排水溝と呼称される溝が伴うものである。主軸は等高線に沿った北東から南西を示し、この竪穴においても竪穴住居１と同様に、丘陵側の壁は段をもつ。主柱は２本で、床面中央には径約50㎝、深さ約30㎝の中央穴が穿たれている。また、床面には６か所もの焼土面が確認されるとともに、炭が混入する床面上層の覆土の状況からすれば、当住居は火災にあった可能性が高い。なお、住居は長方形を呈す床面から不整楕円形のそれに拡張建て替えがなされた考えられるものの、前者に伴う柱穴は

確認されなかった。

遺物はいずれも細片であるが、覆土中から壺２、甕３・４、高杯５・６などが出土した。壺の口縁端部はヨコナデによる凹部を形成し、甕は口縁端部が上下に肥厚し、４には４条の凹線が巡る。５の口縁端部は水平方向に大きく肥厚し、上面には４条の凹線を巡らす。６の脚裾部には竹管文が施されている。

以上、当住居は遺物の特徴から、後期前半に廃絶した住居と考えらる。　（江見）



１．淡黄褐色土（小礫含む）
２．明黄褐色土（白色小礫含む）
３．黄褐色土
４．淡灰褐色土（礫・炭混入）
５．淡灰褐色土
６．淡黄褐色土
７．明黄褐色土
８．明黄褐色土

第４図　竪穴住居２（１/80）・出土遺物（１/４）

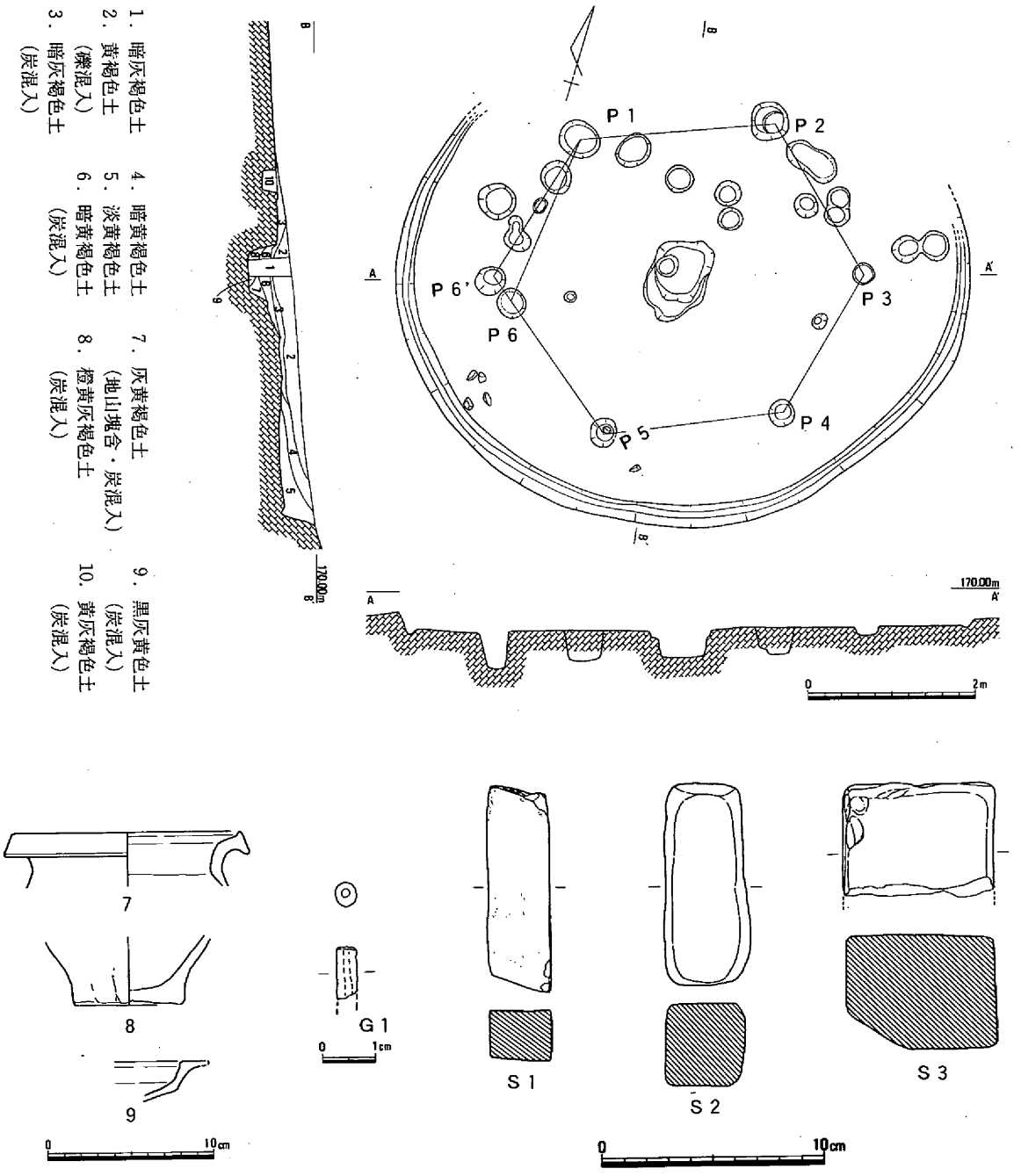
竪穴住居３（第５図、図版５）

北調査区の北端に位置する。長径約6.8ｍを測る大型の住居で、平面形態はほぼ円形を呈す。当遺跡で検出された住居の中では最も広い床面積をもち、推定31.0㎡を測る。遺構検出面から床面までの深さは残りの良い丘陵側で、約40㎝である。住居内からは新旧の柱穴およびそれに類似するいくつかの柱穴状の土壙が検出されたが、主柱はＰ１～６、あるいはＰ１～６'の６個の柱穴によって構成されると考えられる。各柱穴間の距離はいずれも2.2ｍ前後を測る。床面の周囲には壁に沿って壁体溝が巡るが、住居の北側は斜面のため埋土が流出し、壁は遺存しない。床面の中央には径100×70㎝、深さ35を測る中央穴が位置する。埋土は４層に分層され、いずれの層にも炭粒が混入していた。

遺物は覆土中から土器片７～９、管玉Ｇ１、砥石Ｓ１・２などが、Ｐ５から砥石Ｓ３が出土してい

る。甕**7**は橙色を呈す。口縁部は緩く外反し、端部は上下に肥厚する。外面は横ナデ、内面はナデ仕上げされている。甕**8**は橙色を呈し、内外面に指頭圧ならびにナデ痕跡が認められる底部である。高杯**9**は赤褐色を呈し、胎土に１㎜前後の砂粒を含む。口縁端部は水平方向に引き出され、上部に面をもつものである。**G１**は表面が凹凸、白く濁った緑青色を呈す破片で、現存長１㎝、最大径4.65㎜、孔径２㎜、重量0.35ｇをはかる。**S１～３**は粘板岩系の礫で、**S１**が使用により４面とも隅まで研ぎ込まれた状態を示すのに対して、**S２・３**は角が丸く自然石の様相を呈すものの、各面において細かな擦痕が認められることから砥石として扱った。

以上、当住居は出土遺物の特徴から、後期前半には廃絶したものと考えられる。　　（石田）

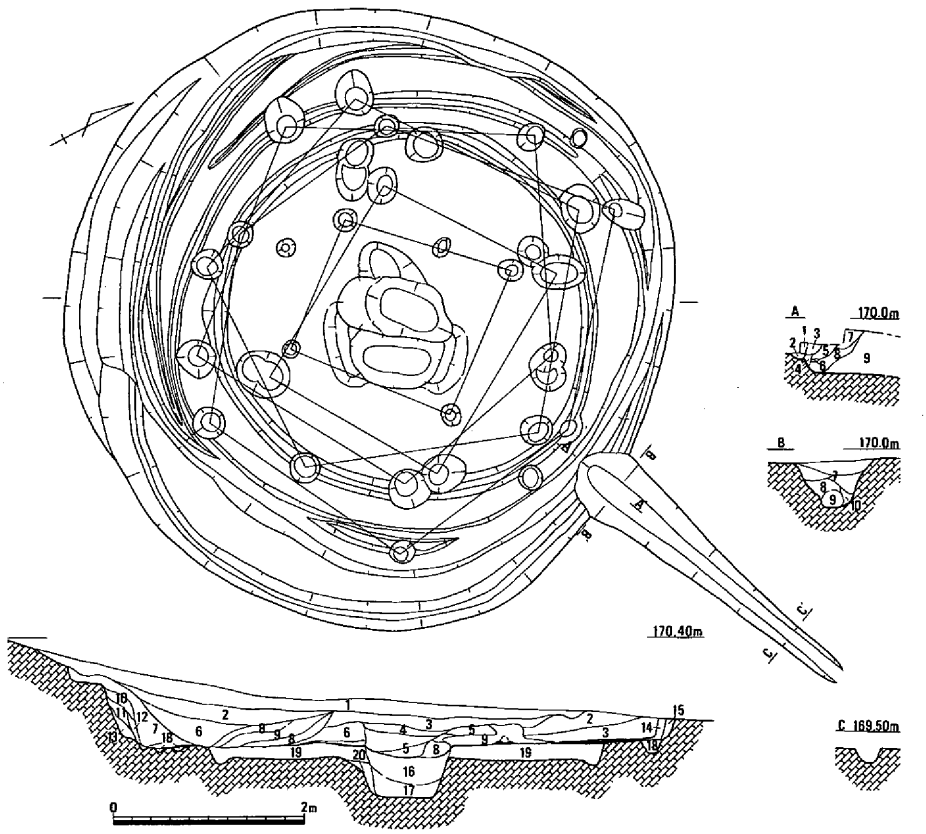


第５図　竪穴住居３（１/80）・出土遺物（１/４・２/３・１/３）

竪穴住居４（第６～８図、巻頭図版１、図版５・６・９）

北調査区の北東部から検出されたもので、４回の建て替えがなされ、最終的には焼失し廃絶した住居である。以下、最終面のＡから順次遡って説明を加える。

最終の住居４Ａの状況は第７図に示すように火災による廃絶であった。径5.8ｍの不整円形を呈す竪穴の壁の周囲は焼けており、特に東部から北部、南部は壁面が厚さ２cm余りにわたって赤色に変化していた。床面にはおびただしい炭・灰に混じって炭化材・焼土塊などが検出され、住居北西部ならびに北東部から出土した礫は、いずれも一辺約35cm、厚さ10cm余りの調理台として利用されたものと思われるが、被熱により割れ、弾けていた。また、炭化木は径20cm余りの丸太材も確認されたが、半裁した板材と観察されるものが多く、特に、住居の西～南部にかけての壁際から検出された材は、幅10cm前後、長さは10～30cmを測り、壁に沿って列べられていた可能性も考えられるが、現状では壁からやや離れ、ずり落ちた状況であった。一方、住居北東部などから放射状に検出された材は、垂木として利用されたものと考えられる。なお、主柱と想定される材は明らかではないが、付載で明らかに



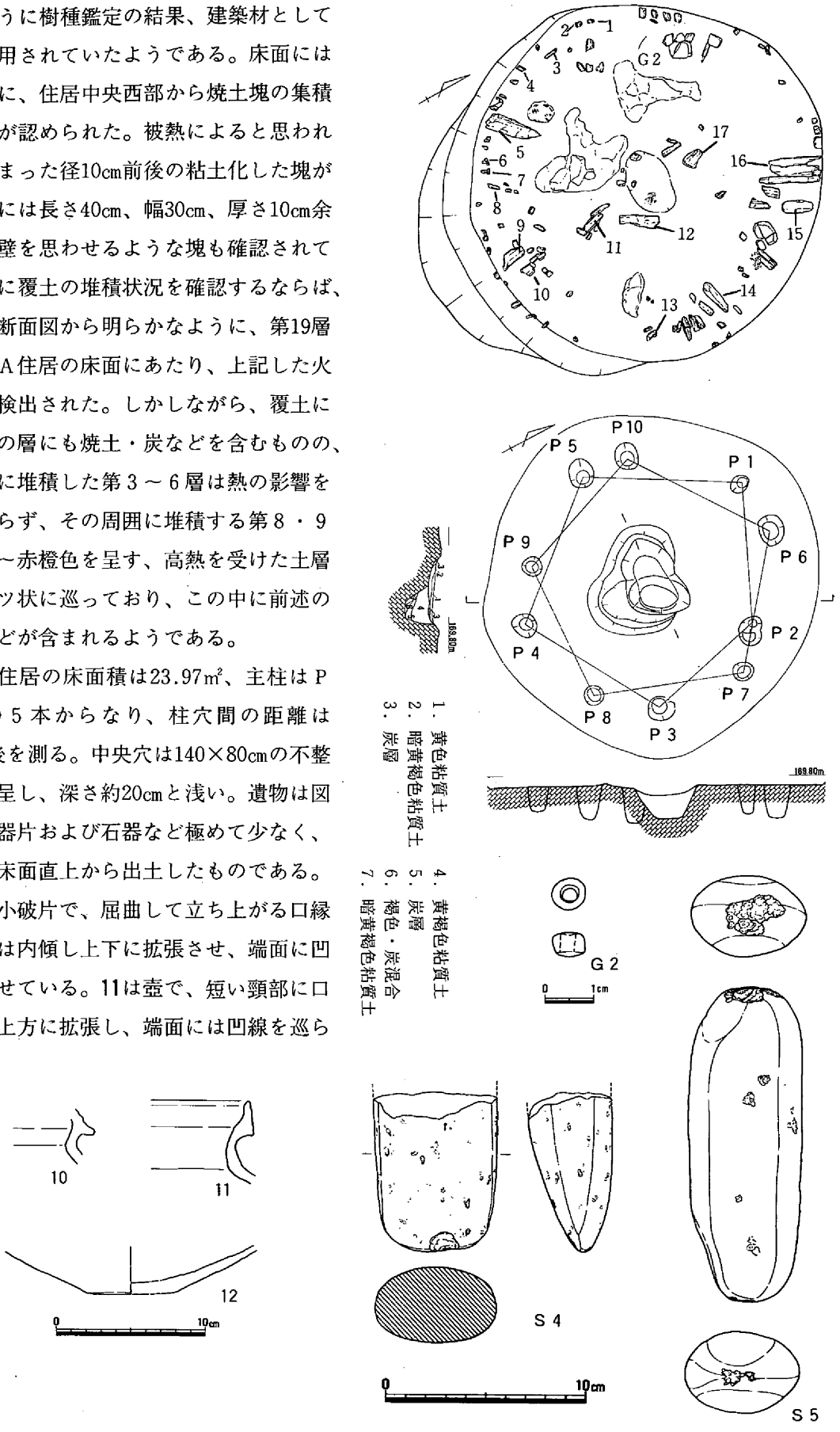
1．暗赤色焼土
2．暗灰色土
3．暗灰褐色土
4．暗赤褐色土
5．白黄色礫塊
6．焼土・炭
7．淡黄褐色土
8．黄褐色土
9．暗灰色土
（軟らかい）
10．黄褐色粘質土

1．暗茶灰色粘質土
2．暗黄灰色粘質土
3．黄灰色粘質土
4．黄灰色粘質土
（焼土粒・炭粒含）
5．黄褐色粘質土
（炭・灰混入）
6．黄褐色粘質土
（地山土混入）
7．黄褐色粘質土
（炭・灰混入）
8．赤紫色焼土
9．赤橙色焼土
10．暗黄茶色粘質土
（炭・灰含）
11．黄褐色粘質土
（地山土混入）
12．暗黄茶色粘質土
（炭・灰・焼土含）
13．茶灰色粘質土
14．暗茶灰色粘質土
（炭混入）
15．暗黄灰色粘質土
16．黄褐色粘質土
17．炭層
18．暗黄灰色粘質土
19．暗茶灰色粘質土
（炭混入）
20．暗灰色黄色粘質土

第６図　竪穴住居４（１/80）

されたように樹種鑑定の結果、建築材としてクリが多用されていたようである。床面にはこのほかに、住居中央西部から焼土塊の集積した状況が認められた。被熱によると思われる固く締まった径10cm前後の粘土化した塊が多く、中には長さ40cm、幅30cm、厚さ10cm余りの、炉壁を思わせるような塊も確認されている。次に覆土の堆積状況を確認するならば、第６図の断面図から明らかなように、第19層上面が４Ａ住居の床面にあたり、上記した火災状況が検出された。しかしながら、覆土にはいずれの層にも焼土・炭などを含むものの、住居中央に堆積した第３～６層は熱の影響を受けておらず、その周囲に堆積する第８・９層の黄橙～赤橙色を呈す、高熱を受けた土層がドーナツ状に巡っており、この中に前述の焼土塊などが含まれるようである。

一方、住居の床面積は23.97㎡、主柱はＰ１～５の５本からなり、柱穴間の距離は2.5m前後を測る。中央穴は140×80cmの不整楕円形を呈し、深さ約20cmと浅い。遺物は図示した土器片および石器など極めて少なく、いずれも床面直上から出土したものである。**10**は甕の小破片で、屈曲して立ち上がる口縁に、端部は内傾し上下に拡張させ、端面に凹線を巡らせている。**11**は壺で、短い頸部に口縁端部は上方に拡張し、端面には凹線を巡ら



第７図　竪穴住居４Ａ（１/100）・出土遺物（１/４・２/３・１/３）

せている。12は壺あるいは鉢の底部である。ガラス小玉Ｇ２は深緑色を呈し、最大径7.15㎜、長さ5.15㎜、孔径3.3～3.5㎜、重量0.29ｇをはかる。石斧Ｓ４はヒン岩製、Ｓ５は上下に敲打痕跡が顕著である。

なお、上記４Ａ住居はＰ６～10の主柱からなる住居からの建て替えがなされたもので、柱穴の在り方から４Ａ以前の住居はそれとほぼ同様の床面積をもつものと考えられる。また、中央穴は120×80㎝、深さ約60㎝を測り、中央穴からその西側にかけて、高さ５㎝、幅20㎝余りの土手を伴う中央施設が検出されている。

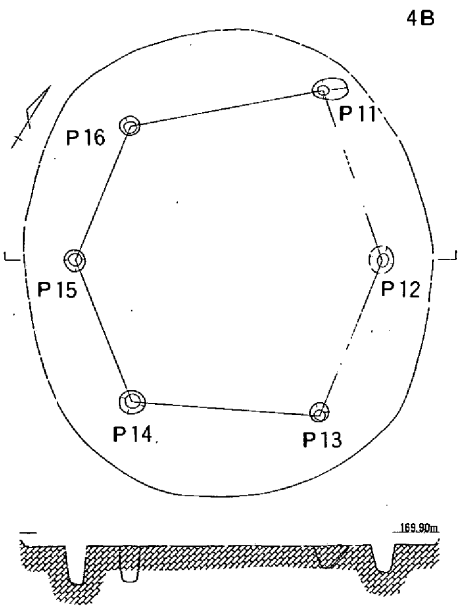
４Ｂ・４Ｃは４Ａから若干高い位置に床面が存在したものと推定され、壁体溝および柱穴から住居を復元した。４Ｂは４Ａに比べやや南に拡張した、平面楕円形を呈す。床面積は26.2㎡と広く、主柱もＰ11～16の６本からなり、柱穴間の距離は２～2.5ｍを測る。なお、中央穴は不明である。

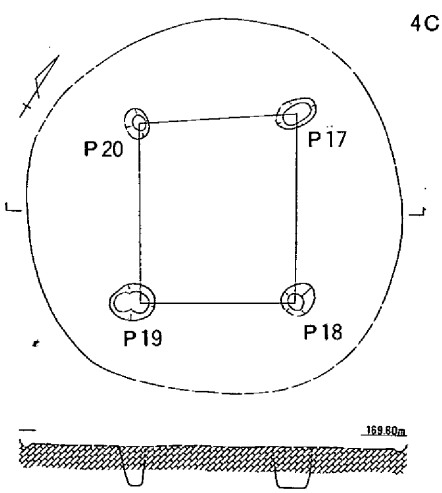
４Ｃは４本の主柱からなり、平面形態は不整円形を呈す。柱穴間の距離は南北方向2.5ｍ、東西方向２ｍ、床面積は19.3㎡を測る。

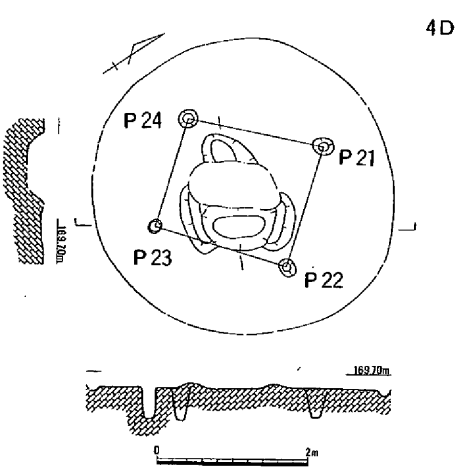
４Ｄは４Ｃと同様に４本からなるが、平面不整円形を呈す小規模な住居で、柱穴間の距離は２ｍと1.5ｍと短く、床面積も12.3㎡と狭い。中央穴は４Ａのそれによって一部削平されているが、西側に中央穴、東側に浅い凹地状の土壙、そして、東側には南北に低い土手が巡っていた。

なお、当住居には排水溝と呼称される溝が住居から東斜面にかけて検出されている。いずれの住居に伴うものかは明らかではないが、住居壁付近からはじまる溝は底部が住居床面より20～30㎝低く、斜面に沿って下がっている。また、Ｂ断面の第９層が円形を呈すことから管状のものが埋め込まれていた可能性を推定させたが、Ａ断面では明瞭に捉えることは出来なかった。

以上、当住居は２度の拡張と１度の縮小の後、最終床面に残された僅かながらの土器の特徴から、後期前半には火災にあって廃絶したものと判断される。



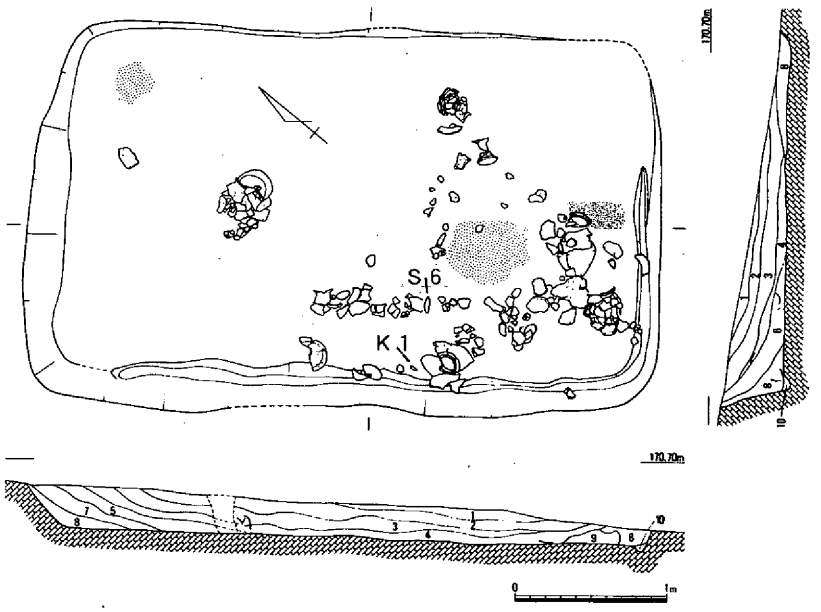




第８図　竪穴住居４Ｂ～Ｄ（１/100）

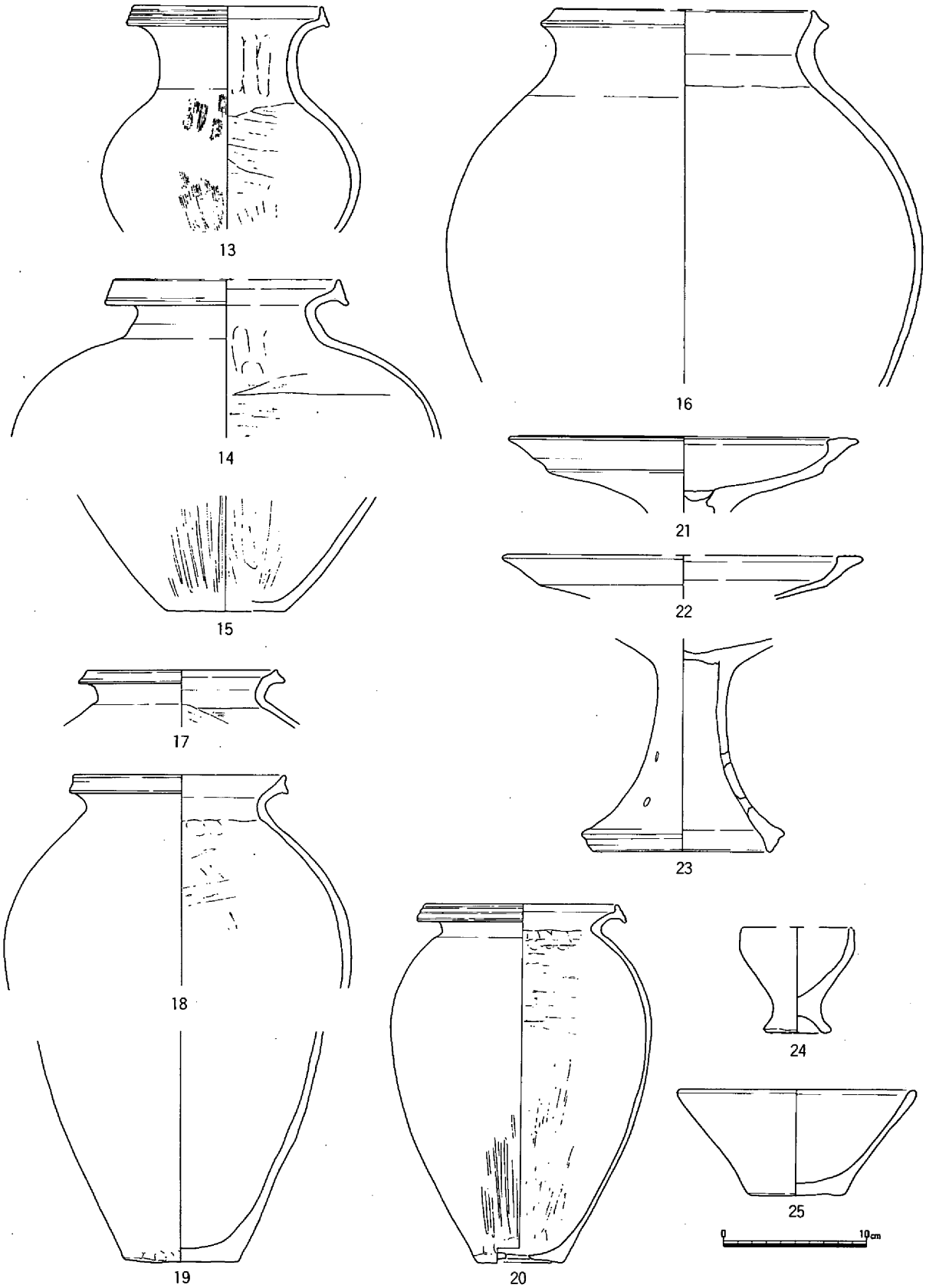
竪穴住居５（第９・10図、図版６・９）

北調査区の東斜面、竪穴住居４の南東に位置し、検出された住居の内、最も小規模なものである。平面形態は長方形を呈し、標高に沿って長辺を向け、規模は4.2×2.5ｍ、床面積は8.85㎡を測る。検出面から床面までの深さは残りの良い西側で約40cmを測る。住居中央北部から径25cmを測る柱穴状の土壙が検出されたが、深さは約15cmと非常に浅く、他に、これに類する穴も確認されなかったため、当住居には主柱は無かったものと推定している。また、住居北東隅および中央南部には焼土面が検出されており、後者の中央部は上面から厚さ３cm余りの被熱部分が認められた。覆土は自然堆積の状況を示していたが、遺物は床面から拳大の礫とともに土器が出土した。土器は劣化が著しく残存度は低いものの、本来完形の土器が横転し、押し潰された状態で出土したものと推定される。特に南西部では列をなすように検出され、また、これらの土器に混じって石製品**Ｓ６**、鉄製品**Ｋ１**などが、南部からは粘土塊が出土している。**Ｓ６**は磨製石包丁状の製品で最大幅10.5cm、最大高3.2cm、厚さ７㎜、重さ33.3ｇをはかる。細粒砂岩製で、下辺に沿って刃を研ぎ出している。**Ｋ１**は鉇の先端部にあたり、刃の一部および基部が欠損している。現存長4.5cm、幅1.3cm、厚さ２㎜、重さ6.73ｇをはかる。出土した土器類は壺**13～16**、甕**17～20**、高杯**21～23**、鉢**24・25**などである。**13**はやや小ぶりで、直立する頸部に口縁部は緩やかに外反し、端部は内傾気味に立ち上がる。端面には３条の凹線が巡らされている。



1．淡黄褐色土　　5．淡黄褐色土　　9．灰白色粘土
2．淡灰黄褐色土　6．淡灰黄褐色土　10．暗黄褐色土
3．淡黄褐色土　　7．淡黄褐色土
4．淡灰黄褐色土　8．暗黄褐色土

第９図　竪穴住居５（１/50）・出土遺物①（１/３・１/２）



第10図　竪穴住居５出土遺物②（１/４）

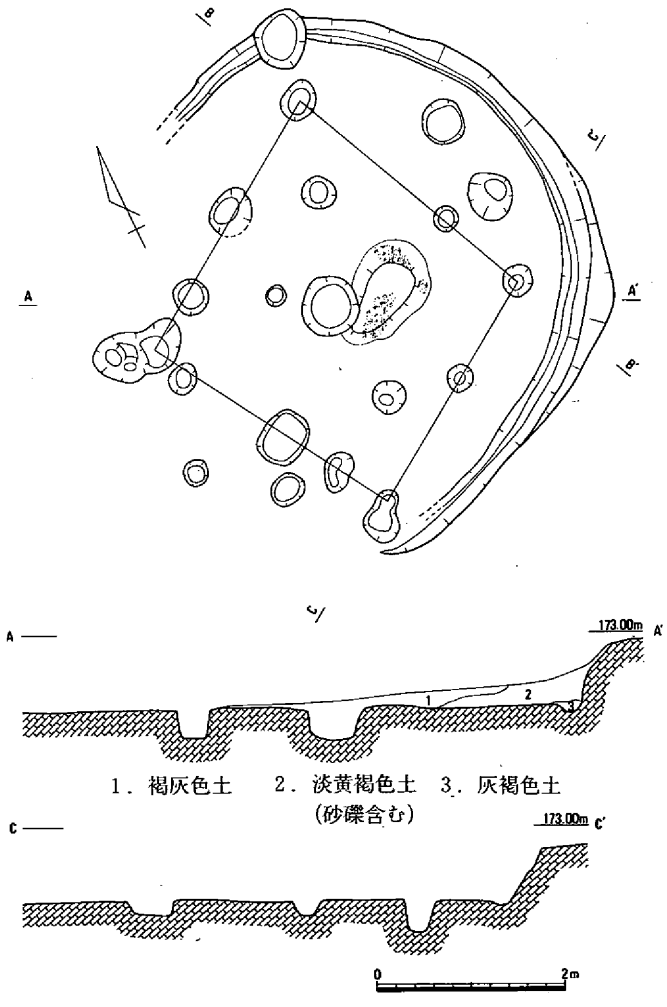
胴部外面はハケ調整されている。頸部内面には絞り目痕跡が残り、胴部内面は荒いヘラケズリをしている。明赤褐色を呈し、口縁端から頸部にかけて一部煤が付着している。**14**は**15**と同一個体と考えられるもので、橙色を呈す。屈曲して開く口縁に、端部は内傾しながら上下に引き出されている。頸部は「ハ」の字状に短く開き、張りのある肩部をもつ。器表面剝離のため調整は明瞭ではないが、胴部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリしている。**16**は黄橙色を呈す、大型で形態的には甕に類するものである。斜め外方に短く開く口縁に、端部は強いヨコナデにより凹部を形成する。器表面の剝離が著しく、調整不明である。**17・18**においても**16**と同様に口縁端部には凹部が形成されている。**20**は屈曲して鋭く外反する口縁に、端部は内傾して立ち上がり、上下に引き出されている。端面には３条の凹線が施されている。胴部は倒卵形を呈し、直線的に下半へ向かい上げ底気味の底部に至る。底部は穿孔され、甑として利用されたものと思われるが、外面には口縁部から底部付近にまで煤の付着が認められた。胴部外面はヘラミガキ、底部は指頭による調整痕が認められ、内面はヘラケズリされている。**21・22**はいずれも口縁端部が水平方向に引き出され、端面には剝離して不明瞭ながら数条の凹線が施されている。**23**の脚下半には２段に穿たれた円孔が３か所にあけられている。端部は肥厚し、２条の凹線が施されている。**25**は小型の鉢で口縁は斜め外方に直線的に延び、端部は丸い。

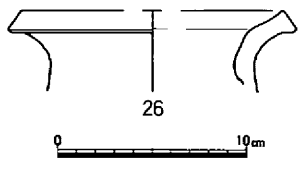
以上、当住居は土器の特徴から後期前半に埋没したものと考えられる。

竪穴住居６（第11図、図版６）

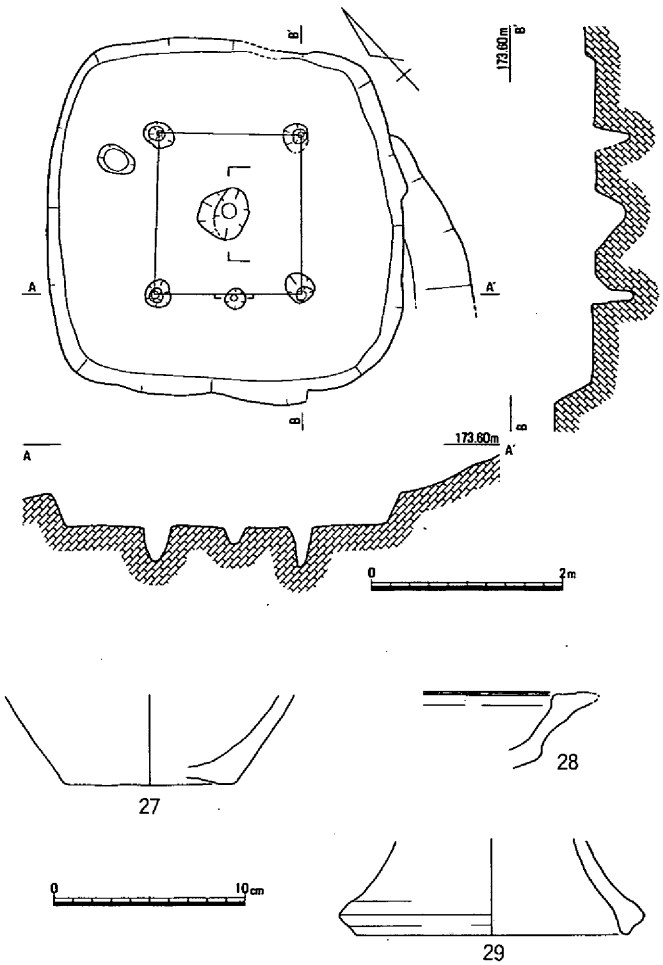
南調査区の西部から検出された、平面形態が不整円形を呈す住居である。残りの良い丘陵側にあたる東部は壁体溝が巡るが、西半は斜面のため削平されている。推定床面積21.54㎡を測る。床面からは柱穴と思われる穴が多数検出されたが、主柱はやや壁体溝に近く、柱穴間の距離も３ｍ前後と長いものの、図示した４本からなると考える。中央穴は径60㎝、深さ30㎝を測る。その東部には炭を多く残す、85×45㎝深さ数㎝の浅い凹地状を呈す中央施設が検出されている。

遺物は僅かながら土器細片が出土している。**26**は橙色を呈す壺の口縁部片で、端部が僅かに肥厚している。

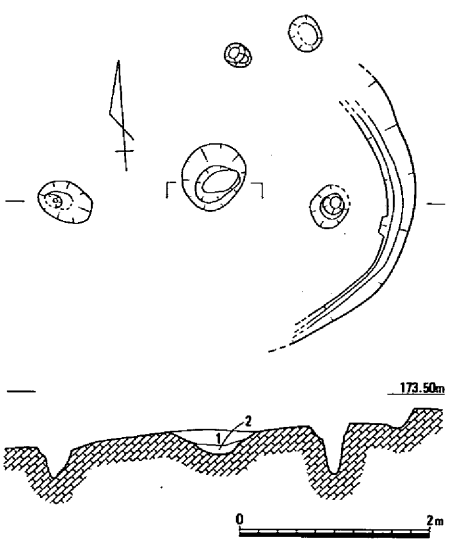




第11図　竪穴住居６（１/80）・出土遺物（１/４）



第12図　竪穴住居７（１/80）・出土遺物（１/４）



１．淡黄褐色土　２．暗黄褐色土

第13図　竪穴住居８（１/80）

以上、土器の特徴は後期前半を示し、この期に廃絶したものと思われる。

竪穴住居７（第12図、図版７）

竪穴住居６の東から検出された、平面形態隅丸方形の住居である。住居の規模は3.8ｍ四方の10.78㎡と小規模で、主柱は４本からなる。柱穴間の距離は長辺1.7ｍ、短辺1.5ｍを測る。中央穴は径約60㎝、深さ30㎝を測り、埋土は炭を多く含むものであった。なお、当住居から壁体溝は検出されなかった。

遺物は僅かに図示し得た壺底部**27**および高杯**28**・**29**などである。高杯**28**の特徴に顕著なように、当住居は後期前半には廃絶したものと考えられる。

竪穴住居８（第13図）

竪穴住居６の南東から検出された。丘陵側に残る壁体溝および柱穴から平面形態は楕円形を呈するものと推定される。主柱は２本でその距離は３ｍを測る。中央穴は径約60㎝、深さ約30㎝を測る。遺物は皆無であったが、当住居は他の検出遺構の状況から、後期後半に属すものと考える。

土壙

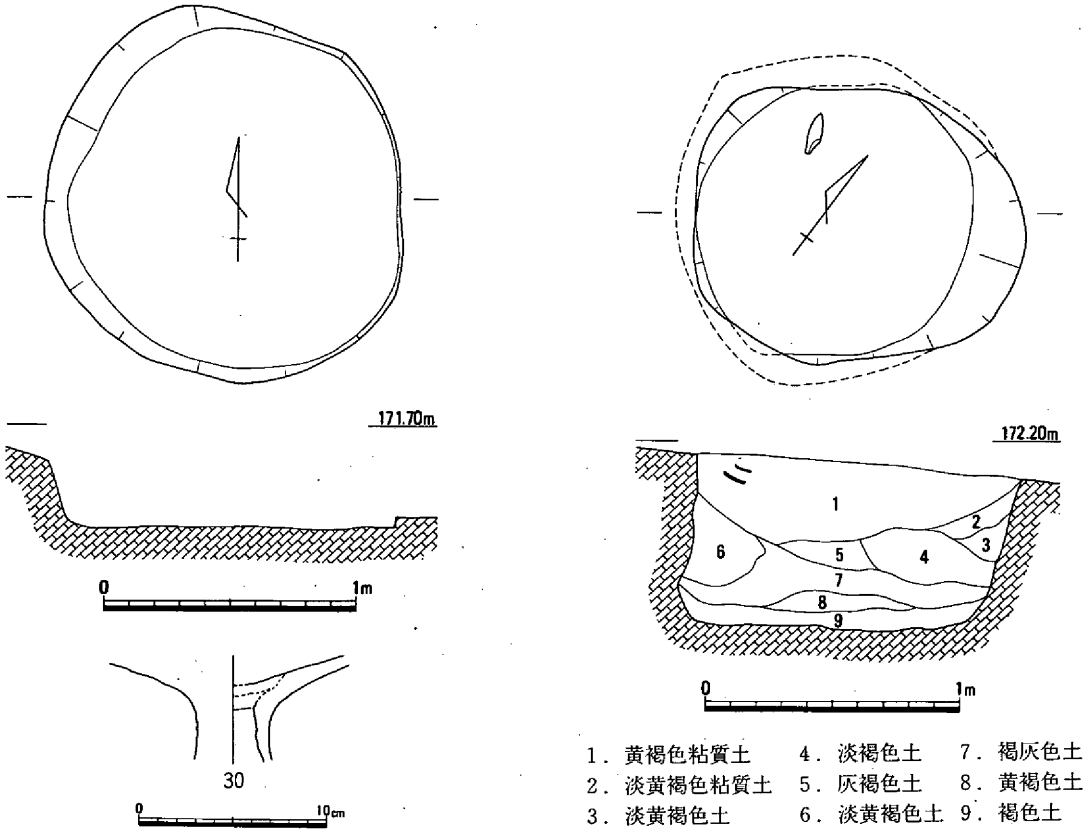
土壙１（第14図、図版７）

北調査区の南東、竪穴住居５の南西から検出された、平面が不整円形の土壙である。規模は径約140㎝、深さ約20㎝、底部面積1.38㎡を測る。壁は急で、底部は平坦なことから、袋状土壙の可能性もある。埋土は暗黄褐色土で遺物は高杯**30**のみであった。

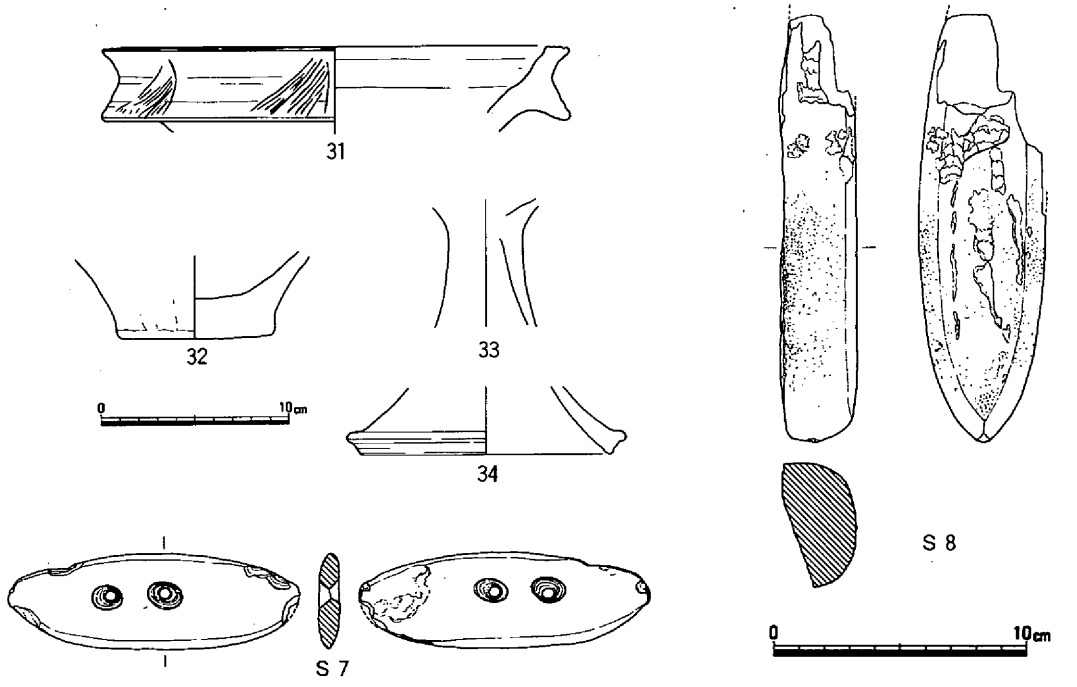
土壙２（第15図、図版７）

南調査区の北東から検出された袋状土壙である。平面は不整円形を呈し、検出面径は130×110㎝、深さ約70㎝を測る。東部壁は既に崩落してしまっていたが、西部壁は下半部に僅かながら掘り込まれた部分が残っていた。底部はほぼ水平で、0.93㎡の平坦面をもつ。遺物は主に第１層から出土したが、磨製石斧**Ｓ８**は底部から出土している。**31**は器台片と思われるもので、

器壁は厚く口縁拡張部には稚拙な鋸歯文が描かれている。32は壺の底部と思われる。Ｓ７・Ｓ８はいずれも片岩製で、Ｓ８は敲石として再利用されたものである。蛤刃に似るが、側辺は刃部に向かって広がらず真っ直ぐに延びている。Ｓ７は55.7ｇ、Ｓ８は393.3ｇを量る。以上、当土壙は後期前半に埋没したものと考えられる。　（江見）



第14図　土壙１（１/30）・出土遺物（１/４）



第15図　土壙２（１/30）・出土遺物（１/４・１/３）

第２節　古代以降の遺構と遺物

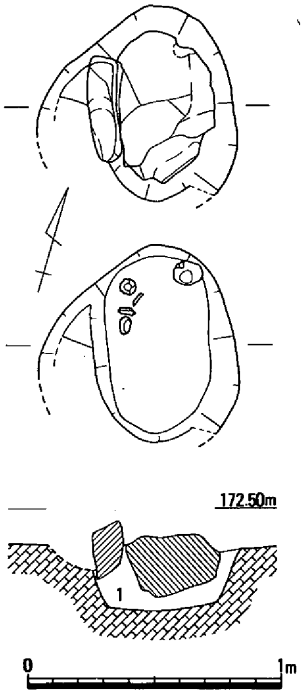
土壙

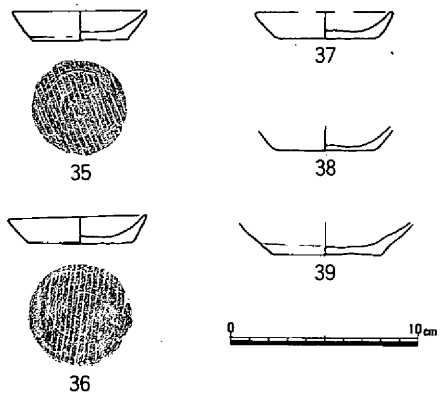
土壙３（第16図、図版８・９）

南調査区の北西の丘陵尾根上にから検出された、平面形態楕円形を呈す土壙である。規模は80×60cm、深さ約20cmを測る。埋土は淡黄褐色粘質土で、土壙全面を覆うように大小２つの石が埋まった状態で検出された。遺物は北部壁際の土壙底から土師質小皿５枚が出土している。**35～37**はいずれも底部に板目痕跡が残るもので、口径約７cm、器高1.6cmを測る。**39**はやや大きく、底部径は約６cmを測る。いずれも水漉粘土が使用されている。以上、出土遺物から土壙の時期は中世と考えられる。（石田）

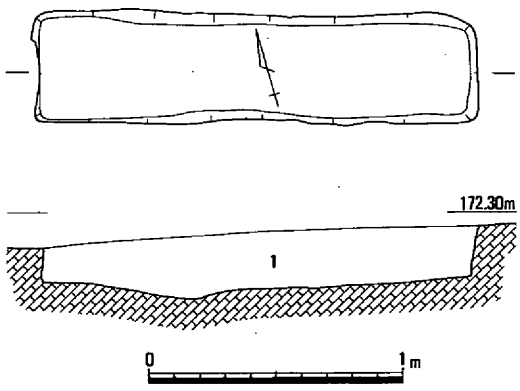
土壙４（第17図、図版８）

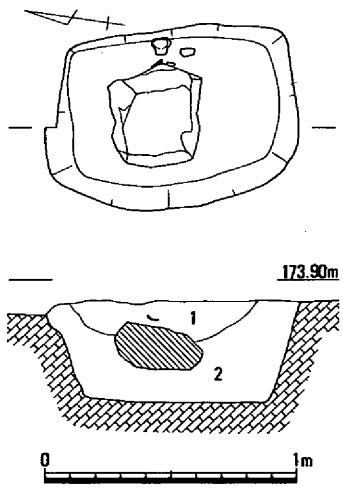
土壙３の南から検出された平面形態長方形を呈す土壙である。主軸は東西方向を向き、規模は170×40cm、深さ25cmを測る。土壙壁は急で、底部は一部窪むものの、





第16図　土壙３（１/30）・出土遺物（１/４）





第17図　土壙４（左）（１/30）・土壙５（右）（１/30）

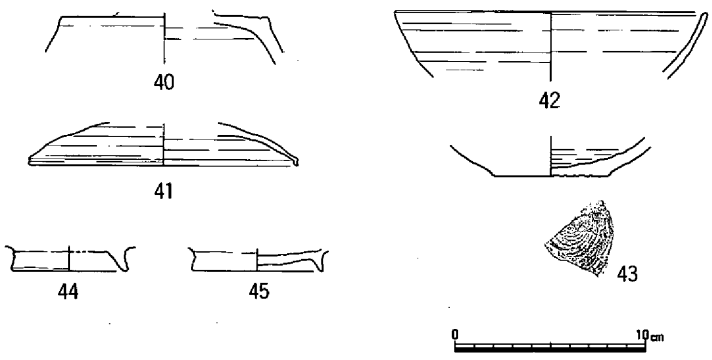
総じて平坦であった。埋土は暗灰色および褐色粘質土の混合層であったが、遺物は皆無であった。

土壙５（第17図、図版８）

南調査区の南東から検出された平面形態長方形を呈す土壙である。規模は100×70cm、深さ40cmを測る。土壙壁はやや斜めに掘り込まれ、断面は逆台形状を呈す。土壙中央からは一辺約35cm、厚さ約20cmの石が落ち込んでおり、これを境に埋土は２層に判別された。遺物は上層の淡黄褐色土から土師質小皿数枚が出土おり、下層の黄褐色土からは皆無であった。劣化が著しく図示し得なかったが、土壙４同様の中世のものである。

遺構に伴わない遺物

当丘陵からは僅かながら以下の土器が出土している。**40**は灰白色を呈す器種不明の須恵器で、上下位置も不明であるが、上部は平坦面をなし、中央に突出する部分がある。**41**は灰色を呈す杯蓋で、**42・43**は勝田焼の椀と思われる。**44・45**は高台付の土師器椀である。



第18図　遺構に伴わない遺物（１/４）

第３節　まとめ

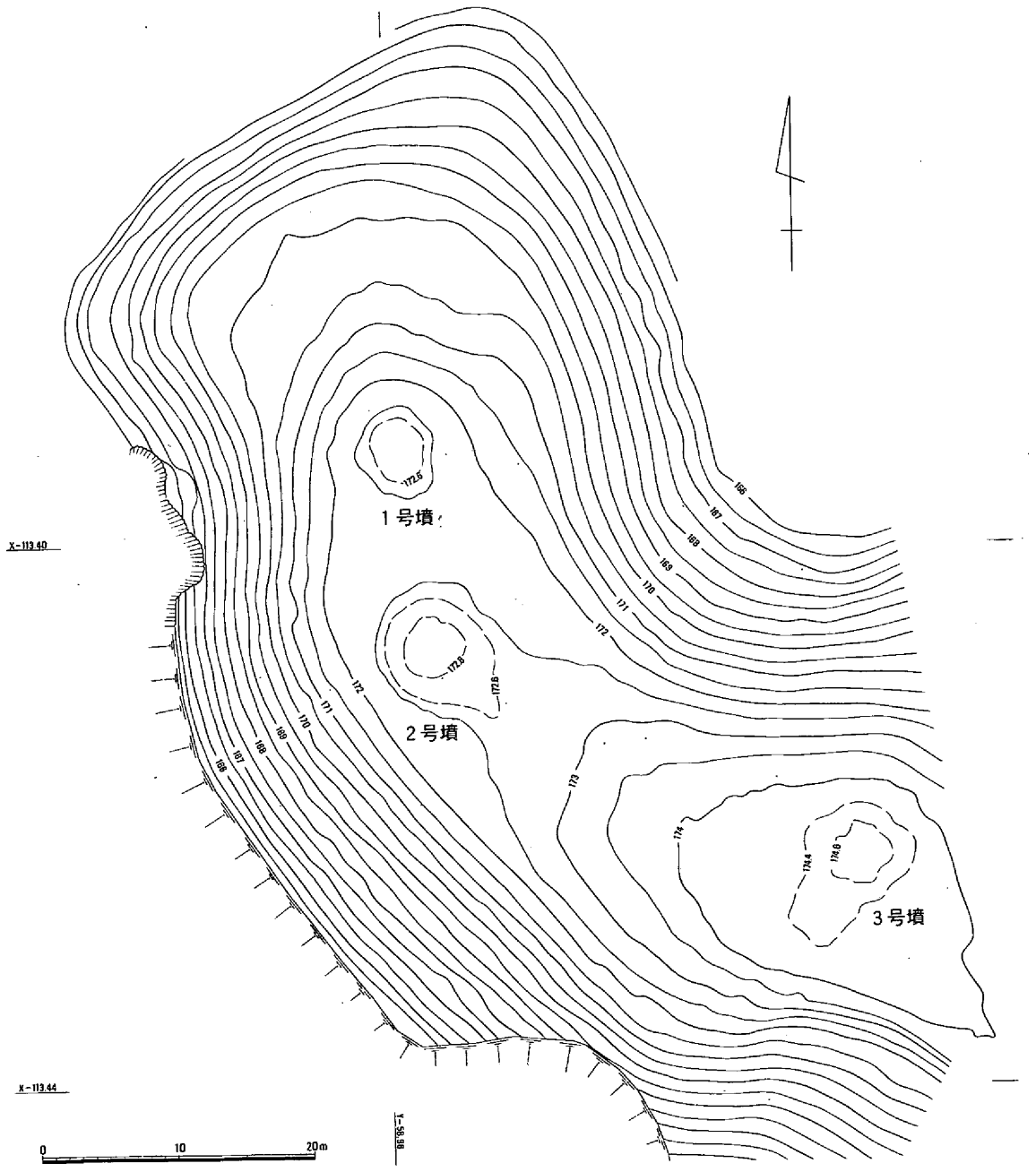
大木遺跡は弥生時代後期前半を中心とした集落跡であり、中世の土壙も数基ながら所在することが明らかとなった。住居の在り方として、北調査区から検出された住居は丘陵先端を囲むように建てられていたのに対し、南調査区からのそれは丘陵尾根上に建てられていた。また、住居形態は検出された８軒の内、円形５軒、長方形２軒、方形１軒であった。

中でも竪穴住居４は４度の建て替えがなされ、床面積は12.3㎡→19.3㎡→26.2㎡と拡張し、最終的には23.97㎡とやや縮小していたことが明らかとなった。また、炭化材の樹種分析から、建築材にクリが多用されていたことが判明するとともに、床面中央に集積していた大小の粘土塊は、火災に伴いいち早く天井部から落下してきたものと思われ、壁状の施設の所在を示唆させた。

一方、逃げ出す間もないほどの状況が想像される上記火災住居においてすら遺物はほとんど出土しなかったのに対し、竪穴住居５の在り方は異常であった。床面中央南寄りに火処が設置されているだけで柱は無く、簡易な施設と理解するが、遺物の出土状況と以後の堆積状況からすれば、土器類は放棄されたものと考えられ、僅か９㎡足らずの竪穴は一般の住居ではなく、意識的に遺物の残さざるを得ない施設であったものと考えられ、類似例から施設の検討を加える必要があろう。　（江見）

第５章　大木古墳群

大木古墳群は上房郡北房町地内宮地に所在する、小円墳３基からなる古墳群である。古墳群は南の有漢町との行政界となっている標高464ｍを測るいるか台地から、ほぼ北方へ派生して延び出た枝尾根の最北端頂部に位置する。そこは、全体として痩せ尾根の形状を呈しながらも標高172ｍラインをもって、幅20ｍばかりの平坦な自然地形が形成され、その尾根筋中央部に近接して３基の低い盛土を伴う円墳が営まれていた。以下、北端の１号墳から順次概略を記したい。



第１図　地形測量図（１／500）

第１節　大木１号墳

墳丘と周堀（第２図、図版10～12）

丘陵北端に位置する１号墳は、径約９ｍを測る小規模な円墳である。比高の高まる古墳南端の山際においては自然地形の丘尾を切断して弧状に整形した周堀が明瞭に残され、周堀内は淡黄褐色土によって充塡されていたが、墳丘の東西および北側では周堀の痕跡を検出することは全くできず、一周していた可能性は低いものと考えられる。南西部から検出された周堀の幅は肩口で2.5ｍ、底部で1.4ｍを計測できたものの、深さは30cmばかりを留めるにすぎなかった。とはいえ、辛うじて残存するこの周堀内の西寄りにおいて、鉄鉾１と、やや東寄りでまとまって土師器片数点を検出できたことは特記される。鉄鉾の出土地点は、後に詳述する墳丘中央の埋葬施設から南西約８ｍを隔てた墳丘裾部、換言すれば周堀の肩口にあたる。その出土状態は、墳丘裾に突き立てられていたかどうか不明ながらも、周堀の傾斜面にあたかも添うかのように、身の先端を下方に向けた状態であった。一方、僅かながら周堀底で検出された土師器一括資料とを合わせ考えると、これらは埋葬施設にかかる葬送儀礼と不可分な、墳裾での祭式の一端を示すものと思われる。

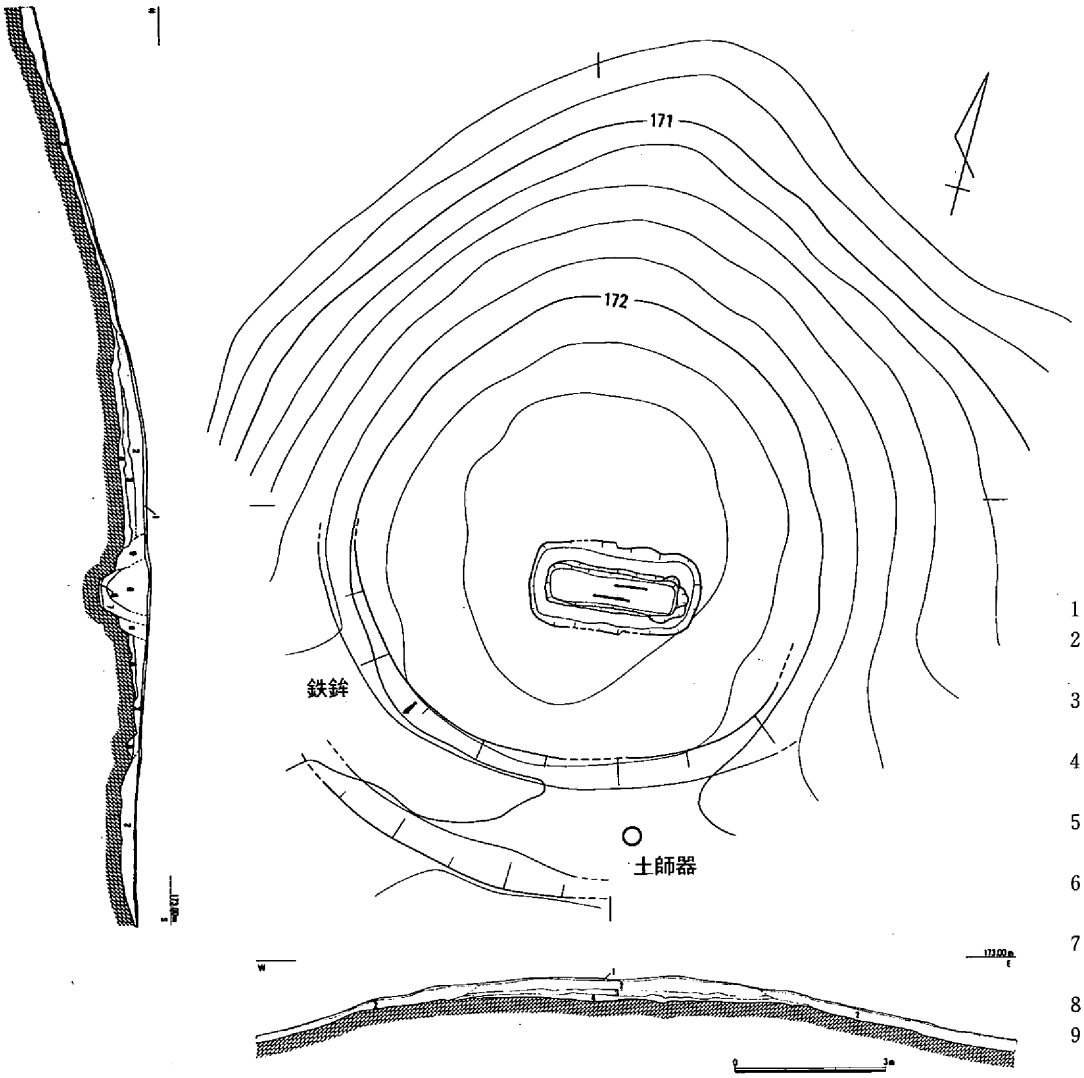
墳丘は、第４層の旧表土上に墳域を定め、盛土をおこなっていた。暗灰色を呈す第４層は、墳丘基部厚さ10～12cmを測り、その上には、北半に限って第３層の砂礫が混入する淡黄褐色土が10～15cmの厚さに積まれていた。もともと地形の高かった南半からは確認されなかった層で、築成途中の段階で墳丘高を考慮し、均衡化を図った結果が反映されているのかもしれない。そして、その上部には全面にわたって礫の少ない淡黄褐色土を盛り上げて仕上げる。その厚さは南で８～20cm、北で20～30cmを測り、いずれも地表面から３～５cm程は腐食して現表土と化している。封土の最も厚い墳丘中央付近で盛土高40cm前後と決して50cmを超えるところはなく、相対的に低盛土の墳丘構造といえる。墳丘基部における東西長は7.2ｍ、南北長が8.8ｍと南北方向にやや長く計測されたが、外見上は正円形にちかい形状ではなかったかと思われる。

内部構造（第３図）

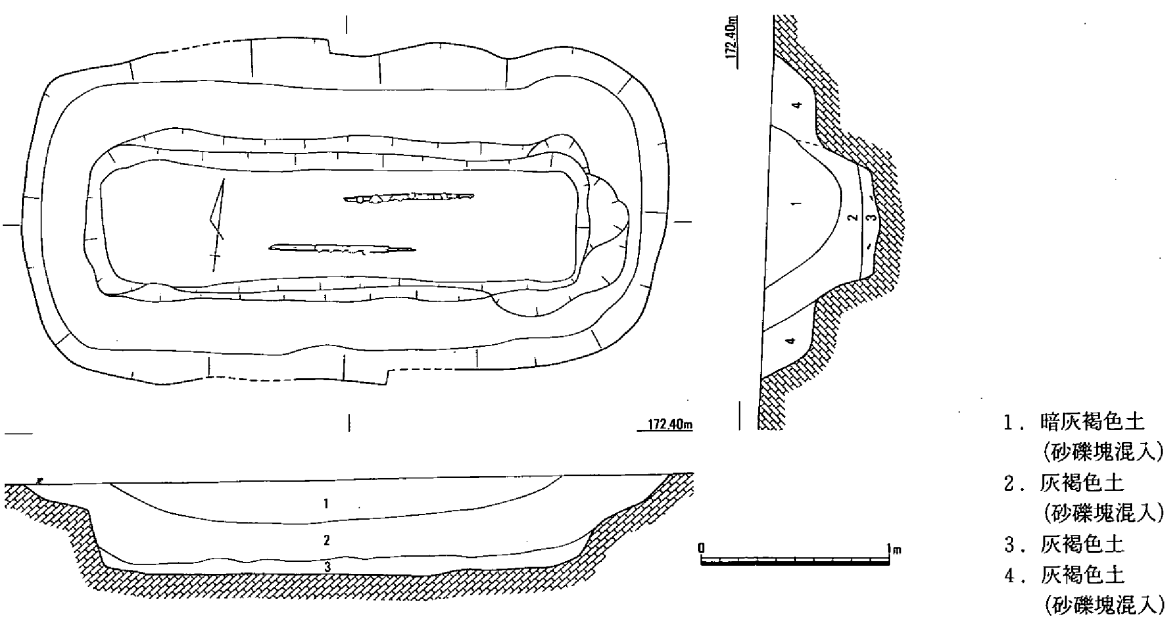
埋葬施設としては、墳丘のほぼ中央やや南寄りから二段堀の土壙墓状の主体部が一基のみ検出された。長辺はほぼ東西を、短辺は南北を指す。

墓壙上部の平面形状は隅丸長方形を呈し、肩口での東西長3.35ｍ、南北幅1.7ｍを測る。墓壙は四面とも、やや内傾ぎみに20数cmばかり掘り込まれ、そこに幅20～30cmほどの緩やかなテラスが設けられる。墓壙下部の掘り込みはこのテラスから始まり、一段低い下部の形状もまた隅丸長方形で肩口東西長2.6ｍ、幅84～90cmの計測値が得られる。その底部はさらに32cm下において確認でき、長さは2.46ｍあるのに対して、幅は西端で56cm、東端において58cmを測り、ほとんど広狭の差は認められない。床面は中軸線に沿ってわずかに窪むとはいえ、割竹形木棺を安置する場合に整形されるような、顕著なＵ字形ではなく、どちらかといえばむしろ平坦にちかい。

遺物は、底部から僅かに浮いた状態で、２振の鉄刀を検出している。出土位置は土壙底面のほぼ中央で、いずれも土壙主軸線と平行して、切っ先を西に、刃部を内に向け埋納されていたが、鍔も鞘も、



第２図　大木１号墳（１／150）



第３図　埋葬施設（１／40）

あるいは包んだかもしれない布の圧痕も確認されず、単に刀身のみを副葬した蓋然性が高い。

一振りは土壙の南辺に沿うように、他の一振も北辺に沿って置かれ、両刀の間は22cmを隔てるにすぎない位置関係にあった。また、切っ先と茎との位置から見て被葬者は、頭位を確実に東枕となし、腰部の左右あたりにそれぞれ抜き身の太刀を配して伸展葬されていた、と予測してさしつかえないであろう。

なお、木棺の有無については、棺材またはそれらしい痕跡を看取するには至らず明確にはならなかった。しかしながら、遺体に沿って両横に置かれた太刀と土壙壁との間には、等しく10～20cmの間隙が見られたが、そこは7～9cm幅の棺材板であれば十分に入る空間部と推定される。このことと、底面はほぼ平坦で棺釘が未出土であることなどを考慮に入れると、組合式の箱形木棺のあった可能性が考えられる。このような想定が許されるとすれば、木棺の内法長は210×35cm程度に復元できようか。このことは第3図の断面図、とりわけ横断図面によくあらわれている。その第1層は暗灰褐色砂礫混入土で、棺蓋または天井板が腐朽したのち内部空間が狭まって、二次的に堆積した様相を示すにほかならないものと考える。

副葬品と出土遺物

太刀1（第4図、図版16）

棺内副葬品の一つと考えられる、南辺に沿って検出されたものである。残存長74.1cmの直刀で茎の端をわずかに欠損する。重さ367.36gを量る。造りはいわゆる平造りで、鋒幅5mmで鎬はなく、刃は両側から研ぎ出され、刃長62.4cm、最大刃幅は関のちかくにあって約3cmを測る。切っ先は外にカーブを描く小切っ先である。茎は片関造りで、その長さ11.6cmをとどめ、そこに径5mm大の目釘孔2個が穿たれていた。

太刀2（第4図、図版16）

これもまた、棺内副葬品と思われる。北辺に沿って見つかったもので全長67cmの計測値をもつ内反刀である。平造りで鎬はなく鋒幅6mm、刃幅2.5cmを測る。上記と同じ両刃造りで、切っ先も同様の小切っ先である。刃長は55.4cm。茎は片関造りで長さ11.4cm、重ね（厚み）は4mmを測る。目釘孔の径は5mmで2個穿たれていた。重さは244.21gを量る。なお、内反は製作時に生じたものと判断され、このような例は6世紀代の副葬品の中にも見られるようである。

鉄鉾1（第5図、図版16）

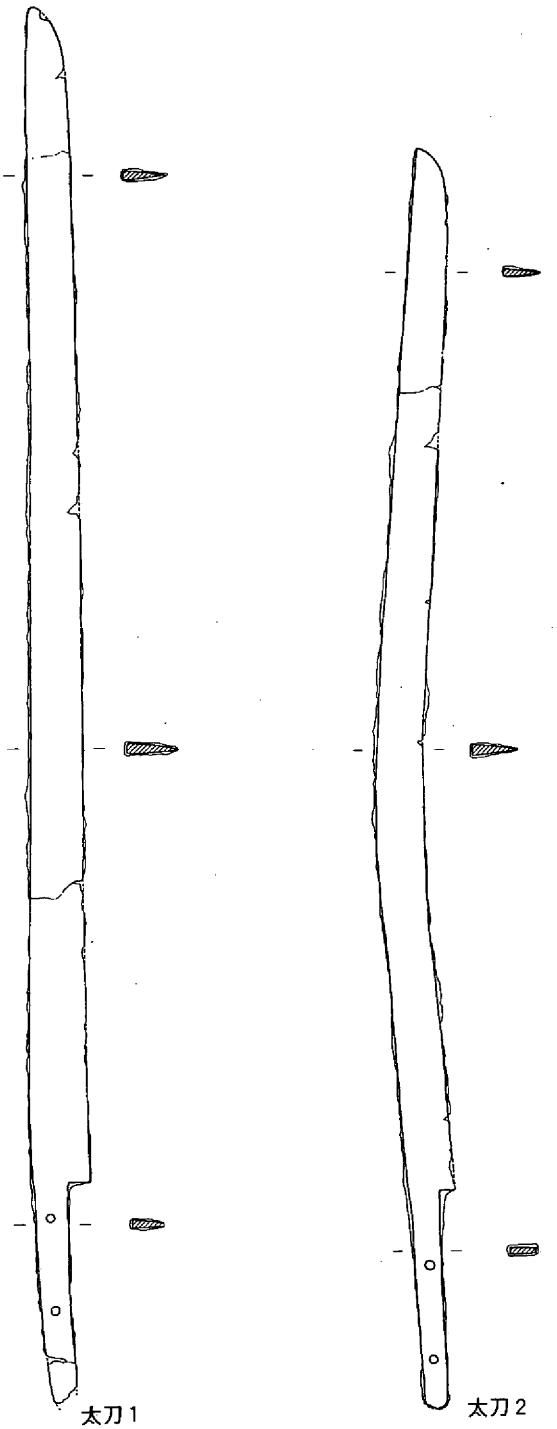
袋部に長い柄を挿入する式の典型的な鉄鉾である。ほぼ完形で現存長26.7cm、重さ153.62gを量る。身の断面は菱形を呈し、長さ13.3cm、袋部は円筒形を呈し、厚さ3mmで長さ11.7～13.3cmを測る。柄の入るべき中空の径は9～17mmを測る。袋部の基端は三角形状に切り込まれているが、一方を欠損している。基端ちかくに径5mmの目釘孔1個を残す。

なお、本例の身の断面形は菱形であるが、他に長方形、刀身形および三角形など4分類される中にあって、断面長方形の最古型式のものに次ぐのが菱形の部類だといわれている。この型式のものは、兵庫県亀山古墳例や熊本県船山古墳例などによって5世紀中葉ごろ盛んに使用されたと考えられていることから、本墳の築造年代を探る上で有力な資料が提供されたといえる。

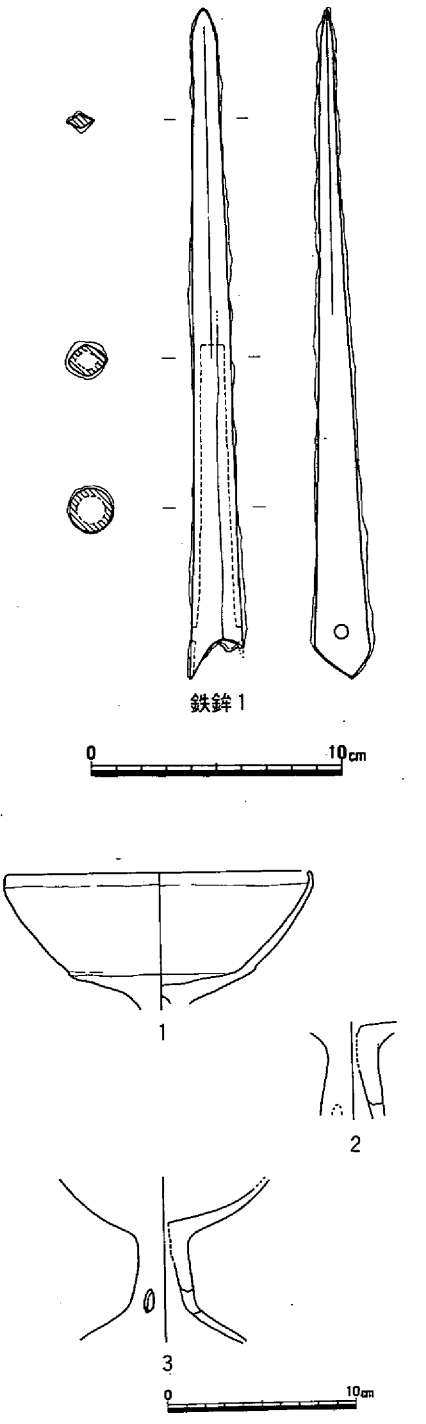
土師器高杯（第5図、図版16）

高杯はいずれも水漉粘土で作られた淡黄褐色を呈すもので、器表面は剝離が著しいものであった。

1は杯部のみ残存し、脚部以下を欠損する。口径16.1cm、器高7㎝を残す。杯底部から大きく外へ開いて立ち上がり、口唇部をやや内湾させ、端部は丸くおさめる。口縁部はヨコナデを施す。**2**は脚柱部で表面が剥離し調整不明瞭であるが、内側に絞り目を残す。また、下端に穿孔３個が看取できる。**3**は脚柱部から裾部まで残存するもので、杯部は椀状を呈す。脚部の穿孔は３か所に認められたが、穿孔は脚柱部下端に穿たれ、脚裾部にはおよんでいない。以上、土器の特徴から上記３点はいずれも５世紀中葉のものと考えられる。



第４図　埋葬施設出土太刀（１／４）



第５図　周堀および墳裾出土遺物
（１／４・１／３）

第２節　大木２号墳

墳丘と周堀（第６図、図版13・14）

２号墳は１号墳から南へ約７ｍを隔て造られている。標高およそ172ｍの等高線上に築かれ、１号墳との比高差はほとんどなく、僅かに20㎝高い位置にあたる。

墳形は径９ｍのほぼ正円形にちかい形状を呈す。封土はきわめて低く、最高所の中央付近においても高さ約30㎝を測る程度であった。墳丘下には古墳築造以前の層として第７層の暗黄灰色土や第８層の暗黄色土の窪地状に堆積した層が基盤層の直上に見られたが、古墳造成時の表土層（旧表土）としては、暗黄灰褐色土の第６層がそれにあたると考えられる。この第６層は古墳中央付近で厚さ約10㎝を測るが、周辺に向かって厚みを減じており、東西方向４ｍ、南北方向３ｍの古墳中央部の比較適せまい範囲に限られていた。また、この上部には淡黄褐色の礫混入土である第３層と、黄褐色土の第２層が盛土として積み上げられ、その厚さは古墳中央付近で約30㎝を測る。なお、主体部は旧表土の第６層を切って造られたことは明瞭であるが、掘込み位置が同様であったか、上層の第２・３層の位置まで上がるものかは判然とはしなかった。いずれにせよ墳丘の形状はこのように、高塚と呼ばれるものとはほど遠い印象を与える盛土の低い古墳であった。

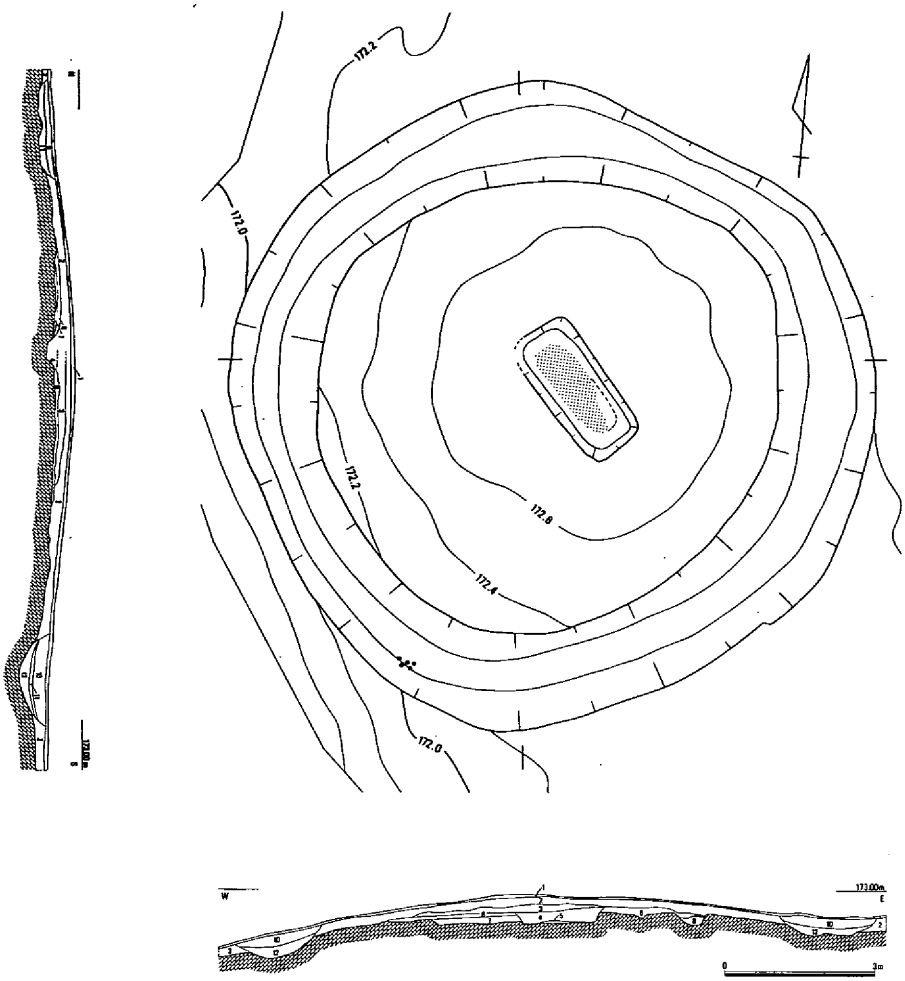
墳裾をめぐる周堀は地山面をえぐって完周し、肩口では幅1.3～2.0ｍ、底の幅は0.6～1.0ｍを測る。深さは東端で42㎝、西端において50㎝、北端で30㎝、南端において60㎝とややばらつきがあるが、これは自然地形の違いにもとづく結果であろう。周堀に堆積した土は、基本的には下層の暗灰褐色土と上層の暗黄褐色土の２層に分層されるが、相対的に高い位置にあたる南端付近のみで、上下層に挟まれた間層としての薄い灰黄褐色土が観察できた。

一方、墳丘の南南西にあたる周堀の外側肩口の小範囲において、須恵器杯身および蓋杯から成る一括遺物が検出されており、これらは被葬者の霊に対して捧げた供物の器なのか、あるいは成員によって共同会食のなされた容器であったのかは明瞭ではないが、葬送儀礼の過程で営まれた祭式の跡を物語るものではあろう。

内部構造（第７図）

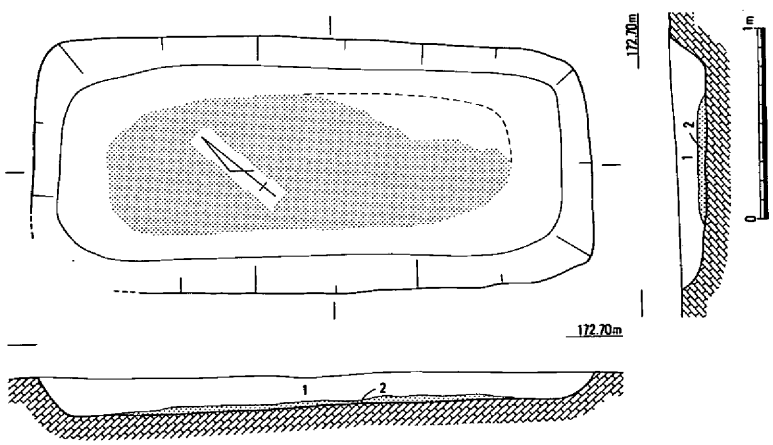
埋葬施設は墳丘中央の、僅かに北東寄りに設けられた単一の土壙墓状を呈すものであった。平面形は隅丸長方形を呈し、軸線は北西から南西を指す。長さは2.94ｍを測るのに対し、幅は北西端で1.30㎝、南東端において1.22㎝を測り、両者の広狭の差はほとんど認められないが、強いていえば北西辺がやや広い。土壙の深さは18～20㎝と総じて浅い。墓壙底の形状も隅丸長方形で長さ2.64ｍ、幅90～100㎝を測り、著しい差はない。

墓壙底からは礫床が検出された。礫の平均的な大きさは２×３㎝で、これを二重三重に積んで、およそ４㎝ほどの高さに仕上げたもので、礫の間にはほとんど土砂の混入がなく密に敷き詰められていた。その平面形状は隅丸長方形を呈し、長さ約2.2ｍ、幅約70㎝の範囲におよぶ。礫床上面は僅かに凹凸が認められるが全体的にはほとんど平坦な状況であった。また、礫床の四方の各端部はゆるく傾斜して墓壙底へと接続しており、端部を固定するための粘土などの痕跡は確認されなかった。さらに



1．表土
2．黄褐色土
3．淡黄褐色土
（礫混入）
4．暗黄褐色土
（礫混入）
5．暗黄褐色土
（主体部礫床
・円礫混入）
6．暗黄灰褐色土
（旧表土）
7．暗黄灰色土
8．暗黄色土
9．淡灰褐色土
10．暗黄褐色土
11．灰黄褐色土
12．暗灰褐色土

第６図　大木２号墳（１／150）



1．暗黄褐色土
（礫混入）
2．暗黄褐色土
（小礫床・小礫混入）

第７図　埋葬施設（１／40）

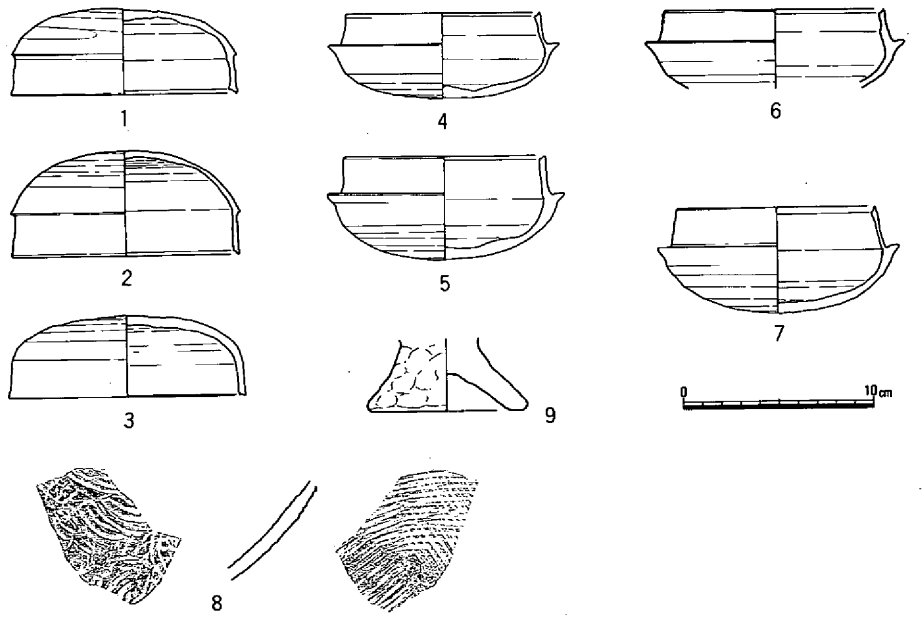
は、礫床の端部と墓壙壁との間には、幅13～幅26cmの間隙がみられるものの、棺痕跡は全く認められず、むろん棺釘も未検出であった。なお、礫床面からの遺物は皆無であった。

出土遺物（第８図、図版16）

須恵器杯蓋**１**は、周堀内から検出された一括資料中の一点である。色調は内外面ともに青灰色を呈し、焼成良好である。胎土中に0.2～2.0mm前後の石英、長石と黒色砂粒を含む完形品で、口径11.95cm、最大径12.1cm、器高4.6cmを測る。天井部と体部とを分ける稜は明瞭に観察できるが、先行型式のそれに比してややにぶい。天井部は比較的に平らなつくりで筥形にちかい。天井部のヘラ削りの範囲は広く、その方向は時計まわりと反対の逆まわりである。形態はＴＫ－23型式の伝統を受け継いでいるといえるが、相対的に丸みを増している。そして稜の甘さに加えて、天井部のヘラ削りの方向はＴＫ－47を境に逆まわりに変化するとの指摘を重視すれば、この杯蓋はＴＫ－47型式の古相として捉えられる。

須恵器杯蓋**２**も周堀内一括出土品の一つである。焼成良好な完形品で、外面青灰色、内面灰白色を呈す。胎土中に1.5mm大の長石、石英を含み、口径12cm、最大径12.2cm、高さ5.6cmを測る。天井部は著しく丸みをもち器高を増す。天井部のヘラ削りの範囲はなお広いとはいえ、天井部と体部を分ける稜は短く甘い。天井部ヘラ削りの方向は逆時計まわりである。ＴＫ－47型式に属すものと考えられる。

須恵器杯蓋**３**も前二者と同様、周堀内出土品である。完形品で焼成良好。外面は灰色または青灰色で一部に茶色の釉がかかり、内面は灰白色を呈す。胎土中に0.5～2.0mm程度の砂粒が混入するほか、長石、石英も見られる。外見は筥形に似て、天井部のヘラ削りの範囲は広く、削りの方向は順まわりで、口縁端部のつくりが水平であるなど、古い要素をとどめる。一方において、口径が12.5cmに対して高さ4.4cmと器高は低く、全体として法量が減少している。しかも天井部と体部を分ける稜が完全に消失して浅い凹状に変化しており、ＴＫ－47型式の範囲で捉えるとしても、むしろＭＴ－15型式にちか



第８図　周堀および周辺出土遺物（１／４）

い新相と考えるべきであろうか。

須恵器杯身**4**は、これまでの杯蓋と同じく周堀内出土品で、完形品である。色調は内外面とも青灰色を呈す。胎土中に0.5～3.0㎜程度の砂粒、長石、石英を混入する。口径は10.2㎝、受部径12.2㎝、器高4.5㎝を測る。底部はやや丸みをもち、ヘラ削りの範囲は底部全体の2/3ぐらいにとどまる。受部のつくりも鋭さを欠き、たちあがり部は内傾化しつつ一定の高さを保ち、口縁端面は内に傾く。底部ヘラ削りの方向は逆まわりである。ＴＫ－47型式の古相の特徴を示す。

須恵器杯身**5**もまた周堀内出土器の一つで、完形品である。焼成良好で外面灰色、内面黄灰色を呈す。胎土中に0.2～2.0㎜前後の砂粒を含み、特に長石が多く、石英がこれに次ぎ、僅かながら茶褐色の砂粒が混入する。口径11.7㎝、受部径12.6㎝、器高5.5㎝を測る。底部は丸みを増し、受部は外へ短く張るものの鋭さはない。たちあがりは垂直にちかく、しかも高さを保つが、端部は内傾する。ヘラ削りの範囲は底部全体の2/3程度で、削りの方向は逆まわりである。ＴＫ－47型式のものであろう。

須恵器杯身**6**は表土直下から出土したもので、口縁部1/6程を残すものである。焼成は良好で、色調は外面灰色、内面黄灰色を呈す。胎土は精密で、なかには長石少量と黒色砂粒が認められる。復元口径11.6㎝、受部径13.6㎝、器高4.5㎝を測る。口縁たちあがり部は、やや短めになって内傾し、端面には段をもつ。ＭＴ－15型式の範囲に入るかもしれない。

須恵器杯身**7**は墳端から約９ｍ南から出土したもので、当古墳との関係は不明であるが、遺跡の状況および出土位置からすれば関連づけることの出来るものは当古墳のみであった。そのため敢えて当項に記すものである。**7**は底部2/3およびたちあがり部1/3ほどが残存するもので、色調は内面が灰黄色、外面灰色を呈す。胎土中には0.5～2.0㎜の砂粒が入り、長石、石英も僅かに含む。復元口径10.4㎝、受部径12.7㎝、器高5.6㎝を測る。底部は著しく丸みをもち、ヘラ削りの範囲はほぼ3/4程度、削りの方向は逆まわりである。たちあがり部は顕著に内傾し、高さ2.2㎝を測る。ＴＫ－47型式の特徴を示している。

須恵器片**8**は周堀から出土した甕または壺の破片で、10×10㎝、厚さ6.0～7.0㎜を残す。胎土は密で焼成良好である。内外面とも緑灰色、断面が暗緑灰色を呈す。外面には細い平行タタキ目をとどめ、その間隔は２㎝幅の中に６本を数える。内面には同心円状のあて道具原体の痕跡を残す。破片はその特徴からＴＫ－47型式に属す可能性が高い。

土師器脚片**9**は周堀中層から出土したもので、前述の須恵器群から西へ約2.5ｍ離れた位置にあたる。脚部のみ残存しており、上部の器形は推定困難であった。脚径8.1㎝、高さ3.5㎝を測る。。胎土には２㎜前後の砂粒を多く含む。石英が目立ち、僅かながら長石も混入する。内外とも橙色、断面は明赤褐色を呈す。内外面はいずれも指頭圧痕を残るが雑なヨコナデで仕上げている。

第３節　大木３号墳

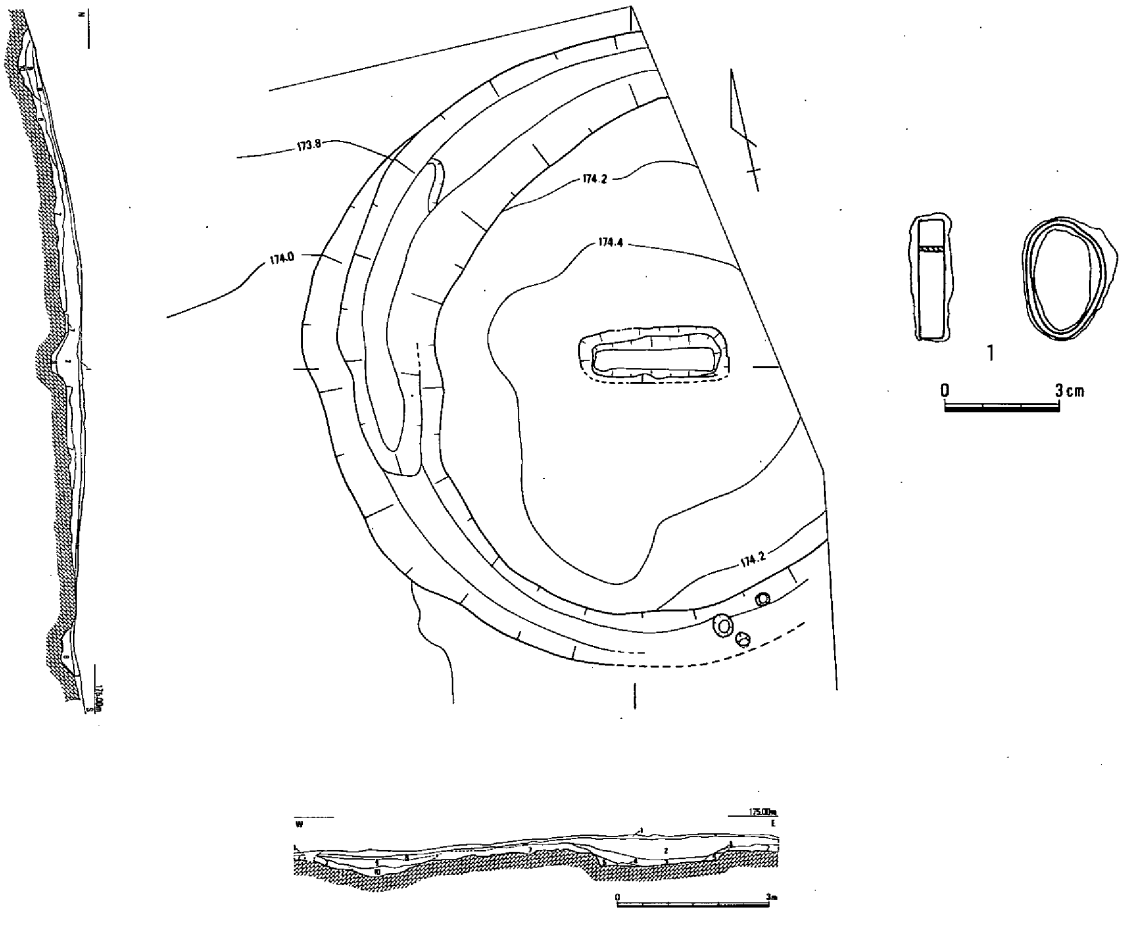
墳丘と周堀（第９図、図版15）

大木３号墳は、大木２号墳から南西へ約25ｍの距離をおき、比高もおよそ２ｍ上位に築かれている。前２基と同様に低平な封土をもった小円墳であるが、建設用地内にあって調査対象となったのは墳域全体からすれば3/4に相当する。

墳形は円墳である。調査着手時においては東西長に比べ南北長が僅かに長い印象をもったものの、発掘調査の成果をもとに、現地踏査の知見を加えて図上復元すれば、見かけほどには開きはなく、東西長10ｍに対して南北長11ｍ以内におさまるほぼ正円を呈するものである。

墳丘の築造は凹凸の著しい地山面の上になされていた。第７層とした暗灰色土の旧表土は周堀までは至っておらず、特に比高の低い北端部では、墳端に沿い70cmばかりの幅をもって帯状に、灰色土を強く突き固められた第６層が確認された。墳端の保持を目的とした施工法のあらわれであろうか。しかしながら、その上の封土は第２層とした地山塊が多く含まれた淡黄褐色土が被覆するのみで、その厚さは古墳中央付近で約30cmを測るものの、その上部には第２層が表土化したと考えられる第１層が薄く確認されるだけの、非常に盛土の低いものであった。

周堀は、少なくとも発掘区では完全に墳端をめぐり、未調査区においても同様にめぐって一周すると思われる。検出できた周堀の肩幅は広狭の差が甚だしく、狭い南端では95cm、北西部の最も広い所では260cmを測り、その辺りは二段堀になっている。周堀の堆積土は基本的には３層に分層され、下から黒褐色（黄褐色土粒混入）土、淡黒褐色（黄褐色土粒混入）土、そして暗黄褐色土であった。ただ南端のみは最上層の暗黄褐色土が堆積していた。



1．表土
2．淡黄褐色土
（地山塊多く含む）
3．淡灰褐色土
（地山塊含む）
4．淡褐色粘質土
5．淡灰褐色粘質土
6．灰色土
7．暗灰色土
（旧表土）
8．暗黄褐色土
9．淡黒褐色土
（黄褐色土粒混入）
10．黒褐色土
（黄褐色土粒混入）

第９図　大木３号墳（１／150）および出土遺物（１／２）

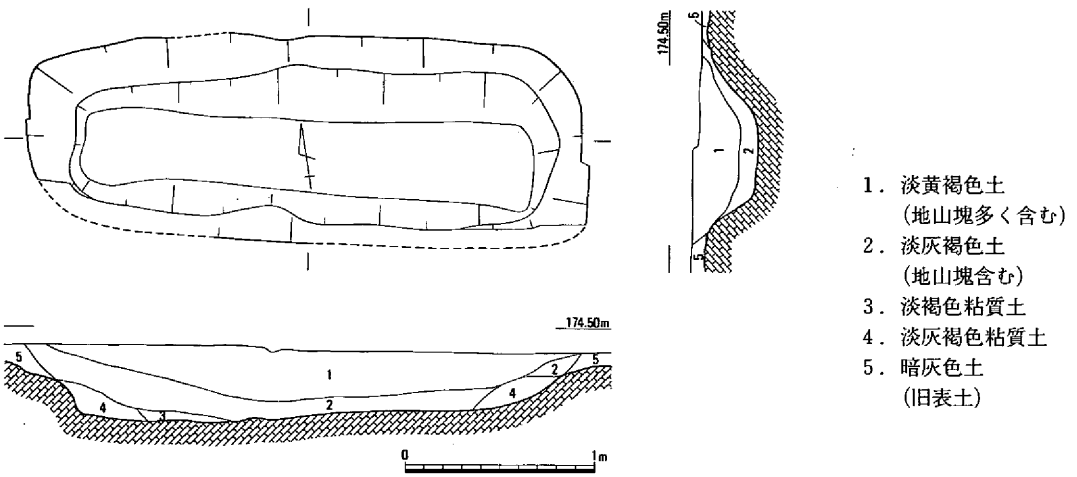
内部構造（第10図）

埋葬施設は墳丘の中央付近に設けられた土壙墓状を呈すもので、ほぼ東西に長辺がある。平面は隅丸長方形を呈し、肩口における長さ236cm、幅はほぼ中央で110cmを測る。墓壙底までの深さは、検出面から浅い東部で30cm、深い西部で37cmを測る。肩口から底の間にかすかな段があるが、それほど明瞭ではない。墓壙底の長さは236cmで、幅は東端で43cm、中央で38cm、西端において36cmを測り、僅かながら幅広い東に、遺骸の頭位があったものと思われるが、棺材および副葬品など遺物は皆無であった。

なお、墓壙内の堆積土は下層の地山塊を含む淡灰褐色と上層の淡黄褐色土が主たるものである。ただし、長辺両側の最下で確認された淡褐色粘質土および淡灰褐色粘質土は遺骸埋葬時にかかわるものであったかもしれない。

出土遺物（第９図）

鞘金具１は表土掘削時に採集されたものである。楕円形をした鉄製品で、幅0.7cmの板状の素材が輪をなす。長辺3.1cm、短辺2.4cm、内法長2.8×1.8cmを測る。当初、刀の刃にかけてはめ込んで刀身が抜けないように締めておく鎺ではないかと思われた。しかし、内法長の比率からすれば短径が幅広く、刀の鞘口を固定化させた鯉口と考える。



第10図　埋葬施設（１／40）

第４節　ま　と　め

北房町宮地に営まれた大木古墳群は、低平で小規模な円墳３基をもって構成されるものであった。これら３基の古墳はいずれも直径８ｍ以上、10ｍ未満の円墳で、封土の高さも30～40cm程の極めて低いものであった。その規模を比較した場合、１号墳がやや小さく、３号墳がいくぶん大きいといえるものの、それほど顕著な差は示さずむしろ同程度と捉えられる。また、各墳とも外表施設としての葺石はもとより、埴輪も全く伴出されなかった事実が物語るとおり、被葬者の社会的身分をある程度暗

示させる。

墳丘の裾をめぐる周堀については、各古墳に伴ってその一部または全部を検出することができ、その規模は幅2m強、深さ60cmのなかにおさまることが判明し、径10未満の古墳にふさわしい規模であることが明らかとなった。そして、具体的な構成や内容までも復元できないのが惜しまれるが、土器類を中心とした供献的な周堀内祭祀の跡が2例も認められたことは特記される。

内部の埋葬施設はそれぞれ主軸方向を異にするとはいえ、いずれも土壙墓状を呈するものであった。墓壙内の施設としては1号墳では木棺が利用された可能性が高く、3号墳においてもやや小規模なものの1号墳とほぼ同じ形態を示すことから同様に推定されるものの、2号墳の礫床は上記2基とは状況が異なり、特に、墓壙は浅く、今後の調査例から具体的な在り方を探っていきたい。

次に各古墳の築造年代を今少し検討を加えてみれば、1号墳からは太刀2振および鉄鉾1本が出土しており、後者は報文中にもふれたように、およそ5世紀中葉を示すものであった。他に時代を示す遺物として周堀から出土した土師器高杯がある。これらを平井泰男他の「土師器」編年[1]に照らしてみればⅢ－2期におさまるものと判断されるが、この期を須恵器編年との併行関係に置き換えると、TK－73型式～TK－208型式という大幅な範囲の中にはいる。一方、本例の口縁部はやや内湾気味であることや、脚柱部は「中空」ではあるものの絞りが強くより細くなっていることなどから、Ⅲ－2期にあっても新相、TK－208型式に併行するものと考えられる。また、「土師器」編年のⅢ－2期の原資料となった走出遺跡の楕円形ピットからは須恵器片が共伴している[2]。それは口径30cm弱の朝顔形に外反する口縁部片で、そのほぼ中程に断面三角形の凸帯がめぐり、これを挟んで上下に波状文が施されている。三角凸帯はやや鋭さを失い、突出度も小さく、TK－73型式やTK－216型式のものより明らかに後出的である。さらに、波状文は規則性に欠け乱れを生じており、これらの特徴から須恵器片はON－46型式ないしそれ以降、TK－208型式に属するものと理解された。これらのことからも、1号墳の築造年代は、およそ5世紀第3四半期～第4四半期と考える。

一方、2号墳の築造年代については周堀内で一括出土した須恵器群をよりどころとする他はなく、すでに記述してきたとおり、すべてTK－47型式の中におさまるものと考えられた。しかしながら、3号墳からは僅かに鯉口1点を出土したに留まり、築造年代を決めることは難しい。

以上、古墳群の築造順序は1号墳（TK－208型式）から2号墳（TK－47型式）へ、そして3号墳へとむかったのではないかと思われる。3号墳の年代がまったく不明ながら、これら3基の立地条件を考慮に入れると、最下の1号墳から、やや高い2号墳へと移り、ついで最高所に3号墳を築いたとみるのが自然であろう。その年代は5世紀中葉も末に近い頃から始まって、5世紀後半を経て、6世紀初頭にはすでに終焉を迎えたようである。（江見）

註

(1)　平井泰男・高畑知功・柴田英樹「土師器」『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社　1992

(2)　間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報　第2号』倉敷考古館　1966

2．粧田山城跡・大村遺跡

第1章　地理的・歴史的環境

岡山県のほぼ中央部、高梁川と旭川に挟まれた上房郡・御津郡一帯では、吉備高原と呼ばれる標高300m～500mのなだらかな台地が続いている。浸食作用が極度に進行して準平原化され、これが新生代に入って隆起を続け、現在の高度に達したものといわれている。河岸との比高は200～400mもあり、高原への道は急峻である。この地域では北東から南西方向の断層線にそって河谷が形成され、可耕地となるとともに交通路にもなっている。まず目につくのが有漢川の流路で、高梁市巨瀬町内の水路も集めて高梁川に注ぐ。上流部は有漢町の中心部である。一線が賀陽町の竹荘盆地を通るが、盆地の水の多くは宇甘川として東へ流れ出す。さらに南で、ある程度の平地をもつものとして、賀陽町の湯山川流域から賀陽町北・西の盆地に続く線がある。賀陽町吉川にも平坦地がある。賀陽町からの交通路をみると、東は宇甘川を下って御津川金川に達し、南は賀陽町吉川から足守川を下って岡山市吉備津に至る。北では、賀陽町上竹から高梁市巨瀬町へ出る道と、賀陽町竹荘から有漢町に通じる道がある。二つの道はさらに北上すると多和山峠を越えて、北房町から備中川伝いに落合町に出て、さらに出雲街道に達する。このように、上房郡は山陰と山陽を結ぶ交通の要所に位置している。

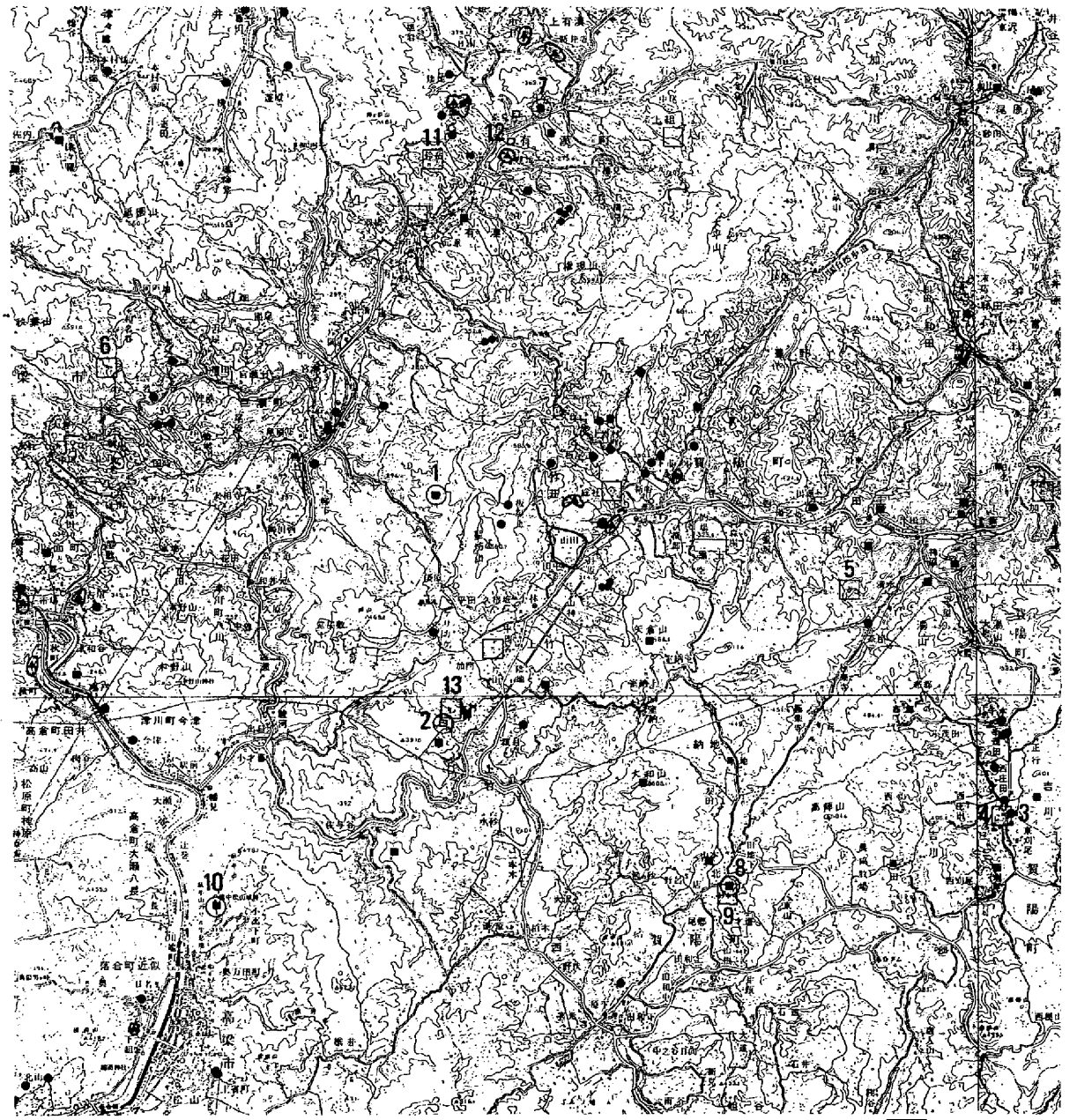
縄文時代後期の土器の採集はあるものの、遺跡の広範な展開は弥生時代中期に始まる。それは有漢川上流域や賀陽町の竹荘盆地にも広がっていく。古墳時代前期には強力な政治権力は生まれなかったようだが、後期には古墳がいくつも造られた。賀陽町高塚古墳のような帆立貝式の墳丘をもつ大形古墳もあるが、ほとんどは自らも耕作する、小集団の首長級の人物がその被葬者であったろう。

奈良時代に入ると郡里制（後に郡郷制）が導入された。天平11年（739）の『備中大税負死亡人帳』には、賀夜郡内に「多気郷」「有漢郷」とあり、多気郷では「物部里」「田次里」が記される。10世紀の『和名類聚抄』でも賀夜郡内とあるが、14世紀に成立した『拾芥抄』には多気・巨勢・有漢の3郷を「上方郡」と記し、この間に賀夜郡の北部を割いて上方郡が成立したと考えられる。有漢郷は有漢町、巨勢郷は高梁市巨瀬町、多気郷は賀陽町付近と推定される。条里制の痕跡はこの地域では未確認で、延喜式内社も3郷内には存在せず、小規模な集落の点在にすぎなかったのかもしれない。

平安時代も後期になると、全国的に荘園が増大する。保元3年（1158）の『官宣旨』に「吉川保」があり、石清水八幡宮領として記載されている。賀陽町吉川付近と考えられ、吉川八幡宮が鎮座している。「多気保」が平治元年（1159）の『宝荘厳院領荘園注文案』に登載され、「多気庄」が養和元年（1181）の『後白河院庁下文』に新熊野神社領として記されている。賀陽町竹荘付近とされていて、皇室領であったと考えられる。賀陽町湯山にある清水寺の梵鐘の銘文（正和5年（1316）に「備中国竹御庄清水寺」とあり、竹庄に湯山地区が含まれたことが知られる。『吾妻鏡』寛喜3年（1231）の記事に「備中国巨勢庄」が登場する。高梁市巨瀬町の祇園寺にある毘沙門天像の修理銘（延文2年（1357）には「備中国巨勢庄祇園寺」とある。巨勢庄は高梁市巨瀬町一帯であったと考えられる。

鎌倉時代を迎えてこの地域は大きく動きだす。源平の争乱や承久の乱に功績のあった武士が、恩賞として各庄の地頭職に補任されたのである。秋庭重信は相模国から有漢郷に入部し、有漢町有漢土居にある正尺屋敷に居館を定めた。巨勢庄には片岡弘常が補任されたという。また、賀陽町納地・北・西・岨谷付近に比定される野山郷へは、奥州にあった伊達義朝が弘安4年（1281）に移っている。伊

達氏の居館は賀陽町北の府元山城である。義朝は熱烈な日蓮宗の信徒で、館の近隣にあった寺を妙本寺と改名し、日蓮宗の西国布教の拠点とした。秋庭重信は高梁市の臥牛山に松山城を築く。交通の要衝にあるこの城をめぐる争奪戦を中心に備中の兵乱期は展開することとなる。松山城主は秋庭氏五代から高橋宗康、高師秀と替わるが、正平17年（1362）守護代秋庭重明は、南朝方の山名時氏が伯耆から進出した際に、山名勢と謀って守護高師秀を追放した。やがて、秋庭氏は備中守護職の細川氏の被官となり、応仁元年（1467）に応仁の乱が起こると、東軍の総大将細川勝元の近臣として在京し、合戦に参加していた。有漢郷においても文明14年（1482）に鈴岳神社を造立するなど、混乱の時代にあっても安定した勢力を備中中部に保っていた。秋庭氏の墓所は有漢町有漢医王堂にある。



1．荘田山城跡　2．大村遺跡　3．高塚古墳　4．吉川八幡宮　5．清水寺　6．祇園寺
7．正尺屋敷跡　8．府元山城跡　9．妙本寺　10．松山城　11．鈴岳神社　12．医王堂秋庭氏墓所
13．大村寺

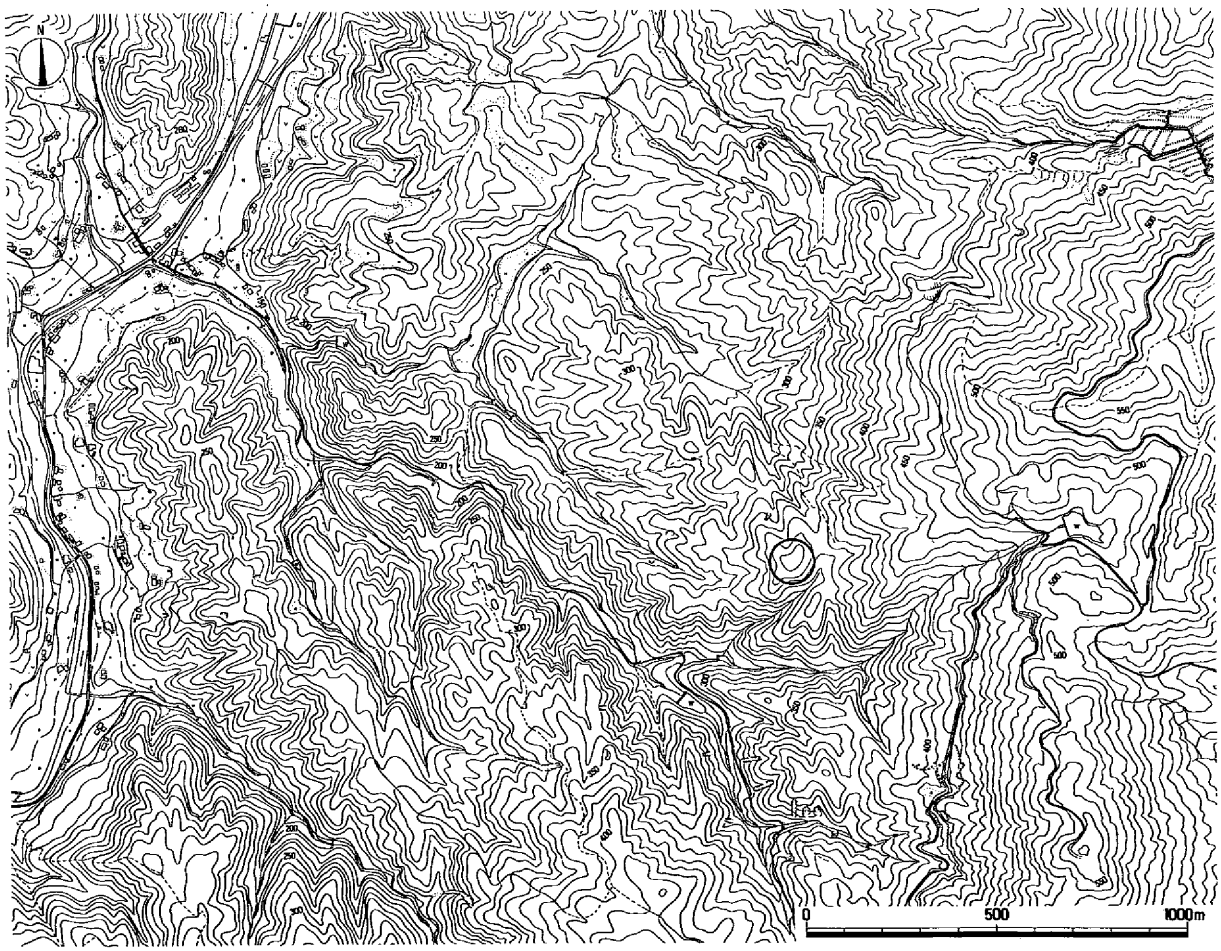
第１図　荘田山城跡・大村遺跡周辺遺跡分布図（1/100000）

秋庭氏の後に、戦国期を通じて松山城主は上野氏、庄氏、三村氏とめまぐるしく変遷するが、その陰には戦国大名の姿があった。前半には尼子氏と大内氏、後半は尼子氏と毛利氏、そして、尼子氏滅亡後は、毛利氏と織田氏の戦いである。備中の諸氏は同盟と謀叛を繰り返し、自己の勢力の拡大に奔走した。賀陽町竹荘付近はしばしば勢力の狭間に位置し、激烈な戦場となったところである。戦死者の遺骸を賀陽町上竹にある大村寺の僧達が陣山に葬むったという。天正10年（1582）本能寺の変による織田信長の死で、羽柴秀吉は毛利と和睦を結んで京に返し、ここに備中の兵乱は終焉を迎えた。

慶長５年（1600）小堀正次が備中代官として入国した。代官は備中一国を治め、松山城守護と検地を主な任務としていた。徳川幕藩体制の確立によって、元和３年（1617）池田長幸が因幡より六万五千石で松山城に入った。有漢町・高梁市巨瀬町は松山藩領に属し、賀陽町はかつての多気庄内の竹荘盆地一帯と野山郷が松山藩に、東半の湯山川流域と吉川庄が足守藩となった。（江見）

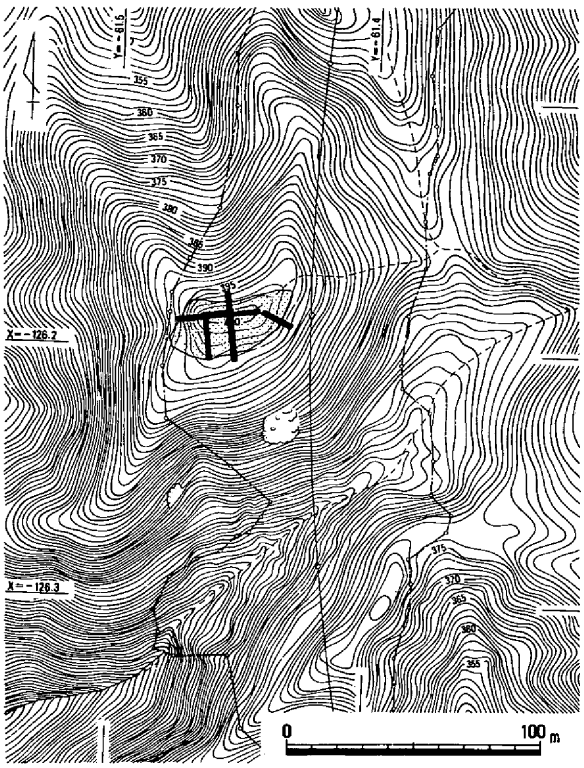
参考文献

松尾惣太郎『概説　中世期における備中国の荘園と国人』　1967年
賀陽町教育委員会『賀陽町史』賀陽町　1972年
高梁市史編纂委員会『高梁市史』高梁市　1979年
竹内理三編『角川日本地名大辞典　33岡山県』角川書店　1989年
近藤義郎・吉田晶編『図説　岡山県の歴史』図説日本の歴史33　河出書房新社　1990年



第２図　粧田山城跡周辺地形図（1/20000）

第２章　粧田山城跡

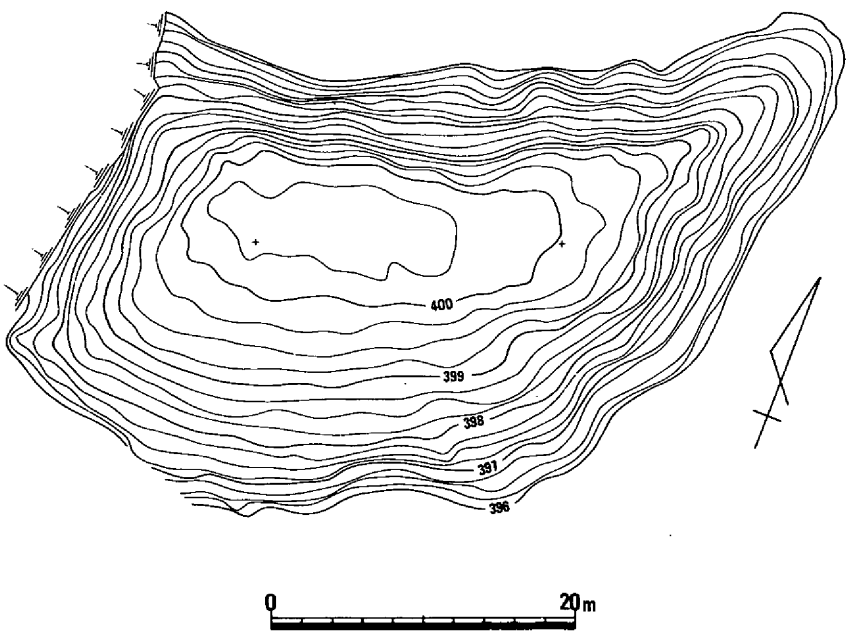


第１図　遺跡位置図（1/3000）

第１節　調査の経過

粧田山城跡は高梁市巨瀬町にある。源平合戦の功名で巨勢庄地頭職になったと伝える片岡弘常が築いたという。天正３年（1575）の松山城落城と同時に落ちたと『中国兵乱記』に記す。多気庄の「庄田山城」とある。賀陽町竹荘盆地と巨瀬町との間にある丘陵頂部から、南西に下る尾根筋の頂部先端に立地し、標高400ｍを測る。丘陵裾には有漢川の支流が流れ、中世の巨勢庄と多気庄を結ぶ要路となっていた。城跡からは遠く英賀郡との境の多和山峠が望める。

粧田山城跡は当初から周知されていたが、山深くて調査のみを実施することは困難であった。横断道の工事が当該地区にかかった平成６年４月に、日本道路公団高梁工事事務所から条件整備が整ったとの連絡を受けた。４月19日に現地を踏査し、高梁工事事務所と協議のうえ、５月10日から調査を開始することとした。調査は、まず城跡と推定される丘陵頂部の地形測量を開始し、同時に第１図のように尾根筋および斜面にトレンチを設定し、遺構・遺物の検出作業を行った。その結果、南西トレンチから土器片が出土したため、調査を丘陵頂部全域の850㎡の範囲に広げて継続し、６月17日をもって終了した。



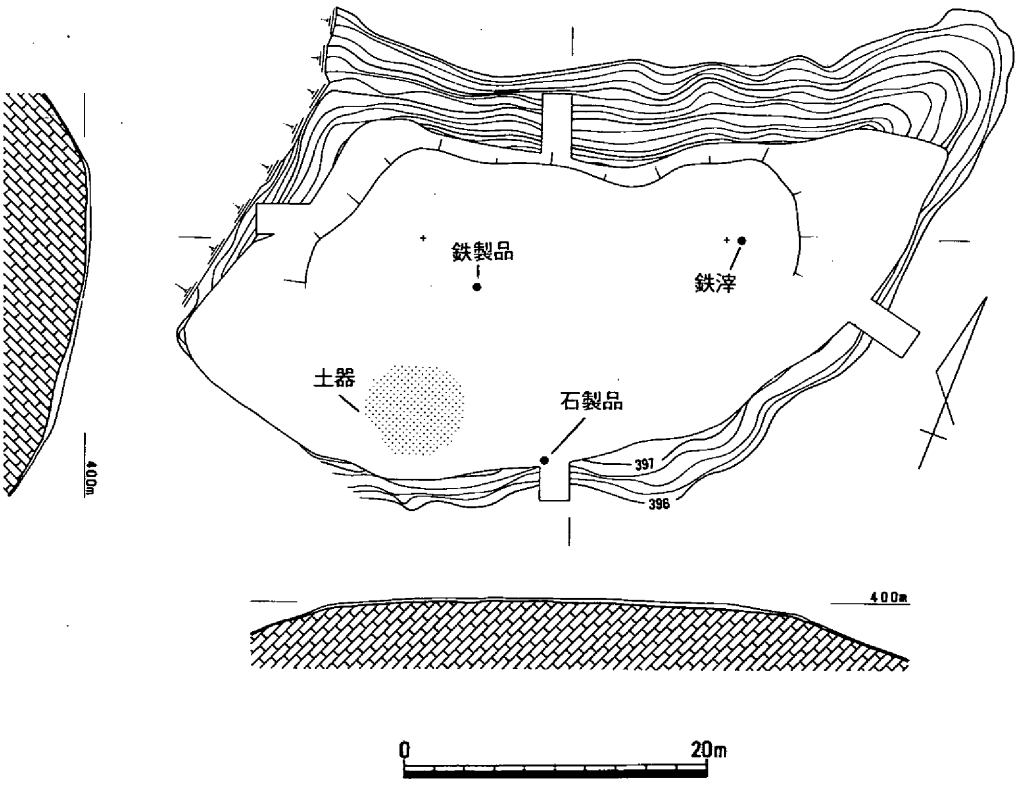
第２図　調査前地形図（1/500）

第２節　調査の概要

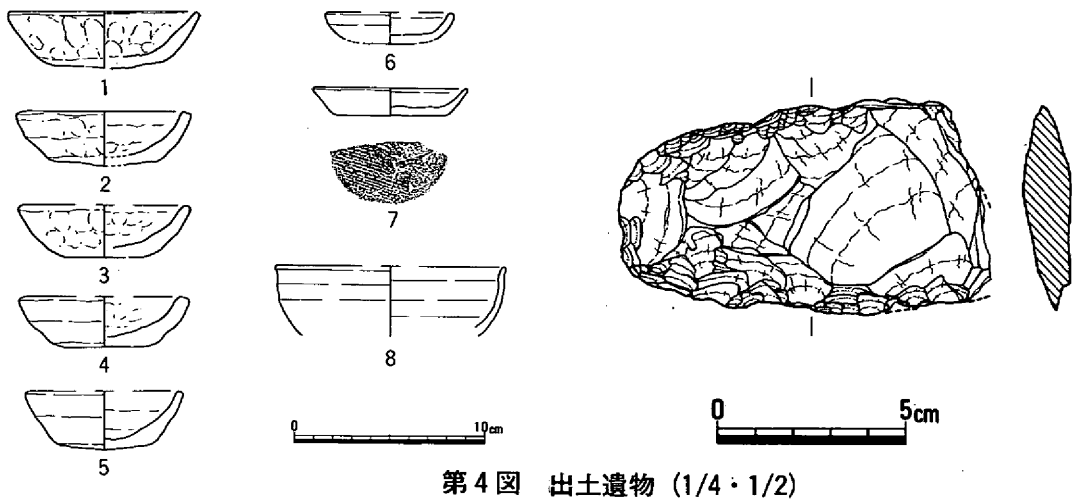
丘陵頂部では、腐植土を除去すると、40cm前後の厚さでやわらかな黄褐色土があった。この表土を剝ぐと、花崗岩の風化した真砂の地山が現れ、版築層のような人為的な土層はいっさい認められなかった。丘陵全面で表土を除去すると、頂部の東西と北では平坦面と丘陵斜面との境界線が明瞭に検出された。しかし、南側ではゆるやかな傾斜が続き、やがて丘陵の急傾斜面へ落ちていく状況であった。このため、頂部の平坦面は東西方向では33ｍと長いが、南北は７～８ｍ前後と狭い。丘陵頂部では多くの穴が検出されたが、掘り下げると斜めに入って先細りになる、大根痕であった。最終的に柱穴と認められる遺構はなく、頂部の平坦面についても人為的なものかどうかの判断はつかなかった。

遺構からは城跡の証明はできなかったが、遺物が出土した。第３図に示すように、丘陵頂部の南西部から土器がまとまって出土した。小破片のみも含めて十個体分である。須恵器が２片で、あとは土師器である。丘陵頂部の南側はゆるやかな斜面をなし、表土の下にやわらかい灰褐色砂質土が20～40cmの厚さで堆積していたが、土器片はこの層の上面から出土した。南端から石器が１点出土したが、やはり表土層直下であった。他に、中央部から鉄製品が２点、東部から鉄滓が１点出土した。

第４図に示した土器のうち、**1～7**は土師器、**8**は須恵器である。土師器の器種は皿のみで、器形から三種に分けられる。**1～5**の器形のものがほとんどを占め、**6・7**はそれぞれ１点のみである。**1～5**は手捏ねの土器で、指頭圧痕を多く残す。底部は平底だが凹凸があり、体部との境は丸味をもつ。口縁部は端面をもつものと、丸くおさめるものがある。胎土には砂粒が多い。焼成は良い。**1**は灯明皿として使われたので内面に煤が付着している。**1**は口径100mm、器高30.5mmを測る。**6**は体部



第３図　調査区全体図（1/500）



第４図　出土遺物（1/4・1/2）

が内湾する。口縁端は丸く、ヨコナデ調整である。胎土は細砂粒を含み、焼成は良い。**7**は体部が直線的で、口縁端は丸くおさめる。底部は広く平坦で、外面には篦おこし痕が残る。ヨコナデ調整である。薄手の作りで、胎土は精良である。口径が81㎜、器高は15㎜。**1～5・7**の色調はにぶい黄橙色、**6**は灰褐色である。**8**は須恵器の杯で、奈良時代以前とみられる。口縁部はわずかに外反し、体部は湾曲する調整はヨコナデである。胎土には細砂粒を含み、焼成は良好、色調は淡灰色を示す。

石器はサヌカイト製である。短冊形をなすが、右の短辺が少し長い。下辺が刃部で、上辺には刃潰しの剝離調整が加えられている。スクレイパーと考えられるが、右の短辺にも調整剝離があり、左の短辺にもかすかな抉れがあることから、石包丁の可能性もある。ただ、石材の風化は進んでいる。全長が97㎜、幅は57㎜、厚さ12㎜、重量は91.5ｇをはかる。縄文時代のものか。

鉄製品２点は近接して出土した。いずれも薄い鉄板の両端を折り曲げ、その先細りの先端をもう一度折り曲げている。ただ、一点は外に、もう一点は内に曲げている。中央部分の大きさは、一つが幅15㎜、厚さ３㎜、長さ65㎜、いま一つは幅11㎜、厚さ５㎜、長さ62㎜を測る。足の長さは43㎜と40㎜、先端は14㎜である。把手のようなものであろうか。鉄滓は握り拳大のものであった。

第３節　まとめ

調査の結果、土器が10点ばかりまとまって出土し、人間の活動があったことは確実となった。土師器は中世のものであるが、その細かな年代はどうであろうか。わずかな点数だが、椀や杯がないことに注目したい。出土量の多かった**1～5**は粗雑な作りで類例を知らず、あるいは在地で生産されたものかもしれないが、しいてその法量に類似したものをあげると、岡山城二の丸跡最下層出土のもの[(1)]がある。ただ、胎土や作りはまったく異なっている。**7**の形態は薄手で、法量的にも草戸千軒町遺跡Ⅳ期以降[(2)]とみられる。きわめて乏しい知見と、『中国兵乱記』の記事に従えば、16世紀代後半の年代を与えられないだろうか。灯明皿は室内で使用されたであろうから、建物は存在していたと思われる。立地からすれば小規模な見張り台のようなものであっただろうか。（江見）

註

（１）宇垣匡雅「遺物について」『岡山城二の丸跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告78　1991年
（２）鈴木康之「土師質土器の変遷過程」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』　1994年

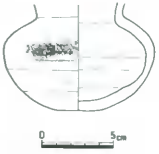
第3章　大　村　遺　跡

第1節　調査の経過

大村遺跡は上房郡賀陽町上竹5635他に所在する中世から近世にかけての墓地群である。遺跡は最近までその所在は周知されていなかった。岡山県教育委員会文化課は中国横断自動車道建設の用地にか

第1図　遺跡位置図（1/2000）

第２図　４区中近世石塔群



第３図　表採遺物
（１/４）

かる遺跡の分布調査を実施していたなかで、平成３年11月、当該地の地権者から墓地移転の情報を得、もともと丘陵南部は墓地で、石塔のいくつかを集め供養していることを知った。早速、文化課職員が現地に赴き踏査したところ、地権者の説明のように、集められた近世墓標石の傍らには中世五輪塔が積み上げられており、石塔の元あったとされる丘陵上には、おびただしい大小の礫群が散在しているなどの状況がみられた。

これらのことから、当該地が中世から近世の墓地群であることの予想は容易になされた。また、丘陵の北東および南東には人為的な削平面が確認され、特に後者からは井戸も確認されるなど、住居も想定されるとの見解を道路公団に示し、協議の結果、全面発掘調査を実施することとなった。

その後の経過については前章でも記しているが、発掘調査は平成４年11月に調査員６名によって開始した。調査はタバコ畑の１区から開始した。引き続き11月17日には２区の調査を開始し、近世墓の実態を明らかにしていった。これと併行して３区集石墓の清掃検出作業をおこなった。その結果、遺構上部に検出された大小礫群の実測作業には多くの時間を割かれることが予想されたため、12月および３月の２回にわたって航空測量を実施し、調査の進捗を図った。しかしながら、平成４年度の５か月間では２区の近世墓および中世墓の一部を終了させることで精いっぱいであった。平成５年４月には新体制で、３区の集石墓の調査から始めた。その後４～６区の発掘をし終えたのは７月29日であった。本来ならばこの時点で撤去となるが、1200個を越える石塔の調査に約１か月を要し、８月30日に終了した。

なお、調査区からは第３図に示す須恵器の甕が出土している。このことから当丘陵には墓地造成以前に古墳の所在した可能性が高いことを記しておく。（江見）

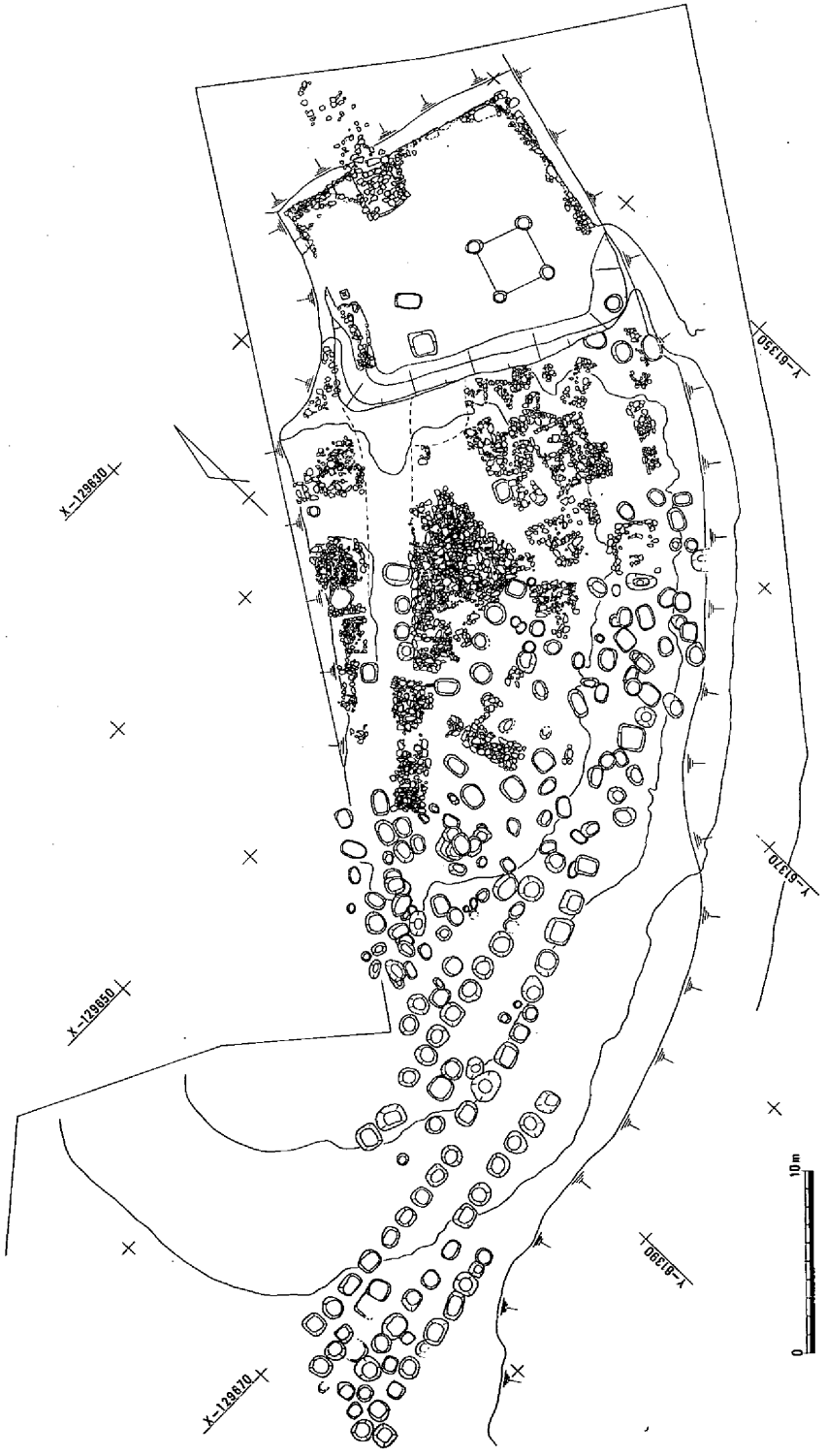
第２節　１～３区の概要

丘陵頂部から北斜面に当たる１区は畑として利用されており、旧地権者によると五輪石等が存在していたようであるが、前述の通りトレンチ調査を実施した結果、遺構は確認されなかった。

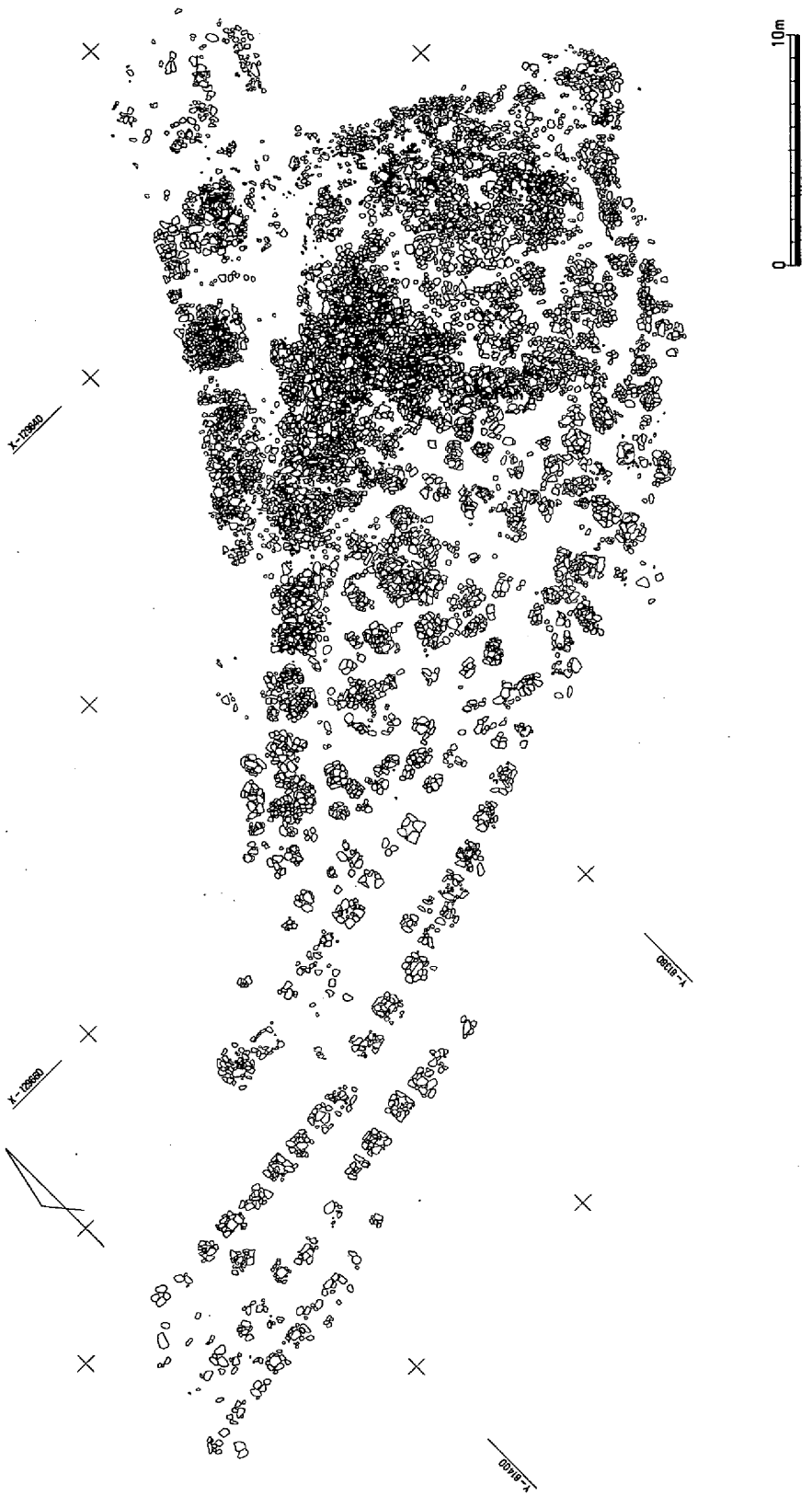
２区は丘陵の南斜面を中心とする調査区で、主に比較的整然とした６ないし７つの列を形成する近世土壙墓群が検出されている。３区で検出した土壙墓とあわせ、中世～近世の土壙墓の可能性のあるもの124基と近世墓83基が検出されている。いずれも平面円形や方形の土壙墓で、座棺等が想定される。いわゆる六道銭をはじめとしてキセルや鉄器、陶磁器などの副葬品が出土している。

３区は丘陵頂部から南斜面を中心とする調査区で、調査当初おびただしい量の石や五輪石、土器な

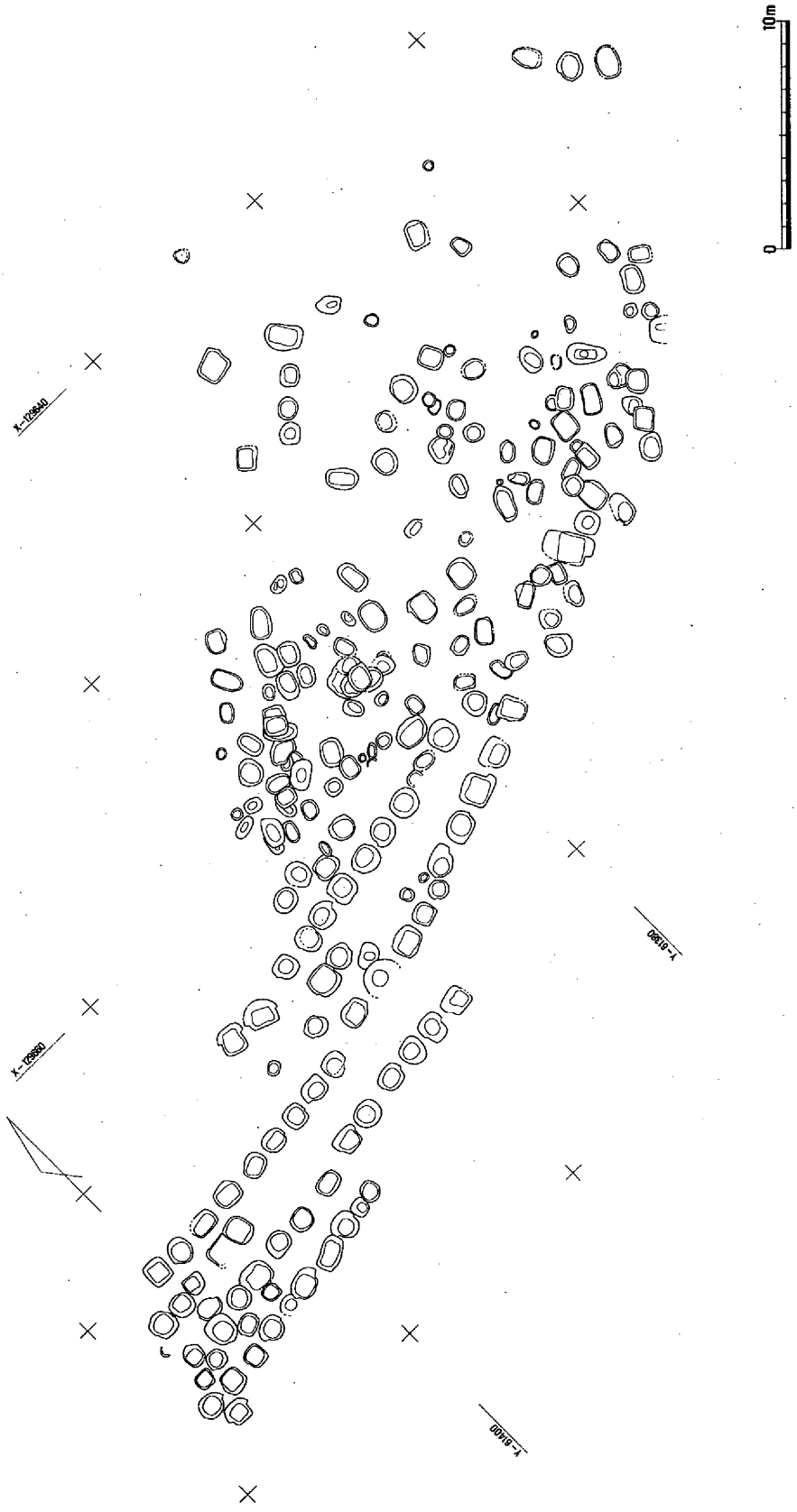
どが一面にひろがっており、中世段階の集石墓が存在すると思われていた。しかし調査が進むにつれ、集石墓以外にも古代～中近世の土壙墓が存在することが明らかになった。集石墓は上層の石を除去するにしたがい、蔵骨器を取り巻くように石による大小さまざまな規模の方形あるいは長方形の区画を指向することが判明した。また墓道と考えられる道状の集石空白地帯も認められる。この区の土壙墓の多くは埋土に多量の石が落ち込んだ状態を示しており、配置も不規則な状況が目立つ。これらの点は、２区で調査された近世墓と異なることが指摘できる。



第４図　２～４区遺構全体図（１/400）



第５図　２・３区中近世墓群　上層検出状況（１/300）



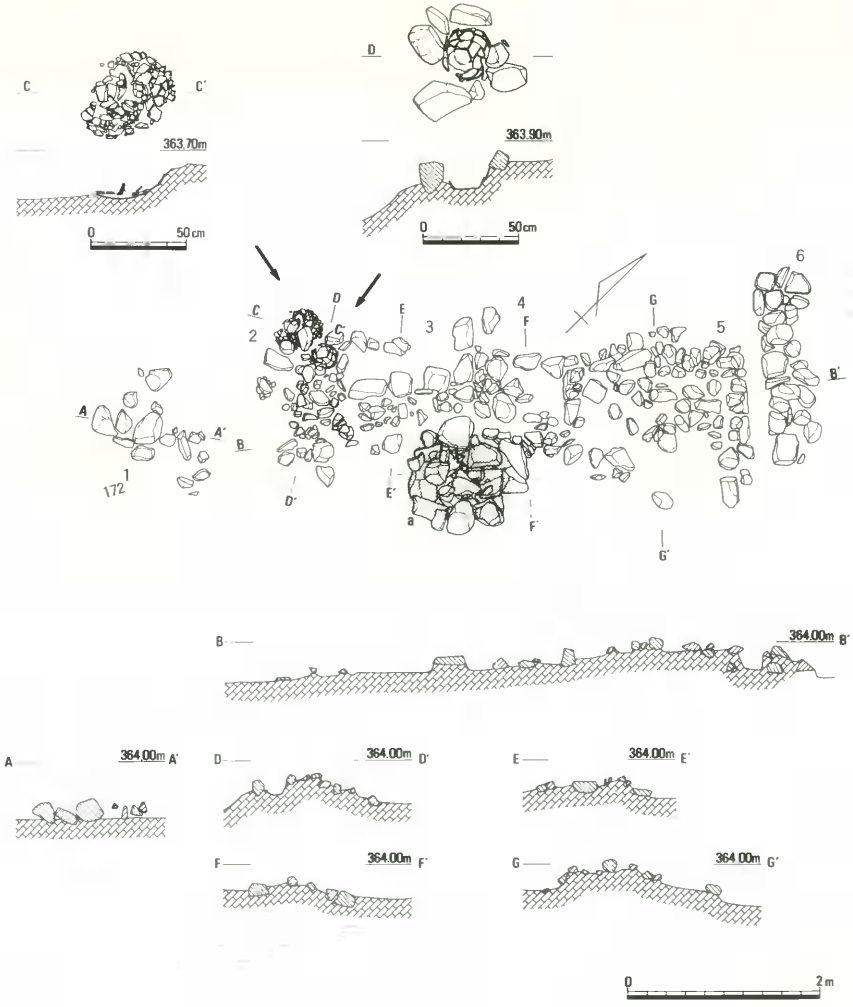
第６図　２・３区中近世墓群　下層検出状況（１/300）

E-5
D-6
D-7
F-5
F-6
E-7
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72

第7図　3区　集石墓全体図（1/150）

（１）中世集石墓

３区で検出した中世集石墓は上層の石を除去した後、石の並びや蔵骨器の検出状況などを判断材料として区画を設定した。しかし、集石は長い年月を経過するうちに累積したり移動したと思われ、そこから除去する石を選択する難しさや石の並びと蔵骨器の位置が不釣合になるなど、この区画設定は極めて困難な作業であった。区画が比較的明瞭なものなどを見ると、基本的には方形や長方形中心の区画で、備前焼や亀山焼が蔵骨器として据えられている。これらは据えるための掘り込みを持つもの、持たないもの、集石の間でおさまるものなどがある。また蔵骨器は認められないが、15か所で集石の間などに火葬骨がまとまって検出されることもあった。墓の区画以外にも墓道と推定される道状の集



第８図　集石墓１～６（１/30・１/60）

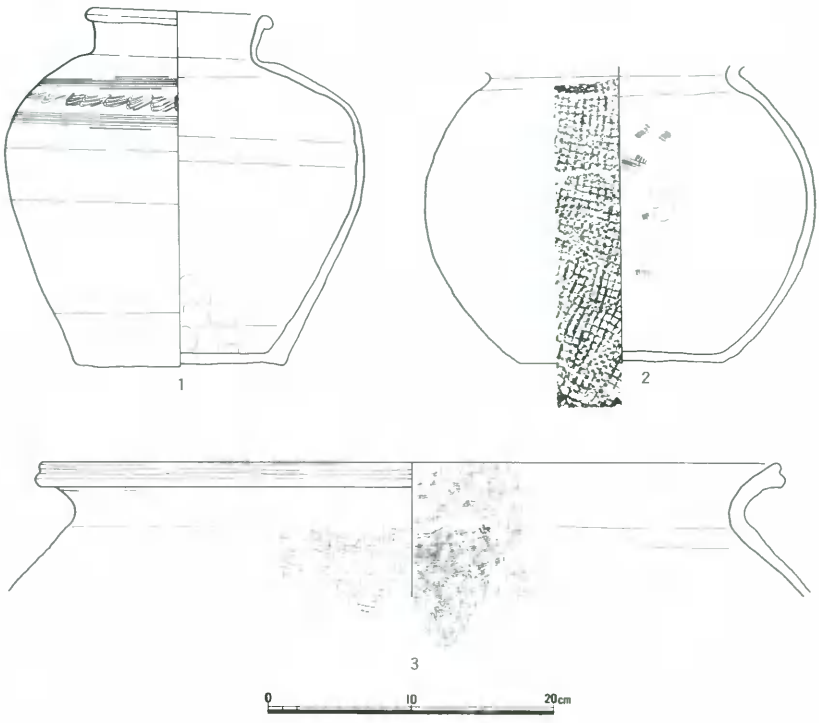
石空白地帯が認められていることは注目される。

遺構と関連して捉えられた蔵骨器は73個体（この内、図示不可４個体）であるが、伴う遺構は明らかでないが蔵骨器として利用されていたと思われるものも掲載している。これらは破片分布が広く、本来の位置を特定できなかったものである。蔵骨器の内、備前焼は28個体（この内、図示不可１個体）、亀山焼は34個体（この内、図示不可３個体）、土師質土器11個体を数える。遺構に伴わないとして図示した蔵骨器では備前焼29個体、亀山焼２個体、その他４個体である。これらより備前焼の方が優勢である。器種で考えると、備前焼では壺、亀山焼では甕がそれぞれ圧倒的である。時期は鎌倉時代後半から室町時代後半までである。

これらの集石墓の間には約280基相当分の五輪石や宝篋印塔約20基相当の石材も散在していた。これらに大きな時期差は表れていないが、火葬骨の分布（15か所）や蔵骨器の数量（73個体）に比べかなり多いと思われる。このため造塔は、葬送直後だけでなく追善供養などに際しても行われていたのではないかと考えられる。

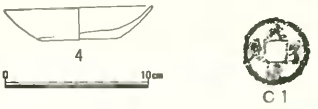
集石墓１～６（第８・９・10図、図版23・74）

集石墓１～６は調査区３区の最高所、Ｅ－５の北に位置し、南東辺は墓道に面している。区画は不明瞭で、蔵骨器が確実に据えられているものは集石墓２である。集石墓１は石材がほとんど残存していない。集石墓２は小振りな石が主で、区画も不明瞭であるが、２基の蔵骨器が検出されている。西



第９図　集石墓２出土遺物（１/４）

端は備前焼の壺**1**と亀山焼の大形甕**3**を利用したもので、中央は亀山焼の甕**2**を利用している。集石墓３・４も区画は不明瞭で、南東には土壙墓３が接する。また集石墓３では土師質皿、集石墓４では銅銭が出土している。集石墓５は小振りな石で構成されている。集石墓６は石材が列を成しているが、単独で区画を形成するのか、集石墓７の一部と考えたほうが良いのか不明である。



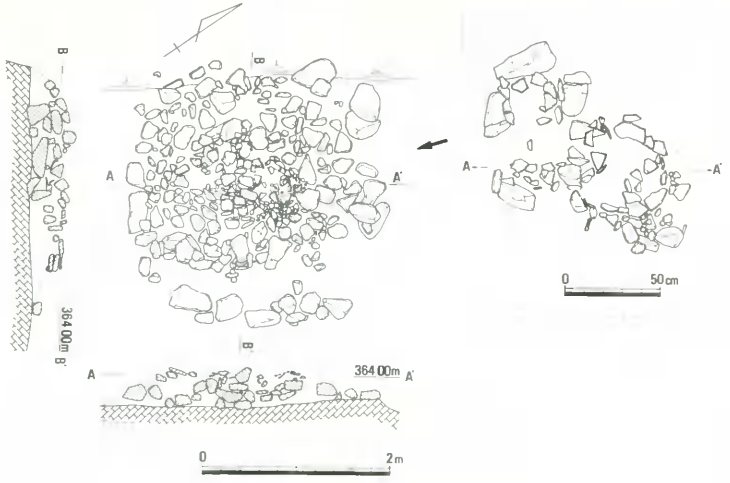
第10図　集石墓３出土遺物
（1/4・1/2）

1は備前焼の壺で、口縁部は玉縁状を呈し、やや張った肩部には３～４条からなる２段の沈線の間に波状文が施される。時期は鎌倉時代末期～南北朝の頃と思われる。**2**は亀山焼の甕で、口縁部は欠損している。底部は平底で、体部外面には粗い格子目タタキ、内面にはハケメが施されている。時期は鎌倉時代後半と思われる。**3**は亀山焼の大形甕で、口縁部は上下に拡張気味である。外面はやや細かい格子目タタキで内面はハケメである。時期は鎌倉時代末期～南北朝の頃と思われる。**4**は底部ヘラケズリの土師質皿である。

集石墓７（第11・12図、図版23）

調査した集石墓の中では最も区画を認識しやすいもので、集石墓１～６の北に単独で位置し、南東辺は墓道に面している。土壙墓２と前後関係があり、それより新しい。遺構の西端は削平されているが、平面形は方形を呈すると思われ、規模は南北で280㎝を測る。周囲は比較的大きな石が巡っており、その中は小振りな石、また特に蔵骨器の周辺には円礫が用いられている。主には石を積んだものと考えられるが、石の間には灰褐色砂質土が認められ、石が浮く状態になるものがあるため盛土も施されていたと思われる。鉄釘などが混じっており、土壙墓２を削平した土などを用いていると思われる。高さは48㎝を測る。

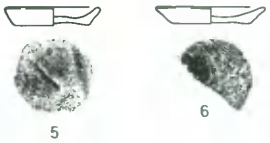
集石の上面、中央付近で２基の蔵骨器をかろうじて検出している。いずれも復元すると大きな器種であるが、検出状況は破片の状態で、集石との接点には土器の底部はおろか破片も検出されなかった。

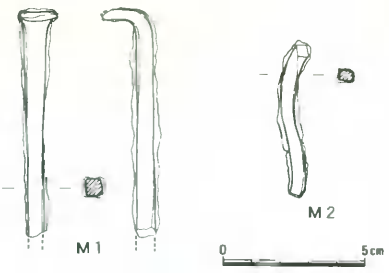


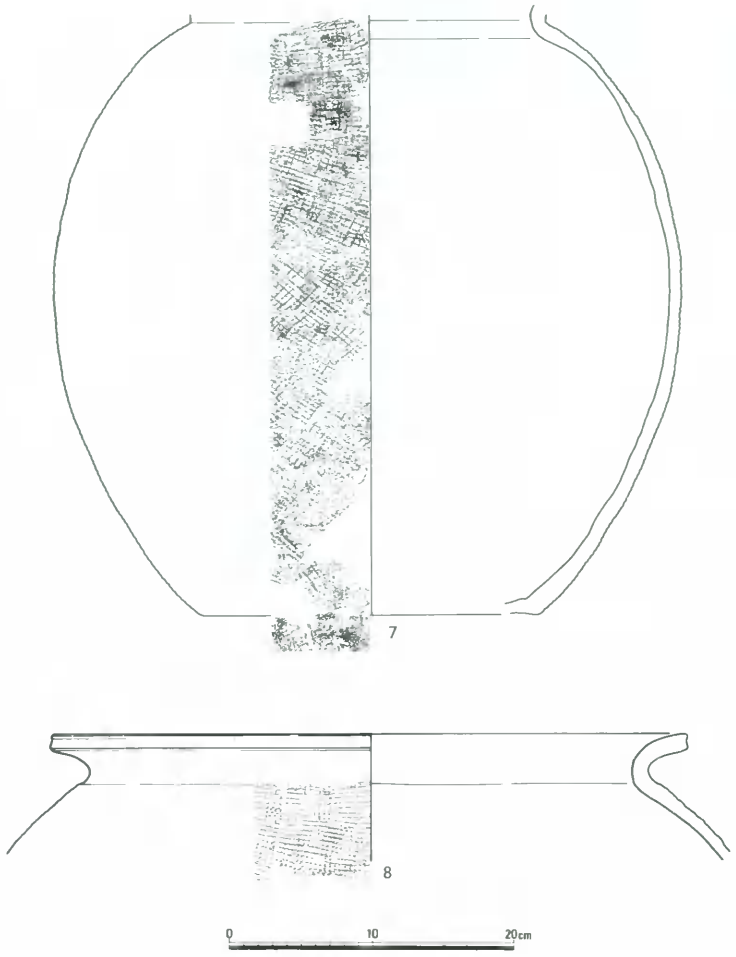
第11図　集石墓７（1/60・1/30）

おそらく一部を打ち欠いたものを据えたと思われる。

7・8は亀山焼の大形甕である。**7**は平底で、体部が縦に長く最大径がほぼ中央に当たる。あまり多くない器形である。**8**は口縁部が強く外反し、端部は中央が窪んでいる。時期は鎌倉時代末期～南北朝の頃と思





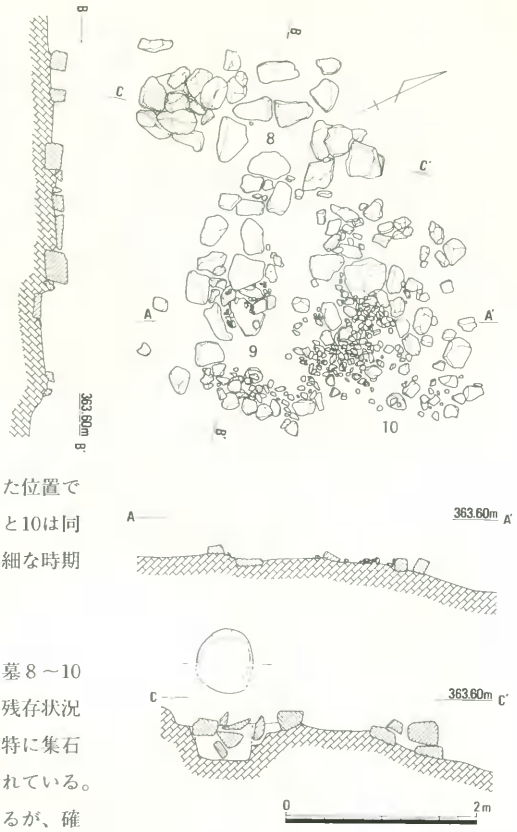


第12図　集石墓７出土遺物（1/4・1/2）

われる。他に底部回転糸切りの土師質小皿**５・６**も出土している。

集石墓８～10（第13図）

集石墓８～10は丘陵の最高所から北へやや下がった場所、Ｅ－６の西に位置する。南東辺は谷状を呈する墓道に面している。集石墓８は西に位置し土壙墓１と接する。残存状況は悪く、比較的大きな石が散在しているだけで、確実に伴う蔵骨器や遺構は確認されなかった。集石墓９は南に位置する。比較的大きな石が細長く検出され、２個体分の亀山焼の甕の破片が出土した。集石墓10は蔵骨器は確認されていないが円礫が多く分布しており、その北の外れた位置で火葬骨が集中して見られた。この集石墓９と10は同一区画となる可能性も高いと思われる。詳細な時期は不明である。



第13図　集石墓８～10（１/60）

集石墓11～13（第７図）

集石墓11～13は調査区３区の北端、集石墓８～10からさらに北へ下がった場所に位置する。残存状況は非常に悪く、石が疎らに散在している。特に集石墓13はその大半を後世の造成により削平されている。集石の間から小皿などの破片が出土しているが、確実に伴う蔵骨器や遺構は確認されなかった。詳細な時期は不明である。

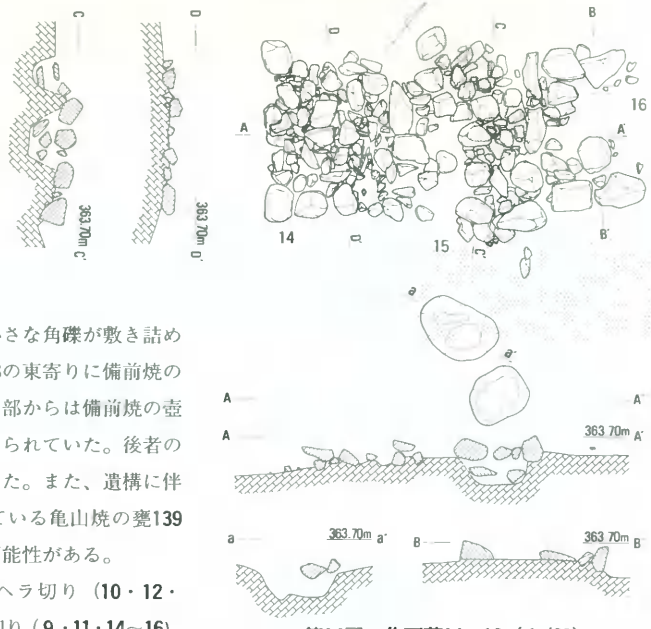
集石墓14～16（第14図、図版24）

集石墓14～16は調査区３区の西端、Ｅ－５の南に位置する。北西辺は墓道に面している。区画の中で確実に蔵骨器が据えられていたものは認められないが、集石墓14では集石の下から備前焼の破片が多く認められた。集石墓14は西辺と南辺が比較的明瞭で、大振りな石材を並べている。区画の平面形は長方形で、規模は西辺190㎝、南辺130㎝を測る。区画の中は周囲に比べ小振りな石材が用いられている。集石墓15は土壙２基が同じ位置を占めており、本来の形態は不明であるが、集石墓14と16に挟まれた190×170㎝のほぼ方形の集石墓であったと思われる。集石墓16は区画内の石材がほとんど残存していない。また東辺も残存していないが、東の集石墓17と同一区画になる可能性もある。他の３辺は大振りな石材を並べており明瞭である。詳細な時期は不明である。

集石墓17・18（第15・16図、図版24・25・75・78）

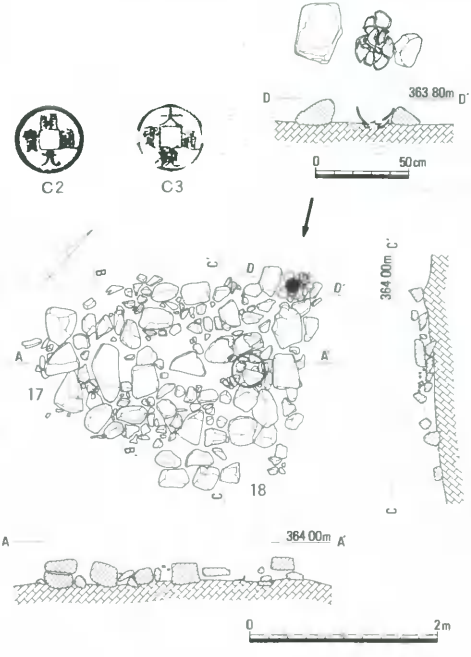
集石墓17・18は集石墓14～16の北東に隣接、Ｅ－５の東に位置する。北西辺は墓道に面している。区画の中で確実に蔵骨器２基が据えられていたのは集石墓18である。集石墓17は大振りな石材を３つ

並べたものであるが、集石墓18と同一区画を構成するものである可能性がある。集石墓18は240×200cmを測り、平面長方形を基本とするが北角と東辺に張り出しが認められる。図の区画内の空白部分には小さな角礫が敷き詰められていた。集石墓18の東寄りに備前焼の壺**23**、北角の張り出し部からは備前焼の壺**24**が蔵骨器として据えられていた。後者の中には銅銭が入っていた。また、遺構に伴わない遺物で図示している亀山焼の甕**139**がこの集石墓に伴う可能性がある。



第14図　集石墓14～16（1/60）

土師質小皿は底部ヘラ切り（**10**・**12**・**13**・**17**～**20**）と回転糸切り（**9**・**11**・**14**～**16**）がある。備前焼では雀口を有する小形壺**21**、壺では口縁端部がわずかに面をもっておさまる**22**・**23**、わずかに玉縁状になる**24**、外反し玉縁状になる**25**がある。時期は室町時代前半と思われる。**26**は亀山焼の器形を模倣したような土師質の甕で、内外面ともハケメを施す。銅銭は2点出土している。

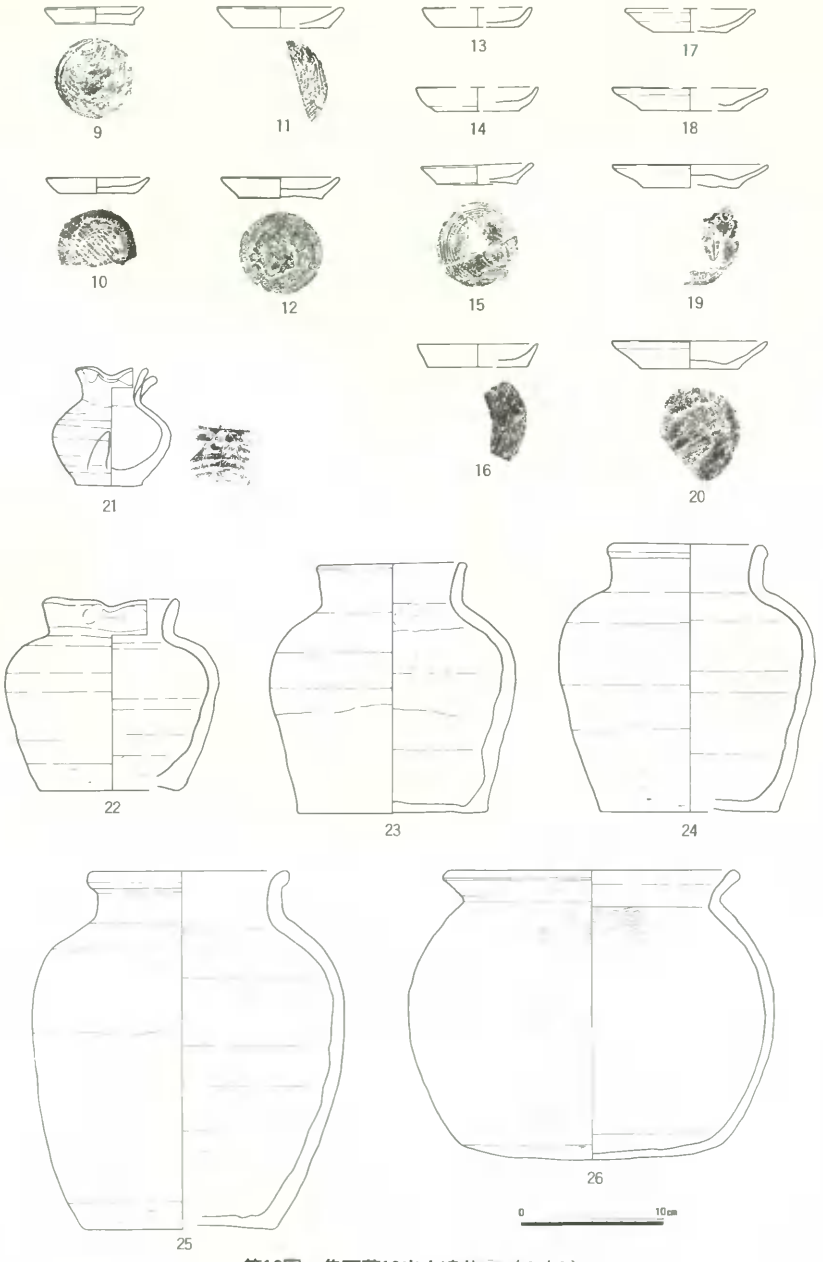


第15図　集石墓17・18（1/60・1/30）・出土遺物①（1/2）

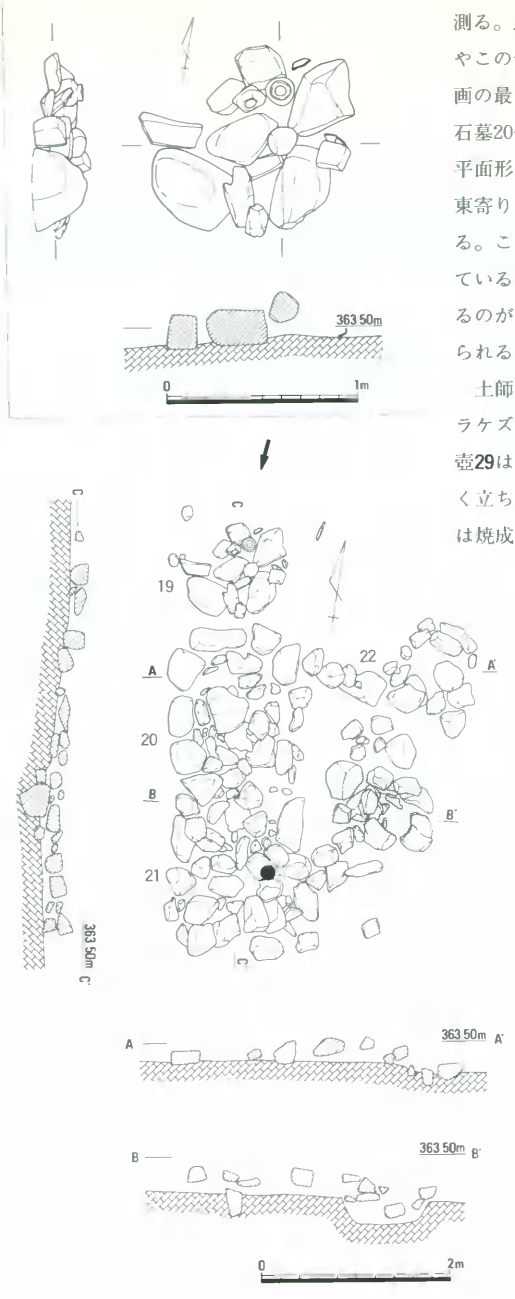
集石墓19～22（第17・18図、図版25・26・78・80）

集石墓19～22は集石墓17・18から南に下がった地点、F－5の東に位置する。他の集石墓と比較して配列が異なっており南北に繋がっている。集石墓19は区画の最も北に位置する集石墓である。北辺は欠損していると思われるが、平面形は方形で規模は比較的小さく1辺110cmを測ると考えられる。区画の北寄りに蔵

骨器として備前焼の壺29が据えられており周囲を大振りな石材で囲んでいる。この他に土師質小皿や備前焼の小形壺も出土している。集石墓20は区画の中央に位置し、平面は方形で規模は１辺150㎝を



第16図　集石墓18出土遺物２（１/４）



第17図　集石墓19～22（1/30・1/60）

測る。比較的大振りな石材を用いているが、蔵骨器やこの他の遺構は確認できなかった。集石墓21は区画の最も南に位置し、東は土壙墓82が隣接する。集石墓20等に比べるとやや小振りな石材を用いている。平面形は長方形で規模は190×150cmを測る。区画の東寄りに蔵骨器として備前焼の壺**31**が据えられている。この他に南西角の石の間から土師質皿が出土している。集石墓20の北東角から石が斜めにのびているのが集石墓22で、この石が南辺に相当すると考えられる。残存状況は悪いものである。

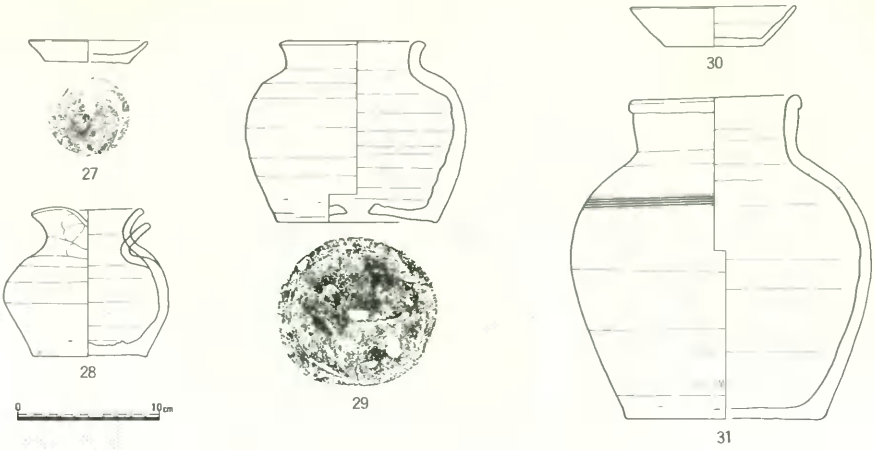
土師質小皿**27**は底部回転糸切りで、皿**30**は底部ヘラケズリを施す。備前焼の小形壺**28**は雀口を有する。壺**29**はやや小形でずんぐりした体部で、口縁部は短く立ち上がり、端部は外方へわずかに出る。底部には焼成後穿孔が認められる。時期は室町時代後半と思われる。壺**31**は口縁が垂直に立ち上がり、端部が玉縁状を呈する。肩に５条の沈線が施される。時期は室町時代前半と思われる。

集石墓23（第７図）

集石墓23は集石墓19～22の東に単独で位置する。比較的大振りな石材が用いられている。平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は115×80cmを測る。蔵骨器やその他の遺構や遺物は確認できなかった。詳細な時期は不明である。

集石墓24～39（第19～34図、図版26～29）

集石墓24～39は調査区３区のほぼ中央、最高所からやや南東に下がった緩斜面に展開する。大小さまざまな区画が集合しており、北西側と東側と南側に墓道が認められ、これらにより三角形状に集石が確認される。集石墓は、これらの墓道に沿うように区画が形成され拡大しているようである。調査された集石墓としては時期的に古い段階のものを多く含むと思われる。



第18図　集石墓19（左）・21（右）出土遺物（１/４）

集石墓24（第19・20図、図版26・74・80）

集石墓24は北西角に位置する。北辺は墓道に面しており土壙墓４・５と接する。区画内の石材が希薄であるが、北辺と西辺に相当する部分には大振りな石材が配されている。平面形は長方形を基本としているが、東角に張り出し部が認められる。規模は300×250㎝を測る。区画の中央北寄りに蔵骨器が据えられていたようで亀山焼の甕**35**の破片が検出された。この他に土師質小皿が石の間から出土している。**32**は底部ヘラ切りの後ナデを施しているが、**33・34**は不明である。**35**は口縁部が欠損しており、最大径は体部のほぼ中央にある。時期は鎌倉時代後半の頃と思われる。

集石墓25（第19・21図）

集石墓25は24の南角に取り付くように認められる。小振りな石が主だが石材の欠損などがあり、区画は不明瞭である。蔵骨器やこの他の遺構は検出されなかった。出土遺物としては底部糸切りの土師質小皿**37**とヘラ切りの後ナデを施した**38**と剥刀**M３**である。詳細な時期は不明である。

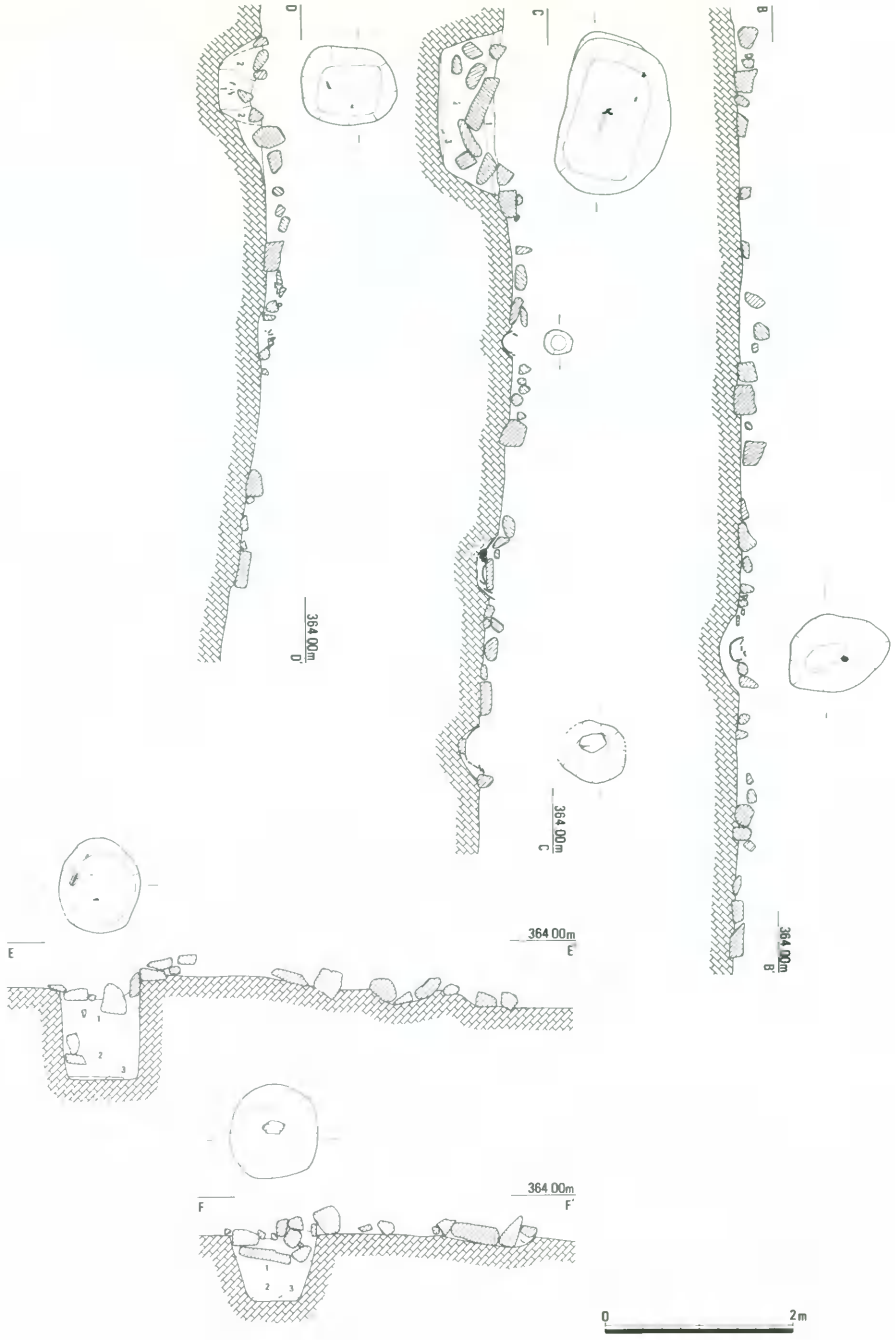
集石墓26（第19・21図）

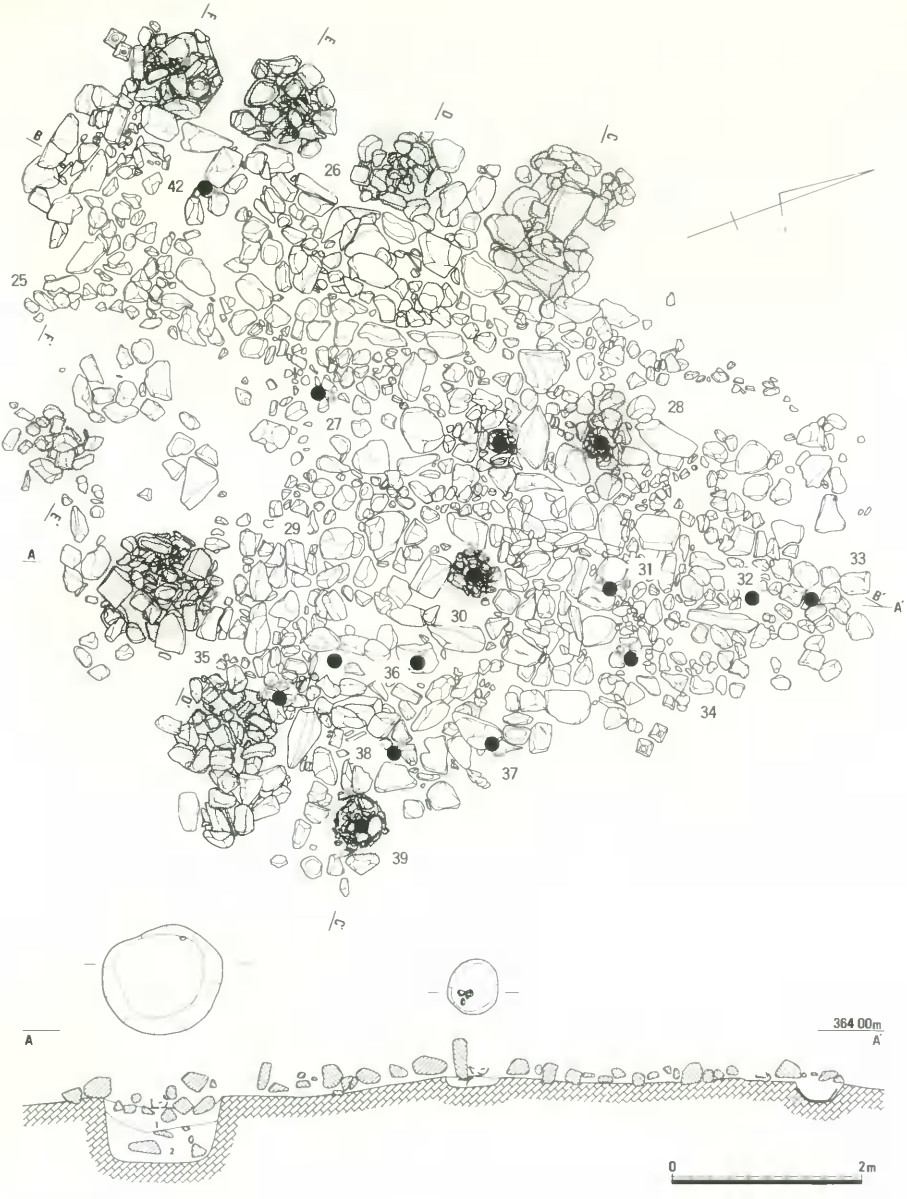
集石墓26は北辺中央に位置する。北辺は墓道に面しており土壙墓６と接する。北辺には大振りな石材が配されている。平面形は長方形を基本としており、規模は200×110㎝を測る。蔵骨器やこの他の遺構は検出されなかった。石の間から底部回転糸切りの土師質小皿39が出土しているが、詳細な時期は不明である。

集石墓27（第19・21図、図版27・74・79）

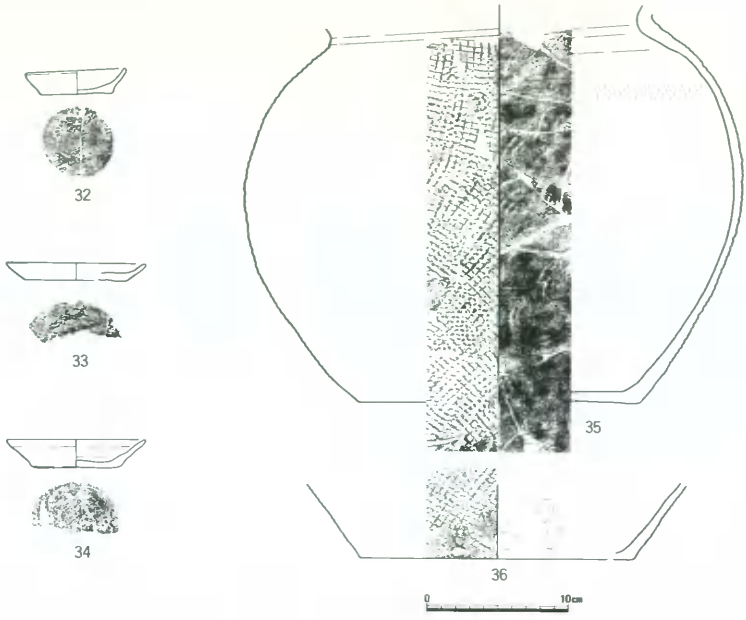
集石墓27は26の東に接する。区画の方向性は南北に近い。区画内の石材は希薄であるが、平面形は長方形を基本としており、規模は200×160㎝を測る。区画の南寄りに蔵骨器が据えられていたようで亀山焼の甕**40**の破片が検出された。この他に摺鉢も出土している。**40**は口縁部が短く屈曲し、端部に面を有する。最大径は体部中央にあり、内面はナデを施している。時期は鎌倉時代後半と思われる。**41**は外面にハケメを施し、内面に放射状の櫛描き条線が見られる。口縁部は肥厚し、端部は水平な面を有する。

集石墓28（第19・22図、図版27・74・80）

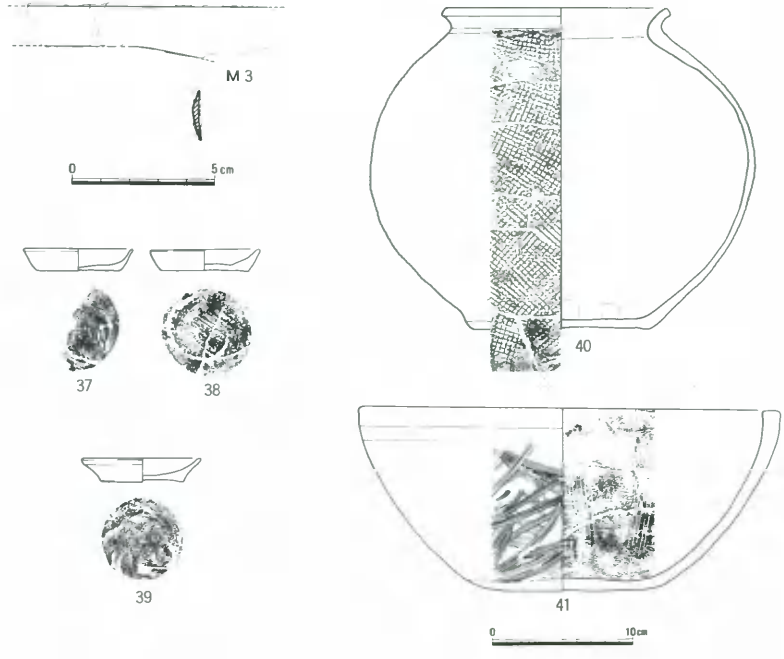

D
D'
364.00m
C
C'
364.00m
B
B'
364.00m
E
E'
364.00m
F
F'
364.00m
0
2m



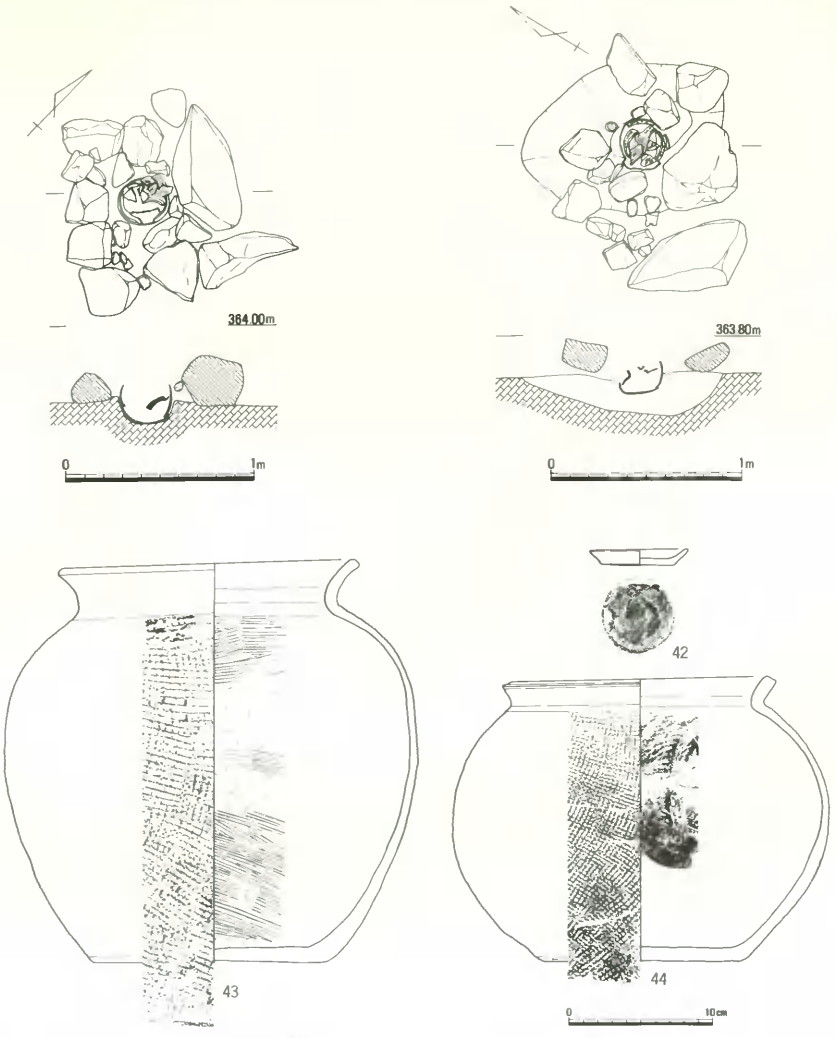
第19図　集石墓24～39（１/60）



第20図　集石墓24出土遺物（１/４）

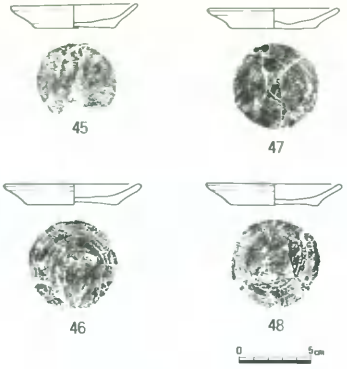


第21図　集石墓25（左上）・26（左下）・27（右）出土遺物（１/２・１/４）



第22図　集石墓28Ａ（左上）・28Ｂ（右上）（１/30）・出土遺物（１/４）

集石墓28は集石墓24～39の北東角に位置する。北辺は墓道に面しており土壙墓７と接する。遺構の構造や比較的古い時期のものと考えられるなど興味深い資料である。区画は明瞭でないが平面形は方形を基本としていると考えている。集石墓27と同一方向で長方形になる可能性が高い。また中央に仕切りがあり、２区画を認識できる。規模は１辺260㎝を測る。区画の南角とほぼ中央に蔵骨器が据えられている。前者は地山を掘り窪めて亀山焼の甕**43**を据えており、甕の下半分までを埋めている。周囲は大振りな石材で囲んでいる。後者は集石下面の地山にやや不整形な土壙が認められ、その真上に蔵骨器が据えられている。土壙はほぼ南北方向に主軸を取り、規模は114×84㎝、深さ22㎝を測る。



第23図　集石墓29出土遺物（１/４）

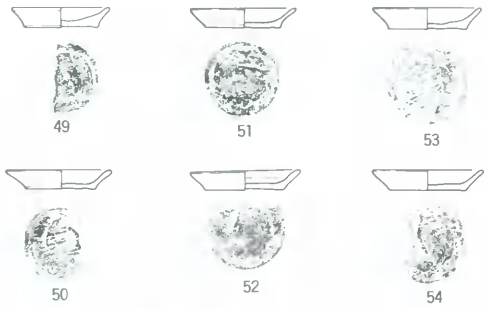
断面形は摺鉢状である。土壙内の埋土は炭粒を多く含む黒色砂質土で、土師質小皿が出土している。土壙掘り方の中央上面に亀山焼の甕**44**が下半分を埋めるように据えられ、周囲に石材が配されている。この他に区画外の北側にも火葬骨が検出されている。**43**は須恵質で、口縁部が外反しながら上方に伸び、端部は面を有する。肩部に最大径がある。**42**は底部ヘラ切りの後ナデを施す。**44**は須恵質で、口縁部が短く上方に屈曲する。端部は面を形成し、強いナデが施される。時期は鎌倉時代後半と思われる。

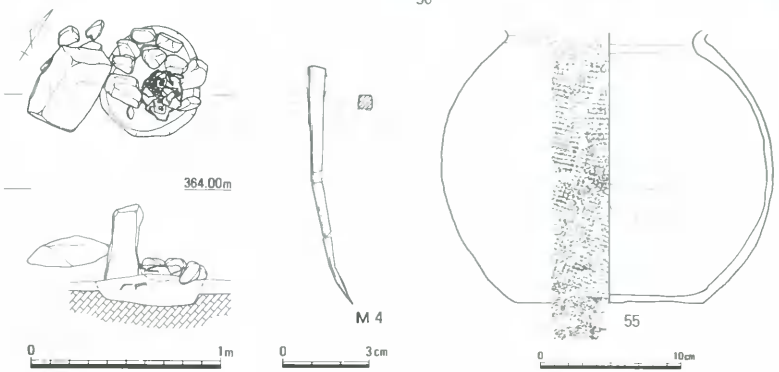
集石墓29（第19・23図、図版80）

集石墓29は27の東に位置し、区画は不明瞭である。蔵骨器やこの他の遺構は検出されなかった。出土遺物としては底部回転糸切りの土師質小皿**45**～**48**がある。詳細な時期は不明である。

集石墓30（第19・24図、図版28・74・80）

集石墓30は集石墓28の東に位置する。遺構の構造や比較的古い時期のものと考えられるなど興味深い資料である。区画はあまり明瞭でないが北辺と南辺には比較的大振りな石材が配されており、平面形は南北を指向する長方形を基本としている。規模は240×140cmを測る。区画の中央に墓標と思われる石が立っており、その脇に蔵骨器が据えられている。墓標は長さ45cm・幅15cmの方柱状の自然石が用いられている。これらの下面の地山には円形の土壙が認められる。土壙の規模は径60cm、深さ15cmを



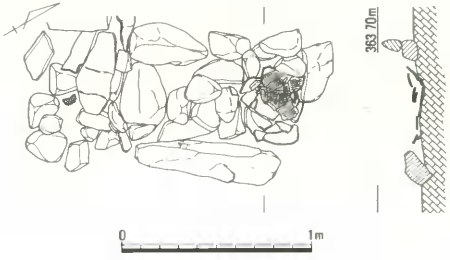


第24図　集石墓30（１/30）出土遺物（１/２・１/４）

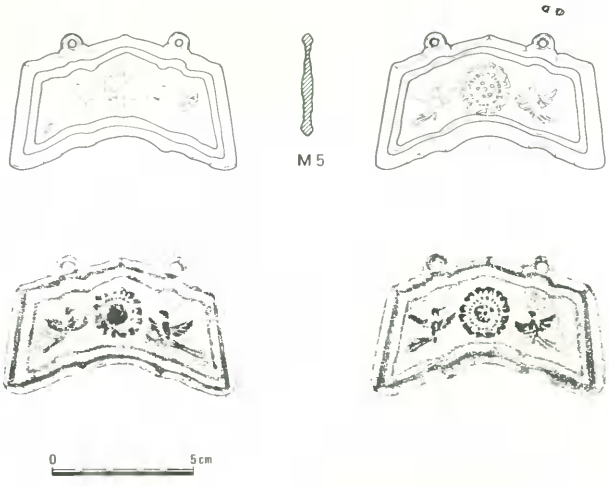
測る。床面は平坦で、土壙内の埋土は炭粒や焼土を含む黒褐色砂質土で、底部ヘラ切りの土師質小皿５枚が出土している。小皿は墓標の南前面の位置にかたまって埋まっており、**52・53・54**は伏せて重なり、**50・51**は立った状態で出土している。土壙掘り方の中央上面には口縁部を欠いた亀山焼の甕**55**が据えられ、周囲に円礫等の石材が配されている。この他に区画の南角と東角、蔵骨器の北にも火葬骨が検出されている。**49**のみ底部回転糸切りである。**55**は体部中央が最大径で、口縁部は短く屈曲すると思われる。時期は鎌倉時代後半と思われる。

集石墓31（第19・25～27図、図版29）

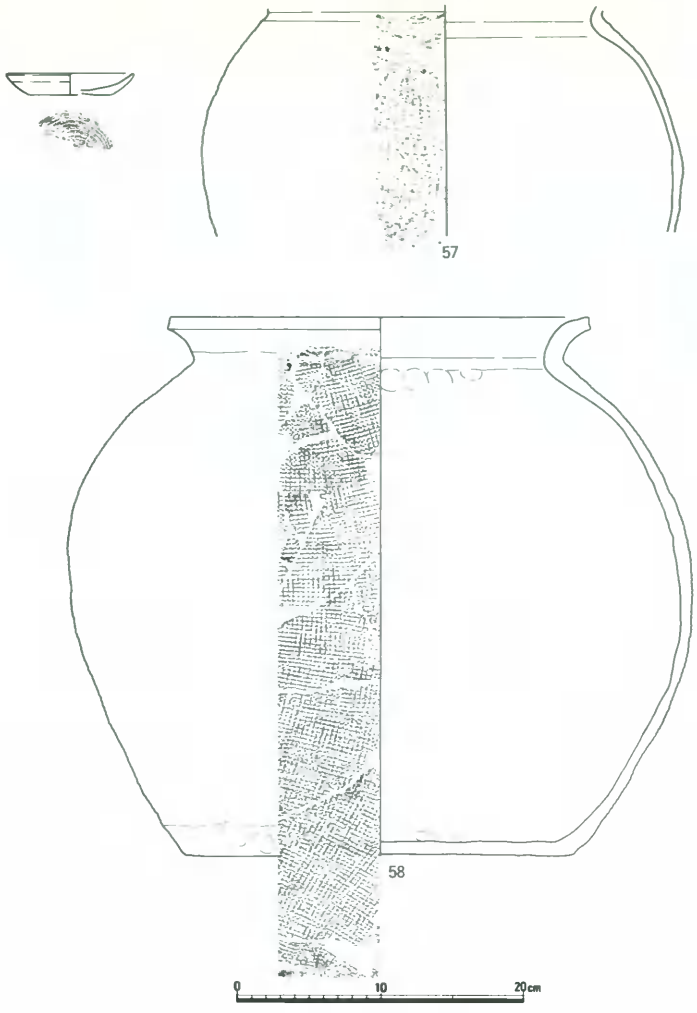
集石墓31は集石墓28の東に接する。周囲を他の集石墓で囲まれており、平面形は長方形を呈し、規模は105×75cmを測る。区画のほぼ中央に蔵骨器が据えられていたようで亀山焼の甕**57**の破片が検出された。この他に石の間から底部回転糸切りの土師質小皿や銅磬**M５**も出土している。**57**は口縁部が短く屈曲すると思われる。時期は鎌倉時代後半と思われる。**M５**は両面式の小形銅磬で、裾幅８cm・高さ4.8cm、厚さ４mmを測る。両面とも中央に蓮華文の撞座があり、この左右に１対の朱雀が配され



第25図　集石墓31（左）32（右）（１/30）



第26図　集石墓31出土遺物①（１/２）



第27図　集石墓31（上）出土遺物2）・32（下）出土遺物（１/４）

ている。よく使用されているようで全体的に磨耗しているが、特に片面は撞座を中心に著しい。遺構に伴うかどうかは明確でない。

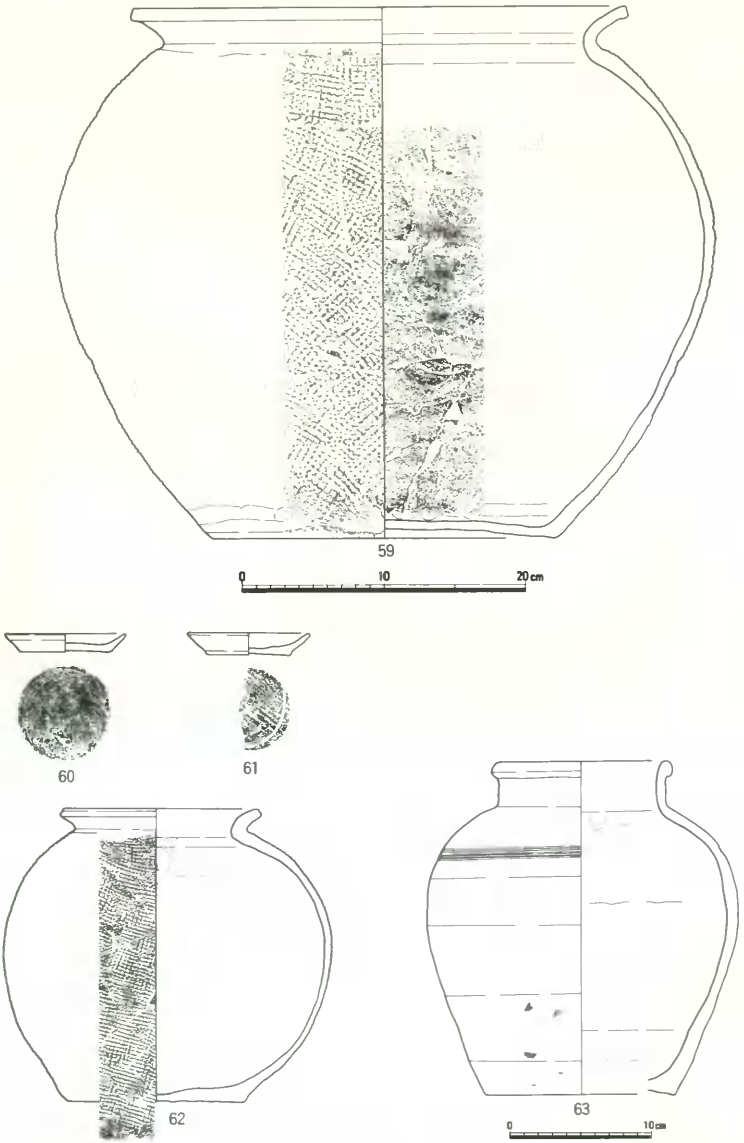
集石墓32（第19・25・27図、図版29）

集石墓32は集石墓31の北に隣接する。比較的時期が古いと思われる。周囲には比較的大振りな石材や横長の石材が配されており、平面形は南北を指向する長方形を呈し、規模は120×80cmを測る。区画の東寄りに地山をわずかに窪ませて蔵骨器が据えられている。亀山焼の甕**58**が据えられ、周囲に石材が配されている。**58**は口縁部が外反し、端部は面を形成し強いナデが施されている。体部の中央付

近に最大径がある。時期は鎌倉時代後半と思われる。

集石墓33（第19・28図）

集石墓33は集石墓24～39の北端に位置し、東辺は墓道に面している。比較的時期が古いと思われる。区画の平面形は南北を指向する長方形を呈し、規模は100×85㎝を測る。区画の中央に地山を掘り窪ませ蔵骨器が据えられている。亀山焼の甕**59**が下半分を埋め込むように据えられ、周囲に石材が配さ



第28図　集石墓33（上）・34（下）出土遺物（１/４）

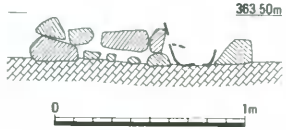
れている。**59**は口縁部が外反し、端部は面を形成する。体部中央付近に最大径がある。時期は鎌倉時代後半と思われる。

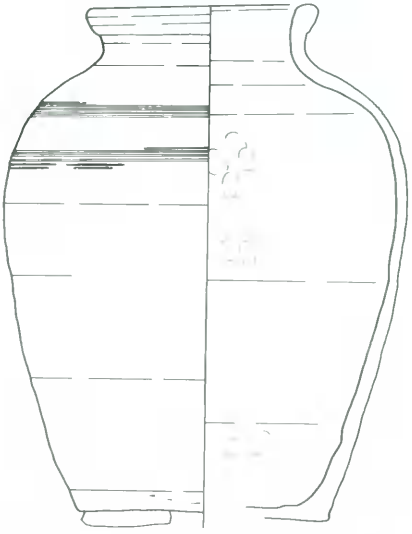
集石墓34（第19・28図、図版74）

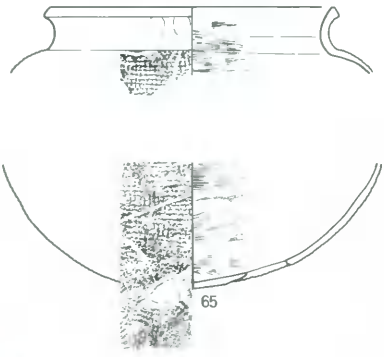
集石墓34は31・32の東に接し、東辺は墓道に面している。平面形は長方形を呈し、規模は180×90cmを測る。２区画に分けられると考えられ、２ヵ所で蔵骨器が破片で検出された。この他に土師質小皿も出土している。**60**は底部回転糸切り、**61**はヘラ切りである。**62**は亀山焼の甕で、口縁部が短く強く屈曲し、端部に面を形成する。**63**は備前焼の壺で、口縁部は垂直に立ち上がり、端部は玉縁である。肩部に３～４条の沈線を施す。時期は鎌倉時代末期～南北朝と思われる。

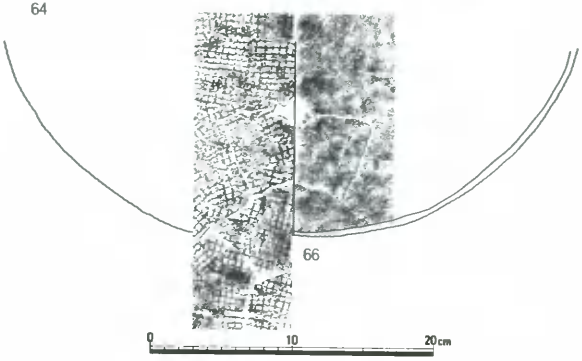
集石墓35（第19・29・30図、図版29・30・77）

集石墓35は29の東に位置する。周囲に大振りな

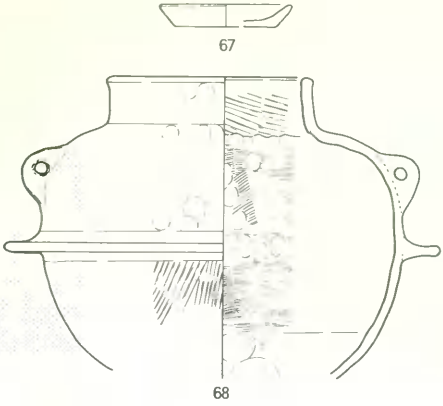


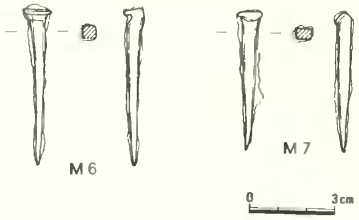






第29図　集石墓35（１/30）・出土遺物①（１/４）



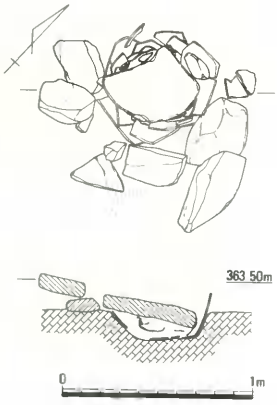


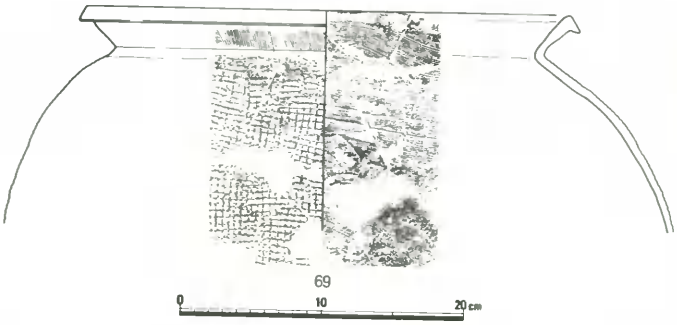
第30図　集石墓35出土遺物②（１/４・１/２）

石材を配しており、平面形は長方形ををを呈し、規模は135×90cmを測る。蔵骨器は、区画の北端に備前焼の壺**64**、南角の石の下に亀山焼の甕**65**・**66**が据えられている。この他に底部回転糸切りの土師質小皿**67**や羽釜、鉄釘などが出土している。**64**は口縁端部が帯状に肥厚し、肩部上部に４～５条、その下に５～６条の沈線を施す。**65**は口縁端部が上方に伸び、丸い底部に内側から穿孔が認められる。時期は室町時代前半である。

集石墓36（第19・31・32図、図版30）

集石墓36は30の東に位置し、区画は不明瞭である。推定される区画の中央に地山を掘り窪ませ蔵骨器が据えられている。備前焼の大形甕**70**の底部までが埋め込まれ、周囲に石材が配されている。蔵骨器上面には平らな石材が乗っており、この石を除去すると不完全な火葬が行われたと見られる頭骨や骨盤、四肢骨など（成人女性、濱田氏鑑定）がまとめられた状態で出土し





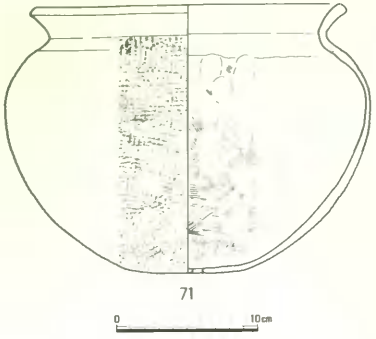
第31図　集石墓36（１/30）・出土遺物①（１/４）

第32図　集石墓36出土遺物(2)（１/４）

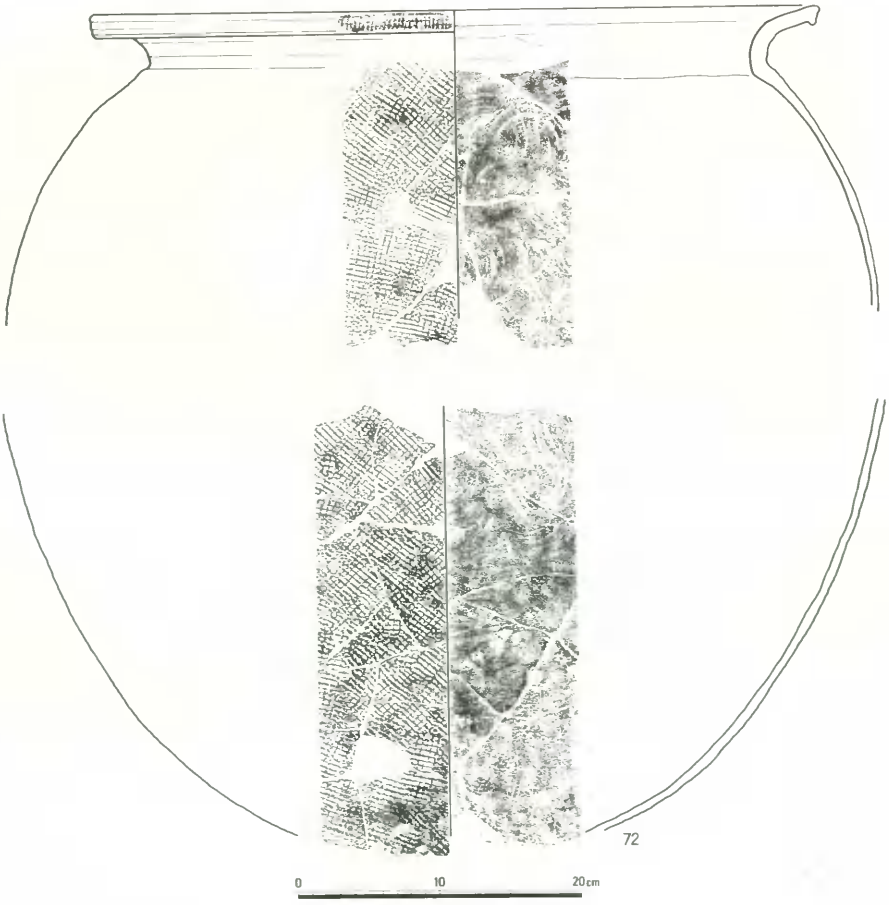
た。また、これらの骨を覆うように亀山焼の大形甕**69**の破片が出土している。**69**は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部が下方に拡張している。**70**は内外面が横方向の工具ナデ、外面底部付近は縦方向の工具ナデを施す。時期は南北朝の頃と思われる。

集石墓37（第19・38図、図版31）

集石墓37は36の北に接し、東辺は墓道に面している。区画内の石材は希薄で、区画も不明瞭である。東辺の石の下から蔵骨器が破片で検出された。**71**は亀山焼の鉢で口縁端部は肥厚している。底部はわずかに平底で、穿孔が見られる。時期は鎌倉時代末期～南北朝の頃と思われる。



第33図　集石墓37出土遺物（１/４）



第34図　集石墓39（１/30）・出土遺物（１/４）

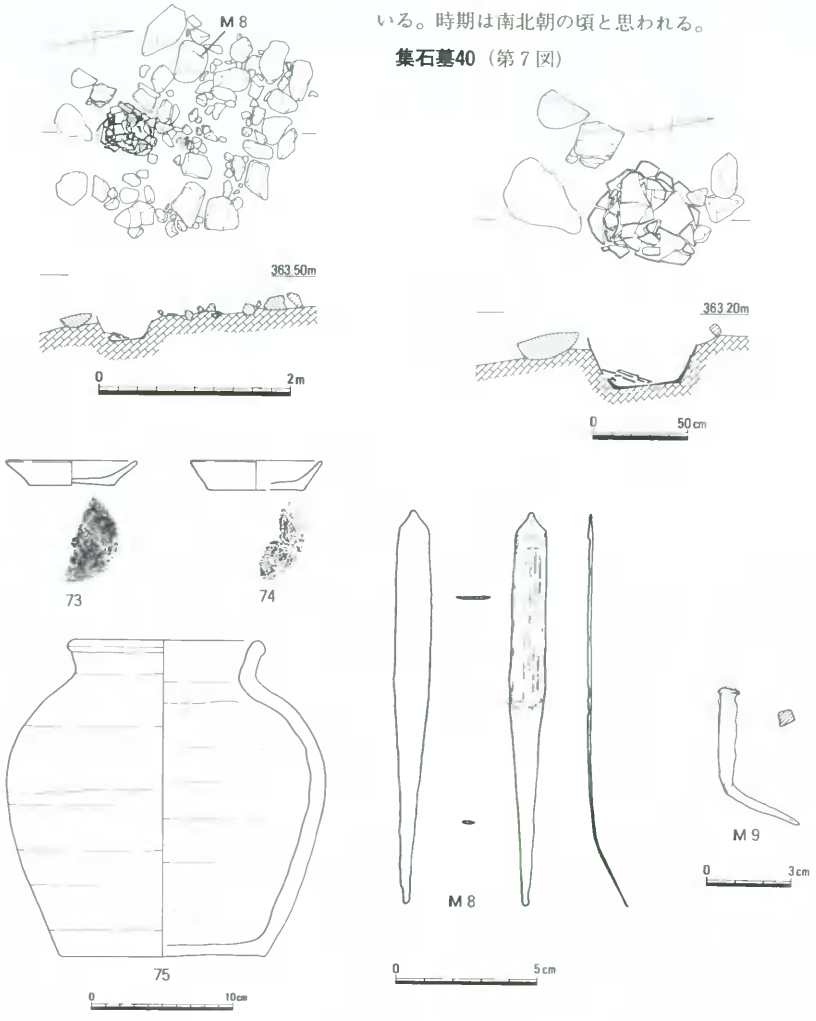
集石墓38（第19図）

集石墓38は集石墓35・36と39の間に位置し、区画も不明瞭である。しかし両端に近い部分で蔵骨器として利用されたと思われる亀山焼の破片や中央では火葬骨が出土した。詳細な時期は不明である。

集石墓39（第19・34図、図版31）

集石墓39は集石墓24～39の東端に位置し、北辺は墓道に面している。区画の平面形は方形を呈し、規模は１辺130㎝を測る。区画中央の地山に蔵骨器よりも大きめな円形土壙を掘り、床面に平らな石を置き、その上に底部の欠損した亀山焼の大形甕**72**が据えられている。土壙は径72㎝、深さ21㎝を測る。**72**は口縁部が強く外反し、端部は下方に拡張している。時期は南北朝の頃と思われる。

集石墓40（第７図）

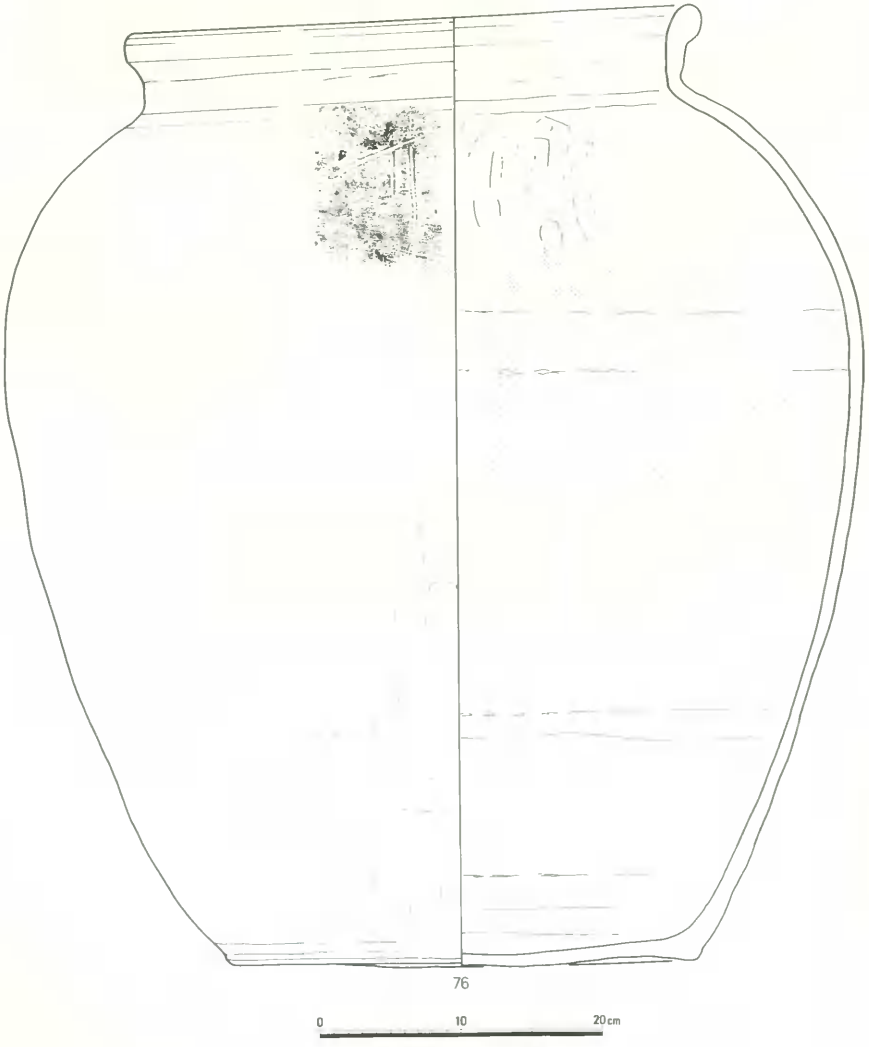


第35図　集石墓41（１/60・１/30）・出土遺物①（１/４・１/２）

集石墓40は集石墓24～39の南に下がった地点に位置し、区画も不明瞭である。蔵骨器やその他の遺構や遺物は確認されなかった。詳細な時期は不明である。

集石墓41（第35・36図、図版31・32・75・78・82）

集石墓41は39の南に位置する。周囲に比較的大振りな石材を配しており、平面形は方形を呈し、規模は1辺240cmを測る。区画の中央南寄りで地山を掘り窪ませ蔵骨器が据えられている。備前焼の大形甕**76**の底部までが埋め込まれ、周囲に小振りな石材が配されている。この他に石の間から底部回転糸切りの土師質小皿、備前焼の壺や鉄釘**M 9**、西辺の石の下から笄が出土している。**75**は口縁部立ち



第36図　集石墓41出土遺物2（1/4）

上がりが短く外傾し、端部はわずかに玉縁状を呈する。**76**の口縁端部は玉縁状を呈し、胴上部内面はヘラ削りが施される。時期は室町時代前半と思われる。**M 8** は銅製の笄で長さ13.8㎝・幅1.2㎝、厚さ２㎜を測る。

集石墓42～44（第37・38図、図版32・75・77・80）

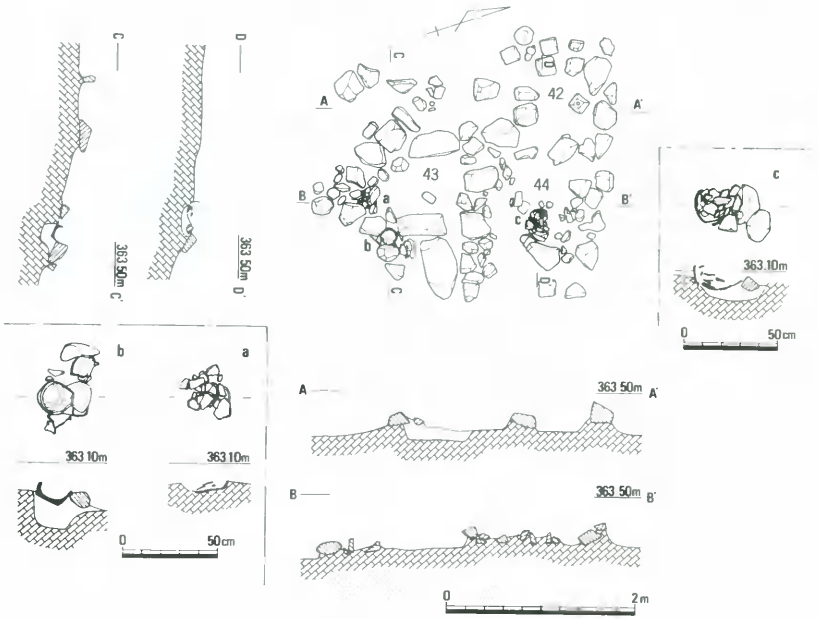
集石墓42～44は39の東に位置する。石材は希薄であるが区画は比較的明瞭である。集石墓42は西端に位置し、平面形は長方形を呈し、規模は120×70㎝を測る。蔵骨器やその他の遺構や遺物は確認されなかった。

集石墓43は南に位置し、平面形は長方形を呈し、規模は200×140㎝を測る。区画の中央南寄りで地山を掘り窪ませ３基の蔵骨器が据えられている。西のものは土師質の甕**78**で、東は備前焼の壺**79・80**である。この他に土師質小皿や備前焼の壺が出土している。**78**は口縁部が短く、肩が強く張る。**79・80**は体部がずんぐりしており、口縁部の立ち上がりはやや短く外傾し、端部は玉縁状を呈する。**81・82**は口縁部の立ち上がりが外傾し、端部は玉縁状を呈する。時期は室町時代前半と思われる。

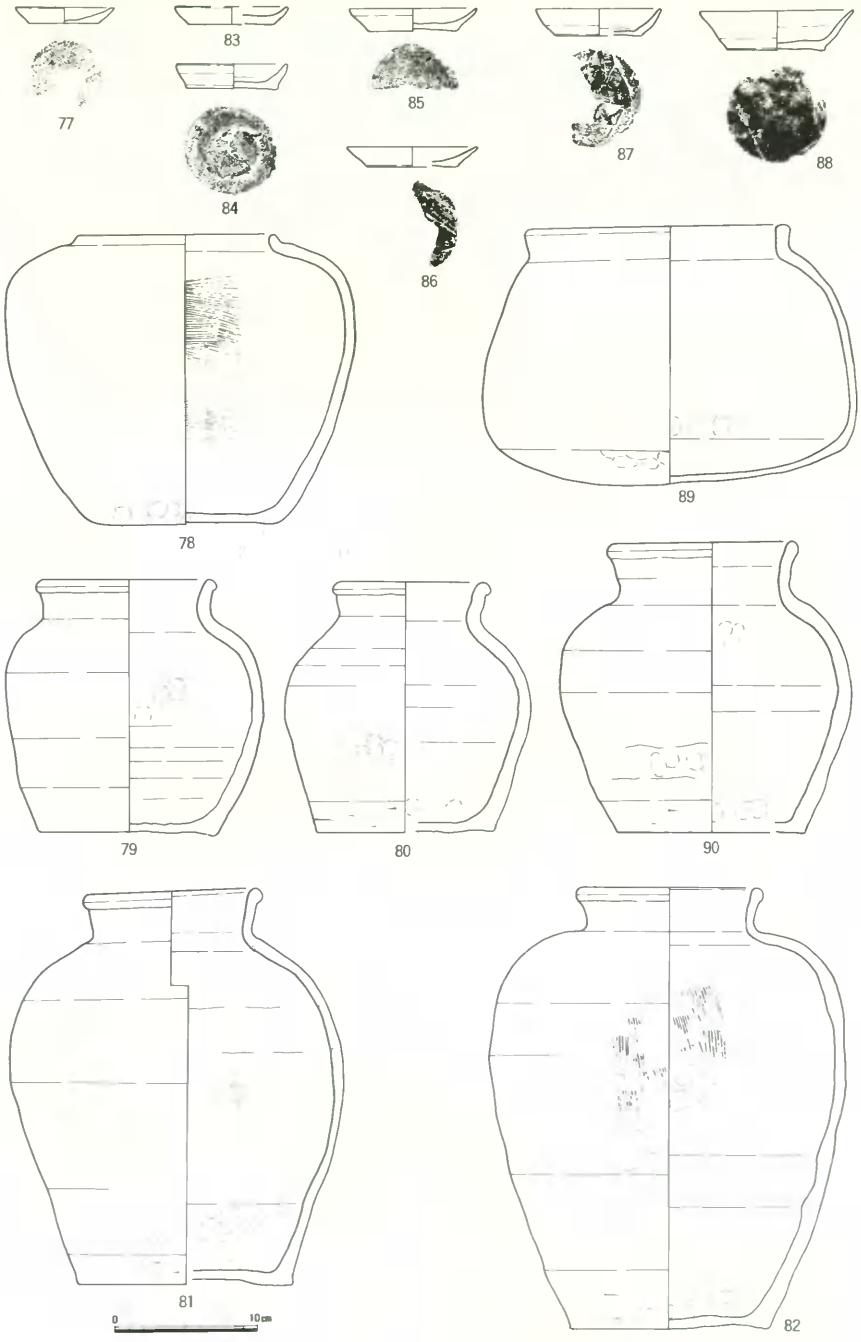
集石墓44は東に位置し、平面形は長方形を呈し、規模は200×165㎝を測る。区画の中央で地山を掘り窪ませ蔵骨器が据えられている。この他に土師質小皿や備前焼の壺等が出土している。小皿は底部ヘラ切り（**84・86**）と回転糸切り（**83・85・87**）のものがある。**89**は土師質土器で、口縁部が垂直に立ち上がり、底部が膨らんでいる。**90**は口縁部の立ち上がりがやや外傾し、端部はわずかに玉縁状を呈する。時期は室町時代前半と思われる。

集石墓45（第39図、図版33・75・76・79）

集石墓45は44の東に位置する。石材は西半分がほとんど欠損しているが、平面形は長方形を呈し、



第37図　集石墓42～44（１/60・１/30）



第38図　集石墓43（77～82）・44（83～90）出土遺物（１/４）

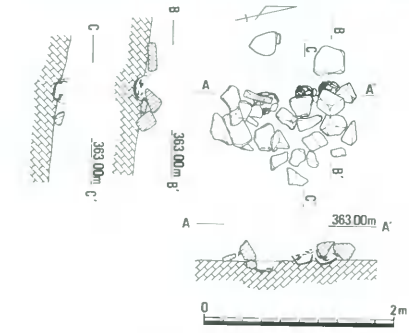
規模は160×120cmと推定される。区画の中央東寄りで南北方向に並んで、地山を掘り窪ませ３基の蔵骨器が据えられている。南のものは亀山焼の甕で、中央は備前焼の壺**91**、北のものは備前焼の壺**92**である。この他に備前焼の摺鉢**93**が出土しており、これは南の亀山焼の蔵骨器の蓋になっていたと思われる。**91**は口縁部が垂直に立ち上がり、端部はわずかに玉縁状を呈する。**92**は三耳壺で、口縁端部がわずかに玉縁状を呈する。**93**は口縁端部が上下に拡張し、内面に放射状に櫛描き条線が施されている。

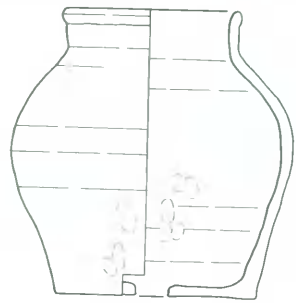
集石墓46（第40図）

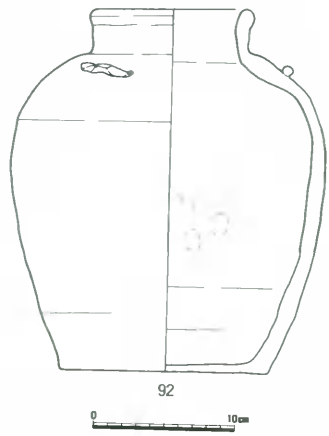
集石墓46は43の南に位置する。区画は不明瞭であるが、規模は比較的小さい。底部を欠いた土師質土器の羽釜**94**が蔵骨器として据えられている。詳細な時期は不明である。

集石墓47・48（第41・42図、図版74・77・78）

集石墓47・48は集石墓45の南に位置する。調査区の東端に近くかなり下がった地点である。石材は希薄で、南辺は欠損しているが、それ以外の周囲の石材が残存し、区画は比較的明瞭である。集石墓47は平面形は方形を呈し、規模は１辺300cm前後を測ると推定される。東辺には土壙墓122が、





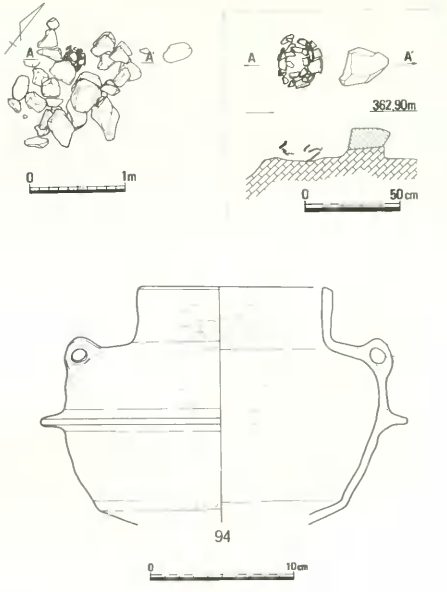


第39図　集石墓45（１/60）・出土遺物（１/30）

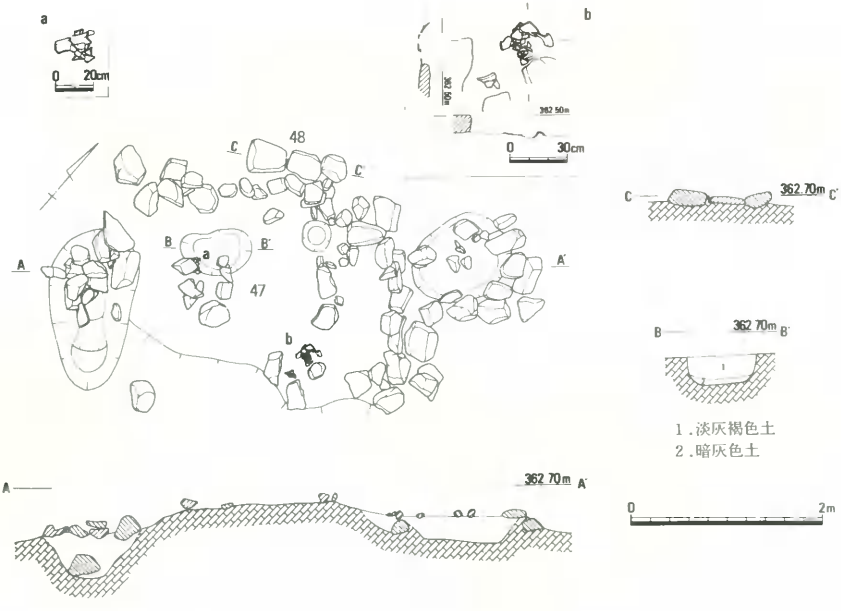
西辺には土壙墓118が接している。区画の中央西寄りと東寄りで地山を掘り窪ませ蔵骨器が据えられている。西のものは亀山焼の甕100で、東は亀山焼の壺99である。この他に備前焼の壺や銅銭が出土している。集石墓48は47の北辺に取り付いた石列である。蔵骨器やそれ以外の遺構や遺物は確認されなかった。95は雀口を有する小壺で、底部回転糸切りである。96は口縁部が短く強く屈曲し、端部は丸く納まる。97は口縁部が垂直に立ち上がり、端部はわずかに玉縁状を呈する。98は三耳壺で口縁端部は玉縁状を呈する。底部に焼成後穿孔が認められる。99と100は口縁部が「Ｓ」字状に屈曲し、端部は上方に伸びる。時期は室町時代前半と思われる。

集石墓49（第43図、図版33）

集石墓49は集石墓24～39の北に単独で位置し、墓道に面している。残存状況は悪いが、地山を掘り窪ませ蔵骨器が据えられている。



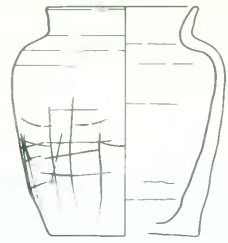
第40図　集石墓46（１/60・１/30）
・出土遺物（１/４）

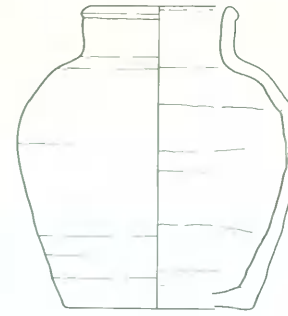


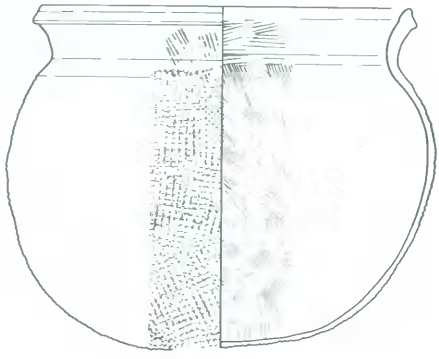
第41図　集石墓47・48（１/60・１/30）

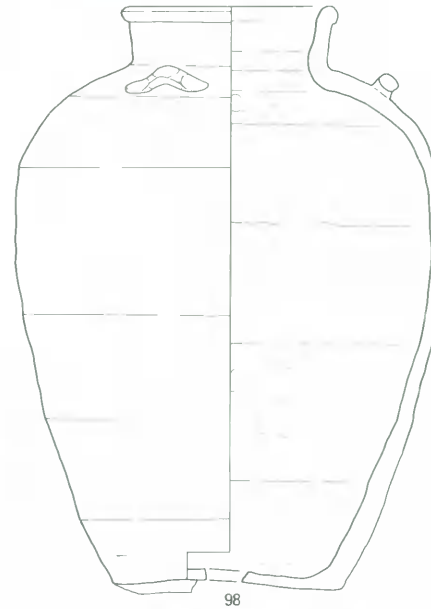
C４

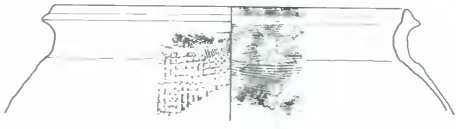
95

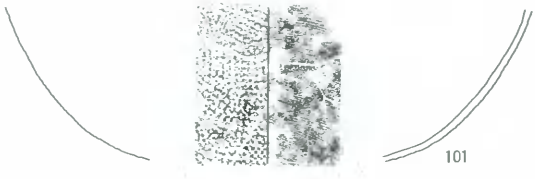

96


97


99


98


100

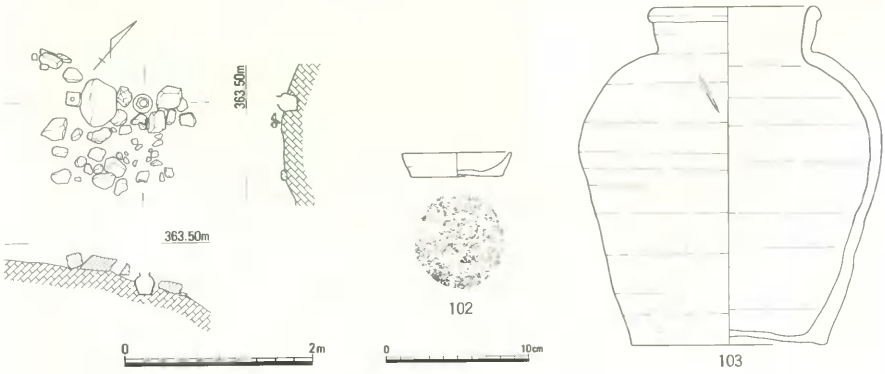

101

第42図　集石墓47出土遺物（１/２・１/４）

備前焼の壺**103**が下半分を埋め込むように据えられ、周囲に小さい石材が配されている。この他に土師質小皿が出土している。**103**は口縁部立ち上がりがやや外傾し、端部はわずかに玉縁状を呈する。時期は室町時代前半と思われる。

集石墓50～64（第44～51図、図版34）

集石墓50～64は調査区3区の東半、最高所から1～2m下がった緩斜面に展開する。大小さまざまな区画が集合しており、西側と東側に墓道が認められる。これらの墓道に沿うように区画が形成され



第43図　集石墓49（1/60）出土遺物（1/4）

拡大しているようである。調査された集石墓としては時期的には新しい段階のものを多く含むと思われる。斜面の下方には造成土が認められ、集石の石材は地山から浮いているものが多い。

集石墓50（第44・45図）

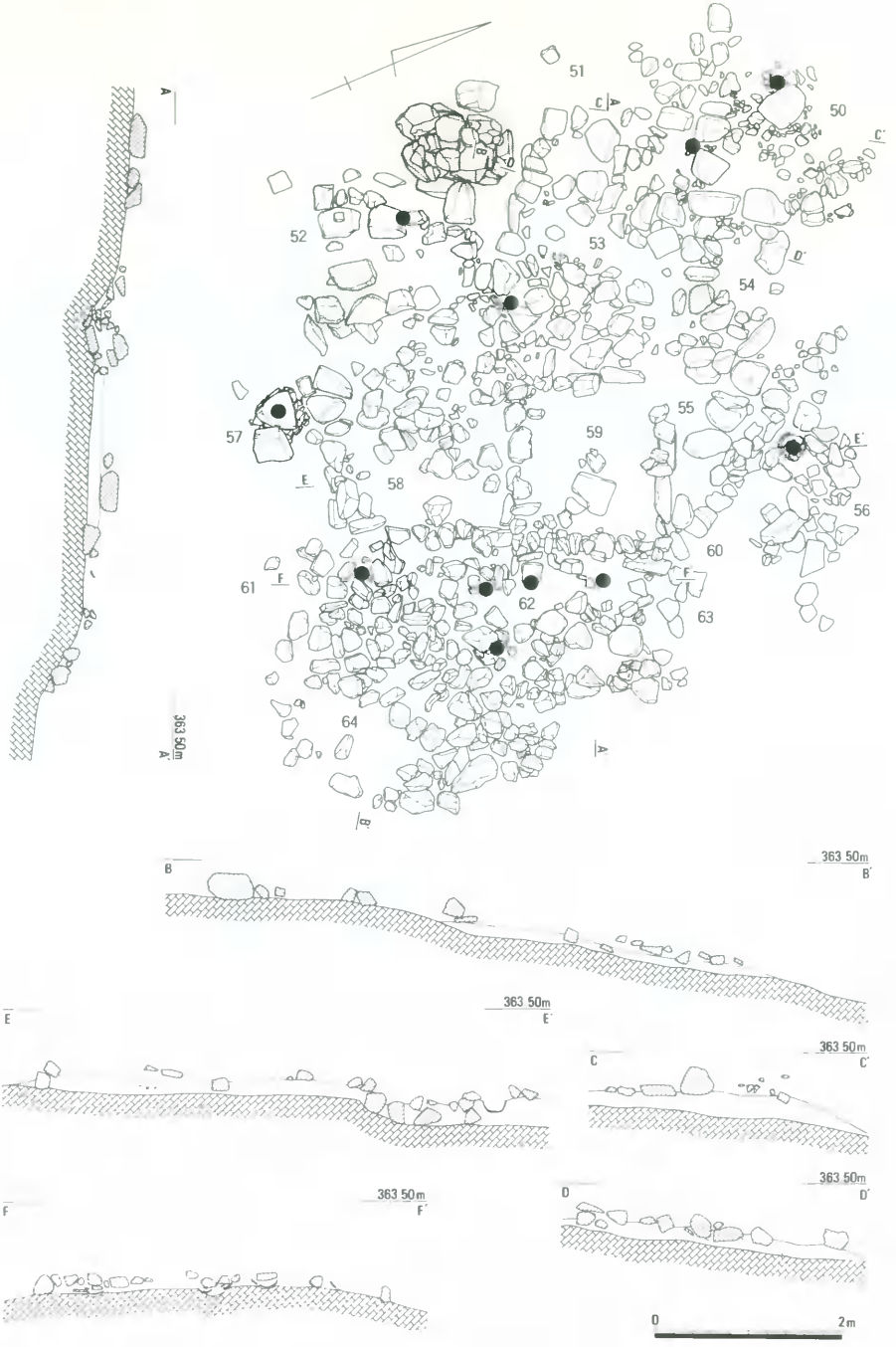
集石墓50は集石墓50～64の北西角に位置する。西辺は墓道に面している。北半は欠損しているが、南辺に相当する部分には大振りな石材が配されている。平面形は方形を呈し、規模は1辺160cmを測る。区画の中央北寄りに蔵骨器が据えられていたようで亀山焼の甕**104**が検出された。この他に南角の石の下から火葬骨が出土している。**104**は口縁部が短く屈曲し、端部は面を形成する。体部中央に最大径がある。時期は鎌倉時代後半と思われる。

集石墓51（第44・45図、図版34）

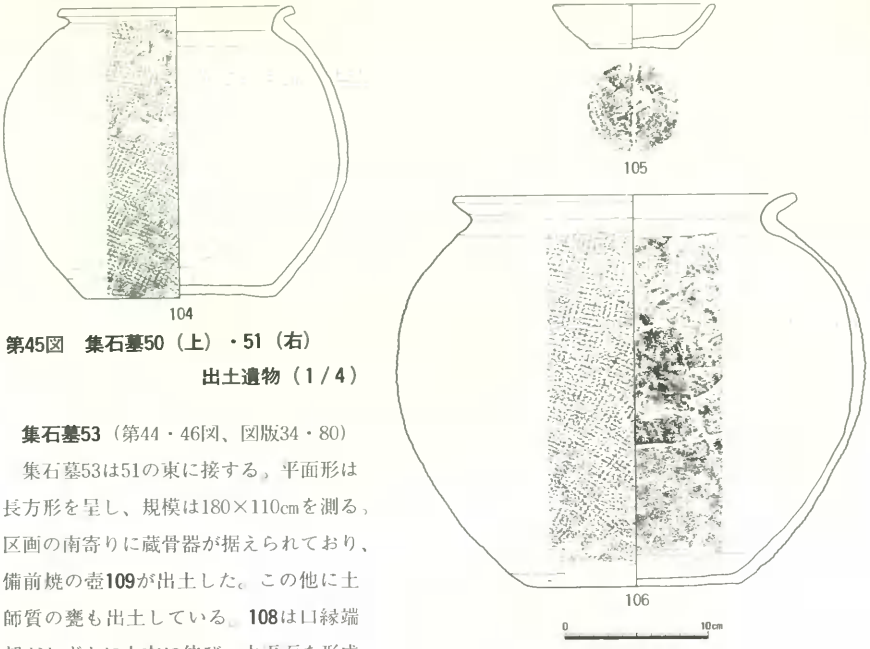
集石墓51は50の南に取り付くように認められる。南辺は明瞭であるが石材は希薄で区画は不明瞭である。平面形は長方形を呈し、規模は240×150cmを測る。北辺で蔵骨器として亀山焼の甕**106**や火葬骨、南辺でも亀山焼の破片が出土している。**105**は底部ヘラ切りの土師質皿である。**106**は口縁部が短く屈曲し、端部は面を形成する。体部中央よりやや上に最大径がある。時期は鎌倉時代後半と思われる。

集石墓52（第44・46図、図版77）

集石墓52は集石墓50～64の南西角に位置する。西辺は墓道に面しており土壙墓8と接する。南角は土壙墓9と接し、区画は不明瞭である。区画のほぼ中央の石の下から蔵骨器として備前焼の壺**107**が出土している。**107**は口縁部立ち上がりが短く外傾し、端部はわずかに玉縁状を呈する。時期は室町時代前半と思われる。



第44図　集石墓50～64（1/60）



第45図　集石墓50（上）・51（右）出土遺物（１/４）

集石墓53（第44・46図、図版34・80）

集石墓53は51の東に接する。平面形は長方形を呈し、規模は180×110cmを測る。区画の南寄りに蔵骨器が据えられており、備前焼の壺**109**が出土した。この他に土師質の甕も出土している。**108**は口縁端部がわずかに上方に伸び、水平面を形成する。底部は平底気味で、体部中央が膨らむ。**109**は口縁部立ち上がりが垂直に伸び、端部は玉縁状を呈する。時期は室町時代前半と思われる。

集石墓54（第44・46図）

集石墓54は集石墓53の北東に接する。平面形は方形を呈し、規模は１辺110cmを測る。蔵骨器やこの他の遺構は検出されなかった。土師質皿**110**が出土しているが、詳細な時期は不明である。

集石墓55（第44・46図、図版34・35・78）

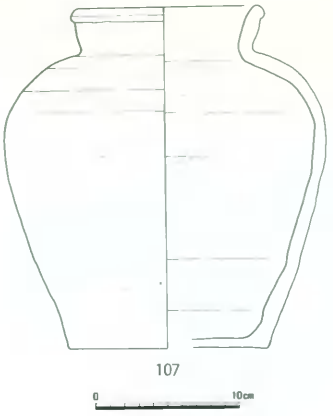
集石墓55は54の東に取り付くように位置する。区画は不明瞭であるが、蔵骨器としてではなく、備前焼の小形壺**112**が据えられていた。この他に底部回転糸切りの土師質小皿が出土している。**112**は雀口を有する小壺である。時期は室町時代と思われる。

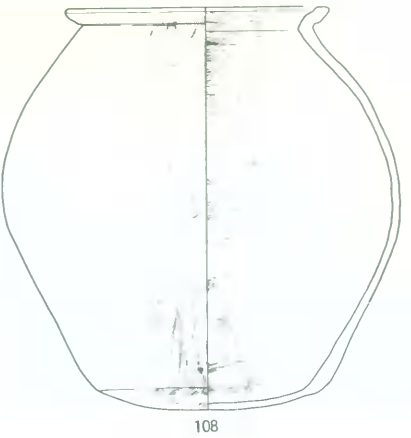
集石墓56（第44・46図、図版34・35・74）

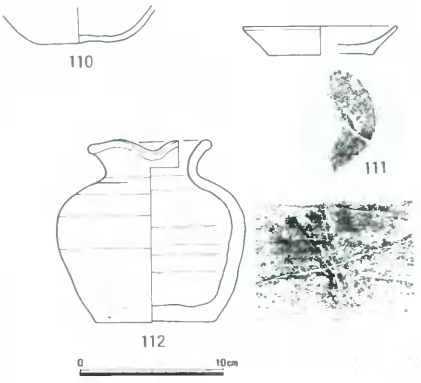
集石墓56は55の東に接する。区画はあまり明瞭でないが、平面形は方形を呈し、規模は１辺100cmを測る。区画の中央に蔵骨器が据えられていたようで、亀山焼の甕**113**の破片が出土している。この他には遺構や遺物は認められなかった。**113**は口縁部が「Ｓ」字状に屈曲し、端部は丸く納まる。時期は室町時代と思われる。

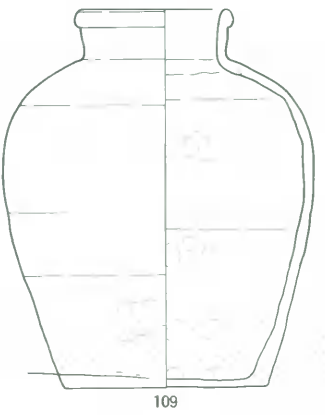
集石墓57（第44・47図、図版35）

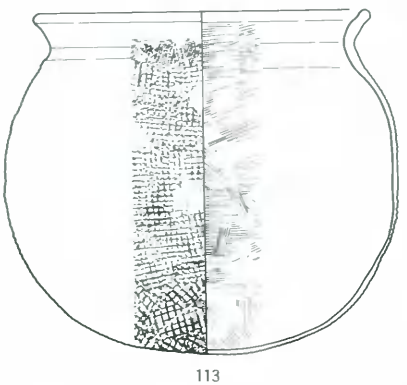
集石墓57は集石墓50～64の南辺に位置し、集石墓45の北に接する。区画はほとんど残存しておらず、蔵骨器とその周囲にわずかに石材が認められたにすぎない。蔵骨器は亀山焼の大形甕**114**が用いられており、地山を掘り窪めて据えられている。蔵骨器の上には平らな石が乗っていた。**114**は口縁部が「Ｓ」字状に屈曲し、端部は上方に伸び、下方へも拡張している。時期は室町時代と思われる。











第46図　集石墓52～56出土遺物（１/４）

集石墓58（第44図、図版36）

集石墓58は集石墓52の東に位置する。区画は比較的明瞭で、南辺に石列、北辺は集石墓59と東辺は61・62とそれぞれ石列を共有している。平面形は長方形を呈し、規模は200×150㎝を測る。区画内の石材は希薄であるが、ほぼ中央やや北寄りに蔵骨器が据えられている。造成面に径24㎝・深さ12㎝の円形土壙を掘り込み、そこに亀山焼の甕が据えられていた。詳細な時期は不明である。

集石墓59（第44図、図版36）

集石墓59は集石墓24～39の中央に位置する。区画は明瞭で、北と西と南辺に石列、東辺は集石墓62・63と石列を共有している。平面形は方形を呈

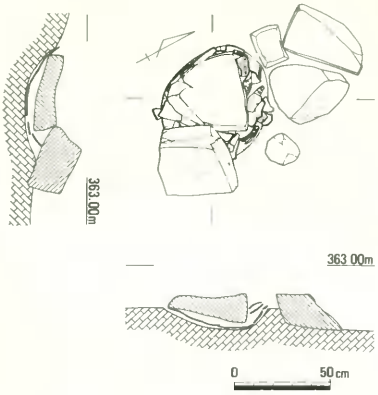
し、規模は１辺200㎝を測る。区画内の石材は希薄で、蔵骨器やこの他の遺構や遺物は確認されなかった。詳細な時期は不明である。

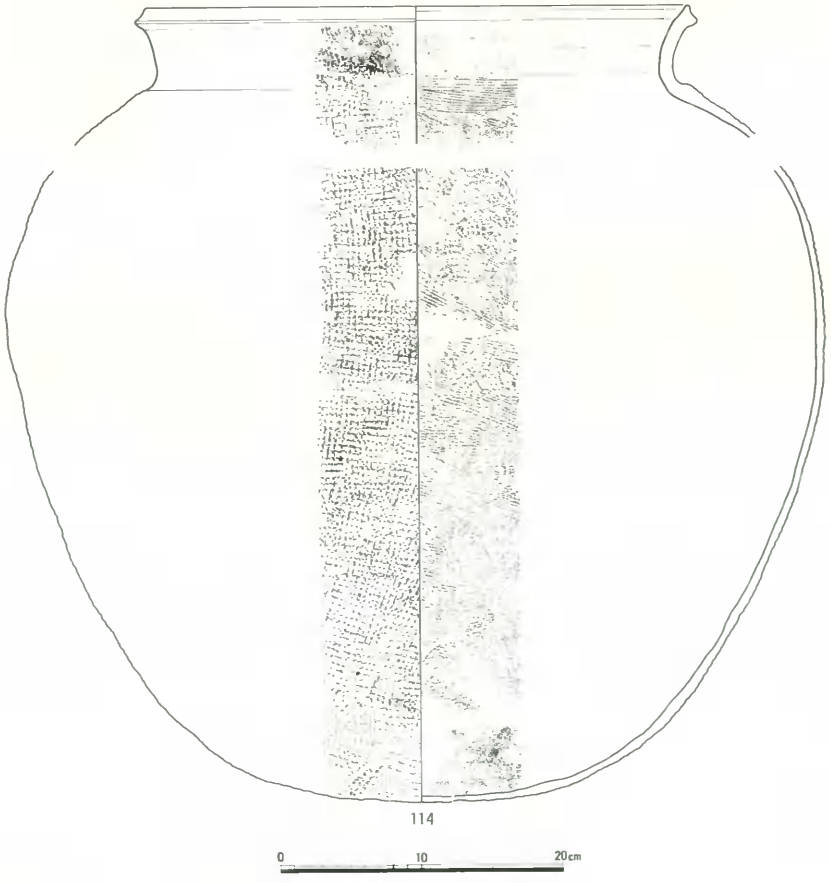
集石墓60（第44図）

集石墓60は集石墓55・56の南に位置する。区画は確認できないが、集石墓55の北辺とほぼ重なった石列が検出されている。蔵骨器やその他の遺構や遺物は確認されなかった。詳細な時期は不明である。

集石墓61（第44・48図、図版36）

集石墓61は集石墓58の南辺に接する。比較的小振りな石材が用いられており区画は不明瞭であるが、



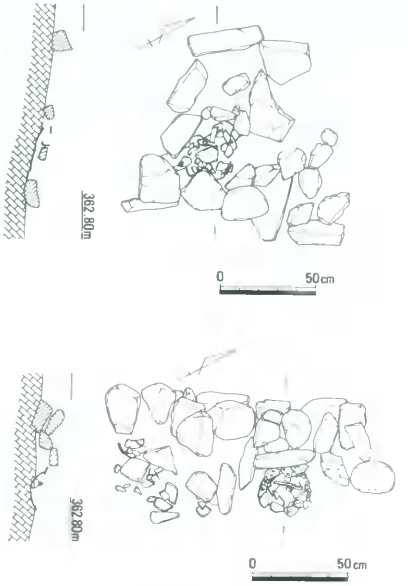


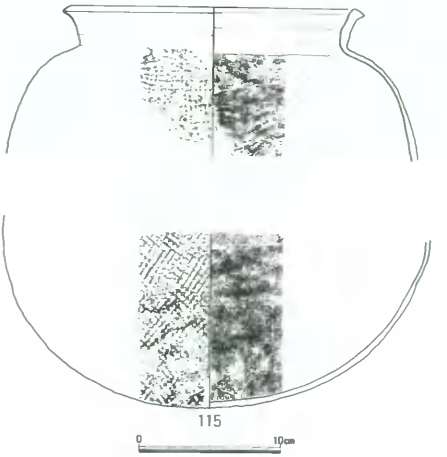
第47図　集石墓57（１/30）・出土遺物（１/４）

ほぼ中央に蔵骨器が据えられている。地山を浅く掘り窪めて、亀山焼の甕115が据えられ、周囲を石で囲んでいる。この他に、区画の北東角で石の下から火葬骨が検出されている。115は口縁部立ち上がりが外傾し、端部は下方に拡張する。時期は南北朝の頃と思われる。

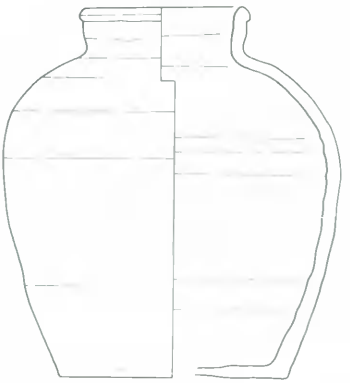
集石墓62（第44・49図、図版37・77）

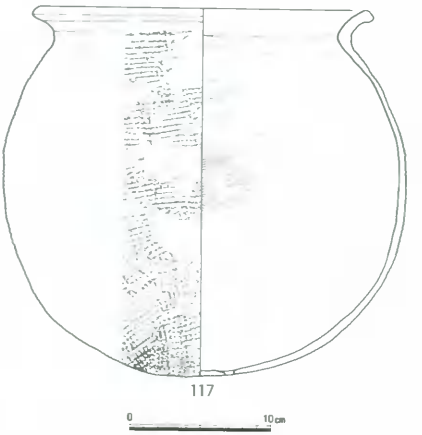
集石墓62は集石墓58・59の南辺に接し、西辺を共有する。区画内の石材は希薄で形状は不明瞭であるが、ほぼ中央と北寄りで３基の蔵骨器が据えられていた。中央では、東寄りに備前焼の壺116が、



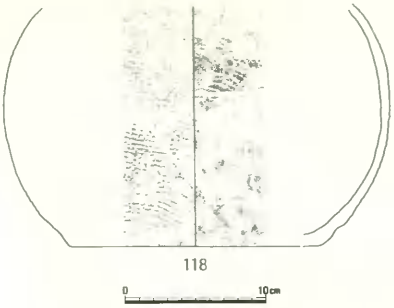


第48図　集石墓61（１/30）・出土遺物（１/４）

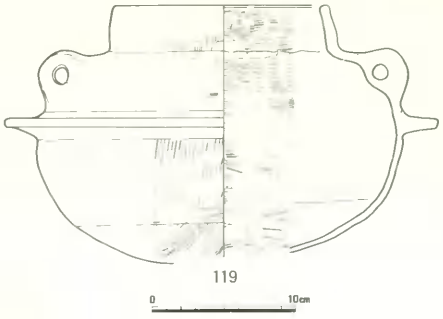




第49図　集石墓62・63（１/30）・62出土遺物（１/４）



第50図　集石墓63出土遺物（１/４）

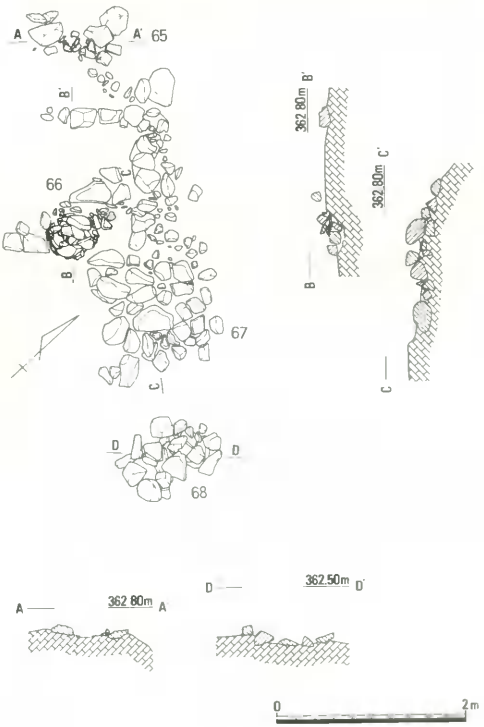


第51図　集石墓64出土遺物（１/４）

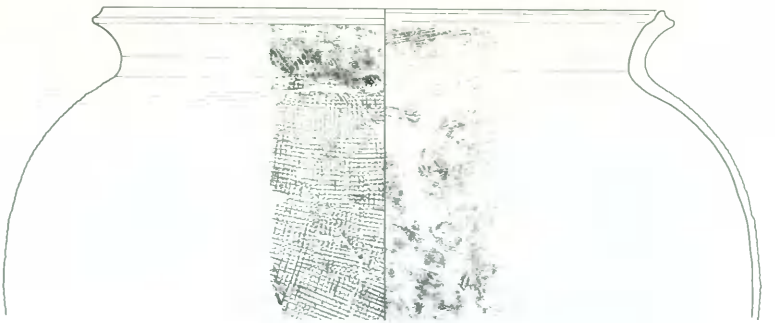
西寄りに亀山焼の甕がそれぞれ地山を浅く掘り窪めて据えられていた。北寄りでも地山を浅く掘り窪め、そこに亀山焼の甕**117**を据え、さらに周囲を細長い石材で囲んでいた。この蔵骨器の中には比較的大きな火葬骨が埋納してあった。また、区画の南西角からは火葬骨が検出されている。**116**は口縁部が垂直の立ち上がり、端部はわずかに玉縁状を呈する。時期は室町時代前半と思われる。**117**は口縁部が屈曲し、端部は下方に拡張する。時期は南北朝の頃と思われる。

集石墓63（第44・50図、図版37）

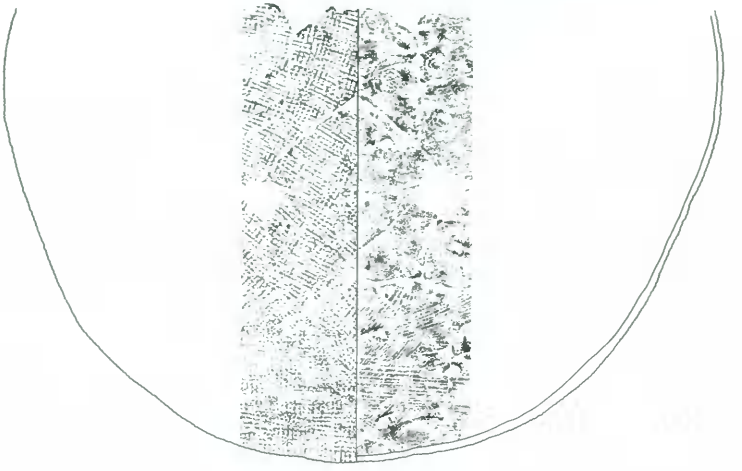
集石墓63は集石墓59の南辺に接し、西辺を共有する。区画内の石材は希薄で形状は不明瞭である。区画のほぼ中央に蔵骨器が据えられていたようで、亀山焼の甕**118**の破片が出土している。この他に遺構や遺物は確認されなかった。**118**は体部に最大径があると思わ



第52図　集石墓65～68（１/60）・65出土遺物（１/４）



121



122

0　10　20cm

第53図　集石墓66出土遺物（１/４）

れる。時期は明確ではないが、鎌倉時代後半の可能性がある。

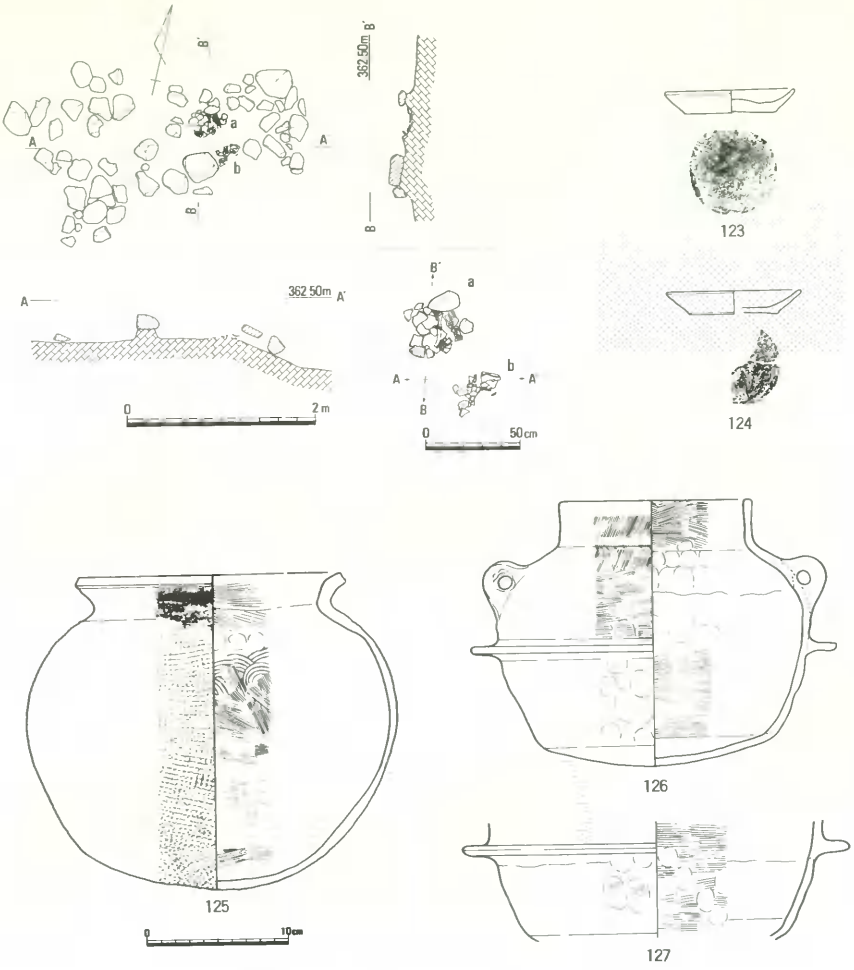
集石墓64（第44・51図、図版79）

集石墓64は集石墓50～64の南角に位置し集石墓61・62接する。区画は不明瞭であるが、ほぼ北寄りに蔵骨器が据えられていたようで、土師質の羽釜**119**が石の下から破片で出土した。また、ほぼ中央では２ヵ所で火葬骨が検出されている。時期は室町時代と思われる。

集石墓65～68（第52・53図、図版37～39）

集石墓65～68は調査区３区の北東部に位置し、集石墓50～64の北に接して展開する。北の部分は後世の造成により大きく削平されているためその広がりなどは不明である。

集石墓65は北西端に単独で確認された。石材の欠損などもあり明確な区画の様子は不明であるが、土師質土器**120**が据えられていたようで、石に囲まれて破片が出土している。



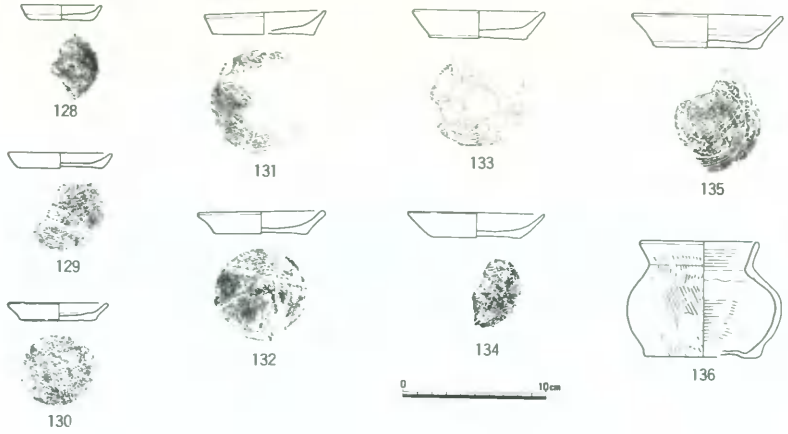
第54図　集石墓69（１/60・１/30）出土遺物（１/４）

集石墓66は65の東に位置する。石材は希薄であるが、北辺と東辺は石列が認められる。平面形は方形を呈し、規模は170㎝程度を測ると思われる。区画の南東隅近くに蔵骨器が据えられている。地山を掘り窪めて、そこに亀山焼の大形甕**121・122**が据えられ、周囲を石で囲んでいる。この他に土師質小皿も出土している。**121**は口縁部立ち上がりが「Ｓ」字状に屈曲し、端部は上方にわずかに伸びる。時期は室町時代後半と思われる。

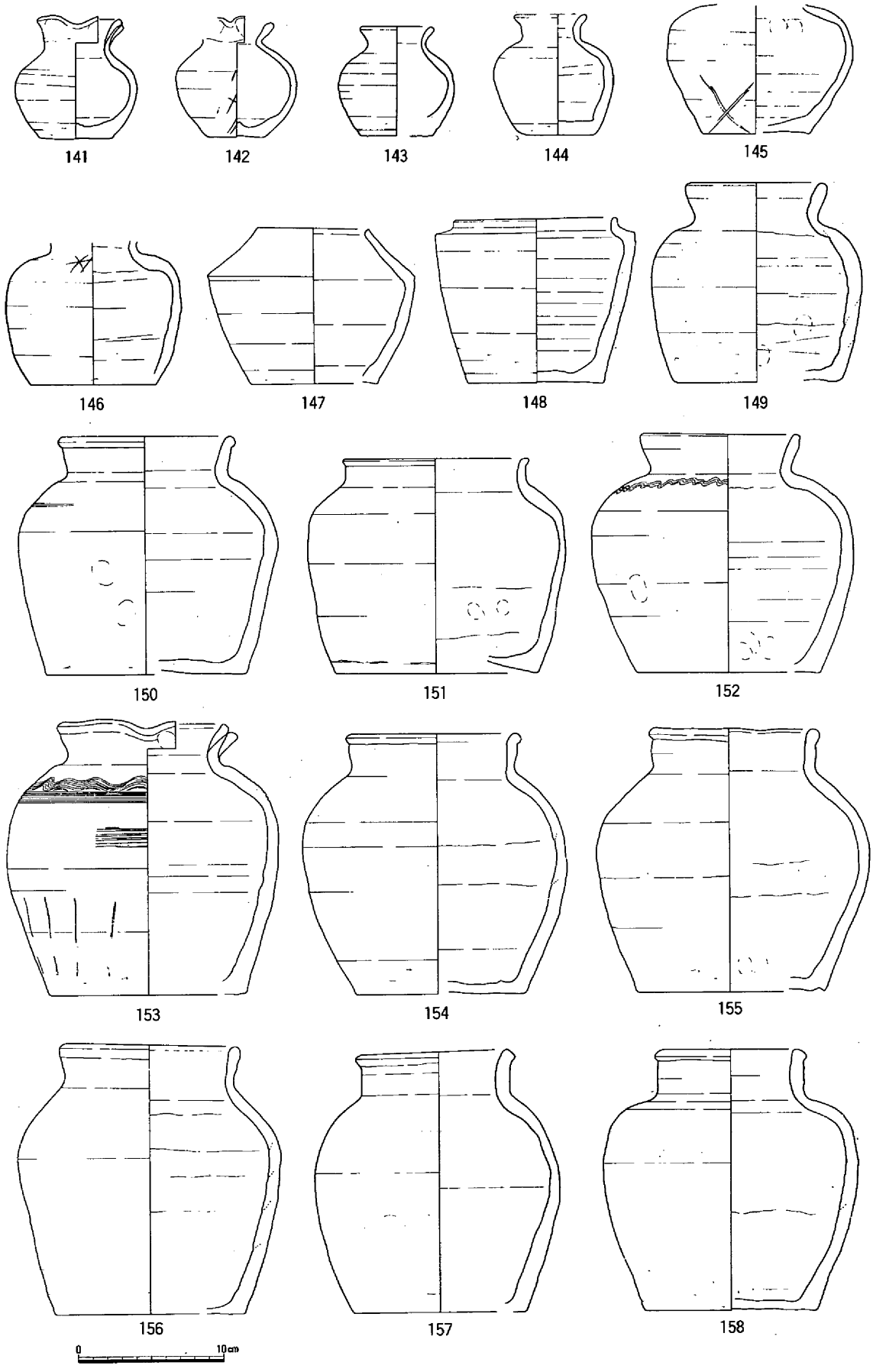
集石墓67は66の東角に接している。平面形は長方形を呈し、規模は140×100㎝を測る。区画の西隅の石の下から火葬骨が検出されている。集石墓68は67の東に単独で位置する。平面形は方形を呈し、規模は100㎝を測る。蔵骨器やその他の遺構や遺物は確認されなかった。詳細な時期は不明である。

集石墓69（第54図、図版39・74）

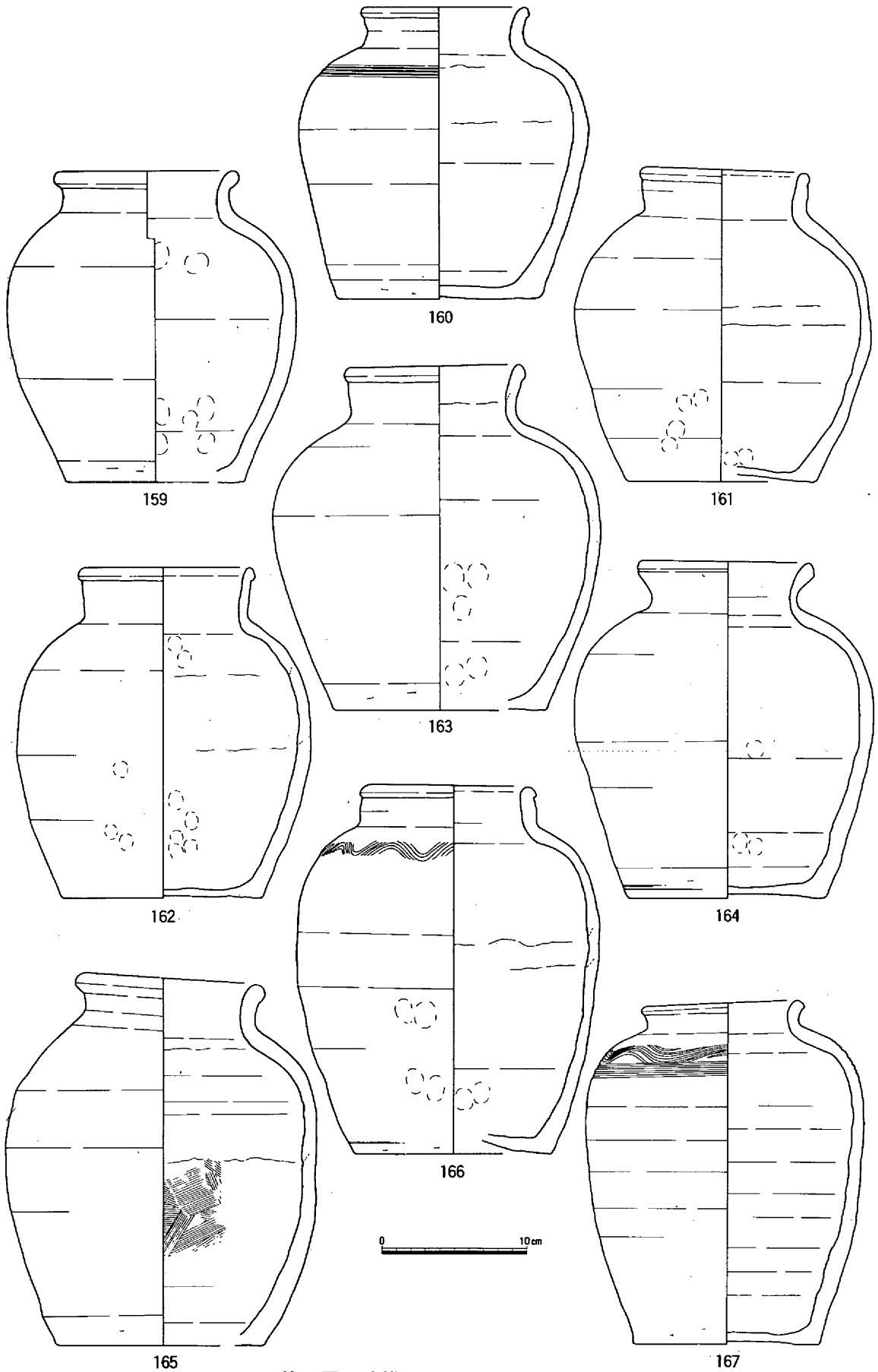
集石墓69は集石墓63の北に位置する。石材は希薄であるが、区画の平面形は東西方向に長い長方形



第55図　遺構に伴わない遺物1（1/4）

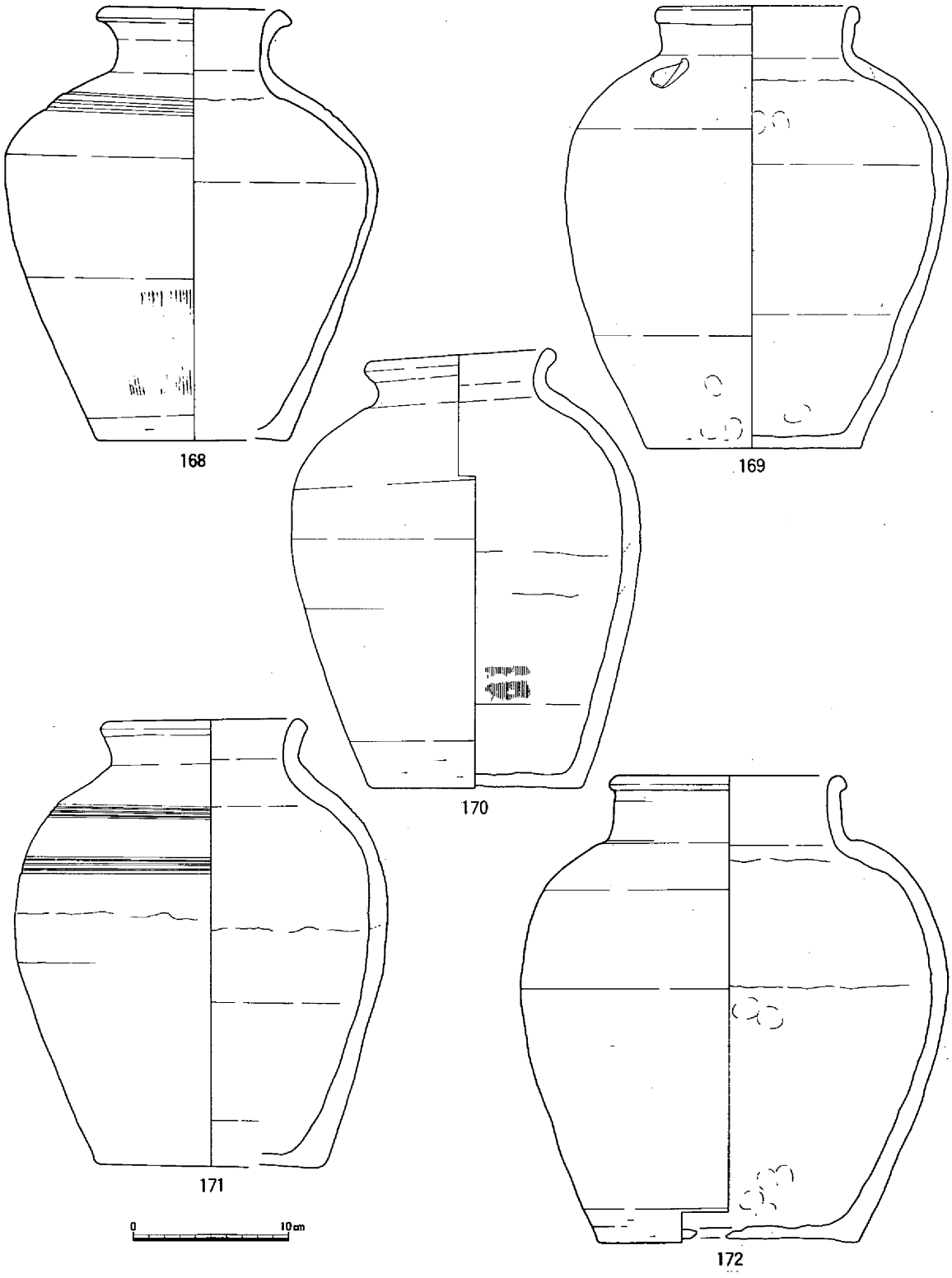


第56図　遺構に伴わない遺物②（１/４）

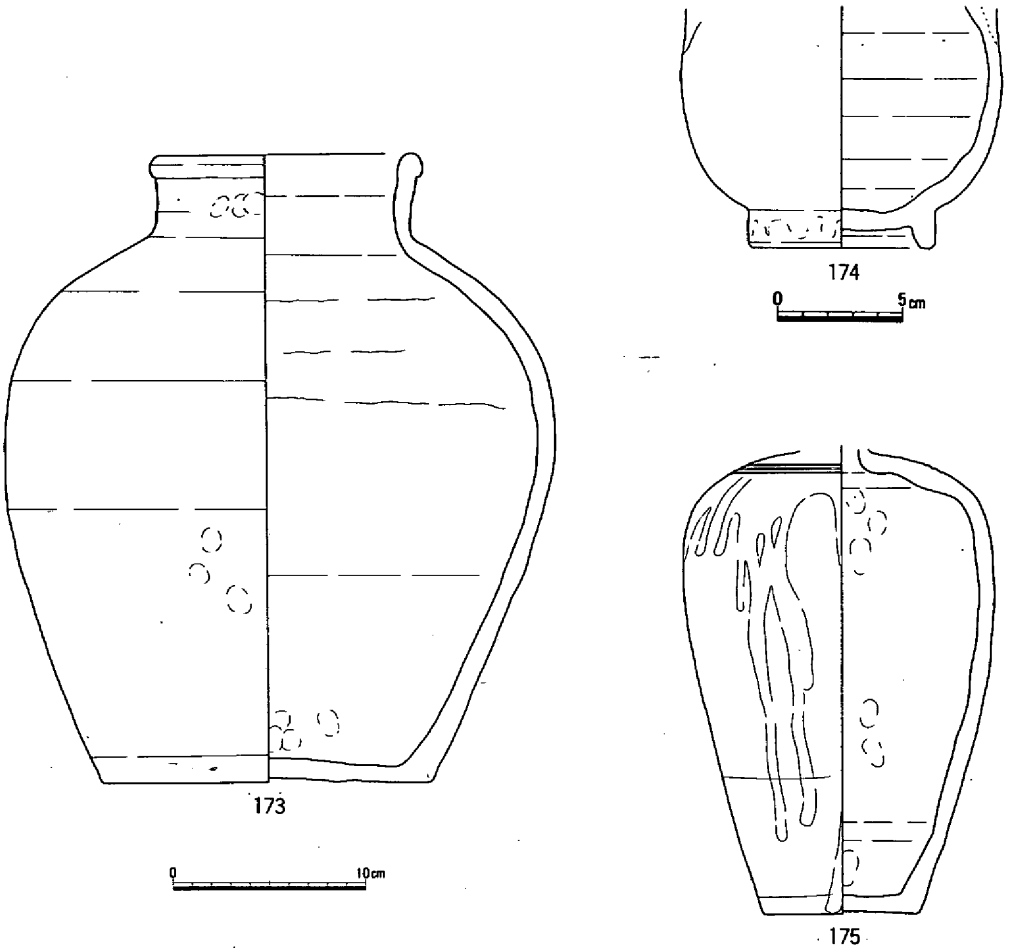


第57図　遺構に伴わない遺物③（１/４）

を呈し、規模は270×130cmを測る。区画中央やや東寄りに２基の蔵骨器が据えられていたようである。北のものは亀山焼の甕**125**で、南のものは土師質の羽釜**126**である。この他に底部回転糸切りの土師質小皿等も出土している。**125**は口縁部立ち上がりが短く屈曲し、外反する。端部は面を形成し、強いナデが認められる。時期は鎌倉時代末期～南北朝の頃と思われる。



第58図　遺構に伴わない遺物④（１/４）



第59図　遺構に伴わない遺物⑤（１/４）

集石墓70（第７図、図版39）

集石墓70は調査区の東端、丘陵最高所から２ｍ下がった地点に位置する。平面形は長方形を呈し、規模は130×80cmを測る。火葬骨が検出されているが、蔵骨器やその他の遺構や遺物は確認されなかった。詳細な時期は不明である。

集石墓71（第７図）

集石墓71は調査区の東端、集石墓70の北に位置する。平面形は長方形を呈し、規模は210×110cmを測るが、２区画に分かれる可能性もある。蔵骨器やその他の遺構や遺物は確認されなかった。詳細な時期は不明である。

集石墓72（第７図）

集石墓72は調査区の東端、集石墓71の北に位置する。欠損が著しいが、平面形は長方形を呈し、規模は120×90cmを測ると思われる。蔵骨器やその他の遺構や遺物は確認されなかった。詳細な時期は不明である。

（２）遺構に伴わない遺物（第55～61図、図版74～78）

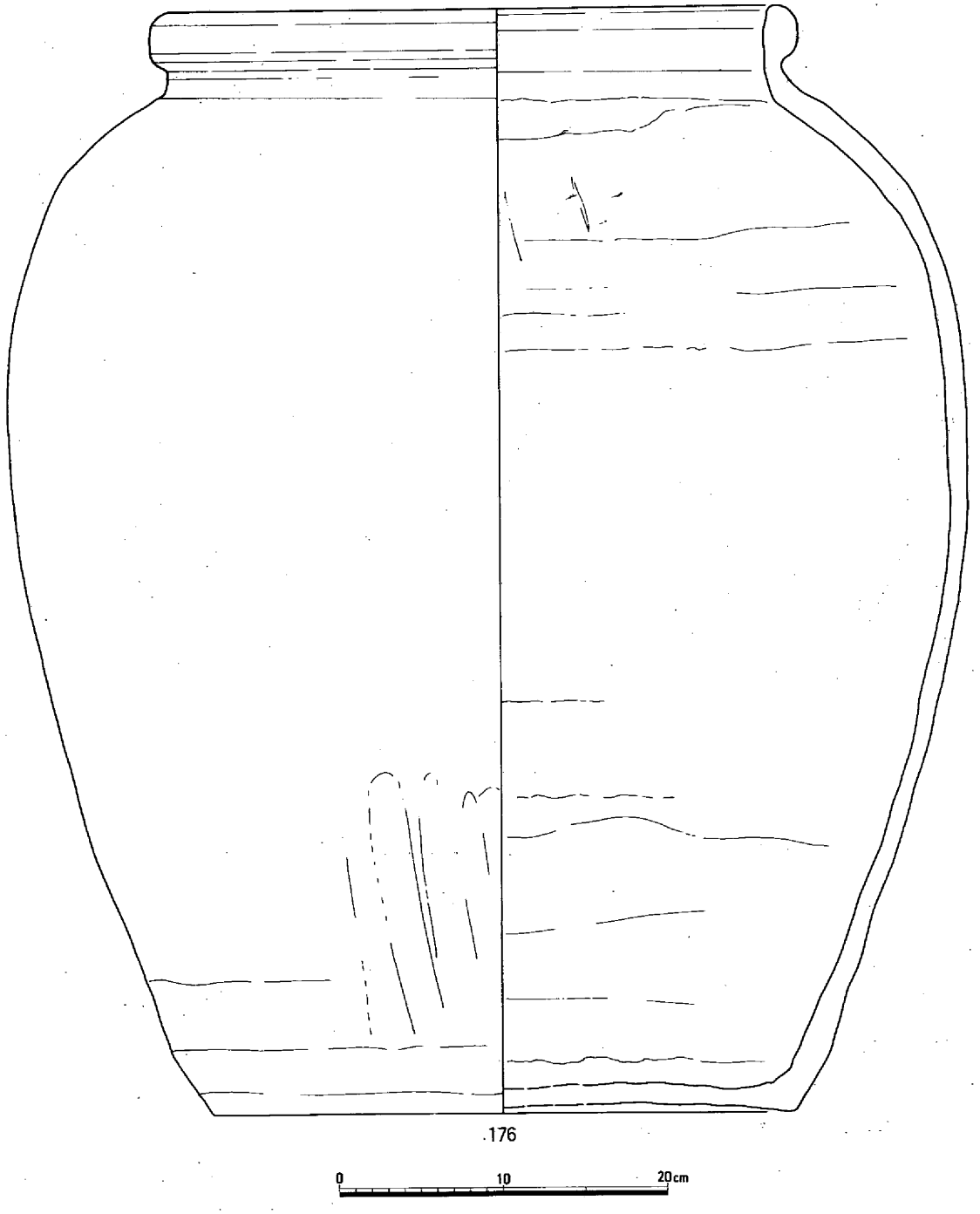
確実に据えられた位置が限定あるいは推定できる蔵骨器についてはこれまでに記述した。土器片等については、調査時にその位置を記録しながら採取したが、その分布が広範囲にわたるものや狭い範

囲でも据えられた状況が確認できなかったものなどは遺構に伴わない遺物として図示、記載した。

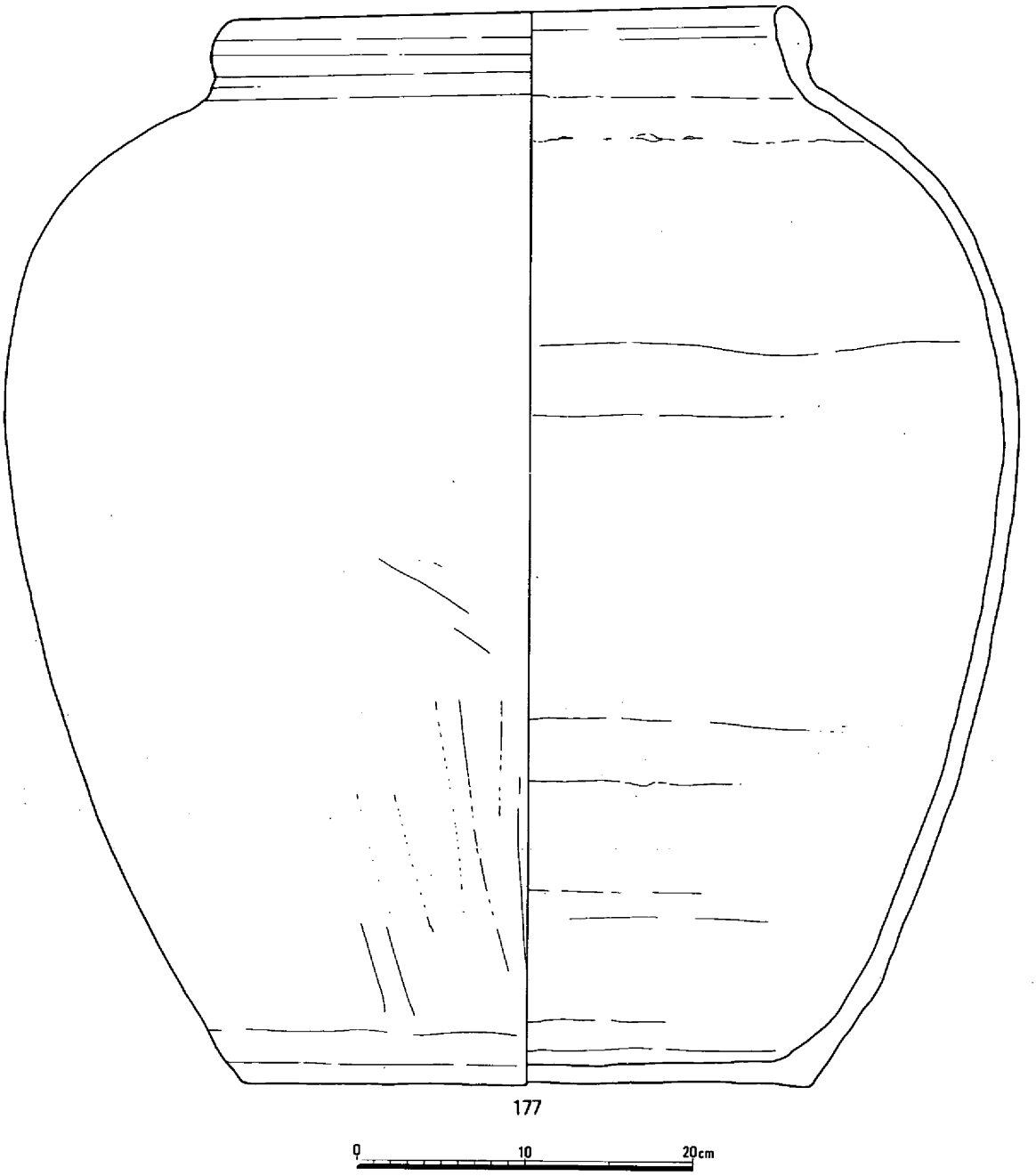
ここに図示した土師質土器は小皿・皿、小形壺である。小皿や皿は集石墓の間や土壙墓の埋土中等からかなり出土している。

小皿は口径が５～７㎝の間に納まるもの**128**・**129**・**130**と口径８～10㎝で比較的大きなもの**131**～**134**がある。この内、底部外面はナデを施すもの**128**、ヘラ切りのもの**130**、回転糸切りのもの**129**・**131**～**134**が認められる。**135**は口径10.4㎝の皿で、底部外面にはヘラ切りの後擦痕が認められる。

136は小形の壺で口径8.2㎝、器高8.2㎝を測る。口縁部は外方へ真っすぐ伸び、端部は丸くおさまる。体部中央に最大径がある。内外面ともハケメが施されている。



第60図　遺構に伴わない遺物⑥（１/４）



第61図　遺構に伴わない遺物⑦（１/４）

137は須恵質の壺で、肩部の２あるいは３ヵ所に幅広の帯状把手が貼りつけられている。口縁部は「く」字状に屈曲する。胴部外面はナデを施すが、下半には粗い長方形の格子タタキが残っている。また、胴部内面下端には同心円状と思われる当て具痕が残っている。

138は十瓶山焼の壺で、底部は上げ底で肩はあまり張らない。口縁部は「Ｓ」字状に湾曲し、強く外反する。端部は面を形成する。胴部外面と口縁外面には格子タタキが認められる。

亀山焼には平底の139と丸底の140がある。139は胴部上半に最大径がある。口縁部は「く」字状に屈曲し短く外方に伸び、端部は面を形成する。これは集石墓18に伴う可能性がある。140は肩の張らない丸底で、口縁端部は肥厚する。どちらも胴部外面は格子タタキが施され、140の内面はハケメが

施されている。

備前焼には小形壺・無頸壺・肩衝壺・壺・大甕がある。

141～144は器高８cm程度の小形壺で、**141・142**は雀口を有する。いずれも底部外面は回転糸切りが認められる。**147**は無頸壺で、肩部が強く屈曲する。**148**は肩衝壺で、肩部が強く屈曲し、すぐに口縁部が取りつく。口縁部は極めて短く、上方に伸びる。

備前焼の壺には、Ａ類－器高13～19cmで胴部最大径がそれとほとんど変わらないもの（**149～158**）、Ｂ類－器高20～26cmで胴長のもの（**159～167**）、Ｃ類－器高28～33cmで胴長のもの（**168～173**）がある。Ａ類の口縁端部は、丸くおさまるもの**149・156**、面を持つもの**152・153**、玉縁状を呈するもの**150・154・155**、押さえたように外方に出るもの**151・157・158**がある。ただし**153**は片口を有する。Ｂ類の口縁端部は、丸くおさまるもの**161**、玉縁状を呈するもの**159・160・162・163・165**、肥厚するもの**164**、押さえたように外方に出るもの**166・167**がある。**166・167**は口縁部の立ち上がりがやや短く内傾している。Ｃ類の口縁端部は、外方へ伸びるもの**168**、玉縁状を呈するもの**169・170・173**、押さえたように外方に出るもの**171・172**がある。**168**は須恵質で肩部が張る。３～４条のヘラ描き沈線が施されている。調整は大半がヨコナデで、胴部下半の外面にヘラ削りが見られるが、ハケメやヘラミガキを施すものもある。

174は龍泉窯系青磁の水注（14～15世紀前半、大橋氏鑑定）と思われ、高台は削り出しである。

175は瀬戸あるいは美濃の瓶子と思われ、肩部には３条の沈線がめぐる。

備前焼の大甕**176**は口縁部が直立し、端部が玉縁状を呈する。**177**の口縁部は内傾し、端部は扁平な玉縁状を呈する。どちらも胴部外面は横方向のナデで、下半は縦方向のナデである。内面は**176**が横方向のヘラ削りの後ナデ、**177**は横方向のナデが見られる。

第62図　中世石塔群出土分布（１/200）

（３）中世石塔群

調査区内からは、広範囲にわたりかなりの量の宝篋印塔や組合せ式五輪塔が検出された。これらは基本的に散乱した状態で出土した。集石墓の石材中や土壙墓内埋土からの出土以外にも、地表面に露出していたものや４区に集められていたものなどがある（第62図）。

組合せの判明したものはほとんどないが、各部位の出土個数から推定される石塔の数は、宝篋印塔で22基以上、五輪塔で281基以上である。

宝篋印塔（第63・64・65図、図版88～89）

宝篋印塔の石材分布状況は、五輪塔と比較すると北の墓道周辺から集石墓14の西にかけてが多いようである。これが本来の位置を反映しているかどうかは不明である。調査で出土した相輪は22個体、笠は13個体、塔身は17個体、基礎は13個体、基壇は９個体を数える。石材はすべて結晶質石灰岩で、風化が進んだものも多い。

相輪は九輪や請花が省略され、輪や花弁の数量が少ない。宝珠の部分は最大径がほぼ中央に位置する。伏鉢の径はこの上の請花の径より小さい。**仮１・42・32・仮４**は表面が風化しており、本来、九輪や請花が彫り込まれていたかどうか不明である。

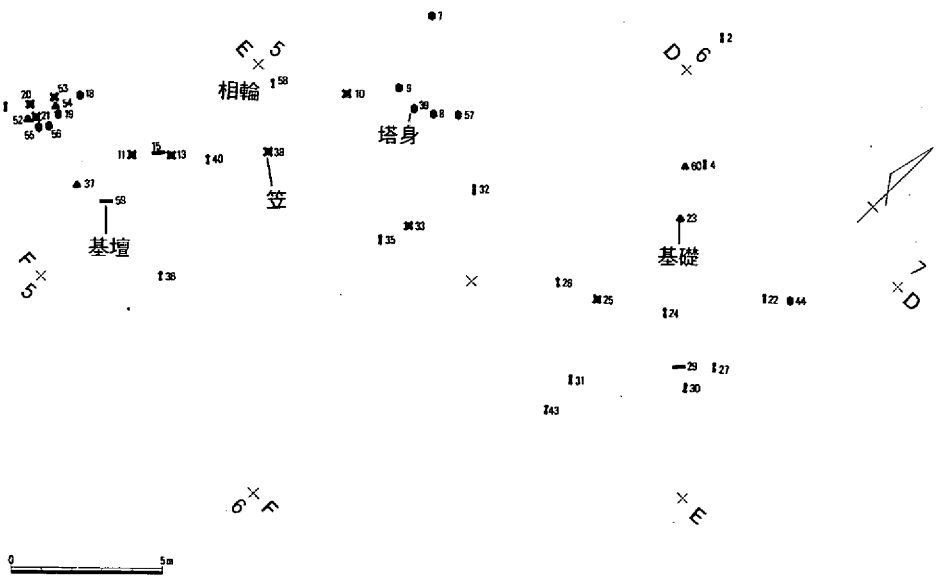
笠は大・中・小形がある。隅飾突起は外反しており、その度合いもあまり個体差は認められない。ただし大形の**仮３**は隅飾突起の欠損部分が多いが、比較的直立気味になる可能性もある。下面の差し込み部はほとんど円形であるが、**７**は隅丸方形である。

塔身は大小あり基本的に上下に突起部がある。正面観は縦にやや長く、ほとんどが平滑な面であるが、**47**は浮き彫りが見られる。

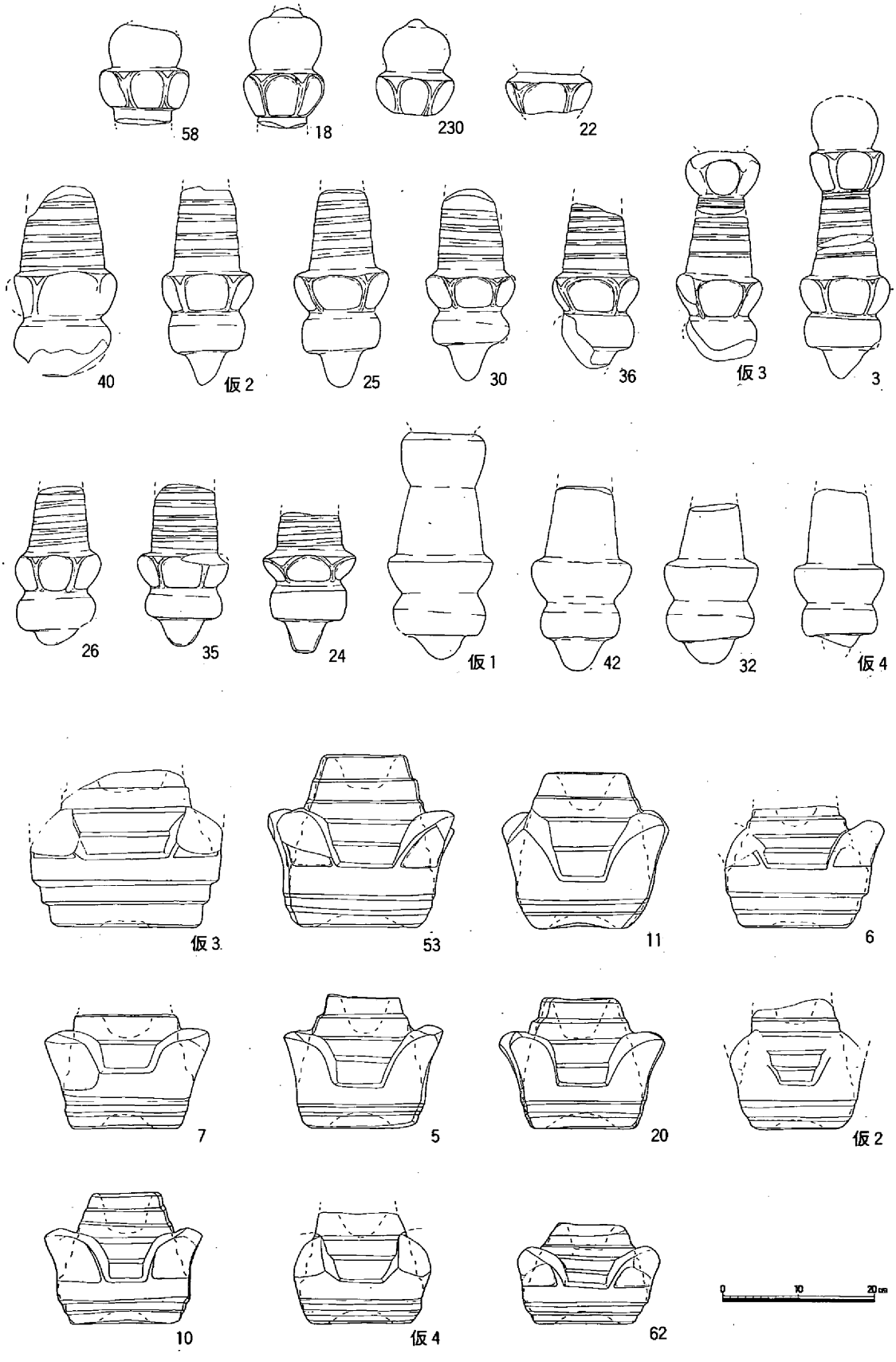
基礎は大小がある。上面の差し込み部は円形が多いが、**仮９・12**は隅丸方形、**11**は方形である。底面は窪んでおり、整形のための敲打痕が明瞭に認められる。

基壇は大小あり、段を有するものと持たないものがある。底面はやや窪んでおり、整形のための敲打痕が明瞭に認められる。

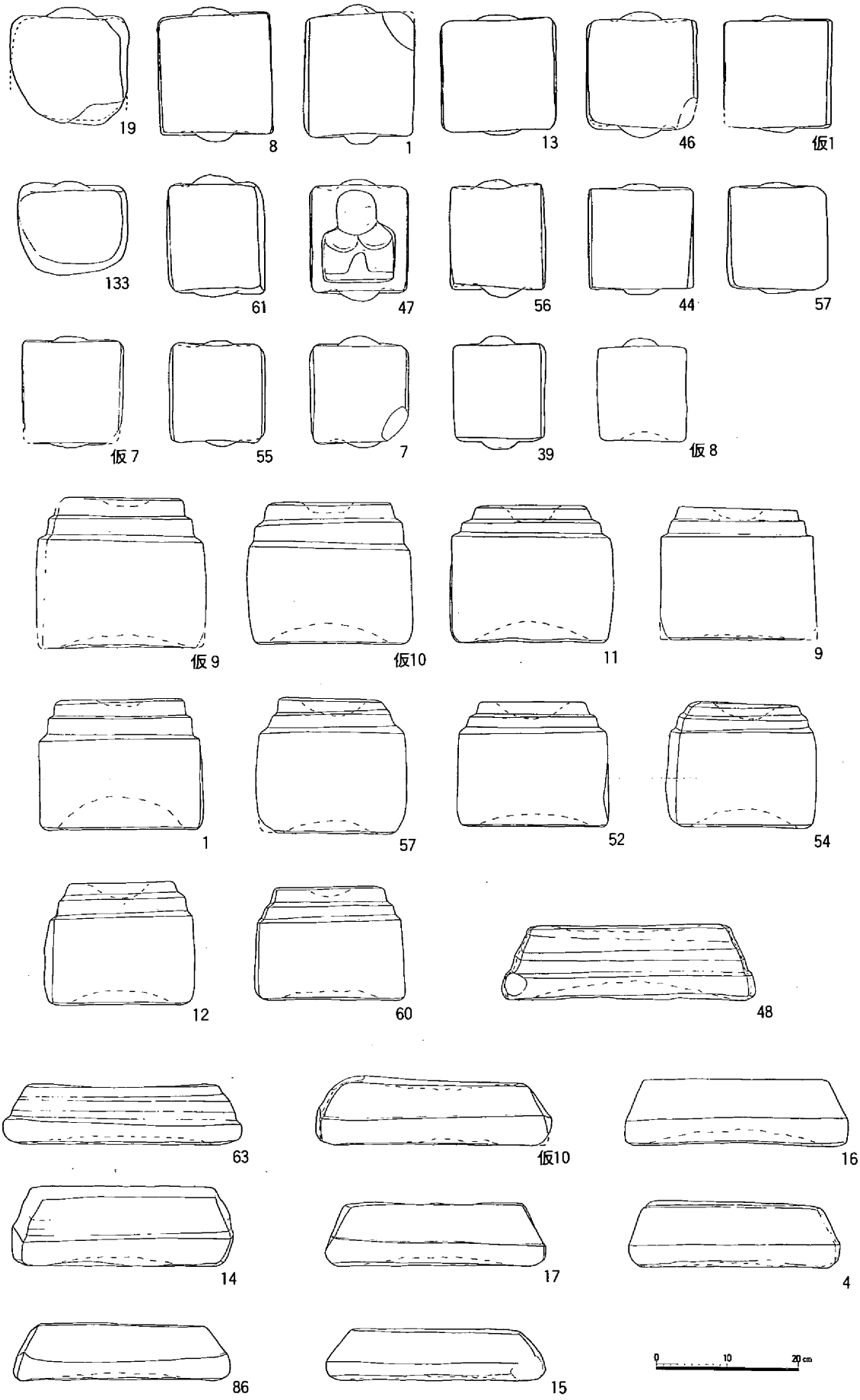
これらの時期はほぼ室町時代のものと思われる。



第63図　宝篋印塔出土分布（１/250）



第64図　宝篋印塔①（相輪・笠）（１/８）



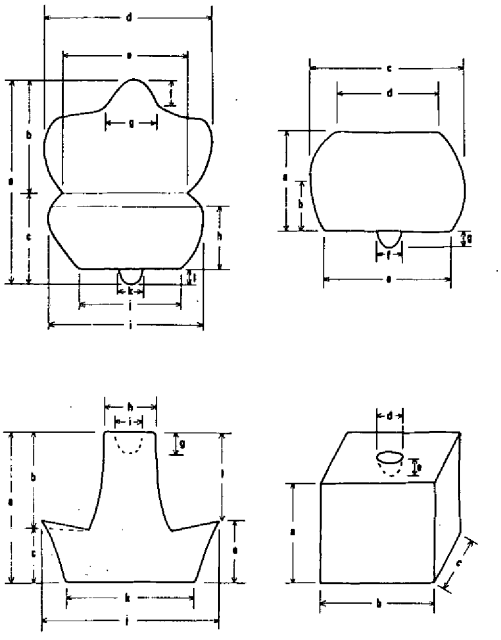
第65図　宝篋印塔②（塔身・基礎・基壇）（１/８）

五輪塔（第66～76図、図版89～91）

五輪石は調査区全体に分布しているが、南北の墓道から東にかけて分布が多い。この傾向は各部位についても認められる（第68～71図）。これが本来五輪塔が造立された位置を反映するかどうかは断言できない。

調査で出土した空風輪は281個体、火輪は276個体、水輪は278個体、地輪は246個体を数える。石材はほとんどが結晶質石灰岩であるが、**109・108・275・276・252・147・88**は花崗岩である。組合せが確認できたものは1基である（第69図、図版89）。組み合わせた状態で高さ64cmを測る。各石の四方向に東西南北を示すように梵字が刻まれている。南面は「[illegible]」と刻まれている。

全体的なバランスとしては火輪の幅がやや小さ目と思われる。空輪は最大径がほぼ中央に位置する。火輪は下面にも差し込み部が認められ、この調査で出土した他の火輪とは異なる。水輪も上下に突起を有する点は、この調査で出土した他の水輪とは異なる。



第66図　五輪塔法量表凡例

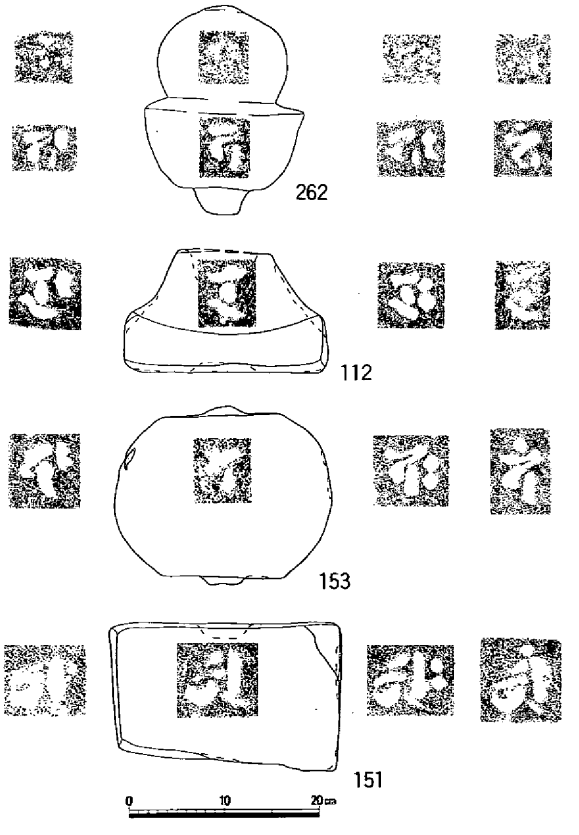
空風輪は大小あり、空輪は球形の宝珠を呈するものと、上部の突出が大きいものがある。

火輪は大小あり、大形のものは幅に比べ高さがある。上部の差し込み部は円形がほとんどだが、**213**は隅丸方形である。隅は摩滅が著しいが、比較的反りの大きいものもある。**276**は五輪塔以外の石塔の笠になる可能性もある。

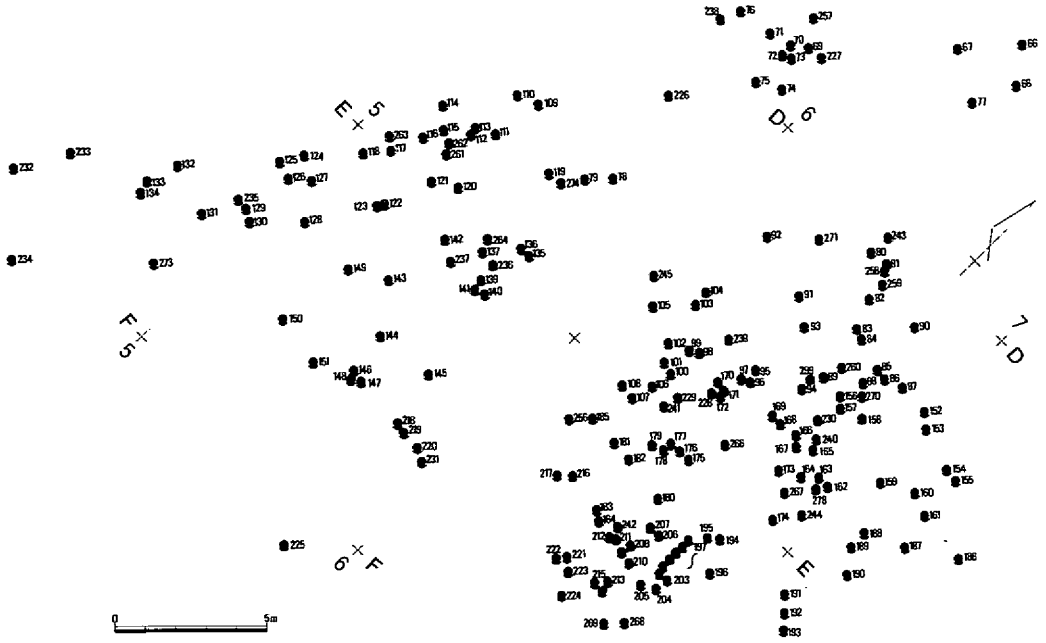
水輪は大小あり、下面に突起を有するものもある。最大径がほぼ中央にあるものと、中央よりやや上にあるものがある。また、浮き彫りを施したものも認められる。

地輪は大小さまざまだが、上面に円形の差し込み部を有するものと、持たないものがある。下面は窪むものや平坦なものがあるが、整形のための敲打痕が認められるものもある。**88**は五輪塔以外の石塔の可能性もある。

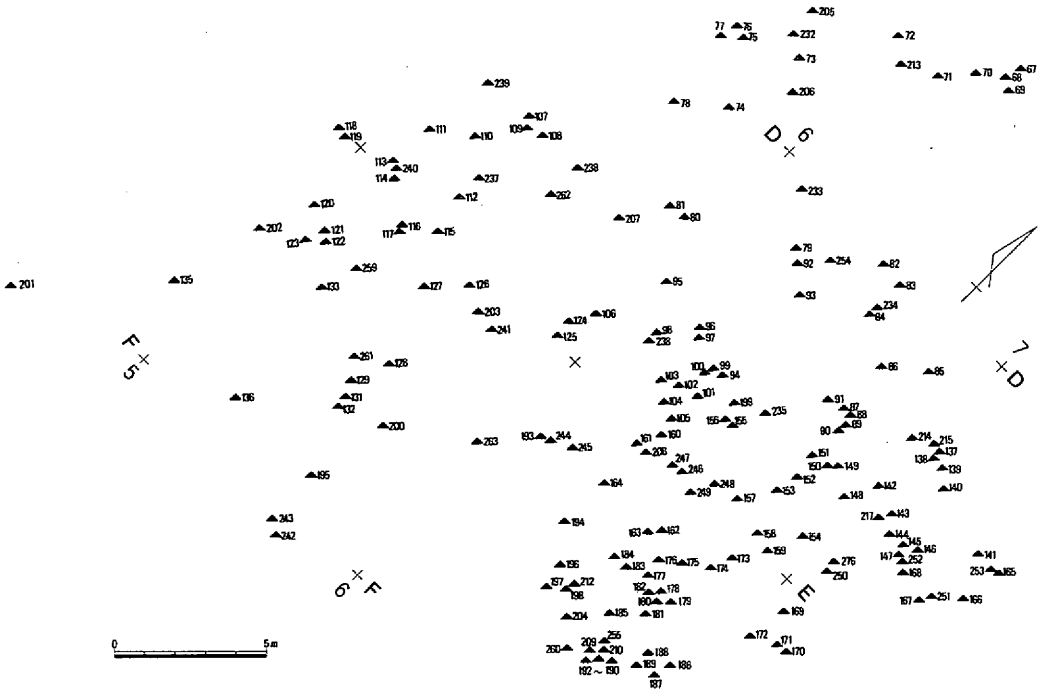
これらの時期はは室町時代～近世初頭のものと思われる。（柴田）



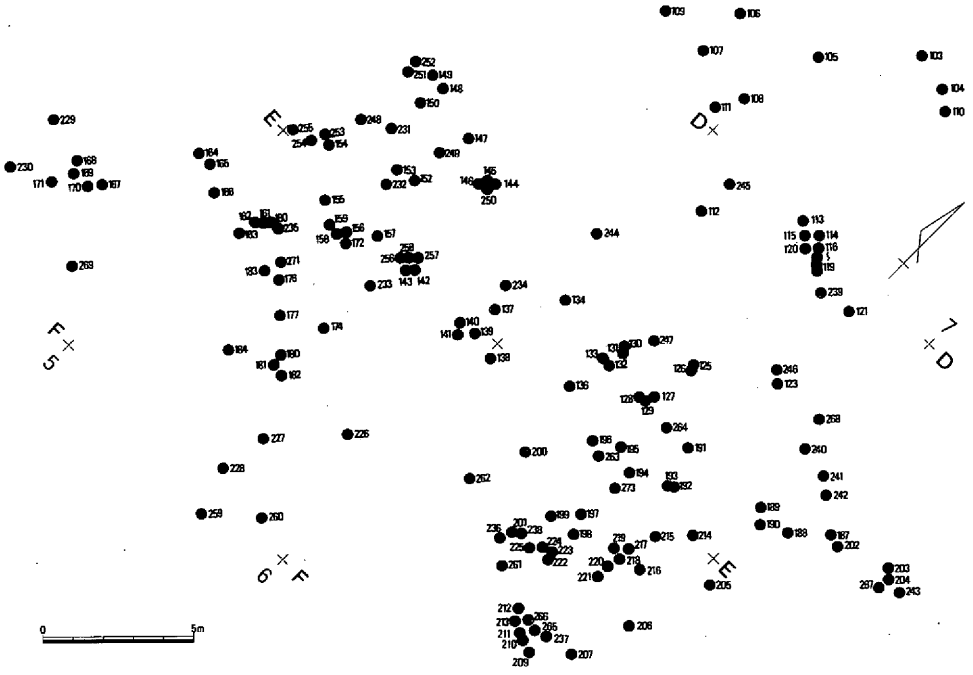
第67図　五輪塔（梵字入り）（1/8）



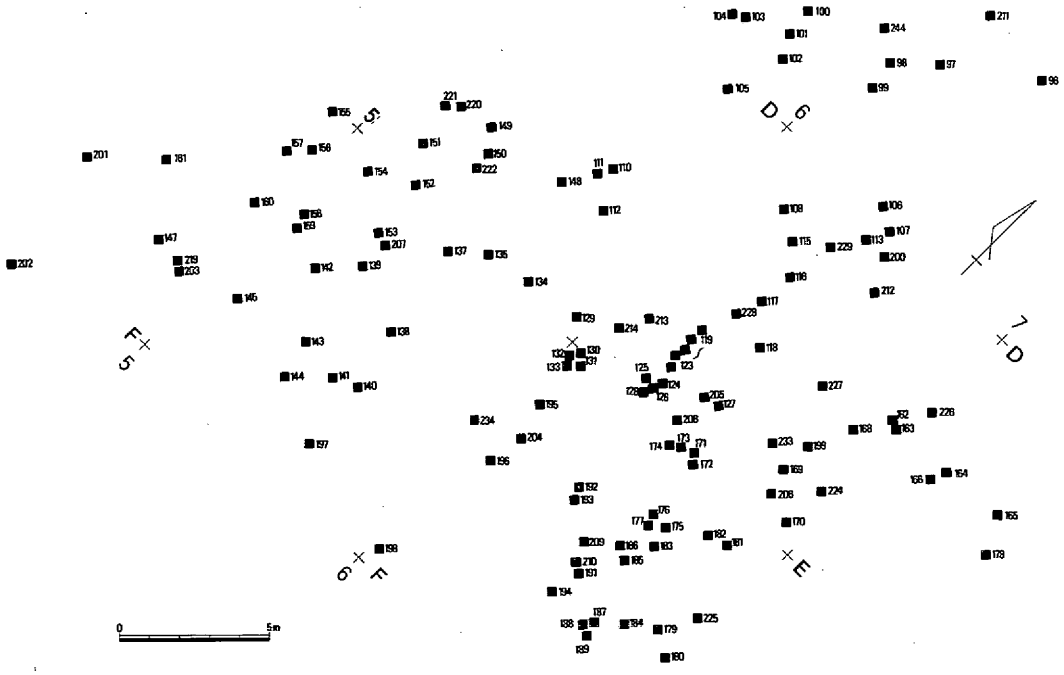
第68図　空風輪出土分布（１/250）



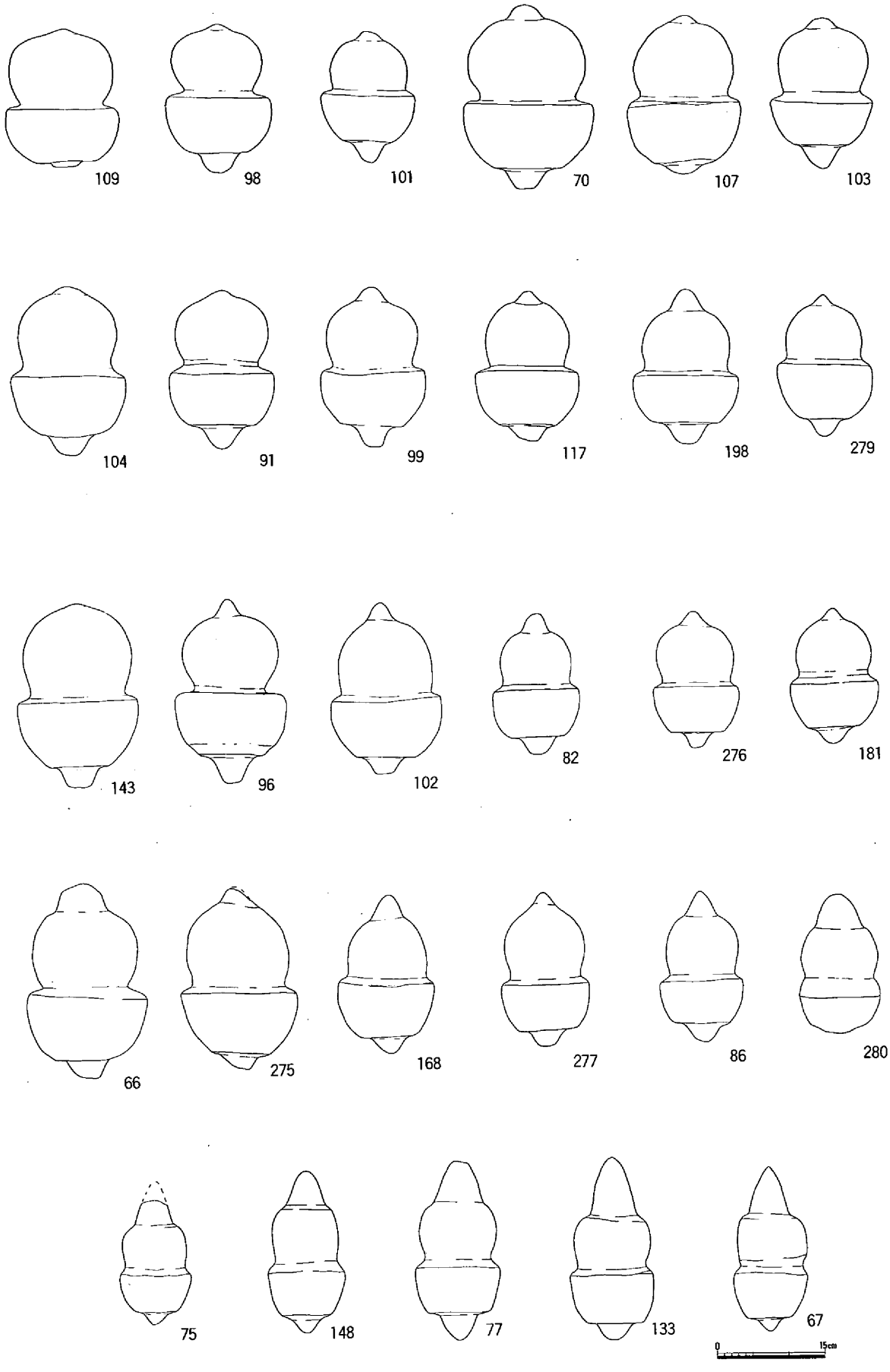
第69図　火輪出土分布（１/250）



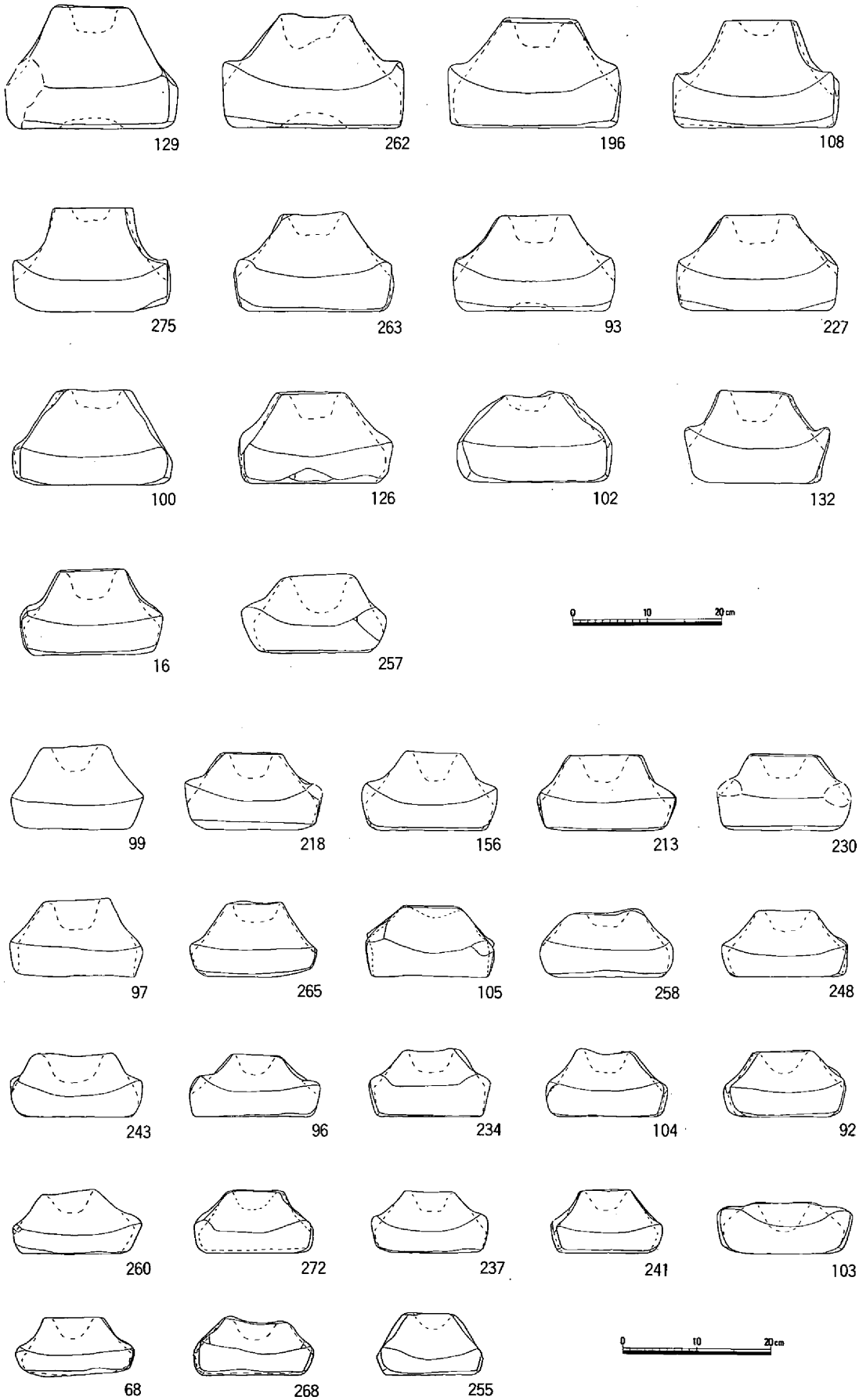
第70図　水輪出土分布（１/250）



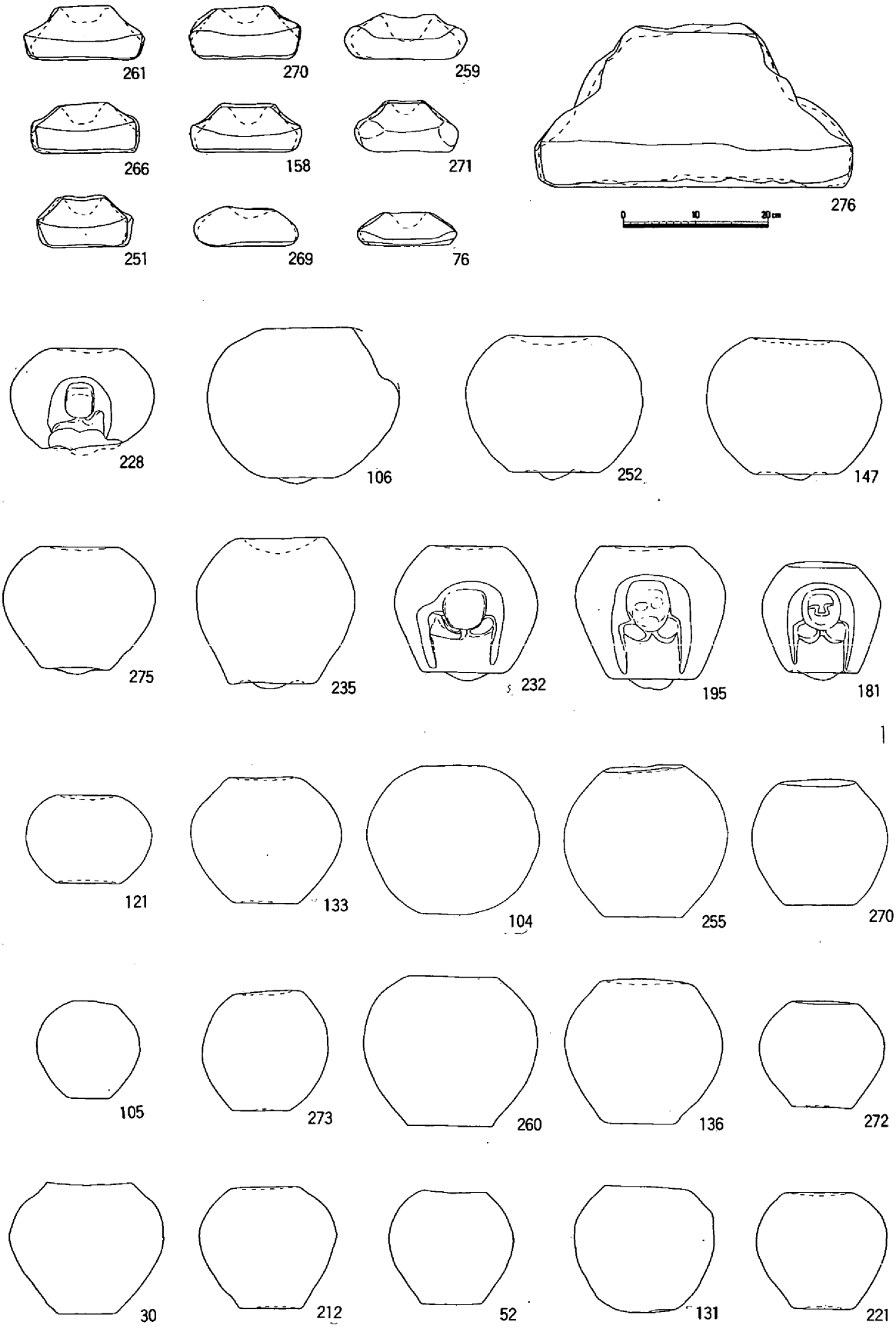
第71図　地輪出土分布（１/250）


109
98
101
70
107
103
104
91
99
117
198
279
143
96
102
82
276
181
66
275
168
277
86
280
75
148
77
133
67
0
15cm

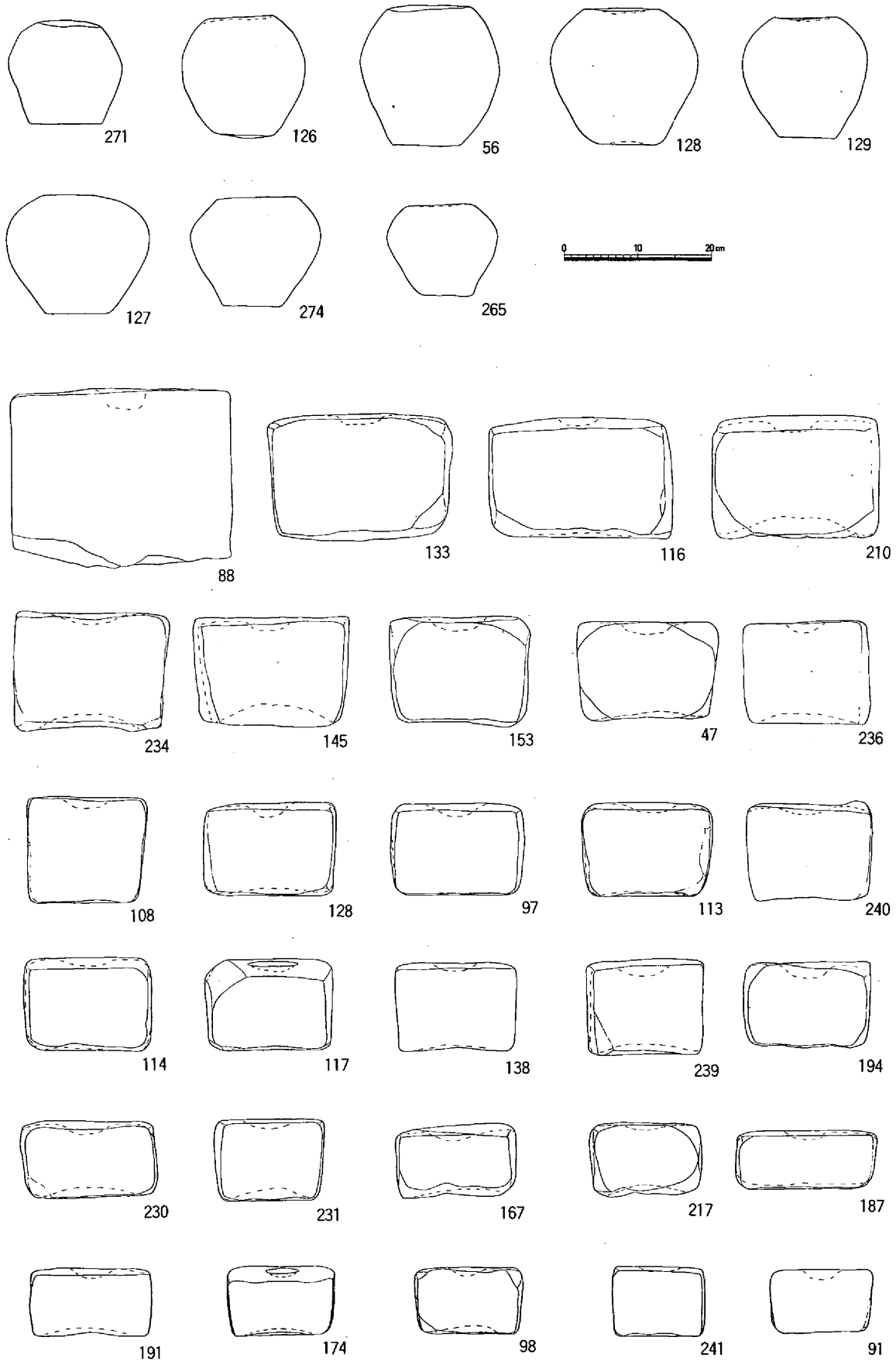
第72図　空風輪（１/８）


129
262
196
108
275
263
93
227
100
126
102
132
16
257
0 10 20cm
99
218
156
213
230
97
265
105
258
248
243
96
234
104
92
260
272
237
241
103
68
268
255
0 10 20cm

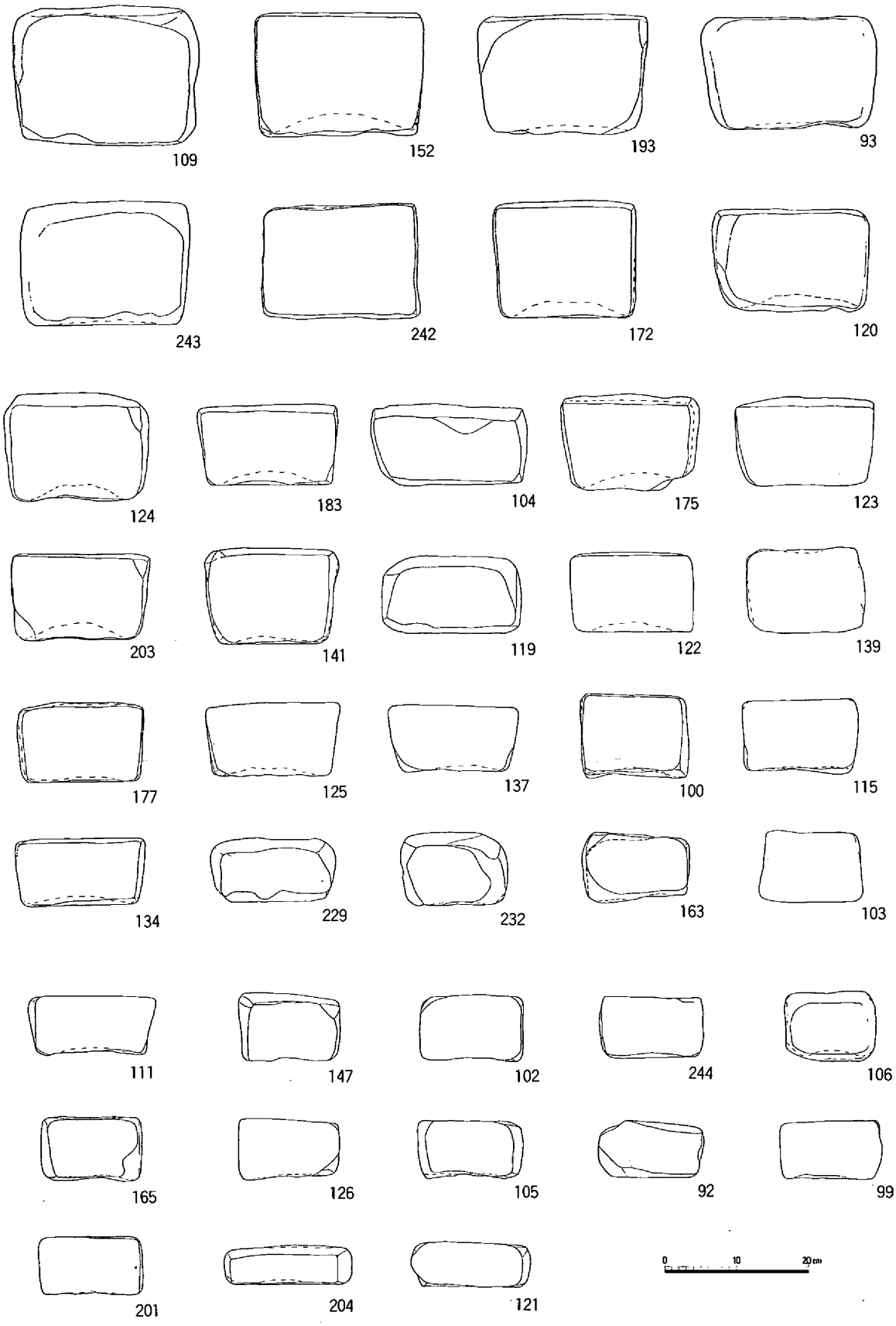
第73図　火輪①（１/８）



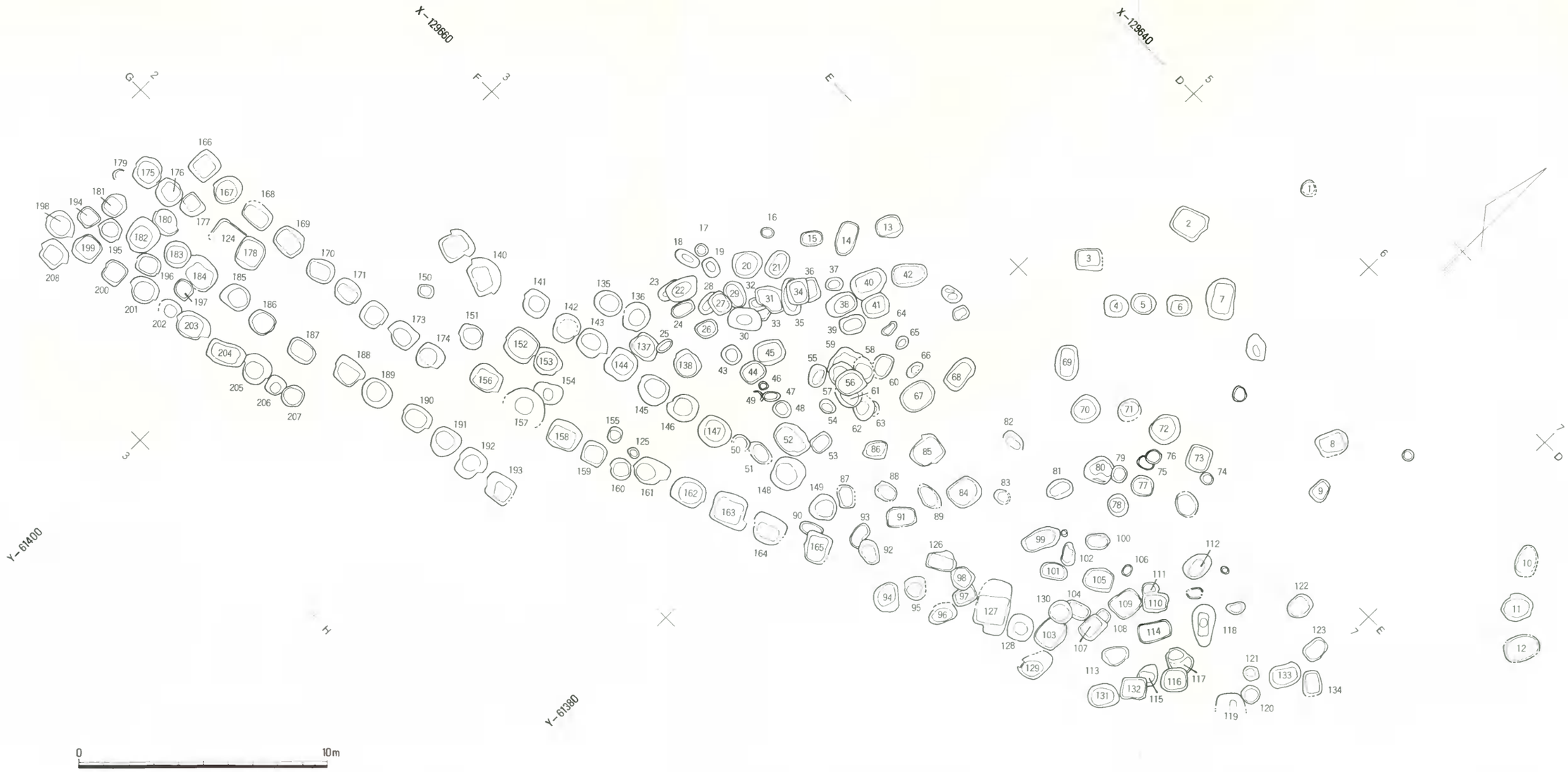
第74図　火輪②・水輪①（１/８）



第75図　水輪②・地輪①（１/８）


109
152
193
93
243
242
172
120
124
183
104
175
123
203
141
119
122
139
177
125
137
100
115
134
229
232
163
103
111
147
102
244
106
165
126
105
92
99
201
204
121
0
10
20cm

第76図　地輪②（１/８）



第77図　２～３区土壙墓全体図（１/150）

（４）中・近世墓

３区で検出された土壙墓は、分布状況から大きく２つに分けられる。１つは調査区の北半部分で集石墓の間やその周縁等に位置するもので、列をなすものと比較的雑然とした状態のものが認められる。２つ目は調査区南半部で比較的整然とした列を構成するものである。この分布状況は一部例外があるものの、基本的には時期的な差が表れていると思われる。前者では墓壙内に多くの石が陥没した状態を呈しており、それらは床面近くまで達している。後者は墓壙内に土砂が流入しており、その上面に石が配されている。

墓壙の掘り方平面形は方形・長方形・円形・楕円形などがあり、深いものも多い。副葬品を持つものには、土師質小皿のみのもの、渡来銭や鉄製品や漆塗椀を持つもの、寛永通寶や鉄製品・キセル・陶磁器等を持つものがある。

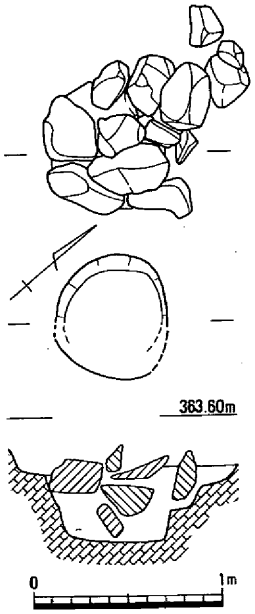
それぞれの土壙墓の時期は、出土遺物等から細かく限定できるものもあるが、中世から近世にかけて幅を持たせた推定になったものも多い。また、古代に属すると思われる土壙墓１基が検出されているが、この他にも同時期の土壙墓が存在するかどうかも不明で、中近世墓として取り上げたものの中に存在する可能性もある。

土壙墓１（第77・78図）

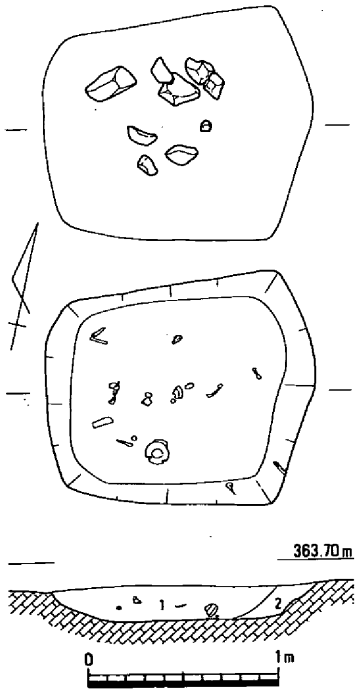
調査区の北西端に位置し、集石墓８の西辺に接する土壙墓である。掘り方の平面形は比較的小規模な円形で、径60cm・深さ36cmを測る。

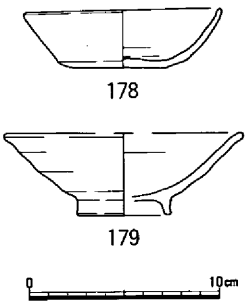
掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石はほぼ床面まで達している。

出土遺物は認められず、遺構の詳細な時期も不明であるが、中世末～近世初頭の間に納まると思わ



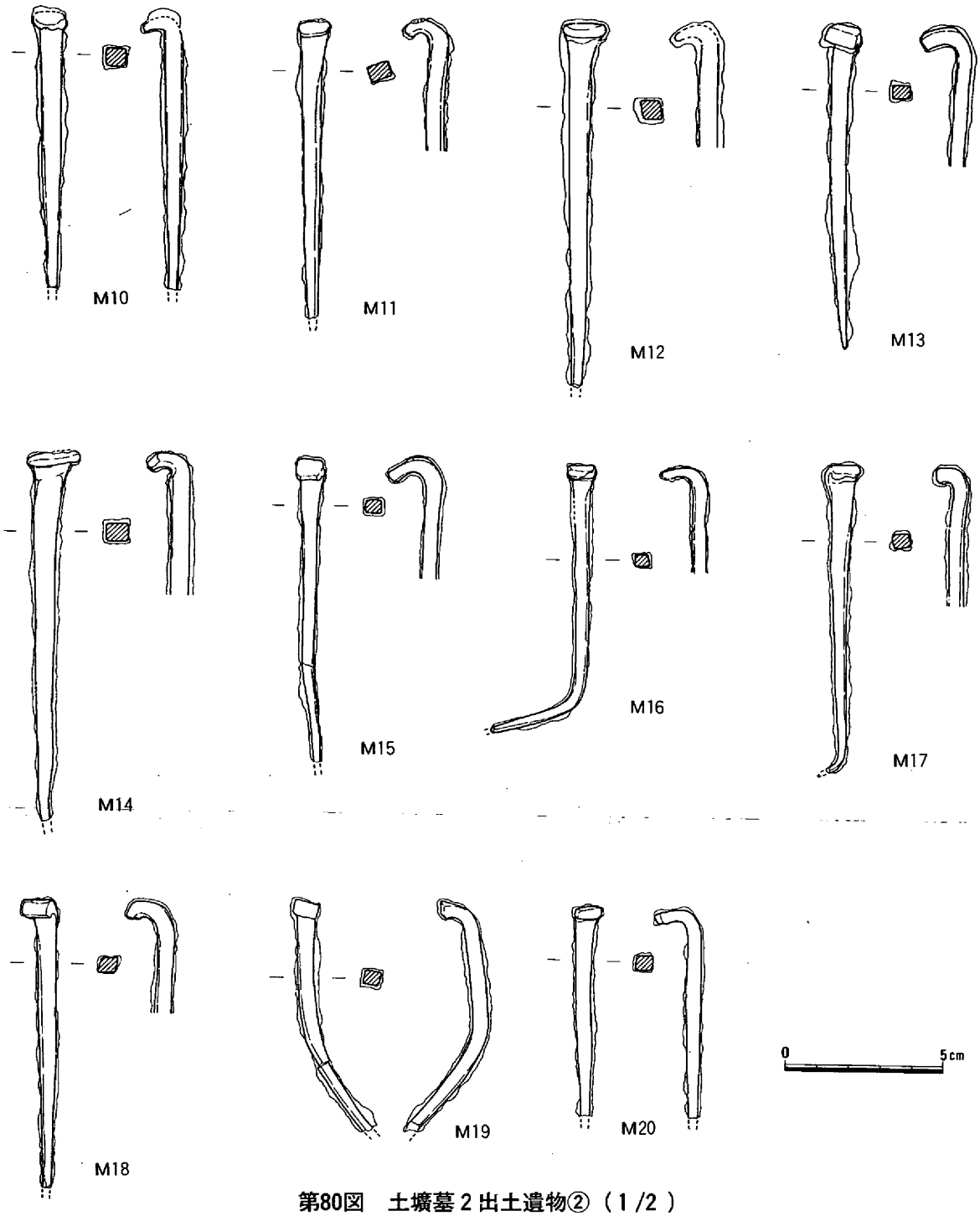
第78図　土壙墓１（１/40）





1．暗黄褐色土（炭多含）
2．橙茶褐色土（炭含）

第79図　土壙墓２（１/40）・出土遺物①（１/４）



第80図　土壙墓２出土遺物②（１/２）

れる。

土壙墓２（第77・79・80図）

調査区の北西端に位置し、集石墓６と７の間で集石の下に検出された土壙墓である。掘り方の平面形は長方形で、規模は東西135cm・南北116cm、深さ20cmを測る。埋土は炭粒を多く含む暗黄褐色土および橙赤褐色土である。土壙壁面や周辺は被熱した確証は認められないが、火葬などを含め火を伴った行為が行われた遺構の可能性がある。

床面から浮いた状態ではあるが、掘り方北寄りに小さい礫、その他に中央から南寄りに土師器の皿

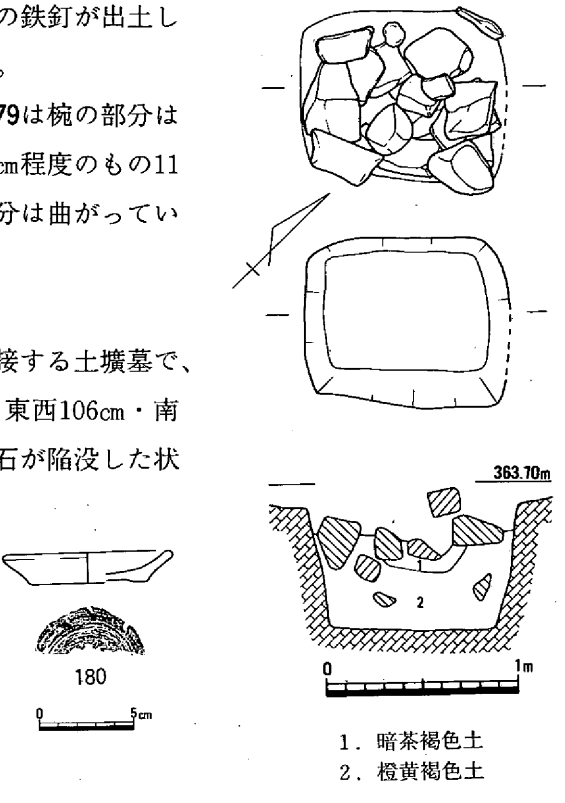
や高台付椀が出土している。また、埋土中から大形の鉄釘が出土しているが、その出土状況に法則は認められなかった。

土師器皿178は底部ヘラ切りで、土師器高台付椀179は椀の部分は比較的深めで、高台はやや低い。鉄釘は長さ10～12cm程度のもの11本が出土しており、いずれも断面形は方形で頭の部分は曲がっている。遺構の時期は平安時代後期と思われる。

土壙墓３（第77・81図）

調査区の北西端に位置し、集石墓３・４の南辺に接する土壙墓で、墓道にかかっている。掘り方の平面形は長方形で、東西106cm・南北88cm、深さ66cmを測る。掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石はほぼ床面まで達している。

埋土中からは底部回転糸切りの土師質小皿180が出土している。遺構の時期は中世末～近世初頭の間に納まると思われる。



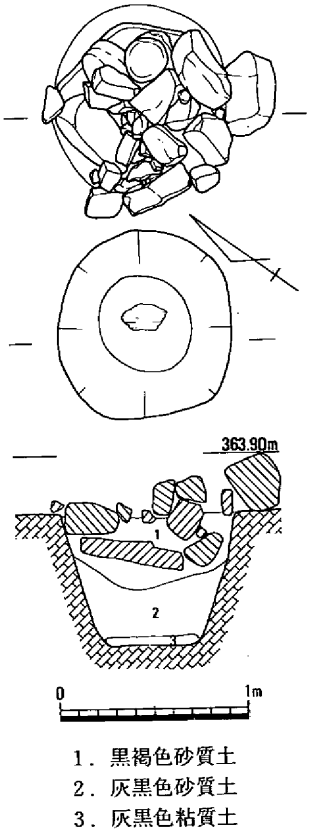
第81図　土壙墓３（１/40）・出土遺物（１/４）

土壙墓４（第77・82図、図版41）

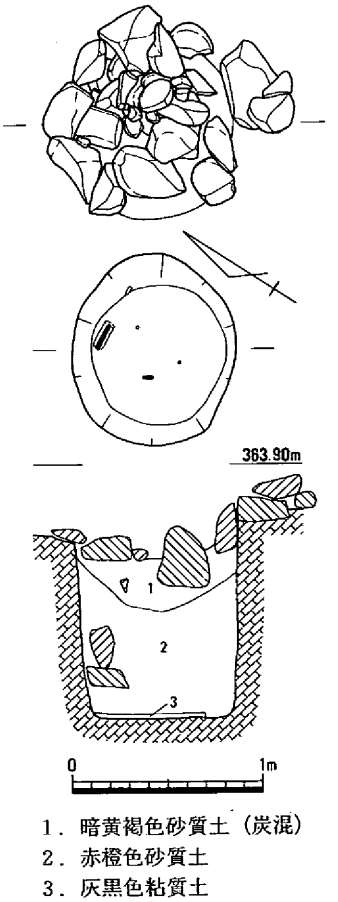
調査区の北西に位置し、集石墓24の北辺に接する土壙墓で、墓道にかかっている。掘り方の平面形は円形で、径98cm、深さ67cmを測る。

掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石は掘り方の半分まで達している。

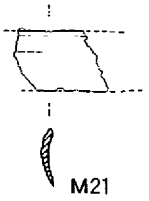
床面には、灰黒色粘質土が円形に認められ、その中には一部木質が残存していた。これにより径50cmの円形の木棺が埋納

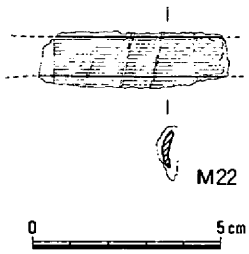


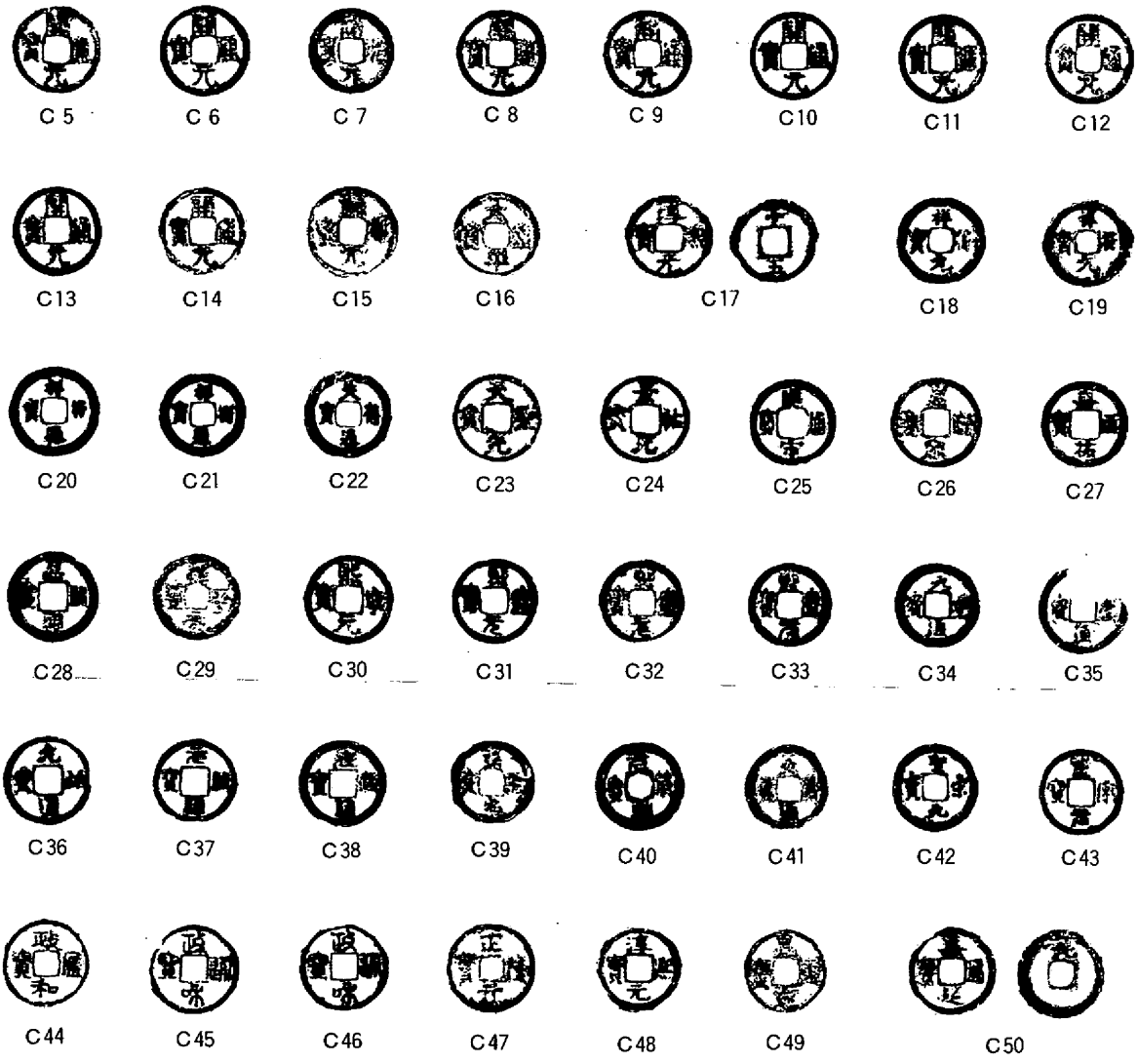
第82図　土壙墓４（１/40）・出土遺物（１/４）



第83図　土壙墓５（１/40）







第84図　土壙墓５出土遺物（１/４・１/２）

されていたと考えられる。

埋土中からは底部回転糸切りの土師質小皿181が出土している。遺構の時期は中世末～近世初頭の間に納まると思われる。

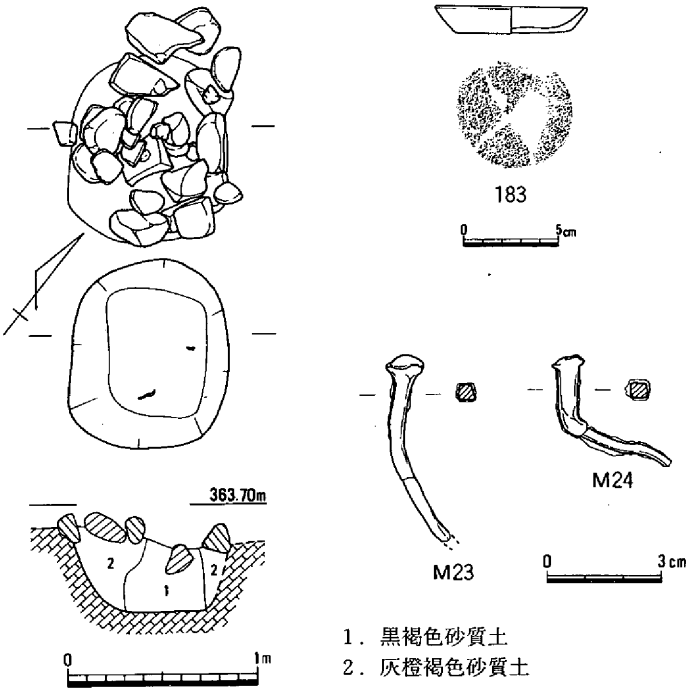
土壙墓５（第77・83・84図、図版41・85）

調査区の北西に位置し、集石墓24の北辺に接する土壙墓で、墓道にかかっている。土壙墓４の東に隣接する。掘り方の平面形は円形で、径100cm、深さ93cmを測る。掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石は床面近くまで達している。

床面には、円形の灰黒色粘質土が認められ、その中には一部木質が残存していた。これにより径

58cmの円形の木棺が埋納されていたと考えられる。

棺底面の北端では嘉定通寶（初鋳造1208年）を含む銅銭・玉１点・漆塗椀・粘土化した人骨が、南西で銅銭の一部が検出された。一方、埋土中からは底部回転糸切りの土師質小皿**182**や剃刀**M21・22**が出土している。銅銭は２か所に分かれて出土したが、合計98枚を数える。時期は中世末～近世初頭の間に納まると思われる。



第85図　土壙墓６（１/40）・出土遺物（１/４・１/２）

土壙墓６（第77・85図、図版41）

調査区の北西に位置し、集石墓26の北辺に接する土壙墓で、墓道にかかっている。土壙墓５の東に隣接する。掘り方の平面形は長方形で、南北100cm・東西82cm、深さ36cmを測る。掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石は掘り方の半分まで達している。

床面には、長方形の棺痕跡が認められ、これにより64×44cmの長方形の木棺が埋納されていたと考えられる。

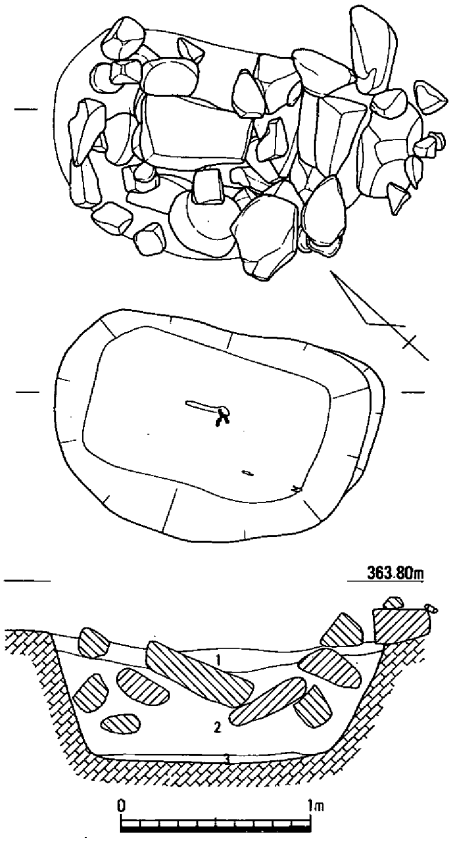
棺内のほぼ中央には頭骨や四肢骨（成人、濱田氏鑑定）が検出され、その頭骨と棺底の間から漆塗椀が出土している。一方、埋土中からは底部回転糸切りと思われる土師質小皿**183**や小形の鉄釘が出土している。時期は中世末～近世初頭の間に納まると思われる。

土壙墓７（第77・86・87図、図版42・85）

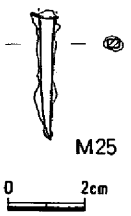
調査区の北西に位置し、集石墓26の北辺に接する土壙墓で、墓道にかかっている。土壙墓６の東に隣接する。掘り方の平面形は比較的長い長方形で、南北170cm・東西114cm、深さ50cmを測る。掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石は床面近くまで達している。

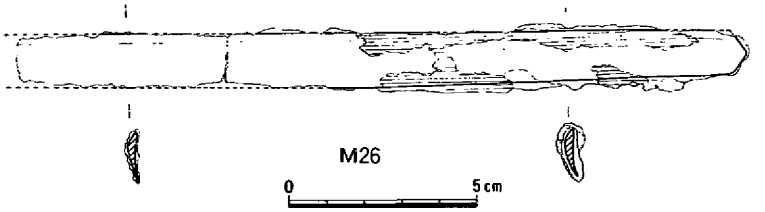
床面には、長方形の灰黄褐色砂質土が認められ、これにより112×68cmの長方形の木棺が埋納されていたと考えられる。

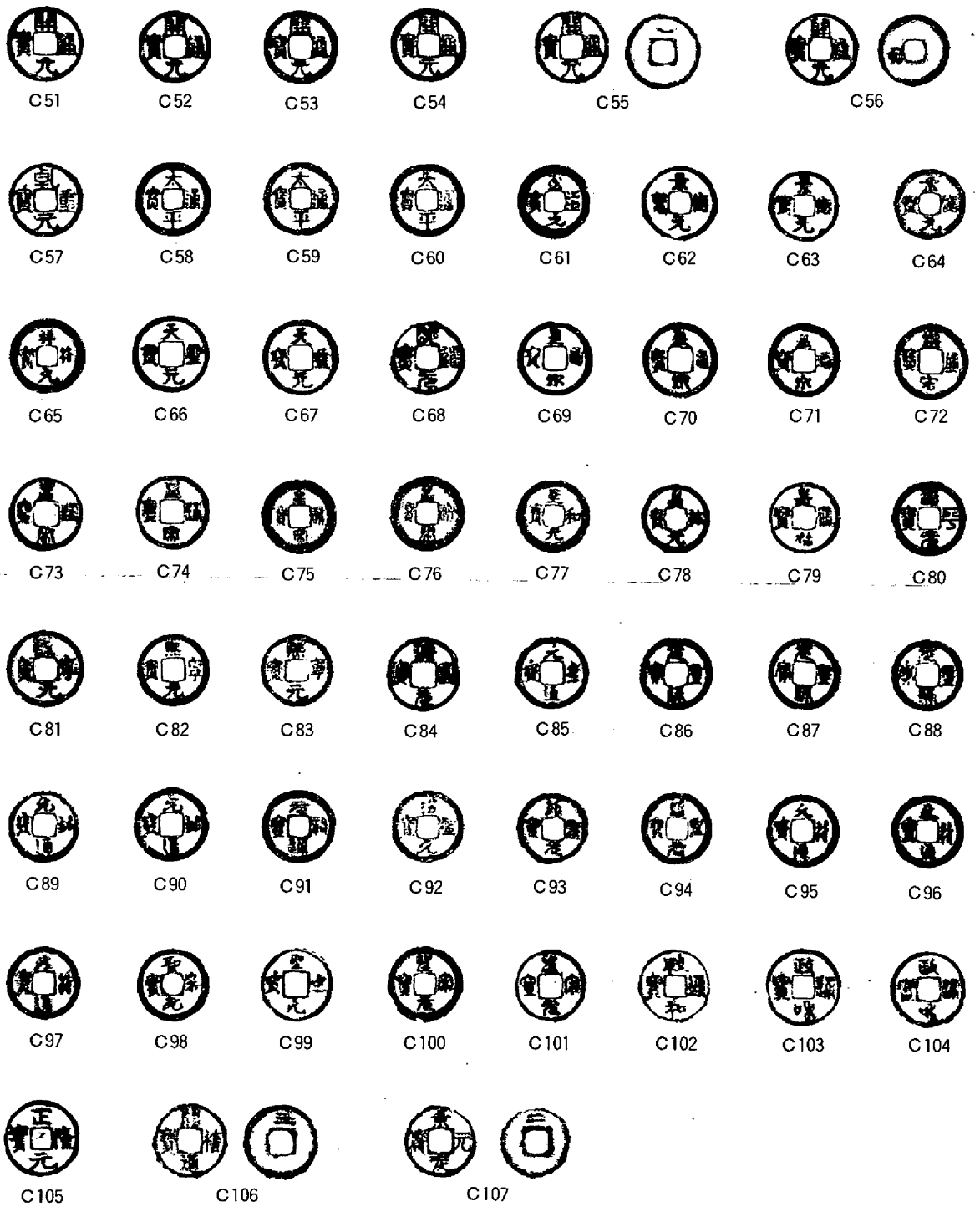
棺底のほぼ中央からは景定元寶（初鋳造1260年）を含



第86図　土壙墓７（１/40）







第87図　土壙墓７出土遺物（１/２）

む銅銭69枚・漆塗椀が出土しており、その西に粘土化した人骨が検出されている。また、埋土中からは小形の鉄釘や剃刀が出土している。時期は中世末～近世初頭の間に納まると思われる。

土壙墓8（第77・88図、図版42）

調査区の北端に位置し、集石墓52の北角を切っている土壙墓で、墓道にかかっている。掘り方の平面形は長方形で、南北125cm・東西95cm、深さ35cmを測る。掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石は床面まで達している。

出土遺物は認められず、遺構の詳細な時期は不明であるが、中世末～近世初頭の間に納まると思われる。

土壙墓9（第77・88図）

調査区の北端に位置し、集石墓52の南角を切っている土壙墓である。遺構の上半は削平されているようであるが、掘り方の平面形は長方形で、南北87cm・東西67cm、深さ27cmを測る。

掘り方内埋土には石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石はほぼ床面まで達している。

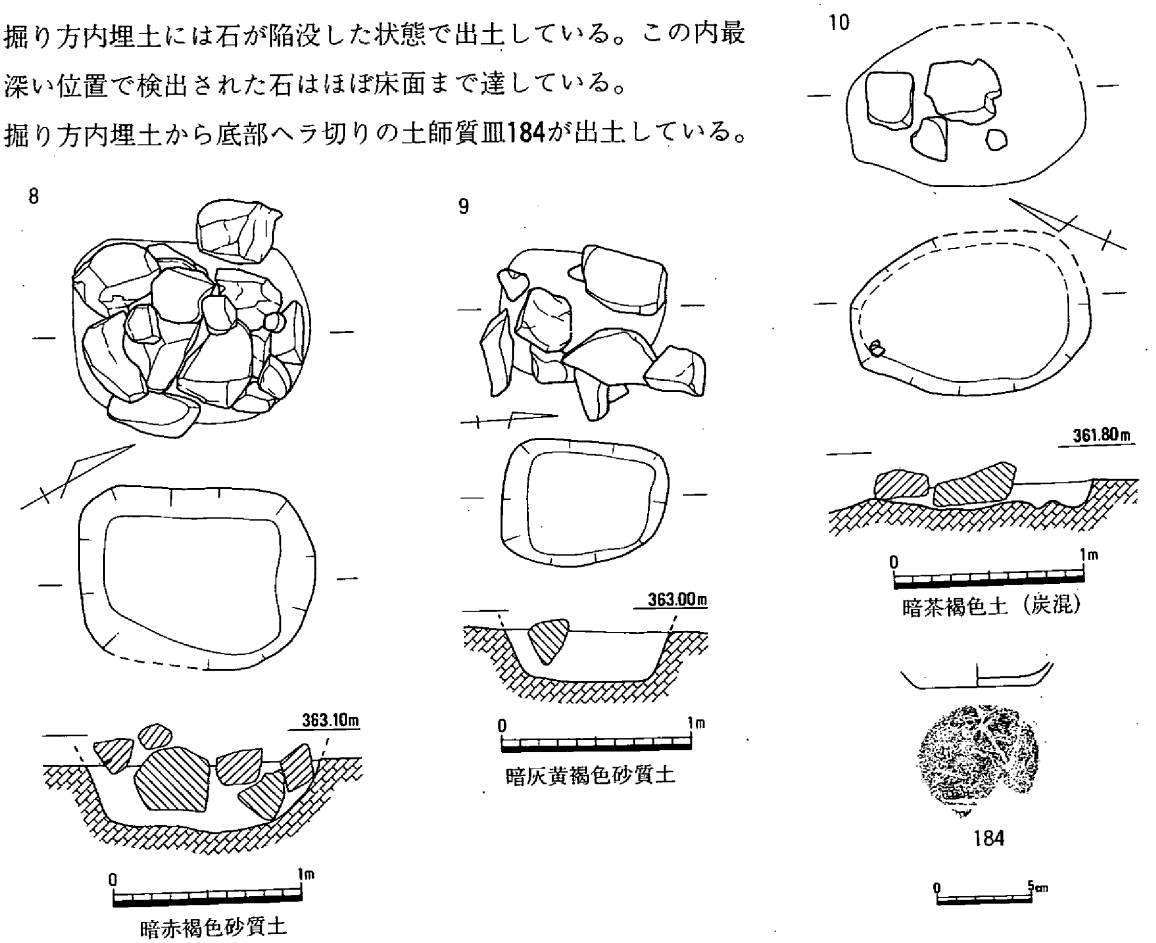
出土遺物は特には認められず、遺構の詳細な時期は不明である。

土壙墓10（第77・88図）

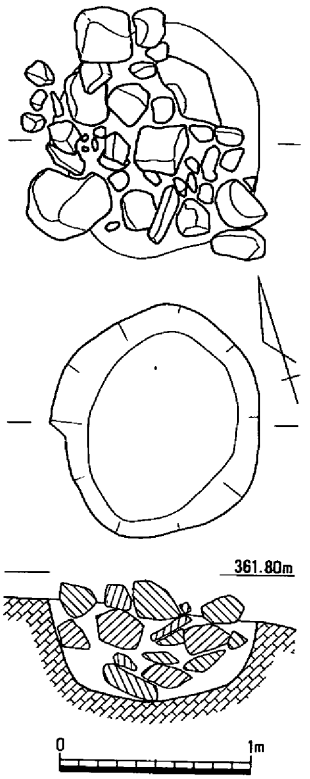
調査区の北東端に位置する土壙墓で、東部分は後世の造成で切られている。遺構の上半はかなり削平されているようであるが、掘り方の平面形は楕円形で、規模は南北124cm・東西86cm、深さ18cmを測る。

掘り方内埋土には石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石はほぼ床面まで達している。

掘り方内埋土から底部ヘラ切りの土師質皿184が出土している。



第88図　土壙墓8～10（1/40）・土壙墓10出土遺物（1/4）



第89図　土壙墓11（１/40）

遺構の詳細な時期は不明である。

土壙墓11（第77・89図、図版42）

調査区の北東端に位置し、土壙墓10の南に隣接する土壙墓である。掘り方の平面形は楕円形で、南北126cm・東西110cm、深さ54cmを測る。

掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石は床面まで達している。

出土遺物は認められず、遺構の時期は不明であるが、時期は中世末～近世初頭の間に納まると思われる。

土壙墓12（第77・90図）

調査区の北東端に位置し、土壙墓11の南に隣接する土壙墓である。掘り方の平面形は楕円形で、南北145cm・東西105cm、深さ50cmを測る。

掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石は床面まで達している。

床面から元豊通寶（初鋳造1078年）を含む銅銭２枚が出土している。この他に遺物は認められなかった。

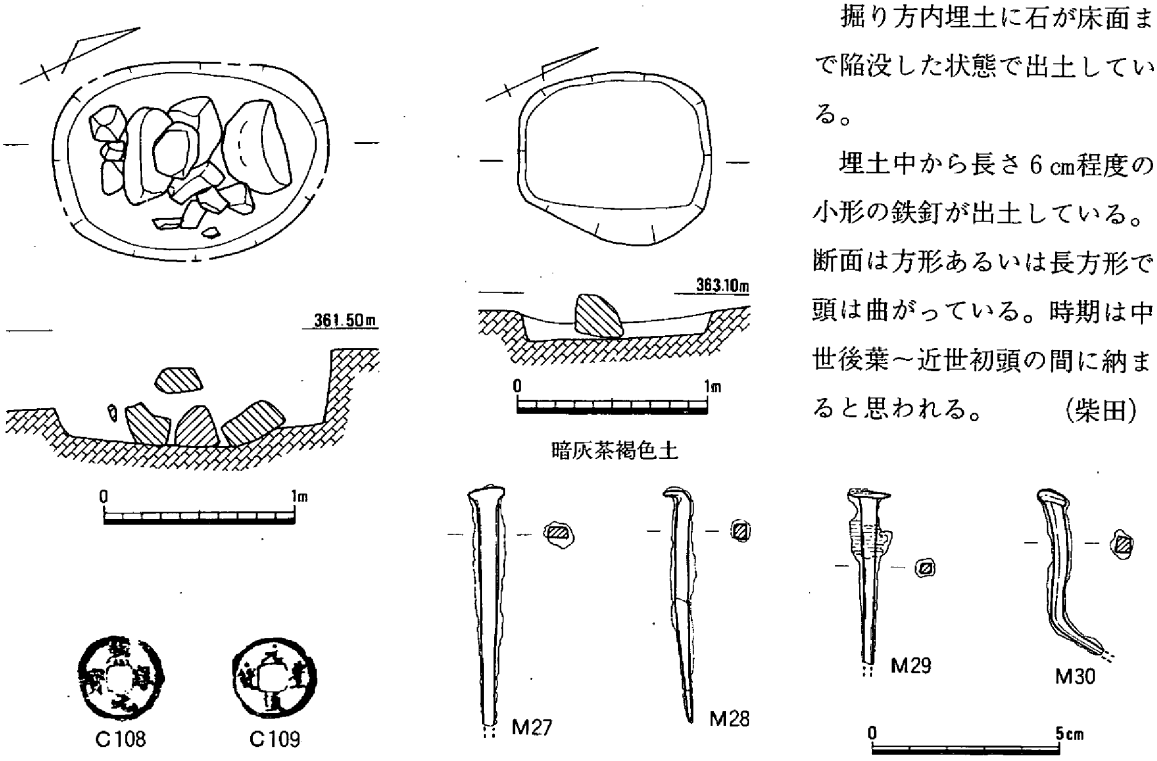
遺構の時期は中世末～近世初頭の間に納まると思われる。

土壙墓13（第77・90図）

調査区の北縁に位置する土壙墓である。遺構の上半はかなり削平を受けているが、掘り方の平面形は長方形で、南北100cm・東西92cm、深さ15cmを測る。

掘り方内埋土に石が床面まで陥没した状態で出土している。

埋土中から長さ６cm程度の小形の鉄釘が出土している。断面は方形あるいは長方形で、頭は曲がっている。時期は中世後葉～近世初頭の間に納まると思われる。　（柴田）



第90図　土壙墓12（左）・13（右）（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓14（第91図、図版43）

土壙墓13の南西約１ｍの位置に検出した。平面形は角に丸みを持つが長方形を呈するものである。壁は垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。規模は長辺140cm、短辺80cm、深さ24cmを測る。土壙墓内からは長径30～50cmを測る数個の偏平な石を検出した。石は土壙墓の内部の全体を覆うものではない。**185**は土師質土器の小皿である。

土壙墓15（第91図）

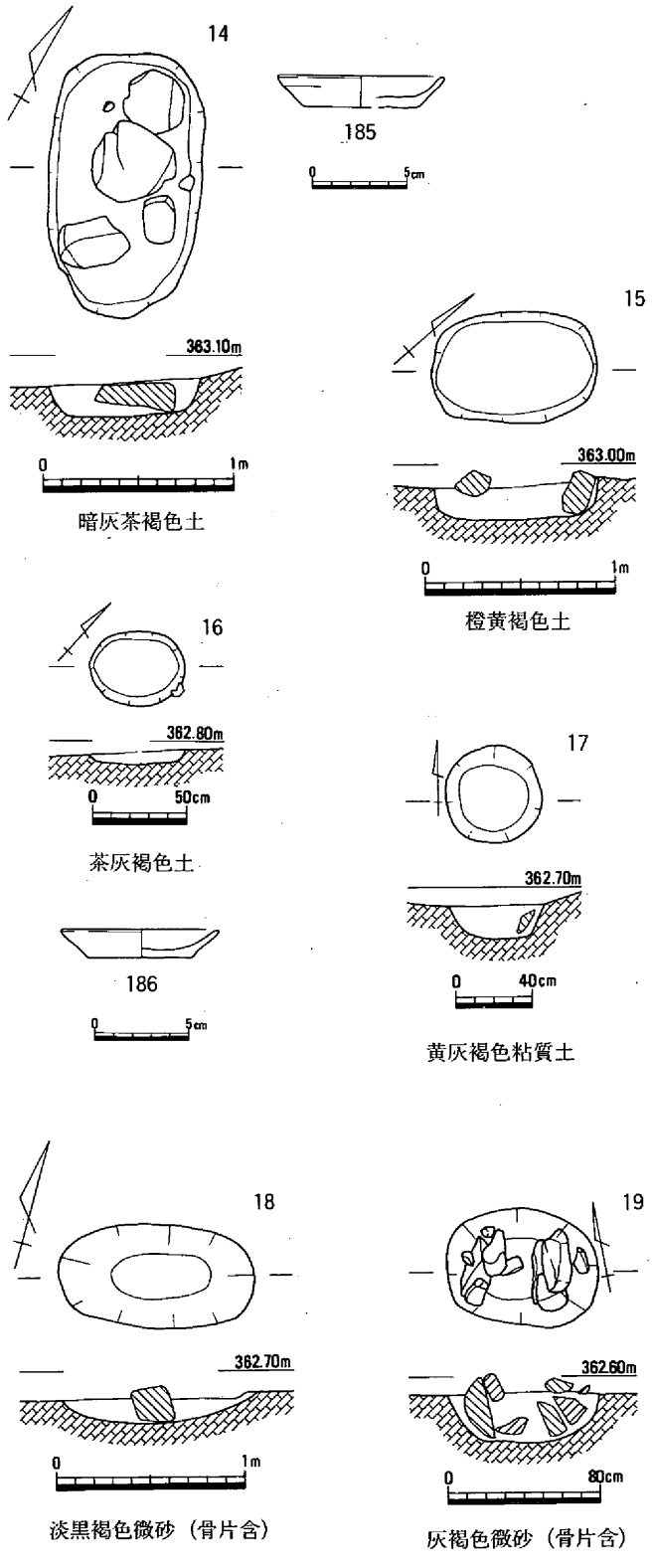
土壙墓14の南西約50cmの位置に検出した。平面形は長方形を呈するものである。壁は垂直に近い立ち上がりを見せており、底面はほぼ平坦である。土壙の中からは数個の石が検出されたが規則的なものは見られなかった。規模は長辺87cm、短辺60cm、深さ20cmを測る。

土壙墓16（第91図）

土壙墓15の南西約１ｍの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形をみると皿形を呈しており、全体が緩やかに弧を描くものである。そのため壁は大きく外に開きながら立ち上がる。規模は長径51cm、短径40cm、深さは６cmを測る。**186**は土師質土器の小皿で、直径約7.8cmを測る。

土壙墓17（第91図）

土壙墓16の南西約２ｍの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。断面形をみると椀形を呈しており、壁は外に開きながら立ち上がる。底面も円形を呈しておりほぼ平坦である。規模は直径52cm、深さは18cmを測る。



第91図　土壙墓14～19（１/40）・出土遺物（１/４）

土壙墓18（第91図）

土壙墓17に近接して検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形をみると皿形を呈しており、全体が緩やかな弧を描くものであるため、壁は大きく開きながら立ち上がる。規模は長径103cm、短径55cm、深さは16cmを測る。

土壙墓19（第91図）

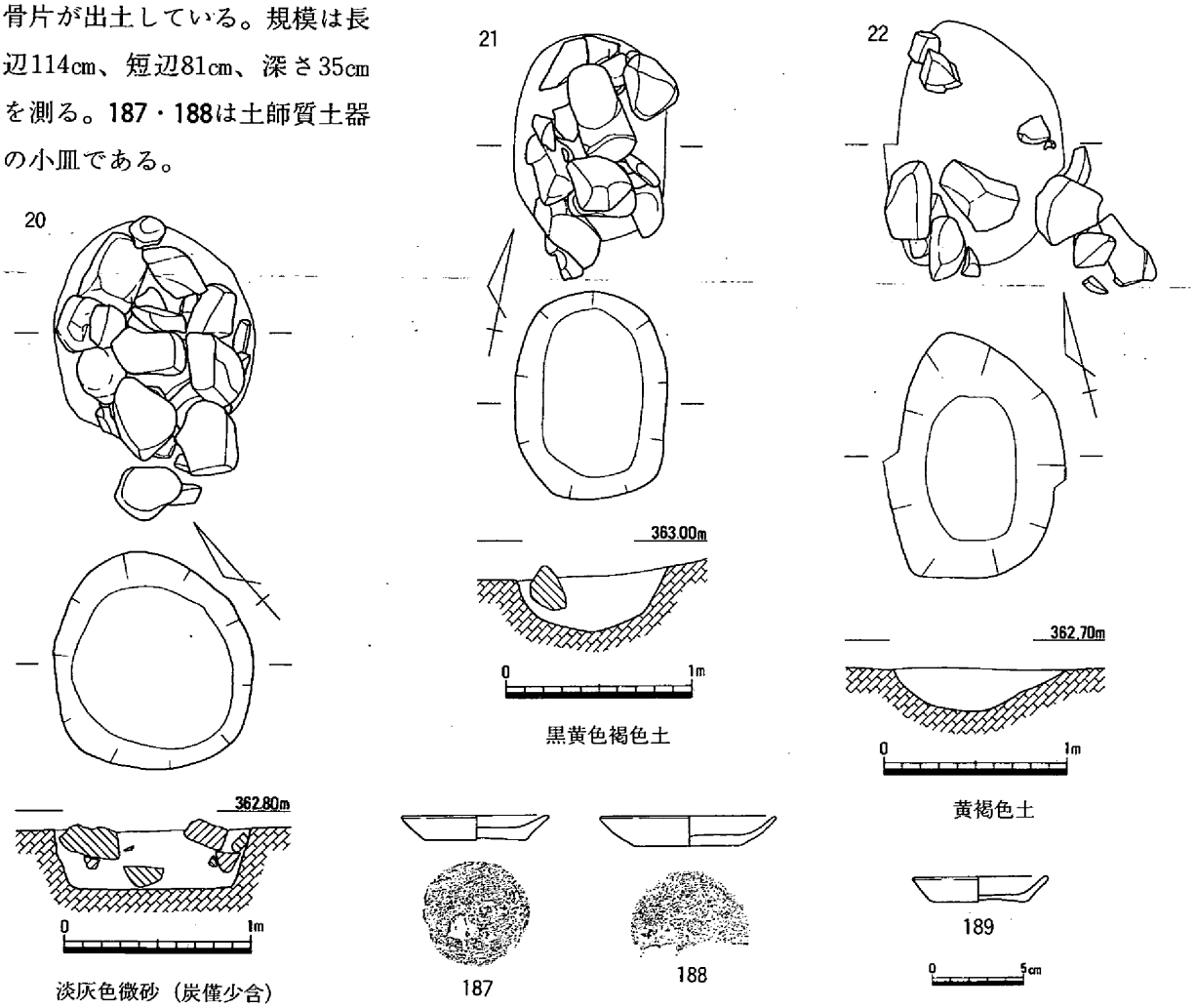
土壙墓18の東に近接して検出した。平面形は少し丸みを持つが方形を呈するもので、壁は垂直に近い状態で立ち上がる。両側の短辺側には壁面に接して石を立てかけた状態で検出した。石は偏平な面を互いに内側に向けて垂直に立てられていた。そのため、石と石の間は方形の空間が形成される状態を呈するものである。墓壙の規模は長辺79cm、短辺64cm、深さは25cmを測る。埋土からは少量の人骨片が出土した。

土壙墓20（第92図）

土壙墓19の北東約50cmの位置に検出した。平面形は少し南北に長いが円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しているため壁は少し開きながら立ち上がり、底面は平坦である。墓壙からは長径30～40cmを測る石を数多く検出した。それらは面を形成するものではないが、充満する状態であった。石を埋める淡灰色微砂からは少量ではあるが炭が検出された。墓壙の規模は長径120cm、短径107cm、深さ24cmを測る。

土壙墓21（第92図）

土壙墓20の北東に近接して検出した。平面形は長方形を呈するものである。断面形は椀形を呈している。底面は平坦ではなく、少し窪むものである。この墓壙も石が充満しており、少量ではあるが人骨片が出土している。規模は長辺114cm、短辺81cm、深さ35cmを測る。**187・188**は土師質土器の小皿である。



第92図　土壙墓20～22（1/40）・出土遺物（1/4）

土壙墓22（第92図）

土壙墓21の南西約２ｍの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するもので、断面形は皿形を呈しており、壁は大きく開きながら立ち上がる。底面は少し窪むものである。墓壙の南端には数個の石が纏まった状態で出土した。また、少量の骨片が出土している。規模は長径133cm、短径99cm、深さ20cmを測る。**189**は土師質土器の小皿である。

土壙墓23（第93図）

土壙墓22に切られた状態で検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は椀形を呈しているため、壁は開きながら立ち上がる。底面は少し窪むものである。この墓壙からも石が検出された。墓壙の規模は長径107cm、短径54cm、深さは23cmを測る。

土壙墓24（第93図、図版43）

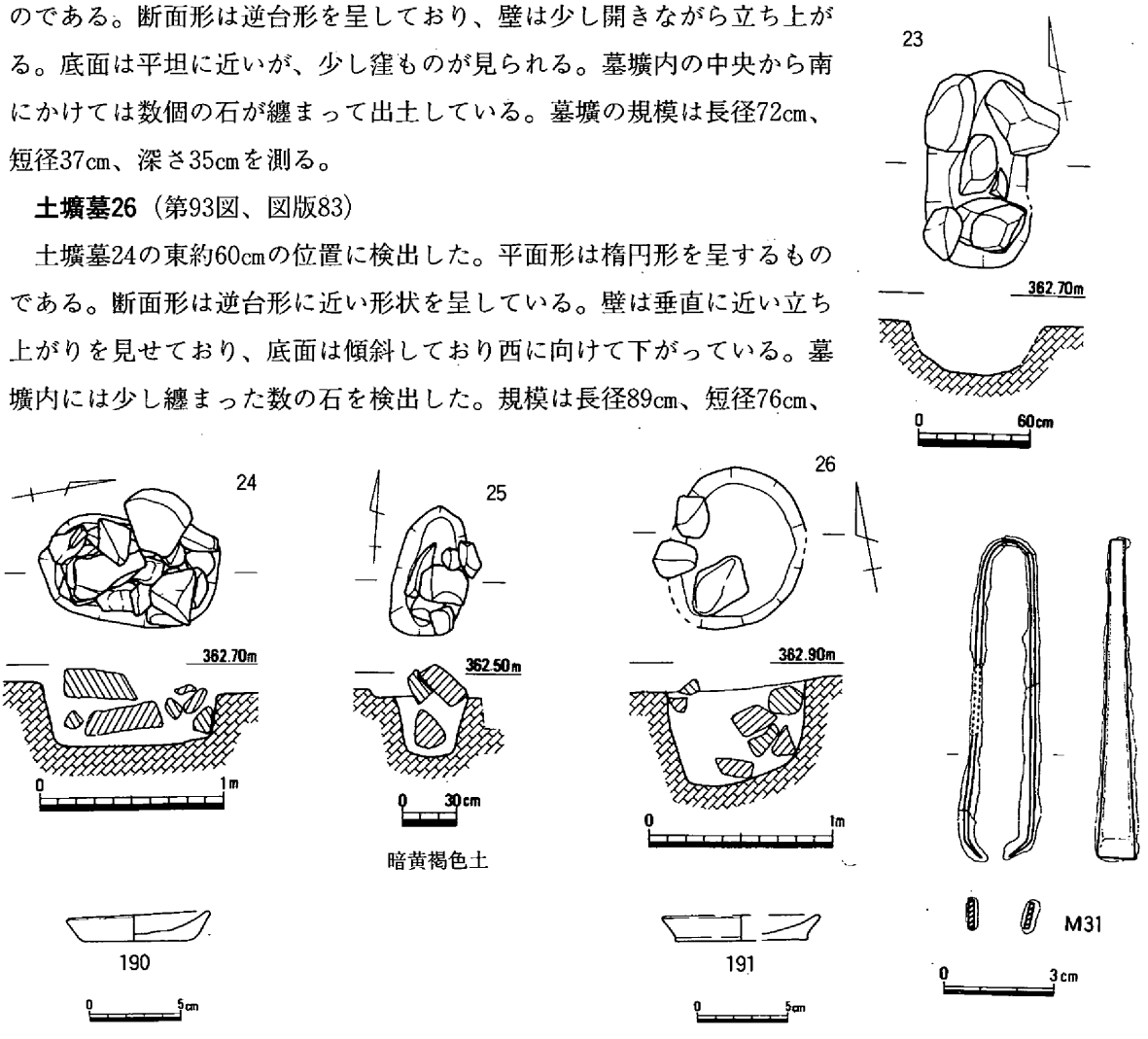
土壙墓22の東に接して検出した。平面形は長方形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しているが、壁は垂直に近い立ち上がりを示している。底面は平坦である。墓壙内には石が充満しており、その埋土からは小量の人骨片が出土している。規模は長辺95cm、短辺56cm、深さ25cmを測る。

土壙墓25（第93図）

土壙墓24の南西約80cmの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しており、壁は少し開きながら立ち上がる。底面は平坦に近いが、少し窪ものが見られる。墓壙内の中央から南にかけては数個の石が纏まって出土している。墓壙の規模は長径72cm、短径37cm、深さ35cmを測る。

土壙墓26（第93図、図版83）

土壙墓24の東約60cmの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は逆台形に近い形状を呈している。壁は垂直に近い立ち上がりを見せており、底面は傾斜しており西に向けて下がっている。墓壙内には少し纏まった数の石を検出した。規模は長径89cm、短径76cm、



第93図　土壙墓23～26（１/40）・出土遺物（１/４・１/２）

深さ55cmを測る。**191**は土師質土器の小皿、**M31**は鉄製の毛抜きである。

土壙墓27（第94図、図版43）

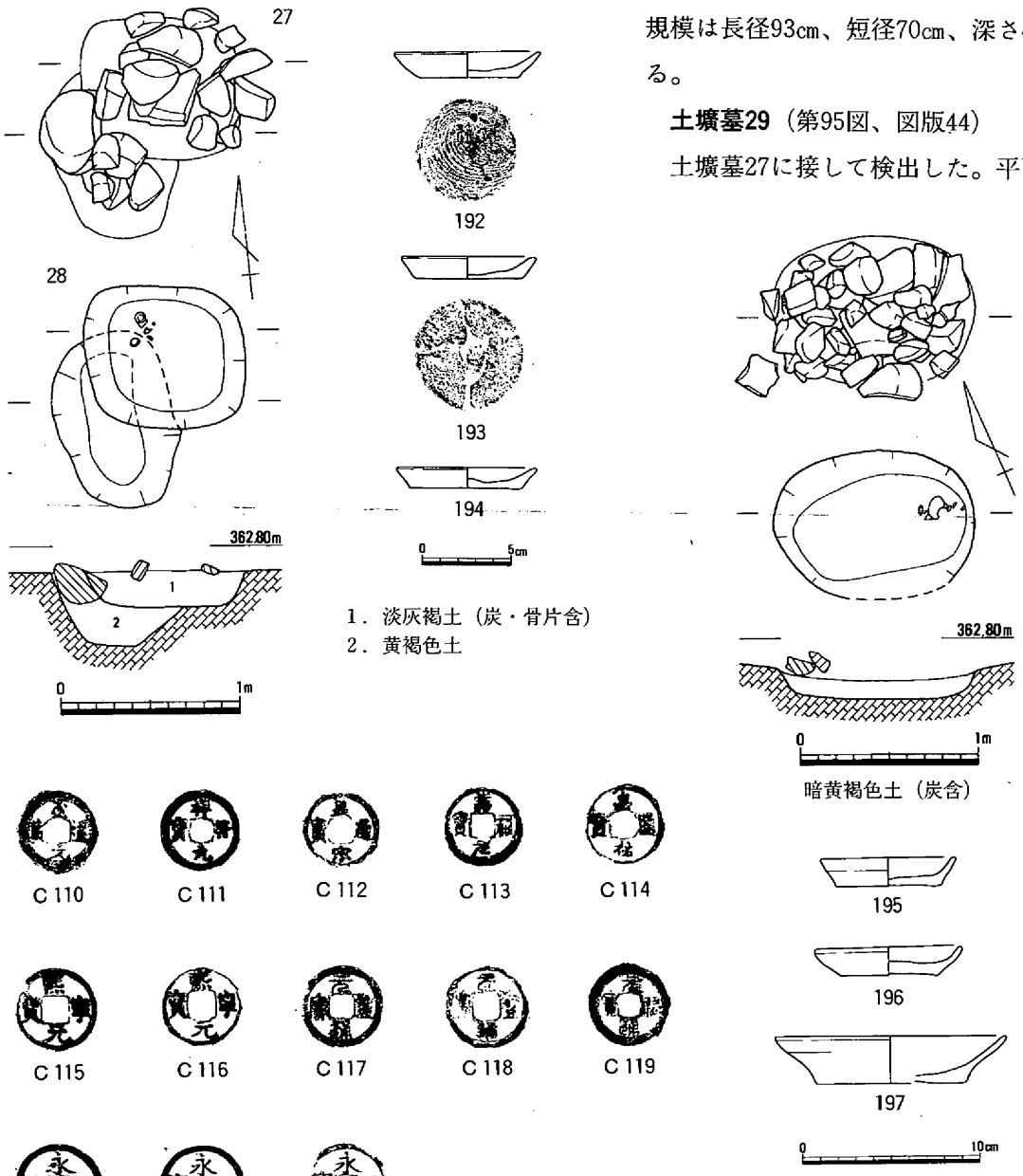
土壙墓26の北約50cmの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しており、壁は少し開きながら立ち上がり、底面は平坦である。墓壙内にはやや纏まった数の石を検出した。規模は長辺90cm、短辺79cm、深さ20cmを測る。**192～194**は土師質土器の小皿である。**C110～C122**は渡来銭で、熙寧元寶、永楽通寶など19枚出土している。

土壙墓28（第94図）

土壙墓27と重複するものであるが土壙墓28が切られており古いことを示している。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は椀形を呈しており、壁は開きながら立ち上がり、底面は平坦である。墓壙内からは纏まった数の石が検出された。規模は長径93cm、短径70cm、深さ45cmを測る。

土壙墓29（第95図、図版44）

土壙墓27に接して検出した。平面形は楕



第94図　土壙墓27・28（１/40）・27出土遺物（１/４・１/２）

第95図　土壙墓29（１/40）・出土遺物（１/４）

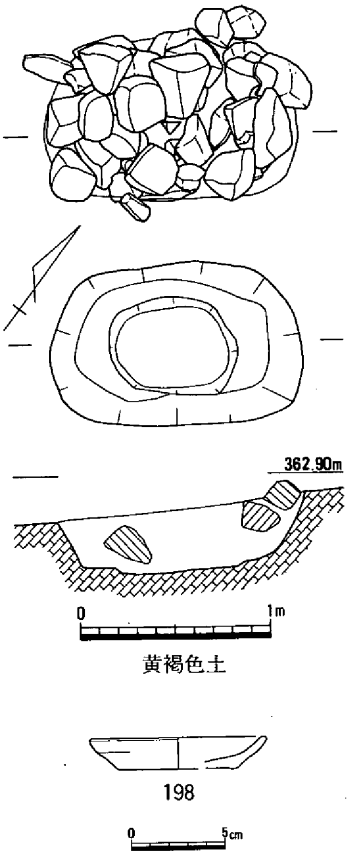
円形を呈するものである。断面形は皿形を呈しており、底面は平坦である。墓壙内からは全体に充満する状態で石群を検出した。墓壙の規模は長径111cm、短径82cm、深さ21cmを測る。遺物は**195**～**197**の土師質土器の皿が出土している。

土壙墓30（第96図）

土壙墓29の南東に接して検出した。平面形は方形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しており、壁は少し開きながら立ち上がるものである。底面は数cmであるが中央部がさらに一段掘りくぼめられている。墓壙内は長径20～30cmの石が充満しており、少量ではあるが骨片が出土している。

土壙墓31（第97図、図版44・80）

土壙墓30の北約30cmの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しており、壁は少し開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。墓壙内は長径30～40cm程度の石が充満していた。規模は長径135cm、短径99cm、深さ34cmを測る。出土遺物は**199**は土師質土器の小皿、**M32**は先端が曲がってはいるが角釘、**C123**～**125**は開元通寶などの渡来銭がある。



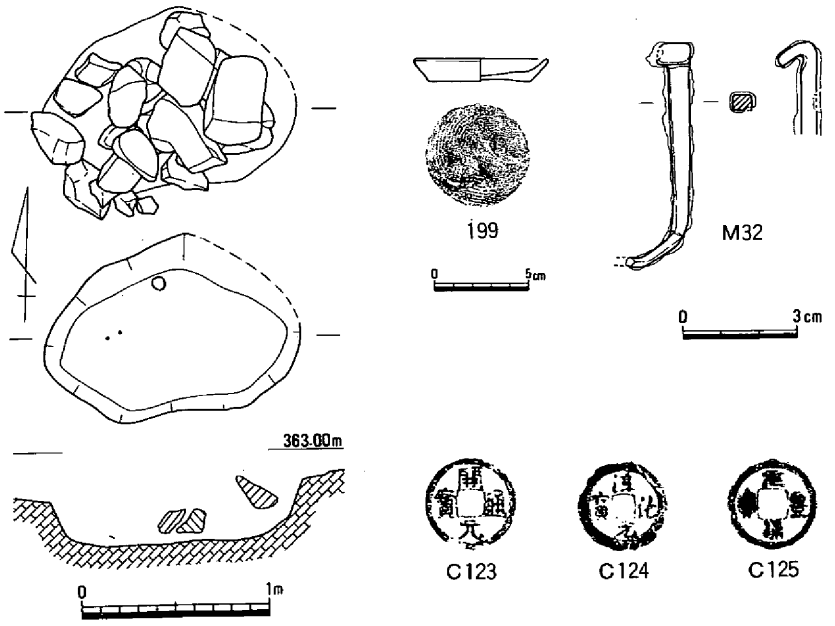
第96図　土壙墓30（1/40）・出土遺物（1/4）

土壙墓32（第98図）

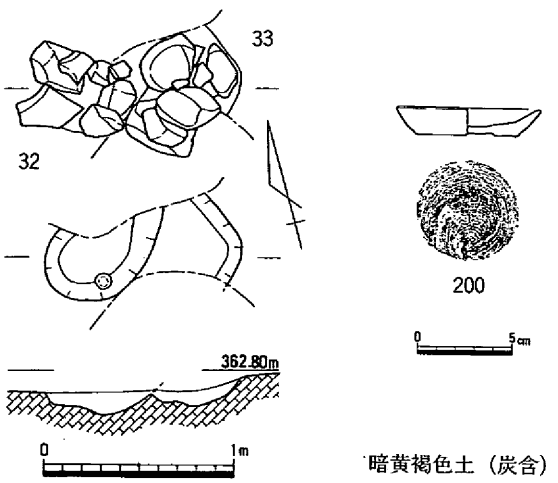
土壙墓31に重複してその下層に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は皿形を呈しており、底面は緩やかな弧を描いて窪んでいる。墓壙内からは全体に石を検出した。また、底面からは**200**の土師質土器の小皿が出土した。土壙墓31に削平されているため全体の規模は不明であるが、長径70cm以上、短径41cm以上、深さ12cm以上を測る。

土壙墓33（第98図）

土壙墓32に切られた状態で検出した。そのため全体の平面形は不明であるが方形を呈すものと考えられる。断面形は皿形を呈しており、底面は緩やかな弧を描く。墓壙内は石が充満するものである。全形の規模は不明であるが、長辺44cm以上、短辺36cm以上、深さ



第97図　土壙墓31（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）



第98図　土壙墓32・33（１/40）
・32出土遺物（１/４）

16cmを測る。

土壙墓34（第99図）

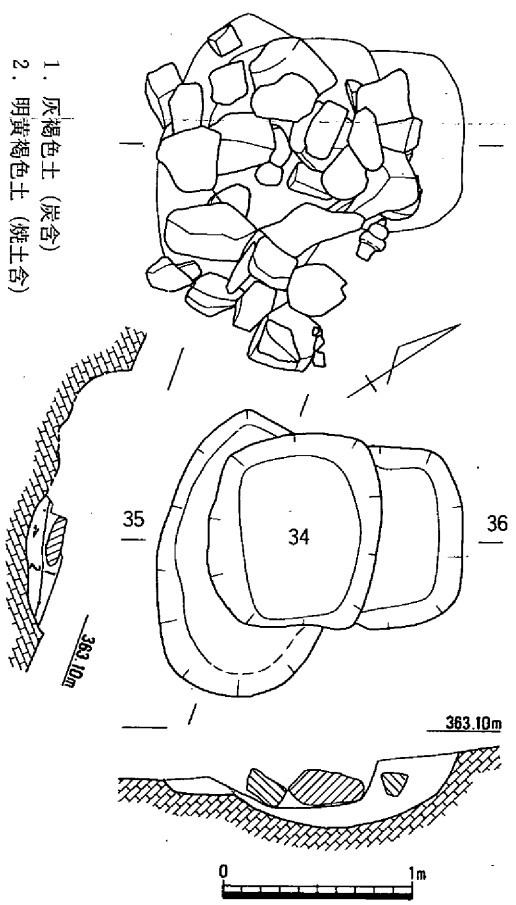
土壙墓31の北約30cmの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。断面形は逆台形を呈するものであり、底面は平坦である。南側の壁は大きく開きながら立ち上がるものである。東側の壁は垂直に近い立ち上がりを見せている。墓壙からは全面に石を検出した。規模は長辺100cm、短辺90cm、深さ26cmを測る。

土壙墓35（第99図）

土壙墓34に重複して下層に検出した。平面形は楕円形を呈す。壁は少し開きながら立ち上がり、底面は少し凹凸がある。墓壙には石が詰まるものである。規模は長径148cm、短径94cm、深さ26cmを測る。埋土中から釘、人骨片が出土している。

土壙墓36（第99・100・101図、図版80）

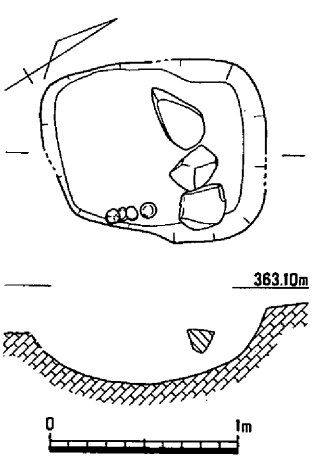
土壙墓34に重複してその下層に検出した。平面形は方形を呈するものである。断面形は椀形を呈するもので、全体に緩やかに弧を描いている。底面は少し窪むものである。この土壙墓も石が詰まっていたものと考えられるが土壙墓34に削平されているため不明である。規模は長辺117cm、短辺96cm、深さ42cmを測る。墓壙内の東辺には壁に沿う状態で、**201～205**に示す土師質土器の小皿が出土した。また、開元通寶、洪武通寶など渡来銭12枚や漆が出土している。



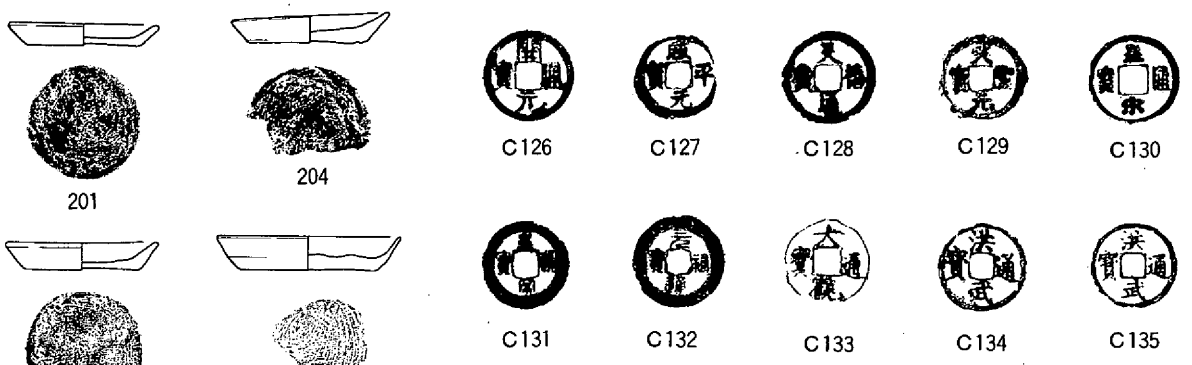
第99図　土壙墓34～36（１/40）

土壙墓37（第102図）

土壙墓34の北東約80cmの位置に検出した。平面形



第100図　土壙墓36（１/40）



第101図　土壙墓36出土遺物（1/4・1/2）

は楕円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。壁は垂直に近い立ち上がりを見せている。墓壙内には石が充満していた。規模は長径67cm、短径54cm、深さ28cmを測る。埋土から角釘が出土している。

土壙墓38（第102図、図版44）

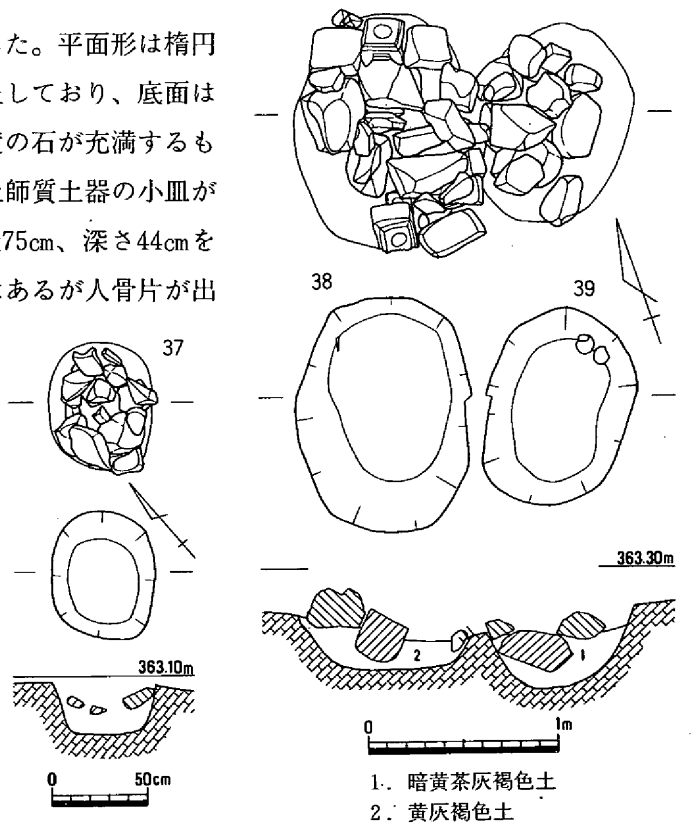
土壙墓37の東約15cmの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は皿形を呈しており、底面は平坦である。壁は少し開きながら立ち上がるものである。墓壙内には石が充満している。その石に混じって寶篋印塔の笠などが見られた。規模は長径125cm、短径90cm、深さ36cmを測る。埋土中から角釘、人骨片が出土した。

土壙墓39（第102・103図、図版44・45）

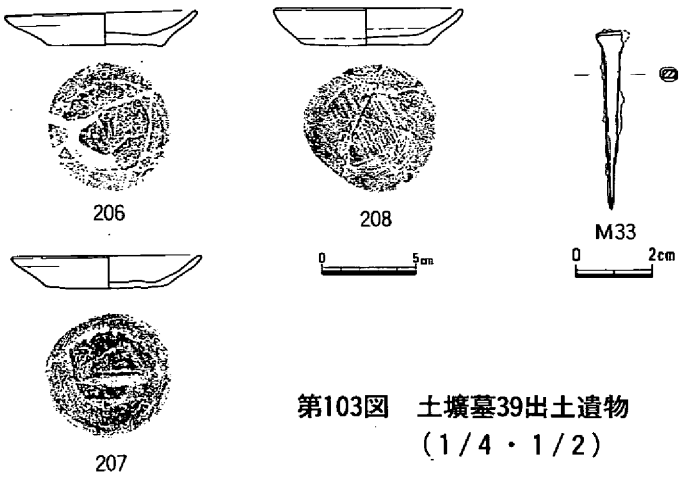
土壙墓38の東南東約15cmの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は椀形を呈しており、底面は平坦である。墓壙内には長径30～40cm程度の石が充満するものである。底面の北端からは**206～208**の土師質土器の小皿が出土した。墓壙の規模は長径105cm、短径75cm、深さ44cmを測る。埋土中からは**M33**の角釘、少量ではあるが人骨片が出土している。

土壙墓40（第104図、図版45）

土壙墓38の北側に接する位置に検出した。平面形はやや下膨れの楕円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しており、底面は少し段が見られるが平坦である。壁は少し開きながら立ち上がるものである。墓壙内には中央部から南にかけて長径30～60cmを測る石が多く見られた。規模は長径150cm、短径約102cm、深さ27cmを測る。



第102図　土壙墓37～39（1/40）



第103図　土壙墓39出土遺物
（1/4・1/2）

土壙墓41（第104図、図版45）

土壙墓40の東南東に一部重複して検出したもので、土壙墓41が新しいと考えられる。平面形は方形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。壁は少し開きながら立ち上がるものである。墓壙内には長径40～50cm程度の石が充満していた。規模は長辺109cm、短辺、95cm、深さ34cmを測る。埋土から少量の人骨片が出土した。

土壙墓42（第105図）

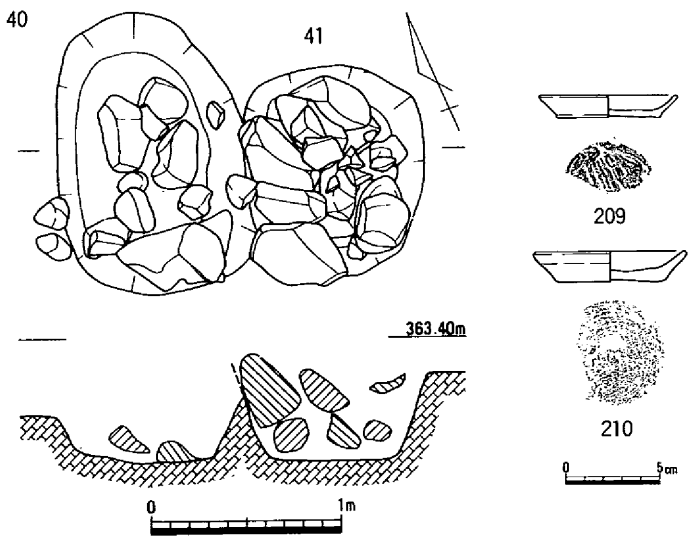
土壙墓40の北東約20cmの位置に検出した。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈している。底面は平坦である。壁は少し開きながら立ち上がるもので、東壁には一部段が見られる。墓壙からはほとんど石は出土していない。規模は長径142cm、短径92cm、深さ46cmを測る。遺物は**211**の土師質土器の小皿がある。

土壙墓43（第106図、図版46）

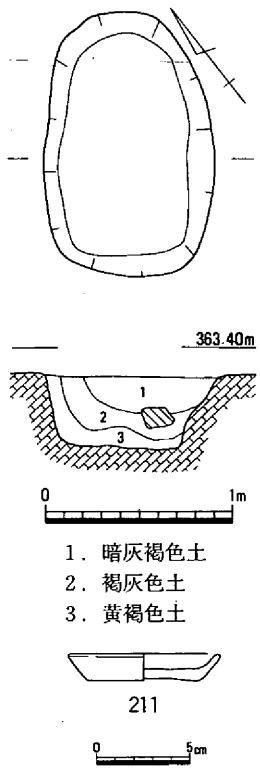
土壙墓30の南南東約60cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。断面形は椀形を呈しており、底面は少し窪む。壁は垂直に近く立ち上がる。墓壙内は長径30cm程度の石で充満していた。規模は長径79cm、短径75cm、深さ45cmを測る。遺物は**212**の土師質土器の小皿が出土している。

土壙墓44（第107図、図版81）

土壙墓43の東約30cmの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。断面形は逆台形を呈するもので、壁は垂直に近い立ち上



第104図　土壙墓40・41（1/40）・41出土遺物（1/4）



第105図　土壙墓42（1/40）
・出土遺物（1/4）

がりを見せている。底面は平坦であるが東に向けて傾斜している。墓壙内には石が詰まるもので、規模は長辺100cm、短辺82cm、深さ42cmを測る。遺物としては、**213・214**は土師質土器の小皿で底面に糸切りが見られる。**M34～36**は鉄製の角釘である。、**C136～140**は渡来銭で至元通寶、政和通寶、永楽通寶など７枚が出土している。

土壙墓45（第108図）

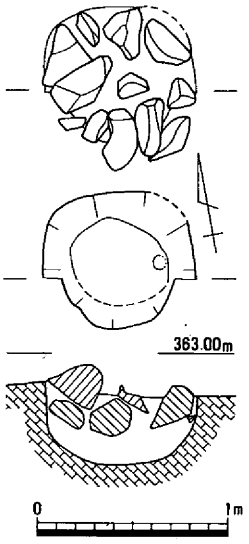
土壙墓44の北に一部重複して検出したもので、この土壙墓が古い。平面形は方形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。壁は少し開きながら立ち上がるものである。墓壙内には長径30～40cm程度の石が充満しており、一部は底部近くまで達していた。規模は長辺126cm、短辺98cm、深さ35cmを測るものである。埋土内から少量ではあるが骨片を検出している。

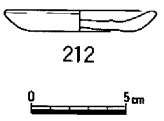
土壙墓46（第108図）

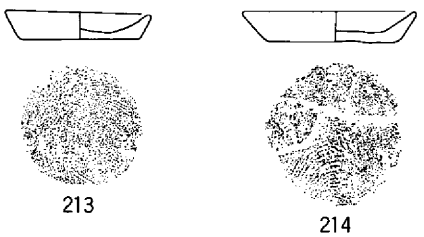
土壙墓44の東約15cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈するもので、長径30cm程度の石数個で覆われる状態である。規模は長径34cm、短径31cm、深さ９cmを測るものである。非常に小さいが、埋土から少量の人骨片を検出している。

土壙墓47（第108図）

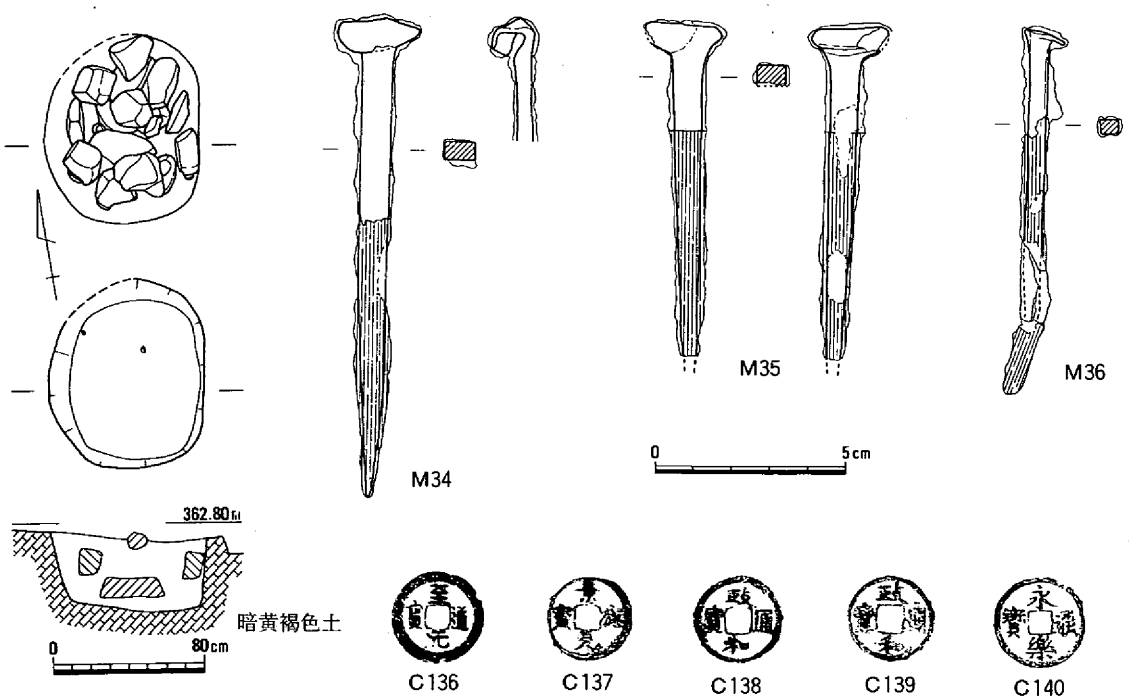
土壙墓46の東約20cmの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は逆台形を



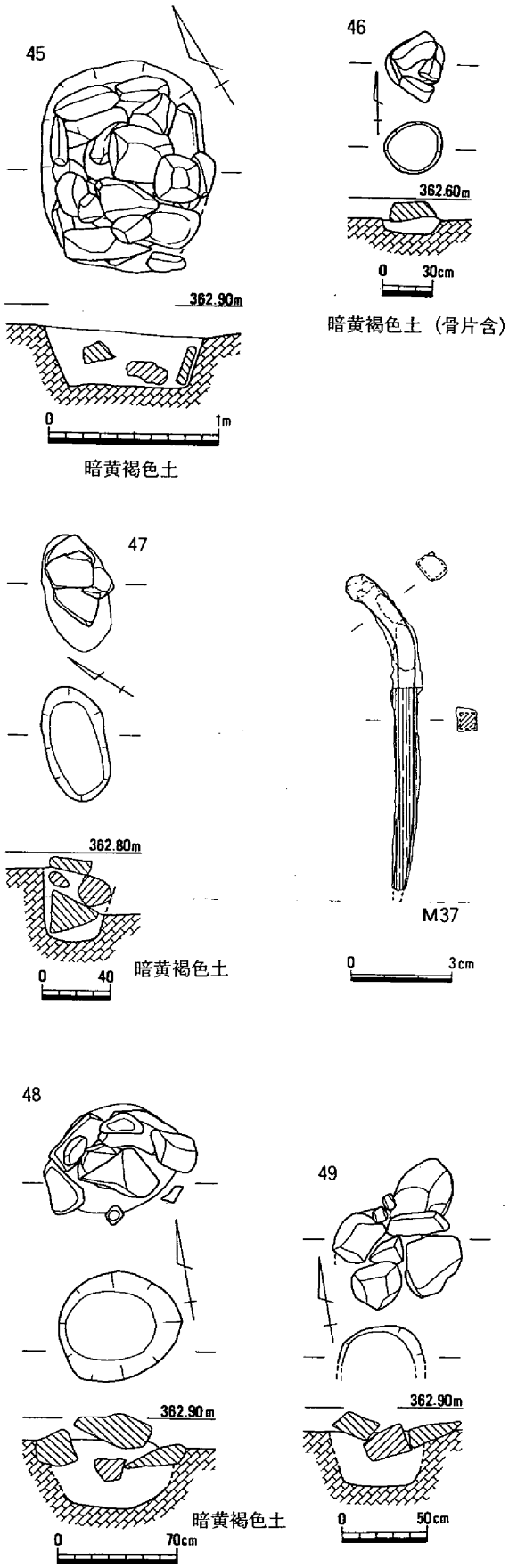




第106図　土壙墓43（１/40）・出土遺物（１/４）



第107図　土壙墓44（１/40）・出土遺物（１/４・１/２）



第108図　土壙墓45～49（1/40）
・47出土遺物（1/2）

呈するものである。埋土中から人骨片が出土している。規模は長径70cm、短径40cm、深さ45cmを測る。遺物は**M37**の釘がある。

土壙墓48（第108図）

土壙墓47の東約10cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。断面形は椀形を呈するもので、底面は少し窪む。墓壙内には石が充満していた。規模は長径72cm、短径65cm、深さ42cmを測る。

土壙墓49（第108図、図版46）

土壙墓47の南南西に一部接して検出した。南側が削平されているため全体の形状は不明であるが、概略方形を呈するものと推定される。断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。墓壙は石で覆われる状態である。規模は一辺が51～58cm、深さ31cmを測る。

土壙墓50（第109図）

土壙墓48の南150cmの位置に検出した。南側が削平されているため全体の形状は不明であるが、円形を呈するものと考えられる。断面形は椀形を呈するものの東側は二段に掘られている。規模は径70～71cm、深さ31cmを測る。埋土から人骨片が検出されている。

土壙墓51（第109図）

土壙墓50に西側の一部が切られるものである。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は椀形を呈するもので、底面は平坦である。壁は開きながら立ち上がるものである。墓壙内は石が充満するものである。規模は長径105cm、短径64cm、深さ51cmを測る。

土壙墓52（第109図）

土壙墓51の北約45cmの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。断面形は逆台形を呈するもので、底面はほぼ平坦である。墓壙内の中央部から西寄りにかけて多くの石を検出した。規模は長辺151cm、短辺112cm、深さ32cmを測る。遺物として、**C141～145**に示した渡来銭が５枚出土している。

土壙墓53（第109図）

土壙墓52の北東部に接した状態で検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈するもので、壁は一部二段に掘られている。底面は平坦である。小形の墓壙からは数個の石が検出されたのみで、素掘りの状態であった。規模は長辺60cm、短辺51cm、深さ42cmを測る。

土壙墓54（第109図）

土壙墓53の北西約70cmの位置に検出した。平面形は長方形を呈するものである。断面形は逆台形を呈するもので、壁は少し開きながら立ち上がる。底面は少し凹凸があるが平坦に近い形状を呈している。墓壙は長径30～50cm程度の石が充満するもので、規模は長辺89cm、短辺73cm、深さ47cmを測る。

土壙墓55（第109図）

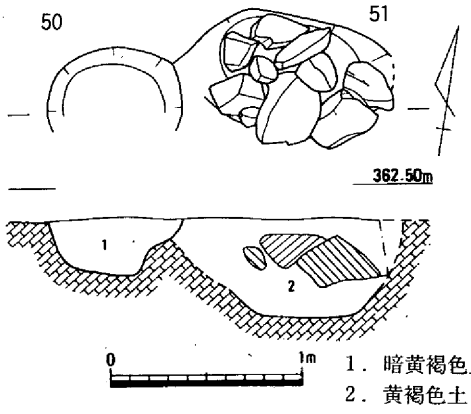
土壙墓54の北西約50cmの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈する。北西側の壁は大きく開きながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。墓壙の中央部に石がまとまって出土した。規模は長径92cm、短径64cm、深さ30cmを測る。埋土から少量ではあるが人骨片が出土している。

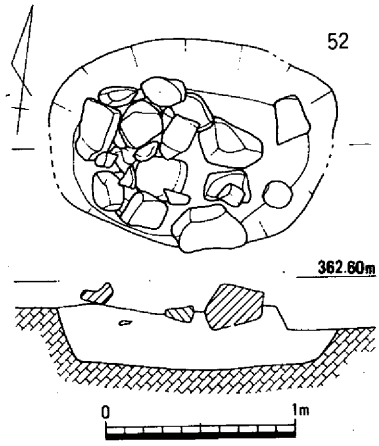
土壙墓56（第110図、図版46・81・82）

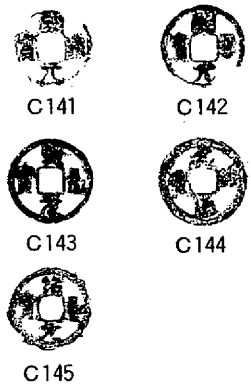
土壙墓55の北西約50cmの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は椀形を呈するものである。墓壙内は多量の石で充満するものである。規模は長径118cm、短径101cm、深さ49cmを測る。遺物としては、**215・216**は土師質土器の小皿、**M38**は角釘、**M39**は先端が輪になった金具、**M40**は毛抜き、**M41・42**は刀子と刀子の柄などが出土している。

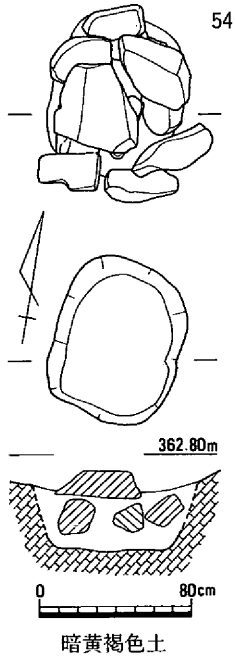
土壙墓57（第111図）

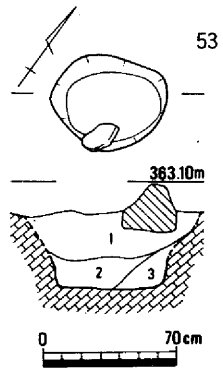
土壙墓56の西側に一部重複してその下層

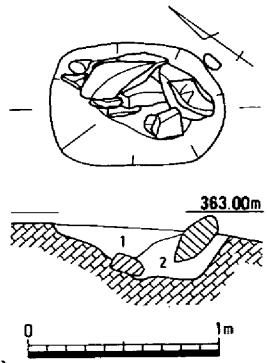




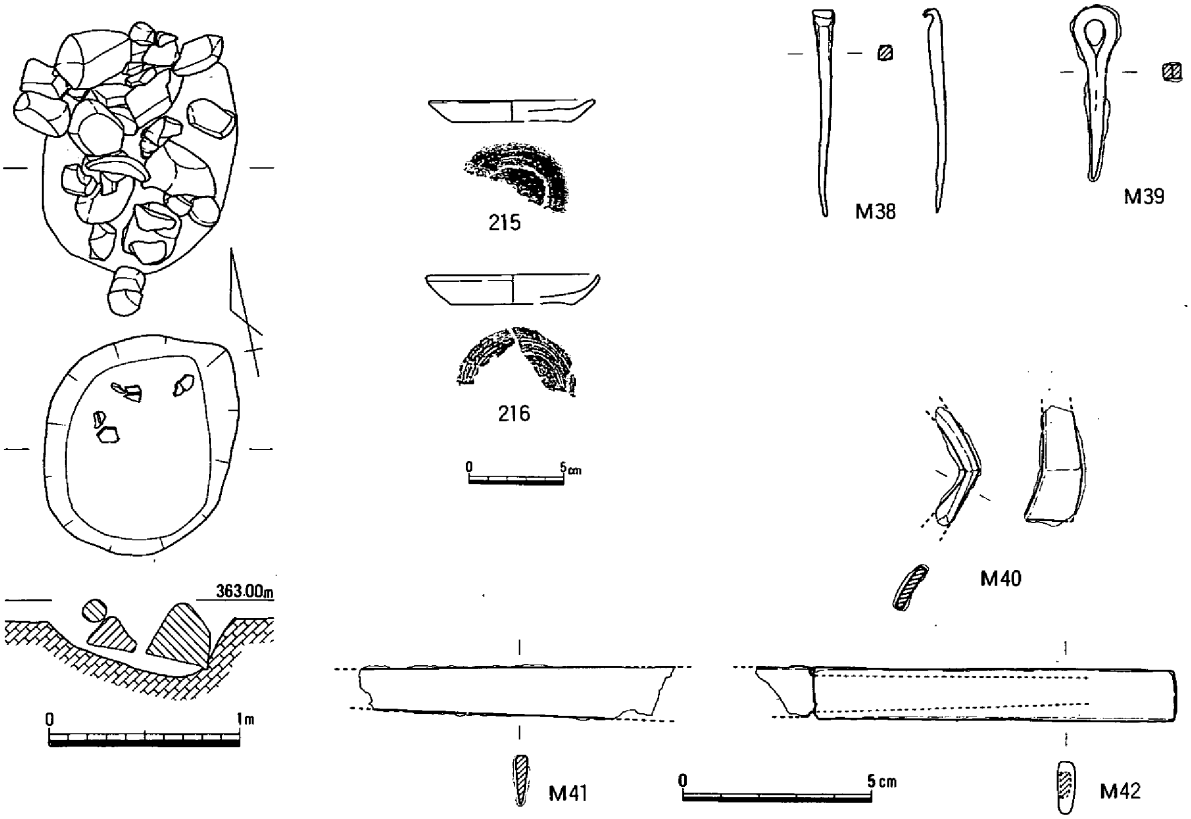




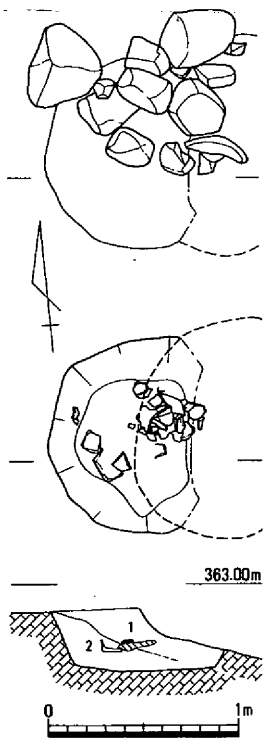




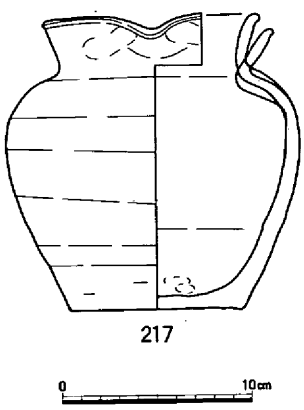
第109図　土壙墓50～55（1/40）・52出土遺物（1/2）



第110図　土壙墓56（１/40）・出土遺物（１/４・１/２）



１．橙黄褐色土
２．黒褐色土



第111図　土壙墓57（１/40）・出土遺物（１/４）

に検出した。平面形は円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈するもので、底面は平坦である。墓壙の中央部から北にかけて多くの石が出土した。規模は長径103cm、短径77cm、深さ23cmを測る。遺物としては備前焼の片口壺が出土している。

土壙墓58（第112図）

土壙墓56の北側に一部重複してその下層に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は椀形を呈しており、底面は少し窪む。墓壙の中央部より南に長方形に並べられた石を検出した。土壙の規模は長径111cm、短径82cm、深さ28cmを測る。埋土から骨片が出土している。遺物としては**218**の土師質土器の小皿が出土している。

土壙墓59（第112図、図版47）

土壙墓57・58に重複してその下層に検出した。平面形は方形を呈する。断面形は皿形を呈しており、底面は緩やかに窪

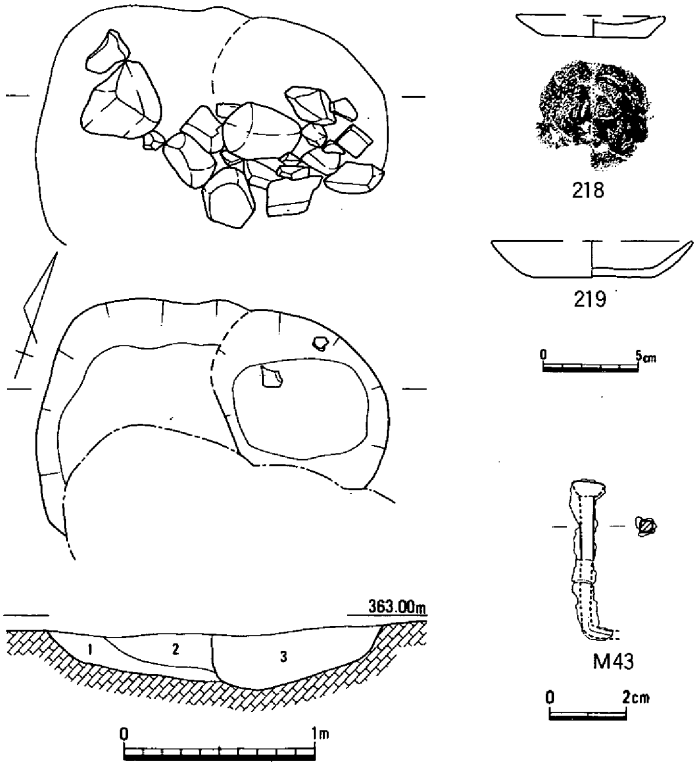
む。墓壙内からは中央部に数点の石を検出した。規模は長辺131cm以上、短辺71cm以上、深さ40cmを測る。埋土から人骨片が出土している。遺物としては**219**の土師質土器の小皿と**M43**の角釘が出土している。

土壙墓60（第113図）

土壙墓58の北側に一部接して検出した。平面形は長方形を呈するものである。断面形は逆台形を呈するもので、壁は垂直に近い立ち上がりを見せており、底面は平坦である。墓壙の内部は石が詰まるものである。規模は長辺100cm、短辺74cm、深さ31cmを測る。

土壙墓61（第113図）

土壙墓56の東側に一部重複してその下層に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈するもので、壁は途中に小さな段を持つ。底面は緩やかに窪むものである。規模は長径112cm、短径84cm、深さ77cmを測る。遺物としては**C146～148**は渡来銭で７枚出土している。



1．黒褐色土
2．暗灰褐色土
3．暗黄褐色土（骨片含）

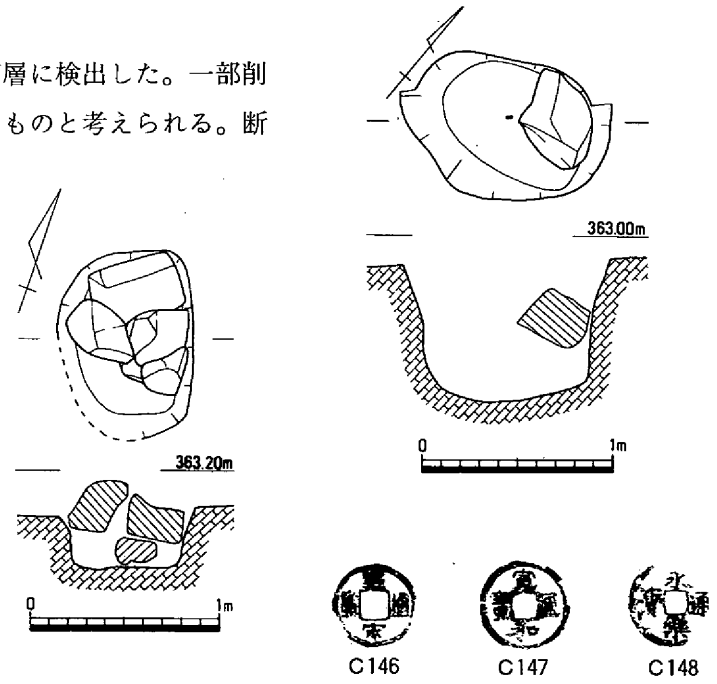
第112図　土壙墓58（右）・59（左）（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）

土壙墓62（第114図）

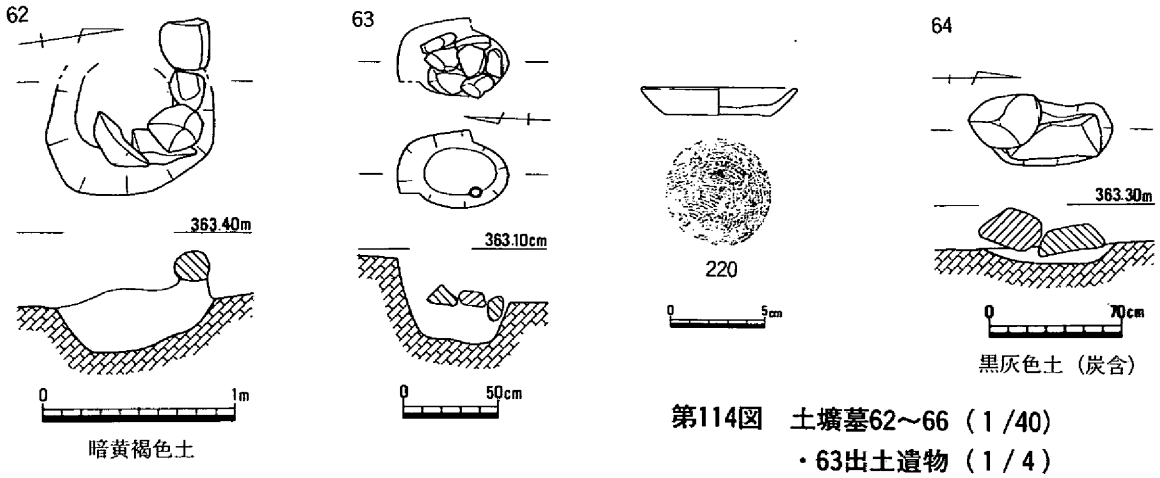
土壙墓61の東側に一部重複してその下層に検出した。一部削平されているが平面形は楕円形を呈するものと考えられる。断面形は椀形を呈しており、底面は南に向けて緩やかに傾斜している。規模は長径80cm以上、短径70cm、深さ34cmを測る。

土壙墓63（第114図、図版47）

土壙墓62の北側に重複してその下層に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈しており、底面は少し南に傾斜している。規模は長径59cm、短径42cm、深さ46cmを測る。上部には石が充填され、土師質土器の小皿**220**は底面に密着して出土している。（井上）



第113図　土壙墓60（左）・61（右）・61出土遺物（1/2）



第114図　土壙墓62～66（１/40）
・63出土遺物（１/４）

土壙墓64（第77・114図）

土壙墓群の中央部に位置し、土壙墓41の東に隣接する土壙墓である。上部が削平されているかどうか不明であるが、掘り方の平面形は小規模な楕円形で、南北72cm・東西35cm、深さ11cmを測る。この上面に石が検出されている。

出土遺物は認められず、遺構の詳細な時期も不明である。

土壙墓65（第77・114図）

土壙墓群の中央部に位置し、土壙墓64の東に隣接する土壙墓である。上部が削平されているかどうか不明であるが、掘り方の平面形は小規模な楕円形で、南北60cm・東西45cm、深さ15cmを測る。

出土遺物は認められず、遺構の詳細な時期も不明である。

土壙墓66（第77・114図）

土壙墓群の中央部に位置し、土壙墓60の東に隣接する土壙墓である。掘り方の平面形は小規模な楕円形で、南北75cm・東西40cm、深さ28cmを測る。

掘り方内埋土には石が床面近くまで陥没した状態で出土している。

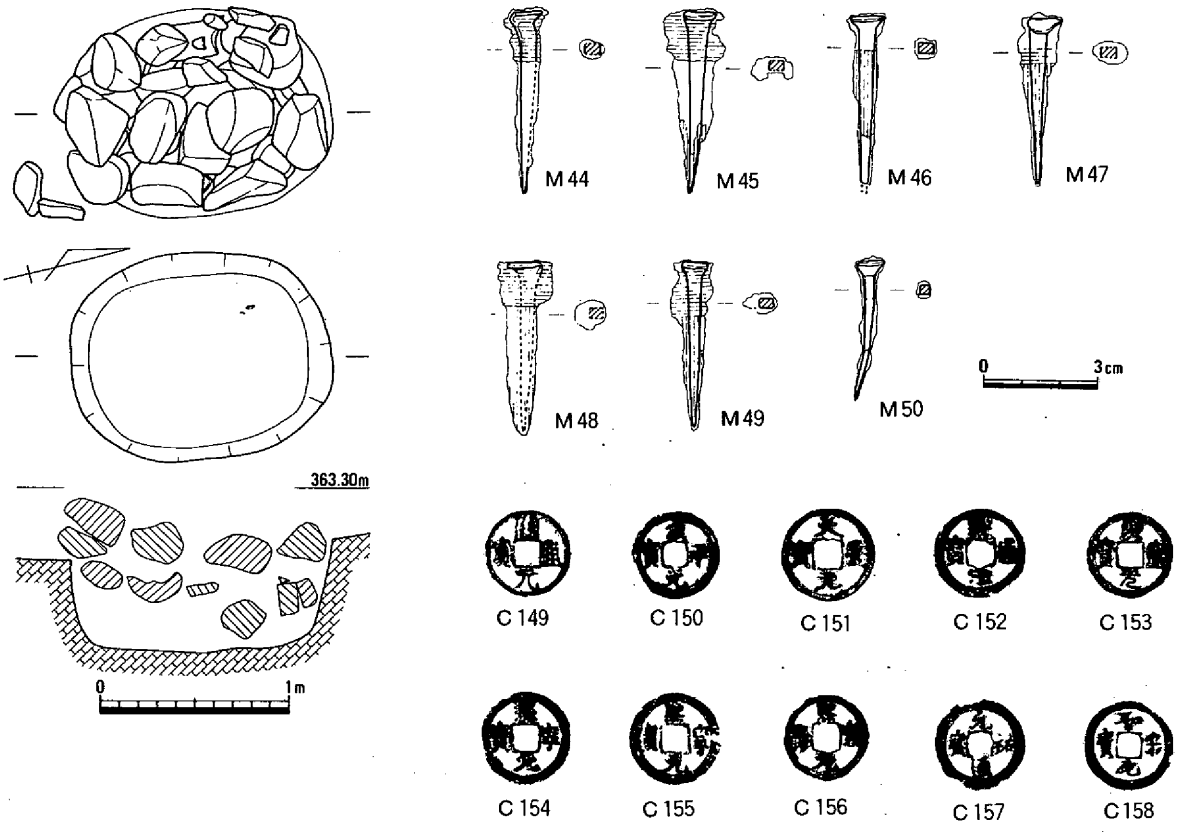
出土遺物は認められず、遺構の詳細な時期も不明であるが、中世後葉～近世初頭の間に納まると思われる。

土壙墓67（第77・115図、図版47）

土壙墓66の東に隣接する土壙墓である。掘り方の平面形は楕円形で、南北138cm・東西112cm、深さ52cmを測る。

掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石はほぼ床面まで達している。

床面の北西部で洪武通寶（初鋳造1368年）を含む銅銭20枚と木片が出土している。また埋土中からは小形の鉄釘が出土している。鉄釘は、長さ3.8～５cmで、断面が長方形を呈する。頭部は曲がっている。



第115図　土壙墓67（１/40）・出土遺物（１/２）

遺構の詳細な時期は不明であるが、中世末～近世初頭の間に納まると思われる。

土壙墓68（第77・116図）

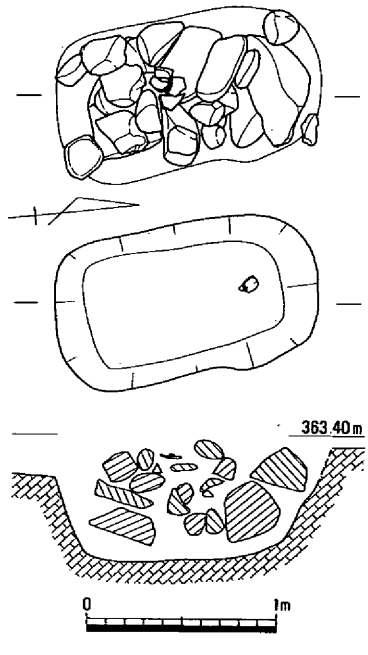
土壙墓67の北に隣接する土壙墓である。掘り方の平面形は長方形で、南北142cm・東西79cm、深さ44cmを測る。掘り方内埋土には多くの石がほぼ床面まで陥没した状態で出土している。

床面の北端で土師質高台付椀が出土しており、高台はかなり矮小で、器高は低い。遺構の時期は鎌倉時代後半の13世紀末を前後する時期と思われる。

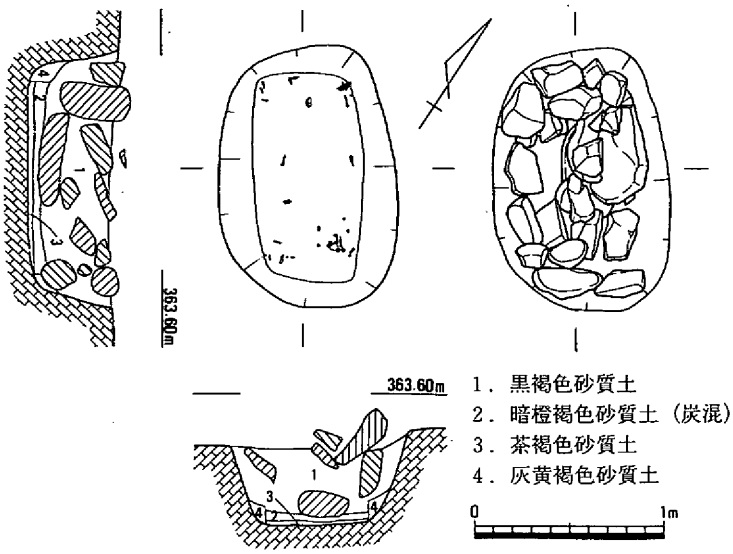
土壙墓69（第77・117図、図版48）

調査区の北端に位置し、集石墓18の南辺に接する土壙墓である。掘り方の平面形は長方形で、南北140cm・東西94cm、深さ50cmを測る。掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石は床面まで達している。

茶褐色砂質土の棺痕跡と一部木質が認められ、また鉄釘の多くが原位置を保って出土している。これから推定される木棺は組合せ式の箱形

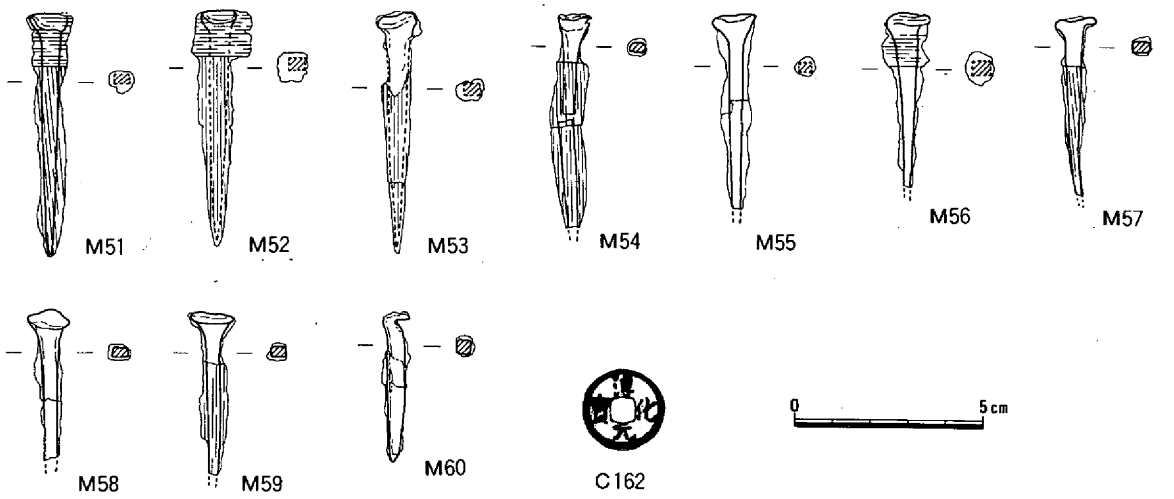


第116図　土壙墓68（１/40）・出土遺物（１/４）

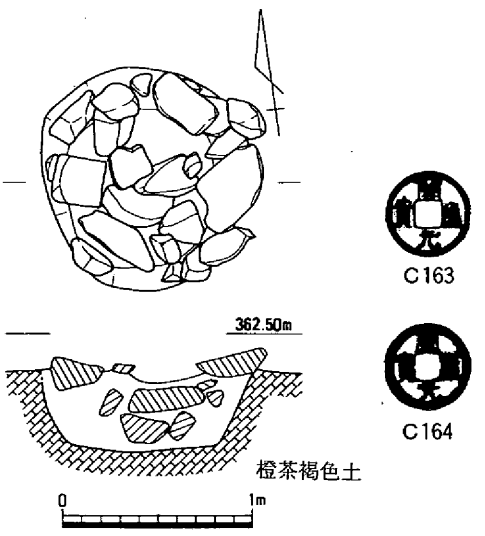


（内法100×57cm）である。北角は最も頑丈に留められており、底板と側板・小口板を留める上向きの釘３本と底板と側板を留める斜め上向きの１本、側板と小口板を留める横方向の２本が確認された。東角は上向きの釘１本、南小口部と南角は上向きの釘３本、西角は側板と小口板を留める横方向の２本が確認された。

棺底の北端には土師質土器小皿、南東角に銅銭４枚と西辺には７枚が出土している。詳細な時期は不明であるが、中世末～近世初頭の間に納まると思われる。



第117図　土壙墓69（１/40）・出土遺物（１/２）



第118図　土壙墓70（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓70（第77・118図、図版48）

土壙墓69の東に隣接する土壙墓である。掘り方の平面形は楕円形で、南北118cm・東西105cm、深さ43cmを測る。

掘り方内埋土には多くの石がほぼ床面まで陥没した状態で出土している。

図示していないが、埋土中から熙寧元寶（初鋳造1068年）を含む銅銭３枚が出土している。

詳細な時期は不明であるが、中世末～近世初頭の間に納まると思われる。

土壙墓71（第77・119図）

土壙墓70の東に隣接する土壙墓である。掘り方の平

面形は楕円形で、南北93cm・東西85cm、深さ20cmを測る。掘り方内埋土には石がほぼ床面まで陥没した状態で出土している。

出土遺物は認められず、遺構の詳細な時期も不明であるが、中世後葉～近世初頭の間に納まると思われる。

土壙墓72（第77・119図、図版49）

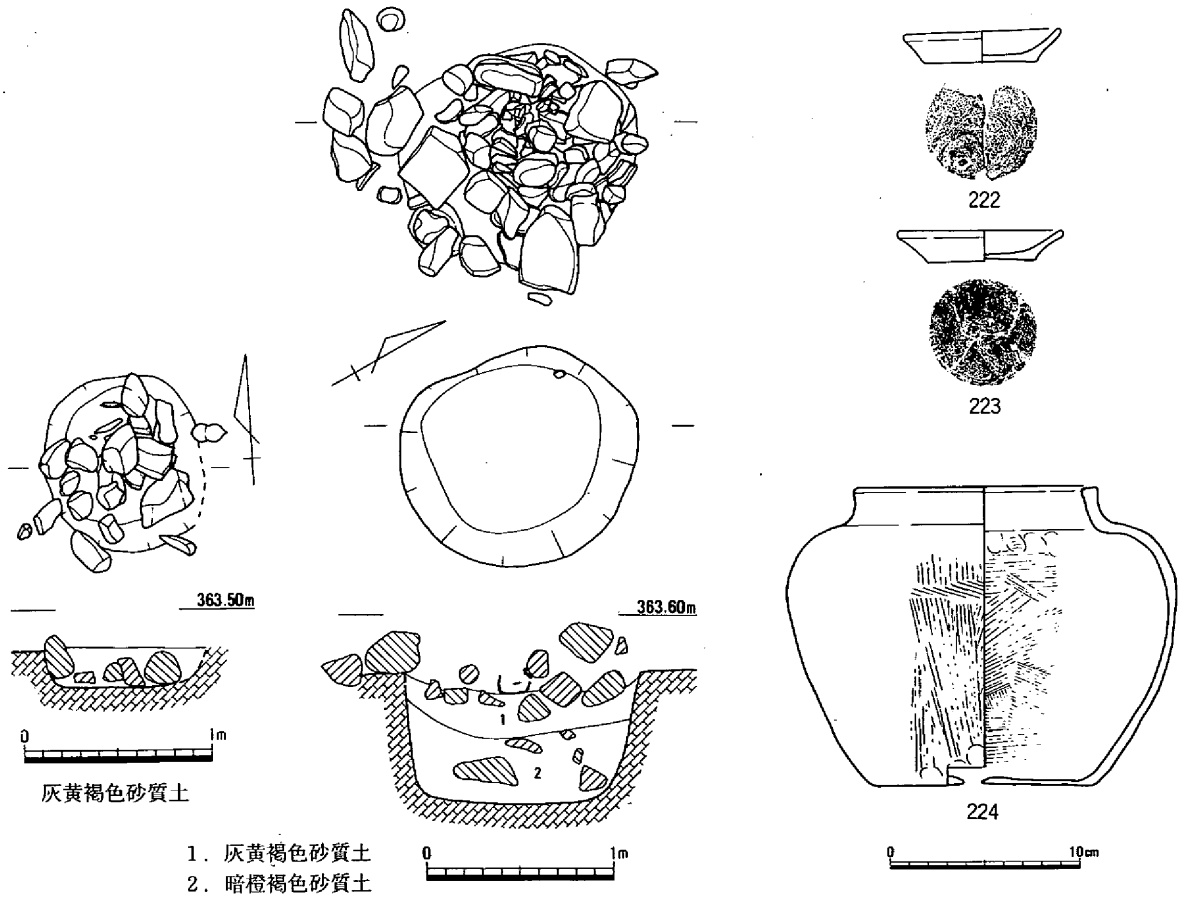
調査区の北端に位置し、土壙墓71の東に隣接する土壙墓である。掘り方の平面形は楕円形で、南北132cm・東西112cm、深さ68cmを測る。

掘り方内埋土には多くの石が陥没した状態で出土している。この内最も深い位置で検出された石は床面まで達している。

埋土中から底部回転糸切りの土師質小皿**222・223**、掘り方上面の石の間から底部を穿孔した土師質土器の壺が出土しているが、遺構に伴うかどうか不明である。詳細な時期は不明であるが、中世末～近世初頭の間に納まると思われる。（柴田）

土壙墓73・74（第120図、図版49・82）

土壙墓72の東から検出された平面方形（73）および円形（74）を呈すもので、土壙上部には多くの石が積み重ねられ、土壙墓72は、これら集石が底部付近まで落ち込んだ状況を示していた。土壙墓73の規模は108×94cm、深さ50cmを測る。壁はほぼ垂直に掘られ、底部は平坦である。遺物は土壙墓73上部集石の隙間から土師質小皿**225**、小刀２本**M61・62**、角釘３本などが出土している。小刀はいずれも先端を欠損しており、目釘穴は１か所である。



第119図　土壙墓71（左）・72（右）（１/40）・72出土遺物（１/４）

土壙墓74は径50cm、深さ50cmを測る小規模な土壙墓で、土壙墓73に切られている。集石は土壙上部で留まっており、遺物は皆無であった。

土壙墓75（第121図）

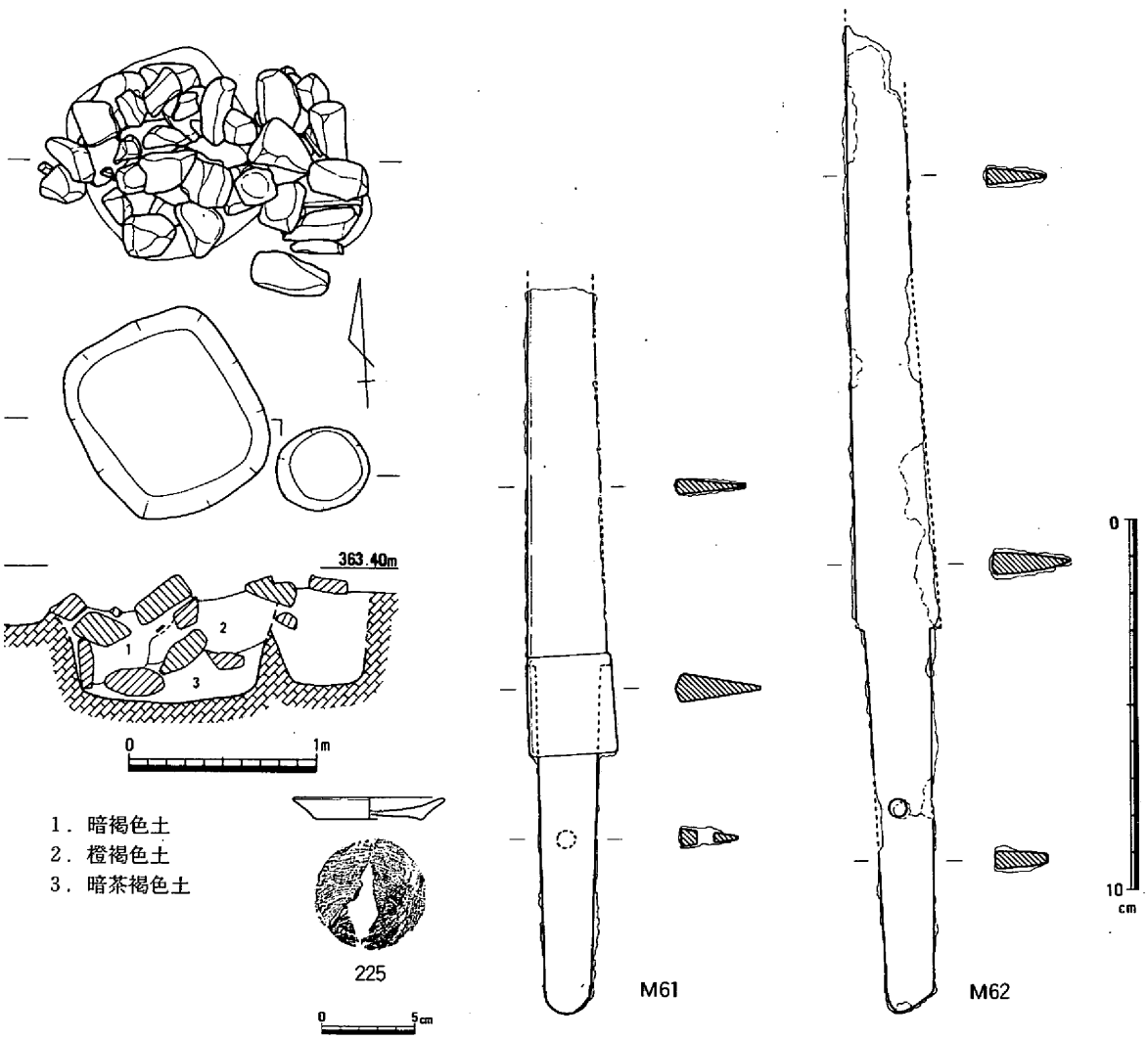
土壙墓72の南に位置し、後述土壙墓76に北部を削平されて検出された小規模な土壙墓である。平面楕円形を呈し、規模は67×48cm、深さ36cmを測り、集石は土壙上部から底部付近にまで達している。遺物は皆無である。

土壙墓76（第121図）

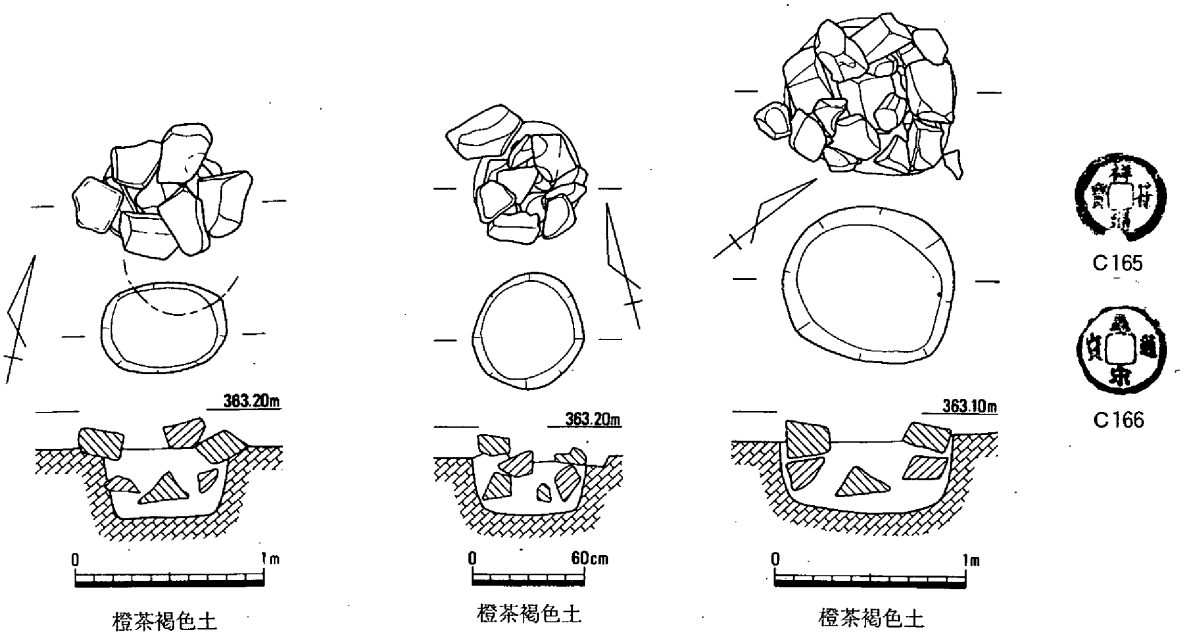
土壙墓75の北部から検出された小規模な土壙墓である。平面円形を呈し、規模は径62cm、深さ30cmを測り、集石は土壙上部から底部付近にまで達していた。遺物は皆無であった。

土壙墓77（第122図）

土壙墓75の南から検出された平面楕円形を呈す。規模は90×82cm、深さ42cmを測る。壁はほぼ垂直に掘られ、底部は緩く窪む。集石は土壙中央が陥没したように落ち込んだ状態を示し、底部付近にまで達している。遺物は土壙北部から集石に混じって備前焼の破片および祥符通寶**C165**・皇宋通寶**C166**の渡来銭が出土している。



第120図　土壙墓73（左）・74（右）（1/40）・73出土遺物（1/4・1/2）



第121図　土壙墓75（左）・76（中）・77（右）（１/40）・77出土遺物（１/２）

土壙墓78（第122図、図版49）

土壙墓77の南から検出された平面円形の土壙墓である。規模は径79cm、深さ88cmと深い。壁はほぼ垂直に掘られ、底部は正円に近く平坦である。墓壙が深いためか集石の大半は下半にまでは達していない。遺物は集石に混じって火輪**263**が、底部から元符通寶**C167**・**C168**、聖宋元寶**C169**の渡来銭３枚が出土している。

土壙墓79（第122図）

土壙墓78の北西に位置し、後述土壙墓80を一部切って検出された平面円形の小規模な土壙墓である。規模は径70cm、深さ45cmを測る。壁は急で、底部は平坦である。集石は土壙中央付近まで落ち込んでいた。遺物は墓壙底部から土師質土器椀**226**、やや浮いた位置から元豊通寶**C169**の他、祥符通寶、□□元寶の計３枚の渡来銭が出土している。

土壙墓80（第122図、図版50）

土壙墓79に一部切られて検出された。平面不整円形を呈し、規模は径約110cmを測るが、本来の墓壙は第１層がそれにあたると考えられ、土壙墓79とほぼ同様の小規模なものと思われる。遺物は底部からやや浮いた位置から土師質土器椀**227**および釘１本が出土している。

土壙墓81（第122図）

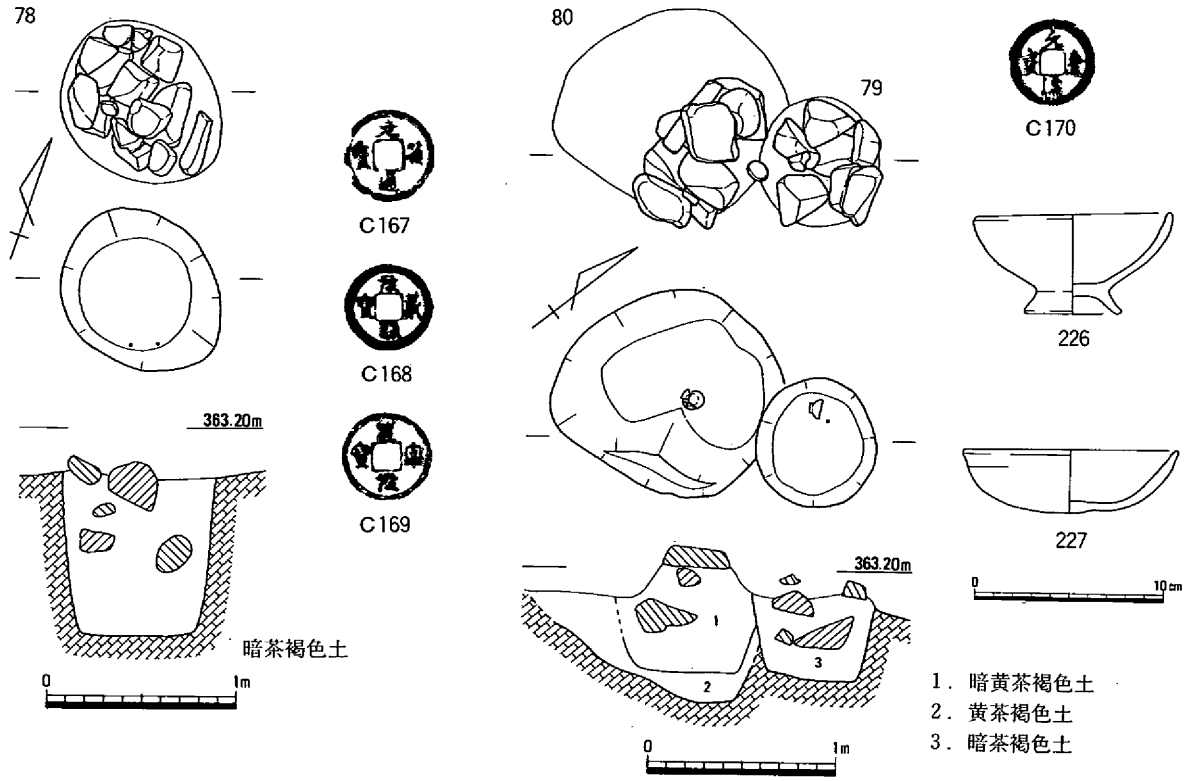
土壙墓80の南から検出された。平面楕円形を呈し、規模は109×77cm、深さ26cmを測る。断面は皿状で、底部は北から南方向に下がっており、石は底部を覆うように検出された。遺物は皆無であった。

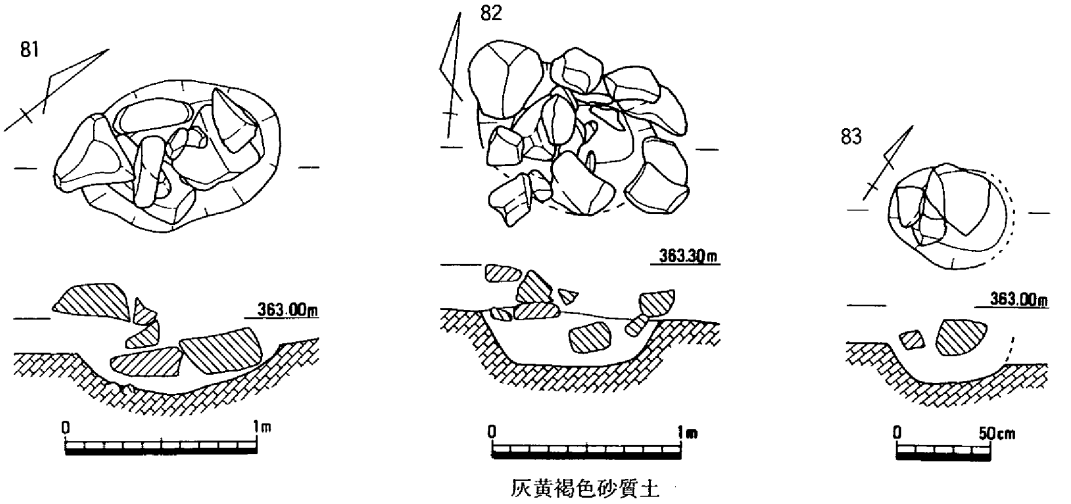
土壙墓82（第122図）

土壙墓81の西から検出された。平面楕円形を呈し、規模は97×60cm、深さ27cmと浅い。壁は緩く、断面逆台形状を呈す。集石は墓壙中央に落ち込むように検出され、それらに混じって火輪**261**が出土している。他に出土遺物は無かった。

土壙墓83（第122図）

土壙墓81の南東から検出された小規模なもので、平面形態円形、規模は径53cm、深さ22cmを測る。





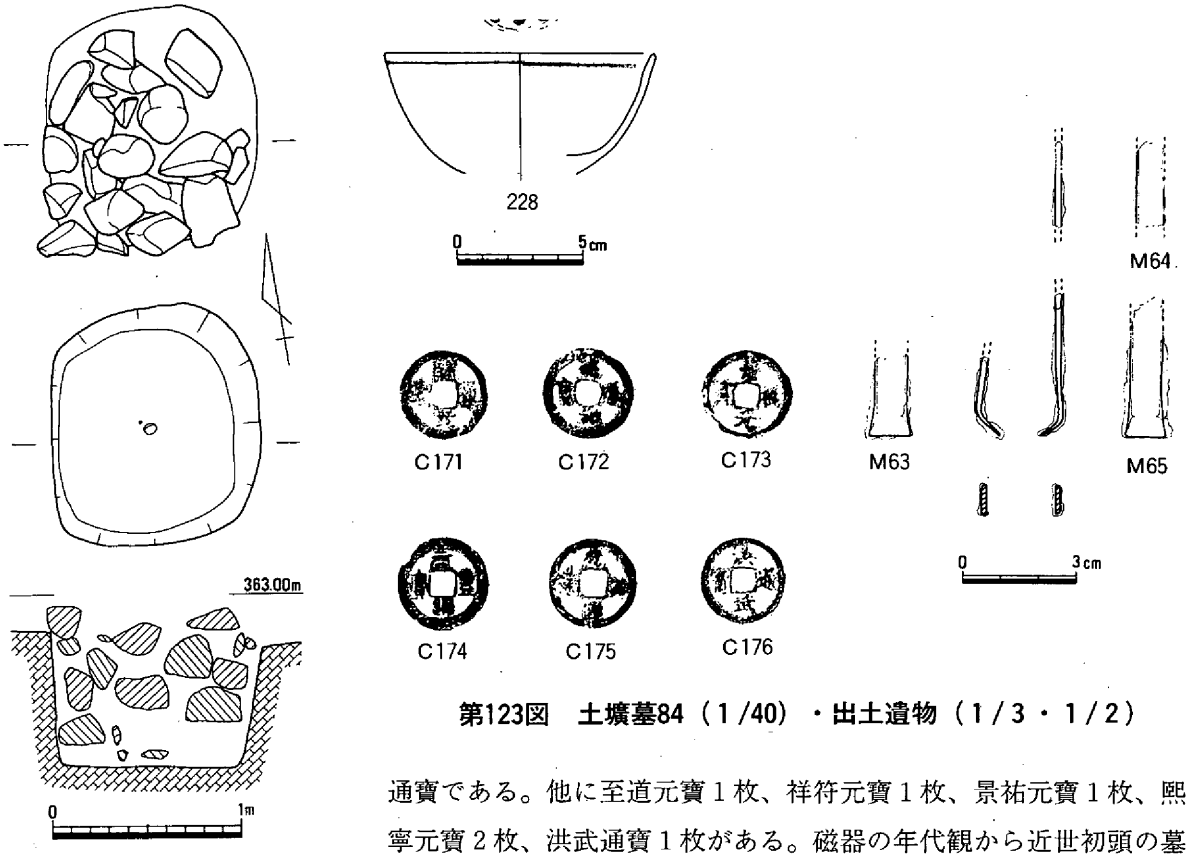
第122図　土壙墓78～83（１/40）・出土遺物（１/２・１/４）

埋土は黄茶褐色土が堆積していたが遺物は皆無で、墓壙でない可能性もある。

土壙墓84（第123図、図版50・83）

土壙墓83の南西から検出された、主軸が南北方向に向く土壙墓である。平面長方形を呈し、規模は127×112cm、深さ76cmを測る。壁はほぼ垂直に掘られ、底部は平坦である。墓壙上部で検出された集石は底部付近まで落ち込んでいることが確認された。

遺物は底部中央から磁器碗１個**228**、毛抜１本**M63～65**、渡来銭12枚が出土した。**228**は景徳鎮系の破片で明緑灰色を呈す。口径10.5cmを測り、口縁内外面および見込みに施文されている。16Ｃ末～17Ｃ初頭と考えられる。**Ｃ171～176**は順に開元通寶、至道元寶、景祐元寶、元豊通寶、元祐通寶、洪武



第123図　土壙墓84（１/40）・出土遺物（１/３・１/２）

通寶である。他に至道元寶１枚、祥符元寶１枚、景祐元寶１枚、熙寧元寶２枚、洪武通寶１枚がある。磁器の年代観から近世初頭の墓と考えられる。

土壙墓85（第124図、図版51）

土壙84の西側２ｍに並行する位置から検出された土壙墓である。平面長方形を呈し、規模は132×110cm、深さ89cmを測る。壁はほぼ垂直に深く掘られ、底部は平坦で、墓壙上部で検出された集石は上記土壙墓84と同様に底部付近にまで落ち込んだ状況を示していた。遺物は底部付近の集石の隙間から釘25本が出土しており、また、底部中央北寄りからは６枚の渡来銭がまとまって出土した。釘の出土および墓壙の形態から、組み合わせの棺が使用されたと推定される。渡来銭はC177から順に開元通寶、祥符通寶、元豊通寶、元祐通寶２枚、大観通寶である。以上、時期的には墓壙の在り方が似る土壙墓84とほぼ同時期と考える。

土壙墓86（第125図）

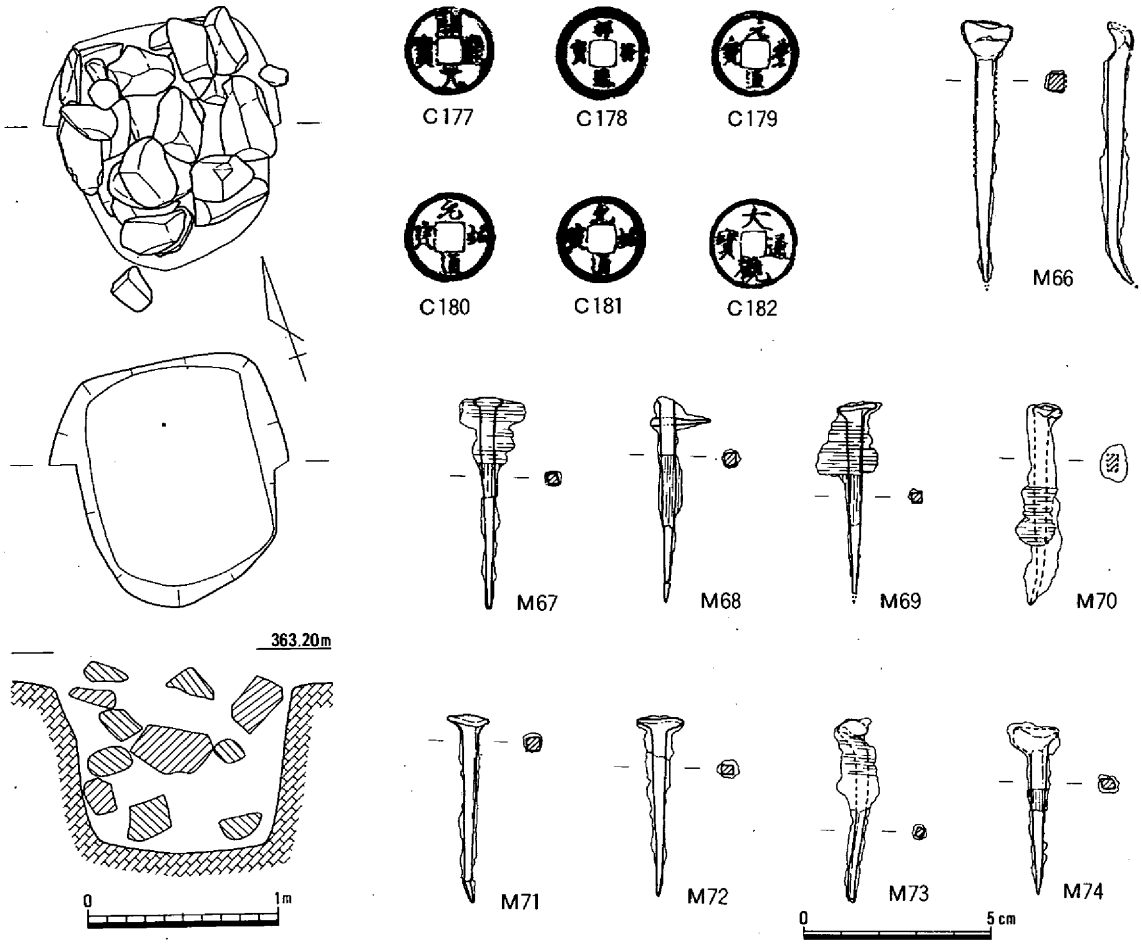
土壙墓85の南西から検出された平面不整長方形の浅い土壙墓である。規模は97×75cm、深さ23cmを測る。断面皿状を呈し、扁平な石を中心に数個の石が積み重ねられた状態で検出されたが、遺物は皆無であった。墓壙でない可能性もある。

土壙墓87（第126図）

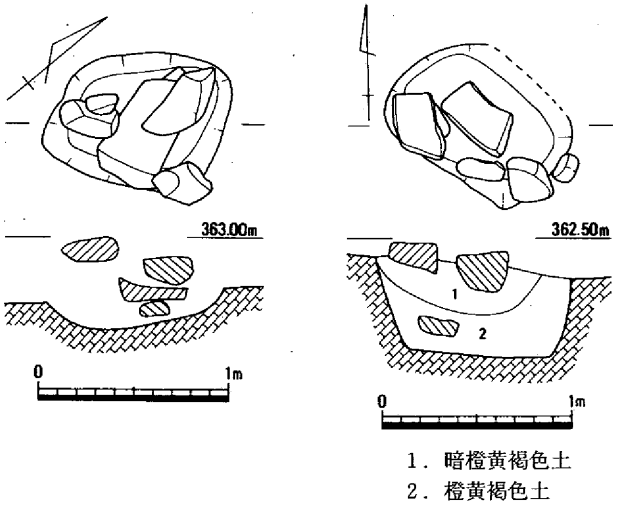
Ｆ６区の北西に位置し、土壙墓86の南２ｍから検出された土壙墓である。平面長方形を呈し、規模は93×62cm、深さ38cmを測る。壁はほぼ垂直に掘られ、底部は平坦である。墓壙上部で数個の石を検出したが、中からは１個のみであった。遺物は皆無であった。

土壙墓88（第126図、図版80）

土壙墓87の北東から検出された。平面楕円形を呈し、規模は90×79cm、深さ69cmを測る。壁はほぼ垂直に掘られ、底部は平坦である。墓壙上部からは長辺50cm余りの扁平な石が重なるように検出され、



第124図　土壙墓85（１/40）・出土遺物（１/２）



１．暗橙黄褐色土
２．橙黄褐色土

第125図　土壙墓86（左）・87（右）（１/40）

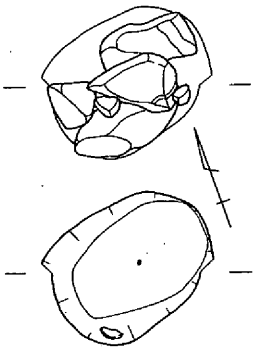
石は土壙下半まで落ち込んだ状況を示していた。

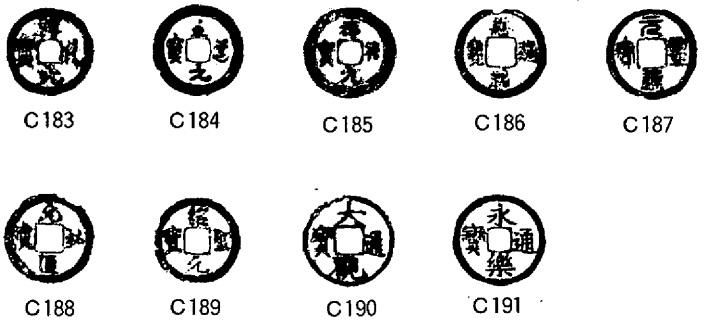
遺物は底部中央から渡来銭10枚が、また、集石に混じって土師質土器の皿片**229・230**が出土しているが、後者は混入の可能性もある。渡来銭は**C183**から順に、淳化元寶、至道元寶、祥符元寶、嘉祐通寶、元豊通寶、元祐通寶、紹聖元寶、大観通寶、永楽通寶で、他に紹聖通寶１枚がある。

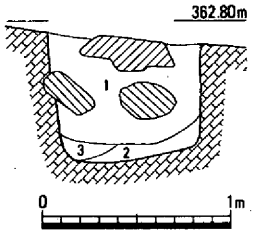
以上、墓壙の規模や、渡来銭の在り方から近世初頭のものと考える。

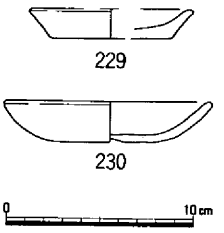
土壙墓89（第127図）

土壙墓88の北東から検出された。平面楕円形で、規模は121×68㎝、深さ50㎝を測る。壁は斜めに掘り込まれ、断面は逆台形状を呈す。底部は平坦である。墓壙内には石で充満した状況を示していた。遺物は底部中央から渡来銭15枚が出土している。**C192**から順に天禧通寶、皇宋通寶２枚、元豊通寶、









1．暗黄褐色土
2．暗黄茶褐色土
3．暗茶褐色土

第126図　土壙墓88（１/40）・出土遺物（１/２・１/４）

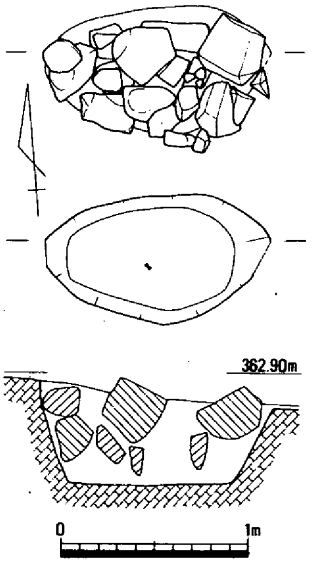
聖宋元寶、宣和通寶、永楽通寶２枚で、他に天聖元寶１枚、淳化元寶１枚、元祐通寶１枚、不明４枚である。

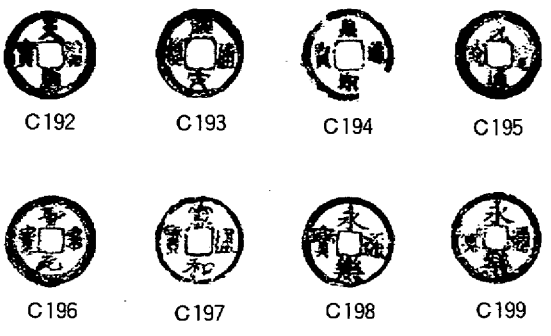
土壙墓90（第128図）

Ｆ６区の西辺中央に位置し、近世墓の土壙墓165に削平を受けて検出された土壙墓である。平面楕円形を呈し、規模は90×50cm、深さ25cmを測る。壁は急で、底部は平坦である。墓壙上部から下半にかけて人頭大の石が落ち込むような状況を呈していた。なお、遺物は皆無であった。

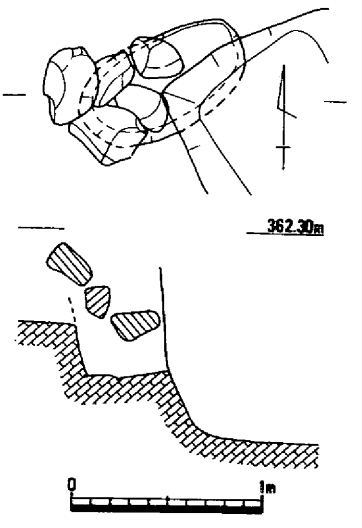
土壙墓91（第129図、巻頭図版４）

土壙墓88の東から検出された。平面長方形を呈し、規模は116×77cm、深さ62cmを測る。壁はほぼ垂直に掘られ、底部は平坦である。墓壙上部で検出された集石は底部付近まで落ち込んだ状況を示していた。遺物はほぼ完形の唐津碗231が底部に接して出土している。**231**は口径11cm、器高3.45cmを測り、橙色の素地に暗緑色の釉が高台部を除きかかっている。その他、陶器の特徴から





第127図　土壙墓89（１/40）・出土遺物（１/２）



第128図　土壙墓90（１/40）

16Ｃ末～17Ｃ初頭に製作されたものと考えられ、当土壙墓は近世初頭に埋葬されたものと判断される。

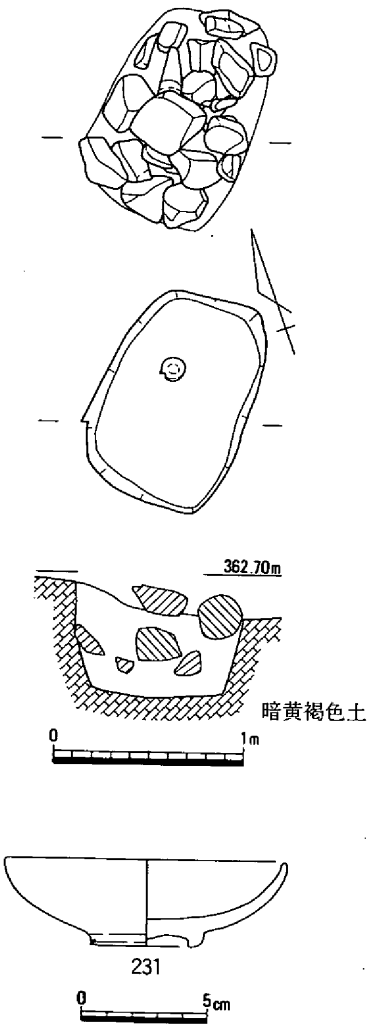
土壙墓92（第130図）

土壙墓91の南に位置し、土壙墓93を一部切って検出された。平面楕円形を呈し、規模は105×84㎝、深さ55㎝を測る。墓壙の東部壁はほぼ垂直に掘られているが、西部にかけてはやや緩く、底部も西から東に向かって下がっている。集石は墓壙底部まで落ち込んだ状況を示しており、一方、墓壙上部に並んで検出された石は、後に置き直されたものと考える。

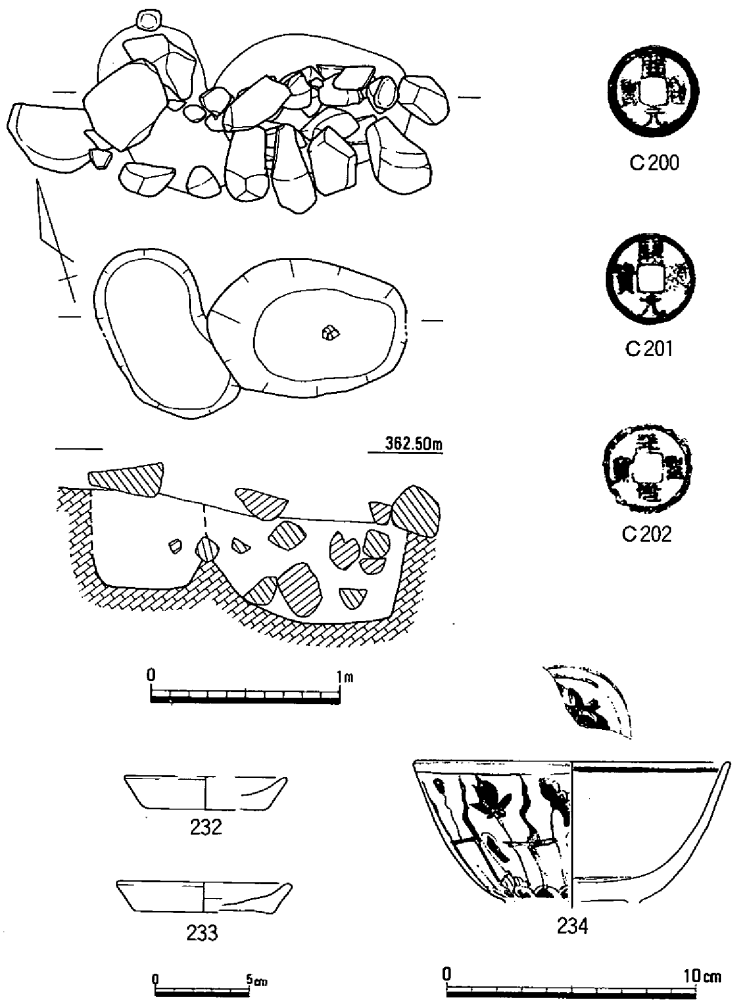
遺物は集石に混じって土師質土器の小皿**232・233**と、約1/4の破片である染付碗**234**が底部に接して出土している。また、その下部から渡来銭３枚**Ｃ200～202**が重なって出土している。**Ｃ200・201**は開元通寶、**Ｃ202**は天聖元寶である。小皿はいずれも混入の可能性が高い。**234**は復元口径12.5㎝、残存器高5.7㎝を測る。素地は灰白、釉は明緑灰色を呈す染付碗で、その特徴から広東系の福迂のものと考えられ、その年代観は16Ｃ末～17Ｃ初頭である。このことから、当土壙墓は近世初頭に埋葬されたものと推定される。

土壙墓93（第130図）

土壙墓92の西に位置し、それに一部切られて検出された。平面楕円形を呈し、規模は98×53㎝、深



第129図　土壙墓91（1/40）
・出土遺物（1/4）



第130図　土壙墓92（右）・93（左）（1/40）
・92出土遺物（1/2・1/3・1/4）

さ52cmを測る。壁はほぼ垂直に掘られ、底部は平坦である。墓壙上部で径30cm余りの石が検出されたが墓壙内では確認するに至らなかった。また、遺物も皆無であった。

土壙墓94（第131図）

土壙墓92の東から検出された。平面楕円形を呈し、規模は118×96cm、深さ77cmを測る。壁はやや緩く、弧を描きながら平坦な底部に至る。墓壙内には20～60cmの石が東上部から中央底部に向かって落ち込んでいる状況が確認された。遺物は底部に接して銭貨５枚が出土している。永楽通寶１枚の他は癒着のため不明であるが、渡来銭の可能性が高いものと判断される。

土壙墓95（第131図）

土壙墓94の北から検出された。平面円形を呈し、規模は径95cm、深さ54cmを測る。壁はやや緩く、弧を描きながら底部に至る。土壙縁辺に沿って石が検出され、中央部からは確認されなかった。また、石は墓壙の中央付近で留まっており、軟らかい第４層までは達していなかった。遺物は皆無であった。

土壙墓96（第131図）

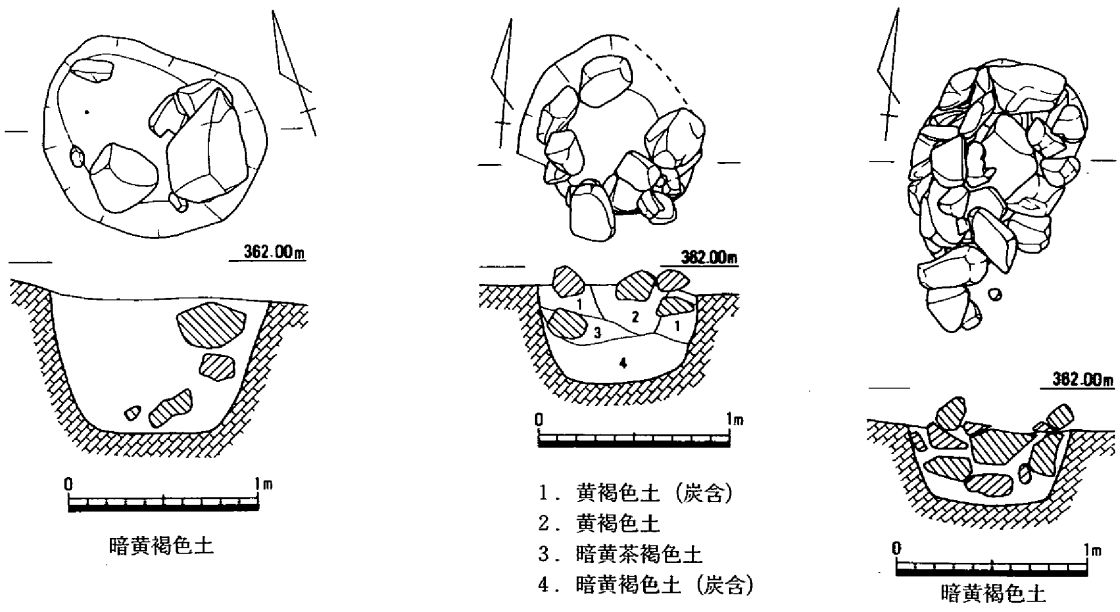
土壙墓95の東から検出された。平面楕円形を呈し、規模は118×75cm、深さ40cmを測る。壁はやや斜めに掘り込まれ、断面逆台形状を呈し、底部は平坦である。墓壙上部で検出された集石は、底部付近にまで隙間無く落ち込んだ状況が確認された。遺物は皆無であった。

土壙墓97（第132図）

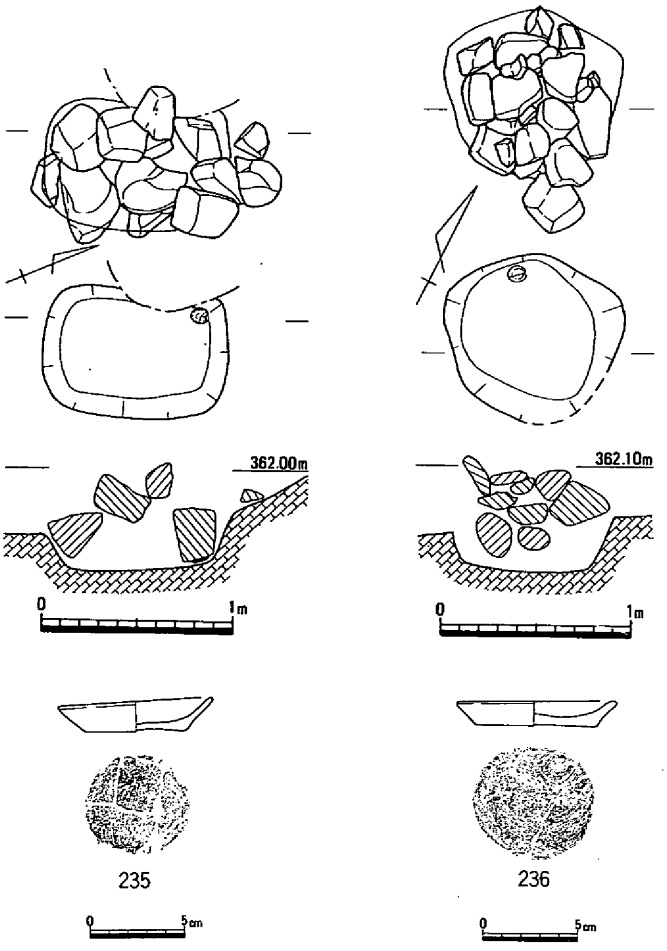
土壙墓96の北に位置し、土壙墓98に一部削平を受けて検出された。平面長方形を呈し、規模は97×68cm、深さ27cmを測る。壁はやや緩く掘り込まれ、断面逆台形状を呈す。墓壙上部を覆っていた集石は底部にまで達していた。遺物は墓壙北西隅から石に押しつぶされた状態で、底部に接して土師質土器小皿**235**が出土している。**235**は口径８cm、器高1.9cmを測る。灰白色を呈し、底部は糸切りされている。

土壙墓98（第132図、図版51）

土壙墓97の西から検出された。平面不整円形を呈し、規模は径約90cm、深さ30cmを測る。壁はやや緩く、断面逆台形状を呈す。墓壙上部で検出された集石は、底部付近にまで落ち込んでいる状況が確



第131図　土壙墓94（左）・95（中）・96（右）（１/40）



第132図　土壙墓97（左）・98（右）（1/40）・出土遺物（1/4）

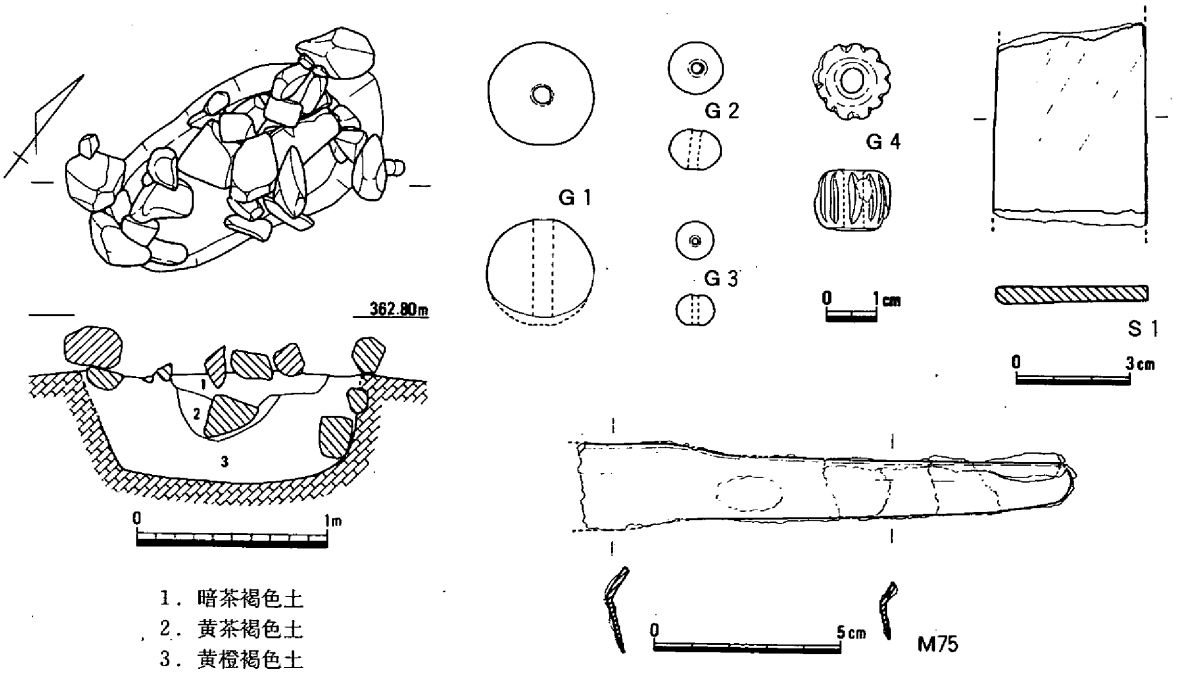
認された。

遺物は集石に混じって火輪**243**が、墓壙北隅底部からは土師質土器小皿**236**が出土している。**236**は口径８cm、器高1.4cmを測る。淡赤橙色を呈し、底部は糸切りされている。

土壙墓99（第133図）

土壙墓98の北３mから検出された。平面楕円形を呈し、規模は162×80cm、深さ62cmを測る。壁はやや斜めの掘り込まれ、断面逆台形状を呈す。墓壙上部で検出された集石は、底部にまではおよんでいない。

遺物は墓壙南東隅の、底部からやや浮いたところから、ガラス玉、剃刀、砥石がまとまって出土した。ガラス玉**G１～３**はいずれも透明で、**G４**は青色を呈し、表面に鎬が巡っている。数珠として利用されたものと推定している。剃刀**M75**は刃部を欠損している。現存長13.2cm、最大幅2.3cm、13.2ｇをはかる。**S１**は



1．暗茶褐色土
2．黄茶褐色土
3．黄橙褐色土

第133図　土壙墓99（1/40）・出土遺物（2/3・1/2）

凝灰岩製で、上下が欠損しているが４面に使用痕が残る。

土壙墓100（第134図）

土壙墓99の北東、Ｅ７区の西辺中央から検出された。平面楕円形を呈す浅い土壙墓で、規模は92×64cm、深さ41cmを測る。壁はやや緩く掘り込まれ、断面逆台形状を呈す。石は墓壙上部から検出されたが、下部からは確認されなかった。遺物は皆無であった。

土壙墓101（第134図）

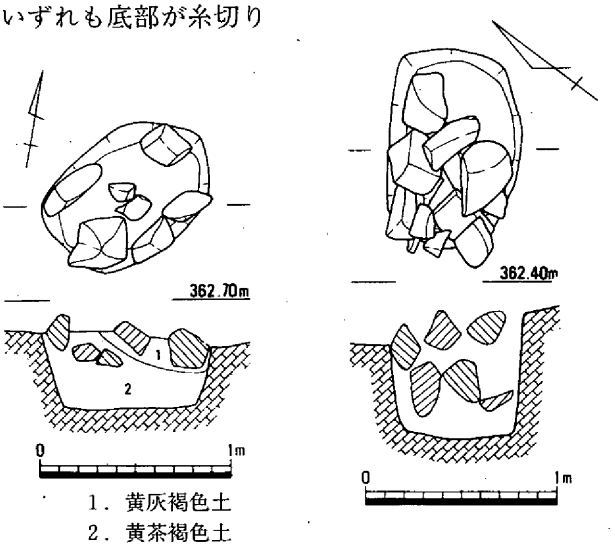
土壙墓100の南２ｍから検出された。平面楕円形を呈し、規模は107×70cm、深さ67cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。墓壙上部から検出された集石は底部付近にまで落ち込んだ状況が確認された。遺物は皆無であった。

土壙墓102（第135図、図版52）

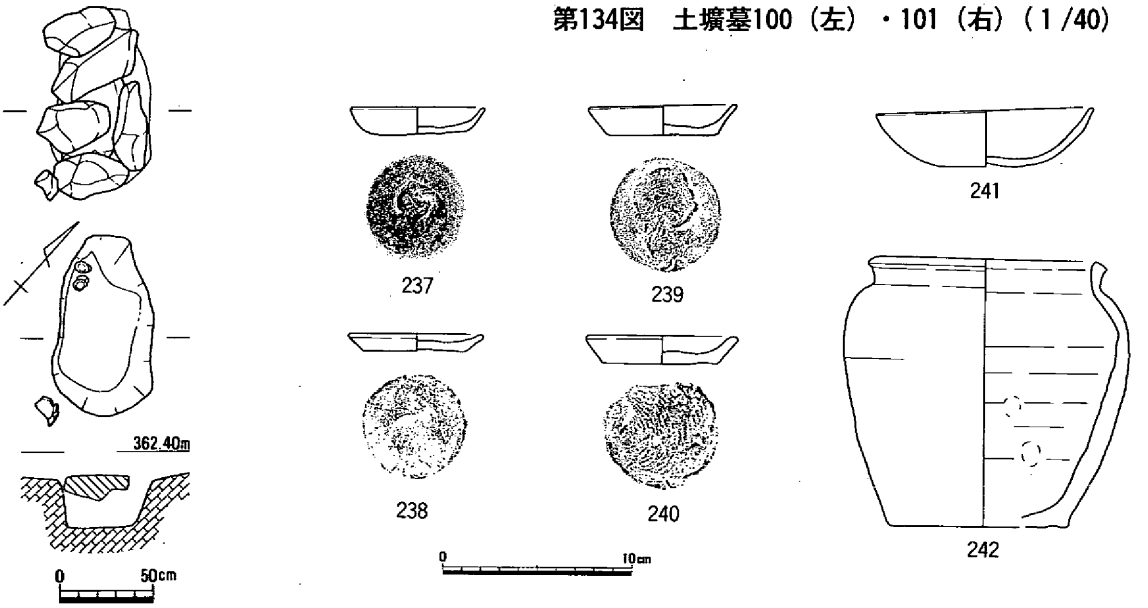
土壙墓101の北から検出された。平面楕円形を呈す浅い土壙墓で、規模は96×50cm、深さ24cmを測る。墓壙上面から検出された集石は下部にはおよばなかった。遺物は墓壙北西から、底部に接して土師質土器**237**～**241**が出土している。小皿**237**～**240**はいずれも底部が糸切りされており、椀**241**は底部中央が僅かに上げ底になる。なお、混入の可能性が高いものの、集石に混じって土壙外から備前焼**242**が出土している。赤褐色を呈す小型壺の破片で、推定口径11.4cm、器高14.5cmを測る。

土壙墓103（第136図）

Ｅ７区の南西に位置し、近世の土壙墓130に一部削平を受けて検出された。平面長方形を呈し、規模は128×105cm、深さ73cmを測る。墓壙はほぼ垂直に掘られ、底部は平坦である。



第134図　土壙墓100（左）・101（右）（１/40）



第135図　土壙墓102（１/40）・出土遺物（１/４）

墓壙上部で検出された集石は密に積み重ねられており、底部付近にまで達していた。遺物は底部付近から釘４本および渡来銭と推定される□□□寶の破片が出土している。

土壙墓104（第137図）

土壙墓103の北に位置し、近世の土壙墓130に一部切られて検出された。平面長方形を呈し、規模は109×67cm、深さ52cmを測る。壁はやや緩く掘られ、断面逆台形状を呈す。墓壙上部で検出された集石は中央付近にまで落ち込んでいた。遺物は墓壙中央の集石下、底部から５～10cm余りの位置から土師質土器の小皿**243**・皿**244**が、永楽通寶**C203**をはじめ、渡来銭と推定される６枚が出土している。

土壙墓105（第135図、図版52）

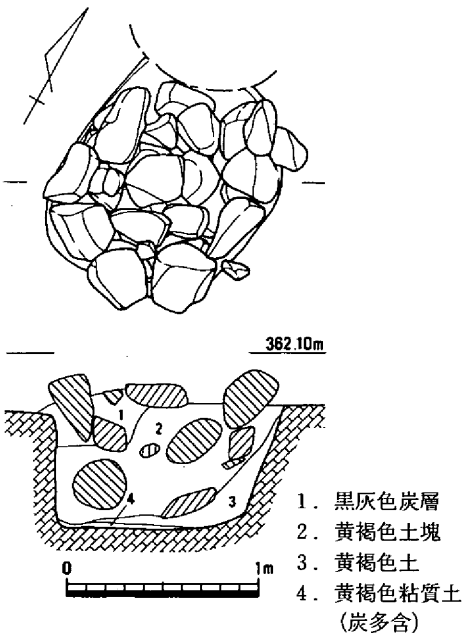
土壙墓104の北から検出された。平面長方形を呈し、規模は119×96cm、深さ59cmを測る。壁はやや緩く掘り込まれ、断面逆台形状を呈す。墓壙上部で検出された集石は一部中央底部にまで達している。遺物は底部の中央北寄りから漆塗り椀１点および布の付着した渡来銭12枚が出土している。**C210**から順に開元通寶、元豊通寶３、元祐通寶、紹定通寶で、他に皇宋通寶、至和元寶、大観通寶などがある。なお、椀は計測不能であった。

土壙墓106（第138図）

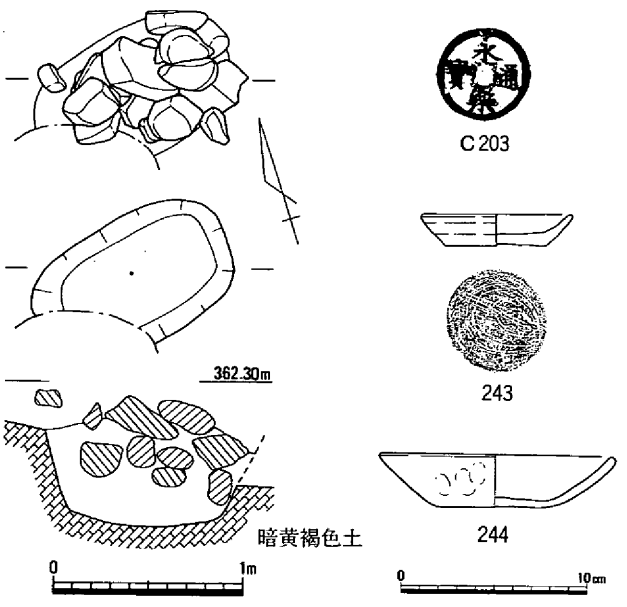
土壙墓105の北から検出された。平面楕円形を呈す小規模なもので、規模は45×36cm、深さ47cmを測る。墓壙上部に検出された集石は中央付近にまで落ち込んでいた。遺物は底部からやや浮いて土師質土器小皿片**245**が出土している。

土壙墓107（第138図、図版81）

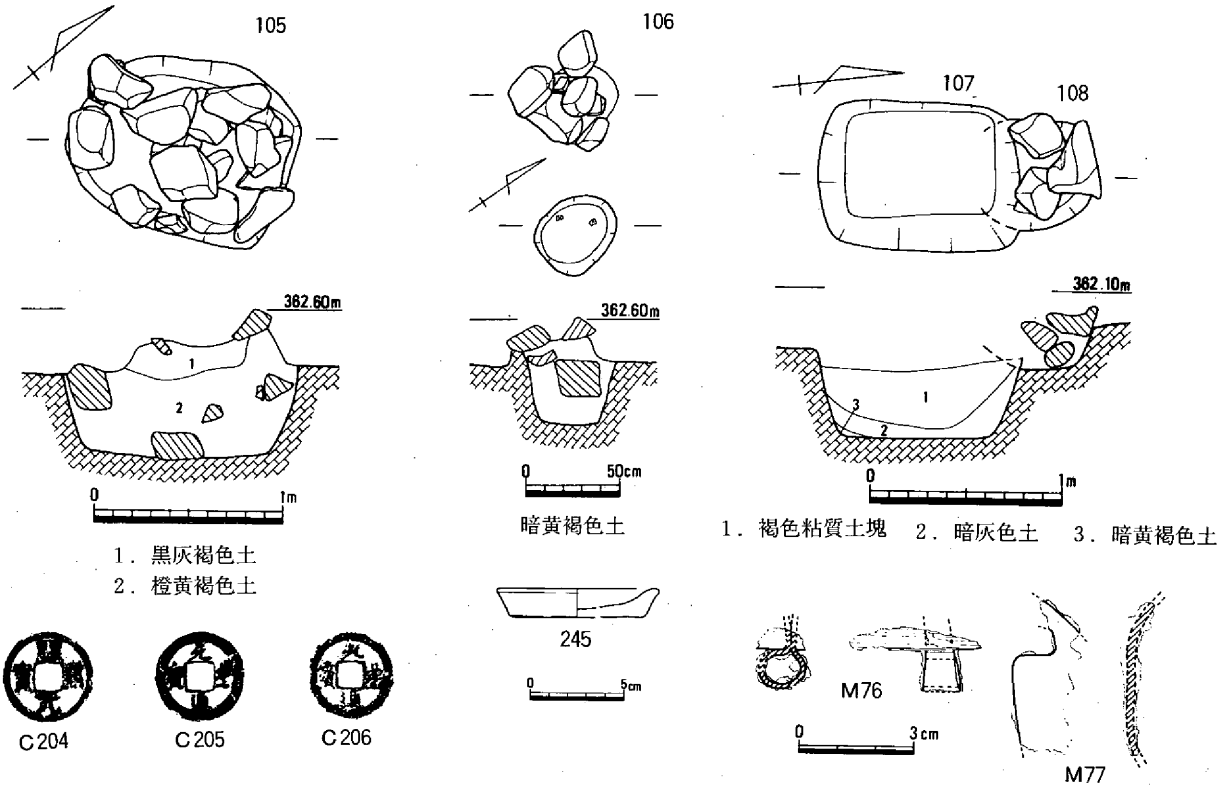
土壙墓104の東に位置し、土壙墓108を一部削平して検出された。墓壙検出時に集石が全く見られなかった、平面長方形を呈す土壙墓である。規模は106×80cm、深さ47cmを測る。壁はやや緩く掘り込まれ、断面逆台形状を呈し、底部は平坦である。墓壙内からも石は伴出せず、遺物は棺金具**M76**・**M77**が第１層上層から出土したのみである。なお、**M77**は薄板状の鉄板で棺金具と想定しているが、器形および部位は不明である。



第136図　土壙墓103（１/40）



第137図　土壙墓104（１/40）・出土遺物（１/２・１/４）



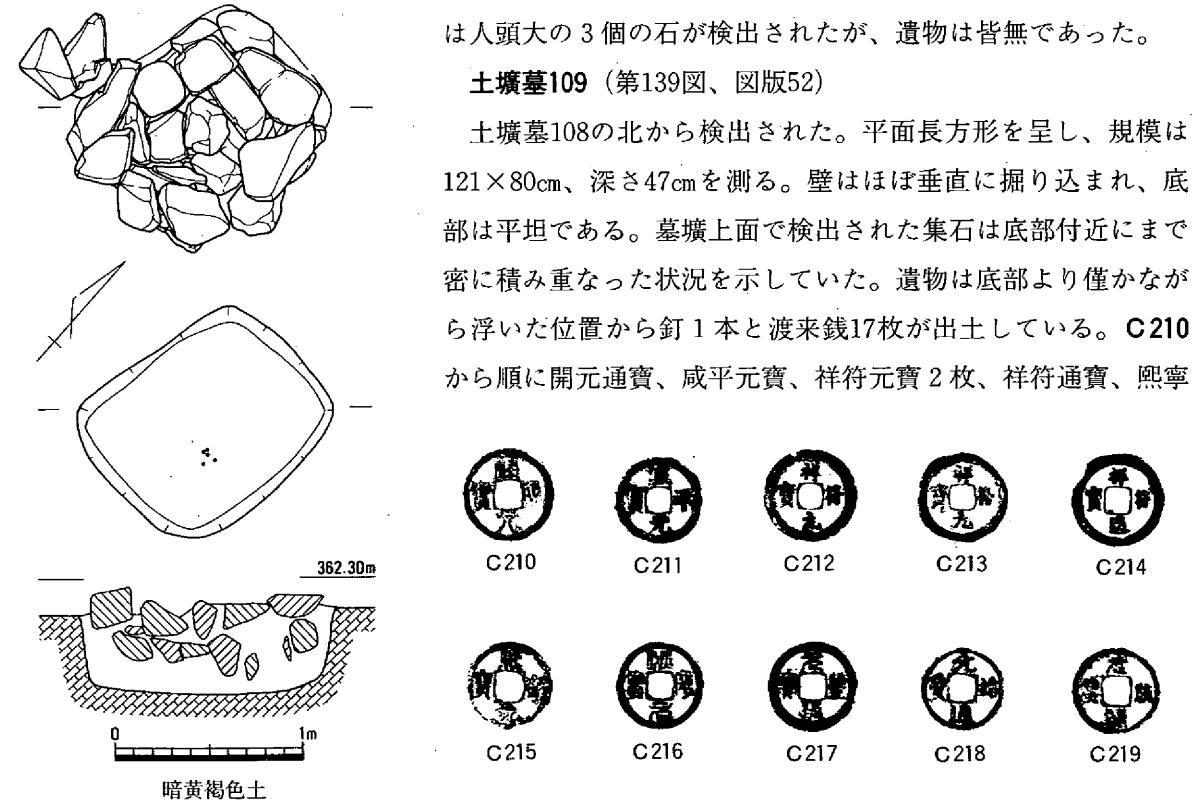
第138図　土壙墓105～108（１/40）・出土遺物（１/２・１/４）

土壙墓108（第138図）

土壙墓107に一部切られ検出された、平面円形を呈す小規模な土壙墓である。規模は径60cm、深さ23cmを測る。墓壙内からは人頭大の３個の石が検出されたが、遺物は皆無であった。

土壙墓109（第139図、図版52）

土壙墓108の北から検出された。平面長方形を呈し、規模は121×80cm、深さ47cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。墓壙上面で検出された集石は底部付近にまで密に積み重なった状況を示していた。遺物は底部より僅かながら浮いた位置から釘１本と渡来銭17枚が出土している。**C210**から順に開元通寶、咸平元寶、祥符元寶２枚、祥符通寶、熙寧



第139図　土壙墓109（１/40）・出土遺物（１/２）

元寶２枚、元豊通寶、元祐通寶２枚で、他に皇宋通寶１枚、嘉祐通寶１枚、元祐通寶２枚および渡来銭と推定される銭文不明の３枚がある。

土壙墓110（第140図）

土壙墓109の北東に位置し土壙墓111に一部切られて検出された。平面長方形を呈し、規模は105×79cm、深さ43cmを測る。壁はやや緩く掘り込まれ、底部はやや窪む。集石は底部まで密に落ち込んだ状態を示し、これに混じって土師質土器小皿片**246**が出土している。

土壙墓111（第140図）

土壙墓110に一部削平を受けた小規模な土壙墓で、平面円形を呈す。規模は径約60cm、深さ32cmを測る。墓壙上面に扁平な石で蓋をしたような状況であったが、下部からは径20cm余りの石が数個確認されたのみで、遺物は皆無であった。

土壙墓112（第140図）

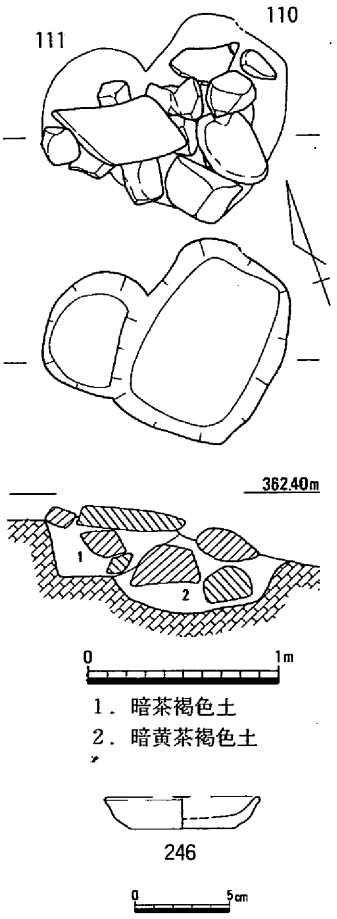
土壙墓111の北から検出された。平面楕円形を呈し、規模は120×87cm、深さ28cmを測る。壁は緩く斜めに掘り込まれ、底部は傾斜し不安定である。墓壙上ぶから検出された集石は下部にはおよばず、暗黄褐色土が堆積するのみであった。なお、集石に混じって釘１本が出土している。

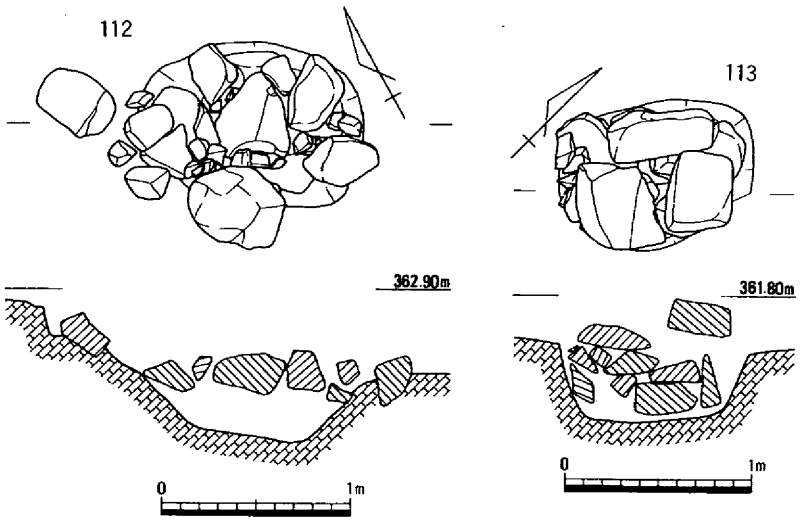
土壙墓113（第140図、図版53）

土壙墓107の東から検出された。平面楕円形を呈し、規模は107×75cm、深さ41cmを測る。壁はやや緩く掘り込まれ、断面逆台形状を呈し、底部は平坦である。墓壙上部で検出された集石は底部にまで達していた。遺物は皆無であった。

土壙墓114（第141図、図版53）

土壙墓113の土壙墓109の東、土壙墓113の北から検出された。平面長方形を呈し、規模は134×69cm、深さ48cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。墓壙上部で検出された集石は中央部が深く、底部付近まで落ち込んでいた。遺物は集石下部中央の、底部からやや浮いた位置から毛抜１本**M78～80**および碁石？**S２**が出土している。**S２**は堆積岩で明灰色を呈し、表面は滑らかで



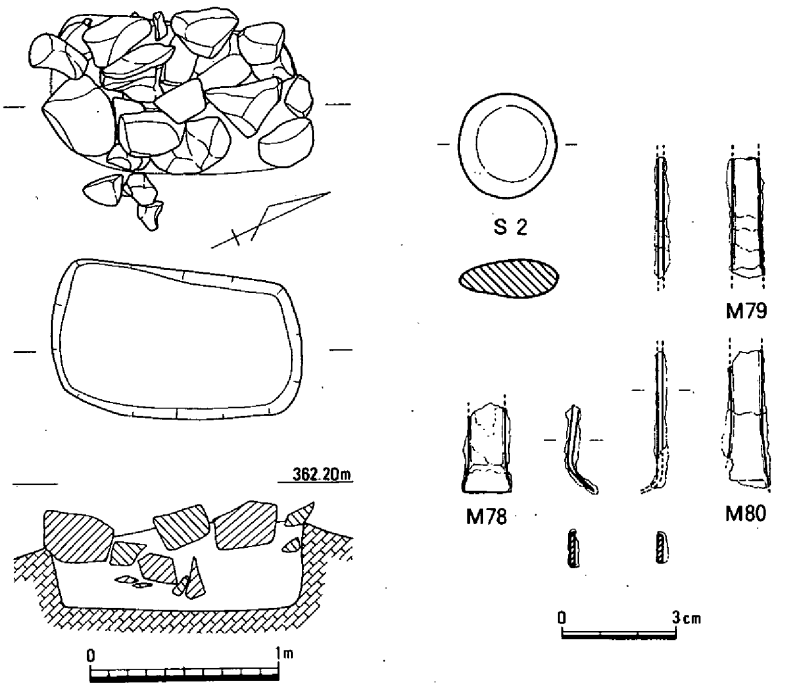


第140図　土壙墓110～113（１/40）・110出土遺物（１/４）

ある。

土壙墓115（第142図）

土壙墓114の南東に位置し、近世の土壙墓132に一部切られて検出された。不整円形を呈し、規模は92×80cm、深さ61cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。検出面で集石は確認されず、石は底部に接するように検出された。遺物は皆無であった。



第141図　土壙墓114（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓116（第142図、図版53）

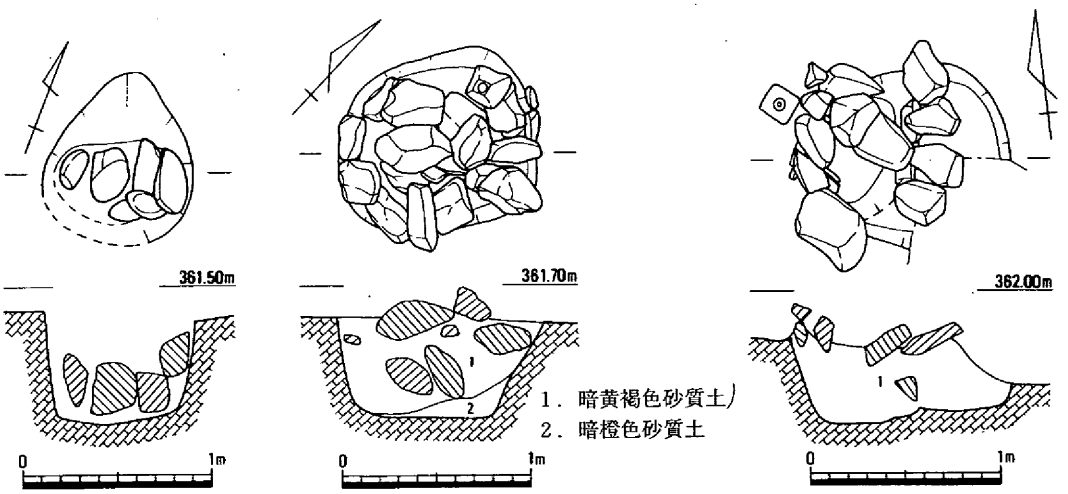
土壙墓115の東から検出された。平面隅丸の方形を呈し、規模は109×93cm、深さ54cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。墓壙上部に検出された集石は底部付近にまで落ち込んだ状況を示していた。遺物は集石混じって火輪**260**が出土したのみである。

土壙墓117（第117図、図版54）

土壙墓116に一部切られ検出された。平面楕円形を呈し、規模は121×98cm、深さ45cmを測る。壁はやや緩く掘り込まれ、底部は中央で段差があり、２基の土壙墓の可能性もある。いずれにせよ墓壙上部で検出された集石は下半にまでは達せず、遺物は集石に混じって地輪**194**が出土したのみである。

土壙墓118（第143図）

土壙墓117の北、集石墓47の西辺に沿って検出された。平面楕円形を呈し、規模は170×92cm、深さ50cmを測る。壁は緩く掘り込まれ、断面逆台形状を呈す。石は墓壙北側から中央に向かって落ち込ん



第142図　土壙墓115（左）・116（中）・117（右）（１/40）

でおり、これに混じって土師質土器**247・248**が出土している。

土壙墓119（143図）

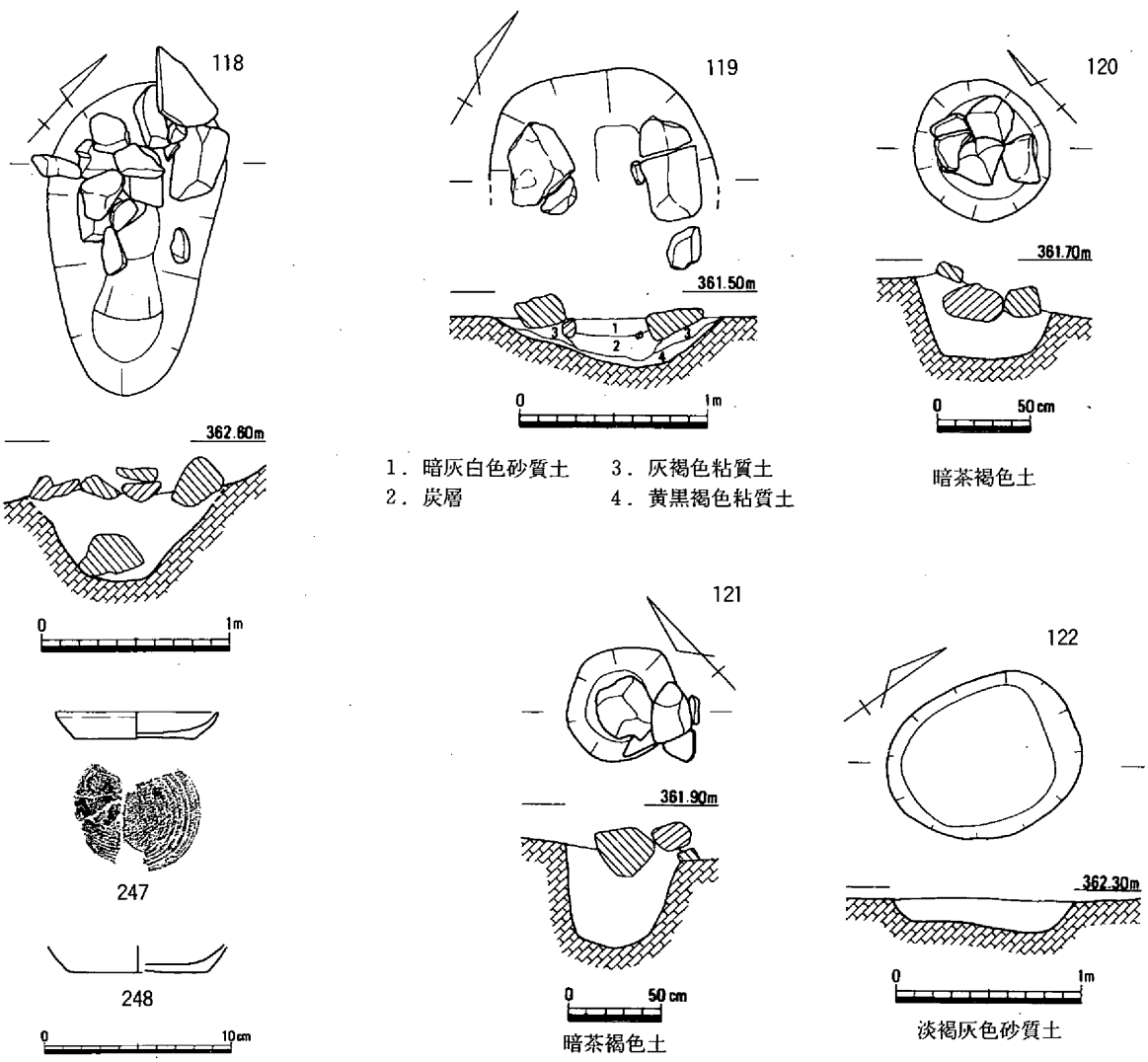
土壙墓118の南東、Ｅ７区の東辺中央から検出され、南半部は山道によって削平を受けている。平面はほぼ円形を呈し、規模は径約120㎝、深さ27㎝を測る。壁は緩く断面皿状を呈す。他の土壙墓とは様相を異にしており、石が土壙の両側から検出され、埋土には炭層が確認されているが、焼土や骨片などは皆無であった。

土壙墓120・121（第143図）

土壙墓119の北に接して検出された。いずれも平面円形の小規模なもので土壙墓120は径75㎝、深さ45㎝、土壙墓121は径62㎝、深さ57㎝を測り、上面から数個の集石が検出された。なお、遺物は皆無であった。

土壙墓122（第143図）

Ｅ７区の北東、集石墓47の北から検出された。平面楕円形を呈す浅いもので、規模は105×86㎝、深さ15㎝を測る。断面皿状で、底部はやや斜めに傾斜し、不安定である。埋土に僅かながら炭粒が混じるものの、遺物は出土しなかった。



第143図　土壙墓118～122（１/40）・118出土遺物（１/４）

土壙墓123（第144図、図版54）

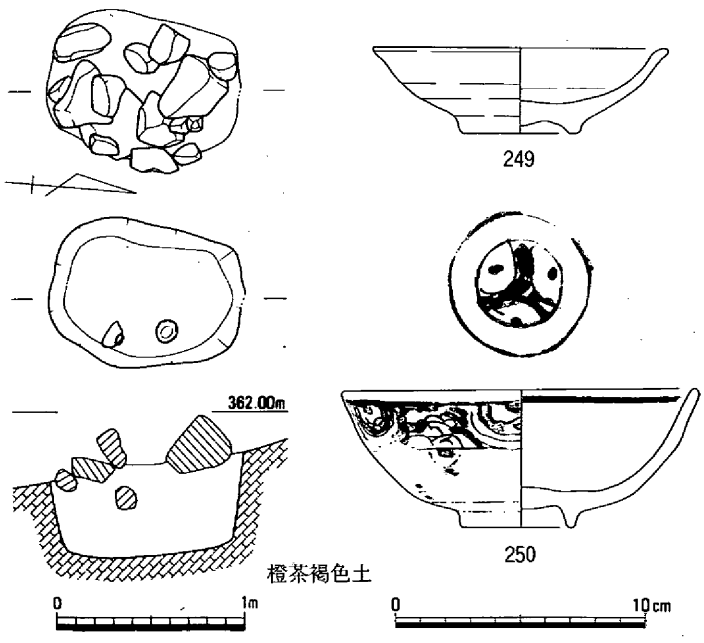
土壙墓122の南東から検出された。平面長方形を呈し、規模は101×77cm、深さ46cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。墓壙上部から大小ばらつきのある石十数個が検出されたが、下部からは確認されなかった。遺物は墓壙中央東部から、皿**249**および碗**250**が底部から僅かに浮いた状態で、出土している。**249**は唐津の灰釉皿で、口径11.6cm、器高3.4cmを測る。素地は橙色、釉は灰緑色を呈す。16Ｃ末～17Ｃ初頭のものと考えられる。**250**は福建省の染付碗で、外面に波頭ないし唐草の退化文、見込みに花文の退化文が描かれている。素地は灰白、外面は明緑灰色を呈す。**249**とほぼ同様の年代観を示す。

土壙墓124（第145図）

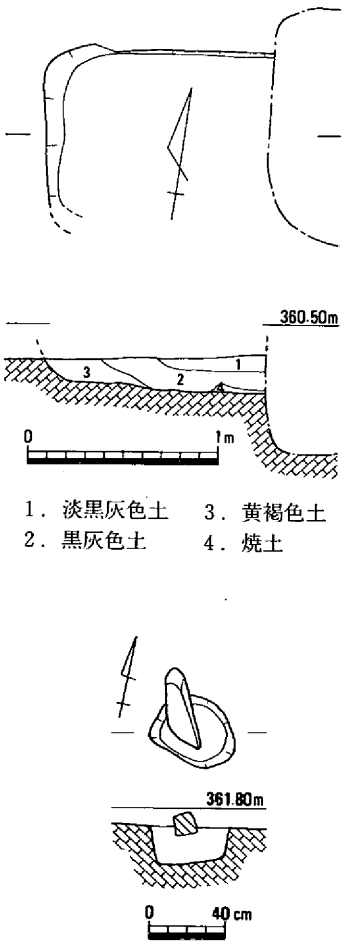
調査区の南西にあたるＧ３区に位置し、近世の土壙墓178に一部削平を受けて検出された。平面長方形を呈し、規模は115α×約110cm、深さ17cmを測る。検出面から底部までが異常に浅く、土壙内の埋土は炭を多含し、底部中央からは径約40cm余りの焼土面が２か所に認められた。土壙の検出位置および状況などから荼毘施設の可能性もあるが、壙内からの遺物は皆無で骨片なども確認されなかった。

土壙墓125（第145図）

Ｆ５区の南西から検出された小規模な土壙墓である。平面円形を呈し、径約40cm、深さ20cmを測る。土壙中央には幅15cm余り、長さ約50cmの石が立てられていた。土壙下部には締まりのない黄褐色土が堆積するのみで、何ら遺物は出土しなかったものの、その状況から墓標としての役割を果たしたものと考えられる。（江見）



第144図　土壙墓123（１/40）・出土遺物（１/３）



第145図　土壙墓124・125（１/40）

（５）近 世 墓

近世墓は調査区の南西、２区を中心に約80基余り検出された。前述の中・近世の土壙墓は墓域の在り方が今一つ不鮮明であったのに対し、この項で扱う近世墓は整然といくつかの列をなし、その大半の墓壙から寛永通寶の出土を見るものであった。また、これらの墓壙はいずれも深く、座棺が利用されたと考えられることから、３区南方の中近世墓が交錯しあう地区についても、同様の形態を示す墓壙は敢えてこの項に含めた。以下、概略する。

土壙墓126（第146、図版57・81）

Ｆ６区の北東に位置し、中世の土壙墓98の西に接して検出された。平面長方形を呈し、規模は120×61cm、深さ81cmを測る。墓壙はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。墓壙上部からは一辺20cm前後の石が検出され、中央部には長さ約40cmの石が墓標として立てられていた。

遺物は棺金具**M81**・**M82**が南西部から、銭貨２枚が中央部から、いずれも底部からやや浮いた状態で出土している。墓壙の平面形態および出土遺物から方形の組み合わせ式の座棺が利用されたものと推定される。また、銭貨は寛永通寶１枚と銭名不明のもので、前者は古寛永と判断されるものであった。後述する土壙墓127と墓壙の主軸が揃っており、江戸時代前半に埋葬されたものと考える。

土壙墓127（第147図、図版57・81）

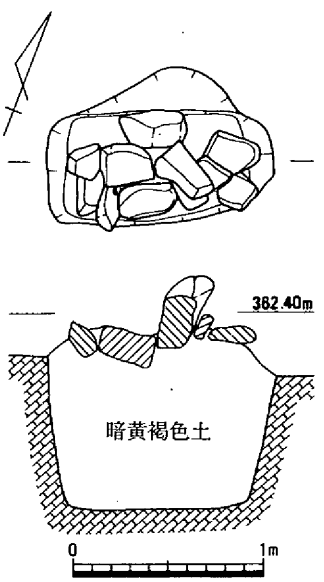
Ｆ６区の北東隅、中世の土壙墓97の東から検出された、大形の土壙墓である。平面形態は南部が一部突出する長方形を呈しており、南北に検出面から30～40cm余り下がった所に段をもつ。墓壙本体の平面形態は一辺約130cmのほぼ方形を呈し、深さ約100cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。大小の石が墓壙上面を中心として検出され、一部、墓壙壁に沿って落ち込んだ状況が確認された。なお、南北の段は深い墓壙に対処するための足場と理解される。

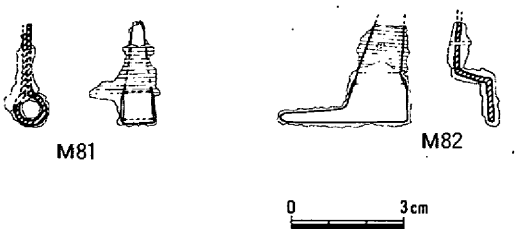
遺物は底部から、骨片に混じって釘19本、寛永通寶４枚が出土している。釘は東部および中央付近から、寛永通寶は中央から散在して出土している。釘は**M83**の長さ6.1cmから**M93**の長さ3.8cmまでがある。寛永通寶は重量が1.27～2.54ｇと、ややばらつきがあるもののいずれも古寛永と判断される。

以上、規模および出土遺物から当墓壙には方形の組み合わせ式の座棺が利用されたものと推定され、埋葬時期は江戸時代前半と考えられる。

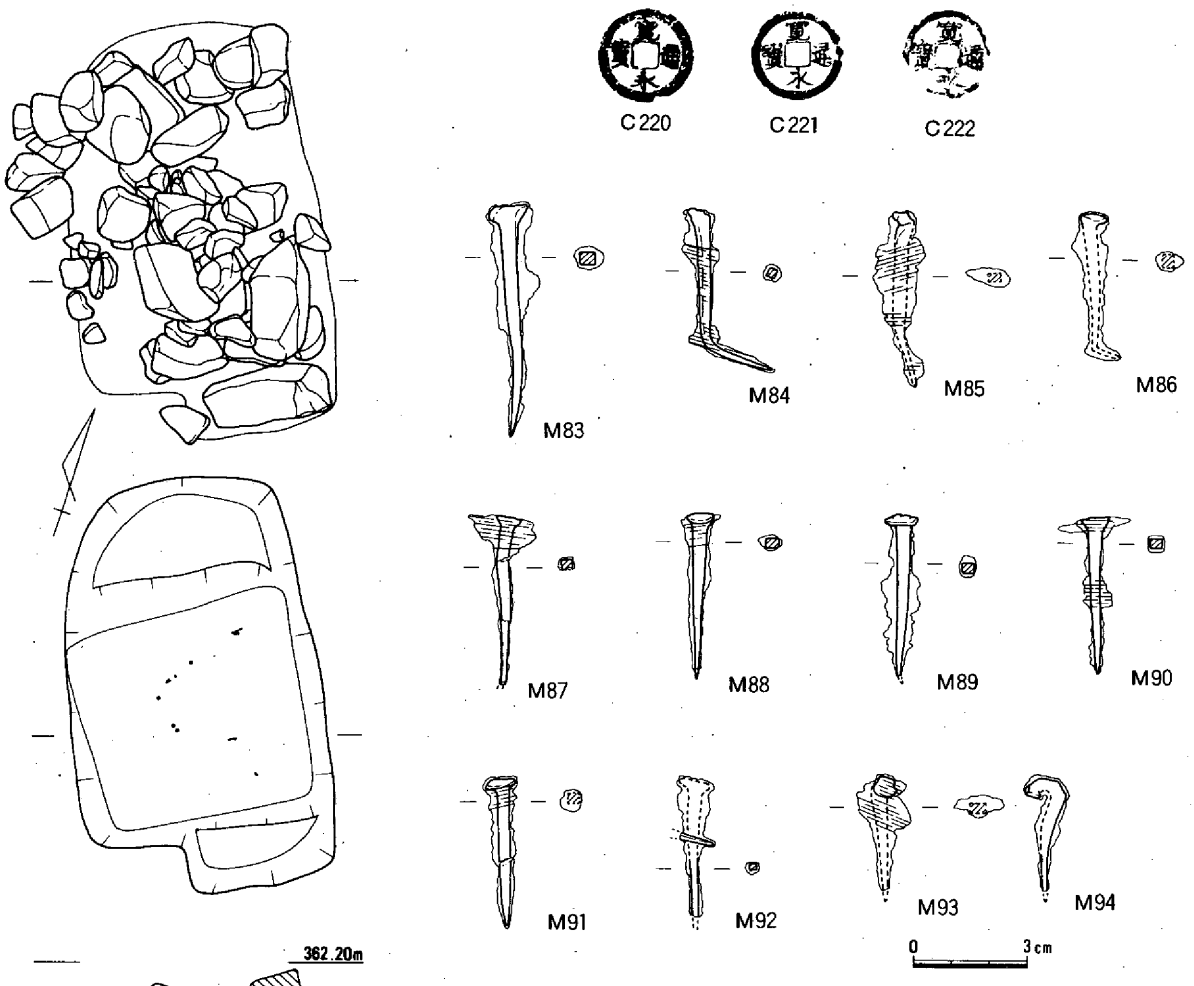
土壙墓128（第148図、図版57・81・83）

土壙墓127の東から検出された。平面円形を呈し、規模は径約100cm、深さ約90cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。墓壙上部の集石はほとんど認められず、





第146図　土壙墓126（１/40）・出土遺物（１/２）



第147図　土壙墓127（１/40）・出土遺物（１/２）

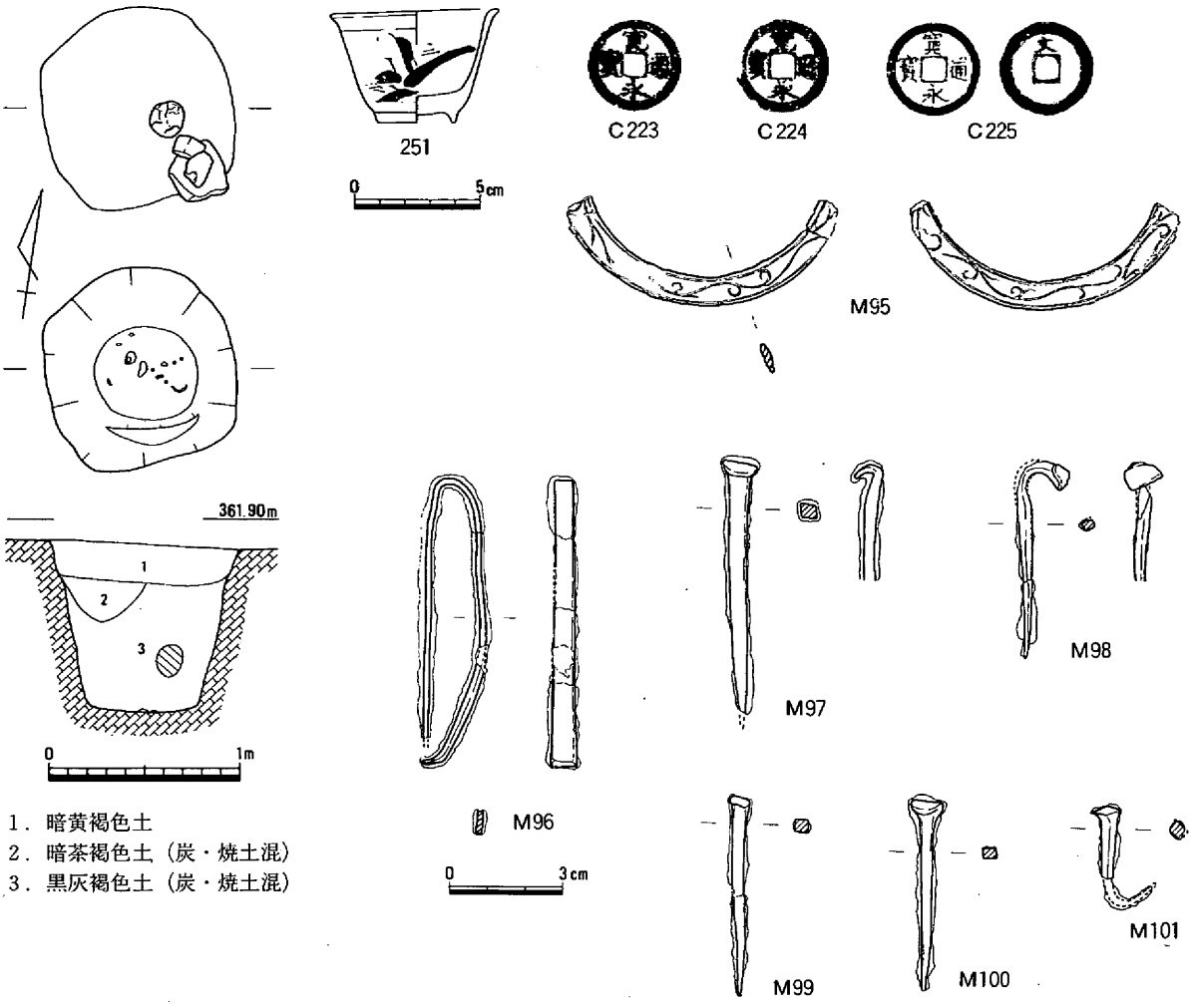
壙内にも円礫１個のみが落ち込んだ状況であった。

遺物は底部から肥前染付小杯**251**をはじめ、毛抜**M96**、銭貨８枚、棺金具**M95**、釘７本が出土している。小杯**251**は口径6.5cm、器高4.6cmを測り、器表面に山水文が描かれている。17Ｃ後半のものと考えられる。毛抜は長さ7.7cmを測り、先端の刃部は７㎜と撥状には広がらない。重量8.95ｇを量る。銭貨は図示した古寛永**Ｃ223・224**の他３枚、新寛永の文銭が**Ｃ225**の他１枚、銭名不明が１枚である。**M95**は銅製品で、表裏に細く繊細な唐草文様が描かれている。

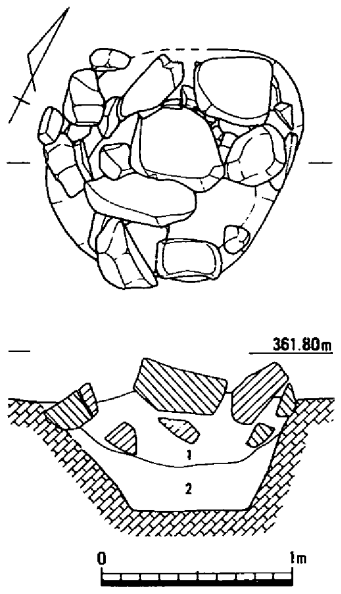
以上、規模および出土遺物から当土壙には樽形の座棺が利用されたものと推定され、埋葬時期は江戸時代前半と考えられる。

土壙墓129（第149図）

土壙墓128の東から検出された。平面楕円形を呈し、規模は144×95cm、深さ62cmを測る。壁はやや緩く掘られ、断面逆台形状を呈す。墓壙上部からは集石が検出され、中央部には墓標石の基壇と思われる一辺約40cm、厚さ約20cmの石が置かれていた。壙内からの遺物は皆無であったが、墓壙上部の在り方から近世の範疇のものと判断し、当項で記した。



第148図　土壙墓128（１/40）・出土遺物（１/３・１/２）



第149図　土壙墓129（１/40）

土壙墓130（第150図）

Ｅ５区の南西に位置し、中近世の土壙墓103・104を切って検出された。平面円形を呈し、規模は径90cm、深さ約70cmを測る。墓壙上部からは墓標石あるいは基壇石と思われる石が検出された。

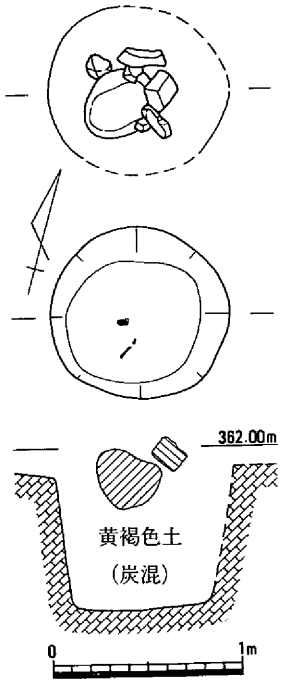
底部中央から出土した漆塗りの椀には、布にくるまれた銭貨６枚が入れられていた。このほか煙管１組、釘１本が出土している。椀は原形を保たず、煙管も保存状態は良くない。銭貨**C226～231**はいずれも古寛永である。墓壙には櫃形の座棺が推定され、埋葬時期は江戸時代前半と考えられる。

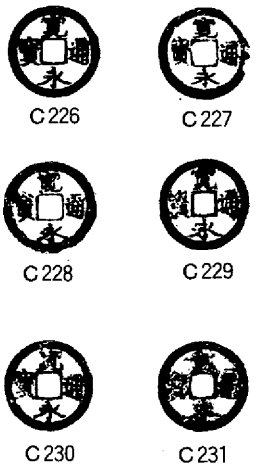
土壙墓131（第151図、図版58）

Ｅ５区の南東から検出された。平面楕円形を呈し、規模は122×97cm、深さ71cmを測る。墓壙上部に検出された集石は第１層下部にまで落ち込んだ状況が確認された。遺物は煙管の吸い口１個のみであった。

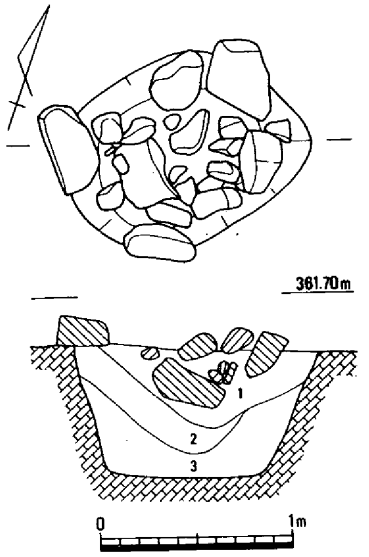
土壙墓132（第152図、図版58・81・86）

土壙墓土壙墓131の北東に隣接して検出された。平面長方形を呈し、規模は106×80cm、深さ56cmを測る。底部から唐津碗252をはじめ、２か所に別れて銭貨18枚、棺金具**M102・103**などが出土している。252は口径13.2cm、器高40.5cmの灰釉陶器で素地は橙色を呈し、その年代観は16Ｃ末～17Ｃ初頭である。



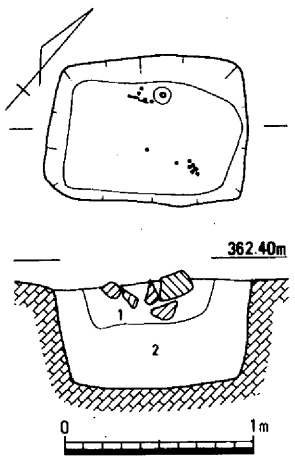


第150図　土壙墓130（１/40）・出土遺物（１/２）

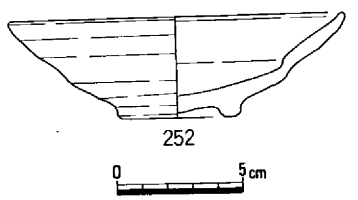


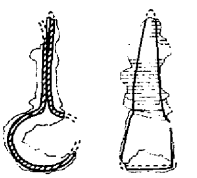
１．灰黄褐色砂質土　３．灰橙褐色砂質土
２．橙褐色砂質土

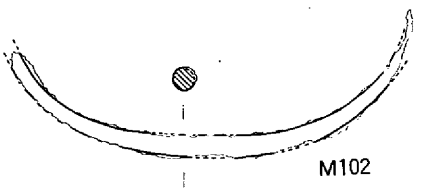
第151図　土壙墓131（１/40）

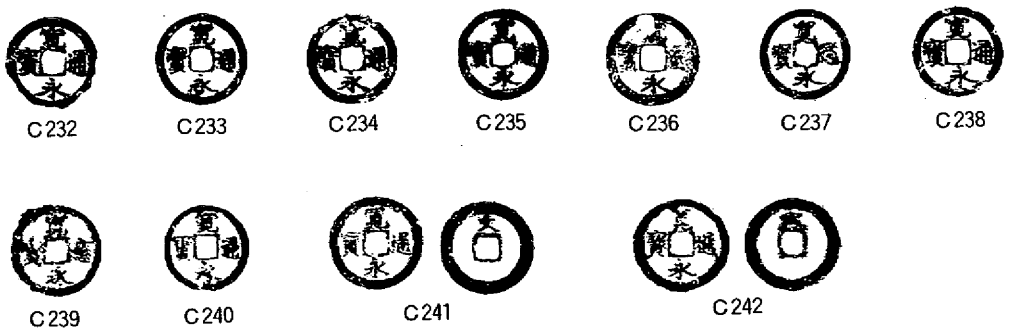


１．暗橙褐色土　２．橙黄褐色土









第152図　土壙墓132（１/40）・出土遺物（１/３・１/２）

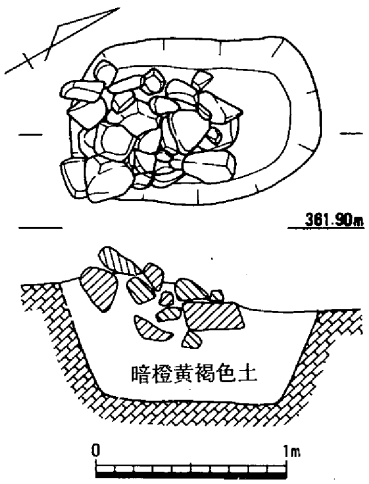
銭貨は古寛永がC232～240の他６枚、新寛永の文銭C241・242、銭名不明１枚である。以上、当墓壙は江戸時代前半に、方形の組み合わせ式の座棺によって埋葬されたものと考えられる。

土壙墓133（第153図）

Ｅ７区の北東から検出された。平面楕円形を呈し、規模は132×88cmを測る。墓壙上部には中央部に落ち込む集石が検出された。遺物は底部から釘４本が出土している。組み合わせ式の棺が利用されたものと考えられる。

土壙墓134（第154図、巻頭図版４）

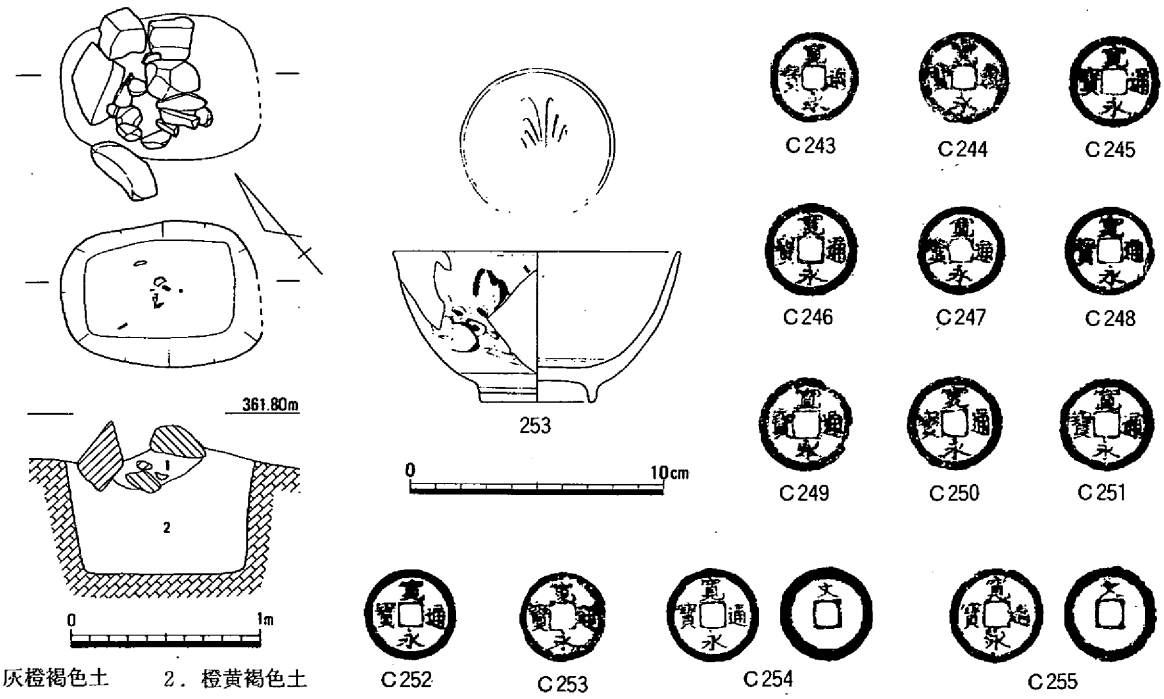
土壙墓133の東から検出された。平面長方形を呈し、規模は104×78cm、深さ68cmを測る。墓壙上部からは墓標石が抜き取られたと想像されるように集石が検出された。遺物は底部から肥前系染付碗253をはじめ、煙管１組、銭貨14枚が出土している。253は口径11.2cm、器高６cmを測り、外面に折枝・蝶、見込みに草が描かれている。17Ｃ後半と考えられる。銭貨は古寛永がC243～253の他１枚、新寛永の文銭C254・255の２枚である。以上、当墓壙は江戸時代前半のものと考えられる。（江見）



第153図　土壙墓133（１/40）

土壙墓135（第155図）

土壙墓134の西南西約32mの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面において長径20～30cm程度の石が出土した。５、６個の石が墓壙の中央付近の上層に置かれるものである。断面形は椀形を呈しており、壁は少し開きながら立ち上がる。底面は少し窪むものである。墓壙の底面に接する付近から254の椀が出土した。肥前系の染付である。18世紀前葉から中葉の頃と考えられる。M104は角釘である。



第154図　土壙墓134（１/40）・出土遺物（１/３・１/２）

土壙墓136（第155図）

土壙墓135の東側に約10cmの間隔をおいて検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面において長径30～50cm程度の石が出土した。石は掘り方の中央部に並べ置かれるものであり、墓壙の最上面で検出した。断面形は逆台形を呈するものである。壁は垂直に近い立ち上がりを見せている。底面は少し西に傾斜するが平坦である。墓壙の規模は長径118cm、短径110cm、深さ106cmを測るものである。遺物としては埋土中から角釘が出土している。

土壙墓137（第156図）

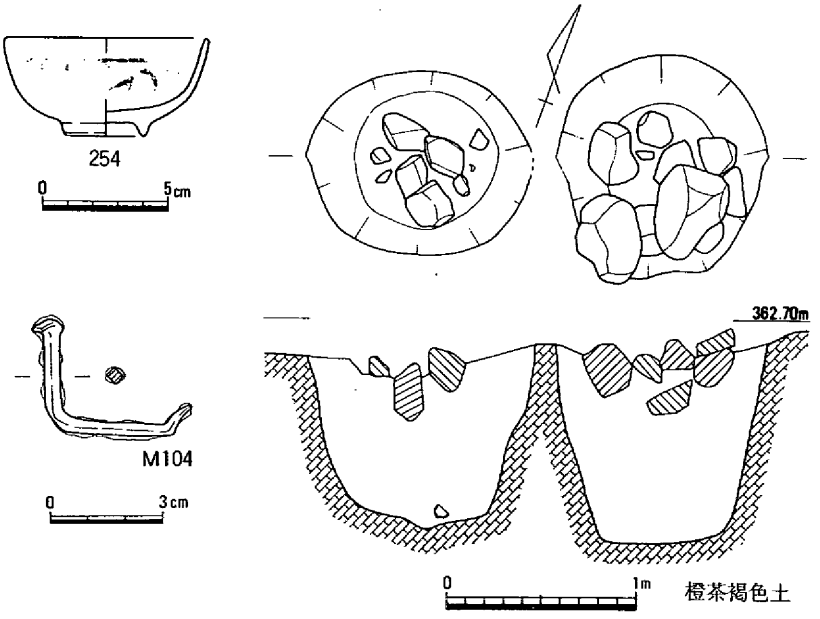
土壙墓136の南東側に約10cmの間隔をおいて検出した。平面形は方形を呈するものである。底面での平面形は、北半は丸く、南半は隅丸の方形を呈している。断面形は逆台形を呈するものである。壁は少し開きながら立ち上がり、底面は平坦である。墓壙の規模は、長辺110cm、短辺94cm、深さ38cmを測る。出土遺物としては「寛永通寶」が７枚出土している。**C256**は古寛永通寶、**C257**は新寛永通寶、**C258**は裏面に「文」の鋳出された寛永通寶である。

土壙墓138（第157図）

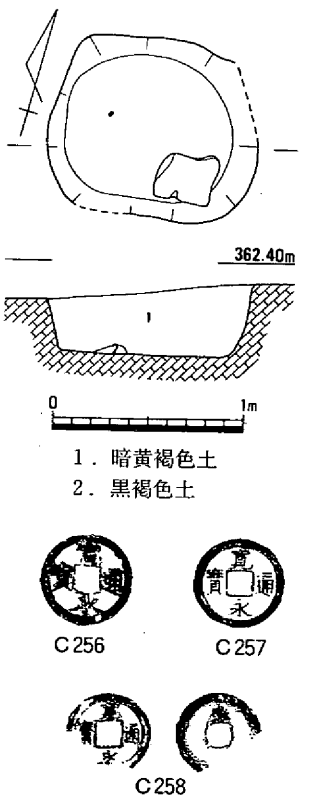
土壙墓137の北東約70cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面において長径20～55cm程度の石が出土した。８、９個の石が掘り方の上面に散在的に配置されている。断面形は逆台形を呈するものである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。断面の土層をみると内部が陥没したものと考えられる。墓壙の規模は長径109cm、短径107cm、深さ109cmを測る。

土壙墓139（第157図、図版58）

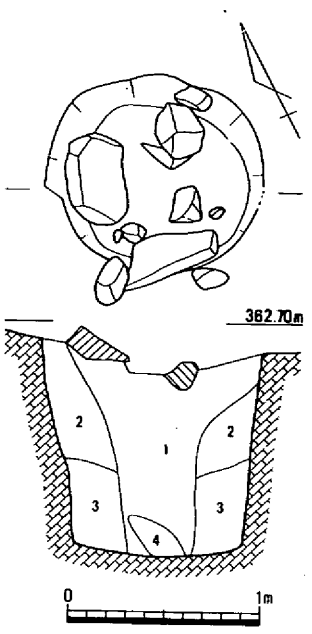
土壙墓138の西南西約9mの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。検出面において長径15～40cm程度の石が出土した。石は墓壙の掘方に沿って面を揃えて置かれており、その石列は上部に構造物を置くための基礎構造と考えられる。断面形は逆台形を呈しており



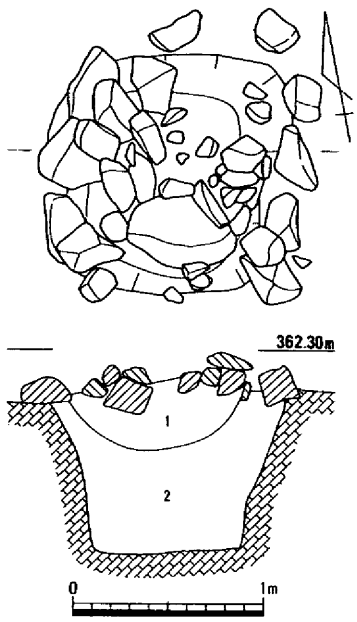
第155図　土壙墓135（左）・136（右）（1/40）
・135出土遺物（1/3・1/2）



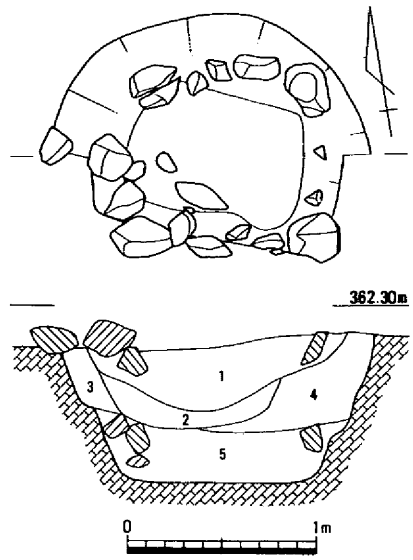
第156図　土壙墓137
（1/40）・出土遺物
（1/2）



1．暗黄褐色土　3．黄褐色土
2．暗黄褐色土　4．暗褐色土
（橙褐色土混）



1．暗黄褐色土　2．黄褐色土



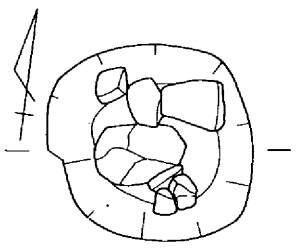
1．暗黄褐色土
2．淡黒褐色土
3．黒褐色土
4．黄褐色土
5．暗茶褐色土

第157図　土壙墓138（左）・139（中）・140（右）（1/40）

壁は少し開きながら立ち上がるもので、底面は平坦である。墓壙の規模は長径130cm、短径127cm、深さ81cmを測る。墓石の基礎構造を検出したことは、納められた棺の高さは80cmを超えない。

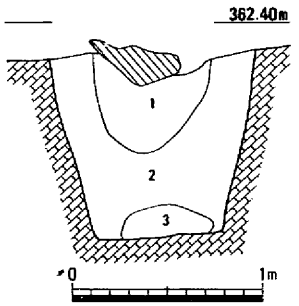
土壙墓140（第157図、図版58）

土壙墓139の東南東側に約10cmの間隔をおいて検出した。検出面の平面形は円形に近いが、底面の平面形は方形を呈する。検出面において長径20～30cm程度の石が出土した。石は掘り方の中に方形の区画を形成するように置かれていた。断面形は逆台形を呈するものである。壁は少し開きながら立ち上るもので、底面は平坦である。規模は長辺169cm、短辺127cm、深さ81cmを測る。底面の規模は長辺94cm、短辺67cmを測る。

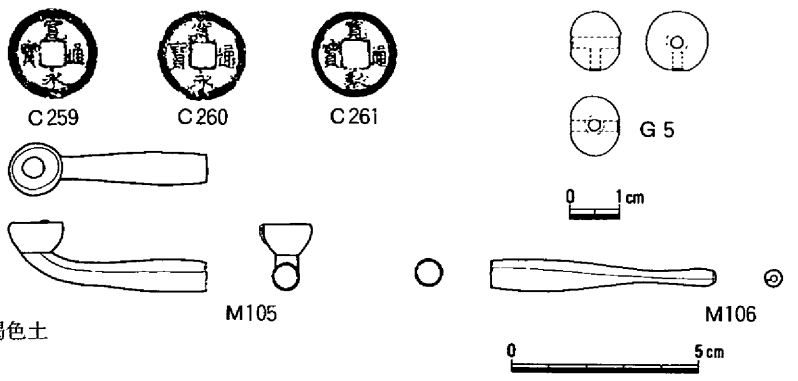


土壙墓141（第158図、図版84）

土壙墓140の東北東約100cmの位置に検出した。平面形は方形を呈す



1．暗黄褐色土　2．橙黄褐色土　3．茶褐色土

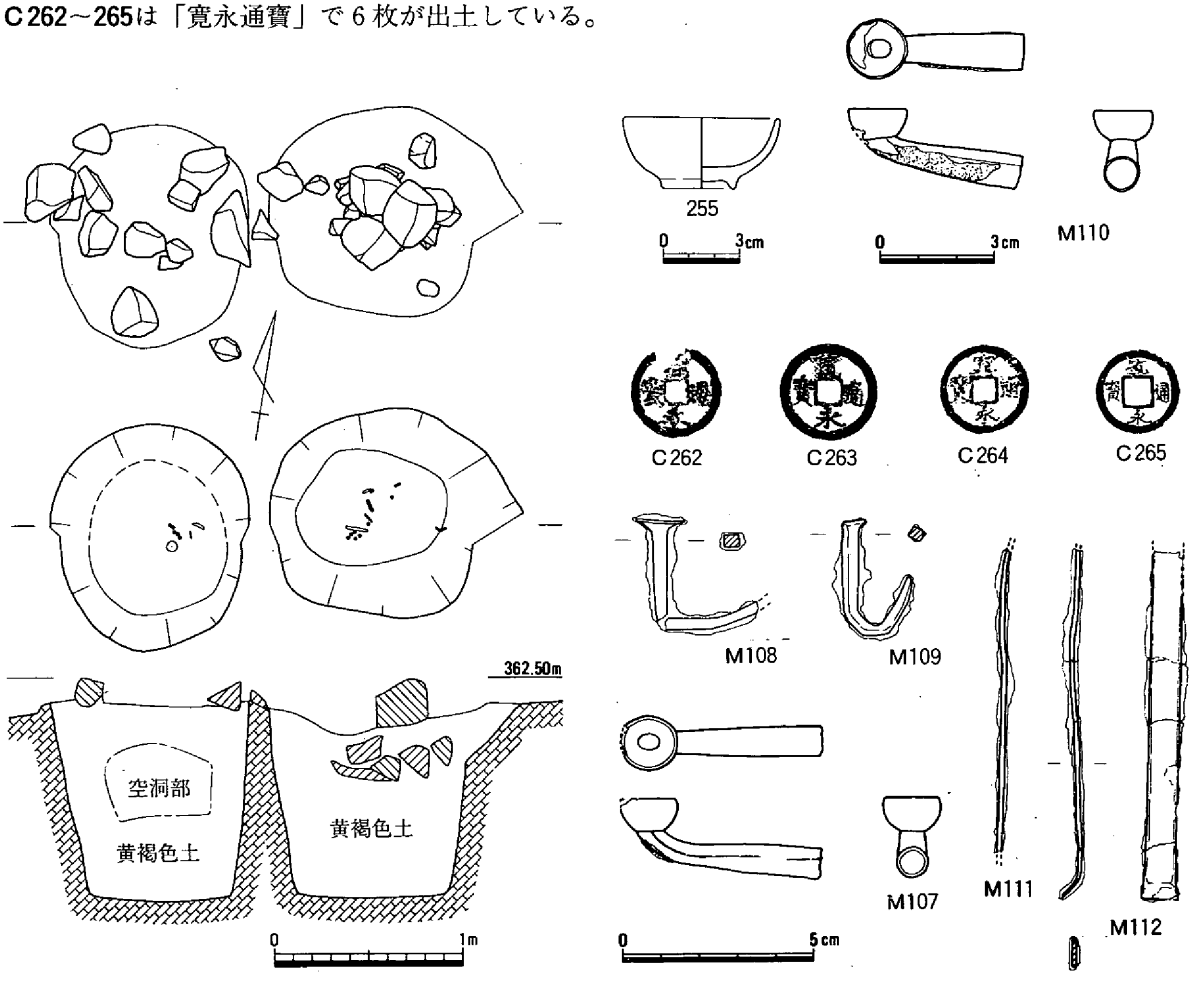


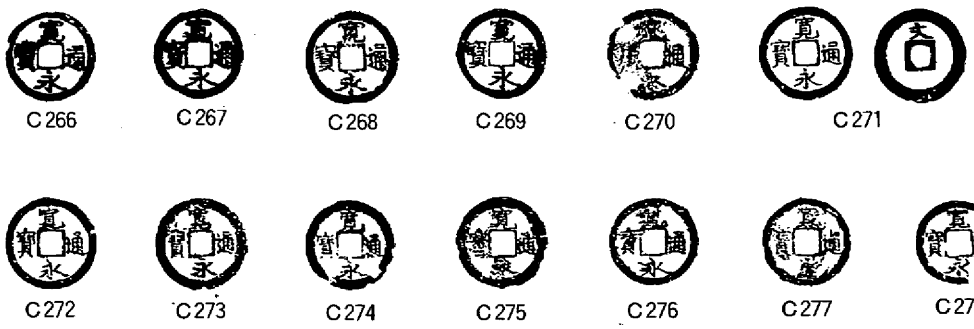
第158図　土壙墓141（1/40）・出土遺物（1/2・2/3）

るものである。検出面において15～50cm程度の石が出土した。石は掘方の中央部に平坦な面を上にして置かれていた。断面形は逆台形を呈する。壁は垂直に近い立ち上がりである。底面は平坦である。遺物は、**C259～261**は新「寛永通寶」で合計4枚出土している。**M105**は煙管の雁首、**M106**も煙管の吸い口である。**G5**はガラス製の辻玉で、孔が丁字に穿たれており数珠の一部と考えられる。

土壙墓142（第159図、図版59・84）

土壙墓141の東北東約50cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面において長径10～30cm程度の石が出土した。石は掘り方内に散在するが、本来は纏まりのある置き方をしていたと思われる。断面形は逆台形を呈するものである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。規模は長径120cm、短径105cm、深さ106cmを測る。遺物は、**255**が肥前白磁小杯、**M107**は煙管の雁首、**C262～265**は「寛永通寶」で6枚が出土している。





第159図　土壙墓142（左）・143（右）（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）

土壙墓143（第159図、図版83・84・86）

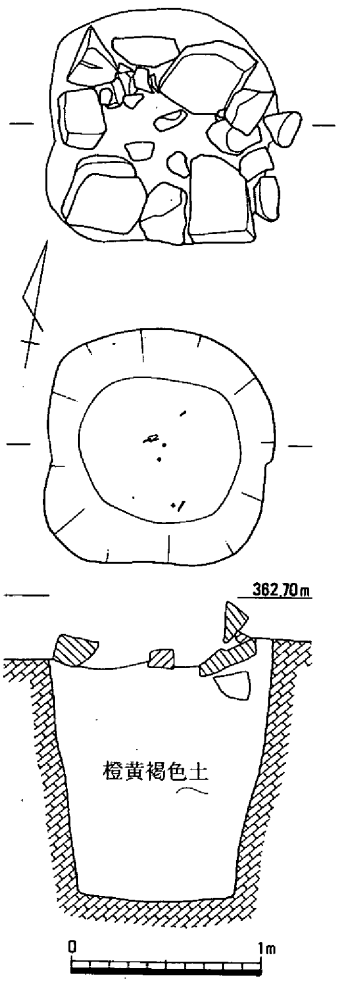
土壙墓142の東北東側にほとんど接する位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面において長径10～30cm程度の石が出土した。石は掘り方の中央に纏めて置かれていた。断面形は逆台形を呈するものである。壁は少し開きながら立ち上がり、底面は平坦である。規模は長径132cm、短径104cm、深さ102cmを測る。遺物は**M108・109**は角釘、**M110**は煙管の雁首、**M111**は毛抜、**C266～278**は「寛永通寶」で14枚が出土している。その内煙管、毛抜、古銭は底面に検出した。

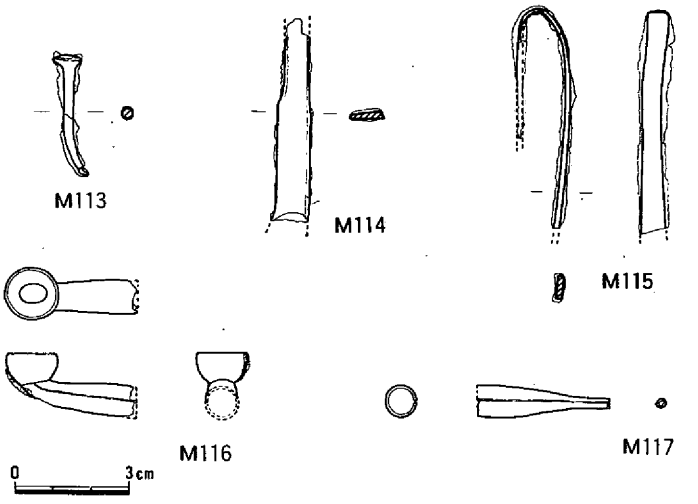
土壙墓144（第160図、図版59・83・84）

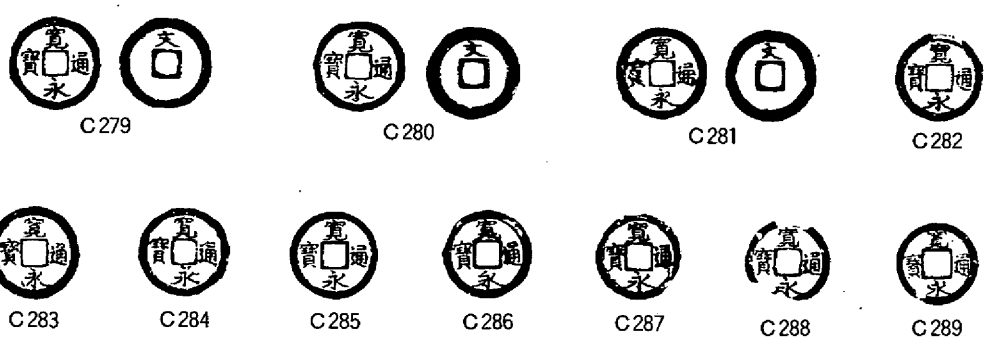
土壙墓143の東北東約10cmの位置に検出した。平面形は方形を呈する。検出面に長径20～40cm程度の石が出土した。石は掘り方内に方形の区画を構成するように置かれていた。断面形は逆台形を呈する。規模は長辺123cm、短辺120cm、深さ128cmを測る。遺物は、**M113**は角釘、**M114**は鋏、**M115**は毛抜き、**M116**は煙管の雁首、**M117**は煙管の吸い口、**C279～289**は「寛永通寶」で11枚が出土している。

土壙墓145（第161図）

土壙墓144の東北東約30cmの位置に検出した。平面形は円形を呈する。検出面に長径15～40cm程度の石を５、６個検出した。石は掘り方の内側にＬ字状に置かれていたもので、本来は方形に区画していたと考えられる。断面形は逆台形を呈し、壁は少し開い





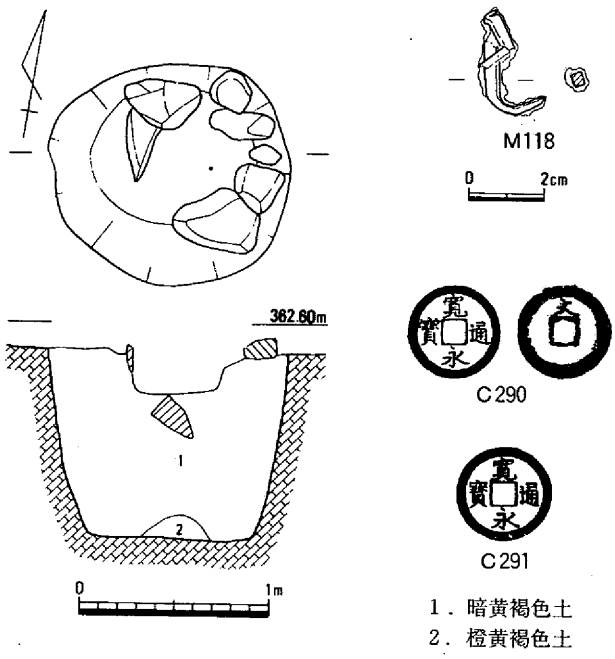


第160図　土壙墓144（１/40）・出土遺物（１/２）

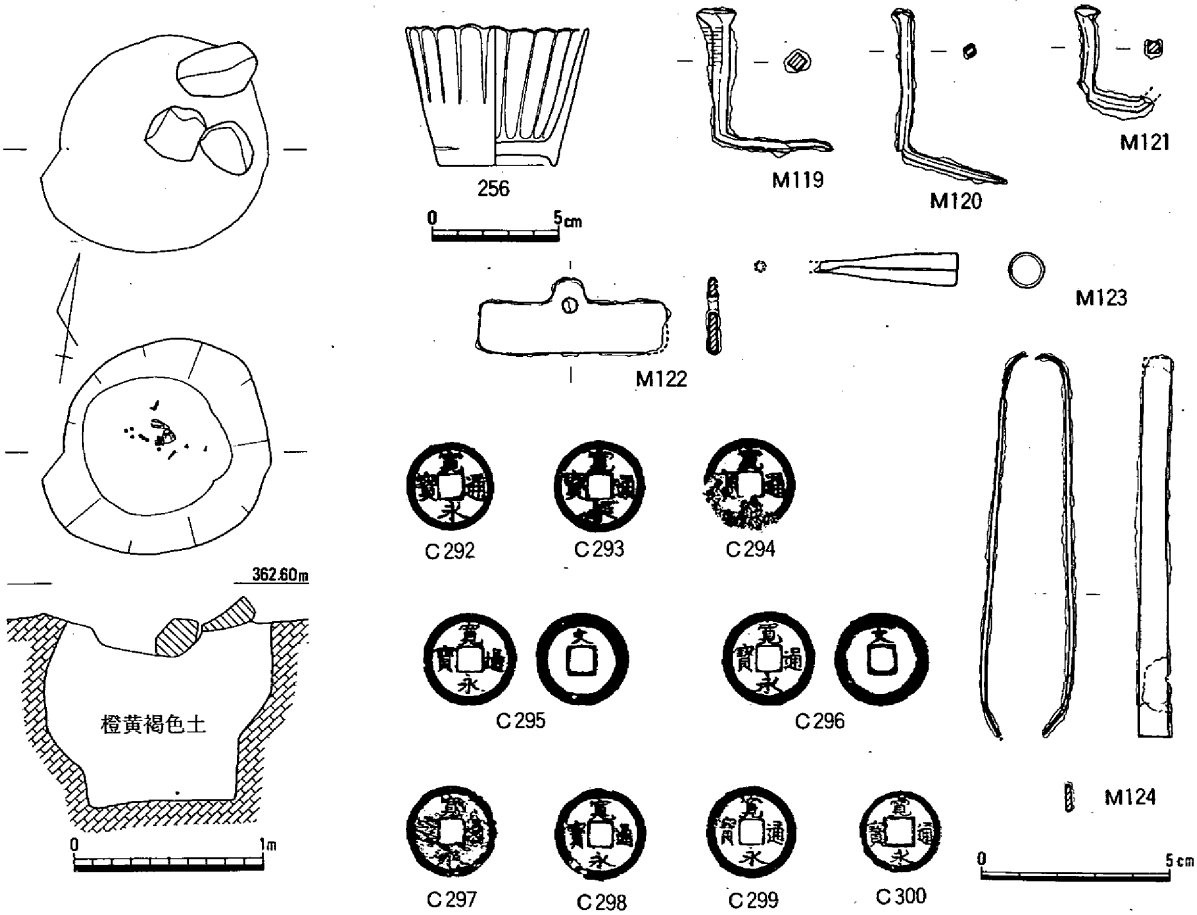
て立ち上がる。底面は平坦である。墓壙の規模は長径128cm、短径116cm、深さ100cmを測る。遺物は、**M118**の角釘、**C290・291**は「寛永通寶」で２枚が出土している。また、墓壙からは人骨を検出した。

土壙墓146（第162図、図版59・82・83）

土壙墓145の東北東約20cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面に３個の石が出土した。この石は掘り方の北寄りに置かれていた。断面の形状を観ると、平坦な底面から垂直に立ち上がる壁はすぐに球形に膨らむものである。墓壙の規模は長径120cm、短径97cm、深さ117cmを測る。遺物は、**256**は肥前白磁、**M119～121**は角釘、**M122**は火打金、**M123**は煙管の吸い口、**M124**は毛抜き、**C292～C300**は「寛永通寶」で13枚出土している。



第161図　土壙墓145（１/40）・出土遺物（１/２）



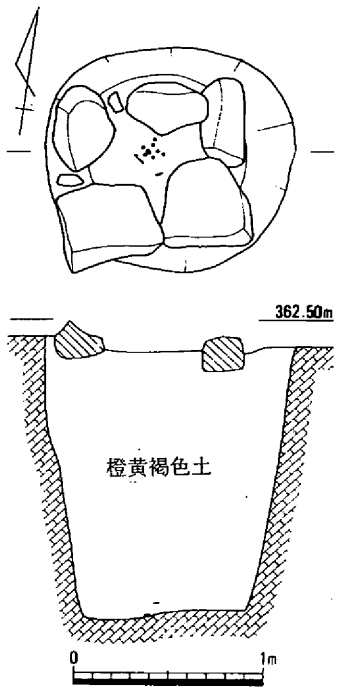
第162図　土壙墓146（１/40）・出土遺物（１/３・１/２）

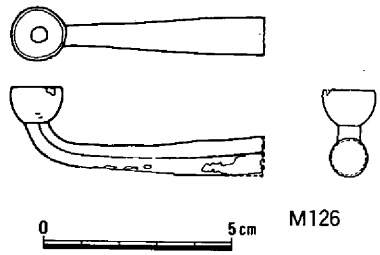
土壙墓147（第163図、図版60・84・86）

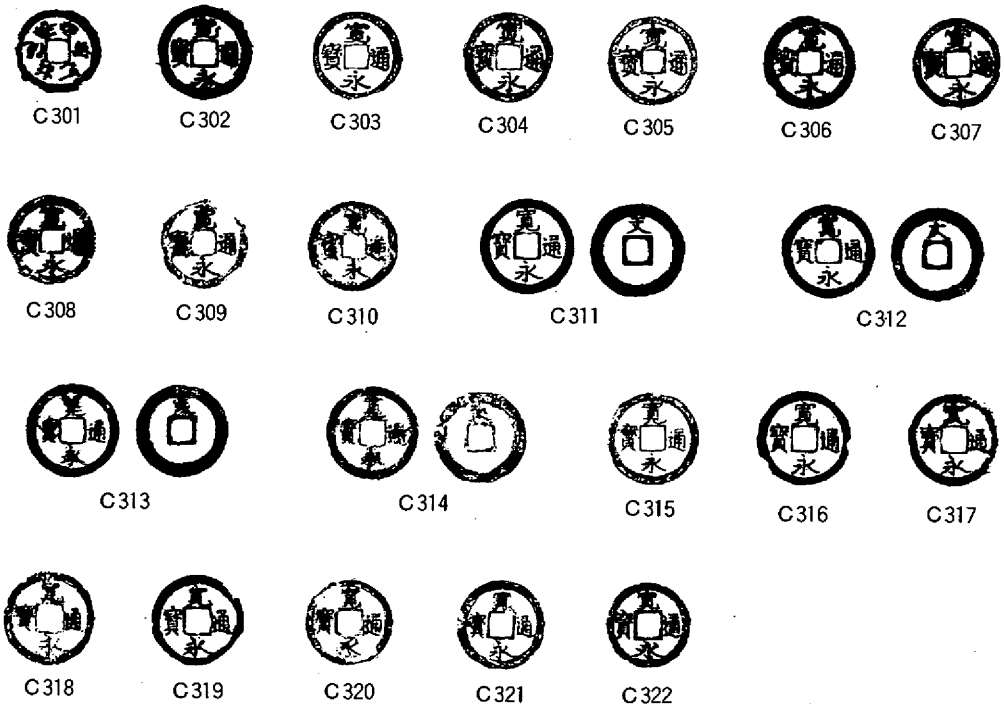
土壙墓146の東北東約30cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面で５個の長径40～50cm程度の石が出土した。石は掘り方内に外郭が方形になるように配置されている。断面形は逆台形を呈するものである。壁は垂直に近い立ち上がりを見せており、底面は平坦である。規模は長径131cm、短径113cm、深さ150cm、底面での直径約85cmを測る。遺物は、**M125**は毛抜き、**M126**は煙管の雁首、**C301～322**は「寛永通寶」で23枚が出土している。

土壙墓148（第164図）

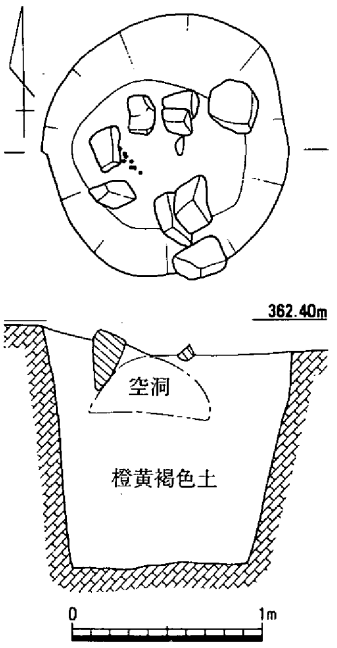
土壙墓147の東北東約210cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面に８～９個の石が出土したが、散在するものである。断面形は逆台形を呈するものである。壁は垂直に近い立ち上がりを見せており、底面は平坦である。規模は長径140cm、短径132cm、深さ126cm、底面での直径約90cmを測る。遺物としては、**C323～336**は「寛永通寶」で合計16枚と角釘が出土している。

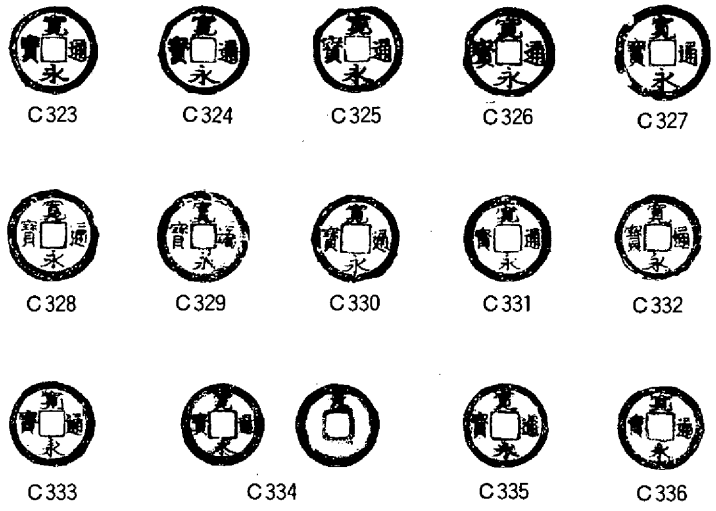






第163図　土壙墓147（１/40）・出土遺物（１/２）





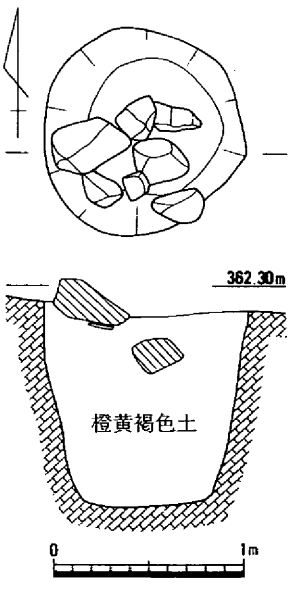
第164図　土壙墓148（１/40）・出土遺物（１/２）

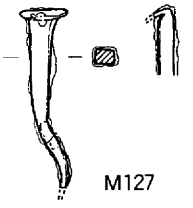
土壙墓149（第165図）

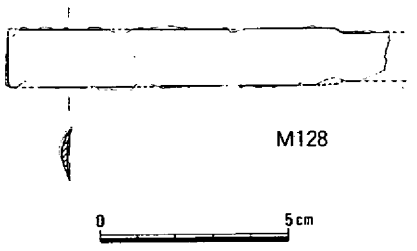
土壙墓148の東北東約80cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面において長径15～40cm程度の石を６、７個検出した。石は掘り方の中央から南側に纏まった状態である。本来は区画を構成するように配置されていたものと推定される。断面形は逆台形を呈するものある。壁は少し開きながら立ち上がるもので、底面は平坦である。墓壙の規模は長径109cm、短径106cm、深さ110cm、底面の長径は約70cmを測る。遺物としては、**M127**は鉄製の角釘がある。釘の頭部は端部を偏平にした後に折り曲げたものである。**M128**は用途不明の鉄製品である。幅1.5cm、長さ10cm以上のもので、断面形は三日月形を呈するものである。

土壙墓150（第166図）

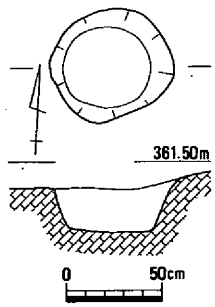
土壙墓149の西南西約17ｍの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。断面形は逆台形を呈するもので、壁は少し開きながら立ち上がり、底面は平坦である。墓壙の規模は長径66cm、短径60cm、深さ28cmを測る。この規模は他の墓壙に比べて小さく、土葬墓の可能性は少ないものと考えられる。



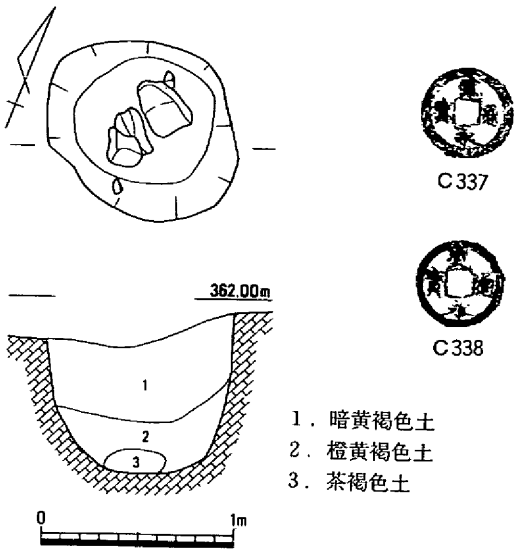




第165図　土壙墓149（１/40）・出土遺物（１/２）



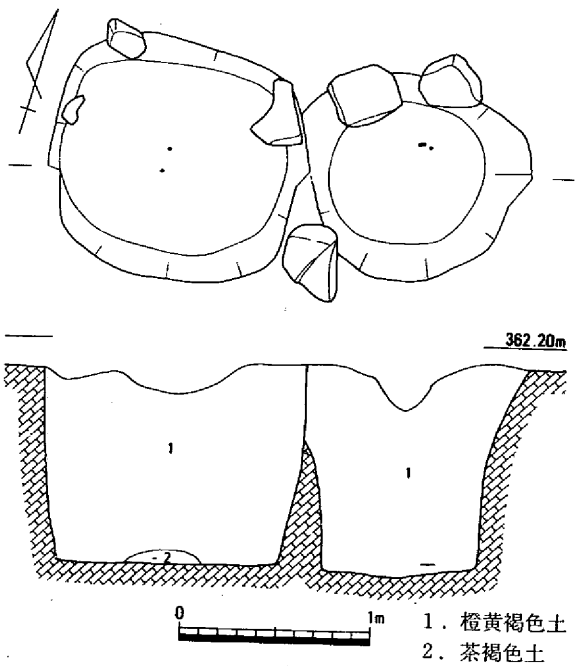
第166図　土壙墓150（１/40）



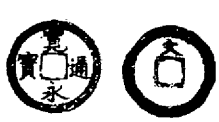
C337

C338

第167図　土壙墓151（１/40）
・出土遺物（１/２）



C339


C340

C341

C342

C343

C344

C345

C346

C347

第168図　土壙墓152（左）・153（右）（１/40）
・152出土遺物（１/２）

土壙墓151（第167図）

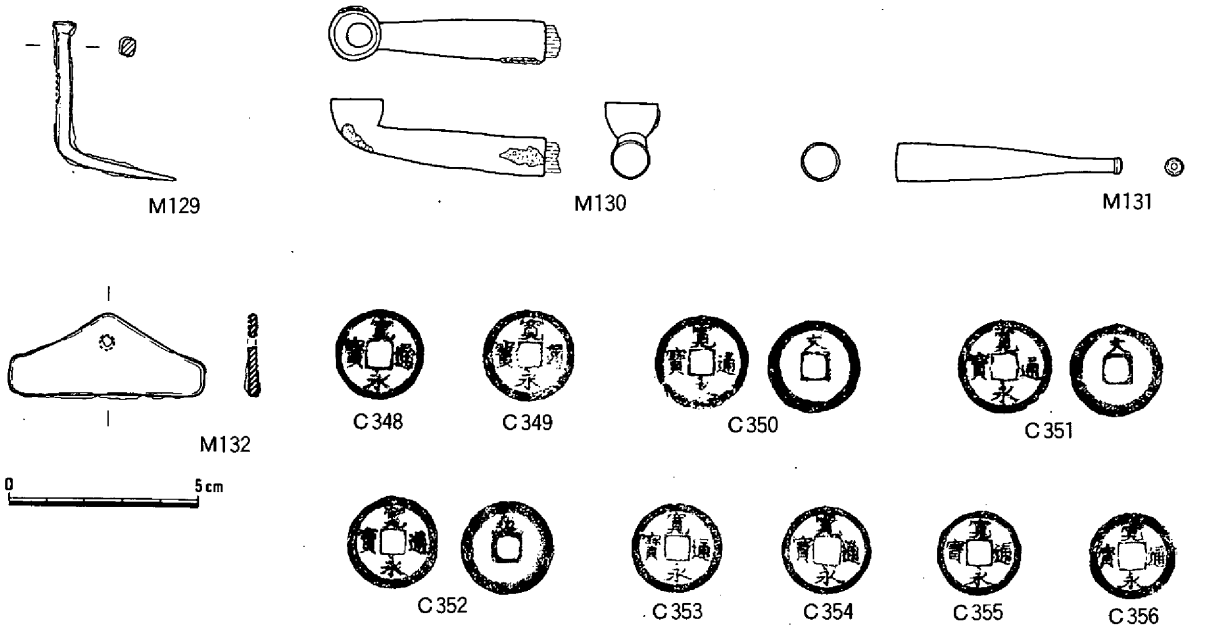
土壙墓150の東約150cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面に３個の石が出土した。石は掘り方の中央に置かれるものである。断面形は逆台形を呈するものであるが、壁は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。底面も少し弧を描くように窪むものである。墓壙の規模は長径100cm、短径96cm、深さ87cmを測る。遺物としては**C337・338**の「寛永通寶」がある。「寛永通寶」は４枚出土しているが、全て「新寛永」とされるものである。

土壙墓152（第168図、図版86）

土壙墓151の北東約90cmの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。検出面において３個の石が出土した。石は掘り方の外郭線上に平坦面を外に向けて置かれていた。本来はその間にも石を置き方形の区画を形成していたものと考えられる。断面形は逆台形を呈するものであるが、壁はほとんど垂直に近い立ち上がりを見せている。底面は平坦である。墓壙の規模は長辺135cm、短辺127cm、深さ108cmを測る。遺物は**C339～347**の「寛永通寶」が14枚出土している。

土壙墓153（第168・169図、図版60・82）

土壙墓152の東側に一部重複して検出した。断面観察の状況から、この墓壙が切られており古い。平面形は円形を呈する。検出面において２個の石が出土した。石は掘り方の外郭線上に置かれるものである。本来はさらに石を用いて区画を構成したと考えられる。断面形は逆台形を呈するが、壁の底部付近は垂直に近いが、途中から少し開く。規模は長径128cm、短径110cm、深さ111cm、底面の直径約80cmを測る。遺物は、**M129**は釘、**M130**は煙管の雁首、**M131**は煙管の吸い口、**M132**は火打金、**C348～356**は「寛永通寶」で13枚出土している。



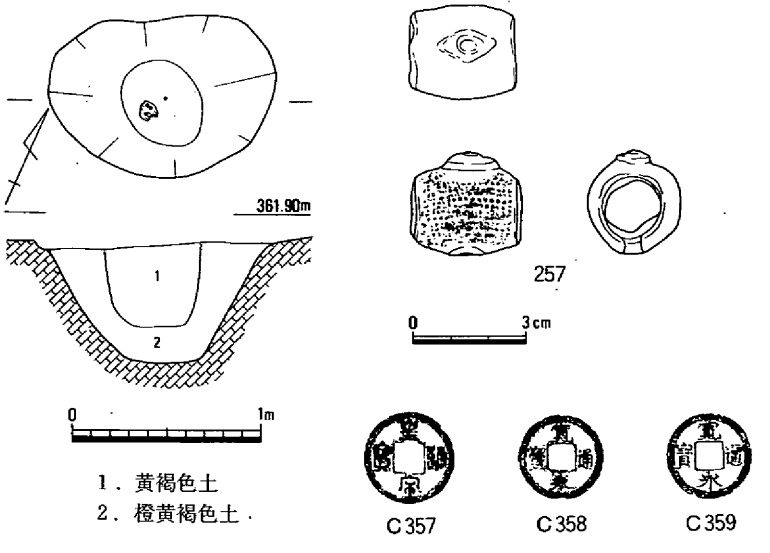
第169図　土壙墓153出土遺物（１/２）

土壙墓154（第170図、図版80）

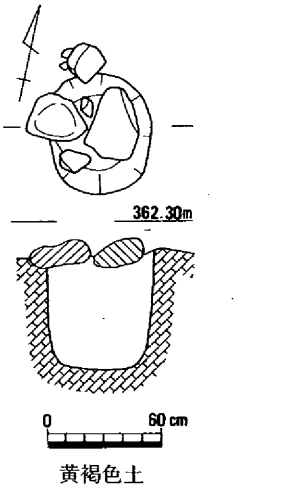
土壙墓153の南東約30cmの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するものである。断面形は椀形を呈している。壁は大きく開きながら立ち上がるもので、底面はほぼ平坦である。規模は長径120cm、短径85cm、深さ64cm、底部の長径50cmを測るものである。遺物は、**257**は土製の小槌、**C357**は渡来銭、**C358・359**は「寛永通寶」が出土している。古銭は合計6枚が出土している。

土壙墓155（第171図）

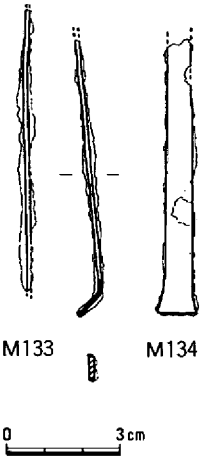
土壙墓154の東約230cmの位置に検出した。検出面において数個の偏平な石が出土した。石は掘り方の全面を覆うものではないが、蓋をする状態で置かれていた。断面形は隅丸の方形を呈している。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。墓壙の規模は長径64cm、短径56cm、深さ65cmを測る。この墓壙も他のものに比べて小さく、成人の土葬墓としての可能性はないものと考えられる。

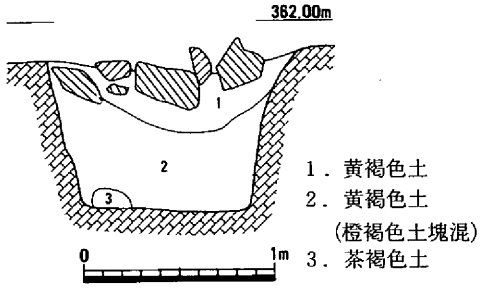


第170図　土壙墓154（１/40）・出土遺物（１/２）



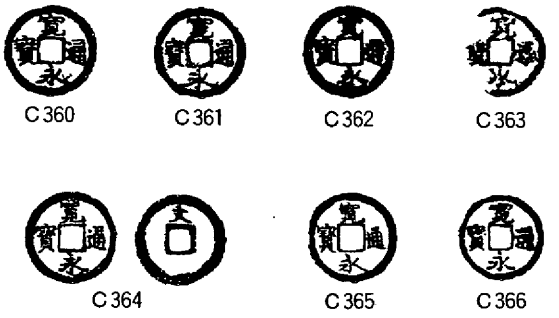
第171図　土壙墓155（１/40）

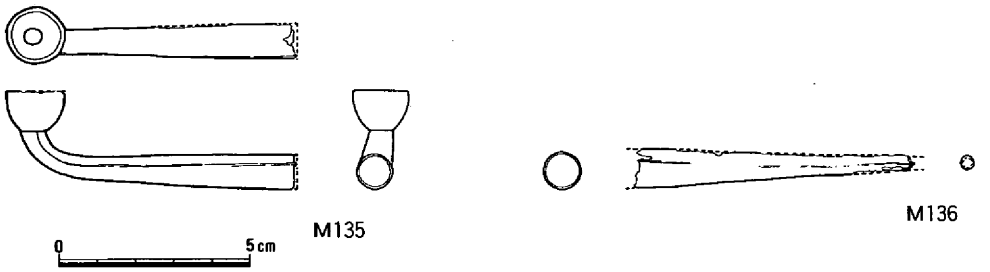




土壙墓156（第172図、図版60）

土壙墓155の西南西約450cmの位置に検出した。平面形は方形を呈する。検出面に石が出土した。石は墓壙の上面を覆うように置かれており、南面には面を揃える部分もみられ、本来は掘り方全体を方形に覆うものと考えられる。断面形は逆台形を呈するもので、底面は平坦である。墓壙の規模は、長径131cm、短径104cm、深さ85cmを測る。遺物は、毛抜き、煙管、「寛永通寶」７枚、棺金具が出土している。





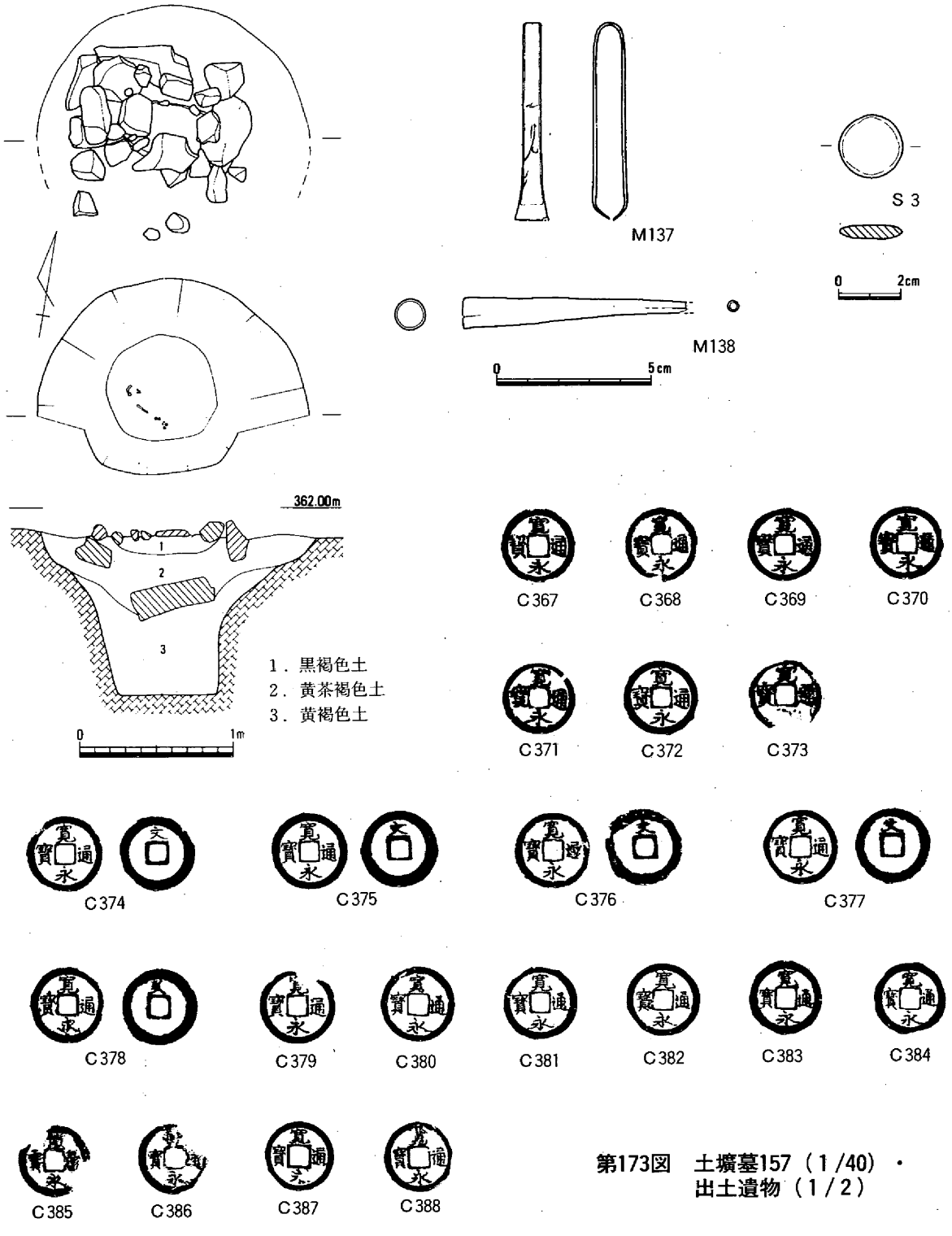
第172図　土壙墓156（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓157（第173図、図版61・83・86）

土壙墓156の東約30cmの位置に検出した。平面形は円形を呈する。検出面に石の纏まりを検出した。石は掘り方の中央部に方形に敷き詰められ、一辺120cmを測る。断面形を観ると壁は底面から40～50cmまでは垂直に近い立ち上がりで、それより上方は大きく開くものである。底面は平坦である。規模は長径176cm、短径140cm、深さ109cm、底面の直径は約70cmを測る。遺物は、**M137**は毛抜き、**M138**は煙管の吸い口、**S３**は碁石、**C367～388**は「寛永通寶」で22枚出土している。

土壙墓158（第174図、図版61）

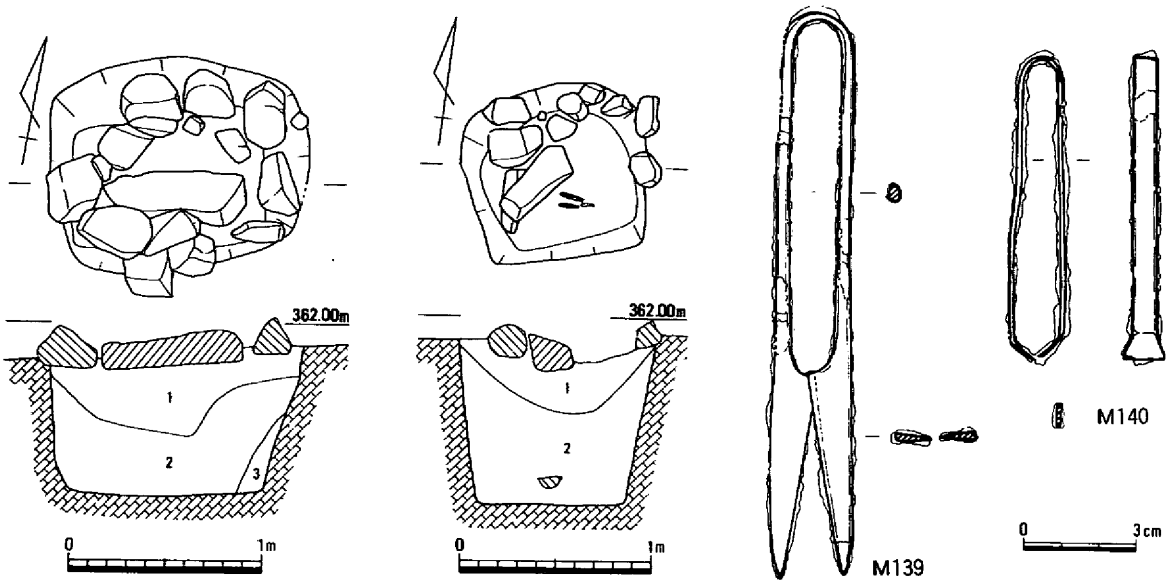
土壙墓157の東約30cmの位置に検出した。平面形は長方形に近い楕円形を呈している。検出面において10数個の石が出土した。石は長方形を意識して敷き詰めるように配置したものと見られ、上部に構造物を考慮したものと考えられる。断面形は逆台形を呈している。壁は少し開きながら立ち上がる。底面は平坦であり、その平面形は長方形を呈している。墓壙の規模は長径136cm、短径112cm、深さ78cmを測る。底面の規模は、長辺100cm、短辺約75cmを測るものである。



第173図　土壙墓157（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓159（第174図、図版83）

土壙墓158の東約30cmの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。検出面において10個程の石が出土した。石は掘り方の外郭線に沿って並ぶ状態である。南側は検出されなかったが、本来は方形に区画するように配置されていたものと考えられる。断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。規模は、両辺ともに98cm、深さ88cmを測る。遺物は**M139**の和鋏、**M140**の毛抜きが出土している。また、図示していないが煙管、漆片も出土している。



１．黄褐色土　２．黄褐色土（橙褐色土塊混）　３．橙黄褐色土

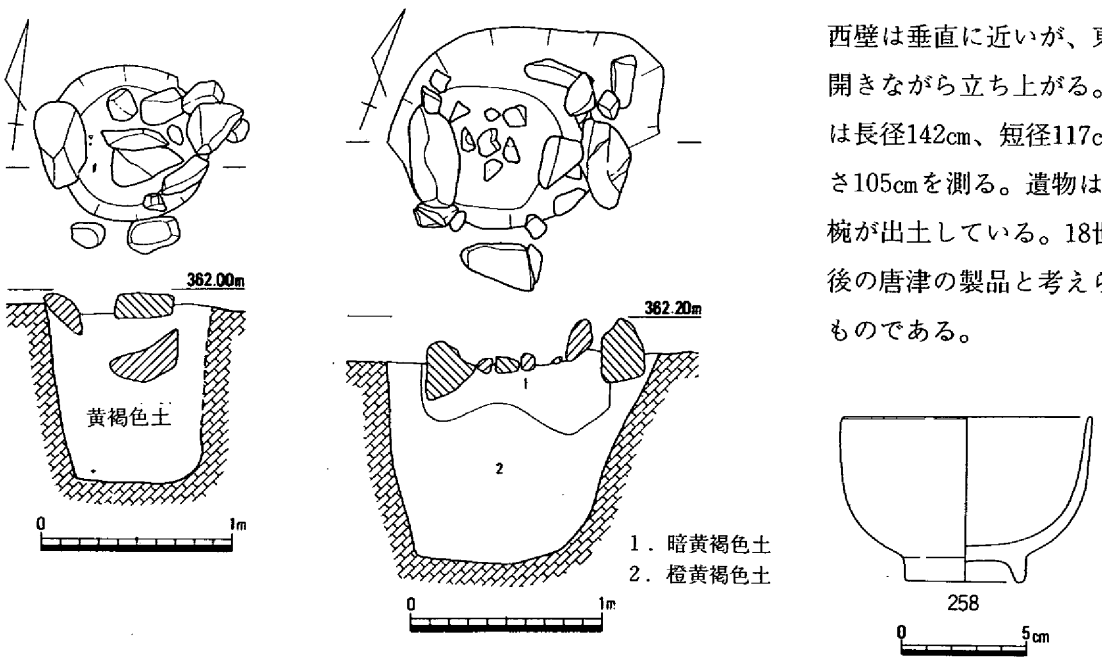
第174図　土壙墓158（左）・159（右）（１/40）・159出土遺物（１/２）

土壙墓160（第175図、図版61）

土壙墓159の東約30cmの位置に検出した。平面形は円形を呈する。検出面に10数個の石が出土した。石は掘り方内に纏まりを見せるが、本来の形状は残していない。断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。規模は長径86cm、短径83cm、深さ93cmを測る。遺物は煙管が出土した。

土壙墓161（第175図）

土壙墓160の東北東約15cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面に石が出土した。石の配置をみると、方形の外郭を想定させるものがある。断面形は逆台形を呈し、底面は少し窪むもののほぼ平坦である。西壁は垂直に近いが、東壁は開きながら立ち上がる。規模は長径142cm、短径117cm、深さ105cmを測る。遺物は**258**の椀が出土している。18世紀前後の唐津の製品と考えられるものである。



第175図　土壙墓160（左）・161（右）（１/40）・161出土遺物（１/３）

土壙墓162（第176図、図版62）

土壙墓161の東約30cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面に多数の石が出土した。石は掘り方の内側に纏まりをみせるもので、東と西の側面に直線的な並びを見せている。断面形は底面の角が丸いため深鉢形を呈している。壁は垂直に近い立ち上がりであり、底面は少し窪むものである。規模は長径140cm、短径120cm、深さ100cmを測る。遺物は**M141・142**の毛抜き、**M143**の煙管の雁首、**M144**の煙管の吸い口、**C389～391**の「寛永通寶」が出土している。

土壙墓163（第177図、図版82）

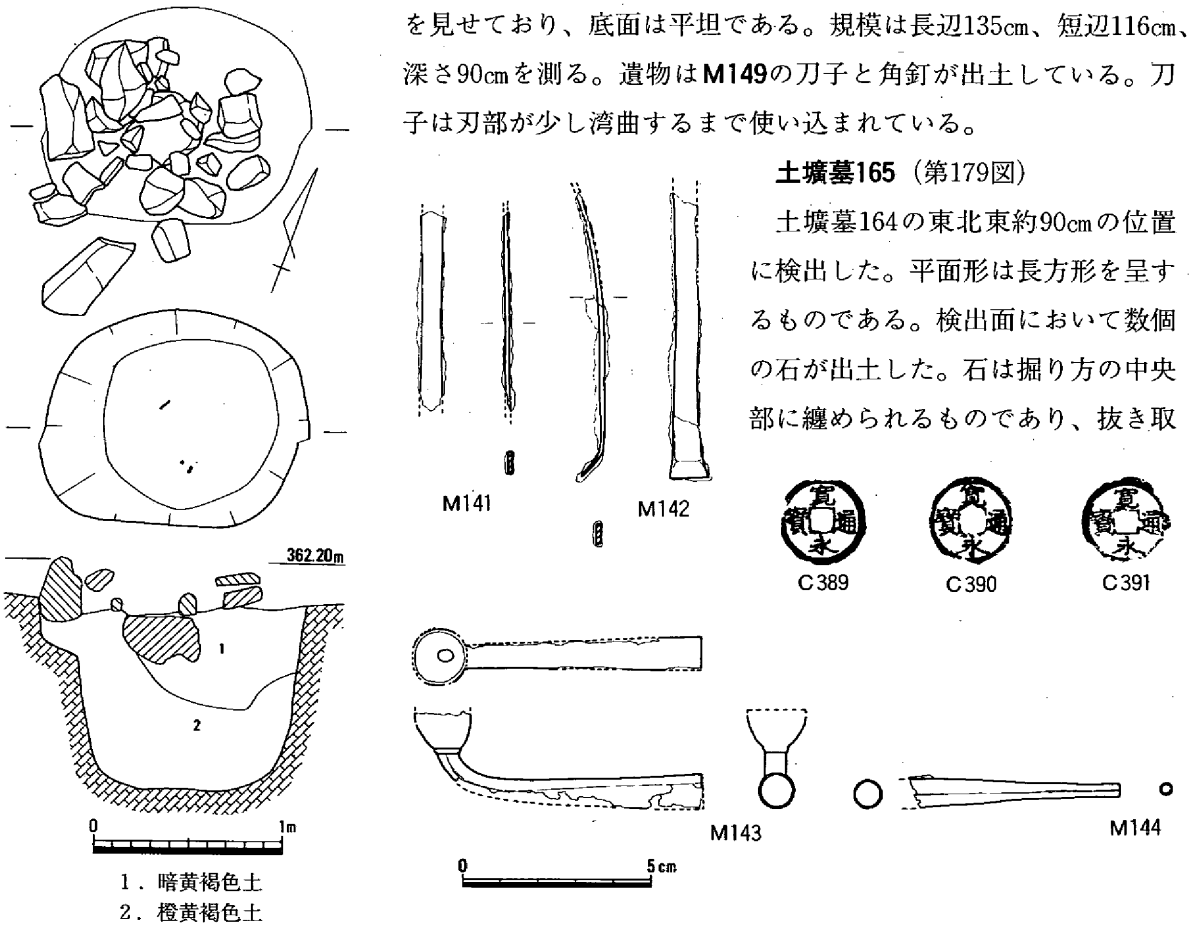
土壙墓162の東北東約30cmの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。検出面に多数の石が出土した。石は、掘り方内の南寄りに纏まっており、西と北の側面に直線的な並びが見られる。本来は方形に区画して石を敷き詰めたものと考えられる。断面形は逆台形を呈するもので、壁は垂直に近い立ち上がりを呈しており、底面は平坦である。規模は長辺153cm、短辺134cm、深さ110cm、底面での長辺106cm、短辺90cmを測る。遺物は、**259**は白磁猪口、**M145・146**は角釘、**M147**は毛抜き、**M148**は火打金、**C392～398**は「寛永通寶」で７枚や煙管が出土している。

土壙墓164（第178図、図版82）

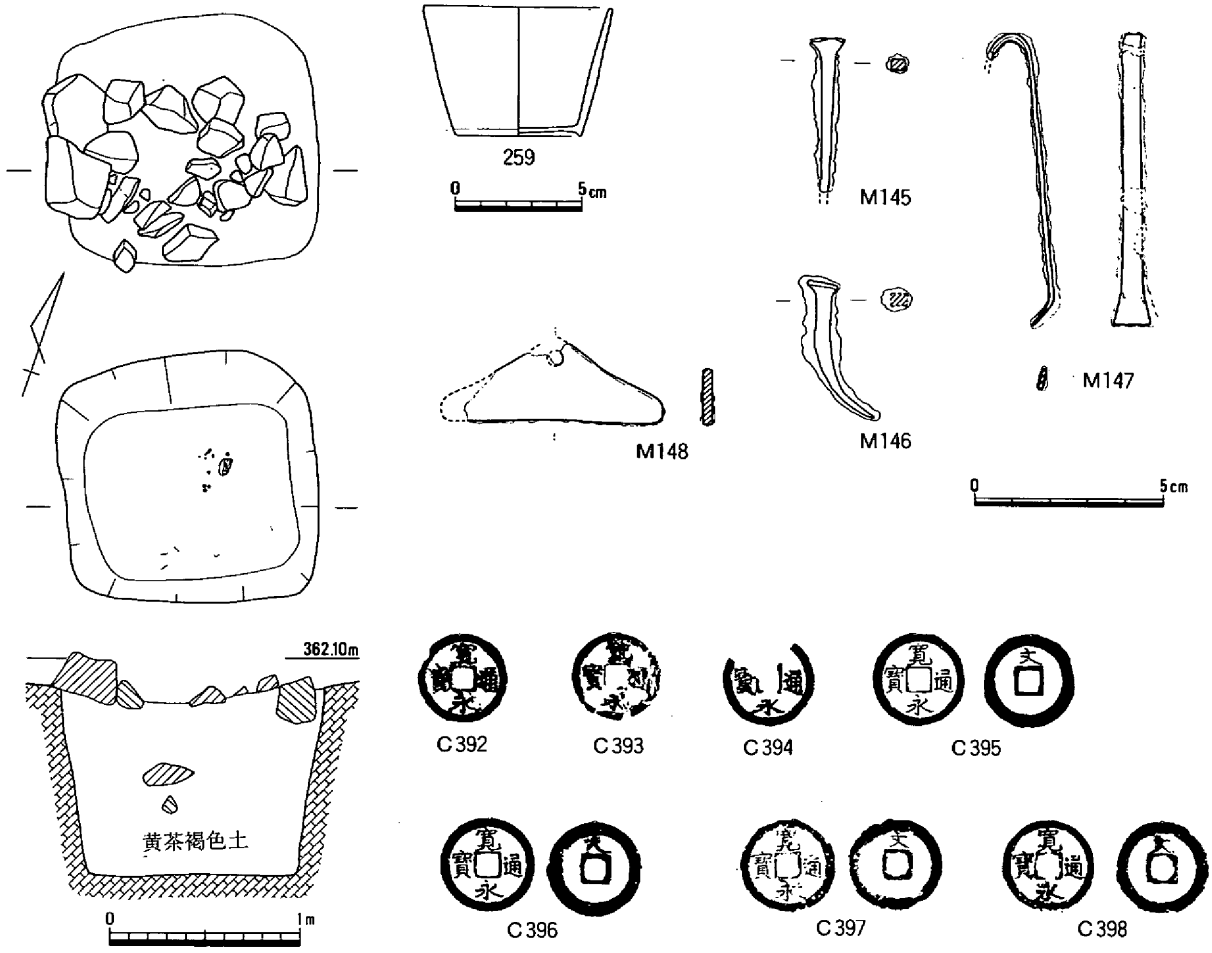
土壙墓163の東北東約30cmの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。検出面に多くの石が出土した。石は掘り方の外郭線いっぱいに置かれるもので、東、西、南に直線的な石の並びを見ることができる。この事は本来はほぼ掘り方の大きさに、方形の区画に石を敷き詰めたものと考えられる。断面形は逆台形を呈しており、壁は垂直に近い立ち上がりを見せており、底面は平坦である。規模は長辺135cm、短辺116cm、深さ90cmを測る。遺物は**M149**の刀子と角釘が出土している。刀子は刃部が少し湾曲するまで使い込まれている。

土壙墓165（第179図）

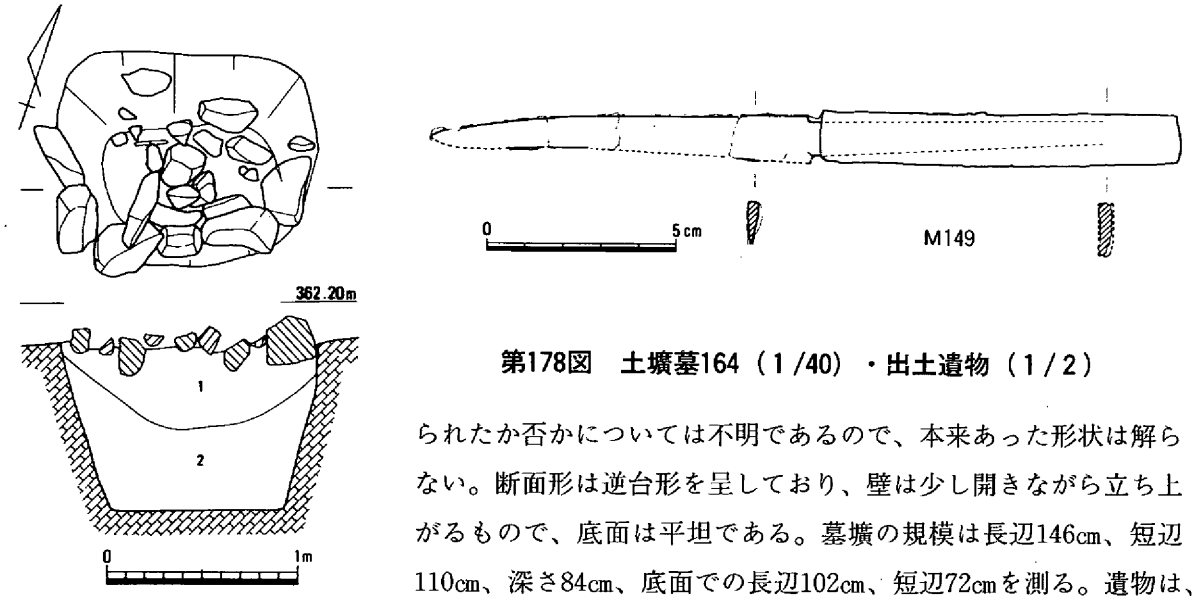
土壙墓164の東北東約90cmの位置に検出した。平面形は長方形を呈するものである。検出面において数個の石が出土した。石は掘り方の中央部に纏められるものであり、抜き取



第176図　土壙墓162（１/40）・出土遺物（１/２）



第177図　土壙墓163（１/40）・出土遺物（１/３・１/２）



１．黄茶褐色土
２．橙黄褐色土

第178図　土壙墓164（１/40）・出土遺物（１/２）

られたか否かについては不明であるので、本来あった形状は解らない。断面形は逆台形を呈しており、壁は少し開きながら立ち上がるもので、底面は平坦である。墓壙の規模は長辺146cm、短辺110cm、深さ84cm、底面での長辺102cm、短辺72cmを測る。遺物は、角釘と煙管が出土している。

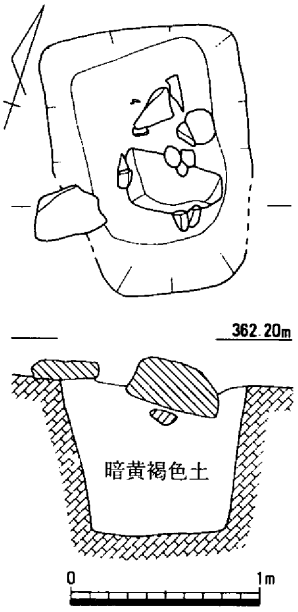
土壙墓166（第180図、図版62）

土壙墓165の西南西約28ｍの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。検出面において４個の石が出土した。石は長径約40cm程度の偏平なものであり、掘り方の北東側に置かれるものであ

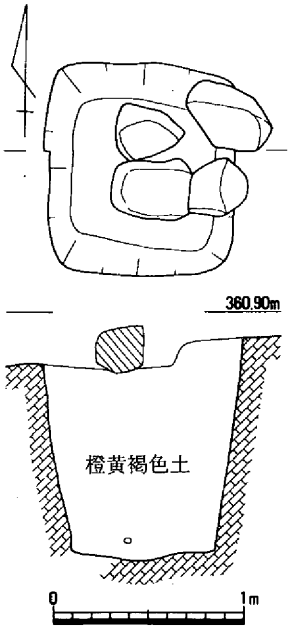
る。断面形は逆台形を呈するもので、壁は少し開きながら立ち上がるものである。底面は平坦であるが、中央が少し窪む。規模は長辺113cm、短辺104cm、深さ118cm、底面の辺は約76cmを測る。遺物は**C399～406**は「寛永通寶」で、新寛永のみが９枚、鉄銭１枚と角釘が出土している。

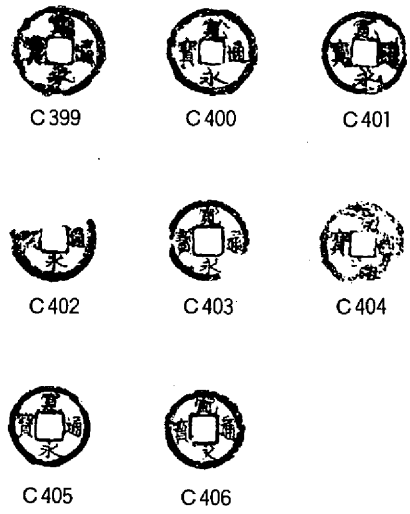
土壙墓167（第181図）

土壙墓166の東約30cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面において２個の偏平な石が出土した。石は掘り方の中央に検出したもので、中心に向けて落ち込む状態であった。その状態は本来墓壙の中央に平らに置かれていたものが、棺の腐朽による地表面の陥没によるものと考えられる。断面形は逆台形を呈するもので、底面は平坦である。規模は長径119cm、短径107cm、深さ94cm、底面での直径87cmを測る。遺物は**M150**は煙管の吸い口、**M151**は角釘、**C407～410**は「寛永通寶」で４枚出土している。

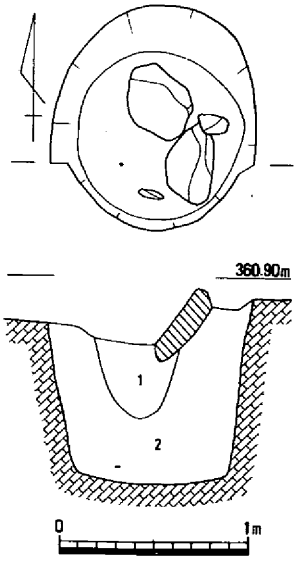


第179図　土壙墓165（１/40）

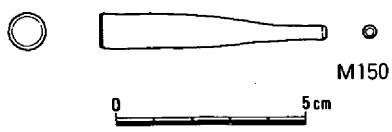


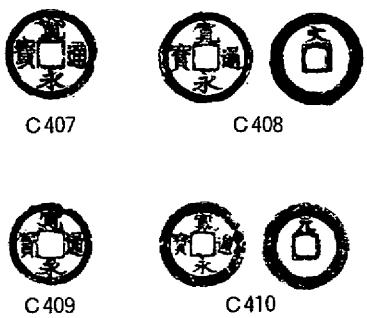


第180図　土壙墓166（１/40）・出土遺物（１/２）

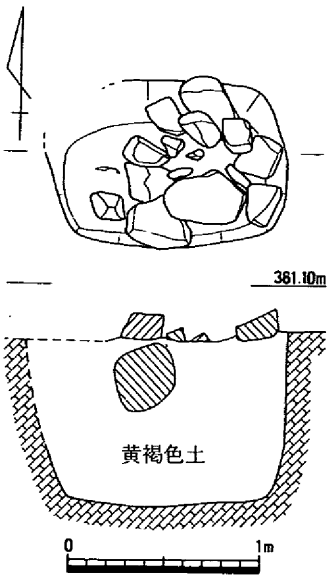


１．茶褐色土
２．橙黄褐色土



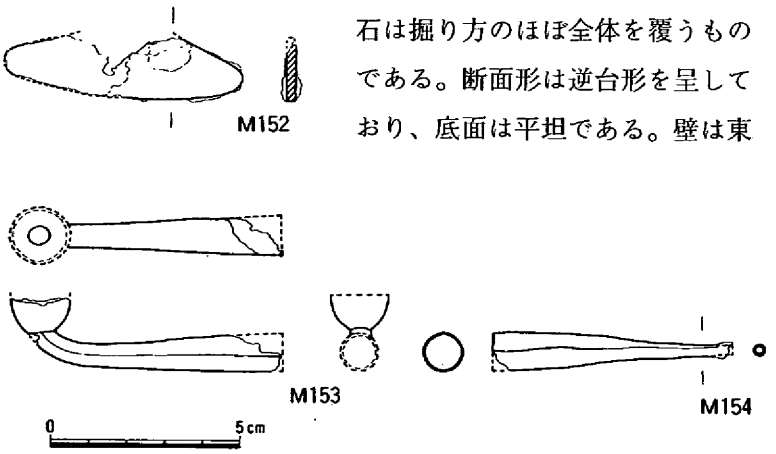


第181図　土壙墓167（１/40）・出土遺物（１/２）



土壙墓168（第182図、図版62・82・84）

土壙墓167の東約45cmの位置に検出した。平面形は長方形を呈する。検出面に多くの石が出土した。石は掘り方のほぼ全体を覆うものである。断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。壁は東

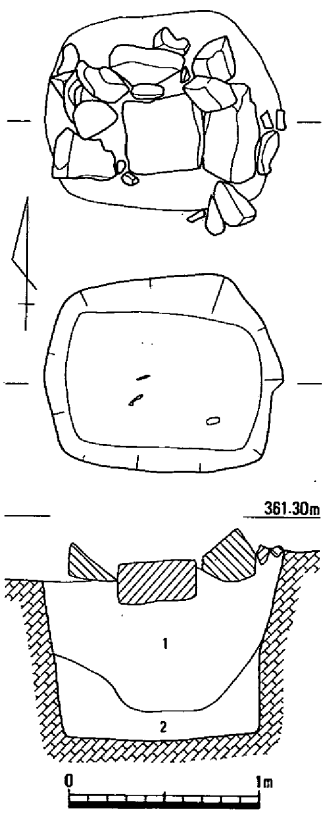


第182図　土壙墓168（１/40）・出土遺物（１/２）

側は垂直に近く、西側は少し開きながら立ち上がる。規模は長径128cm、短径88cm、深さ138cmを測る。遺物は、**M152**の火打金、**M153**の煙管の雁首、**M154**の煙管の吸い口が出土している。

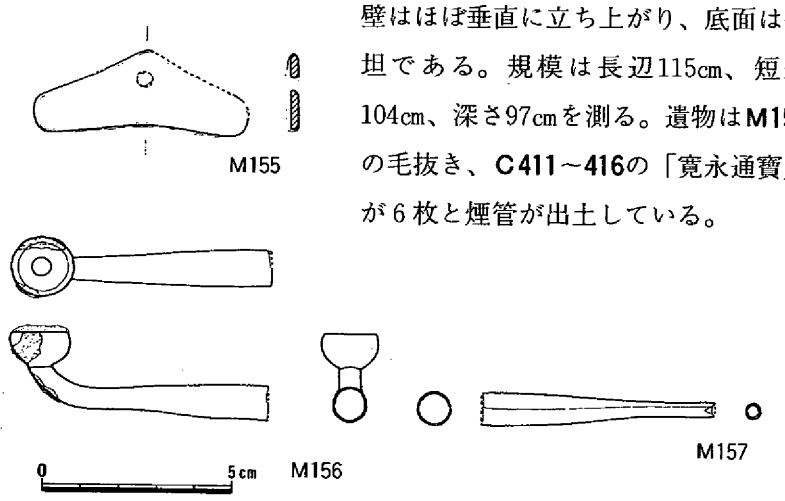
土壙墓169（第183図、図版63・82・84）

土壙墓168の東約40cmの位置に検出した。平面形は方形を呈する。検出面に石が出土した。40cm四方の偏平な石を中央に、それを囲むように敷き詰められる。断面形は矩形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。規模は長辺124cm、短辺105cm、深さ120cmを測る。遺物は**M155**の火打金、**M156・157**は煙管の雁首と吸い口が出土している。



土壙墓170（第184図、図版83）

土壙墓169の東約50cmの位置に検出した。平面形は長方形を呈する。検出面に10数個の石が出土した。石は掘り方の内側に纏まりを見せるが乱雑で、明瞭な区画は見られない。断面形は矩形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。規模は長辺115cm、短辺104cm、深さ97cmを測る。遺物は**M158**の毛抜き、**C411～416**の「寛永通寶」が６枚と煙管が出土している。



第183図　土壙墓169（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓171（第184図、図版63）

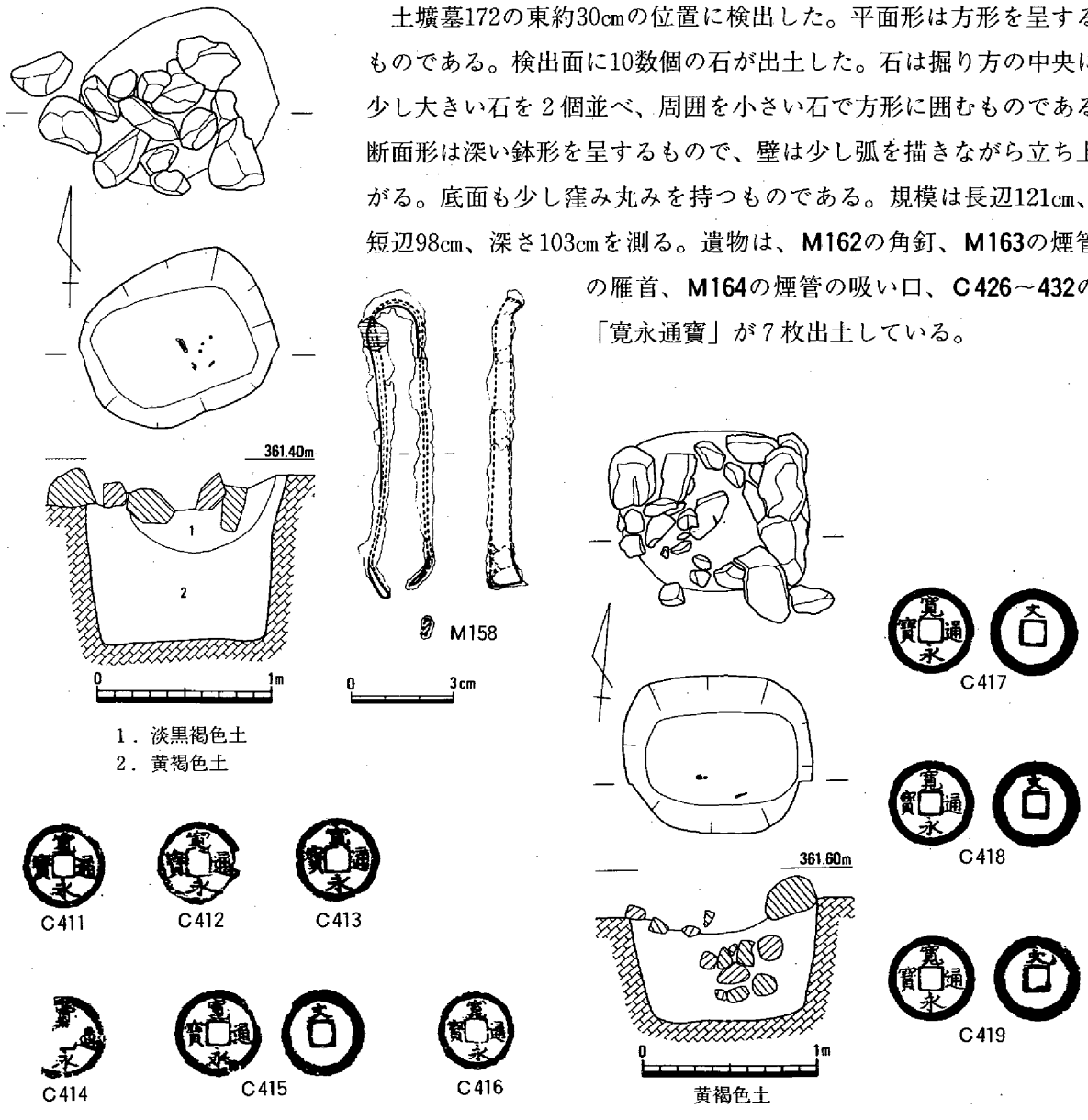
土壙墓170の東約30cmの位置に検出した。平面形は長方形を呈する。検出面に約20個の石が出土した。石は掘り方のほぼ全面を覆う。元は方形を呈していたと考えられ、北と東に直線的に並ぶものがある。断面形は逆台形を呈し、壁は少し開きながら立ち上がり、底面は平坦である。規模は長辺106cm、短辺91cm、深さ69cmを測る。遺物は**C417～419**の「寛永通寶」が３枚出土している。

土壙墓172（第185図、図版83・84）

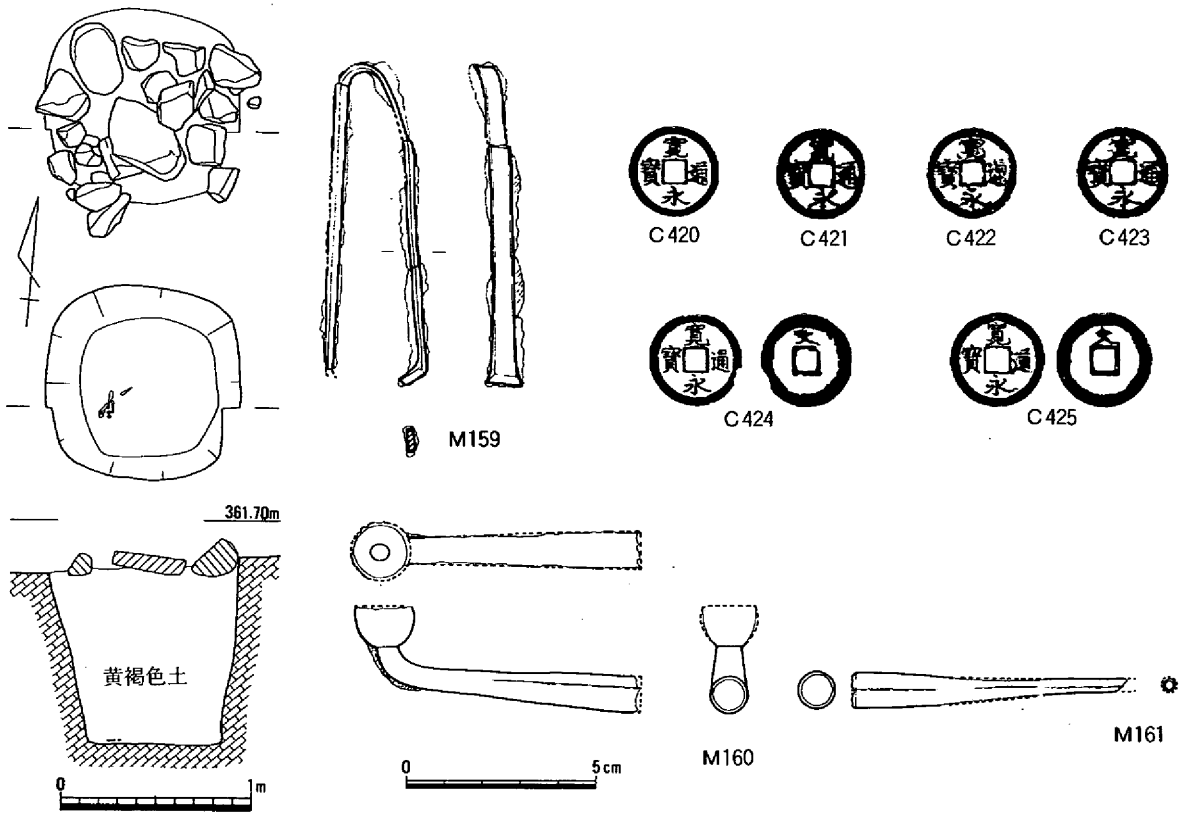
土壙墓171の東約30cmの位置に検出した。平面形は方形を呈する。検出面に約20個の石が出土した。石は掘り方の全体を覆うものである。北側に直線的に並ぶものが見られることは、元は方形を呈していたものと推定される。断面形は逆台形を呈し、壁は少し開く。底面は平坦で、副葬された遺物を検出した。規模は長辺103cm、短辺101cm、深さ100cmを測る。遺物は、**M159**の毛抜き、**M160**の煙管の雁首、**M161**の煙管の吸い口、**C420～425**の「寛永通寶」が７枚と角釘が出土した。

土壙墓173（第186図、図版63・84）

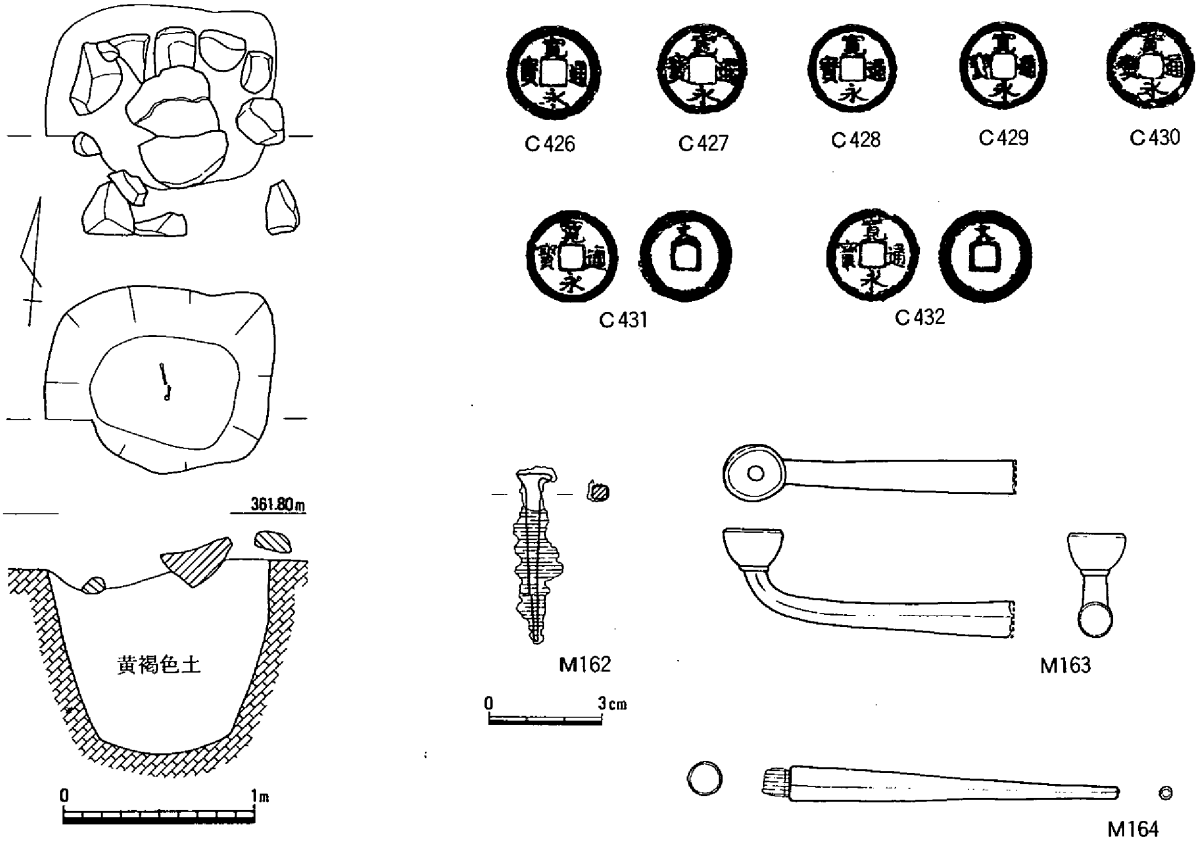
土壙墓172の東約30cmの位置に検出した。平面形は方形を呈するものである。検出面に10数個の石が出土した。石は掘り方の中央に少し大きい石を２個並べ、周囲を小さい石で方形に囲むものである。断面形は深い鉢形を呈するもので、壁は少し弧を描きながら立ち上がる。底面も少し窪み丸みを持つものである。規模は長辺121cm、短辺98cm、深さ103cmを測る。遺物は、**M162**の角釘、**M163**の煙管の雁首、**M164**の煙管の吸い口、**C426～432**の「寛永通寶」が７枚出土している。



第184図　土壙墓170（左）・171（右）（1/40）・出土遺物（1/2）



第185図　土壙墓172（１/40）・出土遺物（１/２）



第186図　土壙墓173（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓174（第187図）

土壙墓173の東約30cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面において10数個の石が出土した。石は掘り方の内部に乱雑ではあるが纏まるものであるが、元の形状は不明である。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。壁は西は垂直に近いが、東は少し開く。規模は長径109cm、短径105cm、深さ62cmを測る。遺物としては、煙管が出土している。

土壙墓175（第188・189図、図版84）

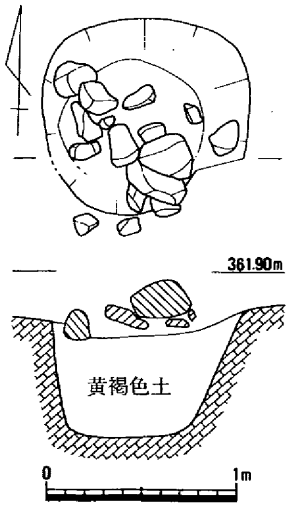
土壙墓166の南西約100cmの位置に検出した。平面形は円形を呈するものである。検出面において４個の石が出土した。石は北と南に別れて掘り方の線上に検出した。そのため、石の本来の配置は不明である。断面形は矩形を呈するもので、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。規模は長径170cm、短径120cm、深さ123cm、底面の直径88cmを測る。遺物は、**M165**は煙管の雁首、**M166**は煙管の吸い口、**C433・434**は「寛永通寶」で合計６枚、さらに鉄銭が２枚出土している。

土壙墓176（第188・190図、図版64・81・84）

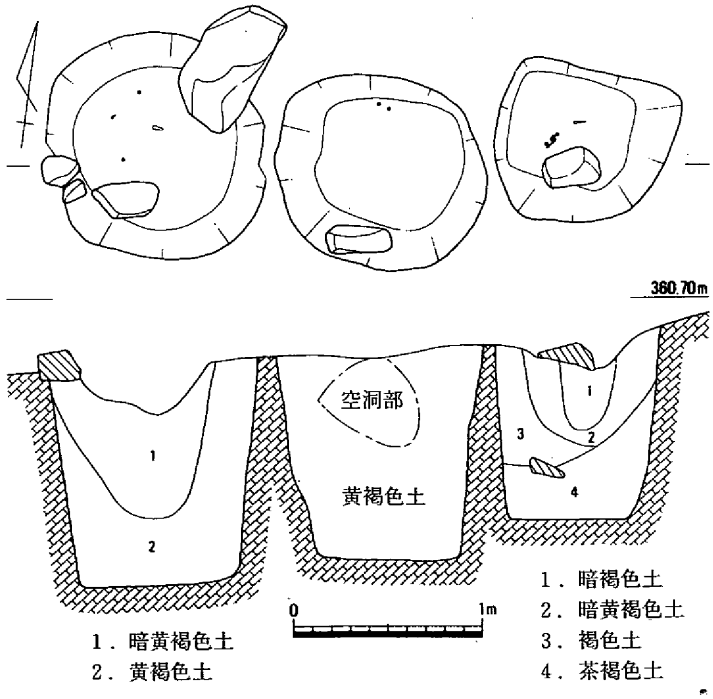
土壙墓175の東に隣接して検出した。平面形は方形を呈する。検出面において１個の石が出土した。石は掘り方の南辺の中央部に検出した。断面形は逆台形を呈し、壁は少し開きながら立ち上がり、底面は平坦である。規模は長辺112cm、短辺100cm、深さ112cmを測る。遺物は、**M167～193**は角釘、**M194・195**は煙管の雁首と吸い口、**C435・436**は「寛永通寶」でほかに鉄銭１枚が出土した。

土壙墓177（第188・191図、図版81）

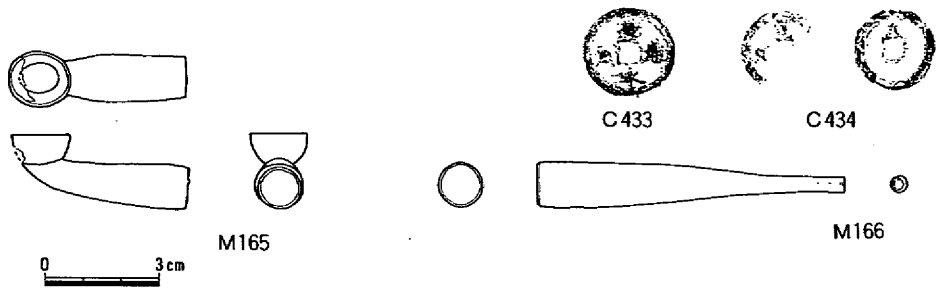
土壙墓176の東に隣接して検出した。平面形は方形を呈するものである。検出面において１個の石が出土した。石は掘り方の中央部やや南寄りに検出した。断面形は逆台形を呈しており、壁は垂直に近い立ち上がりであり、底面は平坦である。規模は長辺95cm、短辺88cm、深さ101cmを測る。遺物は、**M196～219**は角釘、**M220**は煙管の雁首、**M221**は煙管の吸い口、**C437～445**は「寛永通寶」で９枚、ほかに鉄銭５枚、**260**は18世紀前半と考えられる染付小碗が出土している。（井上）



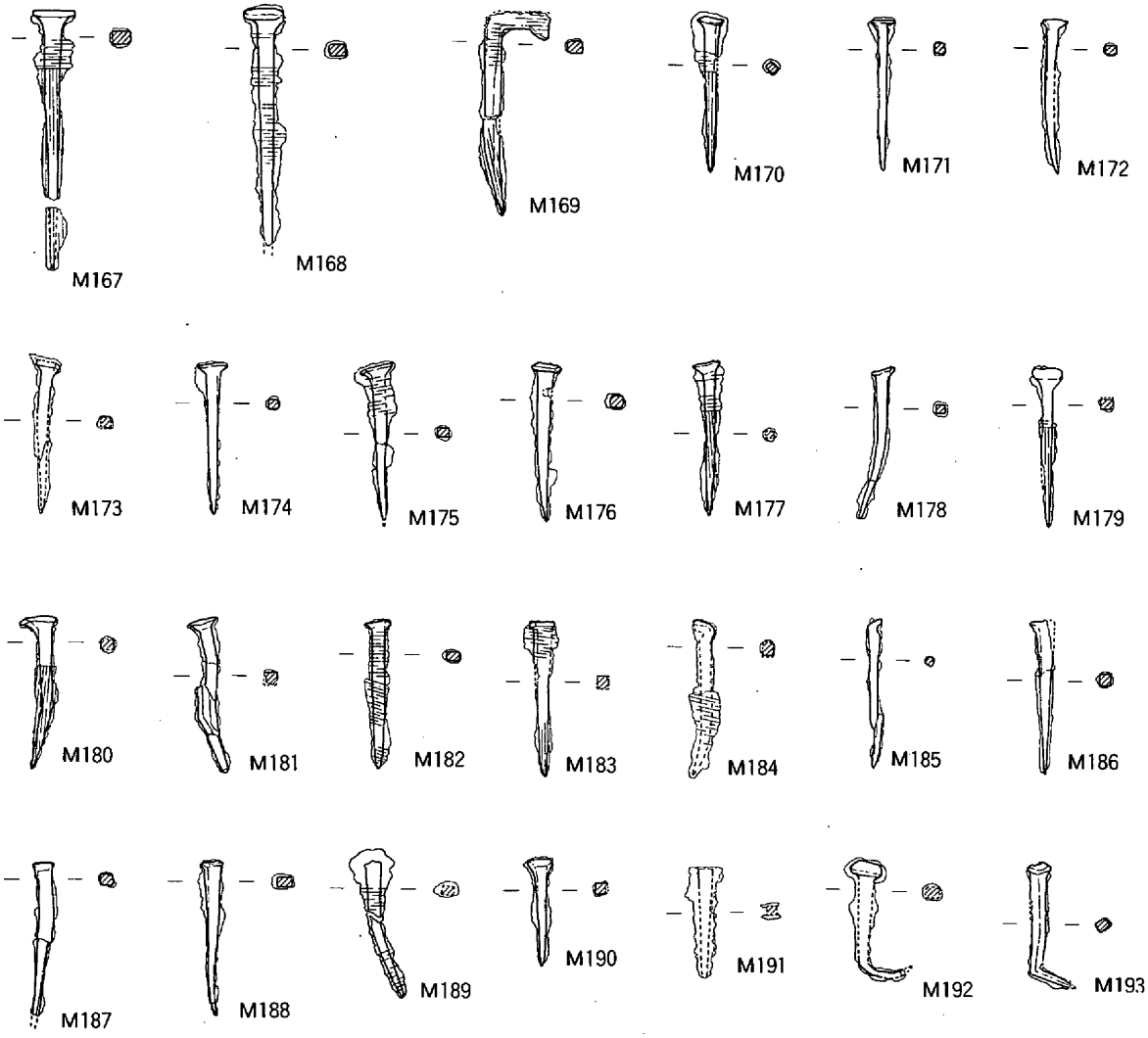
第187図　土壙墓174
（１/40）

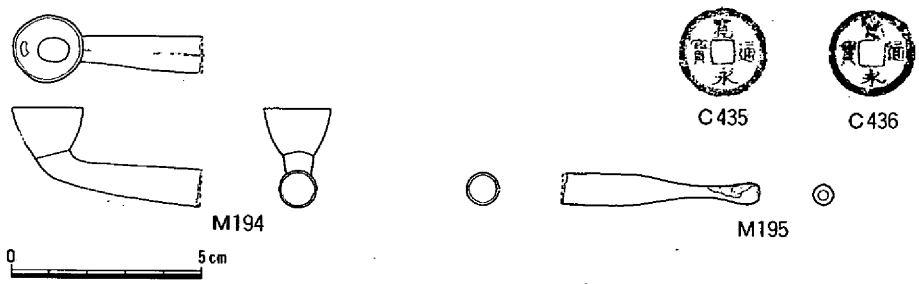


第188図　土壙墓175（左）・176（中）・177（右）（１/40）

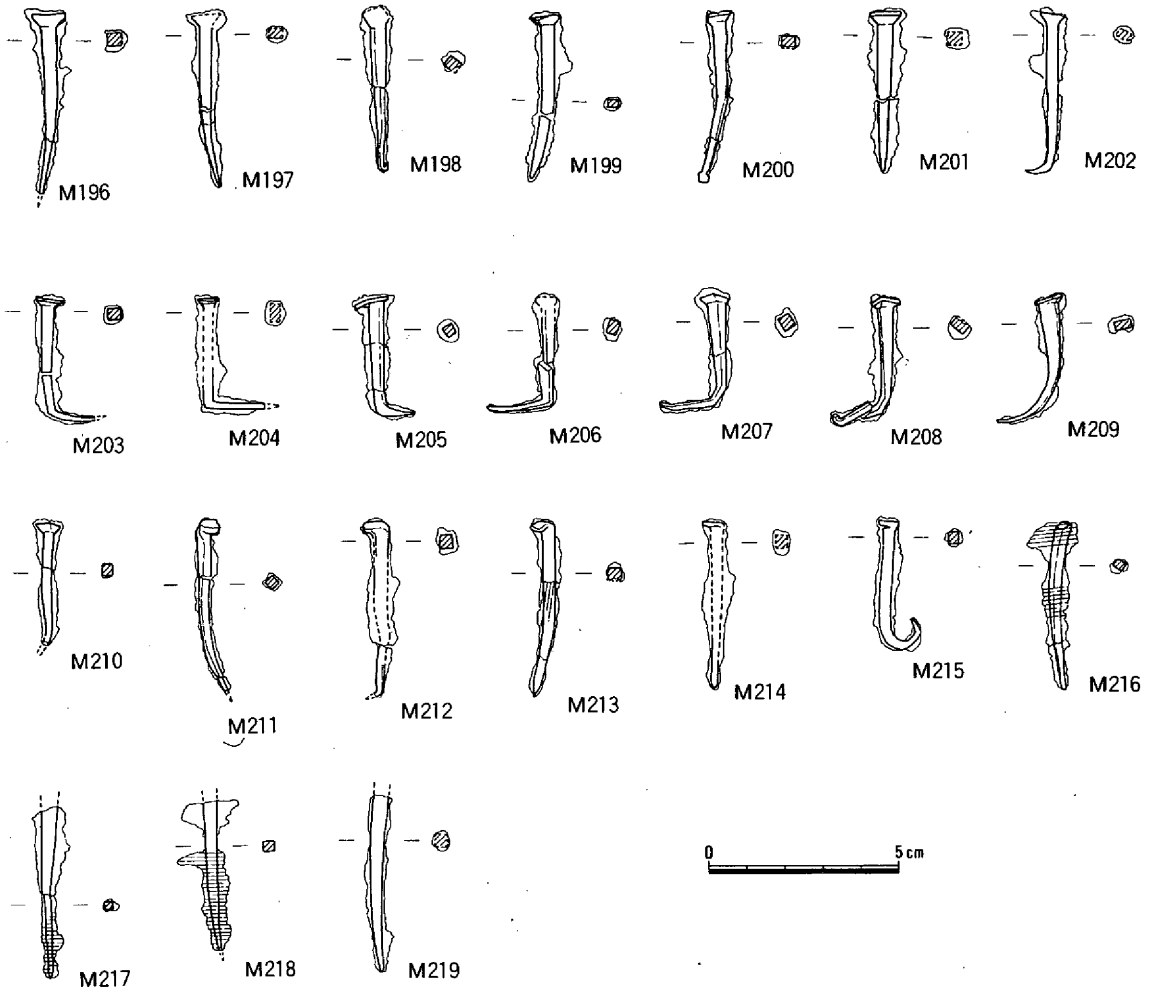


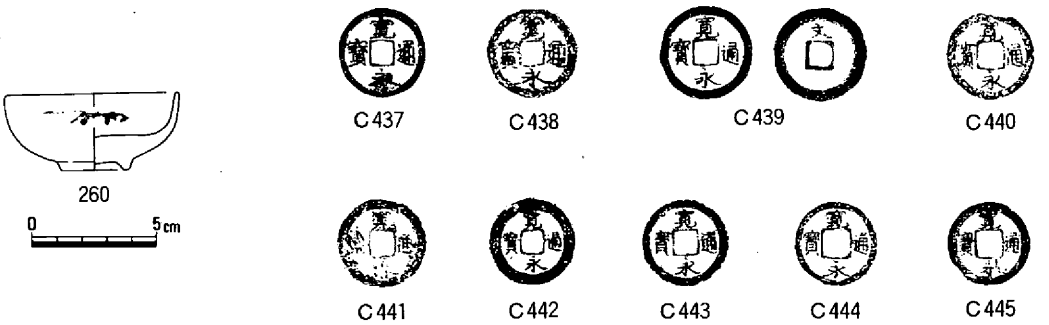
第189図　土壙墓175出土遺物（１/２）

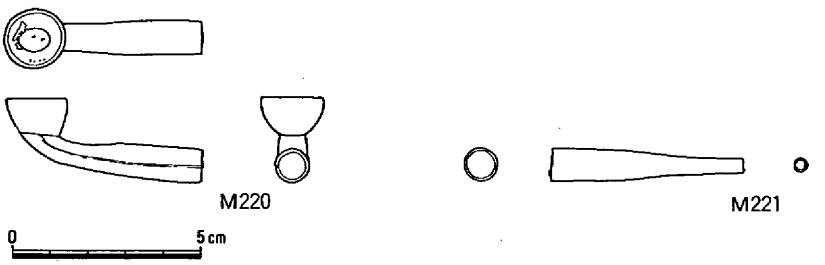




第190図　土壙墓176出土遺物（１/２）







第191図　土壙墓177出土遺物（１/２・１/３）

土壙墓178（第192図、図版81）

Ｇ３区で検出された。土壙墓175からこの土壙墓178までの４基が１列をなし、その列の東端に位置する。検出面での墓壙掘り方の平面形は126×106cmの南北に長い方形を呈する。深さは80cm残存していた。また、上面では30cm大の角礫があったが、原状をとどめず、散逸していた。墓壙掘り方の形状から棺が組み合わせの方形をなしていた可能性があるが、棺痕跡等は不明である。

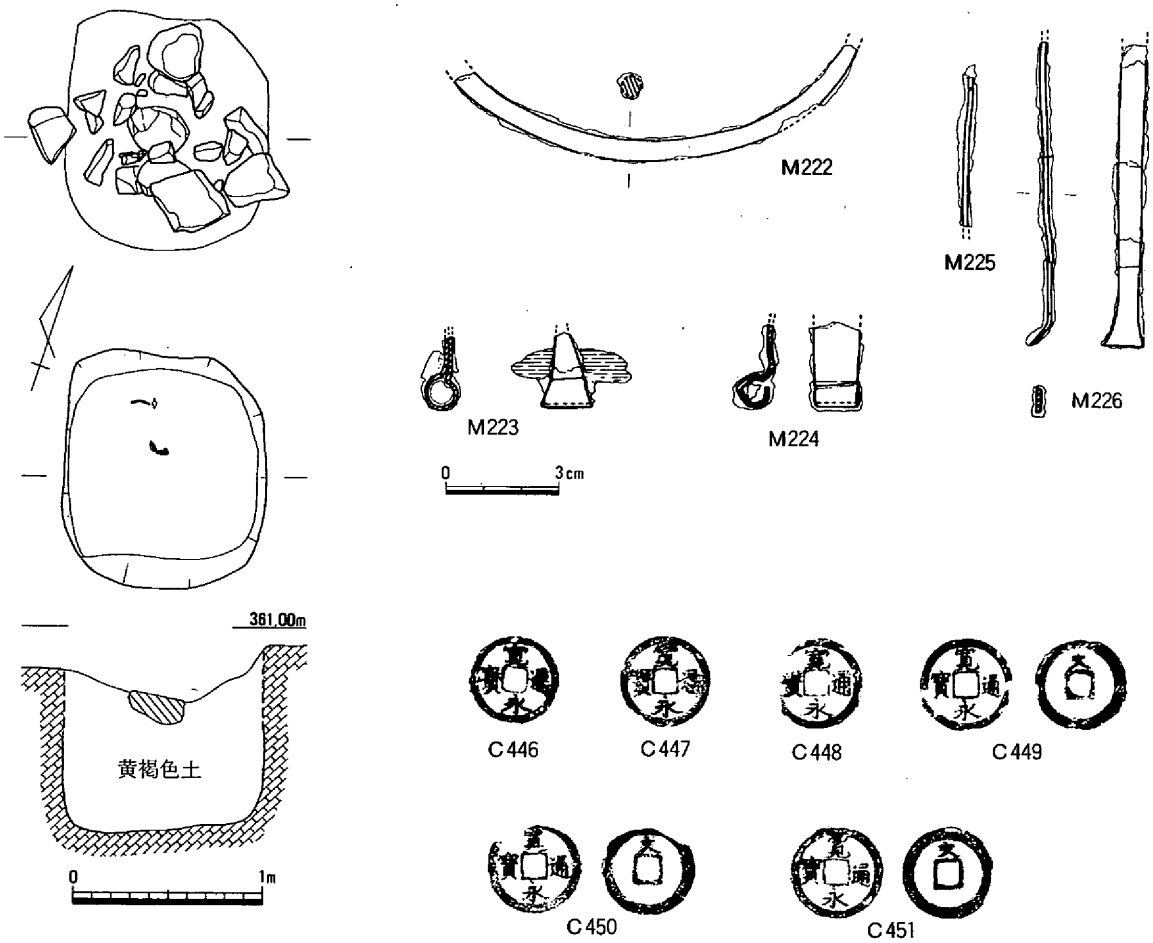
出土遺物には、棺に用いられた金具**M222**～**M224**と副葬された**M225**・**M226**の毛抜き、寛永通寶７枚がある。棺金具**M223**には木質が残遺していた。**M225**・**M226**は同一個体である。寛永通寶には、古寛永**C446**～**C448**と新寛永**C449**～**C451**を図示した。図示していないがもう一枚古寛永がある。

時期は江戸時代後半と推測され、列をなすこの４基のうち最も先行すると判断している。

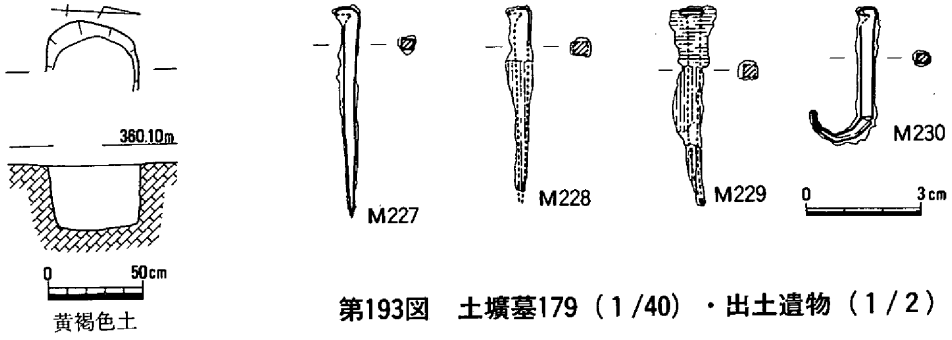
土壙墓179（第193図）

Ｇ３区に位置する。土壙墓175の北西隣に単独で検出され、列を構成しない。東半部は撹乱により検出していないが、おおよそ42×49cmほどの円形の掘り方を持つものである。深さは35cmある。他の墓と比較し、規模の点で差異が認められ、同じような棺が埋納されたとは考えがたいが、釘が出土したことからこれも墓と考えた。小児用に造られたものかもしれない。釘**M229**に付着した棺材の木目方向の差から棺材の厚さが２cmほどのものであると推測される。

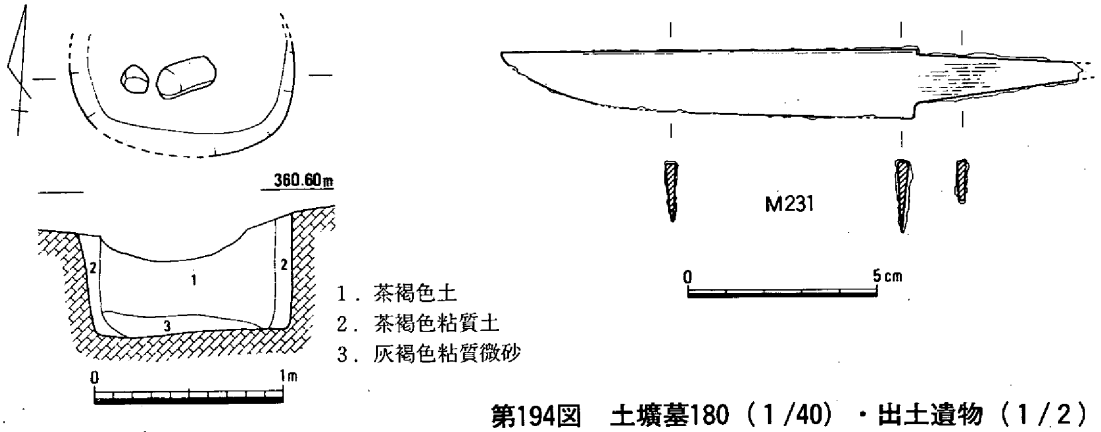
釘以外の出土遺物がないため、詳細な時期は不明である。配列位置、墓壙規模の点から他の近世墓とは特異な面が指摘されるが、これも近世墓として判断している。



第192図　土壙墓178（１/40）・出土遺物（１/２）



第193図　土壙墓179（１/40）・出土遺物（１/２）



第194図　土壙墓180（１/40）・出土遺物（１/２）

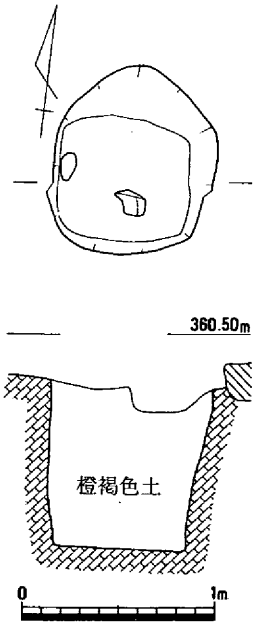
土壙墓180（第194図、図版82）

土壙墓180は、土壙墓176・土壙墓177の南で検出された。この土壙墓も列を構成せず、前述した土壙墓175～178までの列と、後述する土壙墓181～193までの列の間に位置する。

墓壙掘り方は検出面で東西115cmを測る。南北は撹乱のため確認していない。深さは64cmあった。おおよそ方形をなすものと判断された。また、土壙墓182と切り合い関係があり、これに壊されている。土層断面の観察から棺痕跡状の層位を認めたが、棺金具、釘等は検出していない。

出土遺物には、図示した小刀**M231**がある。

詳細な時期について言及できる資料はないが、これも江戸時代後半と推測している。



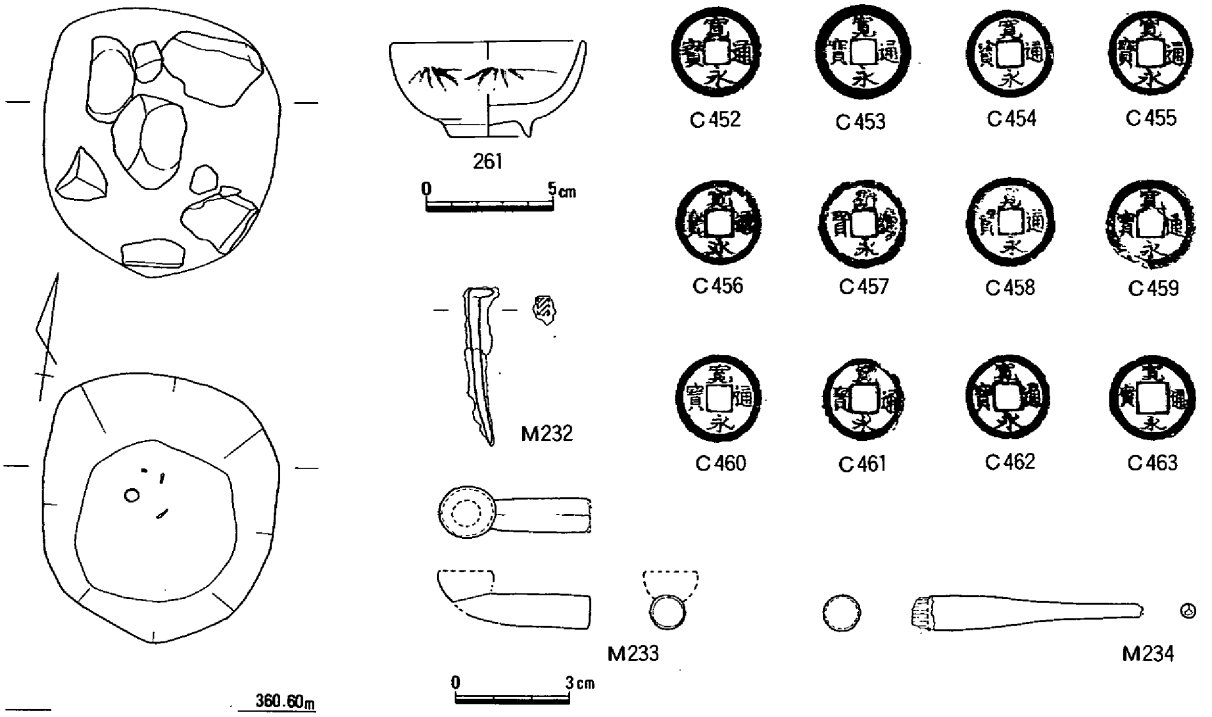
第195図　土壙墓181（１/40）

土壙墓181（第195図）

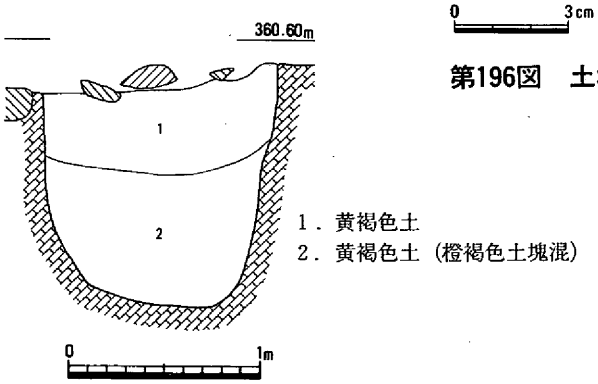
土壙墓181は、Ｇ３区にある。土壙墓181から土壙墓193までの13基が１列を構成しており、その西端に位置する。おそらくは東側から西側へと順に造られたものと判断している。

検出面での墓壙掘り方は一辺約85cmほどの方形を呈し、深さは88cmほど残存していた。墓壙掘り方の形態から、組み合わせ式の座棺であった可能性がある。

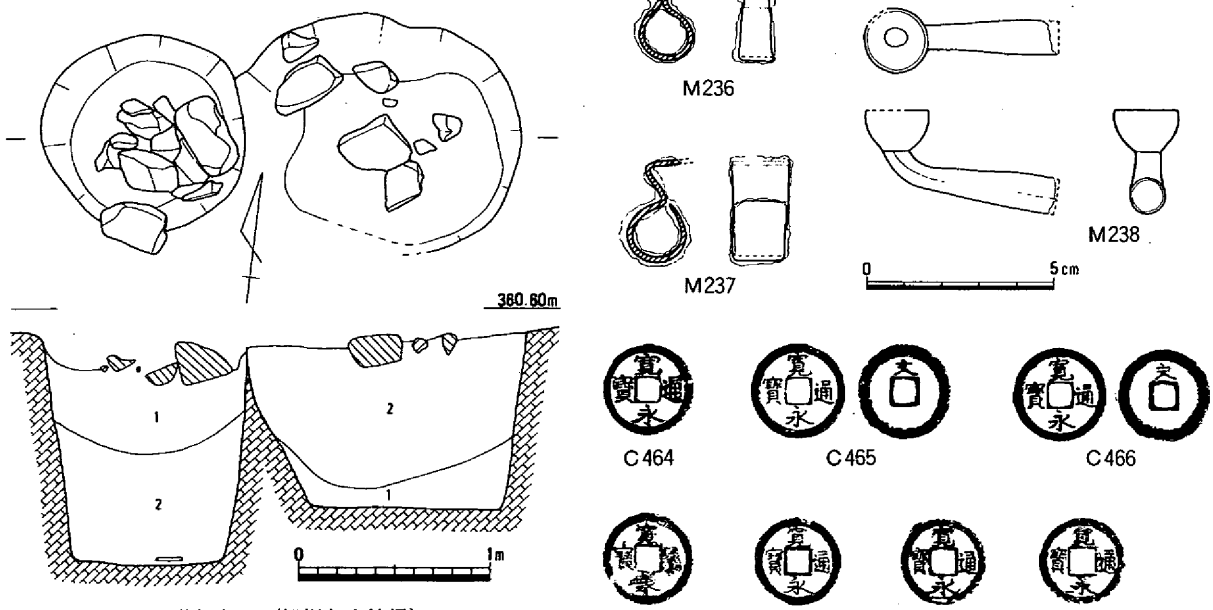
棺に用いられた釘等は出土していない。副葬品等も出土していない

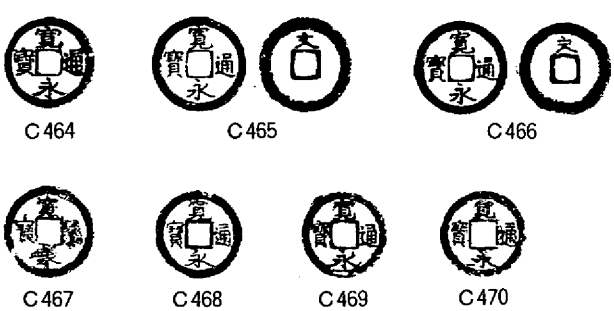


第196図　土壙墓182（1/40）・出土遺物（1/3・1/2）



1．黄褐色土
2．黄褐色土（橙褐色土塊混）





1．黄褐色土（橙褐色土塊混）
2．黄褐色土

第197図　土壙墓183（左）・184（右）（1/40）・184出土遺物（1/2）

ため詳細な時期は不明であるが、他の墓との比較から江戸時代後半のものと考えている。なお、人骨は遺存していなかった。

土壙墓182（第196図、図版64・84）

土壙墓181の東隣に位置する。墓壙掘り方は円形を呈し、144×123×129cmの規模を確認している。墓壙上面には、50cm大の礫が散逸しており、中心部に比較的大きめの石を立てている。これが墓標石と思われた。台石状のものはなかった。人骨の遺存はなく、年齢性別不明である。

出土遺物には棺に用いられた釘と副葬された碗、煙管、古銭がある。**261**は肥前系磁器の碗であり、18世紀前半～中頃のものと思われる。煙管**M233**の雁首は火皿が皿形のものであり、首部の湾曲がほとんどない新しいタイプのものである。吸い口には羅宇が一部残存していた。銭貨は古寛永が1枚と新寛永が11枚出土している。これらは、墓壙底面に散在しており、特に同一個体である煙管の雁首と吸い口がやや離れた箇所で検出されている。

出土遺物を勘案してこの土壙墓の時期は江戸後期と考えている。

土壙墓183（第197図）

土壙墓182の東隣、土壙墓184の西隣に位置し、土壙墓184の一部を壊して造られており、これに後出する。墓壙掘り方は平面円形を呈し、径107cm、深さ115cmを測る。墓壙上面には礫が配されているが、やや乱れた状況であった。墓標石、墓石の台石等と思われるものはなかった。

出土遺物を検出していないため、時期については他との比較から推測されるのみであるが、江戸時代後半と考えた。

土壙墓184（第197図、図版81・84）

土壙墓183の東隣に位置し、これに先行する。墓壙掘り方平面形は、やや東西に長い楕円形を呈し、東西148cm、南北118cmを測った。深さは90cmある。墓壙上面には角礫が散逸しており、原状をとどめていないようである。墓標石等は不明である。

出土遺物は、棺金具**M235**～**M237**と副葬品で煙管**M238**、銭貨**C464**～**C470**がある。棺金具**M235**は取手である。棺材自体が棺金具にわずかに遺存していたが、樹種鑑定を行っていないため樹種は不明である。煙管は**M238**の雁首だけが出土している。火皿は椀形である。銭貨は**C464**が古寛永で、他は新寛永である。計7枚出土している。

時期は江戸時代後半と考えている。

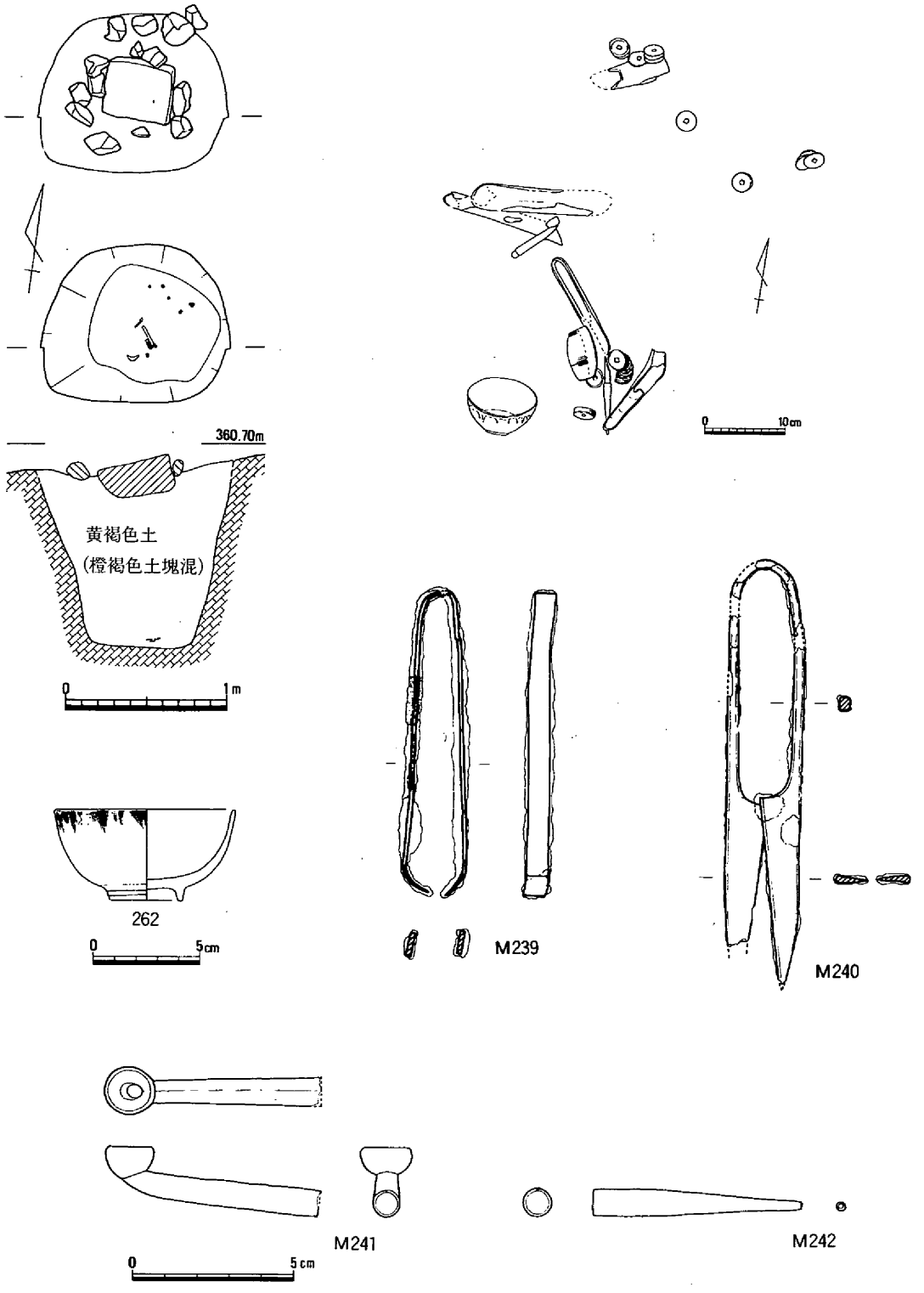
土壙墓185（第198・199図、図版64・83・84・87）

土壙墓184の東隣に位置する。墓壙掘り方の平面形は、上面でややいびつな方形を呈し、東西116cm、南北100cmを測った。深さは115cmある。墓壙底面では一辺75cmほどのいびつな方形であった。棺が桶状の円形のものなのか方形の組み合わせのものか判断しがたいが、底面規模に近い大きさのものが安置されていたと考えられる。墓壙上面中央には45×35×20cmほどの礫が面を上に向けて置かれており、墓石の台石と考えられた。また、その周囲に15～20cm大の角礫が配されていた。人骨は四肢骨と思われる一部が残存していた。棺に用いられた釘、棺金具は検出されていない。

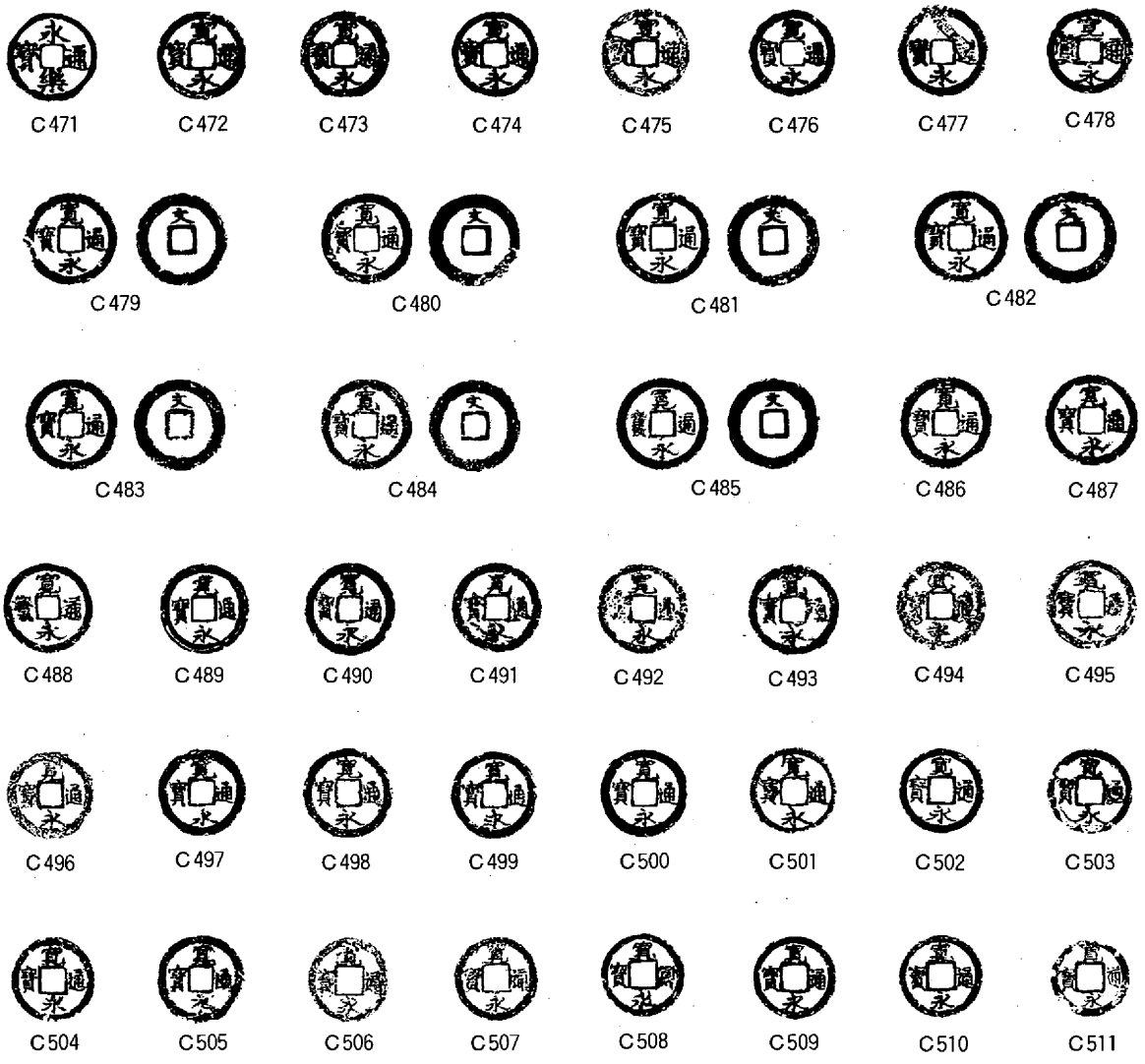
副葬品は、肥前系磁器碗、毛抜き、鋏、煙管、櫛、銭貨がある。これらは、墓壙底面で図に示すように散在していた。また、銭貨は一部が紐銭の名残を示して重なって出土している。なお、これらの遺物の一部には布痕跡が認められた。この状況を堪案すると、埋葬する際にこれらを袋に詰めて首から掛けたものが落下して散逸したものと理解される。

262は肥前系磁器碗であり18世紀前半のものと思われる。M239は毛抜き、M240が鋏、M241・M242が煙管である。煙管の羅宇部分は残存していない。雁首M241の火皿は皿形で、首部の屈曲はほとんどない。銭貨は合計65枚出土している。そのうちC471～C551を図示した。内訳は永楽通宝が１枚、古寛永が９枚、新寛永が37枚うち文銭が８枚、残りは紐銭で重なっていたため明らかにしていない。

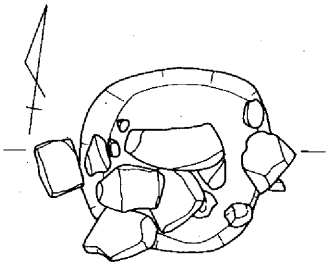
この土壙墓の時期は、遺物を参考にして江戸時代後半と判断している。

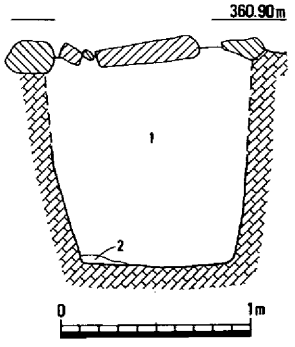


第198図　土壙墓185（１/40・１/８）・出土遺物①（１/３・１/２）



第199図　土壙墓185出土遺物②（１/２）





1．黄褐色土
2．黒褐色土（骨片含）

第200図　土壙墓186（１/40）・出土遺物（１/２）

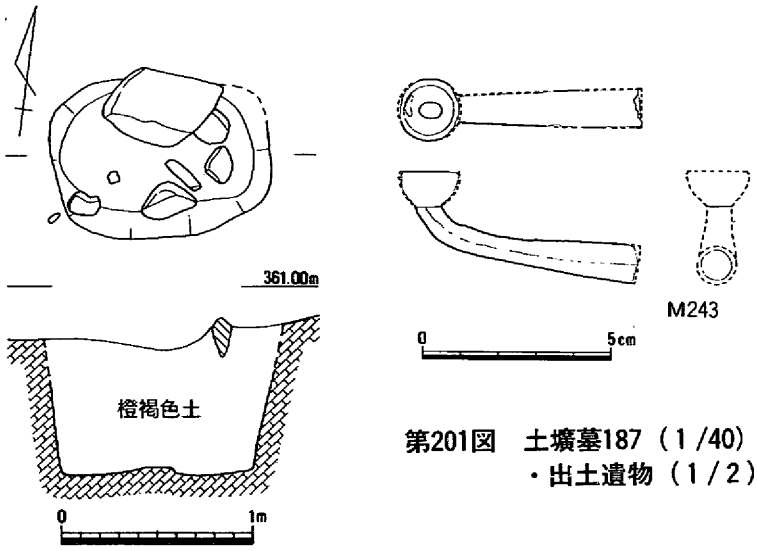
土壙墓186（第200図）

Ｇ４区、土壙墓185の東隣に位置する。墓壙平面形は円形であり、径約100cm、深さ114cmを測る。墓壙上面中央に、72×22×12cmほどの板石が置かれており、墓石の台石と考えた。この周囲にも角礫が配されている。人骨は墓壙底面にわずかに残遺していた。棺痕跡、釘等は検出していない。出土遺物は銭貨が６枚ある。

土壙墓187（第201図）

土壙墓186の東隣に位置する。隅丸方形の墓壙掘り方平面形であり東西115cm、南北85cm、深さ82cmを測った。墓壙上面に長さ50cmほどの角礫が存在するが、墓石の台石であるかどうかは断定できなかった。また、墓壙の

形状も他とは異なる。人骨の遺存は、認めていない。出土遺物には図示した**M243**の煙管の雁首がある。残存状態は悪く、羅宇および吸い口は検出できなかった。時期は江戸時代後半になると思われる。



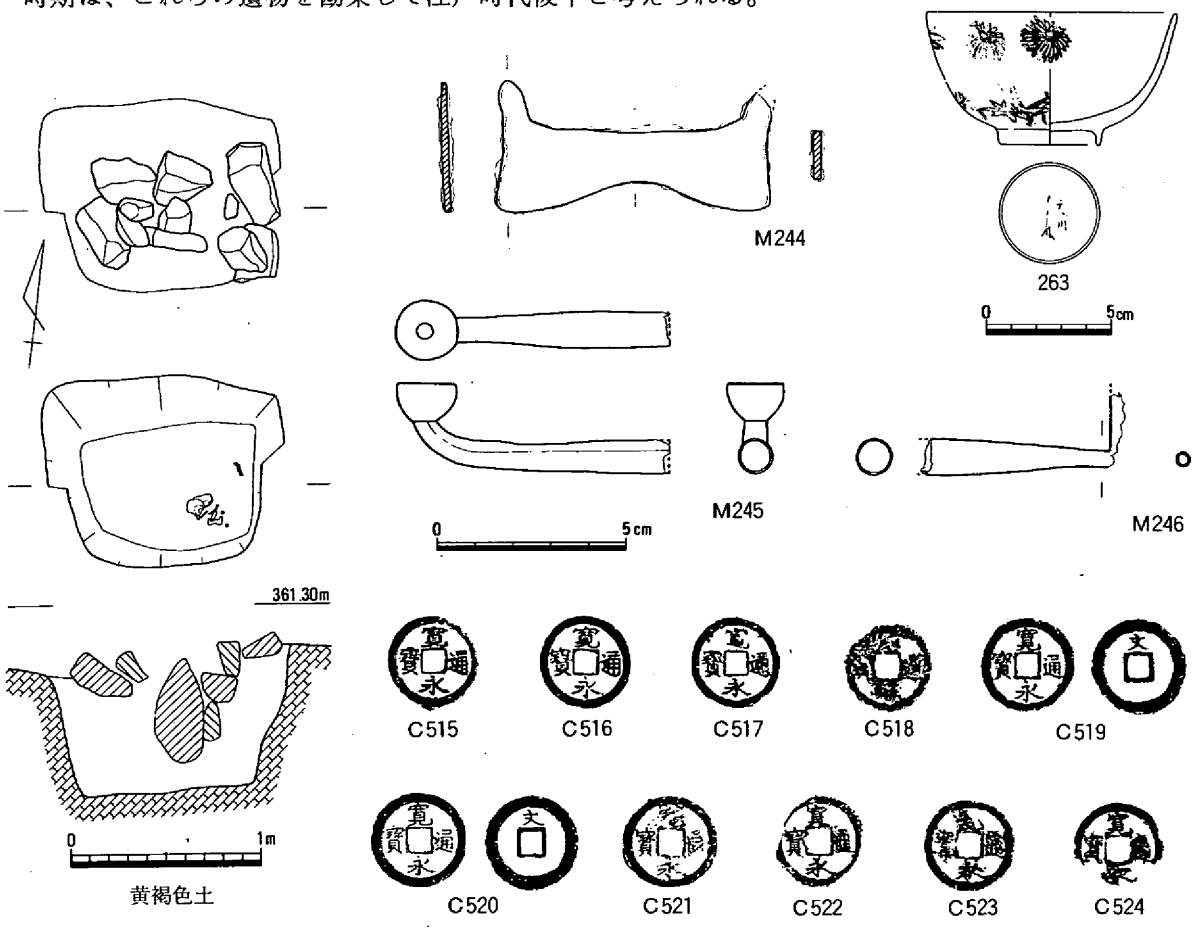
第201図　土壙墓187（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓188（第202図、図版82・84）

土壙墓187の東隣に位置する。墓壙上面で東西126cm、南北102cmの長方形を呈する。棺の腐朽に伴って上面に配された礫が墓壙下位まで陥没していた。棺材および、棺痕跡は検出できなかった。また、人骨の遺存もない。

出土遺物は、副葬された碗、火打金、煙管、銭貨である。263は肥前系磁器碗である。18Ｃ中頃のものと考えられる。**M244**は火打金である。カスガイ型のもので長さ７cmを測る。**M245・M246**は煙管の雁首と吸い口である。雁首の火皿は椀形を呈する。銭貨は10枚あった。

時期は、これらの遺物を勘案して江戸時代後半と考えられる。

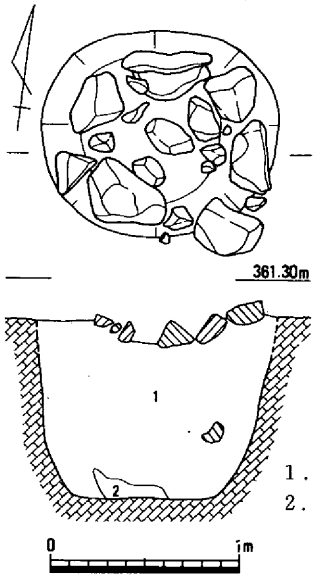


第202図　土壙墓188（１/40）・出土遺物（１/３・１/２）

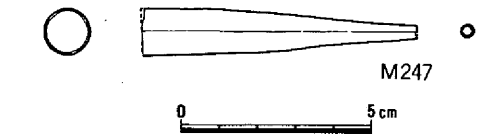
土壙墓189（第203図、図版65）

土壙墓188の東隣にある。墓壙掘り方の平面形は径125～108cmのやや東西に長い楕円形であり、深さは97cmを測る。墓壙上面には、40cm大の礫が面を外方に向けて配されているようであった。また、中心部はやや小形の礫を置いている。おそらくこの中心部に墓石を立てたものと思われる。墓壙下面で、人体の腐敗した痕跡を認めた。

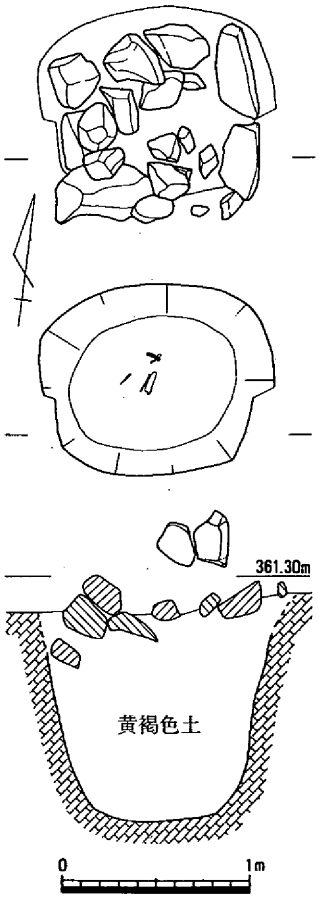
出土遺物は、煙管の吸い口と寛永通寶４枚がある。



1．橙黄褐色土
2．暗茶褐色土

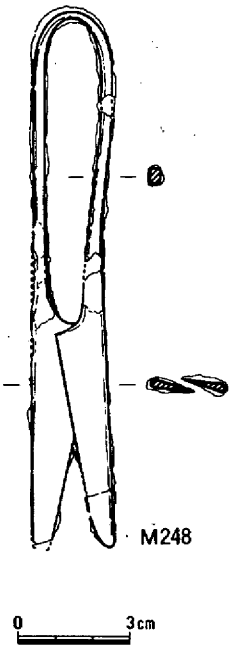


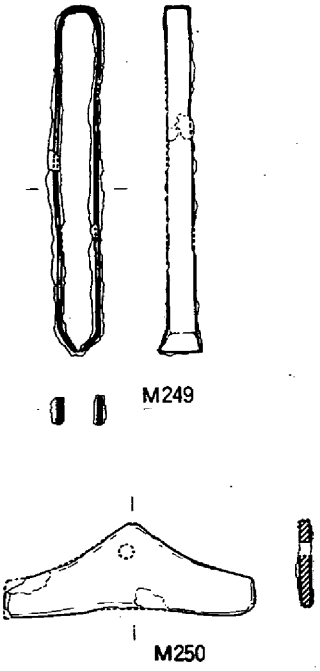
第203図　土壙墓189（１/40）・出土遺物（１/２）



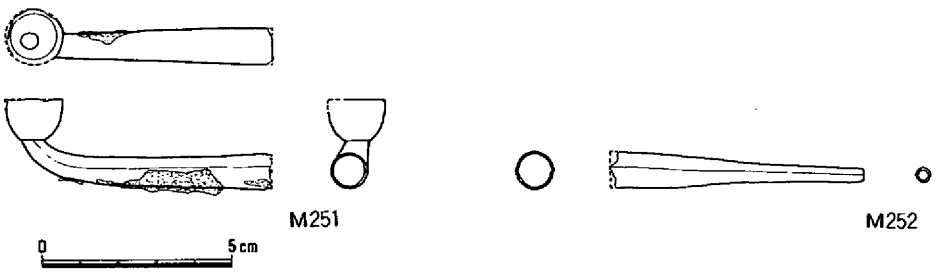
土壙墓190（第204・205図、図版65・82・84・87）

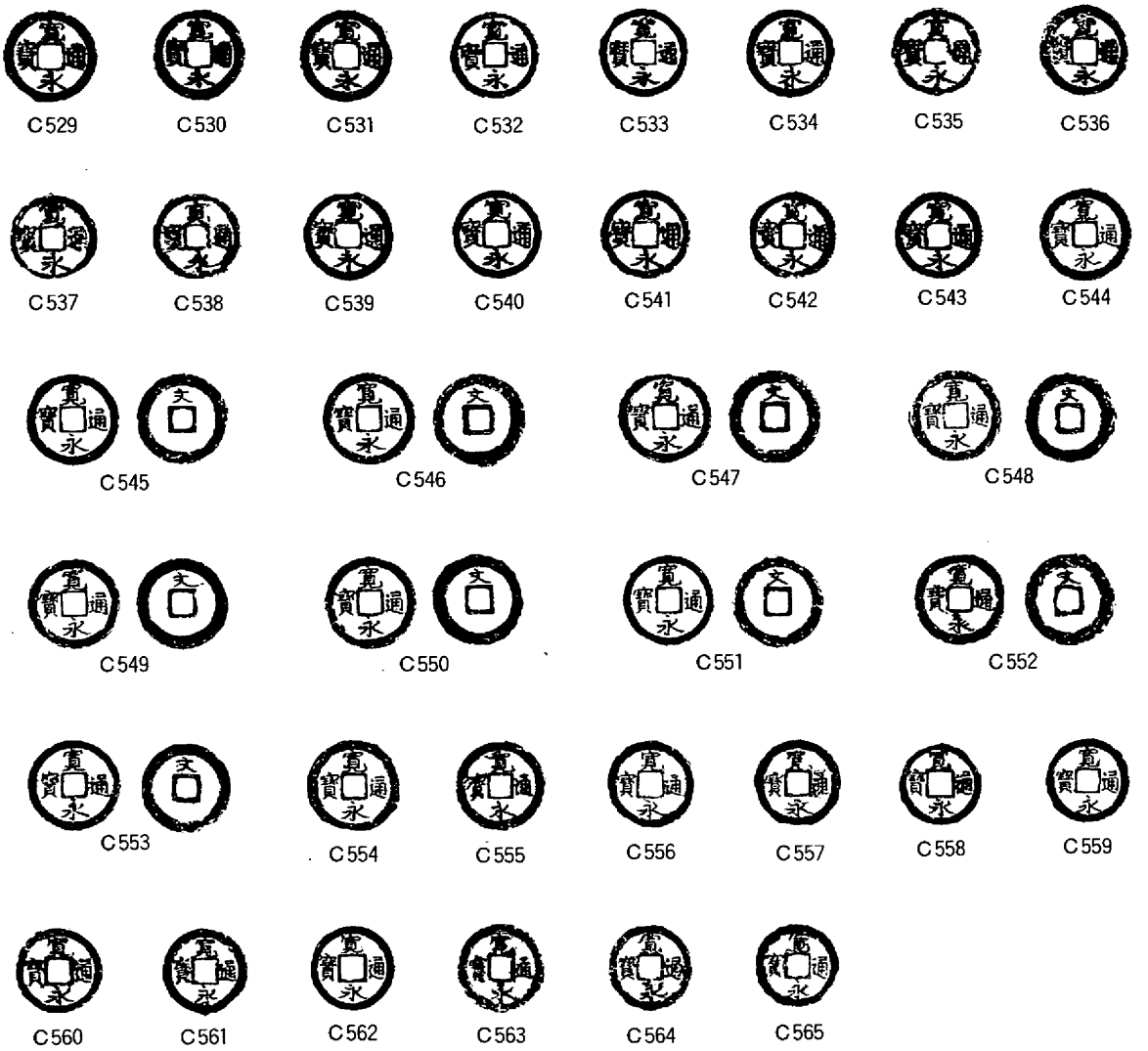
土壙墓189の東に位置する。墓壙上面には、面を外に向け30～50cmほどの礫が配されており、おおよそ一辺１ｍの区画を形成していた。この区画の中には20～30cm大の礫があるが、元来





第204図　土壙墓190（１/40）・出土遺物①（１/２）

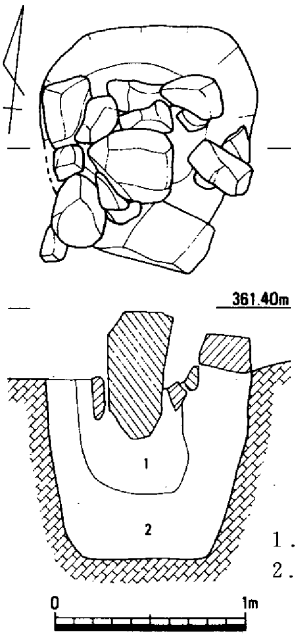


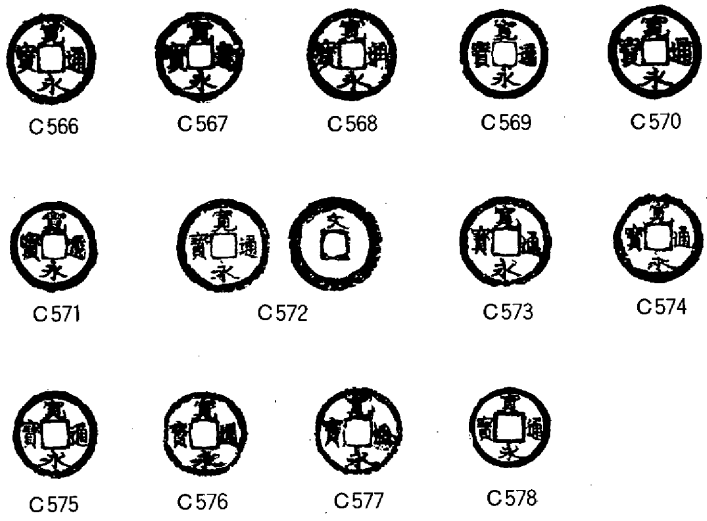


第205図　土壙墓190出土遺物②（１/２）

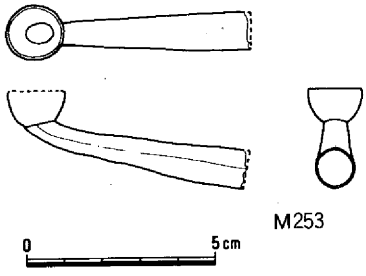
墓石が建てられていたかのように空白部がある。墓壙は、東西124㎝、南北101㎝の楕円形を呈する。深さは112㎝ある。人骨の遺存は認められなかった。また、釘等も検出していない。出土遺物は、毛抜き、鋏、火打金、煙管、銭貨である。火打金**M250**は山型のもので、頂部に小孔をもつ。煙管の雁首**M251**の火皿はやや深めの椀形であり、首部の屈曲が比較的大きく古いタイプのものであろうか。また、銭貨は寛永通寶が40枚出土しており、そのうち**C529～C565**を図示した。なお、煙管の雁首に布痕跡を認めており、これらの遺物が頭陀袋に入れて埋納されたものと推測している。

この土壙墓の時期も江戸時代後半と判断している。





第206図　土壙墓191（１/40）・出土遺物（１/２）



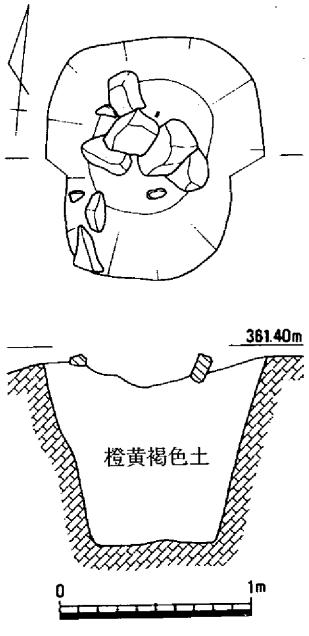
土壙墓191（第206図、図版65・84）

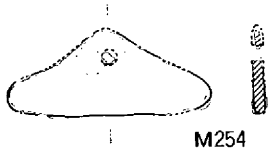
土壙墓190の東隣にある。墓壙上面中央に長さ70cm、幅45cm、厚さ40cmほどの礫を建てており、墓標石と考えられた。またこの礫の周囲にも、方形に礫を組んでいる状況が看取された。墓壙掘り方は平面円形を呈し、深さは100cmを測った。出土遺物は棺緊結用の釘と副葬された煙管の雁首**M253**、寛永通寶**C566**～**C578**の13枚がある。

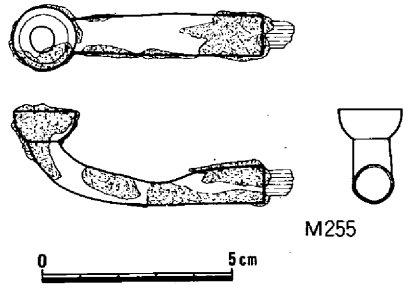
この土壙墓の時期も江戸時代後半と判断しており、土壙墓190に先行するものと思われる。

土壙墓192（第207図、図版82・84）

Ｇ５区、土壙墓191の東にある。墓壙上の礫は、長さ35cmほど大きさのものであり、その多くが散逸しているものと思われた。墓壙掘り方平面形はやや南北に長い楕円形であり南





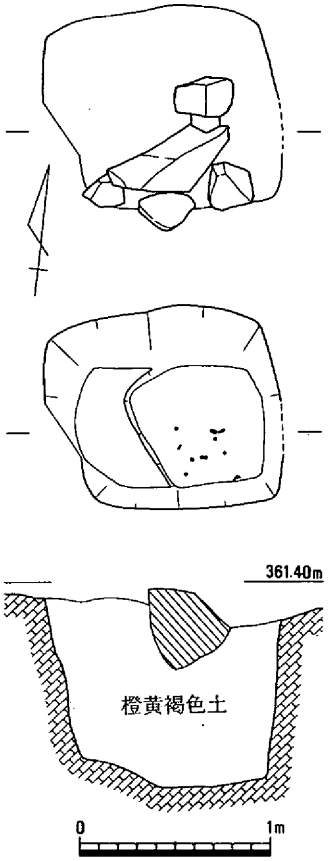


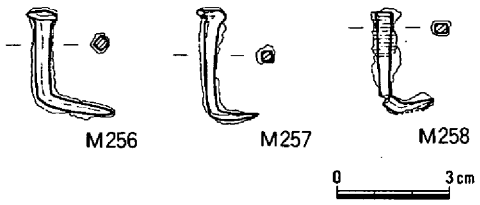
第207図　土壙墓192（１/40）・出土遺物（１/２）

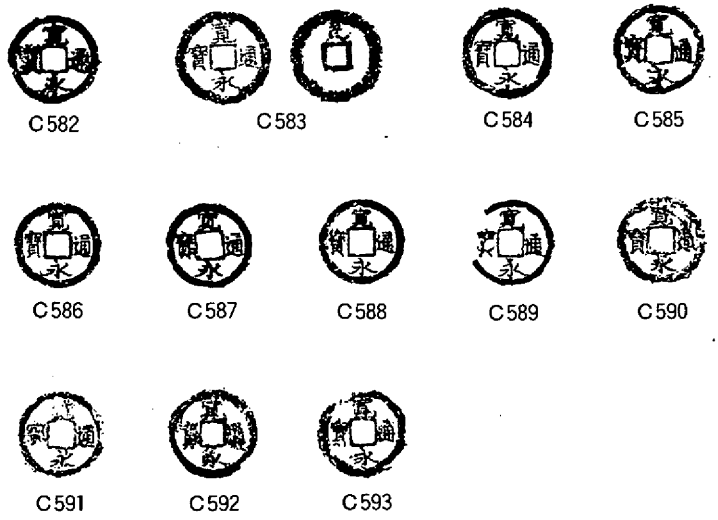
北122cm、東西114cmを測った。深さは98cmある。

出土遺物には山型の火打金**M254**、煙管の雁首**M255**、銭貨５枚があり、銭貨はそのうち**C579～C581**を図示した。このほかに漆椀と推測される漆の痕跡を観察したが、残存状況が悪く詳細は明らかにできなかった。釘は検出できなかった。なお、煙管の雁首には羅宇部分が一部残存しており、布痕跡が認められた。

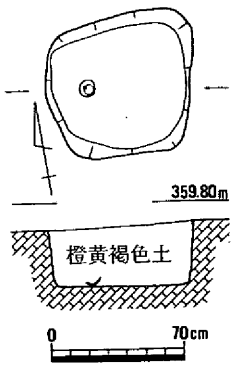
この土壙墓の時期も江戸時代後半と考えられた。

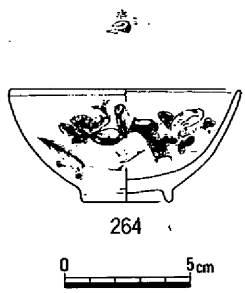


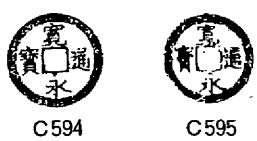




第208図　土壙墓193（１/40）・出土遺物（１/２）







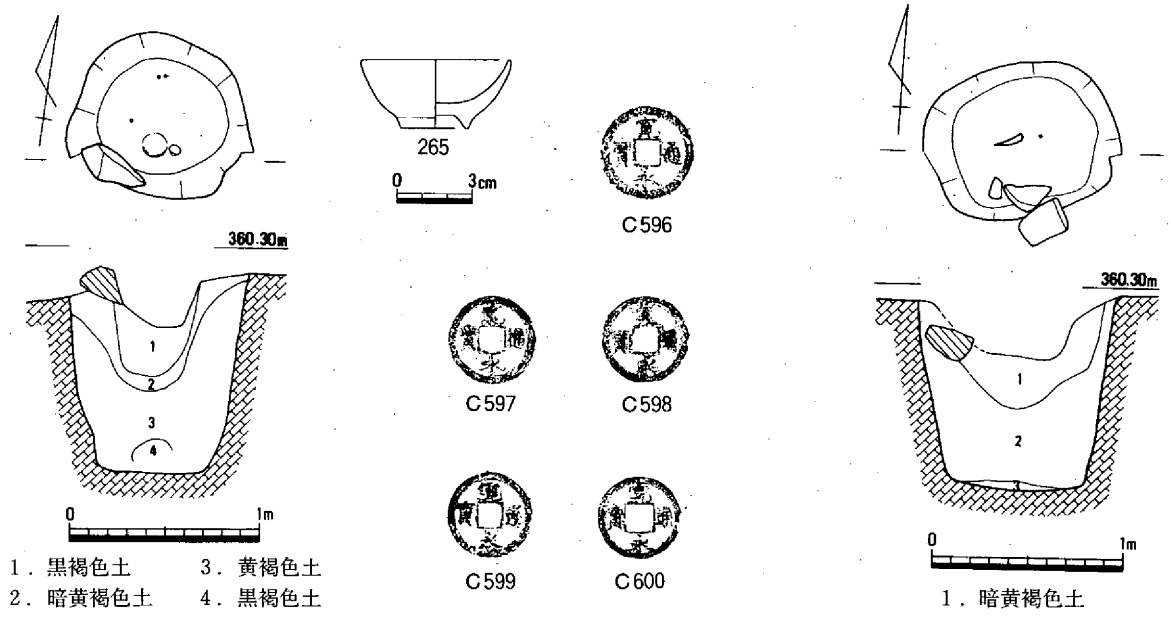
第209図　土壙墓194（１/40）・出土遺物（１/３・１/２）

土壙墓193（第208図）

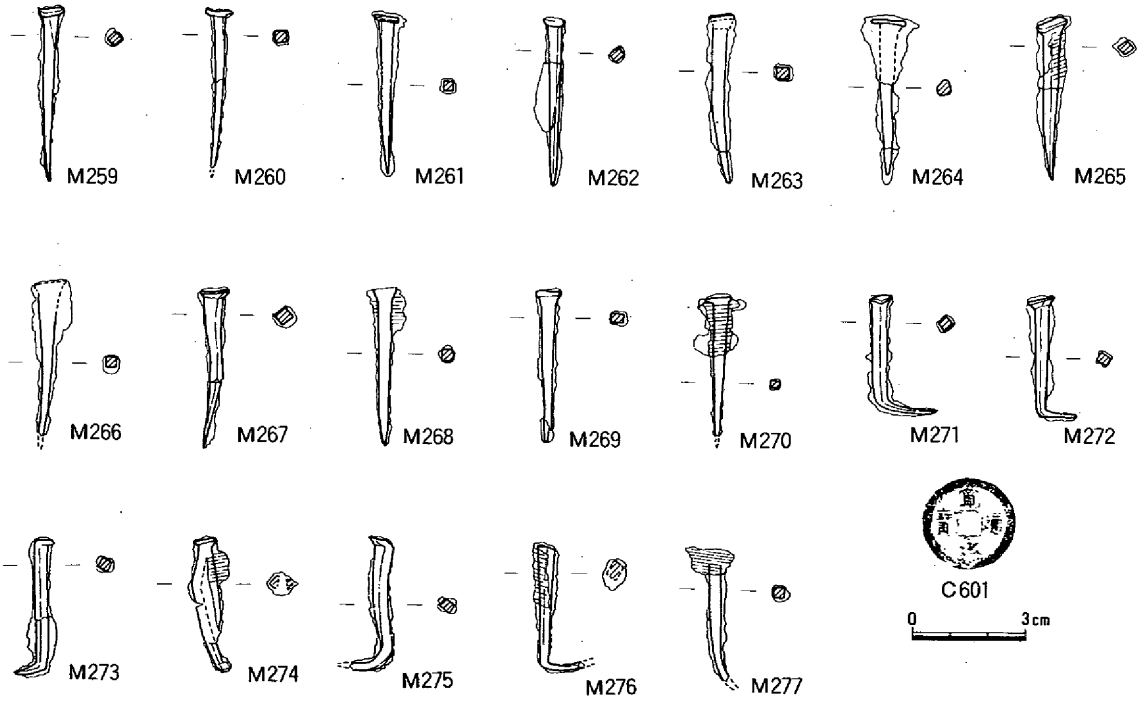
Ｇ５区にある。土壙墓181以降、東西方向にこの土壙墓までが一列をなし、その東端に位置する。墓壙掘り方は東西124cm、南北108cmの方形をなす。深さは102cmある。墓壙上面にはやや大ぶりの礫が１個建てられており、墓標石と思われた。墓壙底は浅い２段になることが観察された。副葬品は、銭貨13枚のみを認めた。そのうち10枚が新寛永である。このほか釘**M256～M258**を検出した。いずれも先端は折れ曲がっている。列をなす一群のうち最も先行するものと思われる。

土壙墓194（第209図）

Ｇ３区にある。先述した土壙墓181～土壙墓193までの列の南側に、土壙墓194～土壙墓197までの４基が短い１列をなす。土壙墓194は、この列の最西端に位置する。墓壙は一辺約80cmほどの方形を呈し、検出面からの深さは30cmほどと浅いが、上部が削平されているものと理解している。墓壙底からは磁器碗**264**と銭貨３枚が出土している。**264**は肥前系磁器であり18世紀後半～末のものと考えられる。この土壙墓の時期もおおよそその頃と思われる。



第210図　土壙墓195（１/40）・出土遺物（１/３・１/２）



第211図　土壙墓196（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓195（第210図、図版66）

土壙墓194の東隣にある。墓壙掘り方の平面形は円形であり径約100cmを測る。深さは104cmある。墓壙上面中央部は窪んでおり、この箇所に墓石を建てた可能性が高い。墓壙底面人体が腐敗した痕跡と思われる黒褐色土が観察された。

出土遺物には肥前系白磁**265**がある。17世紀後半～18世紀前半のものと思われる。このほかに銭貨８枚が出土しており、そのうち**C596～C600**を図示した。

土壙墓196（第211図）

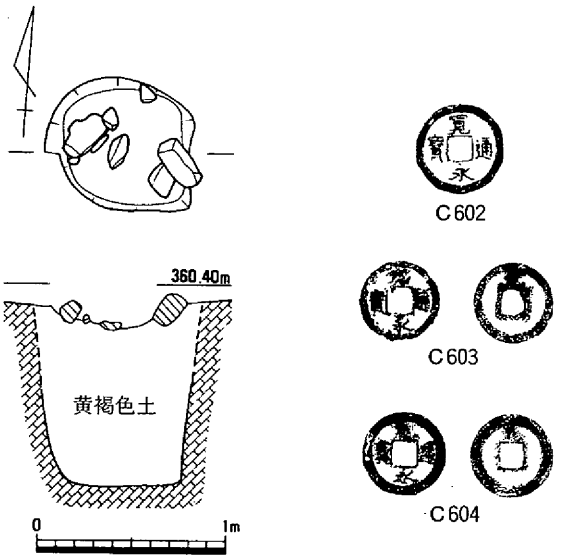
土壙墓195の東隣、土壙墓182の南東部に接して造られている。東西104cm、南北83cmを測る方形を呈する墓壙掘り方である。墓壙上の礫は散逸しているのか、ほとんどみられなかった。

出土遺物は銭貨が５枚あるが、１枚が新寛永通寶であるほかは不明である。このほか比較的釘が多く出土している。いずれも長さ４cmほどのものであり、先端が折れ曲がっているものもある。また、棺材が付着したものもあり、これらはいずれも釘に直交するように木目が通る。

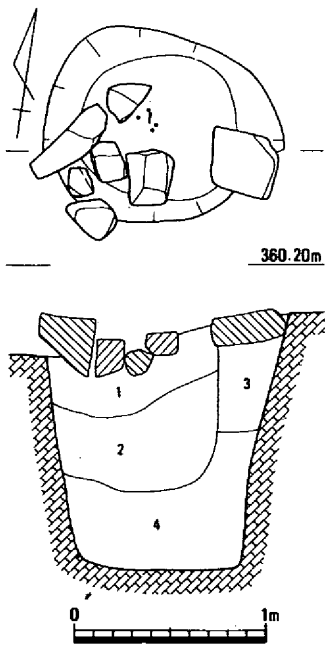
時期は、土壙墓195に近いものと思われるが、前後関係は断定できない。

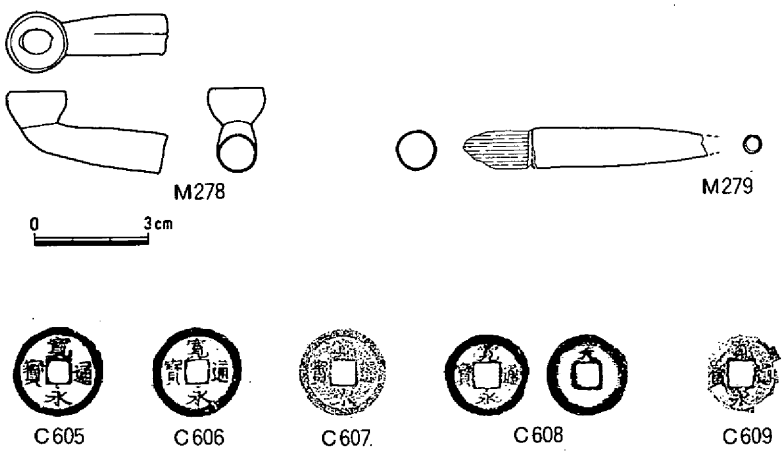
土壙墓197（第212図）

土壙墓196の東隣、土壙墓184の南に位置する。墓壙掘り方の平面形は約70cm四方の方形を呈し、深さは98cmある。副葬された銭貨７枚が出土している。このうち**C602～C604**を図示した。人骨は遺存していたものの、棺材は検出できなかった。時期は、土壙墓195に近いものと考えられる。



第212図　土壙墓197（１/40）・出土遺物（１/２）





第213図　土壙墓198（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓198（第213図、図版84）

G3区に位置する。最も南に列をなす一群の最西端にある。墓壙はやや東西に長い方形に掘削されており、東西125cm、南北103cmを測る。深さは132cmある。墓壙上面には30～40cm大の礫が散乱しており、撹乱されている。

出土遺物は、煙管の雁首**M278**・吸い口**M279**と銭貨9枚があり、銭貨はそのうち**C605**～**C609**を図示した。**M278**の煙管雁首の火皿は皿形で首部の屈曲はほとんどない。また、吸い口**M279**には羅宇が一部残存していた。

これらの出土遺物と位置関係から、やはりこの土壙墓も江戸時代後半のものと考えられる。

土壙墓199（第214図、図版66・84）

土壙墓198の東にある。東西106cm、南北109cm、深さ79cmの平面方形を呈する墓壙である。上面に長さ40cmほどのやや大きめの礫が1個と小ぶり礫が数個配されていたが、やや散逸しているようである。やや大きめの石が墓標石であろうか。また、土層断面の観察から、棺の腐朽に伴う陥没の状況が良く観察された。なお、最上層は良く叩き締められている。墓壙内に安置された座棺は、墓壙形状から方形の組み合わせのものであった可能性を考えている。

出土遺物として長さ5cmほどの釘**M280**・**M281**と副葬された碗**266**、煙管**M282**・**M283**、銭貨**C610**～**C618**を図示した。釘はいずれも先端が折れ曲げられている。**266**は関西系の陶器碗であり、18世紀末～19世紀初頭のものである。銭貨は図示したもののほかにもあり、合計9枚が出土している。いずれも新寛永であるが**C613**には「佐」が刻されている。

この土壙墓の時期は、出土遺物を勘案すれば江戸時代末と考えられる。

土壙墓200（第215図）

土壙墓199の東に位置する。東西90cm、南北95cmを測る方形の墓壙掘り方であり、深さは94cmある。この土壙墓からは釘が比較的多く出土している。いずれも長さ5cmほどである。墓壙掘り方の形状と釘の出土状況から組み合わせ式の座棺が安置されていたと推測される。なお、釘に残遺していた棺材の木質の状況から、厚さ2cmほどの材が用いられていたものと思われる。

副葬品としては寛永通寶を3枚検出している。**C619**が古寛永、**C620**・**C621**は新寛永である。位置関係から土壙墓199と時期差ないものと推測される。

土壙墓201（第216図、図版66・84）

土壙墓200の東にある。墓壙掘り方はやや東西に長い円形であり、東西125cm、南北103cmを測る。深さは116cmを測った。墓壙内には、座棺の腐朽に伴い陥没したと思われる約40cm四方の石が検出されている。墓石の台石と思われた。また、この台石をとりまくように一辺約1mほどの大きさの方形に礫が配されている。棺痕跡は不明瞭であったが、人骨が遺存していた。

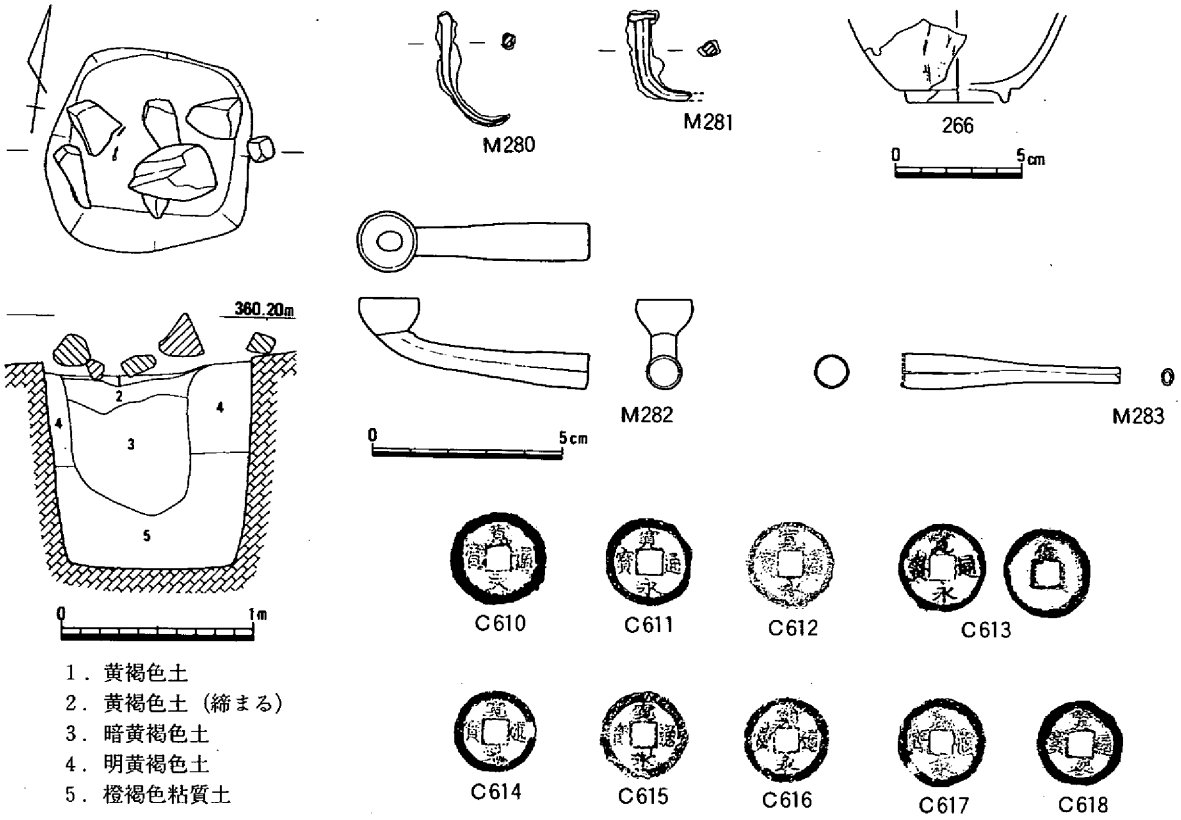
出土遺物は、煙管雁首**M291**・吸い口**M292**と寛永通寶が**C622**～**C628**の7枚がある。煙管雁首**M291**には羅宇が一部残存していた。また、吸い口**M292**には模様が刻まれている。

時期は、土壙墓199と大差ないものと思われる。

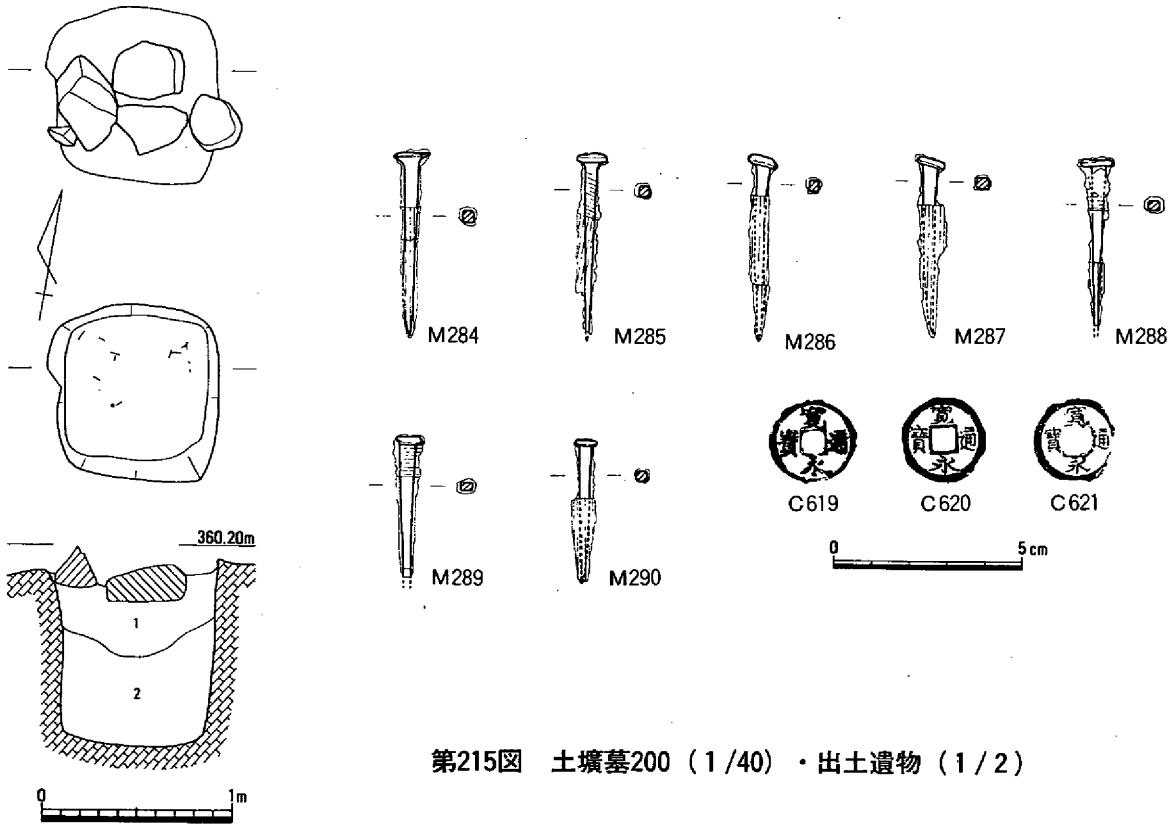
土壙墓202（第217図、図版67・84）

土壙墓201の東隣に位置する。後述する土壙墓203と墓壙掘り方が一部重複し、これに先行する。墓壙は平面円形であり径約90cmほどを測った。深さは約90cmほどであった。

墓壙上面中央には土壙墓201と同様に、一辺約40cmほどの板状の石を置いており、この上に墓標石



第214図　土壙墓199（１/40）・出土遺物（１/２・１/３）

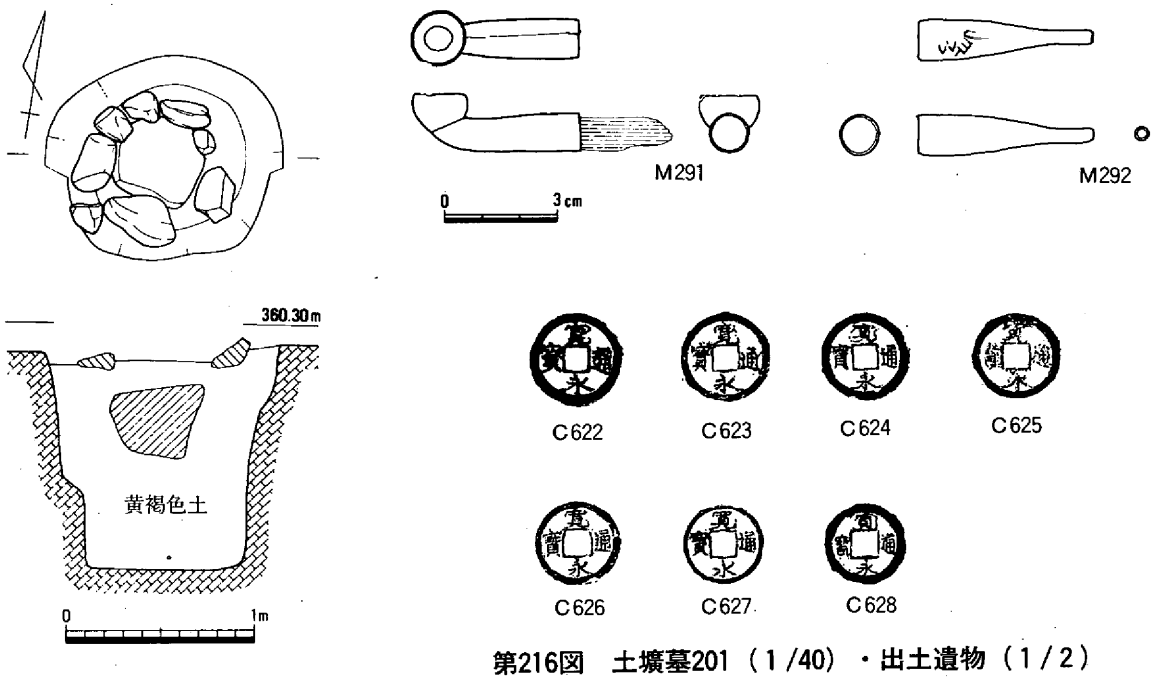


第215図　土壙墓200（１/40）・出土遺物（１/２）

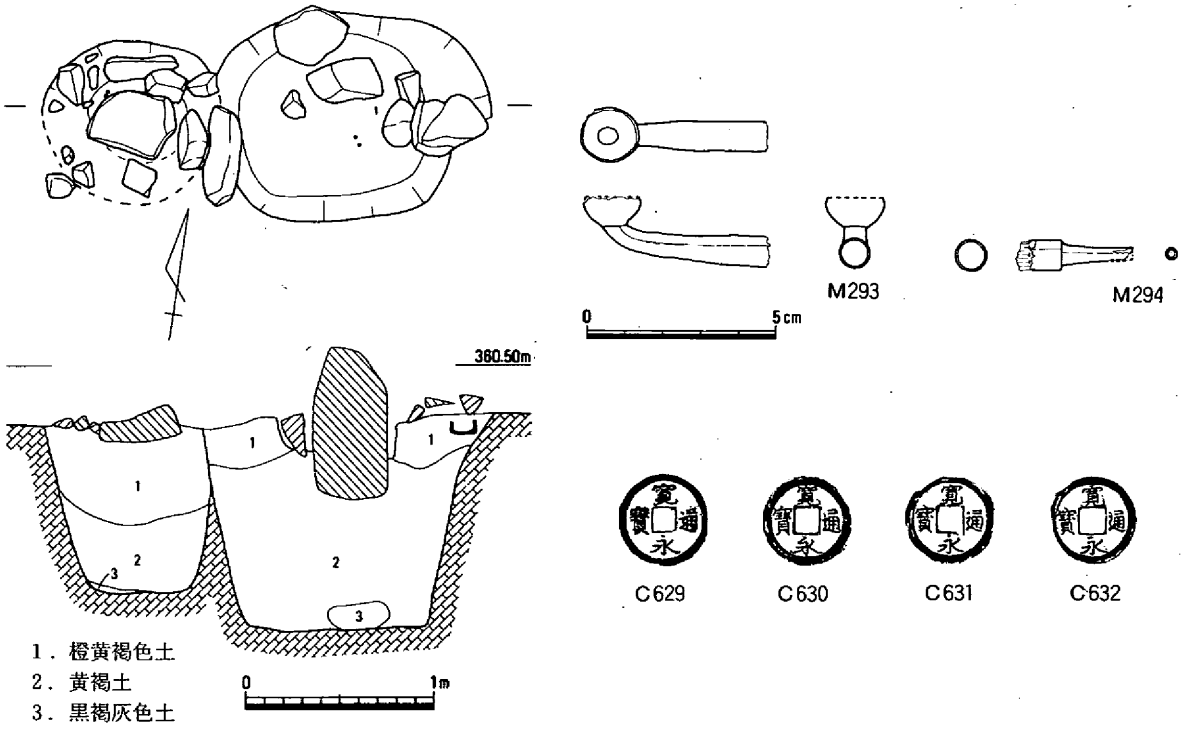
を立てたものと推察される。また、この台石の周囲には一辺約１ｍほどの方形を意識して小ぶりの礫が配されていた。

出土遺物には煙管M293・M294、寛永通寶C629～C632の４枚がある。M293の雁首の火皿は皿形であり、首部の屈曲はほとんどみられない。M294の煙管の吸い口は、肩を作り出すものである。いずれも継ぎ目は左側にある。

時期は、江戸時代後半と推察される。



第216図　土壙墓201（１/40）・出土遺物（１/２）



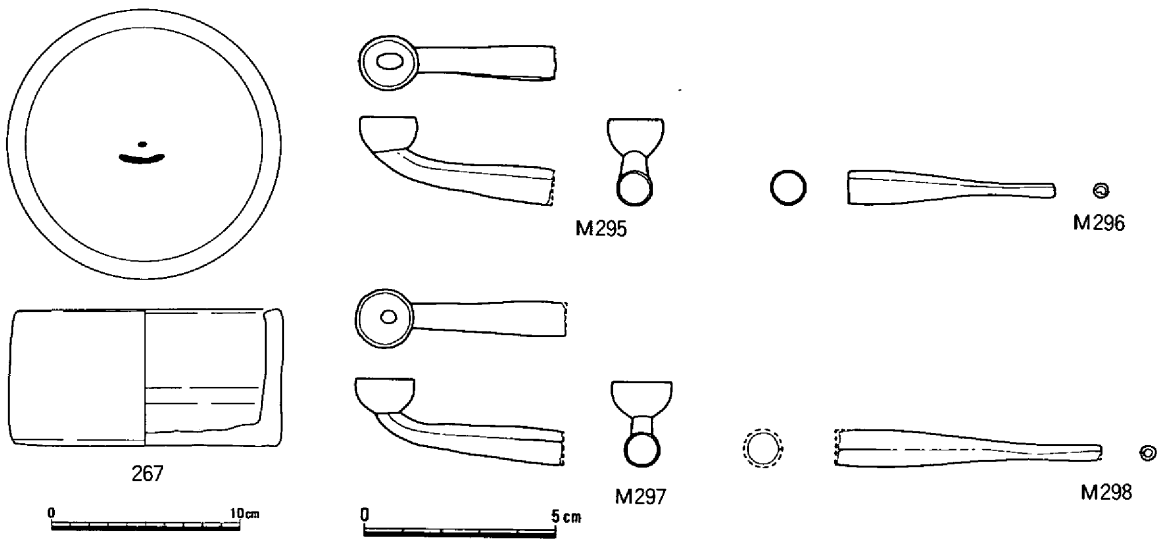
第217図　土壙墓202（左）・203（右）（１/40）・202出土遺物（１/２）

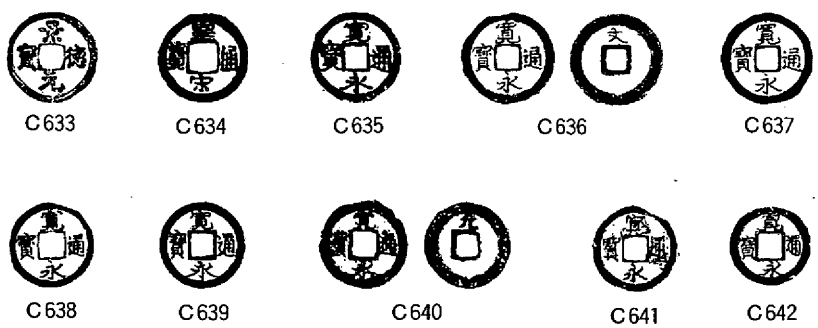
土壙墓203（第217・218図、図版67）

土壙墓202と墓壙が切りあい、これに後出する。墓壙上面には、高さ約80cmの墓石が残存していたが碑名は刻まれていなかった。墓壙掘り方の平面形は方形を呈し、東西152cm、南北107cm、深さ114cmを測った。なお、人骨が一部残存していた。

墓壙上面近くで、図示した備前焼**267**が出土している。内面には「二」の文字が墨書されている。また、このなかには煙管が入っていた。このほか図示した銭貨が10枚出土しており、寛永通寶のほかに景徳元寶、皇宋通寶があった。

備前焼**267**を参考にすれば、この土壙墓の時期もやはり江戸時代末頃と推測される。





第218図　土壙墓203出土遺物（1/4・1/4）

土壙墓204（第219・220図、図版84）

Ｇ４区、土壙墓203の東に位置する。後述する土壙墓205と墓壙が切りあい、これに後出する。墓壙の平面形は、他の土壙墓と異なり、長方形を呈し、東西152cm、南北94cmを測り、深さは117cmであった。墓壙上の礫は大きく散逸している。出土遺物には図示した煙管の雁首**M299**、吸い口**M300**と寛永通寶が７枚ある。

土壙墓205（第219・221図）

土壙墓204と土壙墓206と墓壙が重複関係にあり、土壙墓203に先行し、土壙墓205より後出する。墓壙上面の礫は大きく散逸していた。墓壙平面は円形であり、径約120cmを測った。深さは110cmある。

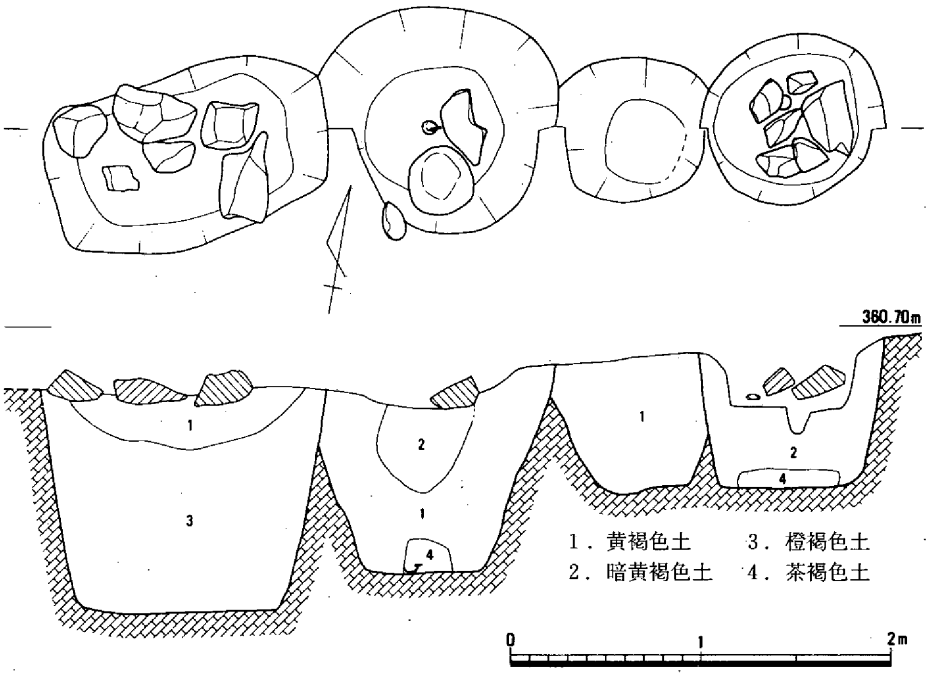
出土遺物には棺緊結用の釘M301～M307と副葬された268の碗、煙管M368・M369、寛永通寶が６枚ある。釘はいずれも長さ約５cmほどのものを先端を折り曲げていた。268の碗は肥前系磁器であり、18C頃のものと思われる。煙管の吸い口M369は、肩部を作り出しており、雁首と同様継ぎ目が左側にある。

これらの遺物と位置関係を勘案すれば、この土壙墓の時期は江戸時代後半～末頃と推測される。

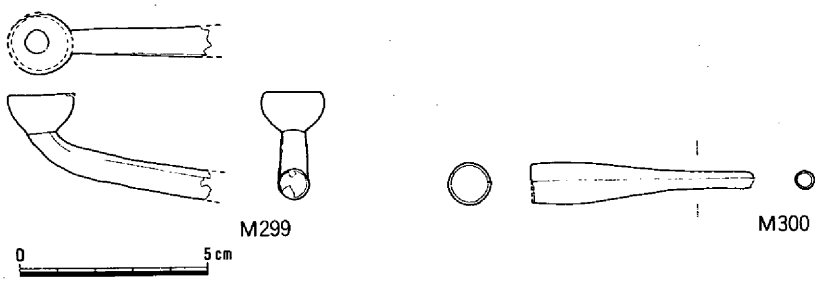
土壙墓206（第219図）

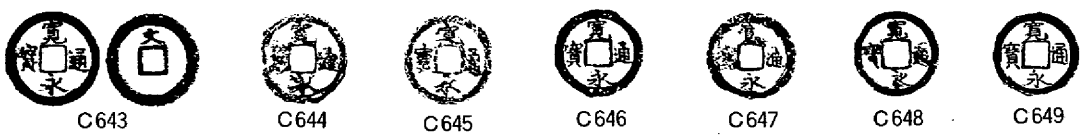
土壙墓205・土壙墓207と墓壙が切りあい、この両者に先行する。平面円形の墓壙は比較的小さく径・深さとも約80cm未満である。

出土遺物がなく、棺が安置されたかどうかは判断に迷うが、形状、位置から墓と考えた。

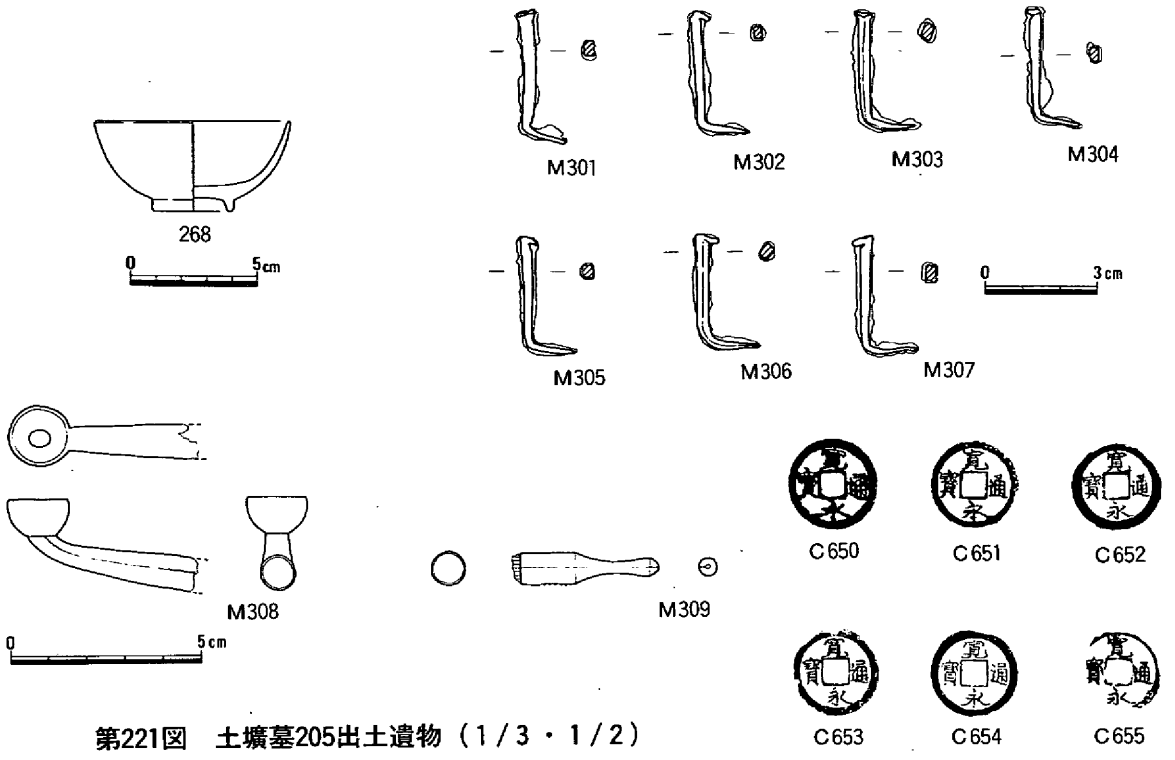


第219図　土壙墓204～207（１/40）

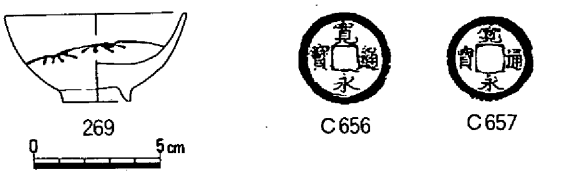




第220図　土壙墓204出土遺物（１/２）



第221図　土壙墓205出土遺物（１/３・１/２）



第222図　土壙墓207出土遺物（１/３・１/２）

土壙墓207（第219・222図、図版67）

土壙墓198から続く列を構成する一群の最東端にある。先述した土壙墓206と切り合いこれに後出する。墓壙内からは、棺の腐朽に伴い落ち込んだとみられる上面に配された礫がみられた。墓壙は平面円形を呈し、規模は径約90cmほどであった。深さは80cmを測る。

出土遺物は**269**の染め付けの磁器碗と寛永通寶が３枚あり、そのうち**C656・C657**を図示した。いずれも新寛永である。

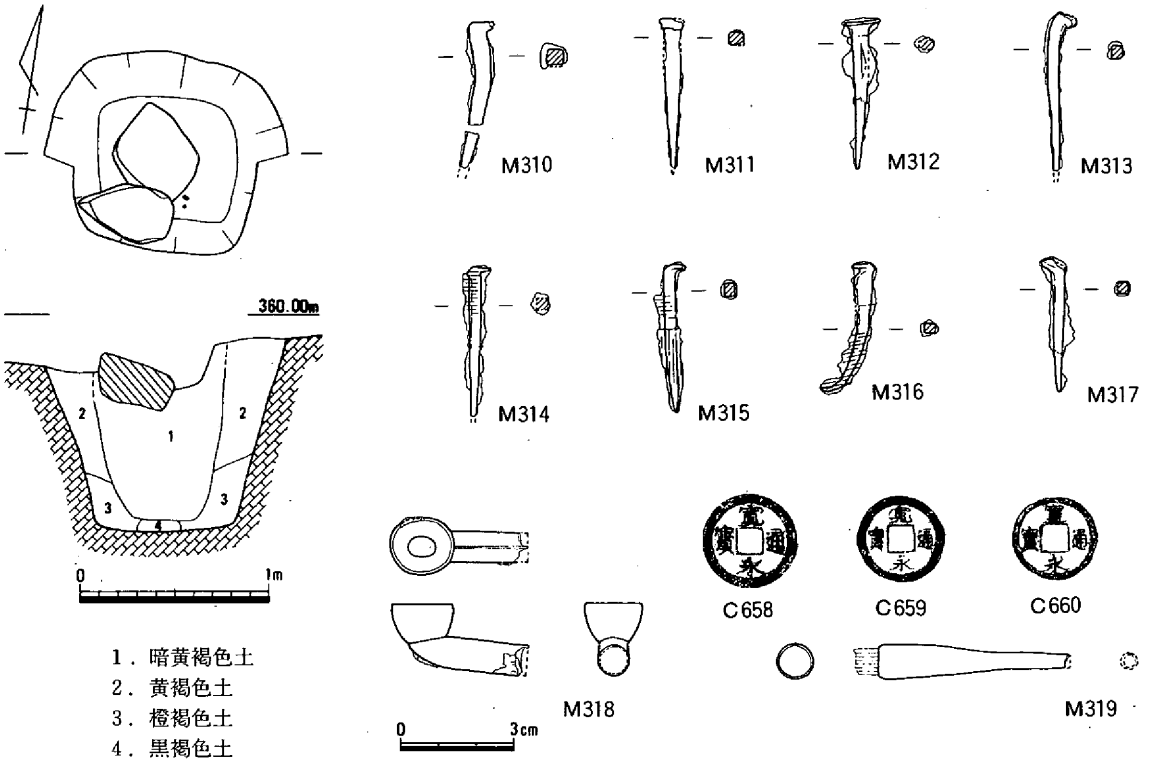
時期は江戸時代後半～末頃と推測され、列を構成する一群の中でも、土壙墓206に続いて造られたものと考えられる。

土壙墓208（第223図）

Ｇ３区、土壙墓198・土壙墓199の南にある。この土壙墓は列を構成しない。これは地形的な制約を受けたものと思われる。墓壙掘り方平面形は方形を呈し、一辺約130cmほどであった。深さは約100cmほどを測る。墓壙上面には墓石の台石状に面を水平にした一辺40cmほどの石が置かれている。墓壙底には人体の腐朽した痕跡か黒褐色土が観察された。墓壙の形状から組み合わせ式の座棺であったものと思われる。

出土遺物には棺緊結用の釘と副葬された煙管１本、銭貨６枚がある。図示した**M314～316**の釘にみるように木目方向の差異から棺材の厚さが２～３cmほどであったと推測される。煙管雁首の屈曲部はほとんどなく新しいタイプのものである。

土壙墓の時期については、やはり江戸時代後半～末と推測している。　（大橋）



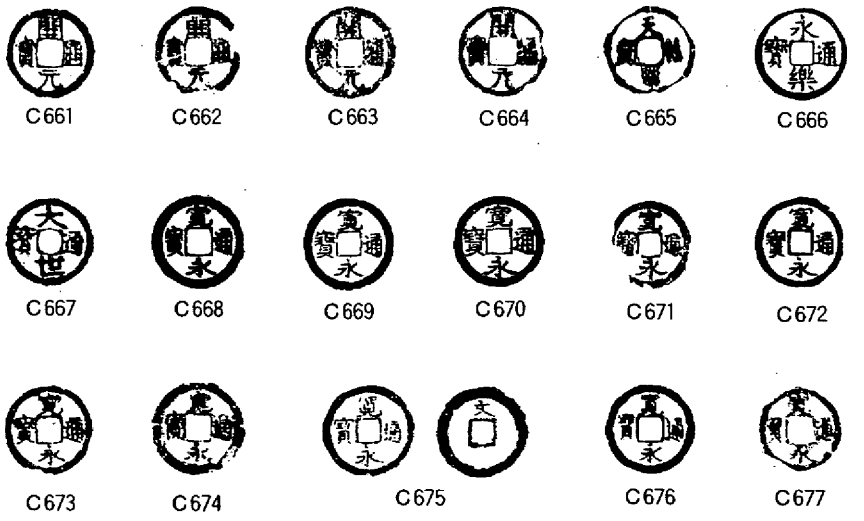
第223図　土壙墓208（１/40）・出土遺物（１/２）

（６）遺構に伴わない遺物（第224・225図）

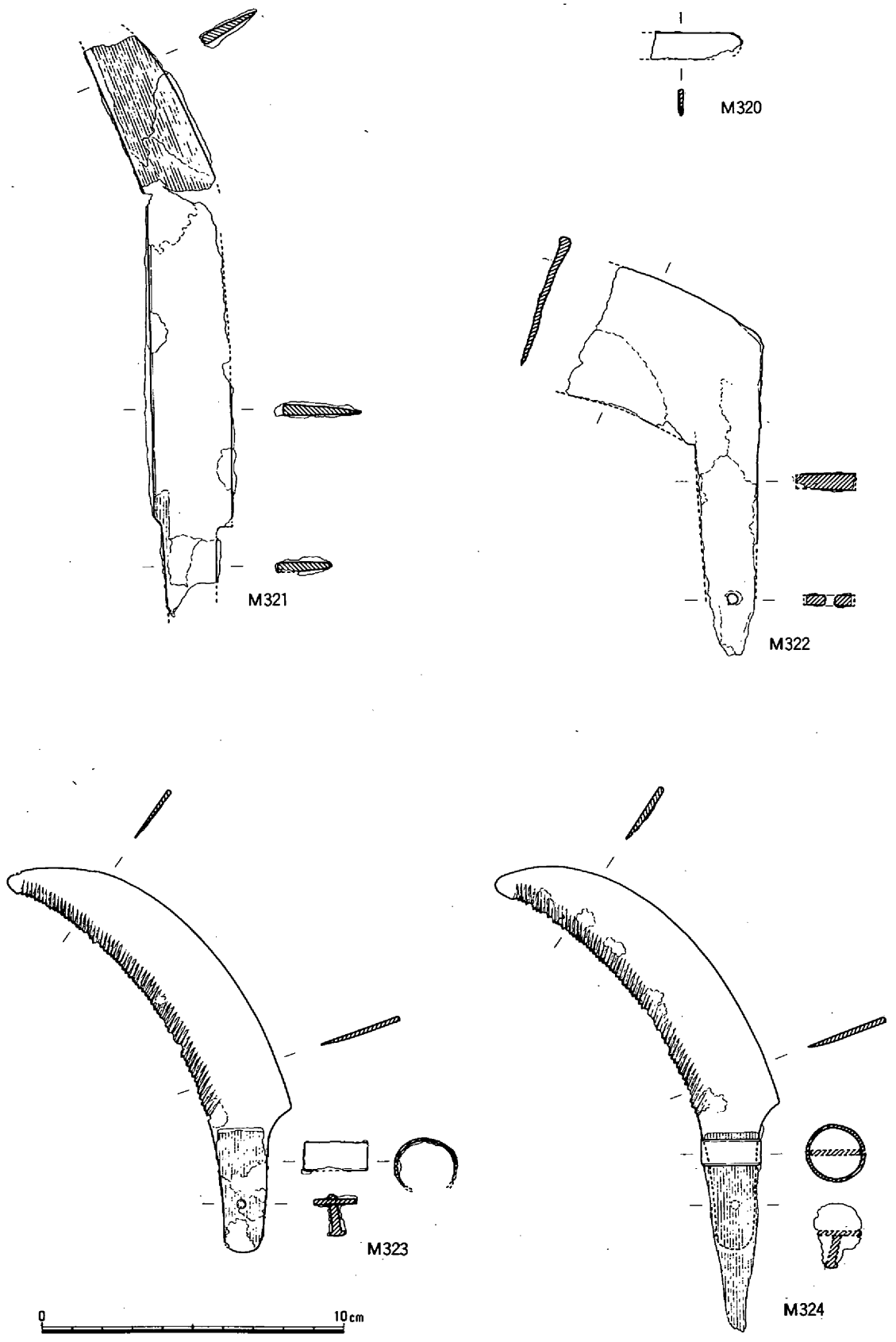
２・３区の丘陵上から出土した、遺構の所属が明らかでない遺物に銭貨および鉄製品がある。

銭貨は開元通寶**C661～664**・天禧通寶**C665**・永楽通寶**C666**・大世通寶**C667**の渡来銭、古寛永**668～674**・新寛永の文銭**C675**および**C676**・**677**がある。なお、大世通寶は琉球の銭貨である。

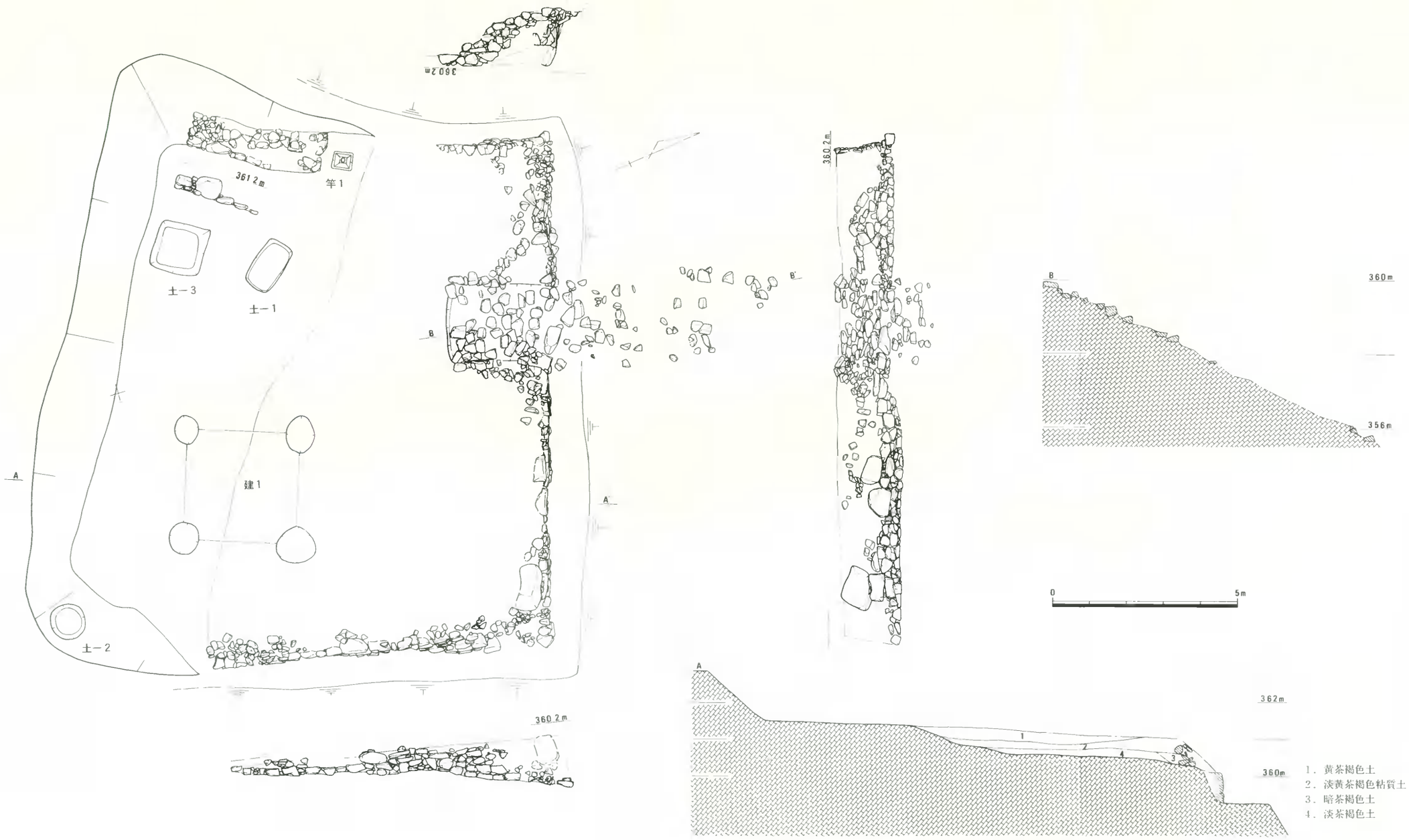
鉄製品はいずれも刃物で、**M320**は刀子である。**M321**は小刀で刃部に木質痕跡が残る。**M322～323**は鎌で、後２点は鋸刃が付いており、残存状況も良い。（江見）



第224図　遺構に伴わない遺物①（１/２）



第225図　遺構に伴わない遺物②（１/２）



第226図　４区遺構全体図（１/100）

第３節　４区の概要

遺跡は第１図から明らかなように独立丘陵上に展開しており、当調査区はその東斜面にあたる。丘陵東斜面が大きく削平され造成された平坦面をもつ４区は、前章で再三述べてきた、遺跡発見の端緒となった石塔群の所在する場所でもある。今一度旧地権者の話を聞けば、元々この造成面には北西に位置する竿墓のみが建てられていた。しかしながら、戦後の丘陵部開墾の際、出てきた竿墓をその前に列べ、その南に同じく五輪塔を積み上げ（第２図、図版68参照）、定期的に供養していた、とのことであった。以下、検出遺構および近世竿墓の概略を記す。

（１）造成面（第226図、図版68・69）

造成は丘陵東斜面を東西約15ｍ、南北約６ｍ、深さは丘陵側で約1.5ｍ余りの範囲を掘削し、その土で東部斜面が埋められたもので、北側および東西には平坦面形成とともに造成土の流出を防ぐための石垣が築かれていた。石垣は大小様々な自然石による野面積みがなされており、その距離は東辺約９ｍ、北辺約14ｍ、西辺約3ｍを測る。また、石垣は東辺および西辺では造成面の土量に従って丘陵側に減じているが、最も高さをもつ北辺では、下端から1.5ｍ余りの高さを残すところも確認されており、断面形状から推定すれば、造成時の石垣は約２ｍ余りの高さにまで築かれていたものと考えられる。このようにして施工された造成面は東西約13ｍ、南北約11ｍを測り、その面積は約145㎡を測る。造成面にはこのほか、丘陵南西裾から石垣が検出されている。用途および時期不明ではあるが、西辺の石垣と主軸線が通ることから平坦面造成の際になされたものと考える。

一方、北辺の中央西寄りからは北の丘陵裾に降りる石段が検出された。石段は崩落が著しく原形をとどめていないが、幅約２ｍ、長さは水平距離にして約９ｍを測る。

また、造成土中からは以下の遺物が出土している。前節の記述から判断されるように、集石墓は丘陵掘削部にまで延びていた可能性が高く、これのみならず、土壙墓など造成以前の埋葬遺構に伴った遺物も混入したものと考えられる。

出土遺物は土師質土器の小皿**270**をはじめ、瀬戸焼あるいは美濃焼の瓶子**271**、備前焼の壺**272**～**276**、備前焼の灯明皿**277**、肥前系の染付碗**278**などの器類と、銭貨**C678**～**680**であった。

271は灰白色の素地に緑灰色の釉がかかる、13Ｃ後半の年代観を示すものである。備前焼壺は玉縁のしっかりしたもの**273**、やや時代が下る三耳壺**275**、肩部に櫛描の波状文が描かれ16Ｃ代に下ると考えられる**274**などである。また、**278**は18Ｃ前半の年代観をもつもので、**277**の灯明皿もほぼ同時期と考える。**C678**は淳熙元寶で裏に「一」が、**C679**は紹定通寶で裏に「三」の番号が入っている。**C680**は永楽通寶である。銭貨は他に数枚出土しているが、いずれも渡来銭である。

以上、遺物の年代観からすれば、造成は18Ｃの前半、江戸時代の後半になされたものと考えられる。

（２）建物

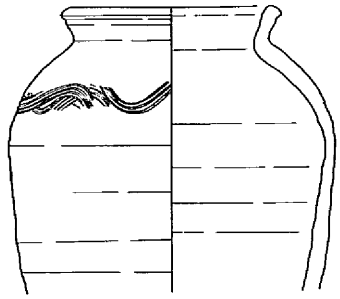
建物１（第228図、図版70）

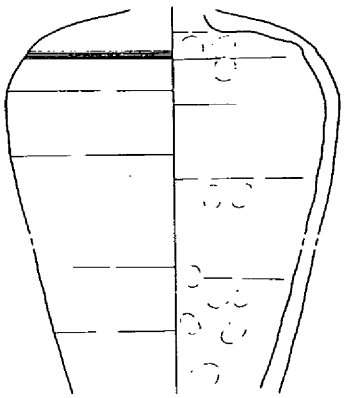
造成面の南東から検出された、１×１間の建物である。柱穴間の距離は東西３ｍ、南北3.2ｍを測り、僅かに南北方向に長いもののほぼ正方形を示し、9.6㎡、３坪弱の床面積を有す。検出面での柱

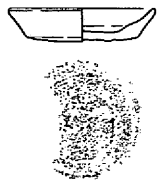
C678

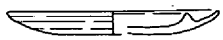
C679

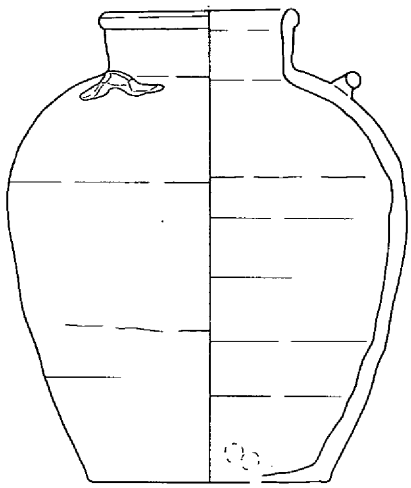
C680

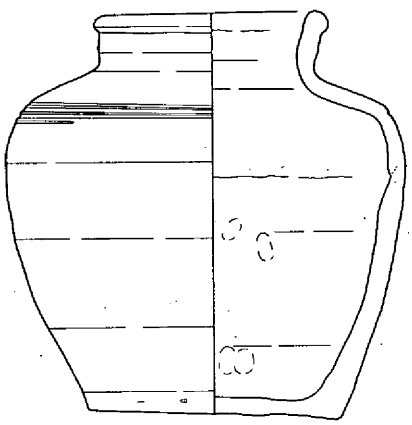

274

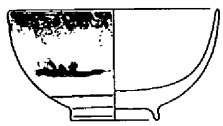

271

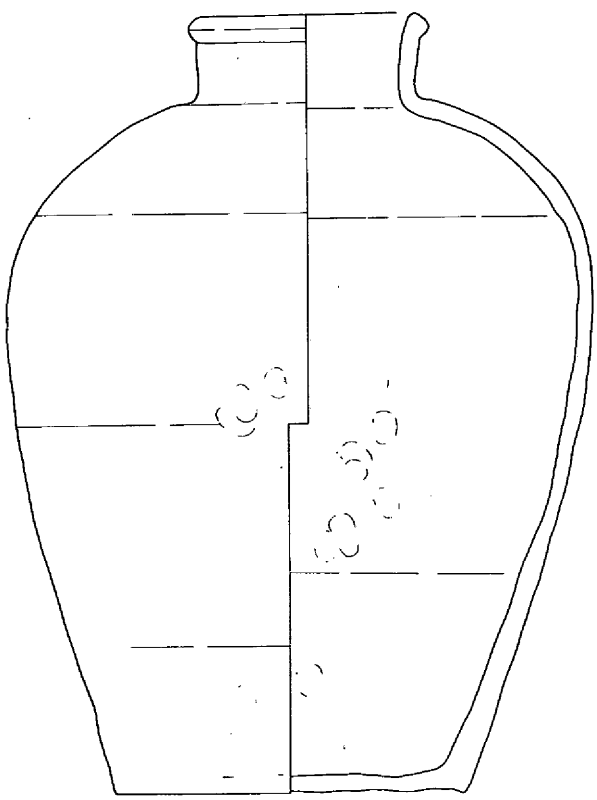

270

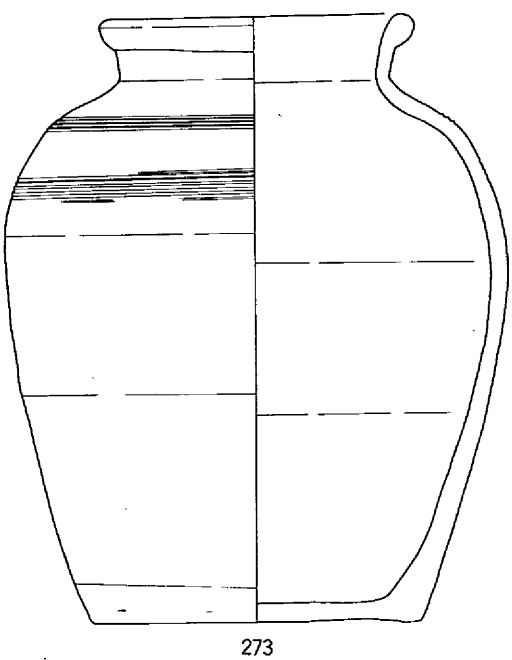

277


275


272


278

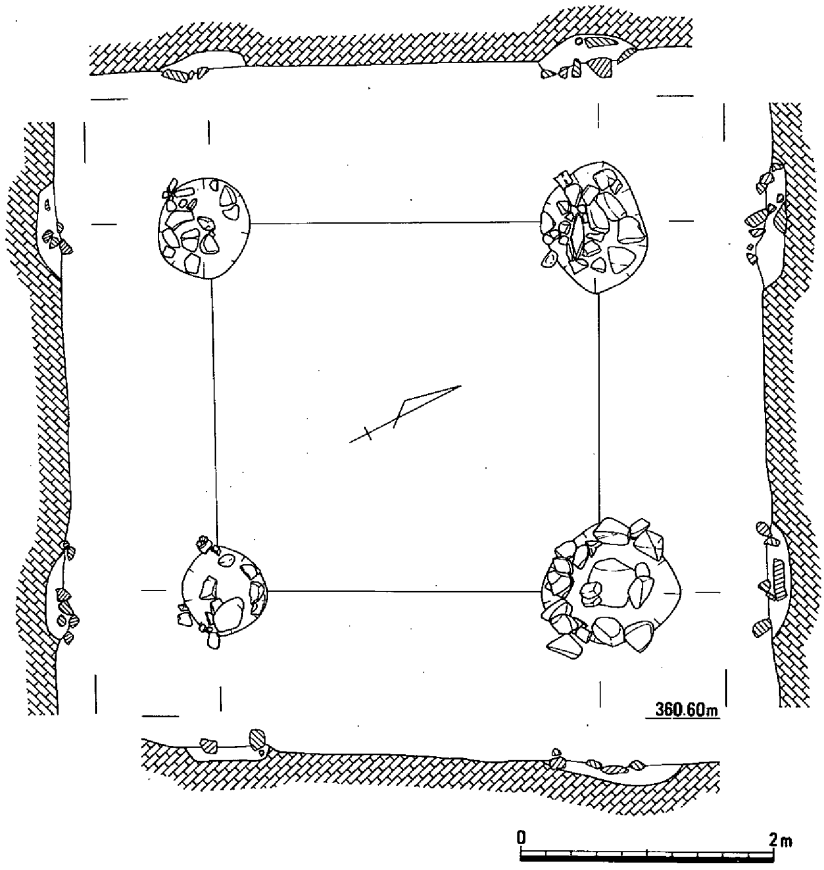

276


273

第227図　造成土中出土遺物(1/2･1/3･1/4)

穴径は70～110cmとばらつきが認められるものの比較的大形で、底部までの深さはいずれも20cm前後と浅い。柱穴内には20cm前後の石が多く見られ、北東の柱穴中央にはやや大ぶりの石が置かれていた。柱穴は検出当初、その規模および石の混入する状況が土壙墓と似ていたため、それと予測し調査を進行していたものであった。しかしながら、土壙墓にしては浅く、柱穴としても土壙墓と同様にその深さは問題が残るものであったが、これらが礎石建物の基礎部分と推測することによって、各柱穴の在り方が容易に理解されたものである。このことから、建物部分には本来土壇が築かれていたものと推定されるとともに、建物の廃棄時に礎石から上部が移動されたものと考える。

以上、造成に伴って建てられたと考えられる当建物は小規模ながら堅牢な造作であることを推測させた。一方、当調査地点の字はキョウノマエと呼ばれており、このことを合わせ考えるならば、建物は経蔵であった可能性が高い。

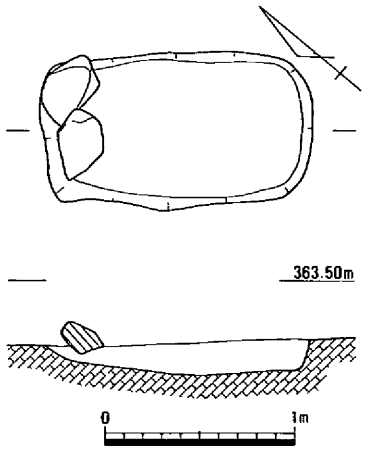


第228図　建物1（1/60）

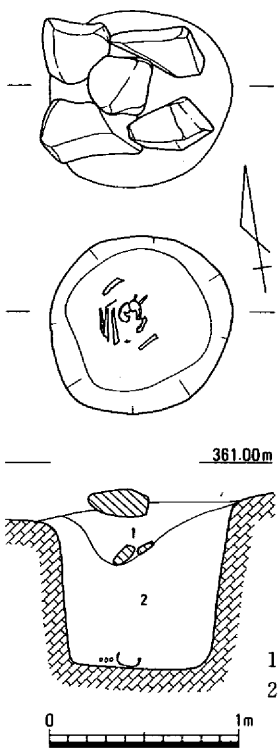
（3）中・近世墓

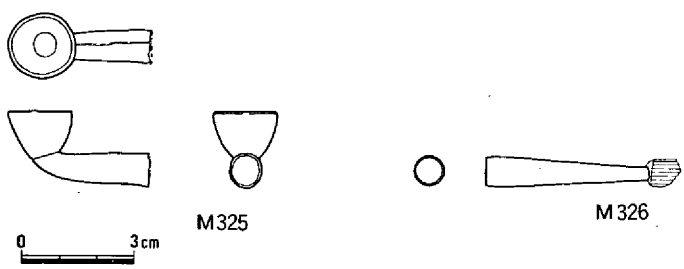
土壙墓1（第229図）

調査区の南西から検出された。平面長方形を呈し、規模は142×85cm、深さ18cmを測る。壁は北は緩く、南は急に掘り込まれており、底部は僅かながら南に傾斜している。墓壙検出面で北側から径30cm余りの石が検出されたが、壙内には橙茶褐色土が堆積するのみで、遺物は確認されなかった。なお、土壙の状況や、主軸が丘陵に沿っていることから、中世の土壙墓上部が造成によって削平を受けているものと判断され、当項に記した。



第229図　土壙墓１（１/40）





第230図　土壙墓２（１/40）・出土遺物（１/２）

土壙墓２（第230図、図版70）

調査区の南東、緩やかに北へ下る斜面に位置する。平面円形を呈し、規模は径96cm、深さ88cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。墓壙上部からは５個の石が方形を意識して配されていた。

墓壙内からは、底部から比較的遺存状況の良い人骨とともに布の付着した銭貨１枚および煙管１組**M325・326**が出土している。骨の鑑定から高齢（40～60才）の小柄な女性と推定される。煙管は火皿は椀形で、首部は短く、屈曲部は直線的である。銭貨は新寛永で2.99ｇを量る。なお、埋土の状況から径50cmの樽形の座棺が埋葬されたと推定される。

以上、当土壙墓は墓壙上部の状況および出土遺物から、造成面形成後、江戸時代後半に埋葬されたものと考えられる。

土壙墓３（第231図、巻頭図版４、図版71・82）

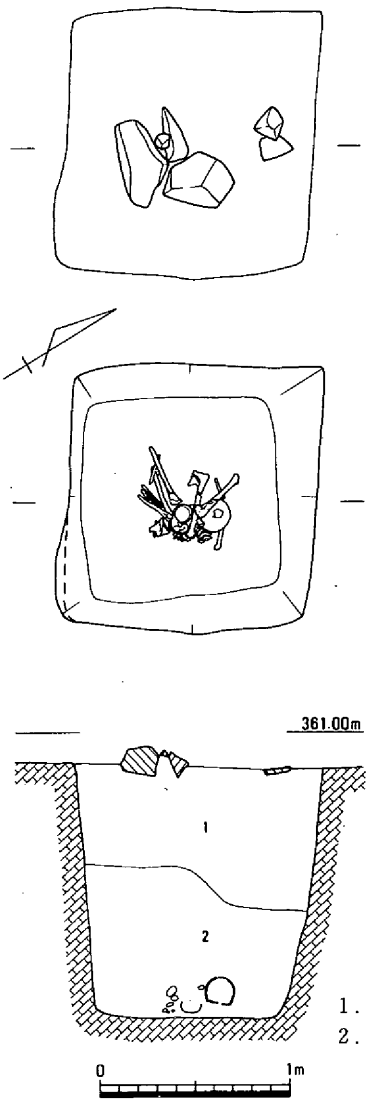
調査区の南西丘陵削平の下端に沿って検出された。平面形態方形を呈す大形の土壙墓で、規模は144×131cm、深さ134cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。墓壙上部には数個の石が検出されたのみで、墓標石は既に移動している状況であった。墓壙内は大きく２層に分かれたが、いずれも小石混じりの軟らかい土で、上層下部から備前焼灯明皿の破片**279**が出土している。

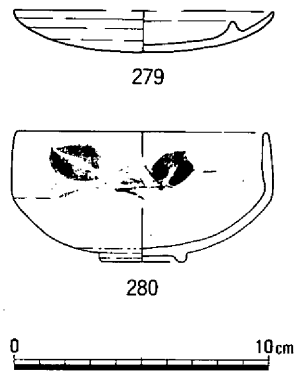
人骨および遺物は底部中央からまとまって出土した。人骨は頭部が北側、足が南側に位置し、中央から陶器碗**280**が出土しており、被葬者に持たせたように思われる。人骨鑑定によれば年齢（40～60才）の男性らしく、身長は158cmと推定された。また、その下部からは床面に密着して漆、銭貨56枚、環状の銅製品**M327**が出土している。漆は径10cm程の範囲に確認されたもので、椀の痕跡と考えられる。

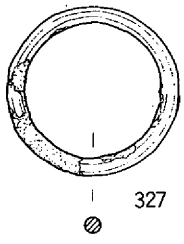
280は口径9.5cm、器高5.2cmを測る。素地は淡黄色を呈し、灰白の釉がかかる関西系の陶器で、18Ｃ前半～中葉の時期のものである。**M327**は用途不明であるが、直径4.6mmの円棒状の銅を最大径5.5cmを測る環にし

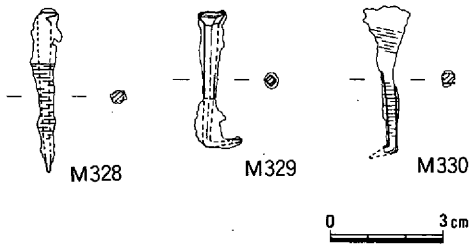
ており、表面には各所に布の付着が認められる。図示した銭貨はC681～685が古寛永、C686が文銭、C687～703が新寛永であるが、全体の内訳は元祐通寶１枚、古寛永５枚、文銭１枚、新寛永20枚、鉄銭１枚、癒着のため銭名不明28枚である。他に釘が10本出土している。

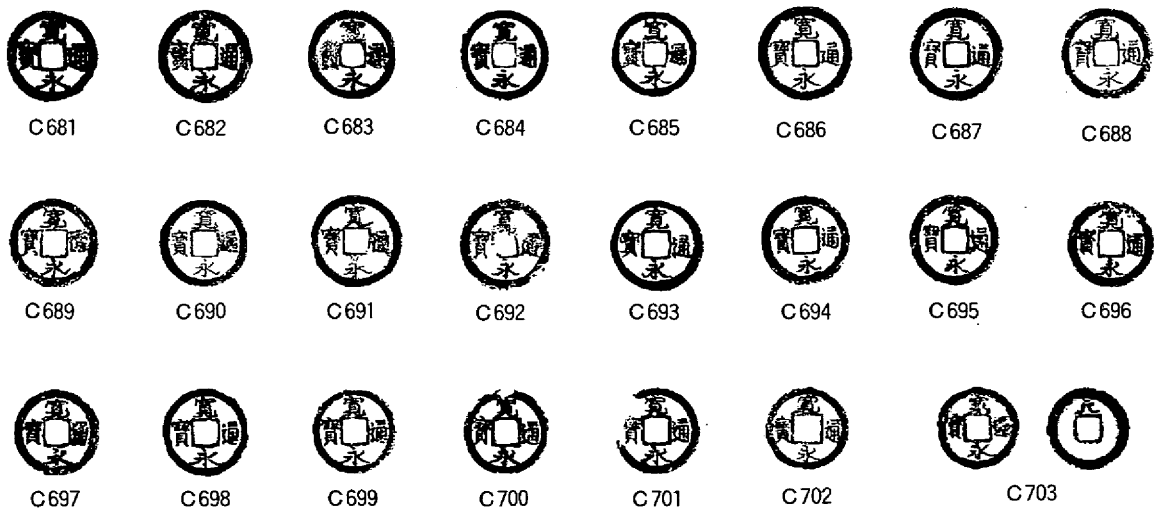
以上、当墓壙は規模および出土遺物から方形の組み合わせ式の座棺が利用され、18C中葉以降、江戸時代後半に埋葬されたものと考えられる。











第231図　土壙墓３（１/40）・出土遺物（１/３・１/２）

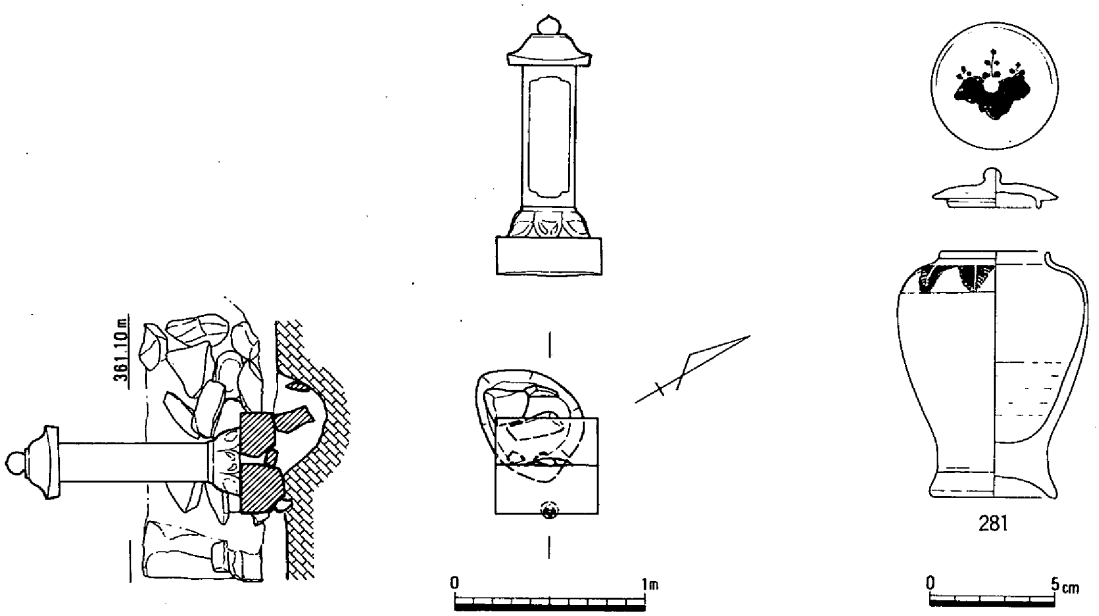
（４）近世墓石群

竿墓１（第232・233図、巻頭図版４、図版72）

調査区の北西に位置する竿墓である。花崗岩製の総高140cm余りを測る花崗岩製の立派なもので、夫婦と思われる戒名および没年が刻まれていた。右は根山意木信士、延享３年（1746）、左は了山妙宥信女、寛保３年（1743）である。

一方、墓の下部からは台石に押し潰されそうな状況で小型の磁器壺**281**が埋め置かれ、その後方からは平面不整円形を呈す土壙が検出された。規模は70×50cm、深さ25cmを測り、壙内からは数個の石が出土したものの、墓壙としての形状は示さなかった。このことから、墓は２次的にこの場所に建てられたものと判断される。なお、下部の土壙は墓石の安定を図るために掘られたものと理解される。

また、明らかに墓と関連付けられる位置から出土した**281**は器総高約11.5cmを測る。蓋に桐文、壺



第232図　竿墓１（１/40）・出土遺物（１/３）

近世竿墓一覧

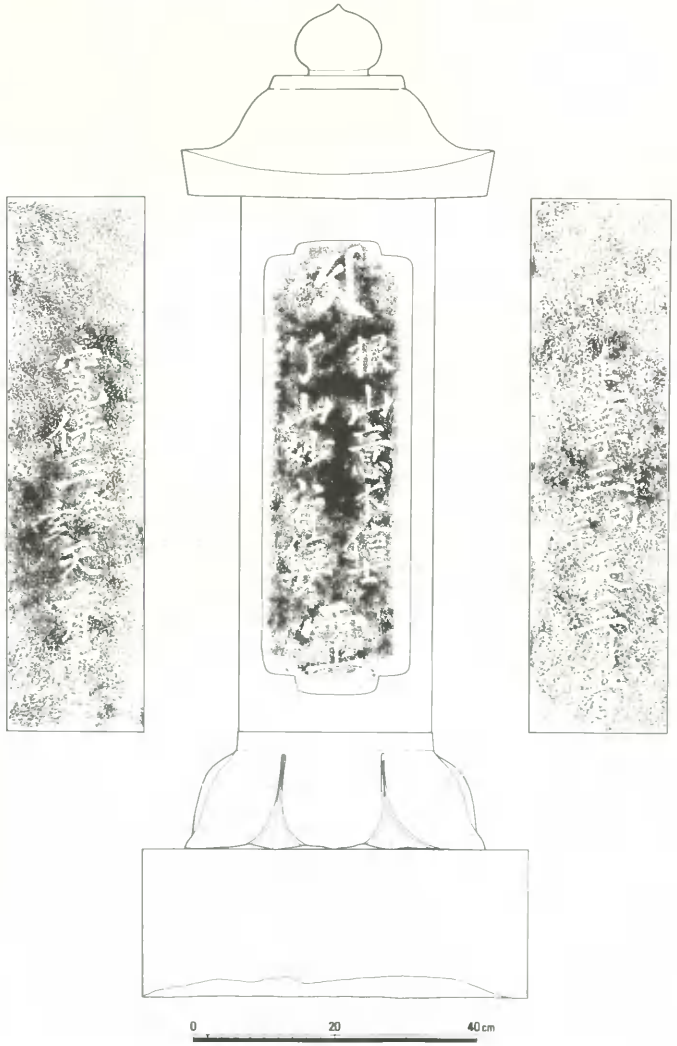
番号	戒　名	西暦	年　号	備　考	番号	戒　名	西暦	年　号	備　考
1．A	根山意水信士	1746	延享３年３月５日		9．	道連禅定門	1743	寛保３年８月11日	
B	了山妙宥信女	1743	寛保３年２月10日		10.	樹山了意信士	1744	延享元年11月11日	
2．	妙道禅定尼□位	1690	元禄３年９月11日		11.	妙春尼	1751	寛延４年３月30日	
3．	妙秋禅定尼□	1698	元禄11年10月４日		12.		1771	明和８年10月	□屋権助
4．	道秋禅定門□	1700	元禄13年８月10日		13.	速往禅定門	1825	文政８年８月10日	藝州山　郡川内村　勝蔵32
5．	道秀禅定門□	1705	宝永２年９月16日		14.	發心者快禅	1831	天保２年８月12日	伯州倉吉産
6．	秀山妙長禅定尼□	1718	享保３年10月13日		15.	帰本浄應信士	1831	天保２年３月12日	備中浅口郡鴨方　弥平
7．	秋祐禅定門□	1721	享保６年７月17日		16.	常念禅門	1860	安政７年７月７日	
8．	教順禅門□	1737	元文２年10月15日						

に芭蕉文を配した肥前系染付であるが、その年代観は17Ｃ後半であり、被葬者より約90年余り遡る。

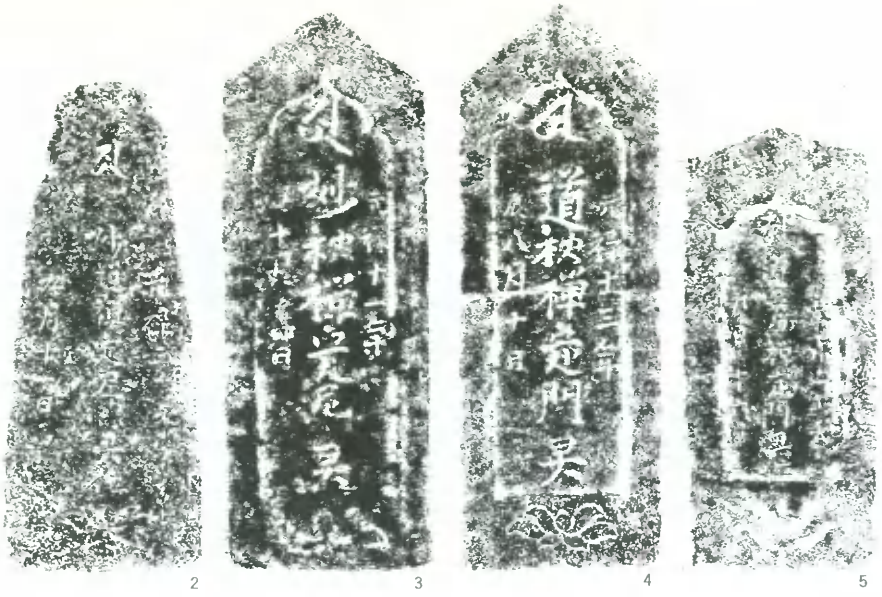
以上、当竿墓はそれを取りまく石垣や墓標の位置、旧地権者の話などを総合すれば、造成面が形成され、建物が存続していた時期に建てられたものと推定される。

竿墓２～16（第234・235）

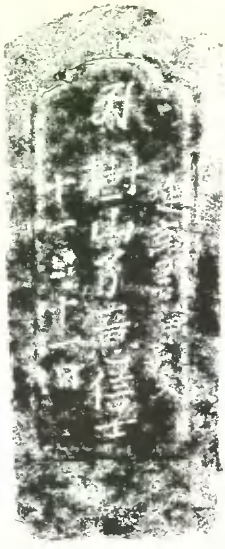
丘陵部から移動されたもので、２・３区で調査した近世墓のいずれかにあたる。個々の墓壙に比定することは困難であるが、少なくとも元禄３年（1690）～安政７年（1860）の墓の所在することが明らかとなった。表に記して資料としたい。　（江見）



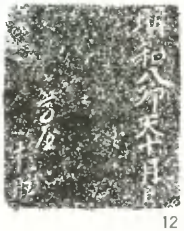
第233図　竿墓１（１/８）



第234図　竿墓群１（１/８）


10

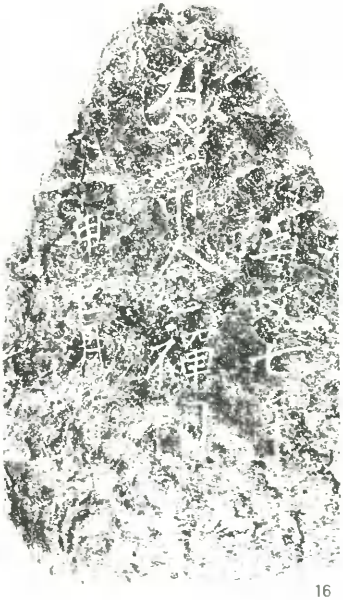
11


12

13

14

15


16

第235図　竿墓群２（１/８）

第４節　５区の概要

大村寺の縁起については天平年間に創建され、その後衰退したところ建保３年（1215年）に再興されたということである。創建の時期がどこまで遡り得るかは不明であるが、再興時には檀度坊・精進坊・般若坊・浄戒坊・安忍坊・谷坊の６ヵ坊が存在したようである。現在の地名からこの内の般若坊が、現在の大村寺の南で、山門から南に伸びる参道の西に位置していたと想定される。ここには平坦面が形成されており、中国横断自動車道用地はこの南西隅をかすめることとなった。

般若坊に想定される５区は、標高350ｍ、集石墓の所在する丘陵の北裾に位置する。この間の比高は14ｍを測る。標高352～353ｍ付近から丘陵を「Ｌ」字状に削り、351ｍからは石垣を築くためにさらにカットしている。

検出された石垣は、坊の南西隅に当たる部分のみで、南北にどれだけ伸びていたかは不明である。隅は緩やかに湾曲しており、現存で延長6.2ｍ、高さ1.2ｍを測る。自然石を積み上げたもので、裏込めには栗石等はなく暗赤褐色砂質土の埋土が認められるだけである。また、基底部についても上部の石材と同じように積まれているだけである。

石垣の他に遺構や出土遺物などは確認されず、石垣の築造時期は不明である。（柴田）

第236図　５区遺構全体図（１/100）

第５節　６区の概要

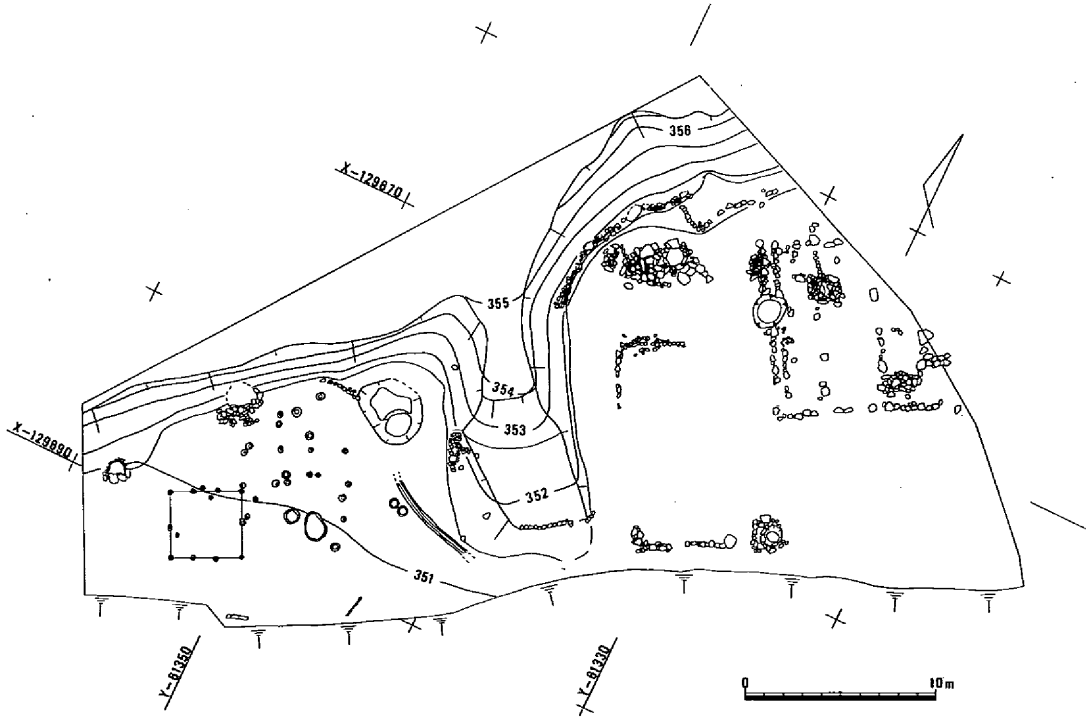
本調査区は２・３区の南東の丘陵南斜面にあたる。用地内には２か所に丘陵を掘削した造成面が確認されていたことから、東をＡ区、西をＢ区と呼び調査を実施した。

Ａ区は平坦面の約半分が用地外へ延びている。遺構は、調査区東寄りから北側および南側に１列、西側に２列の石を配した建物が検出された。東西約10ｍ、南北約９ｍを測る。その他には礎石などいくつかの配石を確認することは出来たが、主柱などは復元するに至らなかった。

また、建物の西部の丘陵裾からは井戸が検出された。周囲を石で囲まれた石組みの井戸で、内径約１ｍ、深さ2.5ｍを測る。このほか建物の南方には矩形に配された石列が検出されるとともに、丘陵裾には石垣が巡らされていた。出土遺物は中世遺物も混入するものの、大半が幕末から明治にかけての陶器と判断されるものであった。

一方、Ｂ区においては掘立柱の建物跡および北隅から池状の穴、石組みの井戸２基などが検出されたが、遺構検出中に出土した陶器類はＡ区とほぼ同時期を示す。また、井戸からは明治以降と考えられるガラス製の目薬容器、地下足袋などが出土し、比較的新しい時期まで使用されていたことが判明した。

以上、当調査区は近代の可能性が高く、調査は早々に切り上げた。　（江見）



第237図　６区遺構全体図（１/400）

第6節　まとめ

（1）集石墓について

立地

集石墓群は、賀陽町の北西端に位置する丘陵（標高364m）の頂部から南あるいは東斜面を中心に展開している。この丘陵の南には佐与谷川が谷深く流れ、集石墓からの南への眺望は優れている。また、現在の大村寺・檀度坊との関係で見ると、この丘陵は、寺のほぼ南正面、浅い谷を挟んで約150m離れており、寺からの南への視野を遮るように横たわっている。集石墓は平地でも見られるが、寺の周囲や境内などの丘陵部に位置することが多く[(1)]、当遺跡の集石墓も後者の例である。このような（集石）墓の立地は、それぞれの地域における宗教あるいは他界観、選地に係る思想や慣習を背景にしており、社寺や集落の位置やその消長とも相互に関連していると思われる。この点については、今後分析と検討が必要である。

構造

集石墓の区画設定は上層の石を除去した後、石の並びや蔵骨器の検出状況などを手がかりにして行った。しかし、長期にわたる区画の追加や重複、後世の移動等により、この作業は極めて困難であった。区画が比較的明瞭なものなどを見ると、規模は様々だが方形や長方形の区画が基本で、その中に備前焼や亀山焼が蔵骨器として据えられている。これは中世における集石墓の普遍的な形態と考えられる。これらの蔵骨器は据えるための掘り込みを持つもの、持たないもの、集石の間でおさまるものなどがある。

このような掘り込みとは別に、集石墓28Aと30では蔵骨器の直下に土壙を伴っている。両者に共通する特徴は、土壙の埋土に炭などが多く含まれている点と土師質小皿が埋納されている点である。土壙の壁面や周囲に被熱状況は確認できず、また埋土中に骨片も認められない。これが荼毘（火葬）の後一切の骨片を取り上げて蔵骨器を据えたものか、蔵骨器の埋納に伴う儀礼であるかは判然としない。土師質小皿はいずれも底部ヘラ切りであり、亀山焼の甕も平底で、最大径に対して器高の低い器形であることなどから、両者は非常に近い時期と考えられる。

荼毘跡については、調査区内でその確実なものは認められなかった。基本的には、別の場所で火葬が行われたものと思われる。また、集石墓30は蔵骨器の脇に墓標と考えられる方柱状の自然石が立てられており、五輪塔などを除く墓標としては珍しい例であろう。

遺構との関連が確認された蔵骨器は73個体（備前焼28個体、亀山焼34個体、土師質土器11個体）である。一方、遺構との関連が確認されなかったものは35個体（備前焼29個体、亀山焼2個体、その他4個体）である。このように用いられた蔵骨器は備前焼が優勢で、器種では、備前焼で壷、亀山焼で甕が圧倒的である。また、15ヵ所で集石の間などに火葬骨がまとまって検出されたことから、蔵骨器を伴わない火葬骨の埋葬も認められる。

調査区内では石塔の石材が散乱しており、組合せ式五輪塔で約280基以上、宝篋印塔で約20基以上が立てられていたと推定される。火葬骨の分布（15ヵ所）や蔵骨器の数量（108個体）に比べかなり多いと思われる。蔵骨器1基に対して火葬骨1体分のみが納められたかどうかの問題があるが、造塔

は墓標としてだけでなく追善供養などに際しても行われていたのではないかと考えられる[2]。石塔は散乱して出土しているが、宝篋印塔については丘陵頂部にやや多く分布しており、この付近と他の集石墓の被葬者との間に何らかの差が認められる可能性がある。

大村遺跡の集石墓について、個々の墓の構造にはあまり差異が認められない。しかし、外表の石塔については本来立てられた位置は確認できないが、宝篋印塔と五輪塔という種類やそれぞれの大きさ、分布には差が現われている[3]。

時期（表1）

集石墓の時期については埋納されていた蔵骨器をもとに推定した。特に数量の多い亀山焼の甕と備前焼の壷について取り上げ、大村遺跡でのⅠ～Ⅴ期として概要を述べる[4]。

Ⅰ期の亀山焼は平底で、最大径が体部上半にあり、口縁部は斜め上方に長くのびる。外面は格子目タタキ、内面はハケメやナデが認められる。この時期の備前焼は確認されていない。

Ⅱ期の亀山焼は平底で、最大径が体部中央にある。また、最大径は器高より大きく、特徴的な器形を呈する。口縁部は厚く、短く屈曲しており、端部に面を形成する。体部内面には同心円の当て具痕が残されている。内面はナデを施すものもある。備前焼**168**は須恵質で、肩が著しく張る。口縁端部は断面三角形を呈し外方へのびる。肩部に3～4条のヘラ描き沈線が巡る。

Ⅲ期以降の亀山焼は大形のものが増加し、丸底のものが認められるようになる。また、Ⅲ期はさらに3つに細分されると考えている。

Ⅲ期前葉は個体も少なく特徴がはっきりしないが、亀山焼は端部に面を持つ口縁部が若干水平方向にのびる傾向がある。備前焼は肩部の張りがやや小さくなり、口縁端部は玉縁を呈する。

Ⅲ期中葉の亀山焼は口縁部が斜め上方にのび、端部が肥厚している。体部内面は同心円の当て具痕が残り、口縁部内面にはハケメが施されている。備前焼は器形において、Ⅱ～Ⅲ期前葉の特徴を残しているが、肩部に波状文を施しており、より新しい時期の特徴を有する。3と1は埋納段階で共伴関係がある。

Ⅲ期後葉の亀山焼はほとんど丸底と思われ、口縁端部は下方に拡張している。体部内面はハケメが施されるが同心円の当て具痕が残存する。この期の備前焼は明確ではないが、Ⅳ期の一部が該当する可能性もある。

Ⅳ～Ⅴ期は時間幅が非常に大きく、さらに細分が必要と思われる。特に亀山焼ではその作業が困難で、またどの程度両方の時期にわたるものかも検討が必要である。備前焼によってこの時期をⅣ期とⅤ期に分けたが、これもまだそれぞれ細分が必要と思われる。Ⅳ～Ⅴ期の亀山焼は口縁部が比較的緩やかに「S」字状に湾曲し、口縁端部に面を有し上方にのびている。体部内面はハケメを施しているが同心円の当て具痕が残るものもある。口縁部内面にはハケメが施されている。

Ⅳ期の備前焼は肩部と底部の径の差が小さいものが多く、口縁端部は押さえたような玉縁状を呈する。また、三耳壷や雀口を有する小形壷、摺鉢などが出土している。

Ⅴ期の備前焼は口縁部が非常に短く屈曲し、端部は外方へわずかに出ている。肩部と底部の径の差はかなり小さい。

以上の時期の年代観については、他遺跡の例をもとに推定したい。平行タタキを有する亀山焼は、百間川米田遺跡の土壙159[5]や亀山遺跡[4]の第1段階とされるものが12世紀末～13世紀前半に位置付けられている。一方、大村遺跡出土の亀山焼には平行タタキが施されたものは認められない。このことか

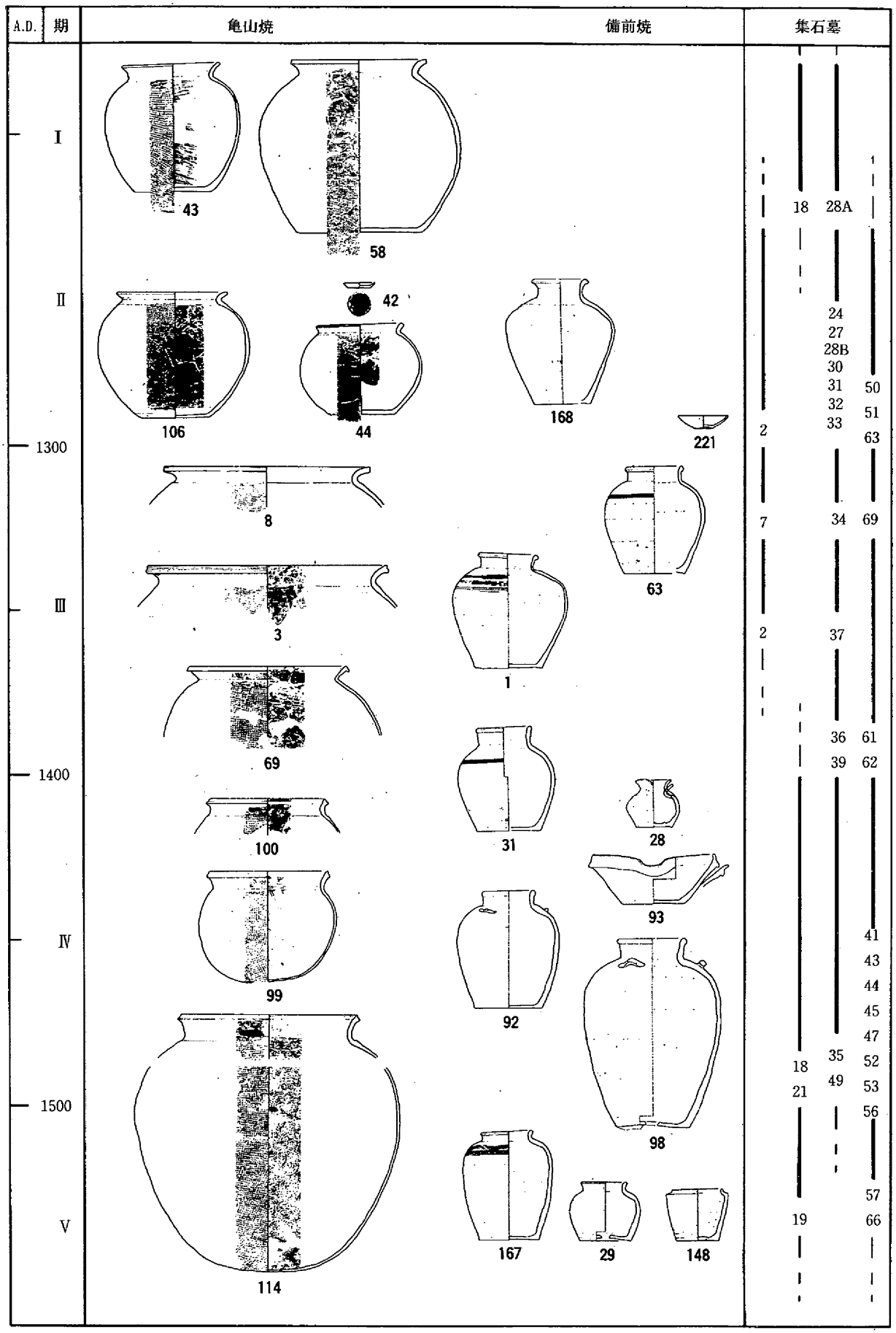


表１　大村遺跡編年表（S＝1/12、一部土師質土器含む）

らⅠ期は13世紀中葉以降と考えられる。また、亀山遺跡ではⅡ期の特徴を有する亀山焼が土師質高台付椀などから13世紀後半～14世紀初頭に位置付けられ（亀山遺跡第3段階）、Ⅲ期前葉の特徴を有する亀山焼が埋甕に利用されており、供伴する高台を持たない土師質椀から14世紀前半～中葉の時期を与えられている（亀山遺跡第4段階）。また、Ⅳ～Ⅴ期の亀山焼については、百間川当麻遺跡の井戸2で備前焼壷とともに出土しており、この期が16世紀代まで及ぶと考えられる。

以上のことから大村遺跡の集石墓は13世紀中葉～16世紀にかけて営まれたものと考えられるが、今後十分な検討が必要である。

時期別分布と変遷（第238図）

残存していた集石墓について、時期別の蔵骨器分布状況からその変遷を考えてみる。この時、墓の区画以外に確認された墓道と推定される道状の集石空白地帯にも注目する必要がある。この墓道は丘陵の北東斜面から頂上に向かってのびるもの（墓道A）とその途中で南へ折れるもの（墓道B）が明瞭で、他にも南裾付近を通るもの（墓道C）があるようである。

Ⅰ期では、墓道Aが頂上にさしかかった地点に集石墓18、墓道AとBが分岐し二叉になる地点に集石墓28が配置されている。これ以後、集石墓28の支群はこれを核として、墓道Bに沿って列を形成し、列は南東に向かって発展している。この期では、確認できる範囲において2つの被葬者集団が想定され、造墓を開始したと考えられる。

Ⅱ期では集石墓28の支群の他に、墓道Aの北、墓道Bの東、墓道Cの北にも新たに集石墓が配置されており、拡大分散傾向にある。Ⅱ期は蔵骨器の数量が比較的多く、集石墓の前半期のピークを示すようである。この期では、確認できる範囲において5～6つの被葬者集団が想定される。

Ⅲ期の蔵骨器はⅡ期と比較すると減少傾向にある。またこの期には、土壙墓68が認められており、他にも土壙墓が存在する可能性もある。Ⅲ期の減少傾向が、この地を葬地とする被葬者やその集団自体の減少に伴うものか、埋葬地の変化あるいは土壙墓の増加などによるものかは不明である。

Ⅳ～Ⅴ期になると、集石墓はさらに群の南辺に展開している。そして、備前焼の蔵骨器の割合が亀山焼を凌ぐようになる。遺構に伴う蔵骨器の分布を見ると、この期は集石墓造墓の中で最も盛んな時期である。中でもⅣ期に集中し、Ⅴ期ではやや減少傾向にある。ただし、Ⅴ期に属する遺構に伴わない蔵骨器が多少ある。また、Ⅴ期のある時期からは埋葬方法が土壙墓へと変化し、集石墓は消滅するようである。このためⅤ期の埋葬数は大きく減少はしない可能性もある。Ⅳ期で確認できる範囲において8つ前後の被葬者集団が想定される。

以上、13世紀中葉頃から造墓を開始している大村遺跡の集石墓は、その後大きく断絶することなく16世紀のある時期まで造墓活動が続けられる。この間の特に後半期は、並行して土壙墓も認められ、やがて集石墓＝火葬は行われなくなり近世初頭の土壙墓群へとつながると考えられる。しかしこの内、14世紀代はやや造墓活動が鈍っており、原因として何らかの背景があったものと思われる。

最後に

集石墓の時期と変遷について、その意味を一つの考え方として以下に示すことにする。

大村遺跡の集石墓が展開していた時期は、鎌倉時代中葉から室町時代後半にかけてである。その直前の時期に相当する鎌倉時代前半頃、賀陽町北西部、旧上津村では、大村寺が法相宗から天台宗に改宗し再興されたとされている。大村寺の基盤となる地域は、北東に拡がる「多気庄」付近一帯と考えられ、再興の背景には荘園領主や有力荘官層などの強力な外護があったと思われる。

第238図　集石墓変遷図

続く鎌倉時代中葉～末期は、有漢の秋庭氏が備中中央部を支配していた頃で、賀陽町南部の旧北村では伊達氏が地頭に補任される（1274年～）など、鎌倉幕府の支配が強まった。この伊達氏は新興の日蓮宗妙本寺の外護者でもあり、賀陽町南西部で勢力を強めていた。Ⅰ～Ⅱ期にかけての集石墓の状況は、こうした大村寺の再興と、承久の乱の後全国的に強力に進められた鎌倉幕府の地頭の配置あるいはその地頭に対抗し得た有力荘官層などの動きを反映していると考えることも可能である。

鎌倉時代末期～南北朝にかけては動乱期であり、また従来の荘園制から守護領国制への転換期でもある。この頃、「多気庄」は有力な荘園領主のもとにあったが、備中は細川氏などが守護を任ぜられており、また当地は依然として秋庭氏の勢力が強く、町の南西部では伊達氏が勢力を保っていたようである。Ⅲ期における集石墓の減少傾向は、伊達氏や中小武士団との緊張関係や守護の権力増大に伴って相対的に弱体化した「多気庄」の有力荘官層の様子を反映していると思われる。

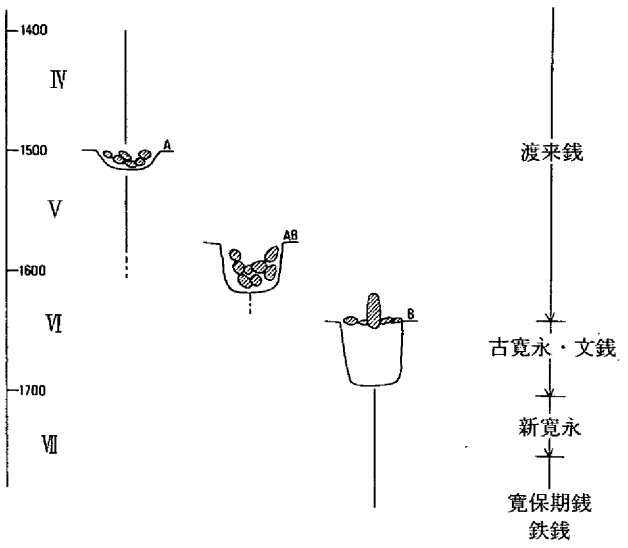
室町時代前半は、守護の支配が一層強まり、これまで対抗していた伊達氏の勢力は急速に衰える時期である。こうした中で、既に国人層や有力名主層の成長が顕著になってきていると思われる。このような社会背景により、Ⅳ期に最も盛んに造墓活動が行われた状況が読み取れる。ただし、墓域に大きな変化はなく、国人層は荘官層の系譜を引くものと思われる。

これら集石墓の終焉時期については、室町時代後半でもその前半か後半まで下るのか明確な時期が捉えられない。ただ、応仁の乱以後、緊張の高まる世相となり、当地で鎌倉時代以降守護あるいは守護代として備中中央部に影響力を持っていた秋庭氏が，1509年を境に勢力を失うなど大きな社会的政治的変化が見られる。これらが、大村遺跡を取り巻く地域に大きな影響を及ぼしていることは十分考えられるところである。ただ、大村遺跡における集石墓の終焉は墓域の断絶ではなく、基本的に土壙墓への移行と考えられる。このため、火葬墓から土壙墓への転換は、社会背景以外に思想や慣習の変化を原因とすると思われ、今後の検討が必要である。（柴田）

（2）土壙墓について

前節で概述してきたように、当遺跡からは総数211基におよぶ土壙墓が検出された。平面径数10cmの小規模なものから一辺が2m余りの大型のもの、円形から方形に至る様々な形態のものが確認された。これら全てを墓と断定するには躊躇されるが、人骨が遺存する小規模土壙墓の検出例として津寺遺跡の中世墓－2[7]がある。平面楕円を呈すそれは土壙上部の残りが悪いもののその規模は約80×約60cmを測り、これを指標として当土壙墓群に当てはめた場合、当土壙墓群はこの規模と同様ないしこれを凌駕するものが多くを占めた。このことから、当土壙墓は規模からすれば大半が墓として差し支えないものと考えられる。さらに、これより小規模な土壙にあっても釘が出土した土壙墓47のように、墓と断定はできないが、否定することも躊躇された土壙もいくつか検出されており、これらもまた土壙墓として取り扱った。以下、その流れを簡単にまとめておきたい。

検出された土壙墓は土壙の形態から深さ60cmまでの浅いAタイプとそれ以上の深いBタイプに大別され、これらは平面規模と合わせ考えれば、前者においては被葬者は横臥あるいは仰臥屈葬が、後者においては座棺が推定される。また、Aタイプは墓壙上部に堆積した集石が底部付近にまでおよんでいる例が多く、Bタイプにおいては上層でおさまるものが大半であったが、一部下半におよぶ過渡的なABタイプが認められた。このことから推定するに、AおよびABタイプは埋葬時に墓壙上部に山のように集石されていたものが、墓壙内の腐朽に伴って陥没したものと判断される。一方、Bタイプ



第239図　土壙墓変遷概念図

では墓壙上面を比較的扁平な石により区画がなされ、中央に墓標石を配置されたものが多く、上部の石が墓壙下部にまで達する程の重量はなかったものと思われる。そしてこれらの土壙墓は主にＡタイプには中世遺物、Ｂタイプには近世遺物、ＡＢタイプには中世から近世へかけての遺物の共伴することが明らかとなった。次に共伴遺物のある土壙墓をもとにその在り方の検討を行いたい。

土壙墓群の中で最も古く遡ると考えられるのはＤ６区の土壙墓２である。集石墓６および７の調査後にその下部から検出され、埋土の状況から火葬の可能性が示唆されたもので、時期的には共伴遺物からⅠ期以前の平安時代の範疇に属すものと考えられるが、ほかに同時期の墓は確認されていない。

13世紀以降集石墓が造墓されていく中で、Ⅱ期末Ⅲ期初頭に属すと思われる土壙墓が１例のみではあるが検出されている。集石墓群の南西端に位置する土壙墓68で、墓壙は深さ44cmと浅く平面形態と合わせ考えれば、被葬者は横臥ないし仰臥屈葬されたものと推定される。なお、遺物は土壙東部床面から出土した土師質土器椀１個のみであった。この期の土壙墓は周辺に何基か所在する可能性は否定できないものの、当該時期の遺物は極めて少なく、集石墓とともにあまり多くは所在しなかったものと考える。

継続的に土壙墓が捉えられるのは、後述する土師質土器の年代観から少なくともⅣ期以降と考えられる。しかしながら、集石墓のように現段階では細分することは出来ず、Ⅳ期からⅤ期前半の長期にかけて、Ａタイプの土壙墓が少なくとも40基余り造墓されている。この期の土壙墓からは土師質土器、特に小皿が１枚から数枚出土するもの、渡来銭が含まれるものなどが多く、平面形態が楕円形を呈し、規模が80cm前後のやや小規模なものと、方形あるいは長方形を呈し長軸が１ｍを越える比較的大形のものが認められた。これらは集石墓の南西部周辺から南東部にかけて検出され、いずれも規則性は認められなかったものの、南西部のそれはやや小規模で、重複するものが多く見られた。なお、土壙墓26・56・73・99からは毛抜・剃刀・小刀など刃物類が共伴している。

Ⅴ期後半からⅥ期前半になるとＡＢタイプの土壙墓が集石墓の墓道Ａに沿った部分および集石墓群の南部から10数基検出されており、後者は墓壙の主軸が南北方向を向くものが多く認められた。また、この期には土壙墓91に見られるようにＡタイプの墓壙もいくつか残っており、屈葬から座棺への変換期と捉えられる。

Ⅵ期後半以降の土壙墓はＢタイプに限られた。棺は方形の組み合わせ式の木棺が利用されたものと樽状の円形を呈す、いわゆる早桶と呼称されるものの２種に大別されたが、その痕跡を明瞭に捉えられたものは少ない。

土壙墓は共伴した寛永通寶の鋳造期を参考に、古寛永および新寛永の文銭を伴う17世紀中葉～18世

紀初頭（Ⅵ期後半）、新寛永のみの18世紀前半～中葉（Ⅶ期前半）、寛保期銭および鉄銭の伴う18世紀後半以降（Ⅶ期後半）に大別した。その結果Ⅵ後半の土壙墓は集石墓の南東部から6基程が、規則性が認められない状態で検出される一方、集石墓の南部からは整然と列をなす土壙墓群中に6基確認されており、以後、いくつかの筋で東から西へとⅦ期前半（約20基）、Ⅶ期後半（約30基）が新たに造墓されていった状況を捉えることが出来た。また、Ⅶ期後半にはこのような集団墓とは別に、4区造成面から土壙墓3が検出されている。4区は本来、経堂等建造物のために造成整地されたと推定された場所ではあるが、土壙墓3は旧地権者の話や遺構配置の在り方から竿墓1として記載した年代と近接しており、断定は出来ないものの、同一の可能性が高く、墓石の形態から有力檀家層の可能性を示唆させるものである。

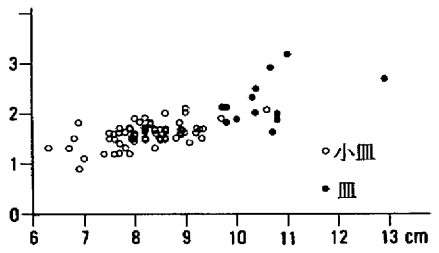
土師質小皿(8)

当遺跡からは土師質の小皿が120枚余り出土している。その内訳は約6割の67個体が底部に回転糸切り痕跡を残すもので占められ、約3割が底部ヘラ切り、残り約1割が磨滅・剝離のため底部の切り離し方法が不明であった。このように当遺跡からは比較的多くの糸切り小皿が出土しており、その年代観を摑むために若干の検討を加えたい。

糸切り小皿は土壙墓A類の比較的小規模な墓壙底から完形で出土する場合が多く、他に集石墓および土壙墓AB類などの集石の間からも出土しているが破片の状態のものが多い。前者においては共伴遺物が少なく、後者においては造墓が繰り返しなされる中で原位置を保っている場合は少ないと想像される。

糸切り小皿は橙色ないし淡灰褐色を呈し、胎土中に砂粒を比較的多く含まれている。口縁部は斜め外方に延びるものが大半で、口径は6.3～10.6cm、器高0.9～2.1cmを測り、口径7.5～

第240図　近世土壙墓変遷図



第241図　糸切り小皿・皿の寸法分布

9.5cm、器高1.3～1.8cmに分布の中心がある。

一方、当遺跡からは土師質皿が20枚余り出土している。上げ底気味の数点を除けばいずれもヘラ切りによって底部切り離しがなされたもので、口縁は斜め外方に延び、色調・胎土は小皿とほぼ同様である。口径9.7～12.9cm、器高1.5～3.2cmの範囲を示し、資料が少ないながら口径9.8～10.8cm、器高1.5～2cm前後に分布の中心が認められる。小皿同様、上記皿類を一つの表に入れ込むのは問題ではあるが、これら出土皿は草戸千軒町遺跡のものと類似しており、敢えてその計測値に当ててみれば、草戸千軒町の皿A Ⅱ[9]に分類され、その年代観は草戸千軒町のⅢ～Ⅳ期、14世紀後半から16世紀初頭の範囲に収まるようである。この年代観を参考に土壙墓の在り方や共伴遺物から糸切りの土師質小皿を見れば、現時点では少なくとも15世紀全般から下っても16世紀前半までの範疇のものではないかと考える。

県内において土師質土器の糸切り小皿の出土例は、県北の中国縦貫道建設に伴って調査された土井城址[10]ほかいくつかの遺跡で僅かながら見られる程度で、その状況は十分に把握されているとは言い難い。また、中世の調査例が多い県南においても早島式土器と呼ばれる高台付土師質椀に伴う小皿はヘラ切りあるいはヘラ起こしなどによる底部切り離し痕跡が残されたものがほとんどで、糸切り小皿の共伴例は見られず、中世全般の遺物を大量に出土した広島県福山市の草戸千軒町遺跡からも報文を見る限り、その出土例はヘラ切りと比較すれば皆無に等しいようである。このように極めて少ない状況にあって浅口郡鴨方町沖の店遺跡[11]、笠岡市園井土井遺跡[12]、岡山市足守藩武家屋敷跡[13]、赤磐郡吉井町備前茶臼山城址[14]などから僅かながら出土例を増やしつつある。中でも園井土井遺跡からは多くの糸切り小皿が出土しており、現状では備中南部域を中心に分布が認められるようである。

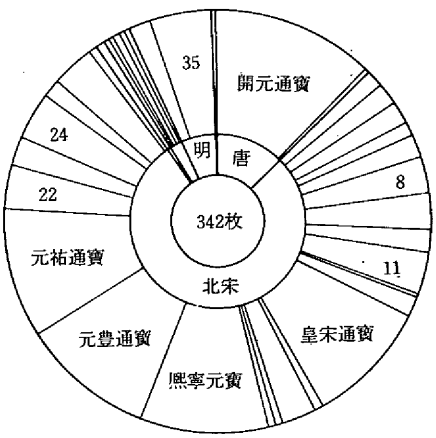


表２　渡来銭銭別比率

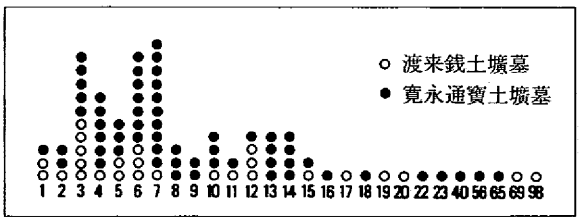


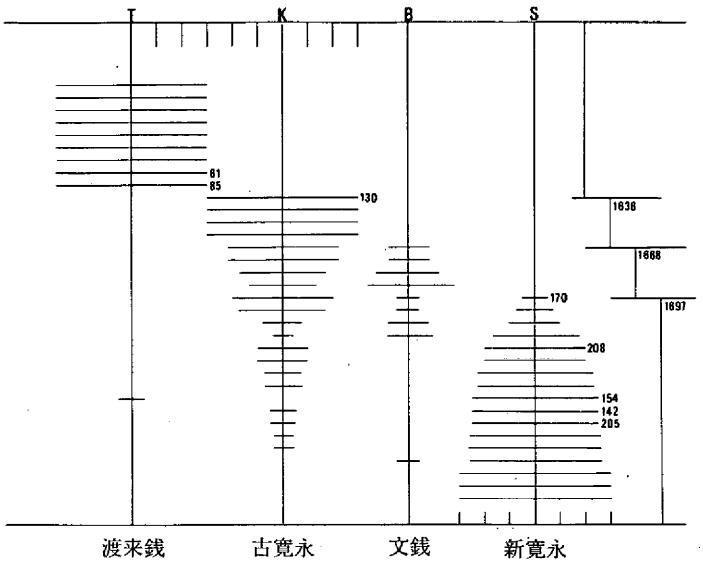
表３　枚数別六道銭出土土壙墓

銭貨

銭貨は1024枚出土しており、その内訳は342が渡来銭、573枚が寛永通寶、念仏銭１枚、不明108枚である。渡来銭は表に示したように北宋銭が圧倒的に多く267枚を数え、明銭は全体からすれば６％と少なく、この傾向は他の県内遺跡の出土状況にも当てはまるようである。

一方、銭貨は三途の川の渡し銭の六道銭として被葬者に持たせたとされる。表３は六道銭の枚数と、渡来銭のみの土壙墓と寛永通寶のそれとを分けて示した。この結果、六道銭出土土壙墓の87基中、銭貨は１枚から98枚を納めるものまで様々であることと、６枚の例は全体からの割合から見ればそれほど高くなく、また、中世から近世にかけて６枚に集中する様子も見られず、３～7枚の例が比較的多いという全国的な様相[15]とは若干異なった状況が明らかとなった。

また、銭貨の流れを確認するために鈴木公雄氏のセリエーション[15]に準じてこれを作成してみた。氏は銭貨6枚の完全一組の資料から銭貨の構成を表示されたが、当遺跡では銭貨6枚は10例しかないため、六道銭の集中する3～7枚例を含め作成した。この結果、当遺跡においても氏の調査された江戸と同様に、渡来銭から古寛永通寶への移行は急激な変化が認められ、古寛永から文銭、新寛永、鉄銭にかけては緩やかに移行していったことが明確になった。しかしながら、鉄銭とともに渡来銭の含まれる墓が1基検出されており、銭貨の流通からのみならず、葬送儀礼としての六道銭の検討が必要であろう。　（江見）



第242図　出土六道銭のセリエーション

註

(1) 斎藤忠　「中世の火葬墓と一の谷中世墳墓群遺跡」『一の谷中世墳墓群遺跡』磐田市教育委員会　1993
(2) 水藤真　『中世の葬送・墓制－石塔を造立すること－』吉川弘文館　1991
(3) 根木修　「第8章中世・近世　第5節中世・近世の埋葬」『岡山県の考古学』近藤義郎編　1987
(4) 亀山焼と備前焼の編年については以下の文献を参考にした。伊藤晃「第11章窯業　第2節中世窯業生産」『岡山県の考古学』近藤義郎編　1987、間壁忠彦『備前焼』ニューサイエンス社　1991、伊藤晃「備前焼の流れ」『木村コレクション古備前図録』岡山市教育委員会　1984、岡田博「亀山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会69　1988、篠原芳秀「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼甕」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会　1987
(5) 岡本寛久ほか「百間川米田遺跡3（旧当麻遺跡）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74　1989
(6) 福田正継ほか「百間川当麻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46　1981
(7) 正岡睦夫ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90　岡山県教育委員会　1994
(8) 小皿については松本和男氏から多くの教示を得た。記して感謝の意を表します。
(9) 鈴木康之「土師質土器の編年と年代」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1993
(10) 下澤公明「土井城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』21　岡山県教育委員会　1977
(11) 伊藤晃「沖の店遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42　岡山県教育委員会　1981
(12) 福田正継「園井土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70　岡山県教育委員会　1988
(13) 草原孝典『足守藩武家屋敷跡』　岡山市教育委員会　1995
(14) 松本和男『備前周匝茶臼山城址発掘調査報告書』　岡山県吉井町教育委員会　1990
(15) 鈴木公雄「出土六道銭の分析」『増上寺子院群』東京都港区教育委員会　1988

参考文献

賀陽町教育委員会『賀陽町史』　1972
山磨康平「中世墳墓の地域的様相　中国」『考古学ジャーナル』304　1989
白石太一郎「奈良県宇陀地方の中世墓」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集　1993
吉井敏幸「中世群集墓遺跡からみた惣墓の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集　1993

表4　集石墓・土壙墓一覧

報告番号	地区名	時代	形状	規模(cm)			出土遺物	銭貨									人骨遺存
				縦	横	深さ		渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	寛永？	鉄銭	不明	その他	合計	
集石墓001	D5	中世		130	100?			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓002	D5	中世		100?	80?		亀山焼、備前焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓003	D6	中世		130	75?		土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓004	D6	中世		90	70?			1	0	0	0	0	0	0	0	1	
集石墓005	D6	中世		190	150?			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓006	D6	中世		170?				0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓007	D6	中世	方形	280	270?		釘、亀山焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓008	C6	中世	方形	120	120		土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓009	C6	中世	長方	250	150			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓010	C6	中世	長方	220	150			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓011	C7	中世	長方	170	90α			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓012	C7	中世	長方	130	90			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓013	C7	中世		150?	90?			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓014	E5	中世	長方	190	130			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓015	E5	中世	長方	190	170			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓016	E5	中世	長方	170	100?		釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓017	E6	中世	長方	140	90			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓018	E6	中世	長方	240	200		備前焼、土師皿	2	0	0	0	0	0	0	0	2	
集石墓019	E6	中世	方形	110	100		備前焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓020	E6	中世	方形	150	140			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓021	E6	中世	長方	190	150		備前焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓022	E6	中世		180?	100?			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓023	E6	中世	長方	115	80			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓024	D6	中世	長方	300	250		亀山焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓025	D6	中世		120?	110?		釘、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓026	D6	中世	長方	200	110		土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓027	D6	中世	長方	200	160		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓028	D6	中世	方形	260	250		亀山焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓029	D6	中世		180?			土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓030	D7	中世	長方	240	140		釘、亀山焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓031	D7	中世	長方	105	75		亀山焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓032	D7	中世	長方	120	80		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓033	D7	中世	長方	100	85		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓034	D7	中世	長方	180	90		亀山焼、備前焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓035	D7	中世	長方	135	90		釘、亀山焼、備前焼、土師皿、羽釜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓036	D7	中世		120?	120?		亀山焼、備前焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓037	D7	中世		80	50?		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓038	D7	中世		170?	60?		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓039	D7	中世	方形	130	130		釘、亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓040	E7	中世		100?	80?			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓041	E7	中世	方形	240	240		釘、笄、備前焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓042	D7	中世	長方	120	70			0	0	0	0	0	0	0	0	0	

報告番号	地区名	時代	形状	規模(cm)			出土遺物	銭貨									人骨
				縦	横	深さ		渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	寛永？	鉄銭	不明	その他	合計	遺存
集石墓043	E7	中世	長方	200	140		備前焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓044	D7	中世	長方	200	165		備前焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓045	E7	中世	長方	160	120		備前焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓046	E7	中世		?	?		羽釜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓047	E7	中世	方形	290			亀山焼、備前焼	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
集石墓048	E7	中世	長方	110	35			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓049	D7	中世	長方	110	50		備前焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓050	D7	中世	方形	160	140		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓051	D7	中世		240	150?		亀山焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓052	D7	中世		170?	160?		備前焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓053	D7	中世	長方	180	110		備前焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓054	D7	中世	方形	110	100		土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓055	D7	中世		100?	80?		備前焼、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓056	D7	中世	方形	100	100		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓057	D7	中世		?	?		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓058	D7	中世	長方	200	150			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓059	D7	中世	方形	200	180			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓060	D7	中世		80?	?			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓061	D7	中世		100?	90?		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓062	D7	中世		160?	110?		亀山焼、備前焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓063	D7	中世		130?	130?		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓064	D7	中世		210?	100?		羽釜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓065	D7	中世		110?	60?			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓066	D7	中世	方形	170	150?		亀山焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓067	D7	中世	長方	140	100			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓068	D8	中世	方形	100	90			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓069	D8	中世	長方	270	130		亀山焼、土師皿、羽釜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓070	E8	中世	長方	130	80			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓071	D8	中世	長方	210	110			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
集石墓072	D8	中世	長方	120	90			0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓001	C6	中近世	円形	60		36		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓002	D6	中近世	長方	116	135	20	釘、土師皿、椀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓003	D6	中近世	長方	88	106	66	釘、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓004	D6	中近世	円形	98		67	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓005	D6	中近世	円形	100		93	土師皿、漆塗椀、剃刀、玉	96	0	0	0	0	0	2	0	98	○
土壙墓006	D6	中近世	長方	82	100	36	釘、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓007	D6	中近世	長方	114	170	60	釘、漆塗椀、剃刀？	69	0	0	0	0	0	0	0	69	○
土壙墓008	D7	中近世	長方	95	125	35		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓009	D7	中近世	長方	67	87	27		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓010	D8	中近世	楕円	86	124	18	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓011	D8	中近世	楕円	110	126	54		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓012	D8	中近世	楕円	145	105	50		2	0	0	0	0	0	2	0	4	

報告番号	地区名	時代	形状	規模(cm)			出土遺物	銭貨									人骨遺存
				縦	横	深さ		渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	寛永？	鉄銭	不明	その他	合計	
土壙墓013	E5	中近世	長方	92	100	15	釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓014	E5	中近世	長方	140	80	24	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓015	E5	中近世	長方	60	87	20		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓016	E5	中近世	楕円	40	51	6	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓017	E5	中近世	円形	52	52	18		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓018	E5	中近世	楕円	55	103	16		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓019	E5	中近世	方形	64	79	25		0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓020	E5	中近世	円形	120	107	24		0	0	0	0	0	0	1	0	1	
土壙墓021	E5	中近世	長方	114	81	35	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓022	F5	中近世	楕円	133	99	20	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓023	F5	中近世	楕円	54	107	23		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓024	F5	中近世	長方	56	95	25	釘、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓025	F5	中近世	楕円	37	72	35		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓026	F5	中近世	楕円	76	89	55	釘？、土師皿、毛抜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓027	E5	中近世	方形	79	90	20	土師皿	17	0	0	0	0	0	2	0	19	
土壙墓028	E5	中近世	楕円	70	93	45	釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓029	E5	中近世	楕円	82	111	21	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓030	E5	中近世	長方	85	133	43	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓031	E5	中近世	楕円	99	135	34	釘、土師皿	3	0	0	0	0	0	0	0	3	
土壙墓032	E5	中近世	楕円	70α	41α	12	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓033	E5	中近世	方形	36α	44α	16		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓034	E5	中近世	長方	90	100	26		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓035	E5	中近世	楕円	94	148	26	釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓036	E5	中近世	長方	96	117	42	土師皿、漆	12	0	0	0	0	0	0	0	12	○
土壙墓037	E5	中近世	楕円	67	54	28	釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓038	E5	中近世	楕円	90	125	30	釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓039	E5	中近世	楕円	75	105	44	釘、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓040	E5	中近世	楕円	150	102α	27		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓041	E5	中近世	方形	95	109	34	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓042	E5	中近世	楕円	92	142	46	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓043	F5	中近世	円形	75	79	45	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓044	F5	中近世	長方	100	82	42	釘、土師皿	7	0	0	0	0	0	0	0	7	
土壙墓045	E5	中近世	長方	98	126	35		0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓046	F5	中近世	円形	31	34	9		0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓047	F5	中近世	楕円	70	40	45	釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓048	F5	中近世	円形	65	72	42		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓049	F5	中近世	円形	58	51	31		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓050	F5	中近世	円形	70	71	31		0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓051	F5	中近世	楕円	64	105	51		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓052	F5	中近世	方形	112	151	32		5	0	0	0	0	0	0	0	5	
土壙墓053	F5	中近世	楕円	51	60	42		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓054	E5	中近世	長方	89	73	47		0	0	0	0	0	0	0	0	0	

報告番号	地区名	時代	形状	規模(cm)			出土遺物	銭貨									人骨
				縦	横	深さ		渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	寛永？	鉄銭	不明	その他	合計	遺存
土壙墓055	E5	中近世	楕円	64	92	30		0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓056	E5	中近世	楕円	118	101α	49	釘、土師皿、刀子、小柄、毛抜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓057	E5	中近世	円形	103	77	23	備前焼	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓058	E5	中近世	楕円	111	82	28	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓059	E5	中近世	方形	131α	71	40	釘、土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓060	E5	中近世	長方	74	100	31		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓061	E5	中近世	楕円	84	112	77		6	0	0	0	0	0	0	0	6	
土壙墓062	E5	中近世	楕円	80α	70	34		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓063	E5	中近世	楕円	42	59	46	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓064	E5	中近世	楕円	35	72	11		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓065	E5	中近世	楕円	45	60	15		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓066	E5	中近世	楕円	40	75	28		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓067	E6	中近世	楕円	112	138	52	釘	19	0	0	0	0	0	1	0	20	
土壙墓068	E6	中近世	長方	79	142	44	土師椀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓069	E6	中近世	長方	94	140	50	釘	10	0	0	0	0	0	1	0	11	
土壙墓070	E6	中近世	楕円	105	118	43		3	0	0	0	0	0	0	0	3	
土壙墓071	E6	中近世	楕円	85	93	20		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓072	E6	中近世	楕円	112	132	68	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓073	E7	中近世	方形	94	108	50	釘、土師皿、小刀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓074	E7	中近世	円形	50		50		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓075	E6	中近世	楕円	48	67	36		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓076	E6	中近世	円形	62		30		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓077	E6	中近世	楕円	82	90	42		2	0	0	0	0	0	0	0	2	
土壙墓078	E6	中近世	円形	79		88		3	0	0	0	0	0	0	0	3	
土壙墓079	E6	中近世	円形	70		45	椀	3	0	0	0	0	0	0	0	3	
土壙墓080	E6	中近世	円形	104	110	40	釘、椀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓081	E6	中近世	楕円	77	109	26		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓082	E6	中近世	楕円	60	97	27		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓083	E6	中近世	円形	53		22		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓084	E6	中近世	長方	112	127	76	景徳鎮系碗(16c末-17c初)、毛抜	12	0	0	0	0	0	0	0	12	
土壙墓085	E6	中近世	長方	110	132	89	釘	6	0	0	0	0	0	0	0	6	
土壙墓086	E6	中近世	長方	75	97	23		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓087	F6	中近世	長方	62	93	38		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓088	F6	中近世	楕円	79	90	69	土師皿	10	0	0	0	0	0	0	0	10	
土壙墓089	E6	中近世	楕円	68	121	50		15	0	0	0	0	0	0	0	15	
土壙墓090	F6	中近世	楕円	50	90	25		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓091	F6	中近世	長方	77	116	62	唐津碗(1580-1610)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓092	F6	中近世	楕円	84	105	55	土師皿、広東系福迂碗	3	0	0	0	0	0	0	0	3	
土壙墓093	F6	中近世	楕円	53	98	52		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓094	F6	中近世	楕円	96	118	77		1	0	0	0	0	0	4	0	5	
土壙墓095	F6	中近世	円形	95	98	54		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓096	F6	中近世	楕円	75	118	40		0	0	0	0	0	0	0	0	0	

報告番号	地区名	時代	形状	規模(cm)			出土遺物	銭貨									人骨
				縦	横	深さ		渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	寛永？	鉄銭	不明	その他	合計	遺存
土壙墓097	F6	中近世	長方	68	97	27	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓098	F6	中近世	円形	90	93	30	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓099	E6	中近世	楕円	80	162	62	剃刀？、ガラス玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓100	E7	中近世	楕円	64	92	41		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓101	E6	中近世	楕円	70	107	67		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓102	E6	中近世	楕円	50	96	24	土師皿、椀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓103	E7	中近世	長方	105	128	73	釘	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
土壙墓104	E7	中近世	長方	67	109	52	土師皿	1	0	0	0	0	0	5	0	6	
土壙墓105	E7	中近世	長方	96	119	59	漆塗椀	11	0	0	0	0	0	1	0	12	
土壙墓106	E7	中近世	楕円	36	45	47	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓107	E7	中近世	長方	80	106	47	棺金具	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓108	E7	中近世	円形	60		23		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓109	E7	中近世	長方	80	121	47	釘	14	0	0	0	0	0	3	0	17	
土壙墓110	E7	中近世	長方	79	105	43	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓111	E7	中近世	円形	50	65	32		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓112	E7	中近世	楕円	87	120	28	釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓113	E7	中近世	楕円	75	107	41		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓114	E7	中近世	長方	69	134	48	毛抜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓115	E7	中近世	円形	80	92	61		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓116	E7	中近世	方形	93	109	54		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓117	E7	中近世	楕円	98	121	45		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓118	E7	中近世	楕円	92	170	50	土師皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓119	E7	中近世	円形	122α	60	27		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓120	E7	中近世	円形	74	77	45		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓121	E7	中近世	円形	61	62	57		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓122	E7	中近世	楕円	86	105	15		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓123	E7	中近世	長方	77	101	46	唐津皿(1580-1630)、福建省碗(1580-1610)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓124	G3	中近世	方形	115α	110	17		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓125	F5	中近世	円形	38	44	20		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓126	F6	近世	長方	61	120	81	棺金具	0	1	0	0	0	0	1	0	2	
土壙墓127	F6	近世	長方	135	220	102	釘	0	4	0	0	0	0	0	0	4	○
土壙墓128	F7	近世	円形	101	104	89	棺金具、釘、肥前小杯(17ｃ後・中)、毛抜	0	5	2	0	0	0	1	0	8	○
土壙墓129	F7	近世	楕円	95	144	62		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓130	E7	近世	円形	90	95	71	釘、漆塗椀、煙管	0	6	0	0	0	0	0	0	6	
土壙墓131	E7	近世	楕円	97	122	71	煙管	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓132	E7	近世	長方	80	106	56	棺金具、唐津碗(1580-1610)	0	15	2	0	0	0	1	0	18	
土壙墓133	E7	近世	楕円	88	132	49	釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓134	E8	近世	長方	78	104	68	肥前碗(17c後半)、煙管	0	12	2	0	0	0	0	0	14	
土壙墓135	F4	近世	円形	97	120	97	釘、肥前染付(18c前－中)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓136	F5	近世	円形	118	110	106	釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓137	F5	近世	方形	94	110	38		0	1	0	6	0	0	0	0	7	
土壙墓138	F5	近世	円形	107	109	109		0	0	0	0	0	0	0	0	0	

報告番号	地区名	時代	形状	規模(cm)			出土遺物	銭貨									人骨遺存
				縦	横	深さ		渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	寛永？	鉄銭	不明	その他	合計	
土壙墓139	F4	近世	方形	127	130	81		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓140	F4	近世	円形	127	169	81		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓141	F4	近世	方形	103	109	102	煙管、ガラス玉	0	0	0	4	0	0	0	0	4	
土壙墓142	F4	近世	円形	120	105	106	肥前白磁小杯(17c末-18c前)、煙管	0	1	0	5	0	0	0	0	6	
土壙墓143	F5	近世	円形	104	132	102	釘、毛抜、煙管	0	4	1	8	0	0	1	0	14	○
土壙墓144	F5	近世	方形	123	120	128	釘、毛抜、鋏、煙管、漆	0	0	3	8	0	0	0	0	11	○
土壙墓145	F5	近世	円形	116	128	100	釘	0	0	1	1	0	0	0	0	2	○
土壙墓146	F5	近世	円形	97	120	117	釘、肥前白磁(18c前・中)、毛抜、火打鎌、煙管	0	5	2	6	0	0	0	0	13	○
土壙墓147	F5	近世	円形	131	113	150	毛抜、煙管	0	9	5	8	0	0	0	1	23	
土壙墓148	F5	近世	円形	140	132	126	釘	0	4	0	12	0	0	0	0	16	
土壙墓149	F6	近世	円形	109	106	110	釘	0	4	4	6	0	0	1	0	15	
土壙墓150	F4	近世	円形	60	66	28		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓151	F4	近世	円形	96	100	87		0	0	0	4	0	0	0	0	4	
土壙墓152	F4	近世	方形	127	135	108		0	1	1	9	0	3	0	0	14	
土壙墓153	F4	近世	円形	110	128	111	釘、火打鎌、煙管	0	2	2	8	1	0	0	0	13	
土壙墓154	F5	近世	楕円	85	120	64	土製小槌	1	0	0	4	0	1	0	0	6	
土壙墓155	F5	近世	方形	64	56	65		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓156	F4	近世	方形	104	131	85	棺金具、毛抜、煙管	0	4	1	2	0	0	0	0	7	○
土壙墓157	F5	近世	円形	140	176	109	毛抜、煙管、碁石	0	7	5	10	0	0	0	0	22	○
土壙墓158	F5	近世	楕円	112	136	78	漆	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓159	F5	近世	方形	98	98	88	毛抜、鋏、煙管、漆	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓160	F5	近世	円形	83	86	93	煙管	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓161	F5	近世	円形	117	142	105	唐津碗(17c末－18c前)、煙管	0	0	0	0	0	0	0	0	0	○
土壙墓162	F5	近世	円形	120	140	100	毛抜、煙管	0	3	0	0	0	0	0	0	3	
土壙墓163	F5	近世	方形	134	153	110	釘、白磁猪口、毛抜、火打鎌、煙管	0	3	4	0	0	0	0	0	7	○
土壙墓164	F6	近世	方形	116	135	90	釘、剃刀（刀子？）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓165	F6	近世	長方	146	110	84	釘、煙管	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓166	G3	近世	方形	113	104	118	釘	0	0	0	9	0	1	0	0	10	
土壙墓167	G3	近世	円形	119	107	94	釘、煙管	0	1	1	2	0	0	0	0	4	
土壙墓168	G3	近世	長方	88	128	138	火打鎌、煙管	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓169	G3	近世	方形	105	124	120	火打鎌、煙管	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓170	F4	近世	長方	104	115	97	毛抜、煙管	0	4	1	1	0	0	0	0	6	
土壙墓171	F4	近世	長方	91	106	69	煙管	0	0	3	0	0	0	0	0	3	
土壙墓172	F4	近世	方形	103	101	100	釘、毛抜、煙管	0	5	2	0	0	0	0	0	7	
土壙墓173	F4	近世	方形	98	121	103	釘、煙管	0	5	2	0	0	0	0	0	7	○
土壙墓174	F4	近世	円形	105	109	62	煙管	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓175	G3	近世	円形	120	170	123	煙管	0	1	0	5	0	2	0	0	8	
土壙墓176	G3	近世	方形	100	112	112	釘、煙管	0	0	0	3	1	1	0	0	5	
土壙墓177	G3	近世	方形	88	95	101	釘、染付小碗(18C前-中)、煙管	0	2	1	6	0	5	0	0	14	○
土壙墓178	G3	近世	方形	126	106	80	棺金具片、棺金具？、毛抜	0	4	3	0	0	0	0	0	7	
土壙墓179	G3	近世	円形	42	49	35	釘	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓180	G3	近世	方形		115	64	小刀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

報告番号	地区名	時代	形状	規模(cm)			出土遺物	銭貨									人骨遺存
				縦	横	深さ		渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	寛永？	鉄銭	不明	その他	合計	
土壙墓181	G3	近世	方形	100	86	88		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓182	G3	近世	円形	144	123	129	釘、肥前系碗(18c前-中)、煙管	0	1	0	11	0	0	0	0	12	
土壙墓183	G3	近世	円形	107		115		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓184	G3	近世	楕円	118	148	90	棺金具、煙管	0	1	2	4	0	0	0	0	7	○
土壙墓185	G3	近世	方形	100	116	115	肥前小碗(18c前)、毛抜、鋏、煙管	1	9	8	29	0	0	18	0	65	
土壙墓186	G4	近世	円形	97	102	114		0	0	0	4	1	0	1	0	6	○
土壙墓187	G4	近世	方形	85	115	82	煙管	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓188	G4	近世	方形	102	126	78	肥前染付碗(1690－18c中)、火打鎌、煙管	0	4	2	4	0	0	0	0	10	
土壙墓189	G4	近世	楕円	108	125	97	煙管	0	1	0	3	0	0	0	0	4	
土壙墓190	G4	近世	楕円	101	124	112	毛抜、鋏、火打鎌 、煙管	0	15	10	12	0	0	3	0	40	
土壙墓191	G4	近世	円形	122	114	100	釘、煙管	0	6	1	6	0	0	0	0	13	
土壙墓192	G5	近世	楕円	122	114	98	火打鎌、煙管、漆	0	2	1	1	0	0	1	0	5	
土壙墓193	G5	近世	方形	108	124	102	釘	0	2	1	10	0	0	0	0	13	
土壙墓194	G3	近世	方形	79	78	30	釘、肥前碗(1780-1800頃)	0	0	0	2	0	1	0	0	3	
土壙墓195	G3	近世	円形	87	99	104	肥前系白磁(17c後-18c前)	0	0	0	7	0	0	1	0	8	
土壙墓196	G3	近世	方形	83	104	103	釘	0	0	0	1	0	0	4	0	5	
土壙墓197	G3	近世	方形	70	71	98		0	0	0	4	1	2	0	0	7	○
土壙墓198	G3	近世	円形	103	125	132	煙管	0	1	0	4	0	4	0	0	9	
土壙墓199	G3	近世	方形	109	106	79	釘、関西系陶器小碗(18C末-19C初)、煙管	0	0	0	9	0	0	0	0	9	
土壙墓200	G3	近世	方形	95	90	94	釘	0	1	0	2	0	0	0	0	3	
土壙墓201	G3	近世	円形	103	125	116	煙管	0	1	0	6	0	0	0	0	7	○
土壙墓202	G3	近世	円形	88	92	89	煙管	0	1	0	3	0	0	0	0	4	
土壙墓203	G3	近世	方形	107	152	114	備前焼建水？、煙管	2	1	1	6	0	0	0	0	10	○
土壙墓204	G4	近世	長方	94	152	117	煙管	0	0	1	6	0	0	0	0	7	
土壙墓205	G4	近世	円形	120	124	110	釘、肥前系磁器碗(18C代)、煙管	0	1	0	5	0	0	0	0	6	
土壙墓206	G4	近世	円形	76	78	74		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
土壙墓207	G4	近世	円形	90	87	80	染付(18C前葉－中葉)	0	0	0	3	0	0	0	0	3	
土壙墓208	G3	近世	方形	115	129	97	釘、煙管	0	2	0	4	0	0	0	0	6	
4区土壙墓1	4	中近世	楕円	85	142	18		0	0	0	0	0	0	0	0	0	
4区土壙墓3	4	近世	方形	131	144	134	釘、釘破片、備前焼灯明皿、関西系陶器碗(18c前－中葉)、銅環、漆塗椀	1	5	1	20	0	1	28	0	56	○
4区土壙墓2	4	近世	円形	96		88	煙管	0	0	0	1	0	0	0	0	1	○
竿墓1	4	近世	楕円				肥前磁器壷(1650-1670)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

表5　五輪塔空風輪法量

番号	出土地区	法量												備考
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
1	不明	※25.3	※13.2	12.1	14.9	12.6	※2.2	4.7	9.8	16.7	8.0	5.6	2.6	
2	不明	27.7	13.5	14.2	15.7	14.3	1.2	4.0	10.4	18.0	8.5	6.0	2.5	
3	不明	23.4	12.4	11.0	11.8	10.8	1.3	4.7	8.4	14.0	7.8	4.8	2.4	
4	不明	18.3	9.2	9.1	10.6	9.6	1.0	4.8	8.0	12.1	7.5	4.6	1.8	
5	不明	23.2	12.5	10.7	12.5	10.7	4.6	6.5	7.7	13.4	8.8	6.3	2.8	
6	不明	※18.9	9.7	※9.2	9.8	9.1	1.7	4.8	7.4	11.2	6.7	4.3	※1.9	
7	不明	※18.7	10.7	※8.0	11.2	10.6	2.0	5.6	8.2	11.9	7.3	3.7	※1.0	
8	不明	※19.9	※10.2	※9.7	11.0	9.1	※2.9	5.6	7.0	11.2	7.0	4.7	※1.9	
9	不明	※22.5	※12.5	※10.0	15.3	13.1			8.4	16.7	9.5	5.6	※1.0	
10	不明	※21.7	※11.0	※10.7	11.9	10.0	※1.8	4.3	8.0	12.9	6.7	4.5	※2.0	
11	不明	※18.0	※7.7	※10.3	13.0	12.0	※1.0	3.8	7.7	12.5	9.0	4.6	※1.6	
12	不明	19.1	11.0	8.1	10.7	8.3	1.8	4.0	5.7	12.4	7.7	3.7	1.5	
13	不明	22.0	12.9	9.1	11.4	10.4	3.2	5.6	5.9	13.7	8.2	5.0	2.8	
14	不明	※19.1	※9.3	※9.8	11.9	10.8			7.9	12.8	6.7	3.9		
15	不明	※12.8	※7.6	※5.2	9.7	8.4			4.4	10.8	8.1			
16	不明	※22.5	※12.6	※9.9	14.4	12.9	※1.8	5.6	8.4	16.8	9.4			
17	不明	※18.5	※9.6	※8.9	11.0	10.3		3.7	6.8	12.7	8.0	4.0		
18	不明	※22.1	12.5	※9.6	11.7	11.3	3.8	6.4	7.9	15.0	9.0	6.4	※2.5	
19	不明	24.0	11.6	12.4	14.5	12.3	2.2	4.2	9.0	14.8	8.1	5.4	2.8	
20	不明	※20.2	※10.0	10.2	12.7	11.7			8.6	16.1	9.0	6.7	2.1	
21	不明	26.4	11.3	15.1	15.9	12.4	1.5	4.9	9.3	17.6	10.0	7.3	3.6	
22	不明	20.6	9.7	10.9	12.8	11.3	1.0	8.4	12.0	18.3	11.8	9.4	3.0	
23	不明	※21.0	※10.6	10.4	13.5	11.2	※1.5	3.6	7.1	15.2	8.4	5.2	1.6	
24	不明	20.1	8.3	11.8	9.9	9.7	3.0	4.2	6.5	12.0	7.5	4.6	2.6	
25	不明	※24.0	※11.6	12.4	13.6	12.5	※1.8	5.6	9.6		8.9	5.1	3.0	
26	不明	※17.2	※8.0	※9.2	11.0	10.5	※0.6	3.3	7.0	14.1	6.8	4.9	※1.2	
27	不明	※19.4	※10.9	※8.5	11.5	9.8	※0.7	3.0	8.0	12.0	4.5			
28	不明	※14.9	※8.0	※6.9	11.0	9.7			4.3	10.7				
29	不明	※19.7	※9.0	※10.7	11.2	10.2	※1.0	6.6	7.8	13.7	8.4	6.0	※2.8	
30	不明	24.4	11.7	12.7	13.9	11.9	1.6	4.4	7.0	14.8	7.7	5.3	3.1	
31	不明	※19.0	※10.2	※8.8	20.8	12.8	※0.8	6.8	6.8	13.1	6.5	4.6	※1.2	
32	不明	19.9	10.6	9.3	10.8	10.0	1.9	4.6	6.7	12.1	6.8	4.6	2.0	
33	不明	※16.0	8.9	※7.1	10.0	9.4	2.5	5.6	7.4	11.0				
34	不明	※16.0	※7.7	※8.3	11.2	9.3			5.5	11.3	6.8			
35	不明	19.4	8.8	10.6	11.2	9.8	1.5	3.6	6.9	12.9	8.3	4.8	2.9	
36	不明	※17.0	※8.1	8.9	9.5	8.8	※0.7	3.8	6.6	11.9	6.7	4.5	1.6	
37	不明	※20.4	11.9	※8.5	10.9	10.0	※5.2	5.0	6.0	12.0	7.3	4.7	2.0	
38	不明	19.6	7.9	11.7	10.9	10.1	1.6	4.3	7.1	12.7	7.3	4.8	2.3	
39	不明	※21.0	※11.4	9.6	11.4	10.5	※1.8	5.3	7.4	13.6	8.8	5.8	2.1	
40	不明	※14.5	※7.2	7.3	8.8	8.0			5.5	10.3	6.5	4.2	2.2	
41	不明	※42.2	※11.4	※30.8	15.3	12.5	※1.5	8.6	9.8	16.0	9.0	5.8	※1.4	
42	不明	※20.7	9.8	※10.9	14.1	11.6	1.7	3.5	7.7	16.3		6.8	※1.7	
43	不明	※20.7	※8.7	12.0	11.6	10.6			7.3	13.1	8.0	5.6	2.7	
44	不明	22.6	11.2	11.4	12.6	12.1	1.8	4.6	8.4	15.4	9.0	5.2	2.5	
45	不明	※20.1	※9.9	※10.2	14.4	13.1			9.4	15.0				
46	不明	※21.4	※10.9	※10.5	13.5	11.7			7.5	14.6	8.8	5.2	※1.5	
47	不明	※19.4	10.9	※8.5	12.0	11.2	2.3	4.0	5.8	13.5	8.0	5.3	※1.3	
48	不明	※21.4	※10.0	※11.4	12.1	11.4	※1.8	4.7	8.5	14.8	7.9	5.8	※2.0	
49	不明	23.3	11.5	11.7	12.2	10.8	1.8	3.6	8.0	14.0	8.6	5.3	2.5	
50	不明	※19.7	※8.4	※11.3	12.5	12.0			7.1	15.1				
51	不明	※23.8	※11.9	※11.9	15.0	13.2			8.4	17.2	9.2	5.8	※0.8	
52	不明	※25.0	※11.2	※13.8	15.0	12.8			14.0	17.1		6.1	※2.9	
53	不明	※20.6	※10.5	※10.1	11.6	11.0	※1.8	4.0	7.3	14.6	8.8	4.8	※1.9	
54	不明	23.0	10.5	12.5	13.4	11.4	2.3	4.4	7.0	15.5	8.0	5.4	3.0	
55	不明	20.0	10.4	9.6	10.8	9.4	1.7	4.0	10.0	12.0	7.3	5.0	1.7	
56	不明	※19.2	※4.0	※15.2	※10.8	※12.0				14.4				
57	不明	※27.6	※13.4	14.2	16.4	13.1	※1.5	5.4	8.8		10.2	6.8	4.6	
58	不明	※17.8	※6.4	※11.4	※12.4	12.3			※7.5	15.7	※8.7	5.4	※2.3	
59	不明	※25.0	※15.2	※9.8	15.1	12.0	3.8	8.4	9.0	16.6	11.0	10.6	※2.9	
60	不明	※23.6	※10.8	12.8	14.0	12.0	※1.2	4.8	8.2	15.2	7.7	5.1	2.4	
61	不明	※18.0	※8.0	10.0	12.4	10.0			9.2	13.3	9.5	6.2	2.2	
62	不明	※14.8	※6.7	※8.1	※10.5	※9.3				※10.6	※8.1			
63	不明	30.2	17.8	12.4	12.3	11.2	9.0	7.3	7.8	14.1	8.9	6.6	3.7	
64	不明	16.3	8.3	8.0	10.3	9.1	1.6	6.7	6.8	11.0	7.1	4.8	1.8	
65	不明	20.0	8.6	11.4	9.7	8.8	1.5	3.7	7.4	12.2	6.3	4.5	2.5	
66	C 7	27.1	14.5	12.6	14.4	11.7	4.0	7.4	8.8	16.7	17.5	5.9	2.5	
67	C 7	22.6	13.8	8.8	9.6	8.6	6.3	5.8	6.2	10.3	6.3	4.0	1.7	
68	C 7	9.0	9.0		10.0	9.5		6.4	6.2	11.2	7.3	4.7	1.5	
69	C 6		9.4		14.3	11.0			8.4	16.0	8.0	5.5	2.9	
70	C 6	25.6	13.4	12.2	16.3	13.1	2.0	5.6	9.0	18.1	9.5	7.0	3.0	
71	C 6	17.3	7.7	9.6	9.5	8.1	2.0	3.5	6.4	12.0	7.2	3.8	1.7	
72	C 6	21.7	12.0	9.7	15.0	12.2	2.0	3.4	7.0	16.0	7.5	4.5	1.5	
73	C 6	23.5	11.9	11.6	13.4	10.8	3.9	3.8	8.3	15.2	8.8	4.2	3.4	
74	C 6	18.9	11.2	7.7	10.2	9.1	4.6	5.3	6.0	11.0			2.6	
75	C 6	17.2	9.6	7.6	8.7	8.3	3.5	5.3	5.4	9.8	5.7	3.7	1.5	

番号	出土地区	法量												備考
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
76	C 6	17.9	10.0	7.9	8.8	8.1	4.2	4.5	4.8	10.2	5.7	8.0	1.7	
77	C 7	24.9	13.8	11.1	10.7	9.1	5.8	6.8	6.3	11.7	8.6	5.2	3.5	
78	D 6	21.8	8.6	13.2	10.4	9.5	1.5	4.2	5.7	12.0	8.7	5.7	3.5	
79	D 6													計測不能
80	D 7	24.2	12.7	11.5	11.5	11.0	4.5	5.1	6.3	13.7	8.0	4.7	3.8	
81	D 7	21.2	12.2	9.0	9.4	8.8	5.2	5.5	5.5	10.8	6.9	4.8	2.4	
82	D 7	19.6	9.8	9.8	9.8	9.4	2.7	4.3	6.6	12.1	7.8	5.5	2.4	
83	D 7	24.4	13.7	10.7	12.1		4.5	4.9	7.0	12.4	7.2	5.2	2.5	
84	D 7	17.8	8.6	9.2	9.0	8.8	2.1	5.5	5.9	10.1	6.0	3.9	1.4	
85	D 7	17.2	9.3	7.9	10.3	9.7	2.0	4.7	5.0	12.5				
86	D 7	20.9	11.6	9.3	10.0	9.1	3.6	4.5	5.9	11.6	8.0	5.0	2.6	
87	D 7	18.5	9.3	9.2	10.4	10.1	1.0	3.2	5.6	12.4	7.5	5.2	2.6	
88	D 7		14.4		9.3	8.9			5.2	10.4				
89	D 7	17.6	9.5	8.1	10.4				6.4	11.1	5.2	4.9	1.9	
90	D 7	22.0	10.5	11.5	11.6	10.0	4.2	7.8	5.9	12.5	8.5	6.3	2.8	
91	D 7	22.2	10.4	11.8	12.8	10.2	0.8	3.5	7.2	14.5	9.3	6.0	3.0	
92	D 7	16.8	7.2	9.6	9.2	9.1	2.1	4.3	5.7	10.6	7.5	4.4		
93	D 7	21.0	11.8	9.2	11.6	9.6	1.8	3.7	5.5		7.8	4.3	2.0	
94	D 7	22.6	13.1	9.5	12.1	10.4	4.3	5.3	5.9	13.5	7.5	5.4	2.1	
95	D 7	22.9	11.5	11.4	14.0	13.3	1.3	4.3	8.2	16.9	9.1	4.9	23.0	
96	D 7	25.5	12.4	12.8	13.2	9.5	2.5	4.0	8.5	15.3	9.0	6.0	4.0	
97	D 7	18.6	10.5	8.1	10.7	9.1	2.9	6.8	5.1	11.5	6.8	4.5	1.0	
98	D 7	20.7	9.3	11.4	12.5	9.4	0.8	3.2	7.6	14.5	7.1	6.0	2.8	
99	D 7	22.4	11.5	10.9	12.7	11.0	1.9	4.7	7.7	14.6	8.8	6.0	3.0	
100	D 7													計測不能
101	D 7	18.2	8.2	10.0	10.6	10.0	1.3	4.3	6.6	13.0	7.0	5.5	2.9	
102	D 7	23.8	13.1	10.7	12.9	12.4	2.4	4.2	7.6	15.4	8.4	5.5	2.1	
103	D 7	20.7	10.2	10.5	12.3	10.5	1.5	4.6	5.6	14.0	7.8	5.6	3.1	
104	D 7	23.7	11.4	12.3	13.5	12.2	1.0	4.9	8.6	15.8	7.8	6.7	2.6	
105	D 7	23.9	12.6	11.3	14.8	12.3	1.3	4.1	8.5	16.5	9.5	5.5	1.9	
106	D 7													計測不能
107	D 7	22.0	11.4	10.6	13.8	12.2	1.1	4.0	8.6	15.7	8.8	5.8	1.5	
108	D 7													計測不能
109	D 6	19.2	10.4	8.8	14.1	11.3	0.7	4.7	7.2	15.5	8.3	4.4	0.9	
110	D 6	24.3	15.5	8.8	11.9	10.0	6.7	5.8	7.0	12.5	7.4	4.8	1.0	
111	D 6	17.3	9.5	7.8	10.2	8.7	0.7	2.8	5.0	11.8	5.9	3.5	1.1	
112	D 6	22.5	12.7	9.8	10.0	8.2	4.1	5.2	7.7	10.4	7.5	4.9	1.7	
113	D 6	23.5	12.0	11.5	13.0	11.2	2.1	4.8	8.0	15.5	9.1	5.8	2.9	
114	D 6	25.8	16.3	9.5	12.2	11.3	8.1	7.1	6.3	13.0	7.8	4.5	1.3	
115	D 6	19.8	10.7	9.1	13.8	11.2	0.8	3.1	6.5	15.6	7.0	4.9	1.0	
116	D 6	22.4	15.3	7.1	10.0	8.1	7.9	6.6	7.5	9.6	6.1	3.8	1.0	
117	D 6	21.0	10.5	10.5	11.5	10.2	1.9	3.9	7.5	14.4	7.9	5.5	2.2	
118	E 6	22.5	11.5	11.0	16.7	13.1	0.6	4.9	7.7	16.7				
119	D 6	17.1							5.5	12.5				
120	D 6	25.4	14.4	11.0	12.5	10.9	5.8	7.1	7.6	13.4	8.6	5.7	2.8	
121	E 6	15.5	7.7	7.8	9.0	7.7	1.0	3.4	5.2	10.5	5.6		1.0	
122	E 6	20.7	12.6	8.1	11.0	9.7	5.5	5.1	5.7	11.5	6.2	4.0	1.5	
123	E 6	21.4	12.6	8.8	10.9	10.2	6.5	7.3	5.6	11.2	7.6	4.4	1.9	
124	E 5	29.8	16.8	13.0	11.9	10.1	8.5	6.5	7.3	13.3	9.2	5.4	4.5	
125	E 5	21.0	9.9	11.1	13.4	12.0	1.8	7.4	7.7		8.2	5.3	1.5	
126	E 5	14.7	9.3	5.4	10.4	8.5	1.9	5.2	4.2	10.5				
127	E 6	21.8	12.6	9.2	10.0	9.1	6.3	6.6	5.8	10.7	7.1	4.8	2.1	
128	E 6	19.7	9.9	9.8	11.2	10.9	1.4	15.5	6.7	12.5	7.7	5.1	1.7	
129	E 5													計測不能
130	E 5	20.3	10.6	9.7	10.5	9.0	3.8	4.7	6.7	10.8	6.7	4.7	1.9	
131	E 5	15.2	8.7	6.5	9.0	8.1	1.5	4.8	5.3	10.3	7.0			
132	E 5	23.6	12.0	11.6	11.7	11.3	4.4	7.0	6.3	13.9	8.4	5.4	2.3	
133	E 5	25.3	15.6	9.7	10.8	9.6	8.1	6.9	6.7	11.7	7.7	5.2	2.3	
134	E 5	28.3	16.5	11.8	11.1	10.3	7.8	6.2	8.1	12.8	9.2	6.3	2.3	
135	E 6	22.8	12.1	10.7	13.4	10.5	1.5	3.3	8.3	14.9	8.8	4.9	1.5	
136	E 6	14.8	7.7	7.1	8.0	7.1	0.8	3.2	5.0	9.3	5.3			
137	E 6	14.6	9.5	5.1	8.4	7.2	4.0	5.0	2.9	9.0	6.0			
138	E 6													計測不能
139	E 6	20.9	11.3	9.6	10.2	10.0	5.0	5.0	6.6	11.2	6.7	4.4	2.0	
140	E 6	20.3	11.1	9.2	10.8	9.2	1.8	3.4	6.3	12.2	7.8	5.2	2.4	
141	E 6		6.9		8.9		0.5	3.8						
142	E 6	20.0	10.4	9.6	12.9	11.3	3.5	5.6	7.2	12.7	8.8	3.9	1.6	
143	E 6	25.4	12.9	12.5	14.9	12.9	0.5	3.1	8.9	16.5	8.2	6.0	2.9	
144	E 6	22.8	13.5	9.3	11.8	10.2	5.2	5.6	5.7	12.3	7.8	4.8	2.6	
145	E 6	21.1	11.7	9.4	11.8	10.7	1.9	5.4	6.6	12.2	8.2	5.0	2.1	
146	E 6	21.3	11.2	10.1	14.2	8.6	3.1	5.1	7.3		7.9	5.3	2.0	
147	E 6	23.8	12.0	11.8	14.0	13.0	2.1	4.5	8.1	14.3	7.0	4.5	2.4	
148	E 6	22.4	12.6	9.8	9.1	8.6	4.7	5.6	6.2	10.7	6.9	4.3	2.0	
149	E 6	23.2	11.2	12.0	13.4	12.3	1.2	4.4	7.7	15.8	9.0	5.5	2.2	
150	E 6	23.5	11.1	12.4	13.1	11.6	2.0	5.6	7.9	15.0	9.5	5.6	0.7	

番号	出土地区	法量												備考
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
151	E 6	20.7	11.1	9.6	11.1	10.4	1.6	3.6	7.1		6.7	4.3	1.6	
152	D 7	20.3	11.0	9.3	12.8	11.4	1.7	3.9	9.9	14.6		4.6		
153	D 8	22.7	12.0	10.7	9.8	8.2	4.1	2.5	6.4	10.3	7.8	5.1	2.2	
154	D 8	20.0	11.0	9.0	11.0	10.0	2.3	3.3	6.2	11.7	6.9	4.0	1.8	
155	D 8	25.2	15.3	9.9	11.5	10.4	6.0	2.6	6.6	12.3	8.0	5.2	2.1	
156	D 7	20.2	11.8	8.4	10.4	9.5	3.4	4.4	5.3	11.6	6.7	4.0	0.9	
157	D 7	16.8	8.8	8.0	8.7	8.4	2.2	3.4	4.9	10.0	6.4	3.9	1.4	
158	D 7	21.2	10.4	10.8	12.0	11.5	1.3	3.1	7.7	14.7	8.0	5.0	1.8	
159	D 8	16.8	10.0	6.8	11.0	9.8	1.0	5.6	5.6	12.9	6.9	3.5	0.4	
160	D 8	18.9	11.4	7.5	9.0	8.5	4.2	5.2	5.3	10.4	6.5	4.0	0.9	
161	D 8	23.8	13.0	10.8	12.5	10.2	4.2	6.1	7.0	13.4	8.7	4.8	2.5	
162	D 7	20.4	10.7	9.7	11.4	9.8	1.8	4.3	7.4	13.0	6.0	4.5	2.7	
163	D 7	16.4	8.6	7.8	10.8	10.1	4.0	5.7	5.0	10.5	6.8	4.0	2.2	
164	D 7	18.0	9.0	9.0	11.5	11.1	1.2	3.9	7.1	13.7	8.5	4.0	1.1	
165	D 7	15.0	8.9	6.1	10.2	10.1	2.5	5.2	5.0	10.6	6.7	3.8	0.5	
166	D 7	27.0	14.0	13.0	13.5	13.1	4.8	5.3	9.1		8.2	6.0	3.1	
167	D 7	11.3	6.6	4.7	9.0	8.0		3.6	3.3	10.0				
168	C 6	22.2	11.8	10.4	11.0	10.1	3.3	4.8	7.1	13.4	7.6	5.0	2.3	
169	C 6	25.5	13.0	12.5	13.5	13.1	2.9	4.9	9.2	17.4	8.2	5.8	1.7	
170	D 7	21.0	11.4	9.6	10.6		1.6	3.8	7.5	12.3	7.5	4.8	1.5	
171	C 6	21.1	11.6	9.5	11.6	9.9	3.8	4.7	6.2	12.0	8.0	4.9	2.6	
172	C 6	18.8	9.0	9.8	11.8	11.2	0.4	3.6	5.7	14.3	8.7	5.1	2.5	
173	D 7	20.4	10.3	10.1	11.7	11.5	1.9	3.4	7.2	15.0	7.2	4.4	1.7	
174	D 8	18.5	10.6	7.9	10.7	9.6	1.5	4.9	4.7	10.7	7.2	4.8	1.4	
175	D 7	20.1	11.3	8.8	10.4	9.7	2.9	4.0	5.2	12.0	7.7	4.7	1.7	
176	D 6	28.1	15.7	12.4	12.7	10.7	7.2	8.3	7.0		10.0	6.4	4.7	
177	D 6	24.7	14.0	10.7	11.5	10.4	4.5	4.0	6.4	13.4	8.1	4.6	2.3	
178	D 6	19.4	10.2	9.2	9.8	8.0	2.1	5.0	4.9	10.3	6.6	4.4	1.8	
179	E 7	22.0	12.2	9.8	11.6	9.8	3.7	5.6	6.7		7.3	4.5	1.9	
180	E 7	23.3	13.0	10.3	11.6	11.7	5.5	6.7	6.4	13.0	8.8	5.4	1.5	
181	E 7	18.7	9.5	9.2	10.4	9.5	1.6	3.4	6.0	12.1	7.2	5.2	2.2	
182	D 7	23.5	13.2	10.3	10.7	10.5	5.2	5.7	6.5	12.4	7.7	4.5	1.9	
183	E 7	20.5	11.0	9.5	10.7	9.5	1.5	4.2	5.9	12.0	6.5	4.0	2.2	
184	D 7	22.7	12.2	10.5	11.0	9.7	3.2	4.9	7.9	12.3	6.5	4.5	1.8	
185	D 7	25.1	13.3	11.8	13.4	11.8	3.0	4.6	8.6	15.0	9.0	15.2	1.9	
186	D 8	17.3	10.2	7.1	9.2	7.9	3.3	4.2	5.0	10.2	6.5	4.3	0.7	
187	D 8	18.9	10.2	8.7	10.4	10.0	2.9	4.8	6.0	12.5	6.6	3.6	1.3	
188	D 7	23.9	16.1	7.8	11.1	10.9	7.2	6.8	6.1	12.9	7.9	5.1	1.7	
189	D 8	19.7	11.1	8.6	11.7	10.3	2.5	4.8	5.6	12.9	6.5	4.9	1.7	
190	D 7	19.5	10.5	9.0	12.4	10.3	0.6	4.0	5.7	12.4		6.6	1.2	
191	E 8													計測不能
192	E 8	19.9	9.8	10.1	10.7	10.9	2.8	5.6	5.8	12.9	8.1	4.6	2.6	
193	E 8	15.1	9.5	5.6	9.0	8.0	2.8	5.0		9.5				
194	E 7	20.5	10.9	9.6	9.5	9.5	2.2	4.7	6.8	11.5	6.7	4.1	1.8	
195	E 7	20.8	11.4	9.4	12.2	10.4	2.0	4.0	7.2	13.9	6.5	4.5	1.2	
196	E 7	20.3	10.8	9.5	11.5	10.0	2.7	6.4	6.3	12.2	7.8	4.2		
197	E 7	15.0	7.5	7.5	8.0	8.4	2.0	3.1	5.5	9.8	6.3	3.5	1.0	
198	E 7	21.7	11.5	10.2	12.1	11.9	3.2	5.3	6.6	14.7	9.7	6.6	3.0	
199	E 7	24.2	11.6	12.6	14.4	12.2	1.2	6.2	9.3	15.9	9.1	6.8	2.3	
200	E 7	20.4	10.0	9.5	11.1	8.9	2.7	4.7	6.8	12.1	6.2	4.0	1.5	
201	E 7	20.2	6.9	13.3	9.7	8.8	4.9	5.7	5.5	10.2	5.9	3.7	1.0	
202	E 7	19.7	9.6	10.1	9.6	9.8	2.1	3.9	6.7	11.6	6.0	3.7	2.4	
203	E 7	25.4	13.3	12.1	11.7	10.5	5.7	5.5	7.1	12.8	7.8	4.6	3.1	
204	E 7	22.5	14.5	8.0	10.9	9.9	6.2	5.5	5.8	12.0	6.8	4.5	1.3	
205	E 7	22.8	15.2	7.6	10.8	9.6	7.5	5.1	5.2	10.9	5.8	3.7	1.5	
206	E 7	17.8	10.5	7.3	10.9	10.2	3.1	5.0	4.1	12.3	7.1	4.7	1.2	
207	E 7	18.7	9.3	9.4	11.7	9.5	1.5	6.6	5.4	12.0	7.0	4.8	1.7	
208	E 7	23.5	13.5	10.0	10.5	16.5	4.8	4.3	6.8	13.2	6.9	4.4	2.5	
209	E 7	23.4	12.5	10.9	11.0	10.4	4.3	3.5	7.7	12.7	6.9	4.1	2.3	
210	E 7	20.8	12.5	8.3	11.2	9.9	3.5	4.9	8.7	12.1	6.8	3.8	1.5	
211	E 7	19.5	11.3	8.2	10.2	9.8	5.0	5.0	4.8	11.3	6.4	3.4	1.3	
212	E 7	17.9	8.7	9.2	9.5	9.1	1.3	3.9	6.3	11.7	6.1	3.2	1.0	
213	E 7	24.2	12.8	11.4	12.1	11.0	4.0	5.5	7.5	14.0	8.2	5.0	1.0	
214	E 7	13.9	7.4	6.5	8.5	7.1	0.6	2.8	11.2	10.3	6.0		1.0	
215	E 7	21.5	11.3	10.2	12.3	11.0	1.5	3.7	7.3		7.8	5.0	0.1	
216	E 7	20.7	19.9	0.8	12.2	10.5	1.5	3.9	9.6	13.5	7.9	4.9	3.0	
217	E 6	18.7	9.0	9.7	10.5	9.2	0.5	3.9	6.2	10.8	6.6	4.0	1.8	
218	E 6	18.2	10.7	7.5	10.0	8.1	3.4	4.8	6.1	10.3	6.2	4.0	1.0	
219	E 6	18.8	9.2	9.6	10.5	8.8	1.0	3.2	6.8	12.1	6.7	4.0	2.3	
220	E 6	20.5	12.1	8.4	11.5	10.3	4.4	5.7	6.0	12.1	7.2	4.7	1.3	
221	E 7	18.0	8.5	9.5	9.9	9.3	1.2	4.2	5.2	11.4	7.1	4.2	2.4	
222	E 7	22.5	12.9	9.6	10.7	8.6	5.0	4.3	6.3	11.7	7.7	4.9	2.2	
223	E 7	15.5	7.9	7.6	8.5	7.8	1.2	3.8	4.5	9.5	5.1	3.1	1.7	
224	E 7	17.4	10.2	7.2	9.6	8.7	2.8	5.6	5.1	9.8	6.1	4.0	1.2	
225	F 6	20.1	10.9	9.2	9.0	8.7	3.4	4.9	5.6	10.2	6.6	3.8	1.7	

番号	出土地区	法量												備考
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
226	D 6		7.9		8.5	7.1	2.1	6.0						
227	C 6	19.3	11.2	8.1	9.8	8.6	4.7	6.1	5.2	10.2	6.8	4.3	1.5	
228	D 7	18.8	10.5	8.3	12.1	11.3	2.0	5.4	6.5	14.4	6.8	4.8	1.0	
229	不明	18.2	10.4	7.8	9.4	8.4	5.5	5.8	4.6	9.4	5.4	3.4	1.1	
230	不明	13.0	6.8	6.2	8.8	8.0	1.1	3.0	5.0	10.3	5.8			
231	E 6													計測不能
232	不明	21.3	13.1	8.2	8.7	10.1	6.8	5.9	5.9	10.2	6.6	4.1	1.9	
233	不明	19.5	12.3	7.2	10.2	9.4	6.3	6.4	5.7	10.8	6.0	3.9	2.1	
234	不明	24.9	14.5	10.4	10.6	9.4	6.4	7.2	5.7	11.8	8.8	4.7	3.2	
235	不明						9.3	4.9						
236	不明	22.2	11.0	11.2	12.1	10.1	1.1	4.6	3.2	13.6	9.0	5.6	3.2	
237	不明	14.9	13.8		10.2	8.5	1.4	4.8	5.9	11.6	7.2		0.2	
238	不明	22.0	14.2	7.8	8.2	7.4	7.0	5.4	5.5	9.4	5.5	3.2	1.5	
239	不明	20.7	11.5	9.2	11.1	10.3	1.6	3.6	7.4	13.5	8.7	4.5	0.7	
240	不明	19.6	12.0	7.6	8.0	6.6	6.0	5.0	4.6	7.8	4.8	3.0	1.2	
241	不明	20.9	10.4	10.5	10.8	10.0	1.5	4.4	6.8	13.0	7.1	4.6	2.3	
242	不明	19.1	10.3	8.8	11.5	9.8	2.4	7.1	8.1	12.2	7.3	5.0	0.7	
243	不明		13.3		14.2		0.5	3.4						
244	不明		11.2		11.4		3.4	6.6						
245	不明		11.7		14.2		2.8	6.1						
246	C 8	27.9	16.6	11.3	14.5	11.7	5.5	7.2	7.6	15.6	9.7	6.7	1.9	
247	不明	26.6	16.0	10.6	13.2	11.5	5.4	7.2	7.2	13.0	8.1	4.9	1.8	
248	B 7	21.3	13.2	8.1	11.4	11.2	4.3	4.9	5.6	13.0	7.0	4.0	2.0	
249	B 8	22.0	12.3	9.7	11.5	10.2	4.8	6.9	5.7	12.7	9.5	6.3	2.1	
250	C 7	20.9	10.4	10.5	10.8	10.4	2.5	5.0	6.5	13.2	8.5	5.1	0.5	
251	C 7	22.5	13.2	9.3	12.4	10.7	5.0	6.5	6.7	13.2	9.5	5.8	1.5	
252	不明	22.0	12.2	9.8	10.4	9.4	7.0	6.6	8.4	11.5	7.2	5.9	1.6	
253	不明	22.4	11.8	10.6	13.3	10.6	2.1	6.7	8.5	14.2	8.0	5.5	1.1	
254	不明				10.5	9.4		4.7	8.5	11.2	5.4			
255	不明	22.0	11.1	10.9	10.7	10.2	3.0	5.7	8.0	11.2	6.7	3.7	1.6	
256	不明	20.1	9.8	10.3	11.6	10.0	0.9	5.6	7.7	12.3	7.4	4.3	1.8	
257	不明	15.8	13.2	2.6	10.8	8.2	0.4	3.0	5.4	11.0	4.1	2.3	0.6	
258	不明													計測不能
259	不明	29.2	27.0	2.2	12.7	10.8	7.5	7.2	8.1	14.1	9.2	5.7	2.8	
260	不明		5.7		9.5	7.1	6.2	6.0						
261	不明	19.6	4.6	8.0	10.4	10.0	4.8	5.7	8.2	10.5	6.7	3.5	1.4	
262	不明	22.0	10.1	11.9	13.7	11.3	0.5	4.5	7.8	16.7	8.6	5.8	3.0	梵字
263	不明	20.2	9.5	10.7	10.6	7.0	0.1	4.2	7.7	13.0	7.9	5.0	2.0	
264	不明	25.0	13.5	11.5	12.0	10.0	2.7	5.5	10.0	13.0	7.3	4.6	3.3	
265	不明	19.4	10.0	9.4	11.5	10.0	2.0	4.5	26.1	12.6	6.5	4.2	1.9	
266	不明	20.4	11.0	9.4	9.1	9.0	1.8	2.9	6.4	10.5	5.0	3.0	2.0	
267	不明	19.2	9.5	9.7	11.6	10.0	2.2	6.1	6.8	12.5	7.5	4.0	2.7	
268	不明	19.8	10.5	9.3	10.4	10.0	2.8	3.3	8.3	12.0	7.2	3.7	3.1	
269	不明	20.5	13.8	6.7	12.5	10.9	6.4	7.5	6.0	12.6	9.4	5.3	4.1	
270	不明	15.2	7.5	7.7	9.1	8.8	0.9	2.8	5.2	11.0	6.1	3.7	2.0	
271	不明				8.1	8.0			7.2	11.0	5.7	3.5	2.3	
272	A 7	23.5	10.8	12.7	11.6	11.0	2.7	6.1	11.4	14.2	8.4	5.2	2.5	
273	不明	18.8	9.8	9.0	9.7	9.5	4.0	6.6	7.7	11.1	6.8	4.2	2.2	
274	不明													計測不能
275	不明	25.3	13.9	11.4	14.1	12.8	1.9	5.6	8.3	16.1	8.4	5.4	1.7	
276	不明	18.9	9.9	9.0	10.7	9.4	2.1	4.4	6.4	12.0	7.4	4.2	2.1	
277	不明	21.4	12.2	9.2	11.1	9.9	1.8	3.1	6.3	12.3	8.3	5.7	2.2	
278	不明	18.8	8.3	10.5	9.6	8.4	0.5	2.4	6.8	12.1	8.1	5.3	2.6	
279	不明	19.7	9.1	10.6	10.3	10.4	1.6	3.9	7.5	13.0	6.7	4.7	2.5	
280	不明	19.3	11.7	7.6	10.5	9.4	4.8	6.7	5.0	11.1				
281	不明	17.6	10.6	7.0	10.2	9.1	2.3	5.6	5.5	11.8			0.4	

表6　五輪塔火輪法量

番号	出土地区	法量									備考
		a	b	c	e	g	h	i	j	k	
1	不明	14.3	10.0	4.3	7.3	2.0	9.4	5.2	21.1	20.9	
2	不明	11.8	8.0	3.8	6.7	3.2	8.3	6.5	18.8	17.5	
3	不明	7.8	5.1	2.7	5.4	2.5	7.0	5.2	16.2	14.9	
4	不明	11.8	7.3	4.5	6.5	3.4	8.0	5.6	20.6	19.3	
5	不明	11.8	7.5	4.3	6.7	3.3	10.5	6.7	17.9	13.3	
6	不明	10.6	6.8	3.8	6.8	2.7	8.8	6.6	18.0	16.4	
7	不明	7.8	5.1	2.7	4.2	2.4	7.0	5.1	14.2	13.5	
8	不明	10.0	5.7	4.3	5.8	3.4	9.5	7.5	17.8	14.8	
9	不明	5.9	2.9	3.0	4.7	1.6	5.4	4.0	13.8	12.7	
10	不明	8.5	5.3	3.2	4.7	2.3	9.1	6.1	17.1	12.0	
11	不明	10.7	7.7	3.0	5.7	4.2	8.8	7.2	18.8	15.2	
12	不明	11.0	7.8	3.2	4.5	2.7	8.5	5.2	20.1	18.6	
13	不明	9.3	4.5	4.8	5.7	3.2	8.7	6.5	17.4	16.0	
14	不明	9.2	5.7	3.5	5.0	2.1	7.5	5.2	15.2	14.5	
15	不明	14.2	8.2	6.0	7.8	3.9	9.8	7.0	19.9	18.0	
16	不明	11.4	7.6	4.0	6.0	3.9	8.7	7.5	18.8	17.4	
17	不明	13.8	9.5	4.3	7.4	3.7	9.3	6.2	20.9	20.4	
18	不明	12.4	7.8	4.6	6.6	4.0	9.0	7.7	19.9	16.8	
19	不明	8.2	5.4	2.8	4.3	2.7	8.2	4.6	16.2	14.6	
20	不明	13.2	8.3	4.9	8.0	3.3	10.5	6.4	20.8	18.8	
21	不明	8.3	4.5	3.8	5.9	2.8	7.8	5.8	15.6	14.5	
22	不明	12.4	8.1	4.3	6.9	2.2	9.5	6.0	20.5	19.8	
23	不明	12.3	7.8	4.5	6.0	4.2	4.5	6.7	21.8	21.3	
24	不明	9.5	6.0	3.5	5.6	2.4	10.5	6.5	17.8	16.7	
25	不明	7.8	4.0	3.8	5.1	2.3	7.5	5.0	14.5	12.8	
26	不明	7.8	4.8	3.0	5.5	1.8	8.3	6.2	16.7	16.3	
27	不明	6.4	3.9	2.5	4.4	2.8	7.3	5.2	13.3	12.4	
28	不明	11.1	6.9	4.2		3.0	9.2	7.0	18.3	15.1	
29	不明	11.9	6.9	5.0	5.8		8.0		19.6	17.5	
30	不明	11.8	6.9	4.9	7.4	2.3		7.2	20.4	18.4	
31	不明	6.4					9.0	15.5			
32	不明	9.5	6.3	3.2	4.5	2.1			17.0	15.0	
33	不明	9.8	5.3	4.5	6.2	3.7	9.0	6.2	17.5	15.6	
34	不明	13.3	9.4	3.9	6.6	3.7	20.3	6.8	22.4	21.3	
35	不明	8.9	5.9	3.0	5.3	3.2	7.8	5.7	15.8	14.1	
36	不明	12.9	7.8	5.1		3.2	20.3	6.3	22.7	21.5	
37	不明	10.2	6.5	3.7	5.8	2.6	8.8	5.8	17.6	16.2	
38	不明	12.5	8.0	4.5	6.9	3.5	9.0	7.0	19.9	18.0	
39	不明	9.7	6.2	3.5	5.0	2.2	7.5	5.5	15.6	15.0	
40	不明	11.3	7.2	4.1	6.4	2.3	9.8	6.5	19.9	18.8	
41	不明	8.2	5.2	3.0	5.5	2.7	6.2	4.6	16.5	15.6	
42	不明	11.4	7.2	4.2	5.0	0.9	11.8	5.5	21.4	21.4	
43	不明	9.3	4.5	4.8	5.7	2.3	8.3	5.0	17.2	16.4	
44	不明	10.8	7.3	3.5	5.0	3.0	9.0	5.8	18.1	17.6	
45	不明	13.0	7.7	5.3	6.2	3.5	9.5	6.5	18.3	17.2	
46	不明	5.4	1.8	3.6	5.3	2.7	7.8	5.0	16.1	14.9	
47	不明	12.0	7.2	4.8	7.3	5.1	9.9	8.0	21.3	18.8	
48	不明	9.7	5.4	4.3	6.0	1.4	8.0	5.8	17.9	15.6	
49	不明	11.1	6.1	5.0	6.2	1.3	10.0	7.3	19.4	16.9	
50	不明	5.8	2.7	3.1					14.9	14.0	
51	不明	13.7	8.7	5.0	7.6	3.1	9.8	7.0	22.9	22.5	
52	不明	13.6	10.2	3.4	5.7	4.1	9.7	6.5	23.0	22.2	
53	不明	9.8	6.0	3.8	5.3	3.5	10.1	6.0	19.0	18.1	
54	不明	8.8	4.6	4.2	5.3	2.7	7.8	5.6	16.6	16.4	
55	不明	8.9	5.6	3.3	4.9	2.5	8.0	5.8	15.9	15.7	
56	不明	7.7	4.9	2.8	4.0	2.4	7.7	5.6	16.2	14.7	
57	不明	9.4	5.7	3.7		2.9		6.5	18.9	17.4	
58	不明	14.2	7.8	6.4	6.7	3.7	10.5	8.2	21.8	19.2	
59	不明	13.6	9.2	4.4	7.1	4.1	8.9	7.0	21.2	19.9	
60	不明	14.4	9.2	5.2	7.7	3.8	11.6	7.5	23.2	21.9	
61	不明	7.0	4.0	3.0	3.6	1.8	6.8	5.0	14.7	13.8	
62	不明	8.5	5.3	3.2	4.2	2.5	11.8	5.6	17.0	16.4	
63	不明	13.1	8.9	4.2	5.7	2.6	10.0	6.5	22.6	21.8	
64	不明	9.8	5.1	4.7	5.1	1.0	10.5	6.0	18.8	17.8	
65	不明	7.5	4.5	3.0	4.6	1.3	10.0	6.5	16.4	15.5	
66	不明	9.0	5.5	3.5	4.0	2.5	6.7	5.0	15.0	13.3	
67	C 7	8.7	4.9	3.8	4.9	2.0	7.9	5.3	15.2	13.0	
68	C 7	7.9	5.0	2.9	2.1	2.9	7.6	5.5	15.8	13.8	
69	C 7	10.4	6.4	4.0	6.8	3.8	8.8	7.0	19.0	16.7	
70	C 7	14.5	10.5	4.0	6.7	4.2	9.2	6.0	19.4	17.7	
71	C 7	8.8	6.5	2.3	6.2	2.7	7.0	5.0	15.8	13.7	
72	C 7	11.0	7.7	3.3	5.5	3.0	9.0	5.5	16.0	14.9	
73	C 6	13.8	9.8	4.0	7.0	3.8	10.5	7.2	23.0	21.5	
74	C 6	13.0	8.3	4.7	6.8	2.7	7.8	6.2	21.6	19.8	底面凹部径7　深1.3m
75	C 6										計測不能

番号	出土地区	法量									備考
		a	b	c	e	g	h	i	j	k	
76	D 8	4.6	3.6	1.0	2.0	2.1	6.2	5.2	13.6	11.8	
77	D 8	8.0	5.2	2.8	4.7	3.0	7.2	4.2	16.6	14.5	
78	D 6	9.1	6.1	3.0	5.6	3.7	8.8	6.2	17.3	15.9	
79	D 7	10.4	3.7	6.7	5.2	1.7	9.5	5.0	15.7	14.7	
80	D 6	9.1	5.3	3.8	4.2	1.8	6.8	5.0	15.9	13.5	
81	D 6	8.2							16.5	14.3	
82	D 7	12.9			5.0	3.6	8.0	6.0	18.1	15.2	
83	D 7	11.6	7.6	4.0	6.3	4.0	8.5	6.5	18.7	17.2	
84	D 7	10.8	7.8	3.0	5.2	4.0	8.0	5.5	18.6	15.7	
85	D 7	9.3	6.3	3.0	5.3	3.0	7.1	6.0	16.2	14.2	
86	D 7	8.5	6.0	2.5	4.8	2.8	6.5	4.5	14.3	13.1	
87	D 7	9.3	6.0	3.3	5.4	3.0	9.0	6.3	15.3	13.1	
88	C 6	7.5	5.0	2.5	4.0	1.7	7.0	4.5	14.8	14.0	
89	C 6	5.3	2.9	2.4	3.2	0.4	5.5	4.0	12.6	11.5	
90	D 7	10.0	7.3	2.7	5.3	3.3	7.0	5.3	16.2	14.7	
91	D 7	10.1	5.7	4.4	6.8	2.8	8.0	5.5	19.0	18.0	
92	D 7	9.0	5.7	3.3	5.2	3.0	7.6	6.4	15.5	13.3	
93	D 7	18.1	9.1	9.0	7.2	3.9	9.7	6.9	21.9	18.5	底面凹部径6.5深1.0
94	D 7	8.2	4.7	3.5	5.2	2.8	8.3	5.0	16.5	13.7	
95	D 6	6.2	4.2	2.0	4.0	2.7	6.5	5.0	14.5	13.5	
96	D 7	8.5	5.5	3.0	5.5	3.2	6.9	5.5	17.8	15.3	
97	D 7	10.7	7.0	3.7	4.5	3.9	8.8	6.2	18.0	15.6	
98	D 7	14.0	9.0	5.0	8.0	3.1	11.5	5.5	19.8	18.2	
99	D 7	11.5	8.2	3.3	4.5	3.7	9.0	6.5	17.8	14.3	
100	D 7	12.9	9.1	3.8	5.1	2.5	8.0	7.1	19.5	17.0	
101	D 7	12.4	7.1	5.3	6.5		10.0	6.2	22.1	18.2	
102	D 7	12.2	7.3	4.9	6.0	2.4	7.7	6.1	19.4	13.5	
103	D 7	6.9	3.2	3.7	6.0	3.8	8.3	7.3	18.1	16.0	
104	D 7	9.2	5.7	3.5	4.5	3.3	7.6	6.2	15.9	13.0	
105	D 7	9.6	6.4	3.2	5.0	1.6	7.8	7.0	17.5	15.8	
106	D 7	8.3	6.0	2.3	5.5	2.9	7.2	4.5	17.0	16.0	
107	D 6	8.4	5.7	2.7	3.5	3.2	8.0	5.3	15.5	13.7	
108	D 6	14.6	10.5	4.1	7.5	2.1	8.9	5.9	21.7	21.4	
109	D 6	10.5	6.5	4.0	6.0	3.0	8.8	6.0	16.3	15.5	花崗岩
110	D 6	11.8	8.3	3.5	6.3	3.0	7.7	6.0	18.5	17.3	
111	D 6	8.8	6.5	2.3	4.7	3.3	7.5	5.4	15.1	14.6	
112	D 6	13.0	9.0	4.0	6.4	3.5	9.9	7.0	16.4	20.5	径7.0深1.2 梵字
113	D 6	13.2	9.2	4.0	7.0	4.7	10.0	5.5	20.0	18.8	
114	D 6	11.3	7.5	3.8	5.0	4.3	8.0	6.0	16.5	15.6	
115	E 6										
116	D 6	8.0	5.0	3.0		1.1	4.5	3.5	13.7	11.7	
117	D 6	8.8	6.3	2.5	4.0	2.6	8.2	5.3	16.0	14.2	
118	E 5	6.4	3.9	2.5		1.4	6.3	3.8	12.5	10.5	
119	E 5	8.9	6.4	2.5	6.8	2.2	9.0	5.5	19.3	18.2	
120	E 5	10.7	7.7	3.0	6.6	3.6	8.0	5.6	17.7	15.5	
121	E 6	6.5	3.3	3.2	5.3	3.2	8.0	5.5	15.6	14.0	
122	E 6	12.5	8.1	4.4	7.1	4.6	10.0	6.5	19.5	16.0	
123	E 6	8.7	5.7	3.0	4.0	2.6	7.3	5.6	16.0	13.9	
124	D 6	7.0	4.5	2.5	4.5	2.5	7.5	5.8	14.5	12.0	
125	D 6	10.0	6.8	3.2	5.5	3.0	8.0	5.2	15.5	14.2	
126	D 6	12.4	8.8	3.6	5.5	3.5	8.7	7.1	20.2	18.6	
127	E 6	13.0	8.5	4.5	7.2	3.0	8.0	5.7	17.0	14.7	
128	E 6	8.2	5.4	2.8	3.7	2.8	9.0	5.5	16.4	14.2	
129	E 5	17.0	11.0	6.0	7.5	3.6	10.0	7.2	23.2	20.2	底面径8.8深1.5
130	E 6										
131	E 6	13.5	8.8	4.7	7.2	2.4	9.3	6.2	20.0	19.0	
132	E 6	12.5	7.8	4.7	7.6	4.0	9.2	7.3	19.5	16.1	
133	E 6	8.0	5.0	3.0	5.6	2.6	7.5	5.5	16.2	13.9	
134	E 5										
135	E 5	13.0	8.3	4.7	8.3	1.7	7.8	6.0	18.4	14.1	
136	E 6	6.8	4.3	2.5	4.3	2.1	8.0	5.0	14.0	13.0	
137	D 8	8.7	5.7	3.0	5.6	2.7	7.0	5.4	16.0	15.0	底面径6.5深1.2
138	D 8	10.3	7.0	3.3	5.6	3.2	7.7	5.5	16.8	14.6	
139	D 8	9.6	6.8	2.8	5.5	3.3	9.3	7.2	16.9	15.0	
140	D 8	8.7	5.7	3.0	5.1	3.2	9.0	6.0	16.0	15.1	
141	D 8	12.8	7.6	5.2	7.5	4.6	9.2	7.1	19.5	17.3	
142	D 8										
143	E 6	9.7	6.7	3.0	5.0	2.0	9.0	5.0	17.2	15.5	
144	D 8	10.8	6.9	3.9	6.0	3.5	9.5	7.0	18.0	16.0	
145	D 8	8.3	5.5	2.8	4.0	1.7	7.0	4.5	18.4	15.5	
146	D 8	10.0	7.0	3.0	4.5	2.2	7.0	4.5	17.6	14.8	
147	D 8	9.2	6.1	3.1	6.1	3.8	8.2	6.3	17.5	15.8	
148	D 7	10.2	7.2	3.0	5.5	2.7	8.0	5.2	17.0	16.1	
149	E 6	12.0	7.8	4.2	7.2	3.0	8.0	6.0	20.1	18.6	
150	D 7	10.1	6.5	3.6	6.2	4.1	8.5	5.7	19.5	17.3	

番号	出土地区	法量									備考
		a	b	c	e	g	h	i	j	k	
151	D 7	12.3	9.0	3.3	5.5	4.0	8.7	5.7	18.5	14.9	
152	D 7	12.5	8.0	4.5	8.0	3.9	9.4	5.6	19.0	18.0	
153	D 7	8.7	5.7	3.0	4.5	2.6	8.5	5.5	16.2	14.1	
154	D 7	8.0	5.2	2.8	4.5	2.7	7.5	5.2	15.2	13.5	
155	D 7	6.9	4.9	2.0	5.1	2.5	7.2	4.8	15.5	14.0	
156	D 7	10.9	7.1	3.8	6.3	3.9	7.5	6.2	18.4	16.4	
157	D 7	8.1	5.6	2.5	4.0	2.2	7.0	6.0	15.2	14.0	
158	D 8	6.8	4.1	2.7	3.9	2.3	7.0	5.6	15.2	14.0	
159	D 7	8.0	5.3	2.7	4.0	2.7	7.2	5.0	16.6	14.0	
160	D 7										
161	E 7	9.4	6.1	3.3	4.8	3.4	8.3	5.5	17.0	13.6	
162	E 7	10.5	7.1	3.4	6.3	2.8	9.0	6.0	16.1	15.0	
163	E 7	8.4	4.9	3.5	5.8	2.7	8.0	6.0	17.5	15.1	
164	E 7	10.0	6.8	3.2	5.0	3.0	8.5	6.0	15.6	13.6	
165	E 7	8.7	5.5	3.2	4.8	3.0	6.0	5.3	15.0	12.7	
166	D 8	9.4	5.9	3.5	5.5	3.5	7.7	6.0	16.4	14.0	
167	D 8	7.7	4.9	2.8	7.0	2.5	6.3	4.6	12.6	11.8	
168	D 8	9.6	5.8	3.8	6.0	3.0	8.0	6.0	15.8	14.0	
169	E 8	6.2	3.7	2.5	4.5	2.5	6.5	4.5	13.6	12.5	
170	E 7	13.0	8.3	4.7	5.5	3.0	8.8	6.2	20.8	18.3	
171	E 7	7.5	4.5	3.0	4.5	3.0	8.0	6.0	14.6	13.4	
172	D 6	6.5	4.5	2.0	2.5	1.7	6.0	3.7	15.0	14.0	
173	E 7	10.8	6.6	4.2	5.7	3.8	8.0	5.7	18.4	16.0	
174	D 8	7.5	4.5	3.0	3.6	1.9	6.5	5.2	14.2	12.8	
175	E 7	7.2	4.0	3.2	5.3	2.0	7.0	3.5	12.2	10.9	
176	E 7	6.9	4.4	2.5	3.8	2.3	7.5	4.0	14.5	13.2	
177	E 7	9.6	6.1	3.5	6.0	3.3	7.0	5.0	16.5	14.2	
178	E 7	8.3	5.4	2.9	4.2	2.9	7.5	5.5	15.0	13.0	
179	E 7	7.4	4.4	3.0	4.6	2.8	7.0	5.0	15.3	14.0	
180	E 7	15.0	10.7	4.3	7.8	2.2	9.2	4.7	22.0	20.2	
181	E 7	7.8	5.9	2.0	5.0	1.5	6.3	5.1	13.9	12.9	
182	E 7	9.7	6.5	3.2	5.5	4.0	8.9	5.7	16.0	14.1	
183	E 7	6.9	4.4	2.5	4.6	2.2	7.5	4.7	15.5	13.2	
184	E 7	8.4	5.2	3.2	5.5	3.0	8.0	6.0	15.4	14.5	
185	E 7	10.3	6.0	4.3	6.6	3.7	8.5	6.2	17.4	15.2	
186	E 7	5.9	3.3	2.6					15.7	14.0	
187	E 7	9.0	6.5	2.5	5.0	2.4	7.9	6.0	16.4	14.1	
188	E 7	6.5	4.3	2.2	3.8	2.2	7.5	5.1	14.5	13.5	
189	E 7	8.1	5.1	3.0	4.8	3.1	8.0	5.8	16.2	14.2	
190	E 7	8.7	6.1	2.6	4.5	2.5	7.0	5.5	14.5	12.6	
191	E 7	11.0	7.0	4.0	6.0	3.9	8.7	7.0	17.8	15.0	
192	E 7	10.5	7.0	3.5	6.2	3.1	10.0	7.0	18.1	16.1	
193	E 7	7.9	5.6	2.3	4.5	2.4	7.0	5.0	16.0	13.9	
194	E 7	8.0	5.5	2.5	4.2	2.7	7.5	6.0	14.9	14.0	
195	E 6	8.7	5.9	2.8	5.0	3.9	9.0	5.5	17.3	15.3	
196	E 7	15.0	9.7	5.3	8.2	3.7	10.0	7.8	23.2	21.8	
197	E 7	7.4	4.9	2.5	4.5	3.3	8.5	6.6	16.3	14.2	
198	D 7	6.5	4.5	2.0	3.5	2.6	6.5	5.0	12.6	10.4	
199	D 7	9.0	6.0	3.0	5.0	3.0	8.0	5.0	14.8	13.7	
200	E 6	4.8	2.8	2.0	3.8	2.5	7.0	4.2	11.5	10.6	
201	不明	8.5	5.3	3.2	6.1	3.3	9.8	6.0	17.0	14.7	
202	不明	8.9	5.9	3.0	5.0	3.3	8.0	5.0	16.4	14.9	
203	不明	12.3	8.0	4.3	7.5	3.8	9.0	6.0	21.5	18.9	
204	不明	8.4	4.4	4.0	5.1	2.0	8.6	5.2	15.8	14.1	
205	不明	5.9	3.9	2.0	3.5	3.1	7.5	5.3	13.4	12.2	
206	不明	6.0	3.0	3.0	5.0	1.5	7.0	3.6	15.2	13.0	
207	不明	12.5	8.0	4.5	7.3	2.8	10.0	5.7	19.7	16.3	
208	不明	7.9	5.1	2.8	3.8	2.7	7.0	4.2	16.4	14.5	
209	不明	12.1	6.7	5.4	7.3	2.8	11.0	7.0	20.2	18.1	
210	不明	8.6	6.1	2.5	4.1	3.0	8.0	5.5	15.4	14.0	
211	不明										
212	不明	7.6	5.0	2.5	4.0	3.0	8.0	5.9	17.3	15.1	
213	不明	10.3	6.5	3.8	5.2	3.7	9.3	7.2	18.9	16.4	底面隅丸凹部
214	不明	6.2	3.7	2.5	3.7	2.2	6.8	5.0	15.7	15.0	
215	不明	12.0	8.0	4.0	6.0	2.5	8.0	5.5	17.4	15.4	
216	不明	12.5	8.5	4.0	6.3	2.8	8.5	6.0	20.1	16.6	
217	不明										
218	C 8	10.4	6.6	3.8	6.3	3.5	7.9	6.0	18.3	16.8	底面隅丸凹部
219	C 8	14.0	9.2	4.8	6.6	2.7	9.0	6.5	23.0	22.0	
220	C 8	14.0	9.5	4.5	8.3	3.4	9.0	5.6	22.3	21.0	
221	C 8	9.4	5.9	3.5	6.0	2.9	8.0	5.6	16.3	13.4	
222	C 8	10.8	6.6	4.2	7.9	2.9	9.7	6.5	18.4	14.8	
223	C 8	8.1	5.1	3.0	4.8	2.3	7.5	5.0	16.1	15.5	
224	C 8	7.0	4.0	3.0	5.2	1.9	8.1	4.0	15.8	14.1	
225	C 8	11.3	8.1	3.2	6.0	4.0	9.5	7.2	20.1	18.3	

番号	出土地区	法量									備考
		a	b	c	e	g	h	i	j	k	
226	C 8	11.3	7.4	3.9	7.0	3.5	8.0	6.2	19.0	16.6	
227	不明	13.0	8.8	4.2	6.8	3.8	9.7	6.7	21.7	18.5	底面凹部径5.7 深1.3
228	B 8	6.6	4.5	2.1	3.6	2.7	6.4	5.1	14.8	13.3	
229	C 7	9.5	6.1	3.4	5.0						
230	C 7	10.3	5.8	4.5	6.0	3.2	9.1	6.7	18.0	15.2	
231	B 7	11.5	8.1	3.4	5.0	3.5	9.9	7.0	18.2	15.2	
232	不明	13.7			6.1	2.2	8.6	5.5	20.3		
233	不明	7.4	5.6	1.8	3.0	2.7	8.0	5.0	14.6	14.0	
234	不明	9.3	5.2	4.1	5.6	3.2	7.7	6.4	16.5	14.4	
235	不明	8.7	6.1	2.6	5.1	2.1	7.5	6.0	16.5	13.8	
236	不明	8.7	5.8	2.9	5.1	2.8	7.5	5.5	15.8	14.3	
237	不明	8.4	5.3	3.1	5.0	2.6	7.0	5.7	15.8	14.2	
238	不明	7.1	4.3	2.8	5.0	2.1	8.3	6.0	17.8	15.0	
239	不明	10.5	7.5	3.0	5.0	2.8	7.5	6.0	15.6	13.6	
240	不明	8.0	6.1	1.9	5.5	2.7	7.9	5.1	14.5	13.3	
241	不明	8.6	5.8	2.8	5.0	3.9	10.7	8.8	17.5	14.3	
242	不明	5.0	3.3	1.7	3.9	2.0	7.0	5.1	14.5	12.7	
243	不明	8.6	5.8	2.8	5.0	3.9	10.7	8.8	17.5	14.3	
244	不明	8.5	6.5	2.0	4.8	1.6	7.7	5.0	15.1	13.4	
245	不明	8.3	5.5	2.8	5.5	3.3	7.6	5.9	17.5	15.0	
246	不明	9.0	5.4	3.6	6.7	3.3	8.6	5.9	17.4	15.7	
247	不明	10.7	7.3	3.4	5.3	2.8	8.9	5.5	16.8	15.0	
248	不明	9.0	6.1	2.9	4.3	2.8	7.7	6.2	16.8	15.0	
249	不明	9.3	7.2	2.1	5.5	3.4	8.1	6.5	15.9	14.1	
250	不明	8.1	4.6	3.5	4.8	2.9	7.0	6.0	15.3	13.5	
251	不明	7.1	4.3	2.8	4.0	2.3	6.0	5.2	12.9	11.4	
252	不明	11.7	8.0	3.7	5.4	3.3	7.7	6.4	18.6	17.2	
253	不明	5.2	3.5	1.7	3.1	1.8	5.0	3.7	12.3	11.0	
254	不明	6.9	4.1	2.8	3.2	3.2	7.0	5.0	13.9	12.7	
255	不明	8.4	6.2	2.2	3.4	2.1	6.0	5.2	14.2	12.2	
256	不明										
257	不明	10.6	6.9	3.7	5.6	5.0	9.0	7.9	19.7	15.8	
258	不明	9.3	5.6	3.7	5.1	1.7	10.1	6.2	18.1	15.8	
259	不明	6.4	3.5	2.9	4.4	3.4	7.3	6.7	16.8	13.8	
260	不明	8.7	6.2	2.5	4.0	3.2	7.3	6.4	17.3	13.6	
261	不明	7.5	4.9	2.6	3.5	2.2	7.5	5.7	16.0	13.8	
262	不明	15.6	10.0	5.6	9.0	4.7	9.5	9.0	24.1	22.1	
263	E 6	13.5	9.0	4.5	7.0	2.8	8.8	7.6	21.3	18.0	
264	不明	10.2	5.5	4.7	6.0		7.5		21.4	16.0	
265	不明	10.3	6.4	3.9	4.3	2.6	7.6	6.3	17.0	15.7	
266	不明	7.0	3.8	3.2	4.5	2.8	6.8	6.0	14.7	13.5	
267	不明										
268	不明	7.9	4.4	3.5	3.8	2.5	8.8	6.5	16.3	13.5	
269	不明	5.5				1.5	7.0	5.8	14.3		
270	不明	7.3	4.0	3.3	4.5	2.1	7.3	6.0	15.1	11.7	
271	不明	7.2	4.3	2.9	4.2	1.6	5.4	4.2	14.3	12.0	
272	不明	8.6	5.7	2.9	4.4	2.5	6.9	6.0	15.9	14.8	
273	不明										
274	4 A	10.2	4.3	5.9	5.6	2.6	7.2	5.9	18.7	14.7	
275	不明	14.0	7.0	7.0	7.0	1.8	9.5	5.2	20.5	20.0	花崗岩
276	不明	22.8	17.1	5.7	5.7		15.2		44.0	40.0	花崗岩

表7　五輪塔水輪法量

番号	出土地区	法量 a	b	c	d	e	f	g	備考
1	不明	15.2	8.7	16.5	8.6	7.4	4.2	※0.9	
2	不明	15.4	9.5	18.2	9.7	9.5	—	—	
3	不明	15.9	9.1	17.8	10.5	7.0	5.1	※1.0	
4	不明	15.9	10.2	16.6	※9.0	8.9	3.3	※0.5	
5	不明	15.3	9.4	15.5	※8.5	7.6	—	—	
6	不明	17.0	11.5	17.4	8.7	8.0	—	—	
7	不明	18.5	7.4	20.5	11.1	※10.3	—	—	
8	不明	15.6	8.6	17.4	※8.5	※7.5	—	—	
9	不明	15.2	9.0	17.4	8.5	9.0	5.1	※1.0	
10	不明	19.5	※9.4	※19.8	11.0	※10.2	5.6	※0.5	
11	不明	21.5	※11.6	※22.1	11.5	※10.0	—	—	
12	不明	13.4	8.0	※14.8	※9.4	9.9	—	—	
13	不明	14.4	※7.5	19.4	13.0	11.8	—	—	
14	不明	23.2	12.0	26.1	12.1	11.0	5.0	1.0	
15	不明	19.8	13.0	20.7	11.6	9.6	4.8	0.8	
16	不明	17.7	9.8	20.2	9.7	8.2	—	—	
17	不明	16.3	9.5	19.9	11.2		—	—	
18	不明	16.3	10.0	19.4	10.3	8.2	—	—	
19	不明	21.7	12.3	23.7		10.3	—	—	
20	不明	18.7	10.0	22.3		9.5	—	—	
21	不明	17.7	10.0	19.5	11.7	10.1	—	—	
22	不明	17.1	10.2	18.4	9.1	9.1	—	—	
23	不明	14.1	10.1	15.3	8.0	7.2	—	—	
24	不明	14.9	9.8	20.8	12.7	12.1	—	—	
25	不明	18.2	※10.5	23.5	※10.6	※11.1	※6.6	※0.7	
26	不明	※16.1	※9.1	※16.2	※7.2	※6.7	※4.7	※1.1	
27	不明	18.1	10.9	19.9	12.4	10.2	5.6	※0.8	
28	不明	15.5	9.5	19.2	9.3	7.9	3.2	※0.4	
29	不明	14.9	9.5	17.2	9.5	8.2	—	—	
30	不明	17.9	10.5	20.5	11.2	7.8	—	—	
31	不明	※21.3	※10.8	※24.0		10.9	—	—	
32	不明	14.3	7.8	20.0	9.3	8.2	—	—	
33	不明	※18.0	※10.5	※20.3	11.2				
34	不明	17.0	10.0	17.5	8.8	8.4	—	—	
35	不明	15.6	8.0	16.8	10.1	9.2	—	—	
36	不明	14.1	7.5	15.1	8.1	7.9	—	—	
37	不明	※15.1	※9.5			9.8	—	—	
38	不明	※20.3	※11.2	25.9		※10.3	—	—	
39	不明	15.3	9.9	14.1	7.3	7.2	—	—	
40	不明	14.8	9.1	19.3	※9.8	7.8	4.5	※0.9	
41	不明	14.7	8.8	15.4	7.8	7.2	3.2	※0.5	
42	不明	13.6	8.0	14.1	7.9	6.3	※3.5	※0.2	
43	不明	14.6	8.0	16.4	8.2	7.8	4.6	※0.8	
44	不明	16.9	9.8	18.8	9.3	8.0	4.0	※0.9	
45	不明	14.0	7.5	※14.7		5.7	—	—	
46	不明	14.0	9.5	13.7	7.5	7.0	—	—	
47	不明	17.3	9.6	18.8	9.2	10.0	4.6	7.0	
48	不明	15.2	10.0	14.6	8.2	7.1	—	—	
49	不明	19.8	12.5	23.7	11.3	10.0	6.0	※0.8	
50	不明	17.7	10.5	※21.0	10.8	9.4	5.0	※1.6	
51	不明	16.0	9.0	18.7	10.4	9.1	—	—	
52	不明	15.6	9.0	17.2	8.6	8.0	—	—	
53	不明	※16.7	※8.4	※16.6	8.6				
54	不明	18.4	9.9	23.0	11.4	10.5	4.6	※0.5	
55	不明	20.1	12.0	20.2	9.0	9.4	5.2	※1.1	
56	不明	19.3	10.5	19.0	11.2	※9.3	—	—	
57	不明	※20.5	※12.5	21.5	10.7		—	—	
58	不明	16.6	10.4	20.1	11.2	10.0	—	—	
59	不明	※15.3		※16.0		11.2	※6.0	※2.0	
60	不明	18.5	11.0	21.0	10.2	8.8	※3.8	※0.5	
61	不明	※15.5	9.9	16.0	※9.0	※7.5	—	—	
62	不明	15.4	8.8	15.5	8.2	7.0	—	—	
63	不明	15.2	9.3	16.2	10.0	9.1	—	—	
64	不明	18.2	11.5	20.3	11.2	※10.9	5.4	※0.8	
65	不明	18.5	12.0	20.4	12.3	※8.2	※3.0	※0.5	
66	不明	17.3	8.4	21.3	11.5	11.7	—	—	
67	不明	※18.0	※10.0	※19.5	※8.4	※7.5	—	—	
68	不明	※16.5	※9.0	※16.5	※8.5	※7.0	—	—	
69	不明	23.0	12.0	24.0	11.6	9.5	—	—	
70	不明	16.0	9.0	18.3	10.0	8.6	※4.0	※1.0	
71	不明	13.3	8.3	15.5	9.6	※7.0	—	—	
72	不明	17.2	9.5	21.3	※11.5	11.0	—	—	
73	不明	※15.0	※9.0	※16.0		※7.0	—	—	
74	不明	20.0	10.5	22.5	11.3	10.7	—	—	
75	不明	17.0	※10.0	※22.3	12.7	※12.7	※3.8	※0.6	

番号	出土地区	法量							備考
		a	b	c	d	e	f	g	
76	不明	※21.0	※11.5	※19.5	※10.0		—	—	
77	不明	19.4	9.0	※20.8	11.3	※10.0	—	—	
78	不明	15.7	10.0	19.0	10.5	※8.9	—	—	
79	不明	※16.5	9.1	19.4	9.7	※8.3	—	—	
80	不明	16.2	10.0	19.5	11.2	9.8	—	—	
81	不明	※18.5	14.2			10.2	5.0	※1.0	
82	不明	18.5	10.4	20.2	9.8	8.3	—	—	
83	不明	※20.3	11.0	22.0	9.5	※8.5	—	—	
84	不明	※20.2	11.3	20.9	※9.1	※8.6	—	—	
85	不明	※17.0	10.2			※8.0	※4.2	※0.8	
86	不明	※13.4	7.5	※13.6	※7.7	※6.4	—	—	
87	不明	17.6	9.8	18.7	8.8	※7.3	※3.7	※0.5	
88	不明	※16.9	9.5	19.8	※10.2	※9.9	※4.8	※0.4	
89	不明	※13.0	※6.8	※16.0	※8.4		—	—	
90	不明	※16.7	※10.5	15.7	※8.0	※6.8	—	—	
91	不明	※18.1	※11.1	※18.9	※7.2	※7.4	—	—	
92	不明	14.5	8.5	※15.9	※8.5	※7.9	—	—	
93	不明	※14.0	※8.5	※14.8	※8.0	※7.4	—	—	
94	不明	※10.1		※15.5	※7.5	※7.3	—	—	
95	不明	14.0	8.5	17.3	9.9	※8.7	—	—	
96	不明	※14.5	※9.0	※13.8			—	—	
97	不明	※13.0					—	—	
98	不明	※18.0							
99	不明	19.1	10.0	23.2	10.9	10.9	—	—	
100	不明	17.3	8.6	19.4	11.2	7.0			
101	不明	16.2	8.1	19.5	11.0				
102	不明	14.5	7.2	14.7	7.4	8.2	4.5	0.2	
103	C 7	20.8	10.5	23.8	10.5	9.5			
104	C 7	20.5	10.5	23.6	8.7	6.5			
105	C 7	13.3	7.5	13.8	5.8	5.6			
106	C 7	20.5	11.0	26.1	12.0	11.4	5.5	1.0	
107	C 6	14.5	7.2	15.6	7.2	7.5			
108	C 7	14.8	7.4	16.8	8.5	7.5			
109	C 6	14.1	7.0	14.3	7.5	7.5			
110	C 7	18.8	9.4	21.7	10.0	9.0			
111	C 6			15.8	9.5				
112	D 7	15.5	7.7	17.3	7.8	7.0	2.5	11.3	
113	D 7	18.5		19.6	10.8	10.5	5.8	0.6	
114	D 7	15.3		18.2		8.0			
115	D 7	15.3		15.7	9.5	8.0	2.5	0.1	
116	D 7	20.0		11.0	10.8	10.8	4.0	0.3	
117	D 7	16.7		7.7	10.5	7.8			
118	D 7	19.0	10.0	22.4	13.4	12.0	4.0	0.9	
119	D 7	17.3	10.0	20.1	10.5	9.5	4.2	0.8	
120	D 7	17.6	8.8	19.0	9.8	8.0			
121	D 7	12.1	7.0	16.9	8.5	8.7			
122	D 7	15.9	7.9	14.5	7.5	7.0			
123	D 7	13.9	6.9	14.7	6.7	7.0			
124	E 7								計測不能
125	D 7	17.6	8.8	16.2	9.9	8.5	5.0	1.4	
126	D 7	16.6	9.7	16.8	9.0	7.5	4.0	0.3	
127	D 7	16.0	10.0	19.3	6.5	8.3			
128	D 7	18.6	12.0	20.1	10.5	8.0			
129	D 7	16.5	10.0	16.6	8.7	7.5			
130	D 7								計測不能
131	D 7	17.1	6.1	19.3	11.7				
132	D 7								計測不能
133	D 7	17.4	9.6	20.6	9.8	8.8			
134	D 7	17.2	8.6	20.0	11.5	8.5			
135	D 6								計測不能
136	D 7	20.0	11.0	21.8	12.9	9.7			
137	D 6	19.2	9.6	19.0	10.0	10.0	3.5	0.8	
138	E 6								計測不能
139	E 6								計測不能
140	E 6	15.1	7.5	13.9	8.0	7.0			
141	E 6	14.7	7.3	17.2	8.5	7.0	2.0	0.6	
142	D 6								計測不能
143	D 6								計測不能
144	D 6	17.0	8.5	10.5	9.5				
145	D 6	20.4	10.2	23.7		12.0	3.7	0.9	
146	D 6								
147	D 6	18.6	10.5	23.9	12.7	11.8	4.0	0.8	
148	D 6	17.5	8.7	17.0	10.0	10.0	4.8	0.8	
149	E 6	19.1	9.5	22.3	12.9	12.0	4.0	1.2	
150	E 6	15.5	7.7	16.3	9.4	10.0			

番号	出土地区	法量							備考
		a	b	c	d	e	f	g	
151	D 6								計測不能
152	D 6								計測不能
153	D 6	17.2	8.7	22.8	12.9	12.8	4.7	0.9	梵字
154	D 6	18.5	9.2	19.0	9.5	9.0			
155	E 6								計測不能
156	E 6	15.5	7.7	17.7	7.5	7.9			
157	D 6								計測不能
158	E 6	16.6	8.3	15.6	7.7	6.9			
159	E 6	20.0	10.0	19.0	9.8	8.4	3.5	0.7	
160	E 5	19.5	9.7	18.3	9.5	9.0	3.7	0.4	
161	D 6	19.3	9.6	19.7	10.3	10.0			
162	D 6	14.1	7.0	16.3	9.0	6.0			
163	D 6	19.5	9.7	25.4	11.0	10.5	5.5	1.0	
164	D 6	15.1	7.5	17.2					
165	D 6	19.2	9.6	17.6	6.8	9.8			
166	D 6								計測不能
167	E 7	20.7	10.3	22.2	10.0	8.5			
168	E 7	20.0	10.0	21.5	11.0	10.5			
169	E 7	21.0	10.5	19.7	9.9	10.0	5.0	0.8	
170	E 7	15.2	7.6	14.2	9.0	8.3			
171	E 7	23.5	11.7	21.8	11.0	12.5	3.8	1.0	
172	E 6	16.7	8.3	18.0	8.5	10.0	4.0	0.8	
173	D 7								計測不能
174	E 6	16.8	8.4	9.5	8.5	8.0	2.5	0.8	
175	E 6								計測不能
176	D 7	19.7	9.8	23.5	12.0	11.5			
177	D 7	15.0	7.5	17.3	10.0	8.5			
178	不明								計測不能
179	不明								計測不能
180	E 6	20.2	10.1	23.2	12.0	11.5	4.0	0.5	
181	E 7	15.1	9.5	16.1	9.8	9.7	5.2	1.1	仏
182	E 7	17.4	8.7	20.1	8.5	9.5			
183	D 7	14.5	7.2	16.0	8.8	8.0			
184	E 6	16.5	8.2	18.5	8.0	8.5			
185	D 7								計測不能
186	D 8								計測不能
187	D 8	17.8	8.9	20.2	12.0	11.0			
188	D 8	15.6	7.8	16.7	10.0	8.5			
189	D 7	17.0	8.5	18.8	10.0	9.5			
190	D 8	15.5	7.7	15.6	9.5	8.0			
191	D 7	15.0	7.5	16.6	10.0	8.0			
192	D 7	15.5	7.7	15.2	8.5	8.0			
193	不明	17.3	8.6	17.5	8.3	8.2	3.0	0.8	
194	E 7								計測不能
195	D 7	18.3	11.4	20.6	12.0	11.5	6.3	1.5	仏
196	C 7	15.2	7.6	16.5	9.5	8.0			
197	E 7	16.3	8.1	18.8	12.0				
198	E 7	13.8	6.9	14.8	9.5	7.5			
199	D 7	13.8	6.9	15.2	8.7	8.0			
200	E 7	14.8	7.4	17.1	9.6	9.6	2.5	0.3	
201	E 7	15.2	7.6	17.4	10.0	14.0			
202	D 8	21.0	10.5	23.4	12.0	11.0	5.0	1.3	
203	D 8	19.0	9.5	14.8	8.0	9.8	4.5	0.8	
204	D 8	16.2	8.1	16.5	9.5	8.5			
205	不明	12.4		14.9	8.0	7.0			
206	不明	14.9	7.4	16.0	9.0	8.8	4.3	0.7	
207	不明								計測不能
208	E 7								計測不能
209	E 7	14.8	7.4	18.0	10.0	10.0	3.5	0.8	
210	E 7	18.0	9.0	17.7	11.2	10.0			
211	E 7	15.0	7.5	14.3	8.3	9.0	3.3	0.7	
212	E 7	16.6	10.0	18.7	9.2	8.5			
213	E 7	13.9	6.9	14.2	9.0	7.2			
214	D 8	16.2	8.1	16.5	9.0	7.2	3.0	0.9	
215	E 7	16.0	8.0	19.2	10.0	6.5			
216	E 7	16.0	8.0	15.3	10.0	8.0	3.8	1.9	
217	E 7	18.0	9.0	19.5	12.0	9.5			
218	E 7	14.9	7.5	14.5	7.0	6.0	3.0	0.5	
219	E 7	17.7	8.8	19.2	10.9	9.5			
220	E 7	19.6	9.8	17.6	11.5	10.5	5.5	0.5	
221	E 7	15.8	10.0	17.7	9.1	8.2			
222	E 7	16.5	8.2	15.9	9.0	8.5			
223	E 7	15.0	7.5	14.3	6.5	8.0	3.0	0.2	
224	E 7	16.8	8.4	15.8	8.0	7.5			
225	E 7	14.8	7.4	19.5	10.5	11.0	4.5		仏

番号	出土地区	法量							備考
		a	b	c	d	e	f	g	
226	E 6	16.4	8.2	15.5	9.0	9.5	3.1	0.7	
227	E 6	20.7	10.3	19.9	11.2	11.0	4.5	1.4	
228	不明	13.7	6.9	19.3	9.6				仏
229	E 5	16.2	8.1	15.3	8.9	7.0	2.5	0.3	
230	不明	14.3	7.1	13.6	6.5	7.5			
231	不明								計測不能
232	不明	17.5	9.6	19.5	10.5	11.0	6.0	1.2	仏
233	不明	17.6	8.8	20.4	10.7	11.0			
234	不明	13.0	6.5	15.3	10.0	8.0			
235	不明	20.1	11.8	21.5	11.2	11.5	4.8	0.9	
236	不明								計測不能
237	不明	15.6	7.8	16.7	10.0	9.0	3.3	0.4	
238	不明								計測不能
239	不明								計測不能
240	不明	20.5	10.2	18.2	10.0	9.7	4.0	0.8	
241	不明	12.3	6.1	15.0	9.0	8.8			
242	不明								計測不能
243	不明								計測不能
244	不明	15.5	7.7	15.0	9.0	7.8			
245	不明								計測不能
246	不明	14.0	7.0	14.2	8.0	7.7			
247	不明								計測不能
248	不明								計測不能
249	不明	13.5	6.7	15.5	9.0	7.0			
250	不明	19.6	9.8	17.6	11.5	10.5	5.5	0.5	
251	不明	16.2	8.1	16.6	9.5	9.0	4.0	0.5	
252	不明	18.9	10.9	24.5	13.1	12.5	4.3	1.1	
253	不明	15.5	7.7	16.0	8.3	4.0	5.5		
254	不明	20.5	10.2	21.8	12.0	10.5	4.0	1.4	
255	不明	21.0	11.9	22.7	11.2	10.9			
256	不明	19.4	9.7	19.7	9.5	9.9			
257	不明	13.8	6.9	16.7	10.0	9.8			
258	不明	15.5	7.7	23.2	14.0	10.0			
259	不明	17.0	8.5	18.1	10.0	9.5			
260	不明	20.6	11.5	23.9	12.0	11.7			
261	不明	15.9	7.9	15.9	10.0	9.0	4.0	0.8	
262	不明	15.0	7.5	17.2	8.0	8.0	3.0	0.3	
263	不明	18.7	9.3	19.1	11.0	9.0			
264	不明	15.2	7.6	18.8	11.0	7.0			
265	不明	16.7	8.3	20.0	9.0	7.0	4.0	0.5	
266	不明	15.8	7.9	14.0	7.0	8.0			
267	不明	14.1	7.0	12.4	5.8	5.5			
268	不明								
269	不明	12.6	7.5	15.0	7.8	6.8			
270	不明	17.4	9.5	18.5	10.4	9.6			
271	不明	14.1	8.0	15.4	8.5	9.8			
272	不明	14.5	8.0	17.1	8.7	8.1			
273	不明	16.6	7.5	17.0	9.0	7.9			
274	不明	14.9	9.5	17.7	11.0	8.0			
275	不明	16.5	10.1	20.3	10.7	9.3	5.8	0.9	
276	不明	16.9	10.0	17.5	9.2		4.2	0.7	
277	不明	16.4	9.7	20.1	11.1				
278	E 7	15.7	7.8	8.5	15.3	8.8			

表8　五輪塔地輪法量

番号	出土地区	法量 a	b	c	d	e	備考
1	不明	10.9	15.3	15.3	5.3	1.0	底皿
2	不明	9.7	17.0	16.3	6.4	1.3	底皿
3	不明	10.3	18.2	18.3	—	—	底皿
4	不明	11.1	19.8	19.4	—	—	底皿
5	不明	16.0	20.8	20.9	—	—	底皿
6	不明	10.6	14.9	14.8	6.3	1.4	
7	不明	9.5	15.0	14.4	6.5	1.2	
8	不明	13.7	18.3	14.0	7.0	0.6	
9	不明	12.6	18.3	18.4	—	—	底皿
10	不明	16.0	19.3	18.0	7.1	1.3	底皿
11	不明	12.1	15.7	15.7	6.2	1.3	底皿
12	不明	14.5	18.7	18.7	5.9	1.3	底皿
13	不明	13.7	20.2	19.6	—	—	
14	不明	11.3	17.4	17.4	6.5	1.7	
15	不明	13.8	19.8	19.3			
16	不明	17.0	17.0				
17	不明	10.6	17.0	17.0	—	—	底皿
18	不明	8.9	17.8	17.7	—	—	底皿
19	不明	20.8	22.9	22.5	—	—	底皿
20	不明	11.6	18.0	17.2	5.4	1.3	底皿
21	不明	10.7	17.8	17.7	—	—	
22	不明	12.7	20.4	20.4	—	—	底皿
23	不明	15.3	17.1	16.9			底皿
24	不明	13.4	17.1	17.2	—	—	底皿
25	不明	13.4	16.6	16.3	6.0	0.6	底皿
26	不明	13.3	20.0	19.3	—	—	底皿
27	不明	8.5	16.7	16.4	—	—	底皿
28	不明	12.4	15.3	15.2	4.4	1.2	底皿
29	不明	12.2	17.2	17.3	—	—	底皿
30	不明	14.5	18.3	18.2	5.0	1.2	底皿
31	不明	14.0	18.3	18.7	7.2	1.7	底皿
32	不明	14.7	19.2	19.4			
33	不明	9.2	14.5	14.6	5.3	0.9	
34	不明	8.3	17.0	17.3	6.0	2.1	
35	不明	15.3	22.5	22.3	—	—	
36	不明	16.2	22.8	22.8	—	—	底皿
37	不明	14.6	17.2	16.5	6.2	0.8	
38	不明	12.0	16.8	16.3	5.8	1.4	底皿
39	不明	13.6	16.9	16.9	—	—	底皿
40	不明	12.2	16.3	15.4	—	—	底皿
41	不明	10.0	15.5	15.1	—	—	底皿
42	不明	14.8	18.8	17.4	7.5	1.9	底皿
43	不明	9.9	15.7	15.9	7.0	1.6	底皿
44	不明	11.8	15.8	16.3	6.2	0.9	底皿
45	不明	12.0	15.1	15.2	6.0	1.3	底皿
46	不明	11.2	16.0	16.0	—	—	底皿
47	不明	13.2	18.7	19.5	6.7	1.8	底皿
48	不明	14.8	21.3	21.3	—	—	
49	不明	12.4	15.5	15.6	6.4	0.8	底皿
50	不明	8.9	14.2	14.7	—	—	底皿
51	不明	14.0	18.7	18.7	6.7	1.2	底皿
52	不明	12.0	19.1	19.0	—	—	底皿
53	不明	12.5	15.5	15.0	4.2	1.5	底皿
54	不明	10.3	14.7	15.3	6.2	1.0	底皿
55	不明	12.9	19.2	17.4	—	—	底皿
56	不明	14.5	21.6	21.7	—	—	底皿
57	不明	11.9	17.0	17.1	—	—	底皿
58	不明	13.4	19.7	20.3	—	—	
59	不明	16.3	21.0	20.7	—	—	
60	不明	11.3	14.0	14.6	—	—	
61	不明	14.3	15.9	15.6	6.4	1.3	底皿
62	不明	14.2	19.6	20.7	—	—	
63	不明	9.6	16.9	15.8	—	—	
64	不明	9.8	13.4	14.0	—	—	底皿
65	不明	16.9	21.7	21.3			底皿
66	不明	12.5	16.5	17.6	5.7	1.3	
67	不明	12.8	17.0	17.4	—	—	底皿
68	不明	16.4	22.2	23.1	—	—	底皿
69	不明	12.8	16.2	18.5	—	—	底皿
70	不明	17.8	23.8	24.8	6.5	1.4	
71	不明	12.4	17.8	17.5	—	—	
72	不明	11.2	16.6	17.0	—	—	底皿
73	不明	11.5	17.3	17.7			底皿
74	不明	11.4	15.3	15.5	5.0	0.7	底皿
75	不明	12.0	15.3	15.9	5.7	0.9	

番号	出土地区	法量 a	b	c	d	e	備考
76	不明	13.3	18.8	19.2	7.5	1.3	底皿
77	不明	17.7	24.8	25.6	5.5	1.3	
78	不明	14.5	18.7	19.0	7.1	1.5	底皿
79	不明	19.2	20.4	20.2	6.9	1.3	底皿
80	不明	14.7	18.7	18.5	6.7	2.2	底皿
81	不明	18.5	22.2	23.8	—	—	底皿
82	不明	14.5	19.4	21.0	6.9	1.6	底皿
83	不明	17.7	24.9	24.5	—	—	
84	不明	18.0	22.4	21.7	7.6	1.3	底皿
85	不明	15.1	23.5	23.1	7.2	2.1	
86	不明	14.1	22.2	21.0	—	—	
87	不明	17.0	23.5	24.0	6.7	1.5	
88	不明	25.0	30.2	31.7	6.5	3.0	
89	不明	15.8	23.3	22.8	5.5	1.3	
90	不明	20.9	25.0	24.1	—	—	底皿
91	不明	8.7	14.0	14.0	5.2	1.5	平底
92	不明	8.0	14.6		—	—	平底
93	不明	15.5	21.6	24.1	—	—	底皿
94	不明	10.2	14.5	15.5	—	—	底皿
95	不明	10.5	15.9	16.1	5.8	1.1	
96	C 7	10.5	17.0	16.3	5.2	1.4	底皿
97	C 7	12.6	16.9	18.7	8.2	1.8	平底
98	C 7	9.1	13.8	14.9	4.8	1.1	底皿
99	C 7	8.1	14.0	14.1	—	—	平底
100	C 6	11.4	14.0	14.9	—	—	底皿
101	C 6	10.7	17.0	16.6	—	—	底皿
102	C 6	9.0	13.9	14.2	—	—	平底
103	C 6	10.0	14.1	13.8	—	—	平底
104	C 6	11.4	20.1	21.6	—	—	平底
105	C 6	8.1	12.5	14.5			平底
106	C 7	9.7	12.3	12.4			底皿
107	C 7	8.8	14.0	14.3	9.0	1.9	底皿
108	D 7	14.4	15.9	16.3	7.2	1.5	底皿
109	D 7	19.6	23.3	25.1			平底
110	D 6	13.8	17.9	17.7	6.5	1.6	底皿
111	D 6	8.1	15.2	17.3			底皿
112	不明	10.7	16.7	16.3	6.5	1.5	底皿
113	D 7	12.9	17.5	17.9	7.0	1.2	底皿
114	D 7	12.8	16.3	17.4	7.0	1.0	平底
115	D 7	10.4	15.5	15.9	—	—	底皿
116	D 7	16.6	23.7	25.2	6.2	1.1	底皿
117	D 7	12.6	16.0	17.8	7.0	1.2	底皿
118	D 7	11.3	20.5	17.7	—	—	底皿
119	D 7	10.7	18.0	19.3			平底
120	D 7	14.3	20.7	21.6			底皿
121	D 7	6.1	15.4	16.2			平底
122	D 7	11.1	17.1	17.0			底皿
123	D 7	12.1	18.8	18.2			平底
124	D 7	15.1	17.8	19.5			底皿
125	D 7	10.2	18.3	18.5			底皿
126	D 7	8.5	13.8	13.8			底皿
127	不明	7.8	16.7	10.0	—	—	底皿
128	D 7	12.8	17.3	18.2	6.1	1.8	底皿
129	D 6	12.0	17.0	18.2	5.0	0.8	平底
130	D 7	11.0	15.0	14.0	5.0	0.6	平底
131	D 6	11.6	18.2	16.9	5.7	1.3	底皿
132	D 7	13.0	18.0	16.3	6.2	1.7	底皿
133	D 7	17.5	24.0	25.4	6.3	1.2	平底
134	D 6	9.2	16.7	17.4	—	—	底皿
135	D 6						
136	E 6						
137	D 6	9.1	17.1	18.0	—	—	底皿
138	E 6	12.3	16.8	16.8	6.7	1.3	底皿
139	E 6	11.5	15.8	16.0			平底
140	E 6	9.5	14.7	15.0	4.8	1.1	底皿
141	E 6	13.2	16.6	18.4			底皿
142	E 6	10.9	14.6	15.8	—	—	底皿
143	E 6	11.0	16.7	16.8	9.5	1.9	平底
144	E 6	14.0	19.5	18.1	8.3	2.3	
145	E 6	15.2	19.8	21.7	6.2	1.8	底皿
146	E 5						
147	E 5	9.4	13.9	13.6	—	—	平底
148	D 6	11.7	14.1	14.5	—	—	平底
149	D 6	13.9	20.0	19.2	6.8	2.2	底皿
150	D 6	13.3	20.8	21.0	—	—	底皿

地輪法量表

番号	出土地区	法量 a	b	c	d	e	備考
151	D 6	15.7	23.5	24.0	6.2	1.5	平底・梵字
152	D 6	17.3	23.0	23.3	—	—	底皿
153	D 6	15.3	18.1	19.3	8.5	1.7	平底
154	D 6	11.2	15.2	15.2	—	—	底皿
155	E 5	15.7	22.4	21.2	—	—	底皿
156	E 5	13.2	17.7	16.1	6.5	1.3	底皿
157	E 5	15.9	20.2	無	7.5	1.0	
158	E 5	14.5	18.0	18.0	7.5	1.5	底皿
159	E 5	11.3	15.2	14.8	—	—	底皿
160	E 5	11.1	17.1	15.7	6.1	1.0	底皿
161	E 5	13.0	16.0	16.0	6.5	0.8	底皿
162	D 7	11.6	14.0	13.4	—	—	底皿
163	D 7	9.9	14.0	15.0	—	—	平底
164	D 8	8.4	15.7	14.9	5.0	1.0	平底
165	D 8	8.9	13.5	13.8	—	—	平底
166	D 8	12.2	15.2	15.2	6.5	1.4	底皿
167	D 8	10.0	15.2	16.7	7.0	1.0	底皿
168	D 7	12.8	17.5	17.2	9.0	2.3	底皿
169	D 7	10.7	17.7	17.7	—	—	平底
170	D 7	9.5	18.9	16.7	6.0	1.0	平底
171	D 7	13.9	20.0	19.6	9.0	1.7	底皿
172	D 7	16.3	18.7	19.7			底皿
173	D 7	8.1	14.3	13.5	—	—	平底
174	D 7	9.5	14.5	14.8	4.6	0.9	底皿
175	E 7	13.5	17.6	19.3	—	—	底皿
176	E 7						
177	E 7	11.0	16.2	17.1			底皿
178	D 7	9.7	14.2	14.2	—	—	平底
179	不明	11.4	17.5	17.0	6.0	1.3	底皿
180	不明	9.2	14.9	14.7	—	—	平底
181	E 7	12.9	15.4	15.2	6.4	1.5	平底
182	E 7	12.7	17.7	17.0	—	—	底皿
183	E 7	11.2	18.4	19.3	—	—	底皿
184	F 7	10.7	14.2	14.1	—	—	底皿
185	E 7	9.0	14.1	13.7	—	—	底皿
186	E 7	12.7	17.0	16.2	7.0	2.3	底皿
187	F 7	8.1	18.2	19.1	5.6	1.1	平底
188	F 7	10.4	17.3	16.7	—	—	底皿
189	F 7	10.6	16.7	16.2	—	—	底皿
190	F 7						
191	E 7	9.3	16.5	16.5	6.2	1.4	底皿
192	E 7	11.1	17.1	15.9			底皿
193	E 7	16.8	22.3	23.5			底皿
194	E 7	12.1	16.2	17.3	7.0	1.8	平底
195	E 7	11.0	18.7	18.6			底皿
196	E 7	11.8	19.0	18.7			底皿
197	不明	11.4	19.0	18.7			底皿
198	E 7	15.8	20.0	20.0	7.2	1.9	底皿
199	D 7	9.3	14.7	11.9			底皿
200	D 7	13.1	17.1	16.6	7.0	0.9	底皿
201	不明	8.1	14.0	14.0			底皿
202	不明	12.2	16.2	15.7	7.0	1.7	底皿
203	不明	12.0	17.6	18.8			底皿
204	不明	5.4	14.7	17.5			底皿
205	不明	9.0	11.0	10.5			底皿
206	不明						
207	不明	14.0	21.4	18.0	5.5	1.3	底皿
208	不明	10.0	14.6	13.6			底皿
209	不明	8.7	16.2	12.7			底皿
210	不明	17.0	21.1	22.8	6.5	1.6	底皿
211	不明	9.4	14.8	13.8			底皿
212	不明	11.4	16.5	16.3	7.0	0.7	底皿
213	不明	12.8	18.7	18.1			底皿
214	不明	8.9	19.2	14.7			底皿
215	C 8	12.7	16.8	16.3	5.5	1.5	底皿
216	C 8	13.7	18.0	17.9	7.8	1.5	底皿
217	C 8	10.2	15.5	14.8			底皿
218	C 8	13.8	16.3	15.6	6.5	1.5	底皿
219	不明	11.1	14.6	13.5			底皿
220	不明	12.2	15.5	15.3	6.0	1.3	底皿
221	不明	11.2	15.6	15.1	6.0	1.8	底皿
222	不明	9.0	15.6	15.5			底皿
223	不明	11.0	18.8	18.7			底皿
224	不明	7.6	17.0	16.8			底皿
225	不明	10.5	13.8	13.5			底皿

番号	出土地区	法量 a	b	c	d	e	備考
226	不明	9.3	14.5	14.5	6.3	0.8	底皿
227	不明	18.4	21.0	20.5			底皿
228	不明	10.7	17.5	16.5			底皿
229	不明	8.9	15.0	17.1			
230	不明	10.7	17.3	18.4	6.8	1.5	底皿
231	不明	11.2	14.1	15.3	7.2	1.2	底皿
232	不明	10.1	14.4	14.3			底皿
233	不明						
234	不明	16.5	20.6	21.2	10.2	1.3	底皿
235	不明						
236	不明	13.6	16.4	14.8	6.0	1.5	底皿
237	不明						
238	不明						
239	不明	13.2	14.9	15.8	8.2	1.5	底皿
240	不明	13.2	16.4	16.7	7.5	1.0	底皿
241	不明	9.5	12.4	12.7	6.0	0.6	平底
242	不明	15.8	21.1	21.4			平底
243	不明	17.1	20.8	22.8			底皿
244	不明	8.7	14.2	14.5			平底
245	不明	8.4	14.7	14.4			
246	不明	17.9	24.8	25.5			

表9　渡来銭一覧

番号	銭　　名	初鋳年	枚数	国名
1	開元通寶	621	42	唐
2	乾元重宝	758	1	唐
3	太平通寶	976	5	北宋
4	淳化元寶	990	5	北宋
5	至道元寶	995	6	北宋
6	咸平元寶	998	4	北宋
7	景徳元寶	1004	6	北宋
8	祥符通寶	1008	9	北宋
9	祥符元寶	1008	10	北宋
10	天禧通寶	1017	5	北宋
11	天聖元寶	1023	12	北宋
12	明道元寶	1032	1	北宋
13	景祐元寶	1034	4	北宋
14	皇宋通寶	1039	33	北宋
15	至和元寶	1054	3	北宋
16	嘉祐通寶	1056	8	北宋
17	嘉祐元寶	1056	2	北宋
18	治平元寶	1064	2	北宋

番号	銭　　名	初鋳年	枚数	国名
19	熙寧元寶	1068	33	北宋
20	元豊通寶	1078	36	北宋
21	元祐通寶	1086	34	北宋
22	紹聖元寶	1094	11	北宋
23	元符通寶	1098	8	北宋
24	聖宋元寶	1101	12	北宋
25	大観通寶	1107	5	北宋
26	政和通寶	1111	12	北宋
27	宣和通寶	1119	2	北宋
28	正隆元寶	1158	2	金
29	淳熙元寶	1174	1	南宋
30	開禧通寶	1205	1	南宋
31	嘉定通寶	1208	2	南宋
32	紹定通寶	1228	2	南宋
33	景定元寶	1260	1	南宋
34	洪武通寶	1368	6	明
35	永楽通寶	1408	16	明
36	大世通寶	1454	1	琉球

付載１．大木遺跡竪穴住居４から出土した炭化材の樹種

森林総合研究所木材利用部
能　城　修　一

岡山県上房郡北房町宮地にある大木遺跡は、備中川沿いの沖積地の南縁に位置する丘陵上にある。ここでは、大木遺跡の弥生時代後期の集落跡のうち、竪穴住居４から出土した炭化材17点の樹種を報告する。樹種同定は、炭化材の破断面を双眼実体顕微鏡で観察することによって行なった。以下には各分類群の簡単な記載をおこない、各炭化材の顕微鏡写真を付して同定の根拠を示す。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科

直径300μmに達する大型の単独管孔が年輪のはじめに数列集合し、晩材では徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。晩材では木部柔組織が乱れた接線状にならぶ。放射組織は単列同性。

コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科

直径100-200μmほどの中型で丸い単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。木部柔組織はいびつな2-3細胞幅の帯状。放射組織は単列同性の小型のものと、大型の複合状のものとからなる。

シイノキ属？　Castanopsisi？　ブナ科

中型から小型の管孔が、径を徐々に減じながら火炎状に配列する木材であるが、年輪界がはっきりせず、早材の管孔の配列が把握できない。年輪の中間の中型管孔の配列からシイノキ属？と判断したが、クリの可能性も考えられる。

エノキ属　Celtis　ニレ科

中型でまるい管孔が年輪のはじめに2-3列集合し、晩材では小型の管孔が塊をなして、斜め方向に断続する帯をなす環孔材。道管の穿孔は単一。小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で数細胞幅、不完全な鞘細胞をもつ。

サクラ属　Prunus　バラ科

やや小型で丸い管孔が単独あるいは放射方向に２から数個複合して、斜め方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で４細胞幅くらい。

単子葉植物

柔組織のなかに維管束が散在する不斉中心柱。各維管束の構造はぬけているものが多く、分からない。

住居跡などにおける炭化材の報告はかなりあり、関東地方以西では、クリ、コナラ属クヌギ節、コナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属を中心として、カヤやスギ、ヒノキなどの針葉樹や、ケヤキ

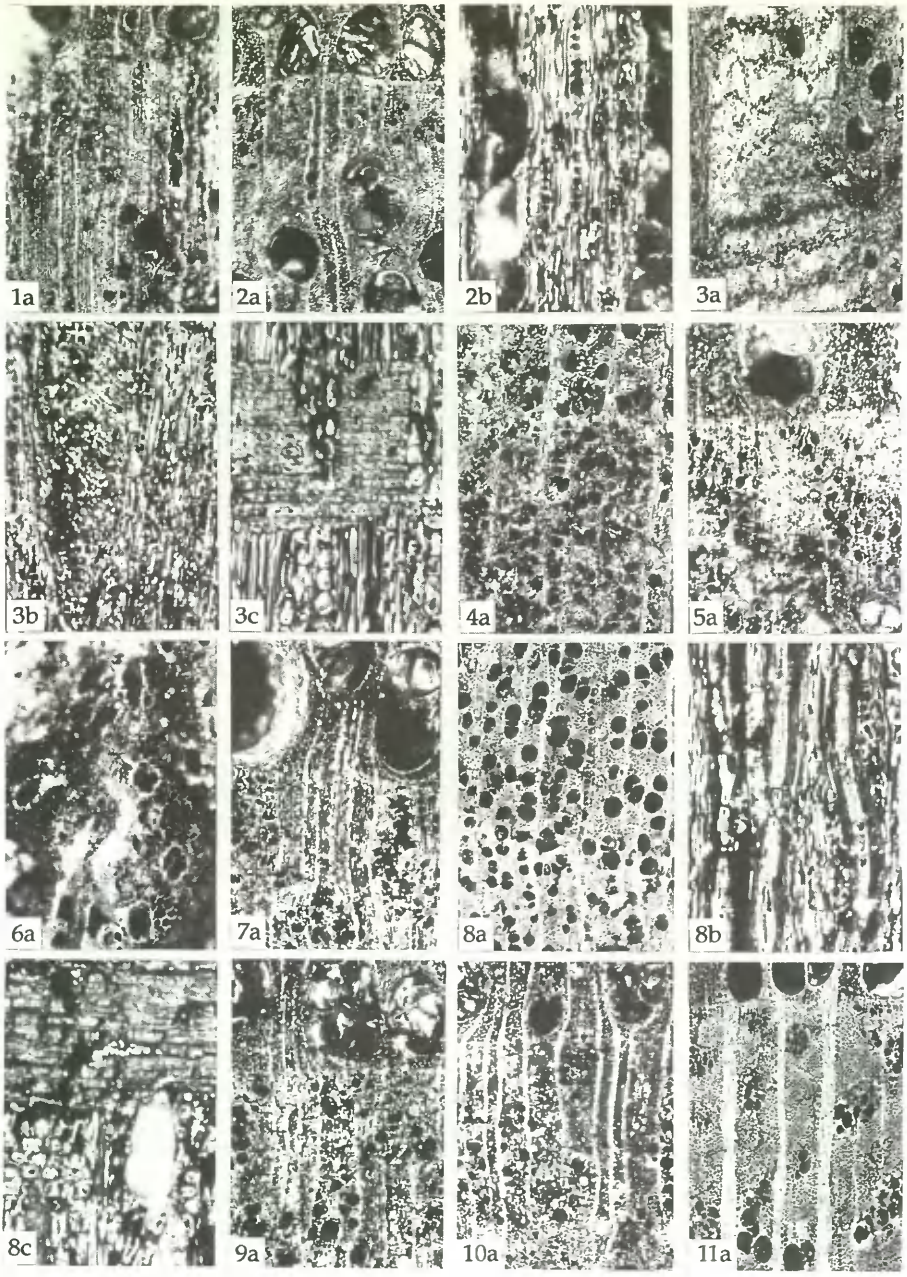
やエノキ属、クワ属、カツラ、サクラ属、カエデ属などの様々な広葉樹が見いだされている（島地・伊東、1988）。当古墳群で見いだされた樹種も、ほぼこれらと同様の傾向を示しており、当時の周辺の森林中に普通に生えていたものであると考えられる。平面図と対照してみると、大型の木材はほとんどがクリであり、柱など住居の構造材にはクリが選択されていたことが窺われる。

引用文献

島地　謙・伊東隆夫編．1988．日本の遺跡出木製品総覧．雄山閣、東京．

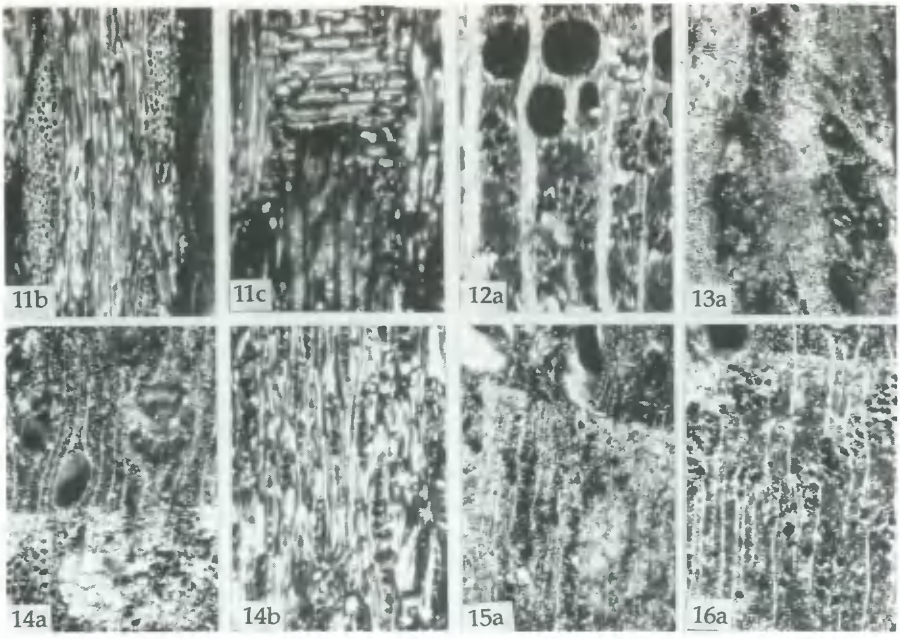
表１．大木遺跡・竪穴住居４出土炭化材の樹種

炭化材No	樹　　種	写　真　番　号
1	クリ	第１図：1a
2	クリ	第１図：2a-2b
3	コナラ属アカガシ亜属	第１図：3a-3c
4	サクラ属	第１図：4a
5	クリ	第１図：5a
6	単子葉植物	第１図：6a
7	クリ	第１図：7a
8	サクラ属	第１図：8a-8c
9	材片まじり粘土	－
10	クリ	第１図：9a
11	クリ	第１図：10a
12	エノキ属	第１図：11a，第２図：11b-11c
13	エノキ属	第２図：12a
14	シイノキ属？	第２図：13a
15	クリ	第２図：14a-14b
16	クリ	第２図：15a
17	クリ	第２図：16a



第1図．大木遺跡竪穴住居4出土炭化材の樹種（1）

1a：クリ（炭化材1）、2a-2b：クリ（炭化材2）、3a-3c：コナラ属アカガシ亜属（炭化材3）、4a：サクラ属（炭化材4）、5a：クリ（炭化材5）、6a：単子葉植物（炭化材6）、7a：クリ（炭化材7）、8a-8c：サクラ属（炭化材8）、9a：クリ（炭化材10）、10a：クリ（炭化材11）、11a：エノキ属（炭化材12）．a：横断面x40、b：接線断面x100、c：放射断面x150．



第２図．大木遺跡竪穴住居４出土炭化材の樹種（２）

11b-11c：エノキ属（炭化材12）、12a：エノキ属（炭化材13）、13a：シイノキ属？（炭化材14）、14a-14b：クリ（炭化材15）、15a：クリ（炭化材16）、16a：クリ（炭化材17）．ａ：横断面x40、ｂ：接線断面x100、ｃ：放射断面x150.

付載２．大村遺跡出土人骨について

京都大学霊長類研究所形態進化分野
濱　田　　穣

はじめに

吉備高原の一角の丘陵（岡山県上房郡賀陽町上竹）に位置する大村遺跡より1993年、中世から近世にかけての多数の墓が発掘され、人骨も出土した。本稿ではそれらのうち42体分と思われる人骨についての観察結果と一部計測結果を報告したい。

人骨の保存状況は多数出土しているわりには、あまり良好ではなく、おおくが骨格の一部分しか残っていないものである。そのため大村遺跡人骨の特徴を抽出することは不可能であり、一部の保存の良いものについての観察と、いくつか気のついた点などを記するに留めたい。

保存状況の概要

表には、42遺構人骨の保存状況をまとめた。遺構順に推定された性別、年齢、残存歯数、そして以下の各骨の残存状況を各項目の約75％以上が残存している場合○で、約75％未満だが断片でも残存している場合△で、まったく残存していない場合 -　でそれぞれ表した。全身の骨格を頭骨、下顎、椎骨、肋骨、肩甲骨・鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨、手の骨、骨盤（寛骨）、大腿骨、下腿（脛骨が主、腓骨はたまに残存している）、足の計13項目に分け、膝蓋骨や部位不明骨片があった場合にはその他の項目に記した。表に見られるように、保存状況はあまり良好ではなく、四肢骨しか残っていないもの、それも各長骨の両端を欠き、中央部分のみとなっているものが多い。

大腿骨の最大長が計測できたものについては、Fujii（1960）の推定式を用いて、生前身長を推定した。他の四肢骨でも推定はできるが、本遺跡出土人骨で長さが計測できたのは大腿骨しかなかった。

個体の性別は寛骨（骨盤）が残っているものではその部分の形状から判断したが、残っていないものは不明とした。骨のサイズや結節・稜・突起の発達具合などで推定することも不可能ではないが、本稿では適用しなかった。年齢推定は歯の萌出・磨耗状況から判断した。骨格の形態から推定することも提唱されているが、本遺跡出土人骨ではそのような微細構造はほとんど失われており、適用は不可能であった。歯の観察からは、遺跡出土の人々の生前の生業活動と歯の磨耗パターンは強い関連をもっていることが明らかにされているが、本遺跡出土の人々の生活ぶりについては、まだ明らかになっていないので、おおざっぱな年齢区分しか行なえなかった。

各人骨の保存状態と特徴

保存状況の比較的良好であった人骨四体分について、その残存状態と特徴を記述する。

1．土壙墓153号人骨

四肢部は長骨の多くが両骨端部を欠き、前腕は左側を欠くといった残存状況であり、寛骨の部分骨片の形状や歯の状態から壮年の女性と推定された。頭部も６から７割程度が多数の断片として残存している。

断片を組みあわせると、頭部はひしゃげているがかなりよく残っているが、顔部は額からかなりの部分を欠損している。上顎骨が左は歯槽部から眼窩にかけて残り、ここに頬骨基部が縫合している。この部分の形状から（写真１）、下顔部のかなり低い顔をしていたと推定される。右は梨状口下縁より第一第二大臼歯間下方にかけて斜に断たれ、その後方を欠く。釘植残存する歯は右側では犬歯、第一・第二小臼歯、第一大臼歯で、ひじょうに磨耗している。

下顎は右半は第一大臼歯下、体下縁より斜に断たれ、体の一部と枝を完全に欠損する。左半はほぼ完全に残存している。歯は左第三大臼歯が顎骨内にとどまっているが、他は残存しており、第一・第二大臼歯の磨耗はかなり著しい。

２．土壙墓176号人骨

かなり保存状態のよい人骨であり、壮年（30－50才）の女性と推定される。大腿骨は完全に残っているわけではないが、おおむねの最大長計測が可能であり、それから身長を推定すると163cmで、女性にすればかなりの高身長であったと思われる。

頭部は右半を中心に前頭から後頭までの頭蓋冠がよく残っていて（写真２）、いくらか変形はあるが、頭長（Nasion-Opisthocranion ）は196ｍ/ｍ。前方部分では眼窩上縁よりその下の顔面部で、頬骨と上顎骨が残り、眼窩下孔や頬骨上顎縫合も認められる。上顎骨のくぼみが強いのが特徴的である（写真３）。別の上顎骨片は右犬歯と第一小臼歯を釘植する部分も残す。これらとは別に頭蓋内板（部分不明）や頬骨弓後方端部、下顎窩部、側頭骨下半（左右とも）が残る。

下顎は右半は間節突起や角の端などを欠くが、体・枝ともかなり良く残る。歯槽は第１大臼歯部までで、第二・第三大臼歯部は欠き、歯槽骨も吸収されている。この二本以外の歯が残存している。左半は枝の下方1/3までが残る。歯槽部では右とは異なり全ての歯はかなり磨耗しているが、生前には残っていた。また第一大臼歯は半分に欠けている。遊離歯が八本あり、上顎の切歯が４本、上下顎の犬歯が２本、上顎の第二大臼歯が１本である。

寛骨が寛骨臼部から大坐骨切痕にかけての左腸こつ下方部分が残り、ここに月状面の一部も認められる。大坐骨切痕の弧状部分の角度は90度ぐらいで、これにより性判定した。もう一片も腸骨下部で、月状面から下前腸骨棘にかけての部分である。

大腿骨は左では近位半が残り、頸は残っているが、頭を欠き、大転子と小転子も欠く。右は保存状態は左よりいくらか良く、骨桿部はまずまずの残存状態で粗線、臀筋粗面などの表面構造も残っている。遠位端では外側顆から前面部にかけてを欠き、内側顆の内・後側部1/3ぐらいが残存する。概ねの最大長は約455mm。脛骨は右では遠位端を欠き、近位部でも関節面部分の前外側方1/4を欠き、骨桿半分の後面を４cmにわたり欠くが、骨の前面の保存は良い。左は両端を欠く。腓骨は左右ともに中央部分を残す。左膝蓋骨が残存。足部では、左右ともに距骨・踵骨が関節してかなりの部分が残り、右ではさらに舟状骨も関節面を中心に小片ながら残存している。

上肢では、肩甲骨が左右で肩関節部分小片ながら、鎖骨も中央端がそれぞれ残っている。上腕骨・橈骨・尺骨はすべて大なり小なり両骨端部を欠く。中手骨と指骨の一部も残存している。

３．４区土壙墓２号人骨

そうとう高齢（40～60才）の小柄な女性と推定される。頭部、第１頸椎、四肢部がそれぞれかなり

の部分残存している。

頭部では頭蓋の主要部分が残っている。まず第1片は前頭・頭頂・側頭の頭蓋冠前方半で、前方は眼窩縁正中部の4分の一程度から鼻根にかけての部分までが残存している。第2片は右側頭骨で鱗部の高さ二分の一程度より下を残すが、突起の多くを欠く。顔部では、上顎骨の右眼窩下縁から鼻骨との関節部までが残っており、頬骨も眼窩縁を外側から上隅まで残すが突起は欠く。この他に眼窩内部の壁をなす骨片も残る。

下顎は右半はよく残るが、左半は体下面から枝にかけて斜に断たれ欠く（写真4）。右下の第2小臼歯は咬頭も表面エナメル質も残り、咬耗はあまり進んでいない。

寛骨の残存部分は腸骨下方部分で寛骨臼部分から大坐骨切痕にかけてで、後者の円弧形状（広く浅い）より、女性と推定された。大腿骨は右では両端を欠き中央の約四分の三を残し、頑丈で粗線等の表面構造の発達からはこの個体を男性と見誤るほどである。この骨のと思われる関節頴部分の骨片も残る。左は中央五分の二程度で表面は腐蝕のため粗になっている。脛骨はどちらも両骨端部を大なり小なり欠く。右腓骨が中央から遠位1/5までの部分ながら残存。

上肢では上腕骨、橈骨、尺骨でそれぞれ中程度以下の残存状態であるが、中手骨や指骨の骨片も残っている。

4．4区土壙墓3号人骨

頭部、鎖骨や肩甲骨も含めた四肢部ともにかなり良好な残存状態であり、頸椎から胸椎、および肋骨も半数程度残っている。しかし、腰椎や性判定のための寛骨の大部分がそれぞれ欠損している。寛骨の残存部分は右の寛骨臼部を含む腸骨下方部で、内側面に弓状線部分も認められる。この部分の曲線を上方より見ると、骨盤上口形状はハート形に近い。これによりこの個体は男性であったろうと思われるが、強く断定はできない。また、右大腿骨は大転子先端からその基部にかけての後方面に欠損がみられるもののほぼ全体が残り、最大長が417㎜と計測された。これを男性の推定式にあてはめると、身長は158㎝と計算された。

頭部はほぼ完全に残り、茎状突起すら両側に残存している（写真5）。縫合線の閉鎖も認められ、後述する歯の磨耗・残存状態からも、この個体が壮年ないしは老年だったと推定される。眉上隆起は正中部でいくらか発達しているものの、頬骨弓の太さや側頭線とともにあまり発達していない。計測値：頭長（g-op）187㎜、頭最大幅（eu-eu）133㎜、上顔高（n-pr）67㎜、頬骨弓幅（zy-zy）131㎜。頭長幅示数は71.1％で、長頭に分類される。また、Kollmannの上顔示数は51.1％で、中上顔に分類される。

上顎で歯は右の第三大臼歯を除いてすべて脱落していて、そのうち切歯部は歯槽骨歯根孔まで吸収されてしまっている。下顎骨はほぼ全体を残すが、歯槽部に若干の破損が認められる（写真6）。歯は右の第三大臼歯のみ枝部分にかかって、ななめに釘植し残存しているが、他は脱落欠損している。このうち右では小臼歯と第一・第二大臼歯部歯槽骨は吸収され根孔を欠く。左の当該部に歯根孔は認められる。切歯が5本、上顎第一小臼歯、及び下顎第一大臼歯が遊離歯として残存する。

四肢部はかなり残存状態は良いが、骨端部・面・顆等を欠く長骨もある。さらに手と足は中手骨等、短骨の一部を除いて、すべて欠損。

表　大村遺跡出土人骨残存状況

#：主に骨盤形状より推定　S：歯・骨の状態より推定　＊：主に脛骨

遺構名	性#	年齢S	歯数	頭	下顎	椎	肋	肩甲・鎖	上腕 (右)	上腕 (左)	橈 (右)	橈 (左)	尺 (右)	尺 (左)	手	骨盤 (右)	骨盤 (左)	大腿 (右)	大腿 (左)	下腿＊ (右)	下腿＊ (左)	足 (右)	足 (左)	その他・備考
集石墓6	?	Ad.	0	△	−	−	−	−	△	?	−	△	−	−	−	−	−	△	△	−	−	−	△(距)	
集石墓36	女	Ad.	18	○	−	△ (C2とC?)	−	−	△	?	△	?	△	?	△ (中節)	△	△	○	−	△ (腓もあり)	△	−	−	併埋物あり、一部焼骨化している（火葬）
土壙墓141	?	Old.	0	△	○	−	−	−	△	△	△	△	△	△	△	−	−	△	△	○	○	△	?	
土壙墓142	?	?	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	?	−	−	
土壙墓143	?	Ad.	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	?	−	−	−	−	
土壙墓144	?	?	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	?	−	−	−	−	−	△	?	−	−	
土壙墓146	?	Ad.	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	−	−	△	?	−	−	−	−	他に不明骨片あり
土壙墓148	?	?	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	?	−	−	−	−	
土壙墓151	?	Juv.	0	△ (冠部)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
土壙墓152	?	Juv.	0	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	?	−	−	−	−	
土壙墓153	女	Ad.	18	△	△	−	△	−	△	△	−	△	−	△	−	−	△	△	△	△	△	△ (足根・中足)		
土壙墓156	?	Ad.	5	△	−	−	−	−	△	?	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
土壙墓157	?	?	0		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	−	−	−	−	−	
土壙墓161	?	?	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	−	−	
土壙墓163	?	?	0	−	−	−	−	−	△	?	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
土壙墓166	?	Ad.	20	△	○	−	−	−	△	△	△	−	△	△	−	△	−	△	△	△	△	−	−	
土壙墓167	?	Ad.	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	−	−	−	−	−	
土壙墓173	?	?	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	−	−	−	他に骨片１つあり
土壙墓175	?	Ad.	0	△	△	−	−	−	−	−	△	?	−	−	−	−	−	△	△	△	−	−	−	
土壙墓176	女※	Ad.	18	△	△	−	−	△ (鎖も)	○	○	△	○	△	○	△	△	△	○	△	○	○	△	△	大腿骨長より推定身長163cm、頭長(g-op)＝196mm、左膝蓋骨もあり
土壙墓177	?	Ad.	0	−	−	−	−	−	−	−	△	?	△	?	△ (中手)	△	?	△	?	−	−	−	−	他に四肢骨々片あり

遺構名	性#	年齢$	遺数	頭	下顎	椎	肋	肩甲・鎖	上腕 (右)	上腕 (左)	橈 (右)	橈 (左)	尺 (右)	尺 (左)	手	骨盤 (右)	骨盤 (左)	大腿 (右)	大腿 (左)	下腿* (右)	下腿* (左)	足 (右)	足 (左)	その他・備考
土壙墓180	?	Ad.	0	△(前頭)	−	−	−	−	△	−	−	−	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	他の骨片も少々あり
土壙墓182	?	Ad.	0	△(冠部)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	−	−	−	−	
土壙墓183	?	Ad.	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	?	−	−	−	△	?	△	?	−	−	
土壙墓184	?	?	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	?	−	−	他に骨片1つあり
土壙墓185	?	Ad.	15	△(上頭)	−	−	−	−	−	△	−	△	−	−	−	−	−	△	△	−	−	−	−	
土壙墓186	?	Ad.	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	−	△	−	−	−	
土壙墓191	?	Ad.	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	−	−	−	−	−	−	△	−	−	
土壙墓194	?	Ad.	−	−	−	−	−	−	△	?	△	?	−	−	−	−	−	△	?	−	−	−	−	
土壙墓195	?	Ad.	2	△(冠部)	−	−	−	−	△	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	−	△	−	−	
土壙墓196	?	Ad.	4	△(冠部)	△	−	−	−	△	△	△	−	△	−	−	−	−	△	△	△(腓も)	△(腓も)	−	−	膝蓋骨(左)もあり
土壙墓197	?	Ad.	0	−	−	−	−	−	△	?	−	−	△	?	−	−	−	△	△	−	−	−	−	尺骨滑車部分と思われる骨片もあり
土壙墓198	?	Ad.	0	△	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	−	−	
土壙墓200	?	Ad.	5	△(上顎)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	△	−	△	−	−	
土壙墓201	?	Ad.	1	△	△	−	−	−	−	−	△	△	△	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	
土壙墓202	?	Ad.	7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
土壙墓203	?	Ad.	0	△	−	−	−	−	−	△	−	−	−	−	−	−	−	△	△	△	△	−	−	
土壙墓205	?	Ad.	1	−	−	−	−	−	△	−	−	−	△	△	−	−	−	△	△	△	−	−	−	
土壙墓207	?	Ad.	0	−	△	−	−	−	△	−	−	−	△	?	−	−	−	△	−	−	−	−	−	
土壙墓208	?	?	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	△	?	△	?	−	−	
4区 土壙墓2	女	40−60	0	△	○	△(C1)	−	−	−	△	△	○	−	△	△	△	−	○	△	△	△	−	−	
4区 土壙墓3	男?	40−60	8	○	○	△(C/Th)	△	○	○	○	○	△	○	○	△	△	−	○	○	○	○	△	△	膝蓋骨も左右あり(それぞれ断片)右大腿骨長より推定身長＝158cm

※：性推定は、大坐骨切痕の開き角度(90°)から女性としたが、かなりの高身長で、骨格は全身的に頑丈である。
○：75%以上残存　△：〃　未満　−：欠損　年齢：Ad. 成人　Old.老人　Juv.コドモ

写真１．土壙墓153号人骨上顎骨

写真４．４区土壙墓２号人骨下顎

写真２．土壙墓176号（89号墓）
人骨頭蓋（頭蓋底観）

写真５．４区土壙墓３号人骨頭蓋

写真３．土壙墓176号墓（89号墓）
人骨右．上顎骨・頬骨

写真６．４区土壙墓３号人骨下顎

報告書抄録

ふりがな	みやじいせき　おおぎいせき　おおぎこふんぐん　しょうだやまじょうせき　おおむらいせき
書名	宮地遺跡　大木遺跡　大木古墳群　粧田山城跡　大村遺跡
副書名	中国横断自動車道建設に伴う発掘調査
巻次	3
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	113
編著者名	江見正己　柴田英樹　井上弘　大橋雅也　石田容一　浅倉秀昭
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL. 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL. 086-224-2111
発行年月日	西暦　1996年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮地遺跡	上房郡 北房町	522		34°58′35″	133°41′15	H5.4.8 ～4.21 H5.12.13 ～H6.3.31	1,918	中国横断自動車道建設に伴う調査
大木遺跡 大木古墳群	上房郡 北房町	〃		34°58′30″	133°41′15	H5.11.1 ～H6.3.31	1,300	
畦地(あぜち)遺跡	上房郡 有漢町	521		34°54′05″	133°40′40	H5.4.12 ～4.14	100	
大鳴(おおなる)遺跡	上房郡 有漢町	〃		34°52′55″	133°40′10	H5.4.26 ～4.27	150	
粧田山城跡	高梁市 巨瀬	209		34°51′45″	133°39′35	H6.5.10 ～6.17	850	
大村遺跡	上房郡 賀陽町	523		34°49′50″	133°39′45	H4.11.1 ～H5.8.30	3,833	
岨谷(すわだに)遺跡	上房郡 賀陽町	〃		34°46′15″	133°41′45	H5.4.21	4	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮地遺跡	集落	弥生中～古墳後期	溝	弥生土器 土師器、須恵器	
大木遺跡	集落	弥生後期～中世	住居、土壙	弥生土器 土師質土器	
大木1号墳 大木2号墳 大木3号墳	古墳	古墳後半期	木棺直葬	太刀、鉾 須恵器、土師器	
粧田山城跡	城跡	中世		土師質土器	
大村遺跡	墓跡	中世～近世	集石墓、土壙墓	土師質土器 備前焼、亀山焼 近世陶磁器	中世13世紀～近世19世紀代までの墓跡群

1．遺跡全景
（南から）

2．溝１中央部
（南から）

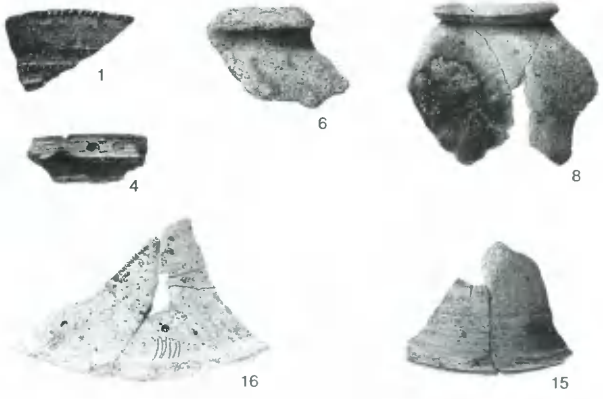
3．溝１中央部
（西から）

1．溝１断面Ｃ
（西から）

2．溝１－ｃ
（南から）

3．溝１－ｄ
（南から）

1．溝1断面G
（北から）

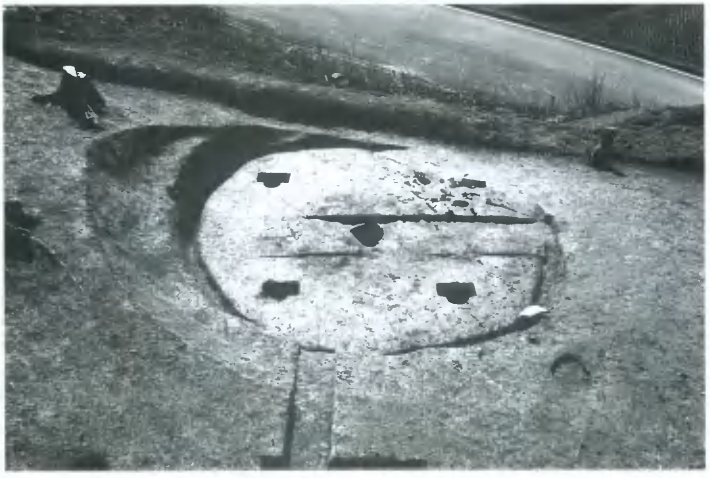


2．出土遺物

大木遺跡

1．遺跡遠景
（北西から）

2．遺跡近景
（北西から）



3．竪穴住居1
（東から）

1．竪穴住居 2
（南西から）

2．竪穴住居 3
（南から）

3．竪穴住居 4 上層
（南東から）

1．竪穴住居4
（北東から）

2．竪穴住居5
（南西から）

3．竪穴住居6
（東から）

1．竪穴住居７
（南西から）

2．土壙１
（東から）

3．土壙２
（南東から）

1．土壙3
（南から）

2．土壙4
（北から）

3．土壙5
（西から）

13

25

G1

G2

21

14

23

20

35

36

S7

S4

S6

S8

S1

S2

出土遺物

大木古墳群

1．1号墳調査前
（南から）

2．1号墳全景
（南から）

3．主体部掘り方
検出状況
（南から）

1．主体部堆積状況
（南西から）

2．主体部堆積状況
（南から）

3．主体部検出状況
（南から）

大木古墳群

1．主体部
遺物出土状況
（南から）

2．墳裾出土鉄鉾
（西から）

3．周堀出土遺物
（西から）

1．2号墳調査前
（南東から）

2．2号墳全景
（南から）

3．主体部掘り方
検出状況
（北東から）

1．主体部検出状況
（北東から）

2．南部周堀堆積状況
（西から）

3．周堀出土遺物
（北から）

1．3号墳調査前
（西から）

2．3号墳全景
（西から）

3．主体部検出状況
（南から）

太刀1

太刀2

鉄鉾1

1

1

3

2

4

5

7

9

出土遺物

1．遠景
（東から）

2．近景
（南東から）

3．トレンチ掘り下げ
（東から）

粧田山城跡

1．東部全景
（西から）

2．西部全景
（東から）

1

2

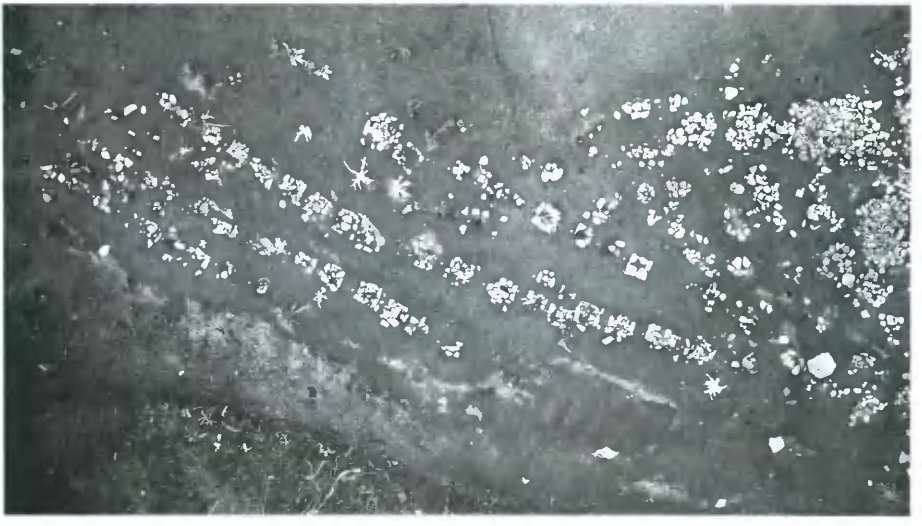
3．出土遺物

1．遺跡遠景
（南から）

2．遺跡全景
（南から）

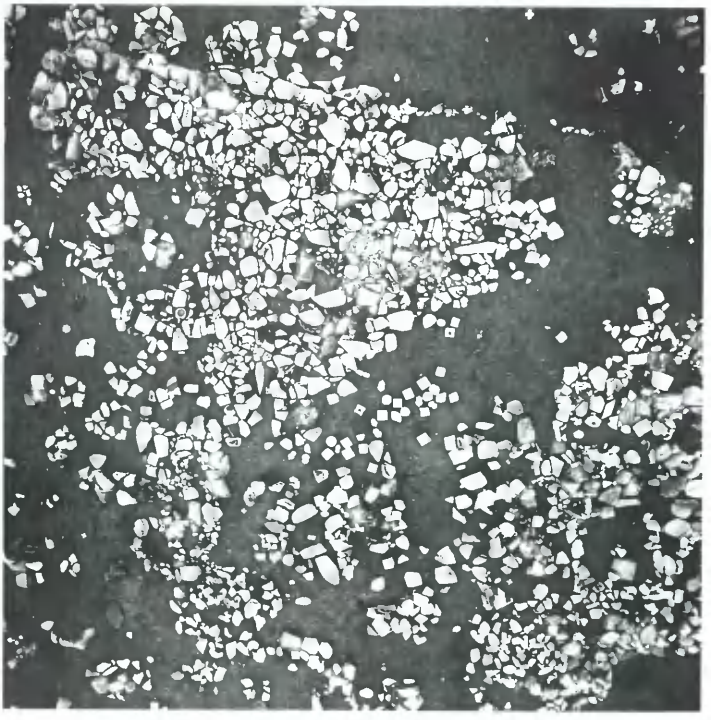
3．遺跡全景
（南から）

1．中世集石墓群（南から）

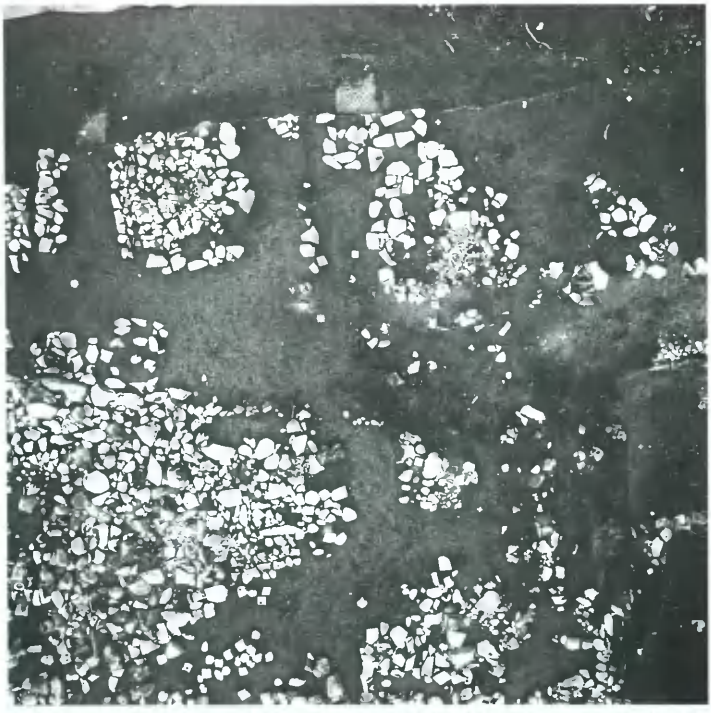


2．近世土壙墓群（南から）

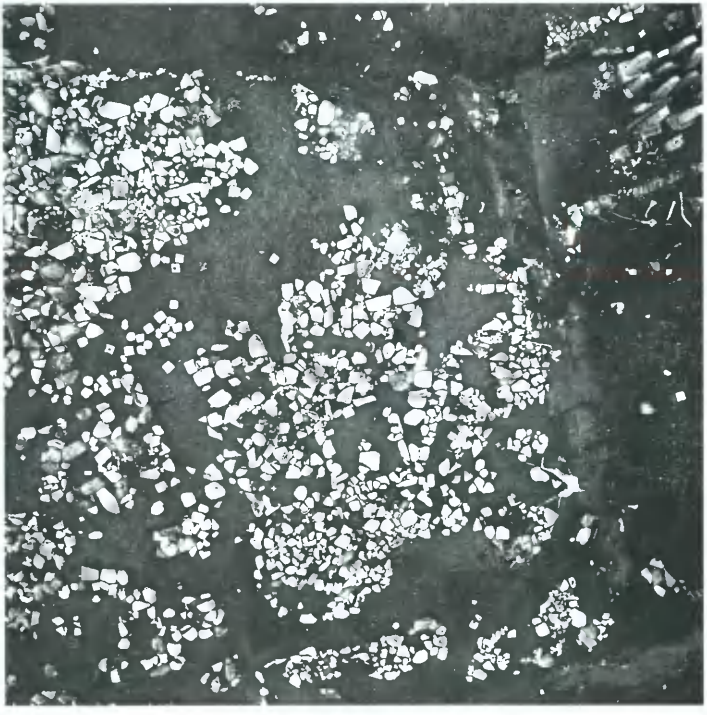
1．3区中世集石墓群
（北西部）



2．3区中世集石墓群
（南西部）



1．3区中世集石墓群
（北東部）

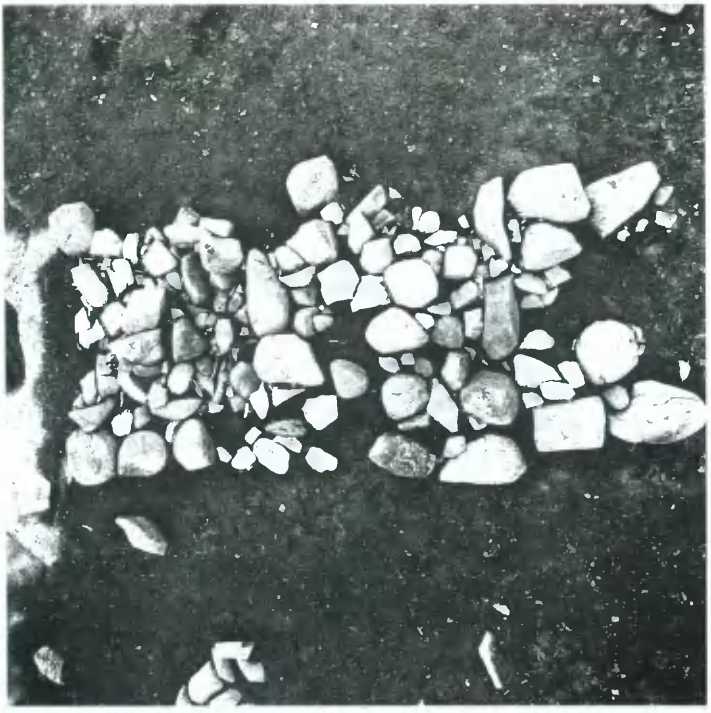


2．3区中世集石墓群
（南東部）

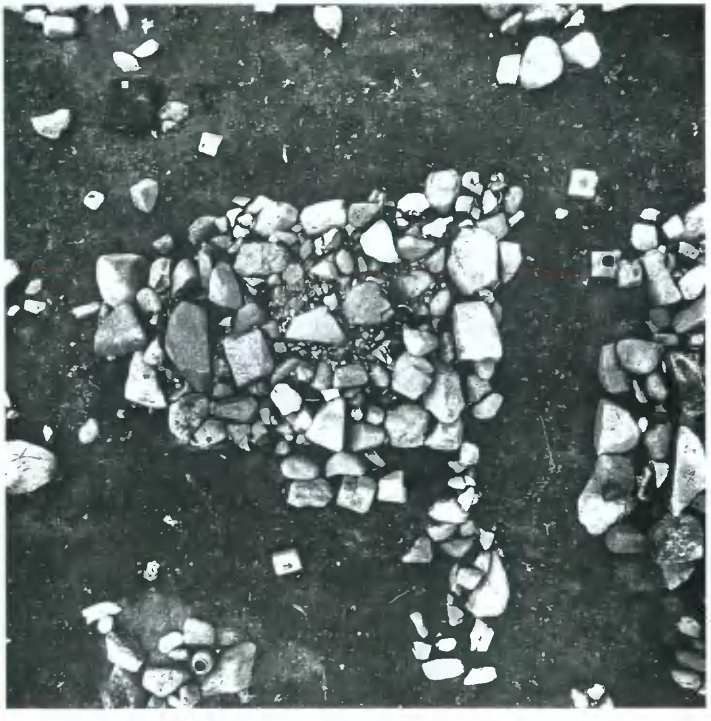
1．集石墓 2
（南東から）

2．集石墓 7
（南東から）

3．集石墓 7
（東から）



1．集石墓 14～16
（南東から）



2．集石墓 17・18
（南東から）

1．集石墓18
遺物出土状況1
（南から）

2．集石墓18
遺物出土状況2
（南から）

3．集石墓19
（東から）

1．集石墓 20～22
（南東から）

2．集石墓 21
遺物出土状況
（南から）

3．集石墓 24
遺物出土状況
（南から）

1．集石墓 27
遺物出土状況
（東から）

2．集石墓 28
遺物出土状況A
（南東から）

3．集石墓 28
遺物出土状況B
（南東から）

1．集石墓 30
（南東から）

2．集石墓 30
遺物出土状況
（南東から）

3．集石墓 30
下層遺物出土状況
（南から）

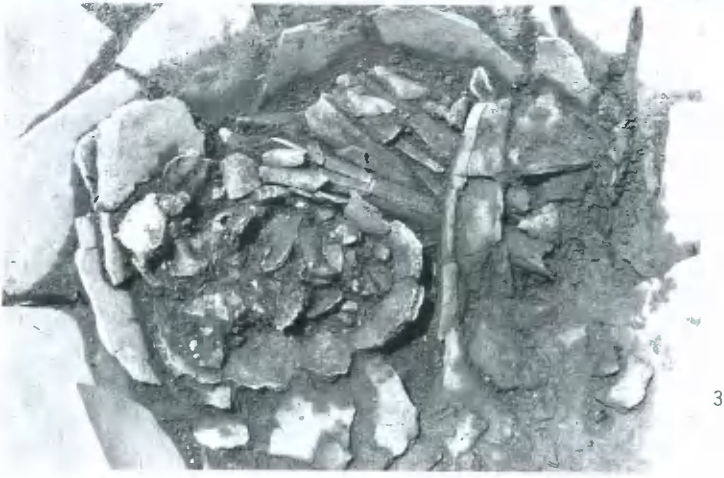
1．集石墓 31
磐出土状況
（東から）

2．集石墓 32
遺物出土状況
（東から）

3．集石墓 35
遺物出土状況 1
（東から）

1．集石墓 35
遺物出土状況 2
（南東から）

2．集石墓 36
遺物出土状況 1
（南東から）



3．集石墓 36
遺物出土状況 2
（南東から）

1．集石墓 37
遺物出土状況
（東から）

2．集石墓 39
遺物出土状況
（東から）

3．集石墓 41
遺物出土状況
（東から）

1．集石墓 41
遺物出土状況 2
（南東から）

2．集石墓 43
遺物出土状況
（南東から）

3．集石墓 44
遺物出土状況
（東から）

1．集石墓 45
遺物出土状況
（東から）

2．集石墓 47
遺物出土状況
（南から）

3．集石墓 49
遺物出土状況
（南東から）

1．集石墓 51
遺物出土状況
（南から）

2．集石墓 53
（南東から）

3．集石墓 55・56
（南から）

1．集石墓55
遺物出土状況
（南東から）

2．集石墓56
遺物出土状況
（南東から）

3．集石墓57
遺物出土状況
（東から）

1．集石墓58
（東から）

2．集石墓59
（南から）

3．集石墓61
（東から）

1．集石墓62・63
（南東から）

2．集石墓62
遺物出土状況
（北西から）

3．集石墓65
（北西から）

1．集石墓 66
遺物出土状況
（南東から）

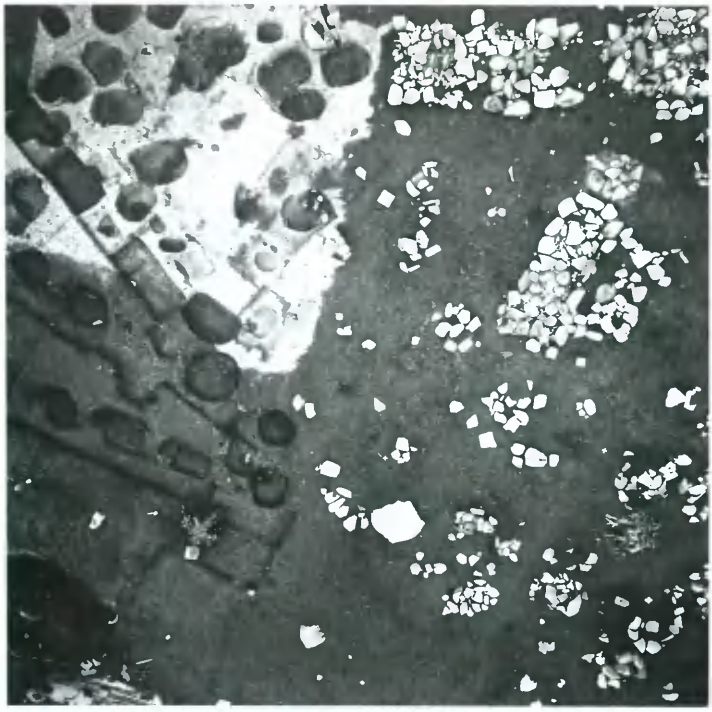
2．集石墓 66
（南東から）

3．集石墓 67
（南東から）

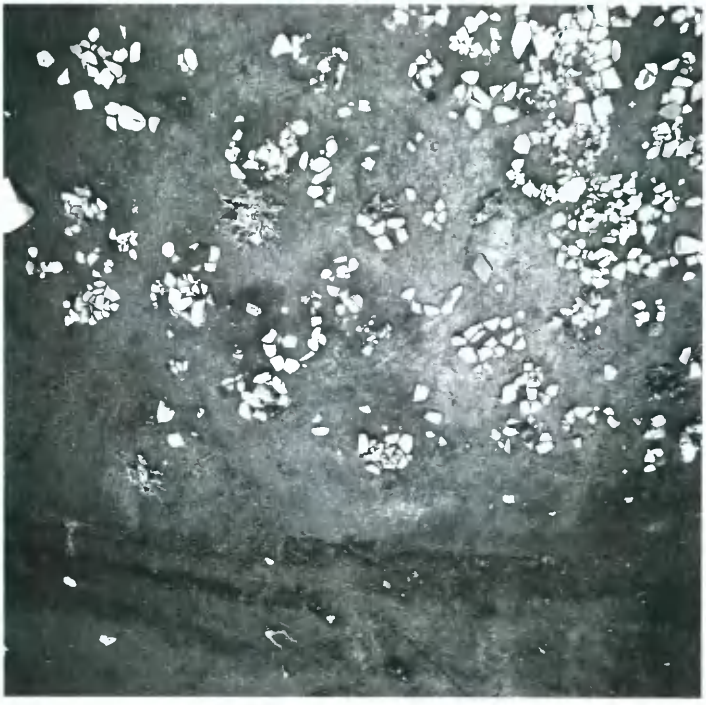
1．集石墓 68
（南東から）

2．集石墓 69
（南西から）

3．集石墓 70
（南東から）



1．2～3区
中・近世墓群
（北西部）



2．3区
中・近世墓群
（南東部）

1．土壙墓 4
（南から）

2．土壙墓 5
（南から）

3．土壙墓 6
（西から）

1．土壙墓 7
（南東から）

2．土壙墓 8
（東から）

3．土壙墓 11
（西から）

1．土壙墓 14
（南東から）

2．土壙墓 24
（西から）

3．土壙墓 27
（南から）

1．土壙墓 29
（南西から）

2．土壙墓 31
（南から）

3．土壙墓 38・39
（南から）

1．土壙墓 39 下層
（南から）

2．土壙墓 40
（南西から）

3．土壙墓 41
（南から）

1．土壙墓43
（南から）

2．土壙墓49
（南から）

3．土壙墓56
（南から）

1．土壙墓59
（南から）

2．土壙墓63
（西から）

3．土壙墓67
（東から）

1．土壙墓 69 上層
（南西から）

2．土壙墓 69 下層
（南西から）

3．土壙墓 70
（南から）

1．土壙墓72
（南から）

2．土壙墓73・74
（南から）

3．土壙墓78
（南から）

1．土壙墓 80
（南東から）

2．土壙墓 84 上層
（南から）

3．土壙墓 84 下層
（南から）

1．土壙墓 85 上層
（南から）

2．土壙墓 85 断面
（南から）

3．土壙墓 98
（南東から）

1．土壙墓102
（北西から）

2．土壙墓105断面
（南東から）

3．土壙墓109
（北から）

1．土壙墓113
（南東から）

2．土壙墓114
（北東から）

3．土壙墓116
（南東から）

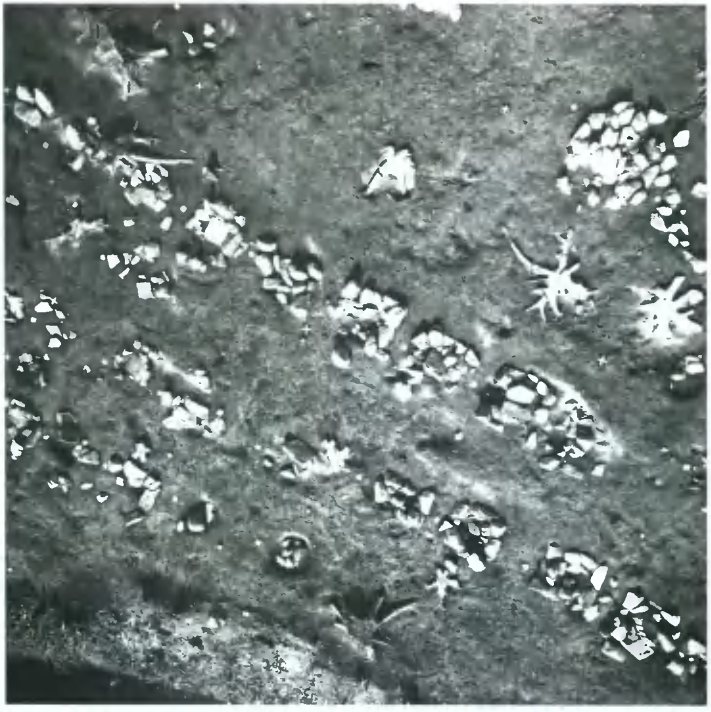
1．土壙墓 117
（北から）

2．土壙墓 123上層
（東から）

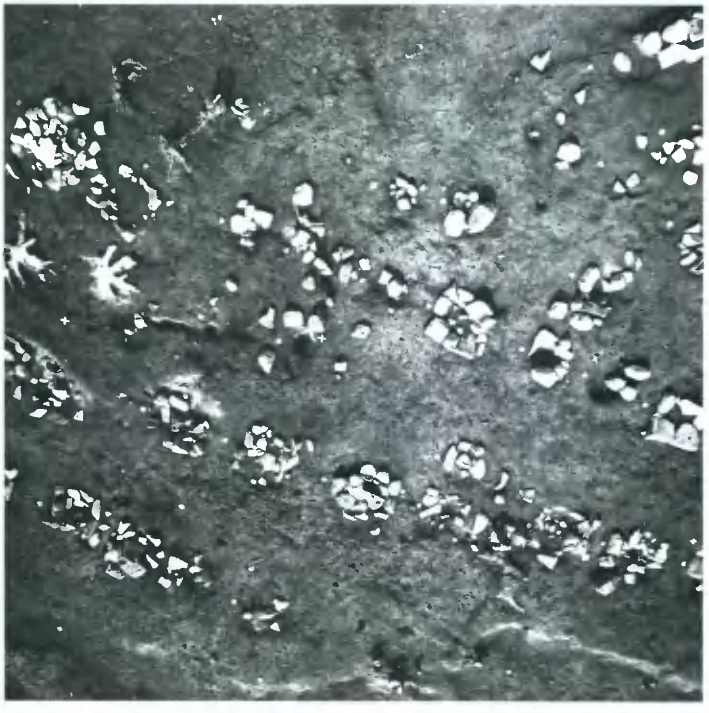
3．土壙墓 123下層
（東から）

1．2区近世墓群
（南西から）

2．2区近世墓群
（南から）



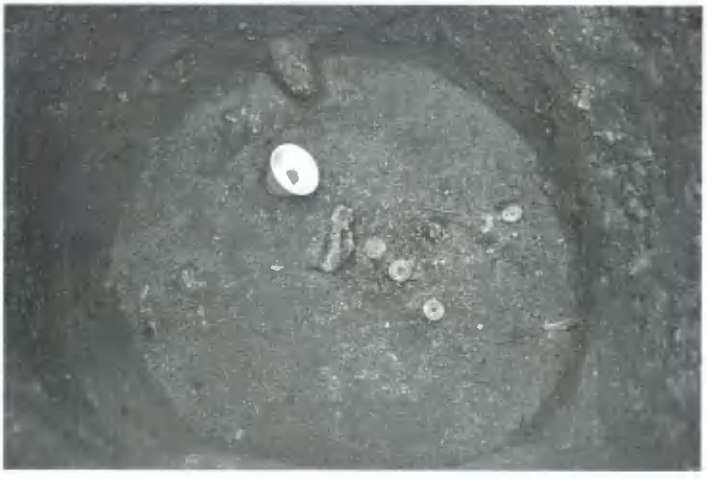
1．2区近世墓群
（西部）



2．2区近世墓群
（東部）

1．土壙墓126
（南から）

2．土壙墓127
（南から）



3．土壙墓128
（南から）

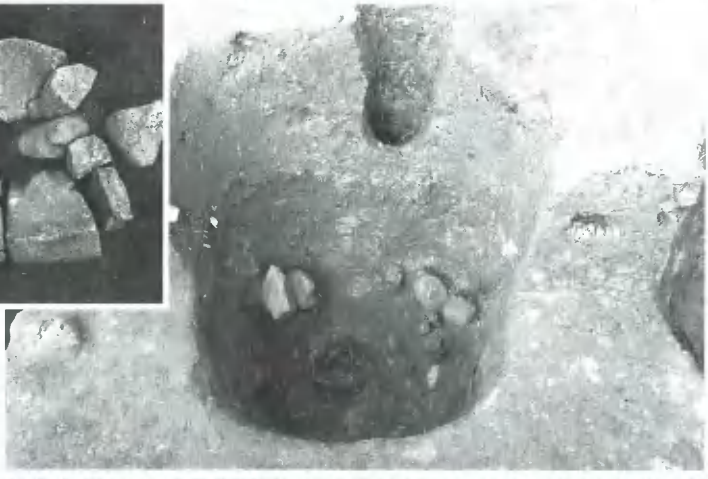
1．土壙墓 131
（南から）

2．土壙墓 132
（南から）

3．土壙墓 139
（南から）

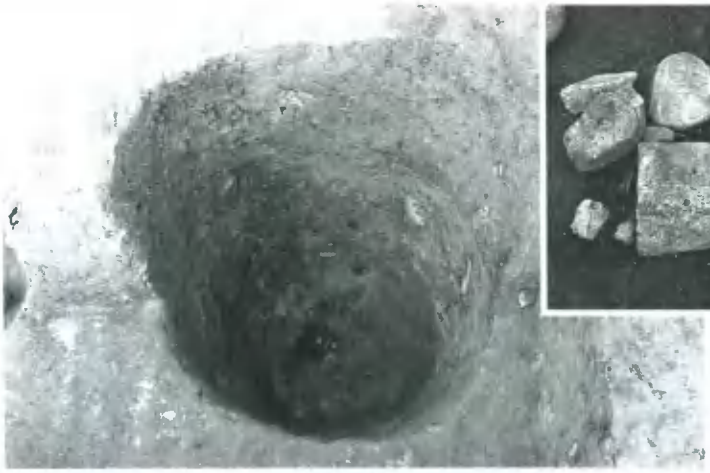
4．土壙墓 140
（南から）

1．土壙墓142
（南から）



2．土壙墓144
（南から）

3．土壙墓146
（南から）



1．土壙墓 147
（南から）

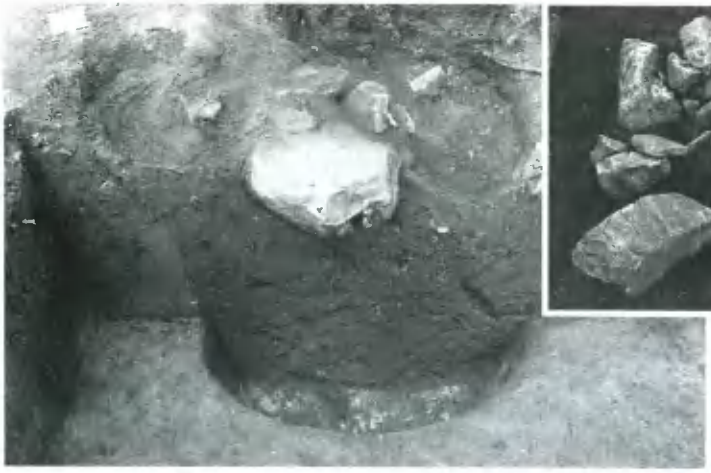
2．土壙墓 153
（南から）

3．土壙墓 156
（南から）

1．土壙墓157
（南から）

2．土壙墓158
（南から）

3．土壙墓160
（南から）



1．土壙墓162
（南から）

2．土壙墓166
（南から）

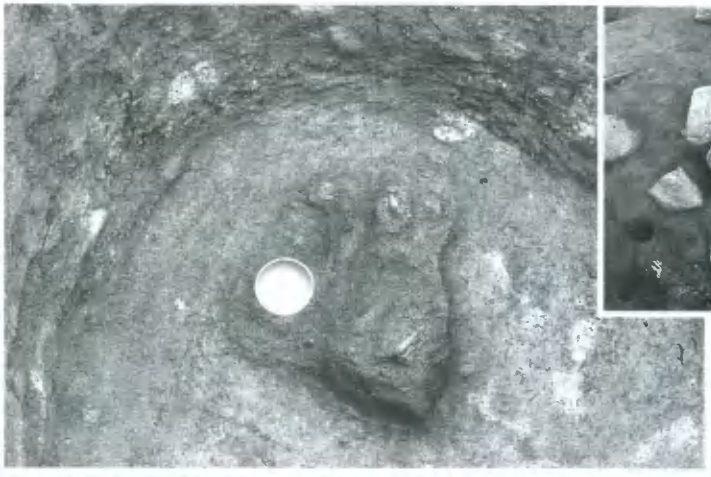
3．土壙墓168
（南から）

1．土壙墓169
（南から）

2．土壙墓171
（南から）

3．土壙墓173
（南から）

1．土壙墓 176
（南から）



2．土壙墓 182
（南から）

3．土壙墓 185
（南から）

1．土壙墓188
（南から）

2．土壙墓189
（南から）

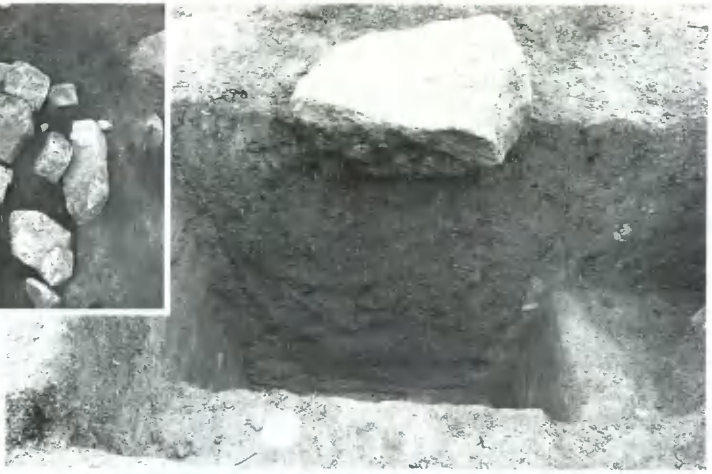
3．土壙墓190
（南から）

4．土壙墓191
（南から）

1．土壙墓 195
（南から）

2．土壙墓 199
（南から）

3．土壙墓 201
（南から）



1．土壙墓 202
（南から）

2．土壙墓 203
（南から）

3．土壙墓 207
（南から）

大村遺跡

1．4区全景
（南から）

2．4区全景
（西から）

3．石垣東面
（南から）

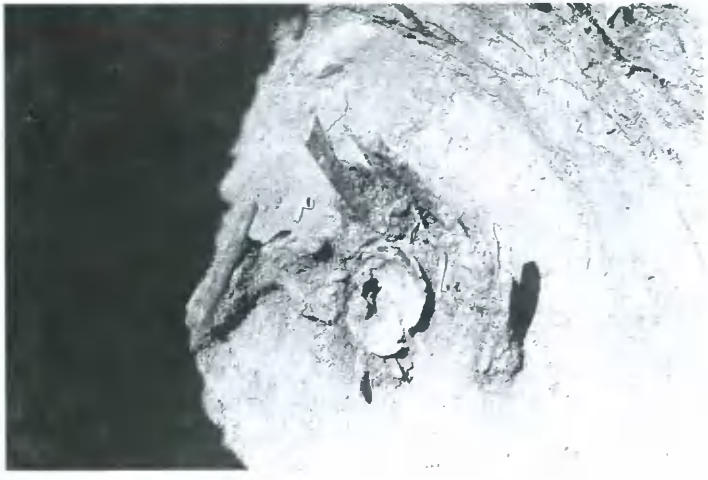
1．石垣北面東部
（北西から）

2．石垣北面西部
（東から）

3．石垣西～北面
（北から）

1．建物１
（東から）

2．土壙墓２上層
（北から）



3．土壙墓２下層
（北から）

1．土壙墓 3
（南東から）

2．土壙墓 3
人骨出土状況
（南東から）

3．土壙墓 3
下層遺物出土状況
（南東から）

1．竿墓１下層
（東から）

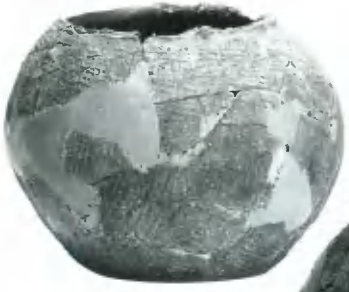
2．５区全景
（南東から）

3．６Ａ区全景
（西から）

1．建物１
（南から）

2．井戸１
（南東から）

3．６Ｂ区全景
（西から）



2

35

40

43

44

62

55

99

138

113

125

亀山焼

29

80

152

23

24

91

79

75

153

157

161

159

備前焼①

25

92

103

163

164

166

165

167

81

107

116

171

173

64

98

168

76

177

21

95

176

112

217

147

148

267

93

1．備前焼⑤

41

175

68

119

2．瀬戸・美濃

3．土師質土器①

224

108

89

226

30

42

32

46

50

52

53

199

200

202

239

207

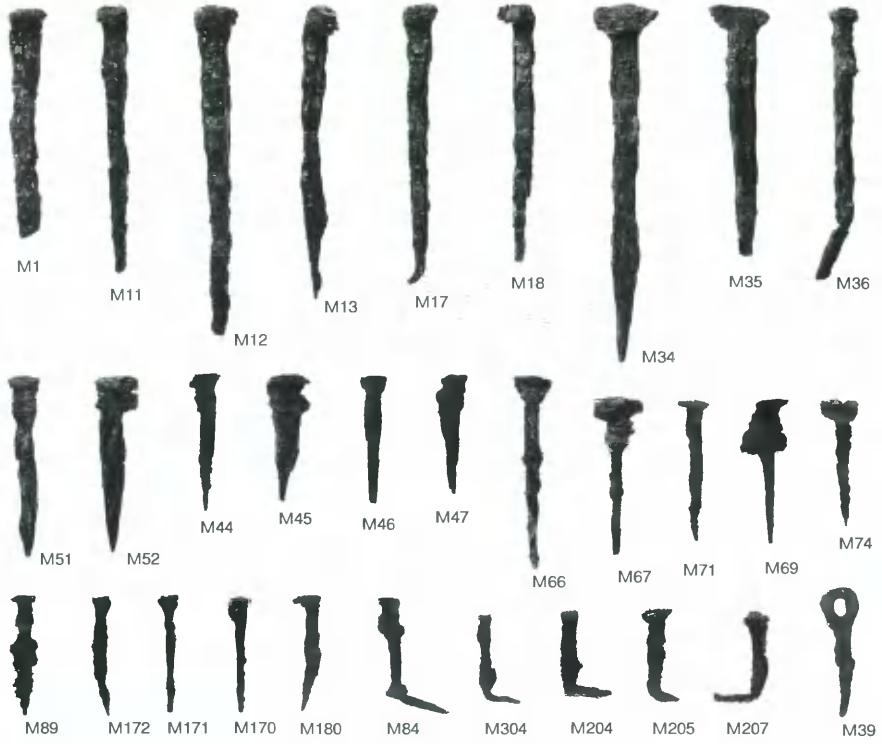
88

227

241

257

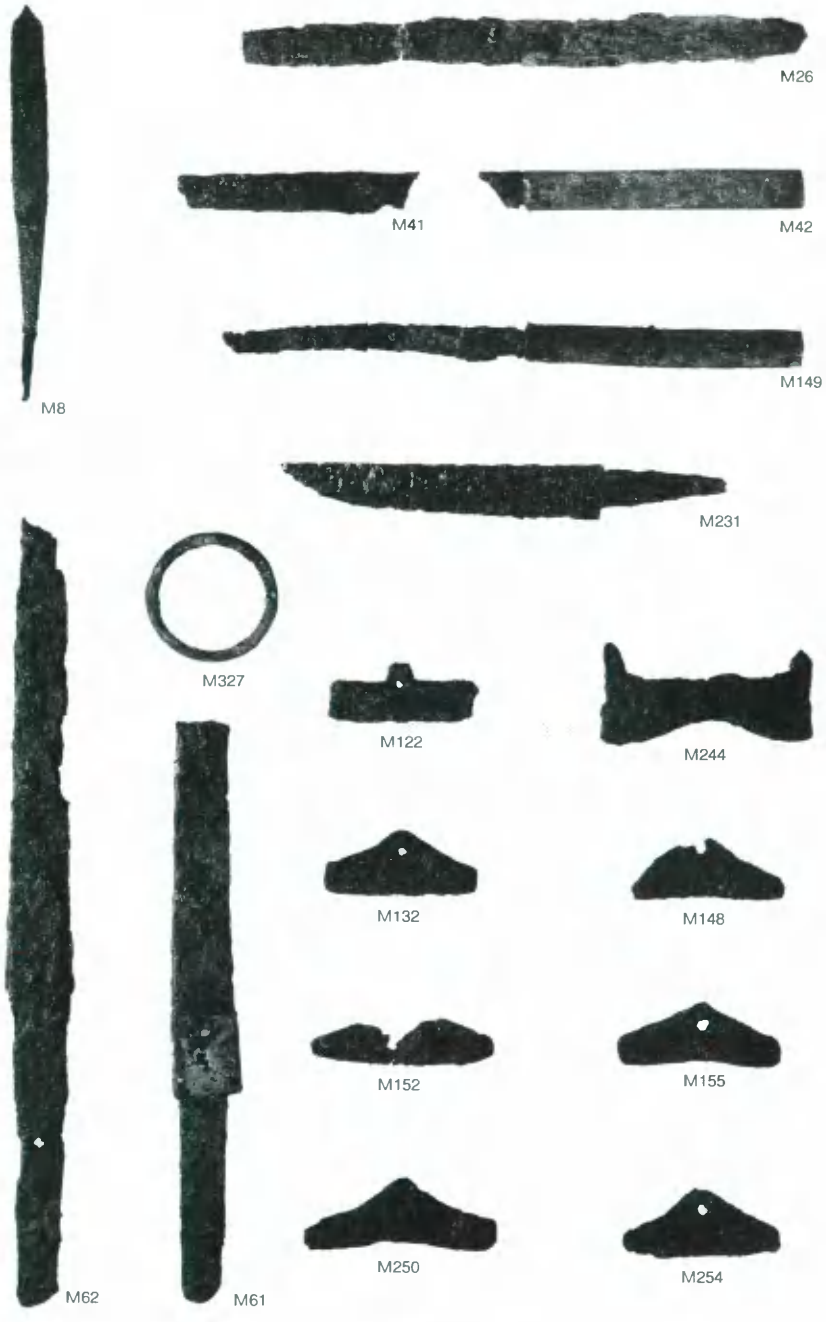
土師質土器 2・土製品


M1
M11
M12
M13
M17
M18
M34
M35
M36
M51
M52
M44
M45
M46
M47
M66
M67
M71
M69
M74
M89
M172
M171
M170
M180
M84
M304
M204
M205
M207
M39

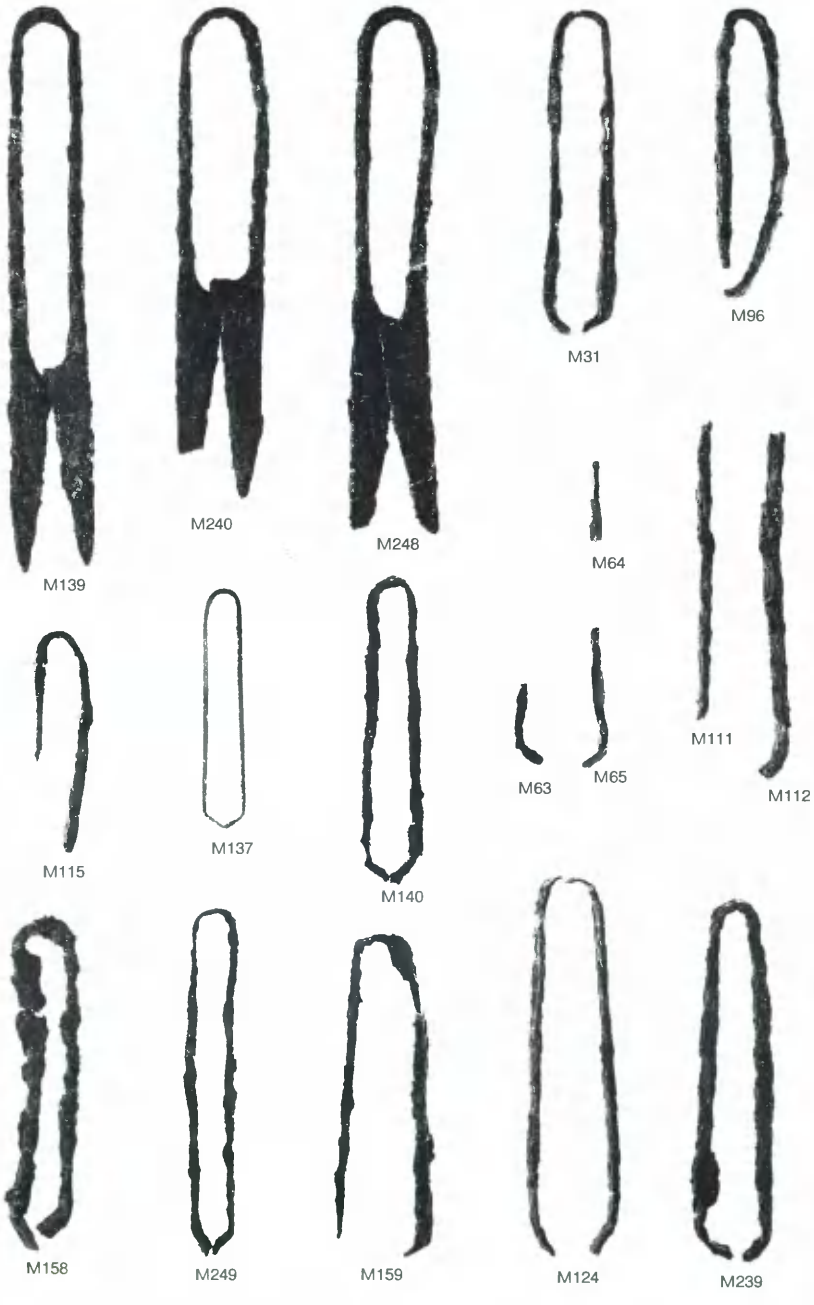
1．釘

M95
M102
M222
M103
M237
M236
M81
M76
M223
M235
M82

2．棺金具


M26
M41
M42
M8
M149
M231
M327
M122
M244
M132
M148
M152
M155
M250
M254
M62
M61

斧・剃刀・小刀・火打金・銅環

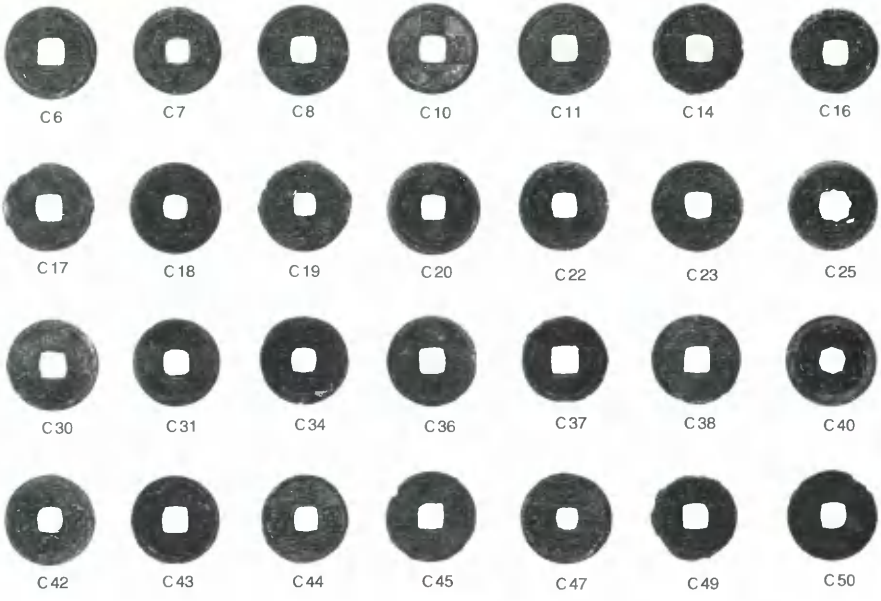

M139
M240
M248
M31
M96
M64
M111
M112
M63
M65
M115
M137
M140
M158
M249
M159
M124
M239

鉄・毛抜

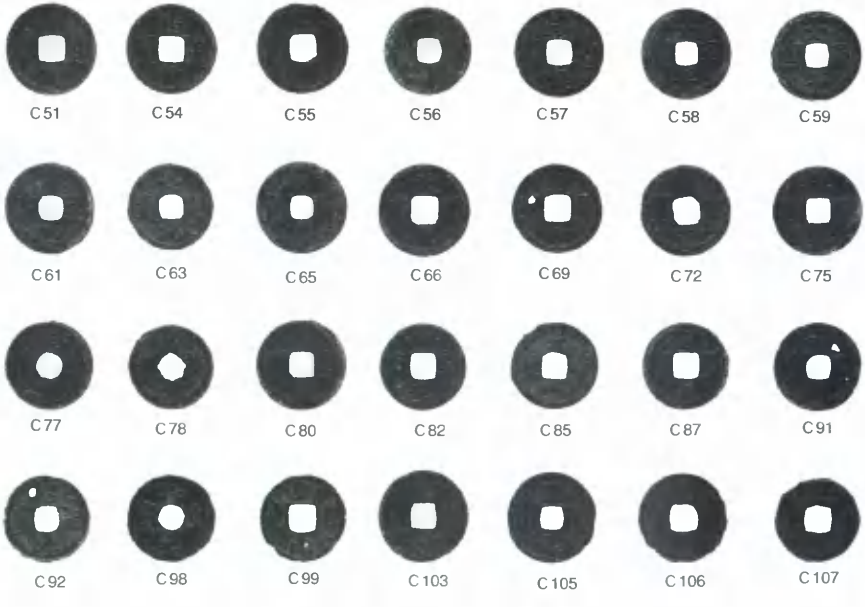
大村遺跡

M126
M135
M136
M245
M163
M164
M160
M251
M252
M153
M156
M157
M308
M139
M255
M279
M293
M294
M299
M300
M105
M110
M238
M282
M297
M295
M298
M253
M107
M116
M117
M130
M131
M165
M166
M194
M195
M233
M234
M241
M242
M278
M291
M292
M318
M319

煙管



1．土壙墓 5 出土銭貨



2．土壙墓 7 出土銭貨

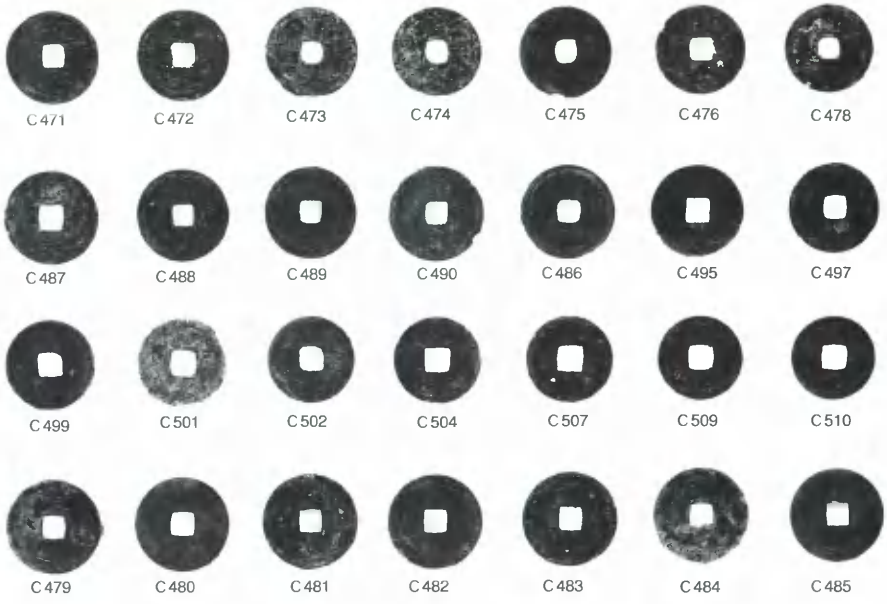
1．土壙墓１３２出土銭貨

2．土壙墓１４３出土銭貨

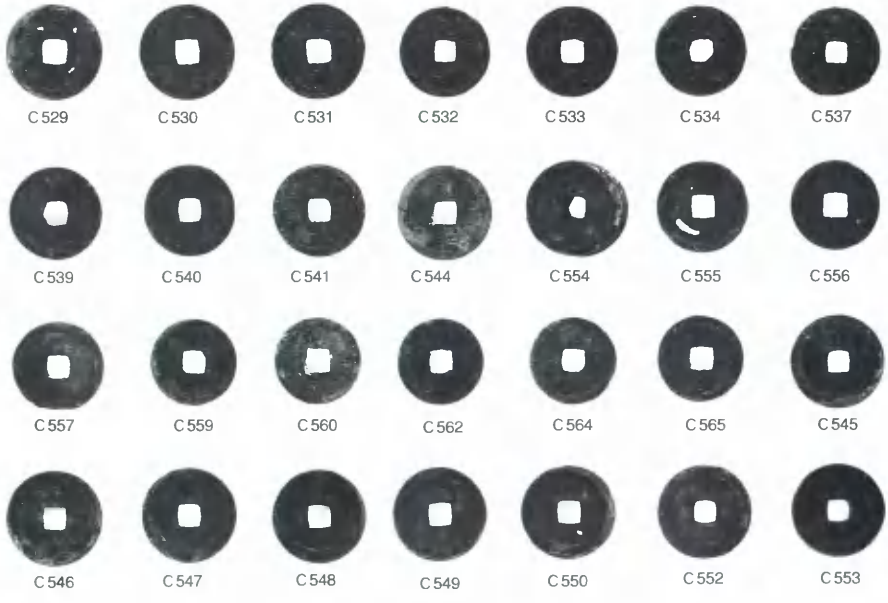
3．土壙墓１４７出土銭貨

4．土壙墓１５２出土銭貨

5．土壙墓１５７出土銭貨



1．土壙墓185出土銭貨



2．土壙墓190出土銭貨

仮1

仮2

36

仮3

3

11

53

20

16

62

47

61

44

13

宝篋印塔（相輪・笠・塔身）

仮10

52

仮9

63

86

1．宝篋印塔（基礎・基壇）

109

277

181

96

198

67

2．五輪塔（梵字入り）

3．五輪塔（空風輪）

大村遺跡

196

237

271

108

275

263

103

126

92

76

252

147

260

272

56

274

五輪塔（火輪・水輪）

181

232

195

1．仏を刻む水輪

47

242

138

91

115

201

2．五輪塔（地輪）

3．出土石塔群

大村遺跡

1．調査後の
大村遺跡（北から）

2．移築石塔群
（大村寺境内）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113

宮地遺跡
大木遺跡
大木古墳群
粧田山城跡
大村遺跡ほか

中国横断自動車道建設に伴う発掘調査3

平成8年3月20日　印刷
平成8年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
発　行　岡山県教育委員会
印　刷　サンコー印刷株式会社